目覚めたらまさかの竈門一家の一人で禰豆子となぜか炭治郎が鬼化していた件

時長凛祢@二次創作主力垢

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は大正時代。
夜は鬼が蔓延り、常に鬼狩りたちが駆け回る世界。
そこにはどういうわけか、世界のイレギュラー要素として入り込んでしまった少女がいた。
少女の名前は竈門優緋。
本来ならば、普通の高校生として学校生活を送り、なんの変哲もない人生を歩むはずだった彼女は、いつのまにか竈門家の一番上の姉という立場として、鬼になってしまった禰豆子と、なぜか本来ならば主人公として刀を持つはずだった鬼化した炭治郎を引き

連れて、鬼滅の物語を辿っていく。
彼女が送る生活、彼女が紡ぐ物語とは……。

鬼滅の刃二次創作。
いきなり物語をぶっ壊していく系オリジナル女主人公が、炭治郎ポジションで生活しながら、救済していく原作沿い。
恋愛要素有り、煉獄杏寿郎オチ予定となっております。
稀に私が描いた優緋のイメージ画を後書きに投下していることがあります。
あまりイラストは得意ではないので、閲覧する際は、ご注意ください。
閲覧してからの誹謗中傷や荒らし、文句などは受け付けません。する方はいないと思いますが、無断転載なども固く禁じさせていただきます。

こちらの都合もあり、毎日物語を更新するとは限りません。途切れることもあれば、急に更新が進むこともあります。ご了承ください。

追記：１０／３０（Ｆｒｉｄａｙ）時長凛祢@二次創作主力垢

お気に入り登録、まさかの2，０００人突破！
原作改変が激しい物語であるこの小説を、ここまで多くの方に見てもらえてとても嬉しく思います。ありがとうございます。
少しでも面白いと思っていただけているようで安心いたしました。
それでは、これからも「目覚めたらまさかの竈門一家の一人で禰豆子となぜか炭治郎が鬼化していた件」、略して「なぜ鬼」をよろしくお願いします。

目次

目覚めの少女、鬼を狩る刃となりて。
01. いきなり鬼化した竈門兄妹ってどんな展開だ。 ―――― 1
02. 冨岡義勇と竈門優緋 ―― 10
03. 弟妹を背負って ―――― 16
04. 夜のお堂と、グリリバボイス鬼 ―――― 24
05. 戦闘、グリリバボイス鬼 34
06. 鱗滝翁に出会いました ― 44
07. 狭霧山到着。始まりの試練。 54
08. 修行の始まりと優緋の日記 62
09. 鱗滝の課題。優緋の企み。 69
10. 錆兎と優緋 ―――― 74
11. 課題のクリア ―――― 81
12. 〝最終選別〟への旅立ち 88
13. 藤襲山の最終選別 ―― 94
14. 手鬼との邂逅。優緋の怒り。 103
15. 終結、手鬼戦！ ―――― 112
16. 最終選別、終息。 ―――― 120

ひとときの日常を兄（姉）弟子と共に
17．優緋、帰宅。目覚めの鬼弟妹。 130
18．二人への報告 135
19．目覚めの一日目 144
20．目覚めの二日目 149
21．三日目は神楽 158
22．時は過ぎて鍛錬六日目 163
23．最終日の手合わせ 170
二体の鬼を連れた鬼狩り
24．漆黒の日輪刀 179
25．いざ、沼鬼討伐へ 187
26．邂逅、沼鬼！ 194
27．決着、沼鬼！ 203
28．やってきたのは大都市浅草。邂逅、鬼の王。 215
29．珠世と愈史郎と優緋 228
30．襲撃、矢琶羽＆朱沙丸！ 237
31．邂逅、矢琶羽＆朱沙丸！ 243
32．戦闘、決着、矢琶羽＆朱沙丸！ 251
33．珠世と愈史郎との別れ。新たな旅立ち。 258
34．登場、我妻善逸！ やっぱ私も

求婚対象なのか…　――――――
35．一旦落ち着かせて鬼の住処へ　267
274
36．潜入、鬼の屋敷！　――――
37．邂逅、嘴平伊之助！　――
38．邂逅、元下弦の陸、響凱！　291
298
39．無名なる素晴らしき作家に、穏
やかな死を　――――――――
40．嘴平伊之助、撃沈!!　――
41．かまぼこ隊、全員集合！　311
317
42．藤の花の家紋の家　――――　304
323
43．善逸、鬼兄妹と邂逅する。
330
44．常中訓練と手伝う弟妹　―
那田蜘蛛山の攻防　336
45．突入、那田蜘蛛山編！　―
46．到着、那田蜘蛛山　――――　342
47．村田と接触、累との邂逅。
355　348
48．操り鬼弱体化作戦　――――
49．頸無し鬼と母鬼と　――――　362
50．パパ鬼討滅、累の元へ　―　369
51．累との接触、ついでの救済
385　377

52．戦闘、下弦の伍・累！ ―― 391
53．怒り心頭、斬り裂く刃 ―― 398
54．累との決着 ―― 408
柱合会議とひと時の休息
55．義勇との再会。蟲柱との邂逅。 ―― 417
56．九人の柱とお館様と ―― 428
57．柱合裁判。判決は物語通りに 435
58．目覚めた先は蝶屋敷 ―― 451
蝶屋敷での生活
59．蝶屋敷での生活。生き残った三人との会話 ―― 458
60．蝶屋敷での生活。機能回復訓練・序 ―― 465
61．蝶屋敷での生活。機能回復訓練その壱 ―― 471
62．蝶屋敷での生活。機能回復訓練その弐 ―― 480
63．蝶屋敷での生活。機能回復訓練伊之助合流 ―― 487
64．蝶屋敷での生活。しのぶが抱えていたもの ―― 496
65．蝶屋敷での生活。二人は訓練から逃走したらしい。 ―― 506
66．蝶屋敷での生活。新たな一歩

67. 蝶屋敷での生活。痣状態での訓練開始 ―――― 511
68. 蝶屋敷での生活。自身の修行の終了と、サボり魔たちの合流 ―― 517
69. まさかの事態発生 ―― 524
70. 炭治郎の状態とこれから ―― 531
ヒノカミ稽古 538
71. 始動、鬼化炭治郎のヒノカミ稽古！ ―――― 544
72. 炭治郎の成長日記 ―― 550
73. ヒノカミ稽古の合間にて ―― 556
74. 極界への兆し ―――― 562
75. 新たな物語はすぐそこに ―― 569
無限列車と分かれ道
76. 突入、無限列車 ―――― 576
77. カナヲの人生はカナヲだけのものなんだ。 ―――― 584
78. 合流、炎柱！ ―――― 590
79. 炎柱の一閃 ―――― 596
80. 泡沫の夢は家族の記憶と共に 607
81. 泡沫の夢は露と消ゆ。溢れる涙

は誰のものか ―――― 614
82．竈門優緋、意識覚醒。 ― 624
83．下弦の壱との邂逅は、厄除の面と共に ―――― 631
84．鬼狩りたちの目覚め。断罪せよ、心につけ入る悪鬼を ―――― 638
85．猗窩座との邂逅 ―――― 645
86．猗窩座の勧誘 ―――― 652
87．戦闘、猗窩座！死の運命を覆せ！ ―――― 660
88．猗窩座、撤退 ―――― 666
89．終局、無限列車。運命は覆り、未来は変わる。 ―――― 673
新たな幕開けは、日常と共にやってくる
90．これからは思い切って ― 679
91．決戦までに必要なこと。 689
92．継子への勧誘 ―――― 695
93．私が選ぶ柱は ―――― 702
94．炎の継子と炎柱（一部編集） 710
95．ほんの少しの休息を ―― 716
96．継子の帰還。鬼兄妹は鍛錬中 724
解ける確執。穏やかな日々。
97．炎柱の悩み事 ―――― 730

９８．帰りの遅い家主を迎えに行こう ―― 739
９９．燃え尽きた心に炎（ほむら）をともせ ―― 750
１００．継子の炎と鬼兄妹ｉｎ煉獄家本家 ―― 761
１０１．炎の継子は見送りたい ―― 770
１０２．訓練の成果 ―― 776
１０３．その笑顔は向日葵のようで、どこか惹かれるものだった ―― 784
甘き闇が充満する宵闇の花に暁を
１０４．日常は終わり、新たな物語が幕を開ける ―― 793
１０５．再集結のかまぼこ隊 ―― 801
１０６．突入準備　其ノ壱 ―― 810
１０７．突入準備　其ノ弐 ―― 816
１０８．いざ、吉原遊廓へ ―― 824
１０９．吉原の人探し ―― 832
１１０．定期連絡。行方知れずの善逸。 ―― 838
１１１．日輪の炎は堕ちた妖艶なる姫君を待つ ―― 847
１１２．堕姫との戦闘。持久戦を乗り越えろ！ ―― 853
１１３．原作にはない行動を ―― 860

114. 合流、音柱！ ―――― 868
115. 上弦の陸の正体を暴け 878
116. 上弦の陸、真なる姿 ― 885
117. 日焔（にちえん）の爆音 891

目覚めの少女、鬼を狩る刃となりて。
01．いきなり鬼化した竈門兄妹ってどんな展開だ。

私はなんの変哲もない高校生だった。
友人達とワイワイ騒いで、好きな漫画やアニメやゲーム、そう言ったもので盛り上がるような、二次元好きの。
でも、その日常にはもう戻れそうにないなこれ。
「……なーんで、私は竈門家のご実家前にいるのか。」
しかも、目の前で六太と六太を庇った禰豆子とな・ぜ・か！その二人を庇って倒れている炭治郎の図があるし。
あるぇ？
「おい、炭治郎。禰豆子。六太も大丈夫か？」
……なんかものすごく嫌な予感しかしないんだが、とりあえず目の前で倒れている三人に声をかける。
が、すぐに地面は血に濡れており、明らかに原作最初のあの話の部分であることがわかった。

念のため、元々は縁壱さんとうたさんが暮らしていた家だった竈門家を覗き込む。
うん、ケチャッp……いや、血塗れでした。
「マジか……。」
ていうか、なんで炭治郎が禰豆子たち庇って……？
あれ？
原作だと炭治郎がこの惨殺現場を見てなかったっけ？
「あ、炭治郎と禰豆子はまだ温度がある。」
……そういえば、無意識のうちに三人の名前を呼んでいたけど、これ、原作知識を持ち合わせているせいか？
いや、違う。
私は確実にこの子たちと繋がりがある。
今わかった。
今の私は、竈門家の一番最初に生まれた女の子、竈門（かまど）　優緋（ゆうひ）だ。
自分の名前を思い出した瞬間、一気に脳裏にこの肉体の記憶が流れ込んできた。
私が生まれたのは炭治郎が生まれる二年前。
今年で十五歳になる長女で、綺麗な夕陽が印象的な秋に生まれたことにより、優緋という名前をつけられた。

ゆうひという読み方は夕陽を元に、名前に当てられている漢字の優は優しい子に育つようにという願いが込められ、もう一つの緋という漢字は夕焼けの赤を元にした。
どんどん記憶が入り込んでくる。
父親である炭十郎の死、ヒノカミ神楽、炭焼きを行っては炭治郎と町に売りに行く生活を送っていたこと……。
この現状を見る前の記憶は原作で炭治郎が経験していた内容だな……。
……つまり、今私がいるこの世界はいわゆるパラレルワールド……か。
ていうか、耳でチラチラ揺れてるこれって、もしかしなくても緑壱さんの耳飾りでは……？
おいおい勘弁してくれよ……。
何？
つまりこの世界の私は炭治郎のポジションってわけ……？
「って、ぶつくさ言ってる場合じゃない。」
とりあえず体温がある禰豆子と炭治郎を町に連れて……行ったらダメだな……。
だって二人して鬼化しちゃってるみたいだし。
しっかりとまだ生きてるし。
「……持ち上がるかな、この二人？」

よいしょ……と小さく呟きながら、禰豆子を背負い、炭治郎を抱っこしてみる。
……意外と持ち上がったよ、クッソ重いけど。
「ちっこくないから腰やりそう～……。」
でも持ち上げることができたのなら話は早い。
とっとと人気のないところまで連れて行きますか……。
だってこの場に置いていたら、母さんたちが喰われてしまいそうで怖い。
「……雪で足取られるけど仕方ない。この世界の私の記憶はしっかりと刻まれたから、道はわかるし、とりあえず義勇さんと邂逅することになる場所まで向かうとしようか。」
原作知識がしっかりとあるから、場所はなんとなくわかるしね。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「……よっこいせっと。」
足を進めること数じゅ……いや、それ以上か……？
計ってなかったからわかんないや。
まぁいいか。
しばらく歩いたところで、私は見事に足を滑らせた。

炭治郎と禰豆子の二人が重たかったし、しょうがないといえばしょうがないけど。
原作通りの場所で落下したから結構びっくりしたよ。
本当に私は炭治郎のポジションだったらしい。
まぁ、炭治郎の時とは違って、咆哮を聞いて驚きからの落下じゃなくて、二人分の十代の子供の体重のせいによる落下だったけど。
「グ……ウウ……っ!!」
「グアウアアアッ!!」
「おわっふ!?」
なんて考えていたら炭治郎と禰豆子（どちらも鬼化中）が恐ろしいと思えるような声を上げて起き上がってきた。
思わず驚いて肩を震わす。
けど、すぐに冷静になっては、腰に携えておいた斧の柄を掴む。
あ、待って。
鬼二人相手に訓練も何もしてないのに立ち回れんの私!?
「「ガアアアアアア!!」」
「やっぱり兄妹だなあんたら!!」
軽くパニックを起こしながら怒鳴る。

だって同時に襲ってきたもん!!
なんとか体を翻すことでダメージを喰らうことはなかったけど、理性がぶっ飛んでるこの二人をどうやって大人しくさせるべきなんだ!?
兄妹鬼が絶妙に連携する中、ひょいひょいとそれを回避しながらどうするべきか考える。
うん、思いつかないな!!
「チッ……炭治郎!!　禰豆子!!　自身の中にいる鬼に負けるな!!　あんたらなら必ず乗り越えられる!!　抑えることができるはずだ!!」
しかたないので二人の攻撃を回避しながら呼びかけることに専念する。
なんでか知らないけど二人の動きがわかるから、今のところノーダメージだ。
「鬼になるな！　鬼に負けるな!!　頑張れ炭治郎!!　頑張れ禰豆子!!　こらえろ!!　頑張ってくれ!!」
「!!」
何度も何度も呼びかけていると、炭治郎と禰豆子はハッとしたような表情をする。
同時に両眼から涙を流し始めた。
次第に動きも遅くなり、ついには静かにその場にたたずむ。
「……よく頑張ったな。怖かったろう。苦しかったろう。大丈夫。二人には姉ちゃん

がついてる。……ごめんな……。私がぬくぬくと休んでる間……二人は辛かったよな……。」

それを確認して、私は穏やかに話しかけながら、そっと二人を抱きしめる。

一瞬、二人の手が無意識のうちにこちらを襲おうとしていたが、二人は拳を握りしめることで何とか耐えきり、私の背中に手を回してきた。

縋るように抱きついて、声を出すことなく泣き始める。

子供をあやすように、二人の背中を優しく叩き、そのままさすれば、徐々に力は抜けていき、私に抱きついたまま眠りに落ちてしまった。

「……。」

その様子を見ながら小さく溜息を吐く。

うん、今気づいたけど、やっぱり私は、原作でいう炭治郎のポジションのようだ。

だって、二人からは妙な匂いがするから。

それに、なんとなくだけど、二人が悲しんでいるのがよくわかる。

不思議な匂いがする。

不快な匂いがする。

多分、この不思議な匂いが感情で、どことなく不快感を感じる匂いがパワハラ上司系ラスボスこと、鬼舞辻無惨のものなんだろう。

あと、木の影から第三者の匂いとカラスの匂いがする。
「……そこに隠れてるのは誰だ？　こっちは今、なかなかに暴れてくれた駄々っ子たちを寝かしつけたばかりなんだが。」
おそらく彼なんだろうなぁ……と思いながら木の方へと声をかけてみると、少しだけ驚いた匂いがして、すぐに消えた。
同時に木陰から一人の青年が現れた。
うん、完全に冨岡義勇だな。
原作では切り掛かってきて、それで彼に気づく炭治郎の姿が描かれていたが、原作知識のせいで変に冷静になってしまっているせいか、斬りかかられる前に気づくことができた。
「……。」
「……その刀で、私の可愛い弟と妹を斬るつもりか？だとしたらこちらも黙っていられないんだが……？」
無言でこちらを見つめてくる義勇に、落ち着いた口調で話しかける。
義勇はなんの言葉も発しない……が、なにかを思案している様子だった。
「……なにがあった？」
「……。」

なにを考えてんだか、と義勇を見つめていると、彼は静かに口を開いた。

……櫻〇ボイスはイケボだな。

って、くだらないことを考えている場合じゃない。

……冷静に話を聞いてくれるみたいだし、とりあえず素直になにがあったか説明するとしよう。

０２．冨岡義勇と竈門優緋

「悪いな。家族の埋葬してもらって。」
「……俺が、あと半日ほど早くここにたどり着いていれば、お前の家族を助けることができたはずだったんだ。だが、俺は間に合わなかった。だから……せめて、これくらいは手伝う。お前は、そこの二人の面倒を見ているしな。」
あれから私は、昨日の夕方から今日の朝方にかけて起こったことを全て説明した。
炭治郎と禰豆子の二人は、どうやら私が誰であるか理解している様子であることも。
義勇は黙って話を聞いてくれた。
たまに相槌をうつ程度のことをしながら。
それらを終えた私は実家に戻り、亡くなってしまった母さんや、弟、妹たちを、家の横にあるスペースへと埋葬していた。
義勇は、念のためにと私についてきた感じだな。
炭治郎と禰豆子の二人が目を覚まして、私に襲いかかってきたりした時の対処を行うと言って。
でも、炭治郎と禰豆子の二人はぐっすりと眠ったまま目を覚ますことなく、ただひた

すらに私に抱きついて眠っていたため、彼の心配はある意味必要がなかった。

「……なぁ、義勇。この子ら、人間に戻すことできると思う？」

「……そうだな……。同じ鬼ならばその方法を知っているかもしれないが、鬼は人を喰らうことしか考えることができない、理性を飛ばした者たちばかりだ。話が聞けるとは思わない。」

「そうか……。でも、家族を見捨てるわけにはいかないしな……。はぁ……地道に探すしかないかぁ……。方法あるかわかんないけど。」

義勇の返答を聞いた私は頭を抱える。

原作では最終的に禰豆子が人間に戻っていたけど、この私がいる世界ではわからない。

パラレルワールドというのはいいことづくめじゃない。

時には最悪なもしもが発生する。

必ず、敷かれたレール通りの内容を紡げるかと言われたら、無理だと答える方が無難だ。

「……それならば、狭霧山の麓に住んでいる、鱗滝左近次という……俺の知己のもとに向かうといい。冨岡義勇に言われて来たと伝えれば、応じてくれるはずだ。」

どうしたもんかと頭を抱える。

　すると義勇は原作で炭治郎に伝えていた言葉にプラスアルファを加えたような言葉を紡いだ。
「狭霧山？　鱗滝左近次……？」
　な、なんか話がサクサク進んでないかと少しだけ戸惑う。
　そんな私の内情など知らないであろう義勇は、こちらが聞き返した言葉を肯定するように頷いては
「今は日が出ていないため問題はないが、弟と妹を太陽の下に連れ出すなよ。」
　質問に答えることなく、用件だけ告げては、踵を返して立ち去ろうとする。
「あ、待ってくれ。」
「？」
　私は慌てて義勇を呼び止めた。
　だって、少しだけ気になったんだ。
　原作では問答無用で禰豆子を始末しようとしていた義勇が、このパラレルワールドの炭治郎と禰豆子に問答無用で斬りかからなかった理由が。
「……なんで、炭治郎たちに斬りかからなかったんだ？　刀に刻まれていた悪鬼滅殺の文字からして、あんたは鬼を……殺す側なんじゃないのか……？」
　静かな声音で問いかける。

静寂のみが存在するこの場では、そんな声音でも十分、義勇の耳には届いているようだった。

「……今まで俺は、何度も見てきた。自分の身内は違う。人を喰ったりしないと言って、そのまま鬼と化した身内に喰い殺される奴を。〝飢餓状態〟となっている鬼は、親でも兄弟でも殺して喰べる。それだけ人は栄養価が高く、鬼にとっての格好の餌なんだ。だが、木陰から見ていたが、そこの二人は近寄ってきたお前を喰わなかった。一瞬だけ、お前を無意識に襲おうとしていた様子を見せたが、すぐにその衝動を抑え込み、縋るようにしてお前に抱きつき、そして眠りに落ちていた。本来ならば、ありえない行動だ。なぜならそこの二人は、鬼へと変わる時や、体にできた鬼になる前にできたであろう傷を治す時に、力を使い、体力を消耗しているため、重度の飢餓状態に陥っているはずだからだ。なのに、その二人は自ら近寄ってきた人の血肉を喰らうことはせず、縋ることを選んだ。」

――――……これらの一連の動作からして、そこの二人は……お前たち三人は、何か違うかもしれないと判断したまでだ。

義勇は私にそう告げたあと、今度こそこの場から立ち去っていった。

……うん、ヨボヨボの老鴉に一瞬焦らされていたから、かっこついてない。

……義勇が炭治郎たちを斬らなかった理由……それだったんだな。

「う？」
「むー……」
なんて考えていたら、炭治郎と禰豆子が目を覚ました。
……禰豆子が竹を咥えてる姿は漫画で見ていたから見慣れてるけど、炭治郎が竹を咥えてるの……なんか……ちょっと新鮮さと違和感があるな。
まぁ、原作じゃあ主人公だもんな。
竹は咥えないもんな……。
（……うーん……これはこれからを楽しむべきなのか……それとも不安に思うべきなのか……。かなり判断が困るタイプだな……。）
ま、それはそれとして……だ……。
「……せっかく鬼滅の刃の世界に来たんだし、原作キャラの救済はしたいよな……。どうせなら大団円のハッピーエンドを迎えたいし。生でおばみつとかぎゆしのとか、どま一方通行しのとかいろいろ見たいし。」
「「んー？」」
「なんでもないよ。それより、炭治郎、禰豆子。大丈夫か？　体がだるいとか痛いとか……あとはしんどいとか……体に不調はないな？　怪我は？」
「「ムームー！」」

「そうか。ないんだな。それなら安心した。……とりあえず、義勇に言われた通りの場所に行くとしようか。」

「「ん！」」

……なんか、意外と意思疎通できちゃってるんだけど。

これが姉弟、姉妹の絆なんだろうか……？

０３．弟妹を背負って

義勇と別れ、炭治郎と禰豆子を連れて狭霧山へと向かう私、竈門優緋。
「すみません。あそこにある大きな籠と、藁、竹を少々いただけますか？」
とりあえず少しでも早く狭霧山に向かうため、一旦二人を近くにあった森の洞窟に避難させ、原作通り、田んぼや畑がずらっと存在している農家の集合地帯へと足を運んだ。
すると、炭治郎が見つけた籠よりも大きな籠がある農家にたどり着いたので、そこの畑で作業しているおじさんに話しかける。
……って、よく見たらこのおじさんあれじゃないか。
炭治郎が話しかけたおじさんと同一人物じゃん。
籠の大きさは違うけど、人物は同じかよ……。
「そりゃ構わねぇけど…籠は穴が開いてるぞ。」
うん、原作通りのセリフありがとう。
まぁ、それは置いといて……っと。
「ああ、問題ないですよ。親から籠の修復方法やらなんやらは叩き込まれてるので。あ、お金払います。」

籠の穴は修復すればいいだけなので、直せるから大丈夫とおじさんに告げた私は、お金を払うと口にする。

「いや、いらんよ。穴の開いた籠だぞ。」

……まぁ、廃品回収みたいな感じだもんな。

お金払うって言われても困るわな。

「いえ、払います。」

でも、私はあえてこの言葉を使う。

炭治郎の迷場面……一度やってみたかったんだよな。

「いや、いらん。竹も藁もやるよ。」

「でも払います!!」

「いや、いらんて!!　頭の固い嬢ちゃんだな!!」

……自分でやっていて自分で笑いそうになった。

うん、やめよう。

「……本当に、よろしいのですか?」

「むしろ持っていってくれた方が助かるんだこっちは。あの籠どうも邪魔でな。最近新しいのが入ったし。竹や藁も量が多いから、どうしようか悩んでたんだ。」

「そう……ですか……。じゃあ、お言葉に甘えて。」

炭治郎みたく思い切り小銭を叩きつけるのは流石に迷惑にも程があるため、ここはお言葉に甘えると自分が折れることにした。

「って……随分な量を持って行くんだな嬢ちゃん。運べるか？」

いそいそと竹と藁を大量に入手していると、おじさんが心配そうな声音で話しかけてきた。

「大丈夫です。日頃から大量の炭を籠に入れて売りに行っているくらいには力があるので。こう見えて意外とついてるんですよ、私。」

私は軽い口調で返事を返しながら、回収した竹と藁と穴開きの籠をせっせと運ぶ。

背後から、たくましい嬢ちゃんだな……なんて声が聞こえてきたけど気にしない。

まぁ、この世界では逆にたくましいくらいがちょうど良さそうだけどな。

……しばらくして、私は森の中へと戻る。

向かう先は炭治郎と禰豆子の二人を休ませている洞窟だ。

「炭治郎。禰豆子。戻ったぞ……ってあれ……？」

たどり着いた洞窟を覗き込む。

しかし、二人の姿はどこにもなく、真っ暗な空間だけが広がっていた。

「炭治郎？　禰豆子？」

もう一度二人の名前を呼んでみる。

すると、地面からひょっこりと顔を出した竈門兄妹の姿が視界に入った。

「ああ……穴を掘って潜っていたのか……。」

弟と妹がもぐらみたいになってしまった……可愛いけど……。

かなりのしかめっ面でもあるな。

まぁ、太陽に触れた瞬間、灰塵となって消滅してしまうもんな、鬼って。

不憫な体だ。

「少し待っていてくれ。すぐに準備を済ませるから。」

全く……厄介な体質に兄妹を変えやがったな鬼舞辻無惨……と、まだ直接会っていない鬼の親玉に対して悪態をつきながら、譲ってもらった竹や藁を使って籠の修復をしていく。

隙間が開いていないか最終確認を済ませれば、大きな籠の出来上がりだ。

「炭治郎。禰豆子。理性を飛ばして私に襲いかかってきた時、確か、体の大きさをちらほらと変えていたよな？　この籠に二人とも入ることができるくらいの大きさになることは可能だろうか？」

籠に問題が一つもないことを確認した私は炭治郎と禰豆子に声をかける。

二人は顔を見合わせたあと、シュルシュルと体を小さくした。

「懐かしい姿だな。」
「む！」
「んー。」
　少しだけ笑いながら炭治郎と禰豆子を籠の中に入れてみれば、ちょうどいいサイズだったのか、二人が入ってもサイズ感は問題なかった。
　けど……
「狭くないか？　大丈夫？」
　念のため狭くないかと問いかける。
　この体の記憶の中にある炭治郎と禰豆子はよく二人していろんなところに隠れては、私や父さんや母さんを困らせていたみたいだから、大丈夫とは思いたいんだけど、一応、炭治郎と禰豆子は十三歳と十一歳だ。
　そろそろ兄妹は距離を置きたくなる年齢に……
「「んー！」」
　……うん、この二人に距離を置きたいなんて感情からっきしだったな。
　忘れてたわ。
「そうか。大丈夫ならいい。時には走らなきゃいけない時もあるかもしれないから、その時は揺れるって声をかけるよ。その声が聞こえてきたら、二人とも自分の頭やデコを

守るんだぞ。」
「う！」
「よし、じゃあ、改めて狭霧山に向かうとしようか。二人は眠っていていいからな。」
優しく頭を撫でてやれば、二人は上機嫌な表情を見せる。
……一時はどうなるかと思っていたけど、なんとか大丈夫そうだな。
まぁ、ＩＦから生まれたパラレルワールドでは、どんなことが起こるかわからないし、油断はできないけど。
なんて考えながらも、私は持ち歩いていた大きな布で、籠をぐるぐると巻いていく。
「光は入ってないな？」
「ん！」
「そうか。わかった。じゃあ、少し揺れるから気をつけてくれ。よいしょっと……。」
簡易的な日光遮断ボックスを背負いあげれば少しだけよろめく。
いくら子供サイズとはいえ、かなりそれなりに重たかった。
が、すぐに体勢を立て直して、そのまま歩みを進める。
「うー……？」
「大丈夫だよ。心配しなくても、あんたら二人くらい軽いものさ。」
「ムー!!」

「無理は言ってないって。大丈夫だから。そう不機嫌そうな声で唸るな炭治郎。」
……ちょっとだけ炭治郎に怒られた。
姉ちゃん無理してるって。
大丈夫だって言っても不機嫌そうな匂いがしてくる。
まぁ、記憶からしてこの世界の炭治郎も鼻が利くみたいだからな。
多分、その特徴から炭治郎は、私が少しだけ無理してると判断したんだろう。
ああそうさ、否定はしないよ。
おんぶとだっこならば比重はそれなりに均等になるが、二人分の体重を背中に置くとなると、バランスは崩しやすくなる。
「ったく……炭治郎も私に似て鼻がいいんだから……。」
「う！」
「当然だって？　やれやれ……誰に似たんだかね、自信満々なそれは。」
「うー。」
「お兄ちゃんはお姉ちゃんに似たんだって？　はは……マジか。」
「む！」
「禰豆子も私に似てる～？　どこがさ。禰豆子はおしとやかな女の子だろうに。」
「んーん。」

「気の強いところ……そういや、そこだけはなぜか似ていたな。」

苦笑いを溢しながらも、背中にいる炭治郎と禰豆子と話しながら歩みを進める。

さてさて……まずは山を越えたりしないとね……。

０４．夜のお堂と、グリリバボイス鬼

「狭霧山に行くなら、あの山を越えなきゃならないけど…もう日が暮れるのに、そんな大荷物背負って行くのかい？　危ないよ。」
「ええ、それは重々承知しています。でも、私が背負っているのは、何よりも大切な宝物なので、このまま向かいます。十分に気をつけながら。道を教えてくださりありがとうございました。」
「お嬢ちゃんがいいなら止めはしないけど、ほんとに人が行方知れずになったりしてるからね。迷わないように気をつけて行くんだよ？」
「はい。」
あれからしばらく歩いていると、だいぶ空は暗くなり、人もまばらになる時間になった。
炭治郎と禰豆子はしばらくは元気よく私に話しかける……といっても、今は「ん」とか「む」とか「う」くらいしか話せないんだが、声をかけてきていたため、結構早く時間が経った。
でも、原作の炭治郎と同じスピードで道をたどることができてはいるようで、あの子

と同じタイミングで子連れの女性に出会うことができた。

道は合ってるかどうか確かめるために、女性に狭霧山への道のりを聞いてみたらこっちで合っているようで安心した。

「よっと……二人の子供を背負って登山か……。多少疲れそうだが、我慢我慢。長子ならしっかりしないとね。」

子連れの女性とわかれた私は小さく呟きながら山登りを開始する。

と、背負っている籠がぐらぐらと揺れた。

わざと揺らされた感じだ。

「なんだ？　外に出たいのか、炭治郎？」

「ん!!」

「むー。」

「禰豆子もか……。ちょっと待ってろ。今いる場所、少し不安定な場所だから下手をしたら転んでしまう。」

「ん!!」

それが意味するものにすぐに気づいた私は、確認のために外に出たいのかと問いかけた。

返ってきたのは元気のいい返事。

同時に禰豆子も出たいことを訴えるように籠をつついてきたので、足場が不安定じゃないところまでは我慢してくれと声をかける。
炭治郎と禰豆子は元気よく了承するような声を出し、大人しくなった。
……今のうちに移動しよう。
足場が悪くない場所まで……。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

少し歩いてみれば、足場が安定した場所にまでたどり着いた。
私は、すぐに籠を地面に置いて、籠を覆っていた布を外す。
それを合図にしたのか、炭治郎と禰豆子はひょっこりと籠から顔を出したあと、のそのそと中から外へと出た。
「ぅ!!」
……禰豆子が転んじゃったよ。
「ぅ……ぅぅ……っ」
「あ～……うん、痛かったな。大丈夫か禰豆子?」
すぐに禰豆子を起き上がらせた私は、痛かったな……と話しかけながら頭を優しく撫

でる。

炭治郎はすぐ側でオロオロとしては、つられて泣きそうになっていた。

「大丈夫。大丈夫だから。禰豆子に怪我はないよ。幸いなことにたんこぶとか擦り傷とか切り傷や打身もないみたいだぞ？　泣くな泣くな炭治郎。禰豆子。痛かったな。でも大丈夫。ほら、痛いの痛いの飛んで行け～ってしちゃえば、痛みなんてどっかに吹っ飛ぶはずだ。な？　痛いの痛いの飛んで行け。痛いの痛いの飛んで行け～。……ほら、痛みはなくなっただろう？」

そんな二人をあやすように、穏やかな声音で話しかけながら、禰豆子の頭と炭治郎の頭の両方を優しく撫でれば、鼻をスンスンと鳴らしつつも、完全に泣き出してしまう前に落ち着いてくれた。

少しだけほっとする。

いやぁ……子供ってなんで一人泣いたら側にいる子も泣きそうになるんだろうね……？

ふぅ……この体に刻まれてる記憶に助けられたな。

向こうじゃ私は一人っ子だったから小さい子をあやしたことなかったし、どうなるかと思った……。

「むー？」

「はは。大丈夫だよ炭治郎。最近は炭治郎が弟や妹たちをあやしてくれていたから、久々に自分でやれるか不安だっただけだからさ。ほら、私って長女だろう？　十五になって、いろいろとやることが増えていたから、下の子らを見ることできなかったし、前みたいにあやせないと思っていたんだ。でも、ちゃんと前のようにできてほっとしたんだよ。」
「ん!!」
「心配はいらないって？」
「うー！」
「そうか。それはよかった。」
安堵していたら、炭治郎が心配そうな表情をしてきた。
だから、安堵の理由を素直に伝えると、にこにこ笑いながら大丈夫と励ましてくれた。
匂いで励ましであることがわかった。
感謝を伝えるように小さく微笑んだ私は、すぐに炭治郎の頭を撫でる。
炭治郎は無邪気に笑いながら、私にくっついてきた。
「うー!!」
「おっと。」
原作では長男だからと甘えを見せたりしていなかった炭治郎が自分より先に生まれ

た優緋という姉に全力で甘える姿にほっこりしていると、炭治郎の反対側から禰豆子が突進する勢いでやってきた。

勢いに押されないようになんとかそれをバランスを崩すことなく受け止めると、ぐりぐりと頭を私に押しつけたあと、炭治郎に対してフーッと威嚇する猫の如く唸りを漏らす。

お兄ちゃんだけずるいって言う嫉妬の匂いがする。

「はは。普段は甘えられないお兄ちゃんがたまに姉に甘えるのはいいと思うけどな。構われすぎていると、今度はその下の子が拗ねるか。」

思わず笑い声を上げてしまった。

今まで兄弟も姉妹もいなかったから、下の子らに取り合われることなんてなかったから新鮮だ。

……相当、私は弟や妹たちに好かれていたみたいだな。

「狭霧山まではまだあるみたいだからそろそろ進むぞ。とりあえず、一旦二人とも離れてくれ。荷物持つから。」

「「ん!!」」

素直でよろしい。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「うん、思った通りだ。お堂がある。ずっと歩きっぱなしはきついからな。休憩できそうなら休憩するか。」
「う!!」
「……。」
炭治郎と禰豆子の手を引きながら、山道を歩くこと数十分。
原作通りならばそろそろお堂が見えてくるはずだと思っていると、目の前に開けた場所が見えてきた。
そこの中央にはぼろっちいお堂がポツリ。
わずかな明かりが漏れているため、確実に何かがいる。
まぁ、鬼だってわかってるけどな。
原作を知ってるからと言うのもあるが、匂いに混じってる。
強い血の匂いもするため、少しばかり気分が悪い。
「……炭治郎。大丈夫か?」
が、それ以上に私は炭治郎のことを心配した。
なぜなら炭治郎も鼻が利く。

だから、血の匂いはすでに強くしているのではないかと思ったんだ。

「うぅ……」

「……やっぱり血の匂いがするんだな。大丈夫だ炭治郎。大丈夫。お前なら堪えることができるはずだ。難しいならこれを頭から羽織ってろ。私の匂いがついてる羽織だからな。多少なりとも落ち着けるはずだ。」

「フーッ……フーッ……」

唸り声をわずかに漏らした炭治郎を見て、血の匂いに誘発されて、鬼としての本能が出ていることに確信が持てた。

それならと、私はすぐに炭治郎に自分が羽織っていた羽織を頭に乗せる。

炭治郎はすぐに私の羽織りを抱きしめるように持ち始めた。

「えらいな、炭治郎。ちゃんと堪えることができている。……禰豆子。お兄ちゃんの側にいてやれ。今わかったが、あのお堂からは強い血の匂いがする。人がいるのか、行方不明になるという話ができる原因となった何かがいるのか……このどちらかだと思うから。血の匂いは、今の炭治郎と禰豆子にはきついものだろうから、なるべく近寄らないように。わかったな?」

「うー……」

「大丈夫。ちゃんと私は戻ってくるから。だから、炭治郎の側にいてやれ。」

「……ん。」
「フフ……いい子だ。」
私が離れることに不安を抱いている様子の禰豆子に何度も大丈夫だと言い聞かせるように言葉を紡げば、ようやく禰豆子は小さく頷く。
褒めるように頭を撫でると、禰豆子は気持ち良さげに撫で受けたあと、炭治郎のことをぎゅっと抱きしめた。
私の服と禰豆子の匂い……うん、これなら炭治郎も落ち着けるだろう。
「さぁて……様子見してくるとしますか……。」
そう判断した私は、斧を片手にお堂に近寄る。
近づくたびに血の匂いが濃くなってくるのは正直不快でしょうがないが、我慢だ我慢。
匂いの強さに顔をしかめつつもなんとかお堂の戸に手をかけて、勢いよく開く。
そこには複数の血塗れな人間と、人間の女性の腕に噛み付いていたのか口元に大量の血をつけている鬼の姿があった。
「なんだ、おい。ここは俺の縄張りだぞ。俺の餌場を荒らしたら許さねぇぞ。」
「……いや、荒らすつもりはなかったんだが、あまりにも血生臭くてね。気になって顔を覗かせた。なるほど、人喰い鬼の巣か。」

声がグリリバな鬼……そういや、アニメだと、こいつそんな声だったわ……と思いながら、容赦なく私は、自身の腰にあった斧を鬼目掛けて振り上げた。

０５．戦闘、グリリバボイス鬼

「うお?!」

小さく笑いながら振り上げた斧は、うまくグリリバボイス鬼の首元へと切り傷を作る。

それを確認した私は、すぐにお堂から外へと出た。

「ハ、ハハ。斧か。女がそれを振り回す上、それなりに硬いはずの俺の首を斬るとはやるな。」

「うわ喋ってる。喉斬られたら出血多量になるなりなんなりして死なないか普通?」

「残念だったな。鬼はこんなんじゃ死なねぇんだよ、すぐ治るからな。ほらもう血は止まった。」

「いや、顔面……というより喉元血だらけでほらって言われてもわかんないんだけど。」

互いに妙な沈黙が落ちる。

得意げに鬼の特徴を口にして笑っていたグリリバボイス鬼も無表情になった。

すまん。

本来ならばシリアス展開とか切迫した状況なんだろうけど、素直に言って血が止まっ

たとか言われてもどこら辺が？って感じちゃってね。
だって見えないんだよ、真っ赤っかで。
「……これでわかるか？」
「ん？　あ、本当だ。マジで止まってるわ。じゃなくて、なんで血だらけだったに全くなかったように血も消えるんだこれ。鬼の体ってわかんないな。」
「……お前、自分の状況分かってんのか？」
「うん。一応危ないよな。」
……グリリバボイス鬼に呆れた表情されたわ。
まぁ、緊張感がないとおかしい状況だもんなこれ。
でもな……こいつが噛ませって知ってる側からするとなぁ……。
「だったら思い知らせてやるよ!!」
ええ～……そう言われても困るんだけど。
ていうかおっそ。
まだ鬼化炭治郎と禰豆子の方が動きは速かったわ。
「よっと。」
「いや避けんじゃねぇよ!!?」
「避けるだろ常識的に考えて。だって襲われてるんだぞこっち。」

とりあえず隙があったので斧をグリリバボイス鬼の腕目掛けて振り上げれば、片腕が吹っ飛ぶ。
……あ、刃こぼれが少し発生してら。
長引かせたらダメだなこりゃ。
「うお!?」
「意外と腕ってすっぱり切れるんだなぁ……」
「お前人間じゃねぇ!!」
「失敬な。私はちゃんとした人間だっての。つか鬼に人間じゃねぇとか言われたくないんだけど。」
片腕を失っていながらも襲ってくるグリリバボイス鬼。
私はすぐに地面を蹴り上げることで背後に飛び、それを回避する。
着地狩りされそうになったけど、回避すると同時に蹲み込んだため、着地狩りをしようと飛びかかってきたグリリバボイス鬼はそのまま上を通過していった。
「……何やってんのおたく。」
「グルルル!!」
呆れたように声をかければ獣のような唸り声をグリリバボイス鬼は出す。
簡単に狩れる人間じゃないと判断したのか、少しだけ敵意の匂いが強くなった気がし

た。

（多少本気出してくるかこれ？）

やろうと思えば普通に斧だけで斬首できそうではあるけど、それをしたら刃こぼれがさらにひどくなりそうだ。

と、なると……あえて受けることにして、あんまり参加させたくないが、原作通り禰豆子を参加させるべきか？

なんて考えていると、先程以上のスピードを出したグリリバボイス鬼が襲いかかってきた。

炭治郎と禰豆子に比べたらまだまだ遅いが、あえてそれを受ける。

「いって!?」

その力はかなりのもので、思い切り地面に押し倒される形になった。

かなり背中が痛い。

「さっきはよくもやってくれたな……!!　同じように腕を切り裂いてやる!!　その次は首だ!!」

血走った目でこちらの片腕をへし折ろうとするグリリバボイス鬼を無言で見上げる。

だって、炭治郎と禰豆子の匂いが動いてこっちに近づいてきてるし。

「……それは……多分できないんじゃない？」

「は？」

呟くように言葉を紡げば、ボンッと言わんばかりの勢いでグリリバボイス鬼の頭が吹っ飛び、私の腕をへし折ろうとしていたこいつの腕も消える。

禰豆子に蹴鞠よろしく蹴り飛ばされた頭は、原作通り雑木林の木に勢いよくぶつかる。

炭治郎が攻撃した腕は、よく見ると炭治郎が粉砕していたのか肉片だけになっていた。

まぁ、それでも動くのが鬼だからな。

一瞬怯んだ様子の鬼の体を蹴り飛ばして、未だに動こうとしていた体の拘束から抜け出した。

同時に、私に襲いかかろうとしていた体は炭治郎と禰豆子の鬼化兄妹Wキックにより遠くへと飛んでいく。

「うー……。」

「んー!!」

「あ～……大丈夫。大丈夫だから。二人のおかげで怪我はしてないよ。」

「むー!!」

「おわっ!?　ああ……掴まれた腕さすってくれるのか……。ありがとうな炭治郎。それ

と禰豆子。なぜ私の頭を抱く。って泣いてる!?　泣いてるのか!?　怪我してないのに!?」

「うー……!!」

「あ……あ～……私が無茶しようとしていたからか……。」

「うー……!!」

「ごめんって……生身の人間が鬼と真っ向勝負しようとして。」

「う～……!!」

……めちゃくちゃ炭治郎と禰豆子に怒られました。

いや、でもほら、グリリバボイスの割にはあの鬼咬ませ犬だったし、やろうと思えばやれるんじゃないかって……あ、ハイ、もうしません。しませんから泣こうとしないで!?

「妙な気配が外にあると思えば……!!　なんで人間が二体もの鬼とつるんでやがるんだ!?」

「うっわマジかよ。生首になっても話してんだけどこいつ!!」

「フーッ!!」

「グルルル……!!」

禰豆子と炭治郎が威嚇をしながらグリリバボイス鬼を睨みつける。

私はというと、生首になっても話してるそれに軽く引いていた。
原作やアニメを知ってるから展開はわかってるけどさ。
生首が話す姿を生で見るのはかなり衝撃的だからな？
引かないほうが無理だろ。
「まぁいいや。炭治郎、禰豆子、走れ!!」
なんて考えながらも、私は炭治郎と禰豆子に走るように指示を出す。
二人は一瞬驚いたような表情を見せるが、すぐに自分たちの方に頸がなくなった体が失ったはずの腕を生やして襲いかかろうとしている姿に気づいて、すぐに走り出した。
二人の鬼をグリリバボイス鬼の体が追いかける姿はかなりシュールではあるけど、私はそれを見送ったあと、近づいてきた鬼の匂いが濃くなるタイミングで手にしていた斧を振りかぶる。
が、この一撃は原作通り口で止められ、頭から生やしたらしい腕により肩を掴まれる。
「ハハッ!!　随分とトチ狂った姿してんじゃん!!　鬼ってのは本当、妙な造りをしてるよなぁ!!」
でもそんなの関係ない。
だって、炭治郎のポジションになってる私は、頭が硬いからな!!
思い切りグリリバボイス鬼の頭目掛けて頭突きを喰らわせてやれば、一瞬こいつは白

目を剥いた。

思った通り、私の頭は炭治郎と同じく硬いらしいので、今度は頭を固定して、もっと強く頭突きを喰らわせる。

そして、それによりできた隙を利用して思い切り斧を振りかぶって、その場にあった木の幹に、グリリバボイス鬼の短い両腕を持ち手の部分で拘束するように挟み込み、斧の刃を打ち付ける。

「そこで大人しくしてな、生首。」

動けない様子のグリリバボイス鬼の頭に冷めた目を向け、すぐに踵を返して炭治郎たちの元へと走る。

原作だと炭治郎が禰豆子を助けるために体にタックルして崖下に落ちかけるところを禰豆子に助けられるカタチになっていたはずだけど、こっちではどうなるのやら。

「あ。」

……うん、答えがしっかりと見えたわ。

炭治郎が崖から蹴り落とすんだな。

原作通り炭治郎が禰豆子を助けたようだ。

「炭治郎！　禰豆子！　大丈夫か!?　怪我は!?」

「う！」

「んー!!」
「え？　ちょ、おわぁ!?」
とりあえず二人の名前を呼びながら駆け寄れば、二人は私の姿を見るなり走り寄ってきて飛びついてきた。
なんとか二人を受け止めようと足を踏ん張ったが、ちょっと反動が強かったため、その場で尻餅をつく。
「いってて……。」
「うー!」
「むー。」
尻餅をついてしまったお尻を軽くさする中、炭治郎と禰豆子は私にすり寄ってくる。
まるで、褒めて褒めてと尻尾を振る犬みたいだ。
「……炭治郎も禰豆子もがんばったな。おかげで怪我なく終わらせることができた。ありがとう、守ってくれて。」
なんとなく、二人が何を求めているのかがわかった私は、小さく笑いながら二人の頭を優しく撫でる。
二人は気持ち良さげな笑顔を見せては、体を小さくしてすやすやと眠り始めた。
「……あはは……。まーた子供二人を抱っこおんぶか。」

思わず苦笑いをこぼしながら、一旦二人を私から離しては、禰豆子を背負い、炭治郎を抱き上げ、二人を起こさないように歩みを進める。

「さて……一旦生首のところに戻るか。」

そうしないと、物語は進まないからな。

06．鱗滝翁に出会いました

「あ、気絶してら……。」

しばらく歩いてお堂付近の森にまで戻ってきた私は、炭治郎と禰豆子の二人をお堂から少し離れた場所にある木に寄りかかるように座らせて、生首の方に近寄る。

崖から体が落下してミンチになったせいか、気を失っていた。

「……さて……どうやって止めを刺すべきか。」

鬼を滅殺する方法は主に二つ。

日輪刀で鬼の頸を切るか、太陽の光であぶるかのどちらか。

だけど、弱っちい鬼であれば、回復するのに時間がかかるから、何度も何度も殴って頭をかち割って、さらにぐしゃぐしゃにしてしまえば日が昇るまで復活しないこともあるし、そのまま絶命させることもできるはずだが……。

うーん……と頭を悩ましながらも、とりあえず滅多刺しにしてみるか？なんてサラッと考えながら短刀を取り出す。

が、それを振りかぶる前に肩に大きな手が触れたため、私は背後を振り返った。

「そんなものでは止めを刺せん。」

そこには、天狗のお面が印象的な、白髪の爺さんが一人いた。
間違いなく、鱗滝左近次だ。
「え？　短刀じゃダメなんです？　じゃあどうやって……」
「人に聞くな。自分の頭で考えられないのか。」
うっわやな感じ、とちょっと思いながらも、私は小さくため息を吐く。
そして、短刀を鞘に収めたあと、近くにあったでかい石を拾い上げた。
「……いくら力があると言っても、一撃で頭はかち割れないよな……。何回くらいぶん殴りゃ絶命すんだろこれ？」
けど、何回も殴りつけなきゃ頭は勝ち割れないであろう鬼を見つめながら、私は思案する。
だって殴りつけるたびに悲鳴が聞こえそうだもん。
グリリバボイスの悲鳴なんて滅多に聞けないから貴重ではあるけど、何度も悲鳴をあげられちゃ流石にうるさいだろうし。
一撃で沈めることができればいいのに、細腕の女じゃなぁ……。
ある程度力ある大人で、なおかつ男なら一撃粉砕とかもできるかもしれないけど……。
「……どうした？　できないのか？」

「ん？　ああ、いや。躊躇ってるわけじゃないですよ。ただ、いくら石でぶん殴るとしても、なかなか死なないだろうし、どうすればうっさい悲鳴を何度も聞かないで済むか思案しているだけなんで。」

「……。」

なんか、鱗滝さんから物言いたげな視線が向けられる。

そんなことを言ってる場合じゃない、とでも言うんだろうか？

まぁそうでしょうね。

目の前の鬼は動けないから思案できるけど、こんな状態じゃない鬼相手なら、思案してる暇なんてないし。

そうしている間に下手したら自分が殺されるだろうし。

「……方法はなさそうだなぁ。しょうがない。とりあえず殴るか。」

そこまで考えて、私は溜息を吐く。

だって今から悲鳴聴きまくらなきゃならないんだぞ？

溜息くらい吐きたくなる。

けど、やるっきゃない……。

「ギャアアアアアア!?」

「うっさい。」

気は乗らないけど、方法がないと判断した私はすかさず手にしていた石をグリリバボイス鬼目掛けて振り下ろす。

当たった瞬間、グリリバボイスの耳をつんざくような悲鳴が響き渡った。

「チッ……手に持ってるせいで妙な感触がある。」

「あ、頭がぁ!!」

同時に感じた手の不快感に舌打ちをした私は、近くにあった太めの木の枝をへし折ってから、服の中に入れていた藁を使って、枝に石を括り付ける。

少しでも不快な感触を少なくしたいからな。

多少の手間は惜しまない。

「よし。」

軽く振って落ちないことを確認した私は、すぐにでかい石つきの木の枝を鬼の生首目掛けて振り下ろす。

……鬼滅の刃の原作は、日本一慈しい鬼退治……が、コンセプトだったけど、あれは炭治郎だからこそ。

炭治郎ではない私は、悲しい生い立ちや苦しみを持ち合わせている鬼には優しくできるかもしれないけれど、完全な敵意しかない鬼相手には優しくなれない。

まぁ、鬼っつー怪物であれ生き物の頭を殴る感触は、正直気持ち悪さしかないが、身

を守るためにはこうしなきゃいけない世界で目を覚ましたんだ。
それならその流儀に従うまでだ。
そう思いながら私は、何度も何度も鬼の頭を殴りつける。
だが、なかなか目の前の鬼を絶命するまでには至らない。
うるさい悲鳴は聞こえたまま。
どうすれば聞こえなくなるのか……。
再び舌打ちをしそうになる。
しかし、不意に空が明るくなり始めていることに気づいては、すぐに眠ってる炭治郎と禰豆子を籠の中へと入れて籠を布で巻く。
「ギャアアア!!　ギィャアアア!!」
その瞬間聞こえてきたのはグリリバ鬼の断末魔。
そちらの方へと目を向けてみると、日の光に当たったそれは、炎に飲まれて灰塵と化す。
「……危なかったな。」
それを見てホッとする。
炭治郎と禰豆子をあんな目に合わせるわけにはいかないから安堵した。
……っていうか、あんだけの悲鳴が辺りに響いたにも関わらず、炭治郎たちはすやす

や寝てるのか。
それだけ体力が消耗されていたんだろうか……。
「……あ。」
……不意に、私の視界に鱗滝さんの姿が映り込む。
私が鬼の頭を殴り付けている間に、お堂にいた人らを埋葬していたらしい。
随分と冷静だな……と少しだけ思いながらも、私は炭治郎と禰豆子を入れた籠を背負い上げて鱗滝さんに近寄った。
「埋葬してくれたんですね。」
「ああ。」
静かに話しかけてみれば、短いながらに返事を返してくれた。
「……儂は鱗滝左近次だ。義勇の紹介はお前で間違いないな?」
続けて鱗滝さんは自分の名前を口にして、義勇からの紹介があったのは間違いないかと聞いてくる。
「ええ。竈門(かまど) 優緋(ゆうひ)。それが私の名前です。籠の中にいるのは弟の炭治郎と妹の禰豆子で……」
「優緋。そこの弟妹のどちらかが、または両方が人を喰った時、お前はどうする。」
「!!」

それに応じるように自分の名前と炭治郎たちの名前を教えると、若干内容が変化してはいるけど、原作通りの質問を鱗滝さんはしてきた。

炭治郎はこのセリフにすぐに答えを返すことができなかったけど、私の口は、無意識のうちに言葉を紡いでいた。

「それは鬼を連れていた私の責任だ。その時は心苦しくはあるけど、鬼であった二人の命を自らの手で終わらせたのち、その場で私も腹を切る。もちろん、そうならないように監督するのが私の務めではあるけれど、世の中に絶対大丈夫なんてものはきっと存在しない。もしもの時は、自分自身の命も以って詫びるよ。それくらいで許されないことであろうとも。」

これは、原作知識があるからというアドバンテージも関係しているかもしれない。

でも、それも含めてそれはあってはならないことで、なおかつ責任問題になることは十分に理解している。

だからこそ、私は口にした。

この時代の責任の取り方は、それしかないのだから。

「……お前は…判断が早く、なおかつ覚悟もあるようだ。なにをすべきかをよく理解している。」

鱗滝さんが少しだけ褒めるような言葉を紡いできた。

少しばかり複雑だ。

でも、その感情には蓋をして、鱗滝さんを静かに見上げる。

「……では、これからお前が鬼殺の剣士として相応しいかどうかを試す。弟妹を背負ってついてこい。」

すると、鱗滝さんは私を試すと口にしては、そのまま走り出してしまった。

かなり速い。

原作でもアニメでも見ていたが、どんどん引き離されている。

「……。」

私は少しだけ目を閉じる。

思い出すのは自分たちの父親である竈門炭十郎から伝えられているもの。

正しい呼吸を行えば、疲れることなく動けるという話。

炭治郎がこれを理解したのはまだ先のことだった。

だけど、私は例外として内容を知っている。

どこまで保てるかはわからないけれど、持ち合わせている知識があるならば、それを最大限に活かすとしよう。

そう決めて目を開けた私は、父さんである炭十郎が使っていた呼吸を使う。

どうやら、この体はしっかりと父さんが見せるものを吸収し、自分でも使えるように

昇華していたようだったから。
とはいえ、記憶からすると私は最大でも四時間くらいが限度であることも訴えてきているけど。
……まぁ、でも。
それだけできるなら十分だ。
鱗滝さんを追うには十分すぎるほどの時間。
「炭治郎。禰豆子。走るから揺れるぞ。頭と額はしっかり守ってくれ。」
籠の中で目を覚ましたらしい炭治郎と禰豆子に、私はすぐに声をかける。
「「う!!」」
二人はすぐに了承するように返事をしては、ゴソゴソと籠の中で動き、ピタリと止まる。
ちゃんと自分を守るための体勢を取ってくれたようだ。
「ありがとう。」
指示に従ってくれた二人に感謝の言葉を伝えた私は、再び呼吸を行い、今度こそ走り出す。
かなり遠くにまで行ってしまっていた鱗滝さんにはすぐに追いつくことができた。
少しだけ驚かせてやろうと思い、彼の隣に並んで見る。

「!!」

その瞬間、びっくりした時に人が纏う匂いが強くなった。

うん。

驚かすのは成功したらしい。

まぁ、でも、そこはやはり元柱。

すぐに冷静さを取り戻しては、少しだけ走るスピードを上げてきた。

並ぼうと思えば並べるかもしれないけど、それをしたら体力の消耗が激しいかもしれないと判断した私は、そのままのスピードを維持する。

さぁ……狭霧山に向かうとしようか。

０７．狭霧山到着。始まりの試練。

しばらく走っていると、前を走っていた鱗滝さんが足を止めた。
それに続くように足を止めると、そこには一軒の小さな家が。
間違いなく鱗滝さんのご自宅だ。
炭治郎と禰豆子が、二年間過ごした場所。
（ふぅ……なんとかなったな……。ちょっと呼吸を長く使ったから、少しばかり疲労が……。）
まぁ、原作の炭治郎ほど呼吸は乱れていないけど、やっぱりきついものはきつい。
これは……鱗滝さんに水の呼吸を教わりながら、ヒノカミ神楽の呼吸こと始まりの呼吸、日の呼吸もしっかりと修行する必要があるな。
少しでも無惨に対抗できるようにした方が、死傷者も最小限に抑えることができるだろうし。
っていうか、日の呼吸もしっかりと使えるようになっとかないと魘夢からの猗窩座戦で煉獄さん失っちゃうし。
……猗窩座に止めを刺すまではいかないかもしれないけど、撃退くらいはしないと

ね。

「……これで認めてもらえる……雰囲気ではなさそうですね。」

「……ああ。ひとまずはお前の弟と妹を儂の家に入れろ。試すのはそれからだ。」

「わかりましたっと。」

鱗滝さんの指示に従って、炭治郎と禰豆子を彼の自宅へと入れて、籠の布を外す。

「う?」

「む?」

すると、二人はひょっこりと顔を出しては、初めてケージの中から家の中に入った犬猫のように、辺りをきょろきょろと見渡した。

「炭治郎。禰豆子。姉ちゃんな。少しばかり用事ができたから、しばらくはこの家でお留守番しておいてくれ。大丈夫。鱗滝さんっていうおじいさんも一緒にいるからな。ゆっくりと休んでいい。姉ちゃんも、夕方にはちゃんと戻ってくるから、いい子にしていてくれるか?」

そんな二人に私は穏やかな声音で話しかけ、修行をするという言葉は使わず、用事ができたことだけを告げて、いい子でお留守番をしていてほしいことを伝える。

「む!!」

「んー……。」

すると、禰豆子は元気よく返事を返してきた。
しかし、炭治郎はどことなく不安と心配の匂いを纏う。
私がなにをしようとしているのか、なんとなく匂いでわかってるんだろう。
「炭治郎。禰豆子をよろしく頼むよ。……無理はしないようにするからさ。姉ちゃんの代わりに、可愛い妹の側にいてやってくれ。」
思わず苦笑いを溢してしまう。
だけど、これだけはどうしてもやらなきゃいけないことだから、炭治郎に無理はしないからと約束を取り付けて笑顔を見せる。
「……ん。」
少しだけ不満そうな様子を見せてはいたが、炭治郎はちゃんと聞き分けてくれた。
うん、流石は長男だ。
えらいえらい。
二人の頭を優しく撫でて、私は静かにその場を離れる。
向かったのはもちろん、鱗滝さんの元である。
「準備はできたな。」
「はい。」
「よし、ならば今からお前を試す。まずは一旦狭霧山に登るぞ。」

「わかりました。」
いざ、最初の修行と参ろうか……なんてね。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

……鱗滝さんに続くようにして狭霧山を登っていくこと数十分。
空はすでに青から茜色へ。
茜色から濃紺へと変化してしまった。
……標高がかなり高くなったから、少しばかり息苦しい。
ここから罠だらけの狭霧山を夜明けまでに駆け下りて、山の麓の家まで行かなくてはならないのかと思うと少しだけ気分が落ち込んだ。
さて……どこまで私の呼吸が持つのか……。
多分だけど、良くて二時間。
悪くて一時間くらいしか持たないような気がする。
「優緋。」
自分の限界がどれくらいで訪れるだろうかと思案していたら、鱗滝さんが振り返り、私の名前を静かに呼んだ。

その声に応じるように顔を上げると、天狗の面の目と目が合う。
「ここから山の麓の家まで夜明けまでに下りてくること……これが果たされたならば、お前を認めよう。だが、間に合わなかったらそこまでだ。大人しくこの場を去れ。」
「わかりました。」
静かな声音で告げられた試練。
それを承諾するように返事を返せば、鱗滝さんは深い霧の中へと姿を消していった。
「鱗滝さんの匂いはわかる。けど、罠の匂いがわかりづらいな……。」
罠になるべく当たらないようにするためには、全集中の呼吸をうまく活用し、同時に自身の嗅覚を最大限まで使用しなくてはならない。
思った以上に厳しい内容に一瞬表情をしかめてしまう。
だが、すぐに頭を切り替えては、私は静かに目を閉じる。
一旦は五感のほとんどを閉じて、嗅覚を使うことに専念しないと始まらない。
「……わずかにだけど、人工的に作られたものの匂いがわかった。まぁ、だからといって全部を発動させないように動くのは無理があるからな……。少しずつ罠を作動させて、飛んできたものをギリギリで回避する方が無難かもしれない。できるかわからないが、試してみる価値はある。あ、落とし穴だけは避けないとな……。それはかなりのタイムロスになる。」

少し集中してみれば、すぐに罠の匂いを嗅ぎ分けることができた。
次に考えたのは罠の回避方法。
多少無茶苦茶な内容ではあるけれど、最善はこれだと判断する。
「そんじゃ、始めますか。」
呼吸を使うのは罠の回避時のみにして、それ以外では呼吸を制限する。
うん、童磨戦みたいだな。
あれは呼吸を最小限にした上、散布される氷結の血鬼術を吸わないようにするためのもので、真逆な気もするが。
なんて、くだらないことを考えながらも私は地面を蹴り上げた。
下り坂のため軽く蹴っただけでもかなりのスピードが出てしまい、罠を発動させる際に使われる縄に一瞬足を引っかけそうになったが、ギリギリで飛び越えた。
勢い余って宙返りしちゃったけど、なんとか着地する。
先に落とし穴があったから、それは軽く飛び越えた。
落とし穴付近には糸があったため、踏んづけてしまうが、すぐに呼吸を利用して、飛んできた丸太を回避する。
「……この体怖っ。なんで意外とできちゃうんだよ、こんな超人技。」
いや……この世界じゃこの程度は超人技じゃなかったな。

当たり前のように鬼殺隊がやってるっつの。
向こうの世界でなら超人技だろう。
ＳＡ〇ＫＥもトップ狙えたかも。
「……やっべ……少しだけ呼吸を使っただけでもちょっと息切れしてきた。空気が薄すぎるだろここ。」
でも、文句は言ってられない。
とにかく罠は回避しまくって、少しでも時間を短縮しないとな。
「よっしゃ。やってやろうじゃないの!!」
改めて気合を入れて狭霧山を駆け下りる。
怪我なんかしたら炭治郎たちに怒られるから、無傷のまま頑張って。
まだ罠は単調だ。
変な捻りもなく、変な配置もない。
まさに初心者向けのコースといったところだろう。
これならまだなんとか無傷で終わらせることができる。
特に頭を悩ますことなく。
その優しさに少しだけ感謝しながらも、時には木の枝に飛び乗り、フリーランニングの要領で飛び移りながら、枝に仕掛けられた罠を見つけたら地面に降り立ち下を走る。

しばらくそれを続けていれば、狭霧山の麓の家までたどり着くことができた。

「ハァ……ハァ……ッ」

少しだけ肺を酷使したけどなんとかなった……軽くふらつきながらも、鱗滝さんの家の戸に手をかけて、静かに開ける。

「……戻りました。」

「まさか、こんなに早く戻ってくるとは思わなかった。だが、課した内容は果たされた。お前を認める。竈門優緋。」

息を切らしながら戻ったことを鱗滝さんに伝えれば、少しだけ彼は驚きながらも、認めると一言言ってくれた。

その言葉に小さく笑みを浮かべる。

修行の一段階目は、始めてくれそうだ。

０８．修行の始まりと優緋の日記

鬼殺隊。
その数、およそ数百名。
政府から正式に認められていない組織。
だが、古より存在していて今日も鬼を狩る。
しかし、鬼殺隊を誰が率いているのかは謎に包まれていた。
鬼。
主食・人間。
人間を殺して喰べる。
いつ、どこから生まれたのかは不明。
体の形を変えたり、異能を持つ鬼もいる。
太陽の光か、特別な刀で頸を切り落とさない限り殺せない。
身体能力が高く、傷などもたちどころに治る。
斬り落とされた肉も繋がり、手足を新たに生やすことも可能。
鬼殺隊は生身の体で鬼に立ち向かう。

人であるから傷の治りも遅く、失った手足が元に戻ることもない。
それでも鬼に立ち向かう。
人を守るために。
「儂は〝育手(そだて)〟だ。文字通り剣士を育てる。〝育手(そだて)〟は山程いて、それぞれの場所、それぞれのやり方で剣士を育てている。鬼殺隊に入るためには〝藤襲山(ふじかさねやま)〟で行われる〝最終選別〟で生き残らなければならない。〝最終選別〟を受けていいかどうかは儂が決める。わかったな?」
「……はい。わかりました。」
鬼滅の刃の原作にもあった鬼殺隊についての説明と、鬼についての説明……そして、鱗滝さんが行なっている〝育手(そだて)〟という立場の説明を受け、私は小さく笑みを浮かべる。
この修行の間に、ヒノカミ神楽の呼吸の強化も行いながら、水の呼吸をマスターする……気を引き締めていかなければならない。
「ああ、鱗滝さん。眠りについてる炭治郎たちが起きた時、自分が何をしているのかを知らせるために、念のため日記を書いておきたいのですが、紙と筆を貸していただけますか?」
「……ふむ……日記か。わかった。すぐに用意しよう。」

「ありがとうございます。」
そう思いながらも、私は鱗滝さんに日記を書いておきたいことを告げれば、鱗滝さんはすぐに頷いてくれた。
しばらくして、彼は、紙と筆を私に手渡してくれた。
これで日記を書くことができる。
まぁ、ヒノカミ神楽の呼吸に関しては記さないけどね。

炭治郎と禰豆子に向けて、修行の始まりである今日から日記をつけることにした。
私は今日も山下りだ。
炭治郎と禰豆子、二人を人間に戻すためにも、私は鬼殺隊に入るための〝最終選別〟を乗り越えないといけないからね。
しっかりと鍛えて、必ず二人とまた穏やかな生活を送ることができるように頑張るよ。
姉ちゃんな。
毎日毎日罠だらけの山を下りまくったんだ。
おかげでどれだけ罠の難易度が上がろうとも、無傷で下り切れるくらいにはなったよ。

日々の走り込みのおかげで体力が向上してきてさ。
同時に鼻も今まで以上に利くようになって、前以上に鋭く匂いを捉えるようになったからだと思う。
今日は刀を持っての山下り三昧だ。
意外と刀を持ってると走りにくくなるみたいで、今まで軽々と避けることができていた罠が少しだけ避けにくくなった。
でも、ちゃんと無傷のままだよ。
私が怪我なんか作っちゃったら、炭治郎と禰豆子は悲しむ。
長年一緒に過ごしていたから、二人がどれだけ私を大切にしてくれているか知ってるから、その気持ちを踏みにじらないように頑張ってる。
今日は刀の素振り。
いや、「今日は」……って言葉はちょっと語弊があるな。
最近はずっと素振りを続けているよ。
山下りを終わらせたあと、何度も何度も重たい刀を振り回したから、手にマメができて、何回も潰れちゃった。
まぁ、今じゃかなり慣れてきたから、痛いとか思ってないし、二人が心配するほどでもないよ。

手を繋いだ感触は、結構変わっちゃっただろうけどな。
私が刀の素振りを何度もしてる理由は、刀は折れやすいからと最初に鱗滝さんから言われたからだ。
刀って、縦の力にはかなりの強さを発揮するみたいだけど、横からの力にはめっぽう弱いみたいでね。
だから、刀には力を真っ直ぐに乗せることって言われた。
刀の向きと刀を振る時、込める力の方向は全く同じじゃないと、すぐに折れてしまうらしい。
刀は一本作るだけでもかなり時間がかかるものだから、絶対に折るなと注意もされた。
今日やったのは転がし祭り。
どんな体勢になっても受け身を取って素早く起き上がるための訓練だ。
私は刀を持って、鱗滝さんを斬るつもりで向かう。
対する鱗滝さんは素手、丸腰のままだ。
でもこれがまたなかなかの難易度でさ。
いくら襲いかかっても私の体は軽々と吹っ飛ばされてしまったよ。
まぁ、最初のうちに鱗滝さんから受け身の取り方を軽く教えてもらえたから、それを

応用することですぐに体勢を立て直せたから、ここも無傷だよ。
鱗滝さんには褒められた。
これほどまでできる子供は、あまりみたことがなかったらしいよ。
今日教えてもらったのは呼吸法と型のようなものを習った。
鱗滝さんが教えてくれたそれはちょっと難しくてね。
何度か腹に力が入ってないって怒鳴られた。
叩かれることはなかったけど、何度かお腹押さえられてちょっと厳しかったかな。
それから、炭治郎と禰豆子……二人が目覚めなくなって半年経つ。
鱗滝さんはすぐに医者を呼んで診せてくれたけど、異常はなかった。
でも、眠り続けるのは明らかにおかしいと思った。
怖かったよ、すごく。
私が朝起きたら、二人がいなくなってしまうんじゃないかって……母さんたちのところに逝ってしまうんじゃないかって……不安に思わない日は一日たりともなかった。
なぁ、炭治郎。
禰豆子。
私を置いていかないでくれ……姉ちゃんを、一人にしないでくれ。
山下りはもっと険しく、空気の薄い場所での訓練になった。

何度か失神してしまうんじゃないかって思った。
でも私は、なんとか堪えてそれを終わらせたよ。

09．鱗滝の課題。優緋の企み。

炭治郎と禰豆子に向けて日記を書き続けながらの生活も一年経ち、私は十五歳から十六歳となった。

「もう、教えることはない。」

「……え？」

ある日の昼下がり。

私は鱗滝さんから一言、バッサリと切られるようなカタチで告げられる。

それが意味するものは、物語がまた一つ進んだという事実だった。

「あとはお前次第だ。お前が、儂の教えたことを昇華できるかどうか。……最後の課題を与える。儂についてこい。」

「……わかりました。」

鱗滝さんに連れられて、私は狭霧山の奥の方へと足を運ぶ。

相変わらず霧が深いこの山は、周りが全く見えないけれど、それの存在感だけは、やけに目についていた。

「この岩を斬れたら、〝最終選別〟に行くのを許可する。」

「……岩を……ですか。」

私が連れてこられたのは、しめ縄が巻きついている大きな岩がある拓けた場所。

鱗滝さんは、その岩に触れながら、この岩を斬ることができれば全ての課題をクリアしたとみなすと言ってきた。

少しだけ苦笑いを溢す。

知ってはいたが、なかなかにでかい岩だ。

軽くノックをするように岩を叩けば、それなりの痛みを感じることができた。

「岩は、本来刀で斬るものじゃない気がするんですが……まぁ、やってみますよ。いや、やり遂げて見せます。どれだけ時間がかかろうとも。」

やれやれ、と軽く思う。

なんともまぁ、初見で聞いたらおかしいんじゃないかって言いたくなるような内容だ。

だが、鬼滅の刃の世界では、強い鬼とぶつかった時、最低限でもこれくらいは斬れないと鬼の頸を刎ねることなんてできない、

全く……原作知識を持ち合わせていて正解だったよ本当、

まぁ……ちょいとばかしチートな気もするけどな、

「やる気は十分のようだな。……一日で斬ることができないのは理解している。必ず、

暗くなる前には帰ってくるように。何回も斬りつけていたら刃こぼれもするだろう。それがどれだけ危険なことか、お前もこれまでの修行で理解しているはずだ。ひどい刃こぼれが目立つようになる前には必ず儂の元へ戻れ。刃こぼれの修繕くらいは儂がしよう。」

呆れていいのか喜んでいいのか……複雑な気持ちを抱きながらも、鱗滝さんの指示を了承するように頷けば、鱗滝さんは私に背を向けて、自宅の方へと戻っていった。

ああ、もう教えてもらえないんだな、と少しばかり感傷に浸る。

だが、すぐに頭を切り替えて、一旦岩があるこの場から立ち去る。

これは必要なことだ。

痣を出すまで、なんて高望みはしない。

でも、多少なりともヒノカミ神楽こと日の呼吸の練度を上げるくらいは許されてもいいはずだ。

なぜならこれは多くの人を救うため……パラレルワールドならではの、最小限の被害に抑えるという行動に必要不可欠な力なのだから。

「よっし。気合いを入れてやりますか!!　水の呼吸の練度も、ヒノカミ神楽の練度も、今できる最大まで上げてやる!!」

まずは半年、水の呼吸とヒノカミ神楽の練度を上げることと、全集中の呼吸に必要な

肺を作ること……それと、どれだけ呼吸を使っても、体が追いつくように、体力と身体能力の向上を始めるとしよう。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

……そう決意した半年前はとうの昔に過ぎ去った。

私は、この期間の間、鱗滝さんに教えてもらったことを全て一から学び直し、どのようにすれば昇華できるかを考えながら、ヒノカミ神楽の練度と水の呼吸の練度をそれなりに上げた。

岩が斬れるほどまでにはいかないかもしれないが。

でも、私は至って冷静だった。

何度も何度も繰り返し同じ修行を行い、何度も何度もヒノカミ神楽を舞い続けて、何度も何度も水の呼吸と型を繰り返し行っていた。

炭治郎は確か、ここで焦っていた記憶がある。

何回も岩を斬ることに挑戦しては玉砕しての繰り返しだから、しょうがないと言えばしょうがないけど。

「ふぅむ……やっぱりまだなんか足りない……？　水の呼吸……上手くできてないよう

な気がする。……多分、ヒノカミ神楽の方ならいけるんだろうな……。あっちの方が呼吸としてはかなり楽だ。まぁ、それが私に適性した呼吸だからなんだろうけど……。でもあれ、意外と体力削るんだよな……。だから、できれば水の呼吸である程度体力は温存しつつ、任務を終えたあとにヒノカミ神楽の練度上げを行いたいところなんだけど。」

うーん……と頭を悩ませる。

どうやれば水の呼吸をものにできるのか……。

「何を悩んでいるんだ?」

首を傾げながら刀を見つめていると、突如頭上の方から声が聞こえてきた。

ん?と思いながら上を見上げてみると、そこには狐の面をつけた宍色の髪をした少年が一人……。

いや、かじボイスの宍色髪の狐小僧なんてこの世界には一人しかいねぇわ!!

「……誰だあんた?」

「錆兎。それが俺の名前だ。お前は?」

「……竈門優緋。」

ですよね、錆兎だぁぁぁぁぁぁぁ!!

１０．錆兎と優緋

炭治郎のように岩に頭突きをかましながら嘆いてなかったから錆兎が来るとは思わなかった。

てっきりあれがトリガーとなって、錆兎が出てくるのだとばかり。

だが、錆兎は私の前に現れた。

うるさいと怒鳴ることなく、どうしたのかと質問をしてきた。

「うーん……実はさ。どうやったら岩を斬れるのかなって思ってね。水の呼吸……どこで躓いてるのかわからなくて……。鱗滝さんが教えてくれたことは、何度も繰り返してはいるんだけど……。」

この岩がある場所でしばらく過ごしていると彼はやってくるのか……なんてゲームのメインイベント的なノリで考えながらも、私は素直に錆兎に自分が躓いていることを話した。

すると錆兎は岩の上から地面に降り立った。

片手に一本の木刀……じゃなくて真剣持ってんだけどこいつ!?

「ん？」

「それなら手伝ってやる。かつては俺も岩を斬ったことがあるからな。優緋。お前のことはしばらく見ていた。どこでお前が躓いているのかも、大体はわかる。まずは剣を構えろ。少しばかりの手合わせだ。」

「マジか……。」

あれぇ……？

原作では確か錆兎が持ってたの木刀だったよな？

真剣は最後だったよな……？

え？

いきなり真剣でやんの……？

「あー……あのさぁ、錆兎。」

「なんだ？」

「真剣同士で手合わせすんのはいいよ、うん。その方が緊迫感もあるし、鍛錬のやり甲斐がある。けど、真剣同士の手合わせはもちろん怪我の可能性もある。なるべく私も避けるけどさ、念のためにこれだけは言わせてくれ。……お手柔らかに頼むよ。怪我なんかしちゃったら、弟と妹が悲しむ。流石にそんな二人は見たくないし、下手したら修行をすることすらダメだって抗議されてしまうかもしれない。だから……。」

それだったらと、私は念のために彼にあまり怪我をするわけにはいかないから、お手

柔らかに頼むと告げる。
「……そうか。わかった。こちらも努力しよう。」
私の抗議を聞いた錆兎はすぐに小さく頷いたあと、手にしていた真剣を抜刀する。
それに合わせて私も鞘から真剣を抜刀して、何度も素振りをし続けたことによりすっかりと持ち方も身についてしまったそれを静かに構える。
辺りに満ちるは静寂。
私と錆兎は互いに相手を見据え、そして、同時に足を踏み込んだ。
静寂を壊して響くのは刃同士がぶつかることにより発生する金属音と、錆兎と私の呼吸音だった。
「優緋。お前は全集中・水の呼吸以外にも別の全集中の呼吸を使っていた。だから基礎は理解しているはずだ。だが、水の呼吸の呼吸法がうまくできていない。」
「なるほど。基礎的なものは身についているけど、いまいち水の呼吸に必要な呼吸法ができてないのか。それじゃあ斬れないわな。」
「ああ。」
鍔迫り合いや、刃同士の押し合いなどで距離が近くなるたびに、私と錆兎は会話する。
とはいっても、錆兎が全般的にアドバイスを口にして、それを聞いた私が、問題点を見つけていくのが主なやりとりだけど。

「無駄な動きも多い。もう一つの呼吸の方では、そんな無駄は見当たらなかった。水の呼吸を身につけたいのであれば、その無駄をなくす必要がある。」
「了解、錆兎。ところでどうやって無駄をなくしたらいい?」
「そんなものは自分の目で、俺の技から盗んでみろ。」
「はは。鱗滝さんみたいに自分で考えろってやつか。はいはい。了解しましたよ。」
錆兎が水の呼吸の型を使用しての攻撃。
私はそれを見ると同時に反射的に同じものを使う。
一応相殺できなくもないが、かなりきつい。
フラついてしまう。
それだけ錆兎の水の呼吸の練度が高いということなんだろう。
まぁ、そうであっても、私のお手柔らかにという頼みは反映してくれているのか、こちらが怪我をするまでには至らないけど。
「水の呼吸の型はしっかりとできてはいる。だが隙がある。そんなのでは鬼を狩るなど夢のまた夢だ!!」
「手厳しいことで。まぁ、多分だけど、水の呼吸に私はあまり適してないんだろうな。」
「ならばなぜ水の呼吸を使う? もう一つの呼吸の方がやりやすいんじゃないのか?」
「あれ、意外と体力持ってかれるやつでね。今の私の体力じゃ、一部追い付かないんだ

よ。その点、水の呼吸は体力をそこまで消耗しない。威力はもちろんもう一つの方が高いけど、体力の消費を考えれば、まずはこちらを実戦に活用できるくらいにはしておきたい。だから私は水の呼吸を身につけようとしてるんだ。もう一つの呼吸は、体力をしっかりとつけてから実用しようとしてる。」

　水の呼吸をなぜ身につけようとしているのか……という質問に素直に答えを紡ぎながらも、水の呼吸を何度か使っていく。

　が、スピードも練度も錆兎の方が上である今は、私が敵うはずもなく。

　ガキュイインッ!!

「……あ。」

「……。」

　私の真剣は錆兎の真剣により後方へと弾き飛ばされてしまい、丸腰の状態に陥らされた上、私の首元には錆兎が手にしていた真剣の峰の部分が添えられていた。

「……怪我の配慮ありがとう。」

「弟と妹を心配させたくないと言っていたからな。それを尊重したまでだ。」

　それに感謝の言葉を述べつつも、そっと峰を手のひらで押して、自分の首元から引き離す。

「よいしょっと……。」

そして、後方に飛ばされた刀を拾い上げては、それを鞘に収めた。
「やっぱり一度岩を斬ってる奴相手にはまだまだ敵わないな。」
「当然だ。まぁ、お前も筋は悪くないが……。ああ、来たか。見ていただろう、今のを。」
「うん。」
おや、また新たな聞き覚えのある声が……。
そう思いながら顔を上げてみると、どことなくフワフワしてる印象を抱く花柄の着物の女の子が一人。
間違いなく真菰だろう。
「お前にはいくつか悪いところがある。それを直さない限り、岩なんて斬れやしないぞ。」
「具体的には?」
「自分で考えろ。俺が教えるつもりはない。まぁ、どうしてもわからないというのならば、真菰に聞け。一日に二回……お前の元には手合わせのためだけに訪れる。」
「……なんだよそれ。」
なんかやな感じだな、と思いつつ、真菰と入れ替わるようにして姿を消した錆兎に対しての文句を吐き捨てるように口にすると、小さな笑い声が聞こえてきた。
笑い声の方を向けば、そこには真菰。

「……初めまして、優緋。私は真菰。ここからは、私が優緋と一緒だよ。」
小さく笑う真菰を見つめながら、首を傾げていると、彼女は笑うのをやめたあと、小さく微笑みながら、自分の名前を口にした。
「……真菰か。ああ。初めまして。私は竈門優緋。これからお相手頼むよ。」
それに続けるように自分の名前を彼女に告げては、握手を求めるように手を差し伸べる。
真菰は一瞬目を丸くしたが、すぐに小さく笑っては、握手に応じるように手を握ってきた。
触れた手は柔らかかったけど、暖かさは感じれなかった。

11．課題のクリア

あれから真菰は、毎日山の中にやってくる私の前に現れては、私の問題点となっている無駄な動きと悪い癖について真摯に教えてくれた。
それをどうすれば改善できるかも。
錆兎とは大違いだな、なんて軽く愚痴ったら、彼女は小さく笑っては、彼は鱗滝さんによく似てるからと呟いた。
それにより彼女との会話を繋げることができると思った私は、鱗滝さんと知り合いなんだと呟く。
まぁ、錆兎と真菰のことをいろいろ知ってるから、本来ならば問いかける必要はないと思ってはいたけど、話題を続けるためならば知ってることも取り上げる。
鱗滝さんと知り合いなんだという私の言葉について、真菰は笑顔を見せた。
私たちはみんな、鱗滝さんが大好きだから……ただそれだけを静かに紡いで。
真菰はいろいろ話してくれた。
自身と錆兎の関係や、自分たちと鱗滝さんの関係を。
錆兎と真菰はどちらも孤児だったこと。

そこを鱗滝さんが拾ってくれたこと。
孤児だった自分たちを、鱗滝さんが育ててくれたことなどを。
まぁ、自身の出生や真摯に対応してくれる理由やら、原作通り話してはくれなかったけど。
「子供たちは他にもまだいるんだよ。いつも優緋を見守ってる。あ、中には優緋が好きだって言ってる子もいたよ。緊張して話せなくなりそうだから、遠くから見るだけで我慢してるんだって。」
「……真菰。それは普通、本人に伝えたら駄目なことだと思うんだが？」
「大丈夫。話せないから代わりに伝えてほしいって言われたから。」
「……そうなのか。」
……ここにいる子供たちがなんなのか知ってる身としては苦笑いをしたくなった。
魂だけになってしまっている子供たちの中にいる異性に好かれるってどんな状況だ。
まぁ、別にいいけどさ。
……原作通り、真菰はどこかふわふわしている子だ。
まるで空を揺蕩う白雲のよう。
あーあ……生きてる君と話したかったよ。
性格はかなり真逆だけど、仲良くなれたかもしれないのに。

「どうしたの？」

「んー？　ああ、ちょっとした考え事だよ。気にしないで。」

そんなもしもは存在しなかった。

ＩＦの世界なら、ひょっとしたらと思っていたけど、結局二人の命は、あの手鬼に奪われてしまっていた。

まぁ……二人がここに還ってきていたから、私は水の呼吸の型を完成しつつあるんだけど……でも、やっぱり複雑だ。

けど、そんな感情は悟られないようにしながら、考え事をしていただけだと不思議そうに私を見つめてくる真菰の頭を優しく撫でた。

真菰はビックリしたように目を丸くしていたけど、すぐに気持ち良さげに笑みを浮かべて撫で受けてくれた。

少しだけ妹みを感じたのは言うまでもない。

……あれから私は、自身の体力作りや、ヒノカミ神楽の練度上げ、水の呼吸の練度上げなどを繰り返し行なっていた。

それと同時進行するように、錆兎との一日二回の手合わせもして、彼と互角かそれ以下という結果を残しながら。

「やっぱり錆兎強っ……」

「当然だ。」
おそらく狐面の下ではドヤさといった効果音がつきそうなくらいのドヤ顔をしているんだろうな……と思いたくなるようなこの反応は、かなり印象的だったな。
私の性格が関係してるのか、錆兎とは男子中学生や男子高校生のノリのいい男友達で、ちょっとした好敵手になりつつある。
まぁ、私が月のものでダウンした翌日に会いにいくと、彼はオロオロしていたけどね。
狐面の隙間から少し見えていた錆兎の赤面姿は、きっと忘れることはないと思う。

……いろいろなことがあった半年。
狭霧山にきて二年経った今日。
そろそろ課題をクリアしようと判断した私は、日課となっている錆兎との手合わせのために、あの岩がある場所に向かった。
そこにいた錆兎は、普段とは違う雰囲気を纏っており、異常なまでの存在感を放っていた。
「よ、錆兎。今日こそは決着つけようよ。」
「ああ。俺もそのつもりで来た。……あれから半年間……隙もだいぶ無くなったんじゃないか？」

「だとしたら嬉しいね。今日こそは勝てるかも。」
「言ってろ。今回は、俺も本気だからな。本気で優緋に斬りかかる。男だの女だの関係ない。一人の剣士として、本気でお前を負かしに向かう。」
「普段からかなりの技量で攻めてくんのに、あれで本気じゃないとか勘弁してよ……。まぁ、私も本気でやるけどさ。」
互いに何気ない会話を行い、一定の距離を取るように離れて、互いに鞘から刀を引き抜く。
本気のやりあい。
本気の試合。
負けたら最後、大怪我は免れない一勝。
本気の真っ向勝負は至って単純だ。
より強く、より速い方が勝者となる。
勝負は一瞬。
たった一回の振り下ろしで決まる。
「……。」
「……。」
互いに真剣を構えて、無言で相手の出方を伺う。

そして、同時に地面を踏み込んでは、私と錆兎は真剣を振り下ろした。
刃の切っ先を喰らったのは……錆兎がつけていた狐の面だった。
「……。」
「……。」
はらりと錆兎の狐面が割れ、彼の隠された素顔を晒す。
彼が表情に浮かべていたのは、穏やかな安堵の笑みと、どことなく強い落胆だった。
原作では錆兎が表情に浮かべていたのは、泣きそうで、だけど嬉しげな、安心したような笑顔だったはずなんだけど……って……。
「よく見たら錆兎!!　おまっ私のこと本気で斬ろうとしてないか!?　それそのまま振り下ろすと確実に袈裟斬りになるよな!?」
「はは。バレたか。……少しだけ惜しいと思ったんだ。お前がいなくなることが……。」
「怖っ!!　なんで殺す気満々なんだよ怖っ!!」
「さぁ、なんでだろうな?」
意味深に笑ってる錆兎に対して引きつった笑みを浮かべる。
これもまたここに存在している魂に好かれた代償だったのかもしれない。
「優緋。」
「?」

錆兎の行動に恐怖を感じてドン引きしていると、真菰から穏やかな声音で名前を呼ばれる。

振り向いてみれば彼女は穏やかな笑みを浮かべて私を見つめていた。

「勝ってね、優緋。アイツにも。」

「大丈夫だ。お前ならきっと、奴を斬ることができる。」

真菰と錆兎の声が辺りに響き、二人の姿が濃霧に覆われる。

濃霧がわずかに薄れた時、二人の姿は消えていた。

「あ……。」

不意に、手元の違和感を覚えた私は、視線をそちらへと向ける。

そこには、岩を真っ二つに斬り壊している、私の刀が存在していた。

12．〝最終選別〟への旅立ち

錆兎に私の刀が早く届いた理由。

それは、原作の炭治郎と同じく〝隙の糸〟がわかるようになったからだ。

誰かと戦っている時、私が匂いに気づくことができれば糸がわかるようになる。

糸は私の刃から、相手の隙に繋がっており、見えた瞬間ピンと張って、私を刃ごと強く引き寄せる。

その勢いに乗せて、適した呼吸の型を叩き込めば、隙に斬り込み、勝ちを得ることができる。

……漫画やアニメを観て、そんなのあるはずないだろう……現実じゃ絶対に不可能だ。

やっぱり二次元の世界はいろいろすごいな……なんて考えていたことがあったけど、この世界ではそれが、結構当たり前のようにある。

本当に私はこの世界の住人になってしまったんだな、って、ちょっとだけ物思いにふけた。

「お前なら果たすと思っていた。鬼を狩るために生まれたかのような、凄まじい才覚を

持ち合わせていたからな。だが、心のどこかでは果たさないでくれと思っていた。もう、子供が死ぬのを見たくなかったために。だから、この一年間、ずっと岩を斬った様子がなく、儂の家に戻ってきては、穏やかに過ごすお前の姿に安心していた自分もいた。……が、やはりお前は果たしてしまうのだな。」

しかし、その意識は不意に聞こえてきた鱗滝さんの声により、引き戻されることとなった。

声の方を向いてみると、彼はゆっくりと歩いてきている。

「……やはり、才覚に恵まれた子供というものは、その才覚の果てに得る結果を、その手に納めてしまうのだな。……よく頑張った、優緋。お前はすごい子だ。〝最終選別〟……必ず生きて戻れ。儂も弟たちも、此処でお前を待っている。」

私の目の前まで歩み寄ってきた鱗滝さんが、どことなく寂しげで悲しげで、しかし、少しの安堵と期待を込めた声音で話しかけてきた。

「……最初からそのつもりです。だって炭治郎と禰豆子にはもう私だけですからね。あの子たちを置いて、逝ってしまった家族のもとになんて逝けません。だから必ず戻ってきますよ。大切な弟妹たちのためにも。もちろん、鱗滝さんのためにも。」

そんな鱗滝さんに必ず戻るという約束を静かな声音で取り付ける。

大切な弟妹のためにも、剣士として育ててくれた鱗滝さんのためにも、霧の中で私に

水の呼吸の助言をくれた錆兎や真菰たちのためにも。
鱗滝さんは小さく頷いては自宅の方へと帰宅する。
私も彼に続くかたちで鱗滝さんの自宅に戻った。
……あれから、鱗滝さんは美味しい鍋をご馳走してくれた。
課題をこなし、明日、最終選別に向かう私に対する祝いと、体力づくりのためらしい。
あまりにも美味しくて、何度もお代わりをした。
お腹がいっぱいになるくらい。
いずれは炭治郎と禰豆子の二人とも一緒に食べたいと呟いたら、二人が今抱えている問題が落ち着いたら、その時は一緒に食べようと言ってくれた。
鍋をお腹いっぱいに食べた私は、この二年間、ずっと伸ばしっぱなしだった髪を切った。
あまりにも長すぎると、行動に支障が出ると思ったから。
でも、ある程度の長さは残しておいた。
常に持ち歩いている髪紐で、高い位置で髪を結って、女版緑壱さんの完成だ……なんて、軽く遊ぶためにも。
まぁ、ちょっとだけ無惨に対する嫌がらせも含めているけどな。
緑壱さんの耳飾りを、炭治郎ではなく私が受け継いでいたから、ちょうどいいと思っ

たんだ。

トラウマを再発するくらいには、嫌がらせをしないと気が済まない。

その絶望に飲まれているうちに、あのイケメン鬼をぶっ飛ばす。

……まぁ、それはそれとして、少しくらいは話せないかな、なんて思ったりもしてるけど。

髪を切りそろえ、髪紐で髪を結い終えると、鱗滝さんがお面をくれた。

厄除の面……悪いことから身を守ってくれるという、あの狐のお面だ。

額には太陽のようなイラストが描かれている。

鱗滝さんに日輪の絵について聞いてみたら、私の額にある痣を元にしたそうだ。

何で痣？って思って慌てて額を見てみると、確かにそこにはうっすらと痣が浮かんでいた。

そう言えば、なぜか私は炭十郎……父さんと同じで、額に薄い痣があった。

生まれつきだったのか、次第に浮かぶようになったのかはわからない。

でも、わかることもある。

やっぱり、私は日の呼吸の後継者なんだ。

先祖代々からヒノカミ神楽として存在していた、始まりの呼吸を使える子供。

それなら水の呼吸の習得に時間がかかるのも頷ける。

……いずれは、もっと色濃く痣を出せるようにしよう。
せめて無限列車編……煉獄さんが命を落としてしまうあの話を、ないものと変えるためにも。
お面の日輪の秘密を理解した私は、鱗滝さんに感謝を述べながら、渡された厄除の面を受け取った。

……翌日。
とうとう私は藤襲山へと足を運ぶ。
鬼殺隊になるために、最終選別を乗り越えるために。
「では、炭治郎と禰豆子をお願いします。」
「ああ。」
鱗滝さんからもらった厄除の面を頭に乗せて、鱗滝さんが昔使っていたという青の刀身の日輪刀を腰に携える。
鱗滝さんが作ってくれたらしい、彼と同じ羽織を羽織って、家から外に出た。
「行ってきます、鱗滝さん。」
「……必ず戻ってくるんだぞ。」
「もちろん。では、私はこれで。」

炭治郎のように、錆兎と真菰によろしくなんて言葉は使わない。
あの子たちの真実は、読者だった私もよく知っているから。
「……行ってくるよ、錆兎。真菰。二人が教えてくれたこと、しっかりと使って勝ってくるから。最終選別が終わった時にでも、また会いに行くよ。」
その代わり自分自身で二人に行ってくるという言葉を紡ぐ。
鱗滝さんには聞こえないように、小さな声で呟くように。
『行ってらっしゃい、優緋。』
『待ってるぞ、お前のことを。』
風に乗って、二人の声が聞こえたような気がした。
でも、狭霧山に目を向けてみても、二人の姿は見当たらない。
だけど、背中を押すような力強い言葉ではあったから、私は小さく笑みを浮かべて、少しだけ狭霧山を見つめたあと、背を向けて向かうべき場所へと走り出した。

１３．藤襲山の最終選別

鱗滝さんの自宅から離れ、しばらくした頃。
私の嗅覚は、藤の花の匂いを強く感じ取った。
顔を上げてみると、そこには美しく咲き誇る満開の藤の花。
「おお……。」
思わず感嘆の声を上げる。
ここまで満開の藤の花が咲いてる場所なんて、テレビでしか観たことがない。
まぁ、今の時期は咲く時期じゃないんだけどさ。
でも、これだけ咲き誇っているのをみるとあれだな。
花見とかしたくなる。
炭治郎と禰豆子が人間に戻ったあととかに、藤の花や桜の花が咲き誇るような場所に、花見でもしに行こうかね……。
そんなことを考えながら、私は藤襲山の中腹を目指してゆっくりと歩みを進めた。
……少しして、私は藤襲山の中腹にたどり着く。
そこには二十人前後の子供たちが集まっており、皆、腰に育手から受け取ったのであ

ろう日輪刀を携えていた。
辺りをきょろきょろと見渡す。
視界に入ったのは目立つ金髪の少年善逸。
ガタガタと震えているようだ。
次に視界に入ったのは不死川玄弥。
風柱である不死川実弥の実弟で、呼吸を使うことができない少年。
鬼喰いという力を使って戦う中、彼が送る最期は……。
それをなんとか回避できればいいのだけど、さて、どうするべきか。
最後に視界に入ったのは、今回の集まりの中の女の一人である栗花落カナヲ。
蝶々と戯れながら過ごしている。
（ここから最後には五人に減るのか……。できることならみんな助けたいところではあるけど、それができるほど私は器用じゃない。多分、原作通りの人数となるだろう。）
助けられるものならば助けたいけど、全部が全部抱え込んでいたら、必ず手からこぼれ落ちてしまう命もある。
それが、重要な人物だったり、炭治郎や禰豆子だったり……その可能性がわずかにでもあるのだとしたら、得策とは言えない。
（……何度も見たことある二次創作に含まれているオリジナル主人公のように振る舞え

たらどれだけいいことかと思わなくもない。でも、私が持ち合わせているのは原作知識と、ほんの少し高い身体能力のみ。）

結局、二年間で痣を発現させることはできなかった。

あの世界にも入ることができていない。

今まで見てきたオリジナルの主人公たちのように、私は天才じゃない。

そりゃ、ヒノカミ神楽を実用化することはできたさ。

水の呼吸もしっかりと身につけた。

でも、所詮はそれだけであって、結局は炭治郎よりちょっと強い程度にしかなれていないと思う。

知識があったから、実用化まではできただけ。

それ以外は全くできていない。

完全なる最強にまでは至ってない。

（こんなんで煉獄さんを助けることできんのかな……。不安でしょうがないんだけど……。）

いや、弱気になってる場合じゃないな。

できるのかなじゃない。

やらなきゃいけないんだ。

私に遺言を残して去るなんて許さない。

自分自身で言葉を伝えて、家族団欒を迎えろって話だ。

（弱気になるな優緋。最終選別を乗り越えたあと、しっかりと鍛錬を怠らずにヒノカミ神楽の練度上げを行えば、きっと痣も発現することができる。炭治郎も父さんも身につけることができたんだ。必ずたどり着くべき場所にたどり着くことはできる。緑壱さんが言っていた通り、彼らを越えることも可能になるはずだ。彼らも果てに行き着いたように。）

心の中で自分自身に喝を入れる。

今から弱気になっていては何も始まらない。

後退し、停滞していくだけなのだから。

だから今は、やることなすことをしっかりと終わらせるんだ。

二度と鱗滝さんを悲しませないように、錆兎と真菰……他にも失われた多くの鱗滝一門全員が安心して休めるように。

そして……二度とこの最終選別で、残虐なまでの結末を迎える子供たちを出さないために。

「皆さま。」

目を閉じて自分のやるべきことを再認識していると、不意に幼い声が辺りに響いた。

ゆっくりと目を開けて声の方を向いてみると、そこにはよく似た二人の子供の姿があった。

産屋敷輝利哉と、産屋敷かなた……。

最終決戦では、鬼殺隊全員のサポートを行い、最後まで生き抜いた幼子たち。

そういえば、二人が案内役だったな、と少しだけ考えながらも、私は二人の話を聞く。

「今宵は最終選別にお集まりくださってありがとうございます。この藤襲山には、鬼殺の剣士様方が生け捕りにした鬼が閉じ込めてあり、外に出ることはできません。」

「山の麓から中腹にかけて、鬼共の嫌う藤の花が一年中狂い咲いているからでございます。」

「しかし、ここから先には藤の花は咲いておりませんから鬼共がおります。この中で七日間生き抜く。」

「それが、最終選別の合格条件でございます。では、行ってらっしゃいませ。」

最後まで話を聞いた私は、山の中へと次々入っていく剣士の卵たちに続くカタチで山の奥へと足を運ぶ。

……確か、最初は雑魚鬼二体と鉢合わせるはずだったけど。

「オイオイ!!　てめぇは向こうに行け!!　俺がコイツを喰う!!」

「いや貴様がうせろ!!　俺の獲物だぞ!!」

「黙れ!!」
「……ああ、やっぱりか。」
しばらく歩いていれば、茂みの方から声が聞こえてきた。
同時に突き刺さる殺気と敵意……だが、それを放っていながらも、口喧嘩をしている二体の鬼にやれやれと小さく溜息を吐く。
めんどくさいと思いながらも、私はすぐに水の呼吸を行っては、襲いかかってくる前に技を放つ。
「獲物を前にして、どっちが喰うかなんて口喧嘩をするなんて、馬鹿馬鹿しいにもほどがある。」
〝水の呼吸　肆ノ型　打ち潮〟
隙の糸が見えまくりの雑魚鬼相手に肆ノ型を容赦なく放つ。
「ゲッ!!?」
「ガッ!!?」
流れるように放ったそれは、雑魚鬼二体の頸へと吸い込まれるように叩き込まれる。
二体の鬼は短い悲鳴を上げながら、そのまま塵となって消えていった。
「油断してるからだよアホ。言い争ってる間に頸斬られちまうとか、呆気なさすぎ。」
呆れたように言葉を紡ぐが、その声を聞く者は誰一人としていない。

まぁ、誰かに聞かせるつもりはなかったし、別に構わないけどさ。

「……来たか。」

そんなことを考えていると、鼻につくような刺激臭を私の嗅覚は捉えた。

間違いなくこれは、手鬼の匂いだ。

ここまで匂いがきついのかよ、と少しだけ気分が悪くなった。

けど、すぐに頭を切り替える。

手鬼は絶対に始末しなくてはならないから。

「うわァァァ!!」

「!!」

自ら出向くかと考える中、一人の少年の悲鳴が辺りに響き渡った。

視線をそちらに向けてみると、恐怖に呑まれ、顔を真っ青にしている少年がいる。

「何で大型の異形がいるんだよ!!　聞いてないこんなの!!」

少年はある一点を見つめながら叫ぶ。

彼と同じ方に目を向けてみれば、そこにはあの手鬼の姿が。

「思った以上にでかい上、肌質がかなり硬そうだな。」

素直な感想を漏らしながら、私は鞘に収めていた日輪刀に手をかけ、足に力を入れる。

「ギャアアァッ!!」

少年が手鬼に足を掴まれ宙吊りにされる。
アニメで見た通り、手鬼は少年を喰らおうと、自身の口がある方へと引き寄せる。
「させるかよ。」
〝水の呼吸　弐ノ型　水車〟
地面を強く蹴り上げて、一気に手鬼との距離を近づけた私は、そのままジャンプして回転斬りをかます。
……これ、連続でくるくる回ったら某ＲＰＧの裂空斬だな。
上手くしたら真空裂斬もできそう。
呑気なことを考えながらも、手鬼の手から離れた少年を空中受け身を取りながら蹴り飛ばす。
少しでも距離を取ってもらわないと正直邪魔。
「いでっ!!」
「受け身くらいとれよ。習ったろうに。」
背中から落下した少年に呆れながら声をかける。
「確かに習ったけど混乱してる中できるわけあるか!!」
「あっそう。じゃあ鬼殺隊に向いてないなそれ。鬼との戦闘は急な襲撃とか当たり前にあるようだし、混乱して受け身取れないとか技が使えないとか致命的なことだと思うよ

？」

「う……うるさい!!　それくらいわかってるんだよ!!」

言葉を言い返してくる少年を放置して、私は手鬼に目を向ける。

見えない位置から急にやってきた剣士に呆気にとられている様子の手鬼。

だが、こいつはすぐに私が頭につけている狐の面に目を向けては、ニタリと嫌な笑みを浮かべた。

「また来たな。俺の可愛い狐が。」

紡がれた言葉に悪寒がした。

こいつの声は某戦ゲームの赤い虎に仕えるオカンだけど。

……っていうか、予想はしていたけどさ。

やっぱりこの世界の鬼や人間たちの声帯って、アニメ版鬼滅の刃のと全く同じ声帯なんだな。

14．手鬼との邂逅。優緋の怒り。

狭霧山の中にある真っ二つに破壊された岩……優緋が修行の末、課題のクリア条件として壊した岩の側に、二つの人影がある。
片方は花柄の着物を着ている少女。
片方は狐の面で顔を隠している少年。
優緋に水の呼吸の訓練をつけていた二人組、錆兎と真菰だ。
「錆兎。」
静寂が辺りに降りる中、真菰が静かに言葉を紡ぐ。
二つに斬られた、岩の上に座る錆兎を見上げて。
「優緋、勝てるかな？」
問いかけられた言葉に、錆兎は空を見上げながら無言になる。
脳裏に描くのは赤い瞳をしており、赤みがかった長い髪を揺らしながら、不敵な笑みを浮かべて真剣を構えていた優緋の姿。
他にも、手合わせをしていない間、一人力強く神楽を舞っていた彼女の姿や、水の呼吸を身につけるために、何度も型と呼吸を行っていた彼女の真剣な様子を浮かべる。

「……そうだな。優緋なら勝てる。あいつは、俺なんかよりもずっと強かった。羨ましくなるくらいの力を持ち合わせていたのだから。」

狐面の下で静かに笑みを浮かべた錆兎は、自信満々に優緋なら勝てると断言する。

自分よりも力を身につけていた、羨ましくなるほどの才を持ち合わせている彼女ならば、自分たちがなしえなかったことをやり遂げる……そう信じれたのだ。

「……もし、今も俺たちが生きていたら……優緋と一緒に、実力をもっと高めることができたかもしれないな。」

「……うん、そうだね。きっと、私たちはもっと強くなれていた。」

「ああ。本当に惜しいな。死んだ身であるのが。」

「生きていたら、優緋を振り向かせることも、できたかもしれないから?」

「……。」

「錆兎……すっごく不服そうにするのやめてよ。」

「……一番それが惜しいと思った自分に少し呆れたんだよ。」

霧が深い山の中に、少年少女の静かな会話がこだまする。

それを耳にできた者は、誰一人としていないけど。

……藤襲山

「狐娘。今は、明治何年だ?」
対峙することになった巨大な異形、手鬼。
しばらくニタニタと笑っていたかと思えば、手鬼は静かに問いかけてきた。
「明治?　あんた何言ってんだ?　今はもう大正だけど?」
私はすぐに質問に答える。
明治なんて時代は、とうの前に去りましたよっと。
「大正……?」
私の返答を聞いた手鬼が、小さく呟くように私の言葉を繰り返す。
そうだと静かに頷けば、手鬼は少しだけ固まった。
しかし、すぐにワナワナと震え始めては、複数ある手に力拳を作る。
「アアアアア!!　年号がァ!!　年号が変わっている!!　まただ!!　また!!　俺がこんな所に閉じ込められている間に!!　アァアアァ!!　許さん!!　許さんんん!!　鱗滝め!!　鱗滝め!!　鱗滝めぇえええ!!」
あ、これくるな……と妙に察してしまいながらも、私は手鬼を見つめていた。
思った通り、手鬼はその場で発狂しては、自身の腕を掻き毟り、恨み言のように鱗滝さんの名前を連呼する。
「鱗滝さんを知ってんのか、あんた。」

「知ってるさァ!!　俺を捕まえたのは鱗滝だからなァ!!」
まぁ、理由は知ってるけど、なんて思いながらも、手鬼に鱗滝さんを知っているのかと問い掛ければ、手鬼は食いつくように言い返してきた。
「忘れもしない!!　四十七年前!!　アイツがまだ鬼狩りをしていた頃だ!!　江戸時代…慶応の頃だった!!」
殺意と憎しみの匂いが強くなる。
腐ったような匂いと合わさって吐き気がしそうだ。
「嘘だ!!　そんなに長く生きてる鬼はここにはいないはずだ!!　ここには!!　人間を二、三人喰った鬼しか入れてないんだ!!　選別で斬られるのと!!　鬼は共喰いをするから!!　それで…!!」
「でも俺はずっと生き残ってる。藤の花の牢獄で、五十人は喰ったなぁ、ガキ共を。」
未だにここにいる剣士の少年が長い年月、この牢獄の中で生きている鬼はいないと言った。
だけど手鬼は言い返す。
俺は確かに生きていると。
五十人は子供を喰らい、今もなおここにいると。
手鬼の言葉を聞き、私は脳裏に髪を切りそろえていた際に聞いた話を思い浮かべた。

『優緋。覚えておけ。基本的に鬼の強さは人を喰った数だ。』
『人を喰った数……？　つまり、たくさん喰べれば喰べるほど、鬼はその力を強くすると……？』
『そうだ。力は増し、肉体を変化させ、妖しき術を使う者も出てくる。お前ももっと鼻が利くようになれば、鬼が何人喰ったかわかるようになるだろう。』
うん、我ながらなかなかの演技力ではなかろうか？と一瞬頭を過ったアホな考えはすぐに払拭する。
「十二…十三。で、お前で十四だ。」
「あ？　なんの話だよそれ。」
「俺が喰った鱗滝の弟子の数だよ。アイツの弟子はみんな殺してやるって決めてるんだ。」
クスクスと腹立つ笑いを浮かべる手鬼に呆れの眼差しを向ける。
「何？　おたく、私のこと喰う前提で話してんの？　それはちょいとばかし心外なんだけど。」
だってそうだろう。
こいつ、私を殺す前提で話してんだもん。
まだ勝負がわかってないってのに、もうすでに勝った気でいる。

流石にそれはムカついたので、思わず言い返してしまった。
「前提じゃない、決まってるのさ。そうだなァ……。印象に残ってるやつを教えてやろう。そいつらのことを聞けば、お前だってわかるはずさァ。」
考えるように目線を一度上に向ける手鬼。
「おい、あんた走れるか？　走れるならさっさと離脱しな。だが、この牢獄は鬼の巣窟だ。精々油断はしないように。」
その隙を見て、私は自分が蹴り飛ばした少年に近寄り、すぐに離脱するようにと指示を出す。
少年は私の言葉にハッとしては、何度か頷いたあと、この場から走り去る。
「俺の印象に残ってるのは二人だな。あの二人……。一人は珍しい毛色のガキだったな。一番強かった。宍色の髪をしてた。口に傷がある。もう一人は花柄の着物で女のガキだった。小さいし力もなかったがすばしっこかった。」
「……へぇ……随分と特徴的なことで。」
それを確認して手鬼に視線を戻してみれば、奴は自分の中に印象強く残っている二人の少年少女の特徴を口にする。
すでに知っていることだったため、大して驚いたりはしなかった。
「だが、なんでその二人が鱗滝さんの弟子であるってわかったんだ？　私のこともすぐ

にあの人の弟子であると見抜いているようだった。〝また来たな。俺の可愛い狐〟……だったか？　あの言葉は、すでに私がそうであると認識しているような印象だった。」

冷静な切り返しを言葉とともに手鬼に返す。

すると手鬼は、ニタリと気味の悪い笑みを浮かべた。

「目印なんだよ。その狐の面がな。鱗滝が彫った面の木目を俺は覚えてる。アイツがつけてた天狗の面と同じ彫り方。〝厄除の面〟とか言ったか？　それをつけてるせいでみんな喰われた。みんな俺の腹の中だ。鱗滝が殺したようなもんだ。フフッフフフッ!!　これを言った時、女のガキは泣いて怒ってたなァ。フフフッ!!　その後すぐ動きがガタガタになったからな。フフフフフッ!!　手足を引き千切って、それから……」

紡がれた言葉を遮るように、私は一気に複数の腕を打ち潮で斬り落とす。

「!?」

「無駄話ご苦労さん。でかい的は当たりやすいな。」

急に腕を斬り落とされた手鬼は、目を見開いて固まった。

だが、私はそんなの気にすることなく、刀を構え直した。

「鬼狩りが最後まで話を聞くと思った？　話してるうちに攻撃くらい普通にするのに。

ああ、頸をあえて狙わなかったのは、嫌がらせのつもりでとりあえず腕を斬り落とそうとしたからだ。姉弟子たちの死に様を嬉々として話していたのがムカついてね。」

不敵に笑いながら言葉を紡げば、自分が悠々と長話をしすぎたと気づいたらしい手鬼が、すぐに手を生やして攻撃してくる。

〝水の呼吸　漆ノ型　雫波紋突き〟

水の呼吸の中で、最速と言える突きによる迎撃・牽制用の型を放てば、再び手鬼の手はダメージを負う。

すぐに回復するために力を回すため、その隙を見抜けばいくらでも体力を削げる。

〝水の呼吸　玖ノ型　水流飛沫・乱〟

続けて使用したのは玖ノ型。

本来ならば、足場が悪い時に使う技で、縦横無尽に動きながら斬り込む技ではあるが、あえて使用する。

まぁ、なかなか不規則な動きをするからなこれ。

この山みたいに木を利用すれば、かなりの広範囲を攻撃することができる。

「よっと。どう？　嬉々として鱗滝さんの弟子はみんな死ぬって大口叩いていたにもかかわらず、何度も腕を斬り落とされる気持ちは。」

「っ……!!」

……冷静に見えて、結構私は怒っていたりする。

少しでも子供を守れたら、という願いを込めて〝厄除の面〟を彫ってくれた鱗滝さんの気持ちを踏みにじるような言葉を紡いでいた手鬼に対して。

もちろん、この怒りには真菰の侮辱に対する怒りも、今はもう亡き兄弟子たちを馬鹿にしたことに対する怒りも含まれている。

いくら、こいつの過去があんなんだとしても、それだけは絶対に許さない。

「ほら、見せてみなよ、私たち鱗滝さんの弟子を殺したって言う、お前の本気をさ。」

その全てを、私が真正面からぶっ壊してあげるから。

１５．終結、手鬼戦!

あれから手鬼は何度も無数の手による攻撃を仕掛けてきた。
だが、私はそれを片っ端から斬り刻み、全ての攻撃を防ぐ。
そんな中、不意に私は自身の足元から感じ取れる匂いに気づき、すかさずその場で跳躍した。
同時に私が立っていた地面から、複数の手が勢いよく飛び出してきた。
高く飛び上がったことにより、その手に触れることはなかったけど。
一瞬見えた手鬼の表情はどことなく焦りが見えた。
自分は押されたりしない。
すぐに目の前の小娘一匹如き、捻り潰して喰らうことができると、自分の力を信じて疑わなかったのだろう。
だが、手鬼はすぐに切り返してきた。
空中にいる私目掛けて、一本の太い腕をバズーカのように勢いをつけて放ってきた。
躱せないと思ったのだろう。
でも残念。

それ、意外と躱せるんだわ。
そう思いながら、私は空中にいる状態で勢いをつけて頭を振りかぶる。
まぁ、原作で炭治郎がやっていたように、放たれた腕に頭突きを当てて、その軌道を逸らしただけだが、それだけでも十分効果はある。
頭突きの際に少しだけ浮く高さが高くなる。
ああ、頭突きして正解だった。
一番水面切りの威力を発揮できる位置に、入り込むことができた。
すぐに腕をクロスして、水面切りを使用するために体勢を整える。
焦りと驚愕と、まだ大丈夫であるはずだという過信の匂い。
だけど、すぐにその匂いの意識は別に向ける。
〝隙の糸〟を認識するために。

……狭霧山
優緋が手鬼との最後の勝負に出た頃、二つに斬られた岩の側には、未だに錆兎と真菰の姿があった。
「……優緋が強いのは理解してるし、優緋の力を信じてもいるけど、やっぱりちょっと心

配だな。だって、アイツの頸、すごく硬いから。」
しばしの静寂を破るようにして、真菰が小さく呟くように言葉を紡ぐ。
彼女の言葉を聞いた錆兎は、未だに空を見上げている。
だが、先程のように少しの沈黙は作らずに口を開いた。
「確かに、世の中に絶対は存在しない。誰もが認める力を持っていようとも、負けるかもしれないし、勝つかもしれない。信じると、絶対に大丈夫は別物だからな。それだけはハッキリと言える。だが、ここには一つの事実もある。優緋は、誰よりも硬く大きな岩を斬った剣士であるということだけは、変えることができない事実だ。」
紡がれた言葉はどこか穏やかで、力強いものだった。
それを聞いた真菰は、小さく笑みを浮かべる。
「錆兎。優緋のことになると自信満々に言葉を口にするね。」
そして、優緋のことになると、少しだけ性格が変わる錆兎に、揶揄うように指摘する。
その指摘を聞いた錆兎は、顔にしている狐の面を静かに外し、不敵な笑みを浮かべながら、真菰に目を向ける。
「当然だ。優緋は、俺が認め、羨ましいと思った剣士であり……死したあとの俺が、惚れた女なのだから。」

……藤襲山

「さようならだ、手鬼。ここで私が、決着をつけてやる!!」

宣言するように言葉を吐き捨て、私は手鬼の頸目掛けて、自身の日輪刀を振るう。

悲劇をここで終わらせる……その強い決意だけを、刃の全てに乗せて。

〝水の呼吸!!　壱ノ型!!　水面切り!!!!!!〟

月光を反射させながら、一閃の軌跡をその場に描き、私が振りかぶったそれは、目の前の手鬼の頸目掛けて、一直線に放たれる。

「鱗滝!!」

その瞬間、手鬼が紡いだ言葉は、私の師である鱗滝さんの名前だった。

ああ……そういえば、原作でも手鬼は……炭治郎が最後に放った一撃の中に、鱗滝さんの姿を重ねて彼の名前を呼んでいた。

でも、あんたの前にいるのは鱗滝さんじゃない。

竈門(かまど)　優緋(ゆうひ)という名前を持つ、あの人の弟子の一人だ。

地面に手鬼の頸が落下した音が響き、手鬼の巨躯も端から塵となって崩れ始める。

ようやく終わったと思いながら、緊張状態を少しばかり緩める。

背後からは、突き刺さるような視線。

敵意と、怒りと、恨みがましいという攻撃的な視線だ。
「……なぁ、手鬼。最期に一つ質問させてくれ。」
「!!」
「私にはさ、大切な弟妹がいるんだ。誰にも傷つけさせたくない、世界でたった二人の宝物。私は、あの子らのためなら何だってやるつもりで、今回最終選別を受けにきた。で、こっからが質問だ。鬼はみんな、元は人間だと聞いている。だからさ。聞かせてくれ。あんたには、そんな宝物の記憶はあるか？　自分が守りたかったものや、逆に守って欲しかったもの……大切な家族の記憶は、あんたの中にあったか？」
そんな手鬼に対して、私には守りたい家族がいることを告げる。
そして、手鬼の中には、そんな家族の記憶はあったかと静かに問いかけた。

優緋に静かに問いかけられた手鬼の脳裏に、ある一つの記憶が過ぎる。
それは、過去の……まだ、人間だった頃の、自分自身の記憶。
その記憶は静かに巡る。
暗闇の中、泣いている自分。
暗闇が怖いからと、大切な宝物……自身の兄だった存在に助けを求める自分。
どうして、自分は兄を喰らってしまったのかという後悔。

四十七年間で、失われていた人間だった頃の姿を思い出していくたびに、視界がじわりと滲み始める。

「兄……ちゃ……」

無意識のうちに紡いでいた言葉は、暗闇が怖かった自分自身が何度も頼っていた存在を示す言葉。

自分が喰らってしまったことにより、自らの手で亡くしてしまった大切な兄のことだった。

「……そうか。あんたには兄貴がいたんだな。」

手鬼から小さな声音で紡がれた、兄を呼ぶ言葉に、小さな笑みを浮かべる。

手鬼から敵意などの攻撃的な感情を少しでも少なくしようと口にした質問は、なかなか効果があったようだ。

これなら、もう私があの手を握っても、握り潰されることはないだろう。

そう思いながら、私はすでに大半が崩れ去ってしまっている体に近寄り、唯一孤立している大きな手を自身の両手で包むように握りしめる。

すると、私の手の感触に気づいたらしい手鬼の手が、僅かながらに握り返す動作を見せた。

「大丈夫。君の兄貴は、きっと君を迎えにきてくれる。行き着く先は別かもしれない。君の行き着く先は、苦しみばかりかもしれない。でも、そうであっても兄や姉ってのは、下の子を迎えに来るもんだ。だって、大切な家族なんだから。犯した罪は消えないし、その分苦しみは多いだろうけど大丈夫。私は見送ることしかできない。祈ることしかできない。君に対してできることはかなり少ないだろうけど、これだけは言わせてもらうよ。贖罪が終わった先で、再び命を得て、この世のどこかに生まれ落ちた時……記憶は無くなっているだろうけど、君がまた君の兄と巡り合って、幸福な生を送れますように。おやすみ、小さな少年。もう二度と、誰も傷つけたりしてはいけないよ。」

その様子に穏やかに笑いながら、私は静かに祈るように言葉を紡ぐ。

この手が完全に崩れ去るまで、離さないように手を握り締めながら。

〝ありがとう……〟

不意にそんな声が聞こえた気がした。

幼い男の子の声だった。

静かに顔を上げて辺りを見渡す。

と、涙をボロボロと溢しながらも、静かに目を瞑る手鬼の姿があった。

もう、目は覚まさないだろう。

「……少しでも、君が穏やかに過ごせるように、祈っておくよ。」

完全な塵となって消えていった手鬼に対して、静かにそう告げた私は、その場から静かに立ち去る。

この一日だけで手鬼を倒せるとは思わなかった。

まぁ、それならそれで構わない。

残りの期間は、鍛錬を行いながらも、藤襲山の中で過ごすとしようか。

「……錆兎。真菰。鱗滝さんの弟子のみんな。ちゃんとケリはつけたよ。だから、もう安心して、鱗滝さんの側に還って、彼の余生を見守ってあげな。」

そんなことを考えながら、私は報告するように空へと語りかける。

きっと、みんなの元に、この声は届くはずだから。

１６．最終選別、終息。

手鬼を倒して早くも七日が経った。
この間、私はずっと夜は鬼退治をして、日中は水の呼吸とヒノカミ神楽の練度を上げるという生活をしていた。
おかげでヒノカミ神楽を使用しても、感じる疲労は少なくなったし、水の呼吸もそれなりに威力を出すようになった。
まぁ、だからといって痣が発現したわけでもなければ、疲れなくなったわけでもない。
前に比べたら多少はマシなだけであって、完全に物にできたわけじゃない。
やっぱり時間がかかるな……なんて軽く落胆しながらも、私は藤襲山の中腹にまで戻ってきた。
そこにはすでに、善逸、カナヲ、玄弥の三人が集まっていた。
（……念のために忠告していたけど、やっぱり、あの少年剣士はアウトだったか。）
私を含めて集まっているのは四人。
忠告は結局意味をなすことはなく、かばった剣士は離脱した。
もしかしたら、なんて考えたりもしていたけど、どうやら甘かったようだ。

（余計に心配になってきたな……。多少のズレは生じていても、結局命を落とす奴は命を落として消えている。）

このままじゃ、せめて柱やお館様くらいは救済したいという私の望みを遂行できないかもしれない。

どうやれば大きく覆せるんだ？

やっぱり、早い段階で私が痣を発現しなきゃいけないのか……？

（……だとしたら、水の呼吸の練度上げはほどほどにして、ヒノカミ神楽の練度を中心的に上げないと……。でも、水の呼吸の練度上げも怠るわけにはいかないわけで。）

ああ……頭が痛くなる。

やっぱり私に確かな才覚は存在していない。

多少なりとも原作の知識があるからこそ、今こうして過ごせているだけであって、すぐに何もかもものにできるほど器用なことができない。

思わず舌打ちをしたくなる。

なんとしても、無限列車直後に発生する猗窩座ＶＳ煉獄杏寿郎が発生する前に、技術をつけなければならないっていうのに、こんな亀の歩みじゃ間に合わないじゃないか。

「お帰りなさいませ。」

「おめでとうございます。ご無事で何よりです。」

軽くイライラしながら考え込んでいると、幼い声が辺りに響く。
目線を上げれば、産屋敷輝利哉と産屋敷かなたの姿があった。
その姿を視界に入れた私は、静かにその場で深呼吸をする。
少しでも芽生えたイライラを抑えるために。
だって、イラついたまま話を聞いていても、内容は頭に入らないからな。
そりゃあね……私は原作知識を持ち合わせているし、何度もこのシーンは読み返していたから内容はわかるけど、もし、違うことを告げられたとしたら？　もちろん、物語の流れ的にそれはないだろうと言う確信はあるけど、万が一ということもある。
まぁ、常識的にもおかしいしな。
大切な話をイライラしながら聞いているってのも。
「死ぬわ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ。ここで生き残っても結局死ぬわ俺。」
「……。」
……善逸がすっげぇうるさい。
こいつがネガティブなのは知ってるけど、直ぐ近くでぶつぶつ文句垂れてるのは流石にイラっとするわ。
話しかけないように我慢するけどさ……。
「で？　俺はこれからどうすりゃいい。刀は？」

「……。」

そんで玄弥はやっぱり好戦的すぎる。

私以上にイラついているように見えるんだけど気のせいか？

「まずは隊服を支給させていただきます。体の寸法を測り、その後は階級を刻ませていただきます。」

「階級は十段階ございます。甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸……今現在の皆様は、一番下の癸でございます。」

なんて考えていると、輝利哉とかなたの二人は、刀より先に隊服の支給、および階級の刻印を行うことを口にする。

玄弥のイライラゲージが上がったのか、イライラしてる匂いが強くなった。

「刀は？」

そのイライラをぶつけるように、再び刀に関しての質問を口にした玄弥。

「本日中に玉鋼を選んでいただき、刀が出来上がるまで十日から十五日となります。」

「……チッ」

そんな玄弥の苛立ちなど気にする様子を見せることなく、かなたが刀は少し先になることを口にする。

玄弥は舌打ちをして黙り込んだ。

イライラゲージは未だに上昇中の様子。
「さらに、今からは鏃鴉をつけさせていただきます。」
かなたが二回ほど手を鳴らすと、どこからともなく鴉の鳴き声が辺りに響き渡る。
上空を見上げれば、三羽の鴉と一羽の雀がこちらに向かっていた。
（うるさい奴来ちゃったなぁ……）
苦笑いをしたくなったのは仕方がない。
だってこいつが賑やかなのは、漫画やアニメでよく知っている。
炭治郎にしていたように、私も思い切り突かれてしまうんだろうか……。
そんなことされたら炭治郎たちが絶対怒ると思うんだけど……。
「え？　鴉？　これ、雀じゃね？」
「チュンチュン！」
……うん、不意打ちでそれ言うのやめろ善逸。
危うく吹きかけたじゃないか。
「ギャアッ!!」
「!!」
なんて考えていたら、短い鴉の悲鳴が一瞬聞こえてきた。
直ぐに顔を上げてみると、玄弥が鴉を殴り飛ばしている姿が。

「どうでもいいんだよ鴉なんて!!」

苛立ちを隠す様子もなく、かなたにズンズンと歩み寄る玄弥。

私はすかさずかなたと玄弥の間に体を滑り込ませ、片手を軽く前に出す。

「!?」

「え、あの子いつの間に!?」

手のひらで玄弥の拳を受け止めると、玄弥は驚いたように目を丸くする。

善逸の驚いている声も聞こえてきたが、今はそんなのどうでもいい。

「おっと。流石にそれはないと思うぞ少年。……っつっても、年が数年上程度の奴に少年呼ばわりされんのもあまりいい気分はしないか。」

いつもの調子で言葉を紡ぎながらも、私は受け止めた玄弥の拳を強く握りしめる。

この手の骨を折ることができるほどの力はないが、十分な痛みは走るはず……。

「っ!!!」

ああ、ビンゴだった。

玄弥が表情を一瞬痛みに歪める。

その様子に小さく笑みを浮かべた私は、そのまま玄弥の腕を捻り上げた。

もちろん、関節を外してしまうほど強くはひねってないけどな。

「い〝っっっっっ!!!?

痛いことには変わらないが……。

「うわわわっ……い、痛そう……っ」

……善逸うるせぇ。

「女子供を殴ろうとするのは見過ごせないな？　どんな教育を受けて今まで育ってきたんだよ、あんた。ていうか、鬼狩りってのは、人を守るための組織なのに、鬼狩りになろうとしてる奴が女の子を殴るとかあり得ない行動だと思わないか？」

「いってぇ!!」

「ああ痛いだろうな。だが、これくらいしなきゃ頭が冷えないだろ？　……この女の子の話、聞いていたよな。刀は今日玉鋼を選んで十日から十五日くらいで来るって。なんたって刀は、鬼狩りの生命線に直結する。早い段階でできた刀をもらったとしても、頸が硬い鬼相手には諸刃の剣にしかならない。」

善逸の声にうるさいと思いながらも、捻り上げていた玄弥の手をパッと離してやれば、彼は痛みに表情を歪めながら、私が掴んでいた腕を庇うように片手を添える。

「何を焦ってるのか知らないが、焦りに任せて突っ走れば、間違いなく早死にするぞ。もう少し冷静な判断をしろ。死んだらそこまで、やるべきことやなすべきことを済ませることができないまま、あの世に直行する気か？」

そんな玄弥に対して、私は語りかけるように言葉を紡ぐ。

こんなこと、原作を知ってるからこそ出てきた言葉だが、まぁ、私が師匠に教えてもらったんだろうと判断はしてもらえるはず。

嘘も別に言ってないから、善逸の聴覚にも引っかからないはず。

「……。」

「多少は落ち着いたか？」

「……ああ。少し焦りすぎた。」

「それならよし。ほら、彼女に言うことあるんじゃないか？　未遂とはいえ、相当なことをやらかそうとしていたよな？」

「……悪かったよ、八つ当たりしようとして。」

「いいえ、大丈夫です。見ての通り、怪我はありませんから。」

（す……すごい……!!　あの子、一瞬でこの場を収めちゃったよ……!!）

善逸から気になる視線を向けられているような気がしてならないが、まぁ、気にする必要はないと判断しよう。

それより今は、話を進めなくてはならない。

「少しばかり賑やかにしすぎた。話の途中なのに、悪かったね。続きを頼めるかい？」

「はい、お話が終わったのであれば、こちらの話を進めさせていただきます。」

空気を悪くしてしまったことを輝利哉に謝りながら、話の続きを促せば、輝利哉は小

さく頷いたあと、その場から少しだけ横にずれる。
彼の背後には、複数の玉鋼が置かれていた。
「では、あちらから刀を作る玉鋼を選んでくださいませ。鬼を滅殺し、己の身を守る刀の鋼は、御自身で選ぶのです。」
静かに紡がれた言葉に従うように、私は……いや、私たちは、玉鋼がある台の元まで足を運ぶ。
最後まで善逸はぶつくさと文句を言っていたけど、私は気にすることなく、自身の直感のままに玉鋼を選ぶのだった。

……某所某屋敷
綺麗に整えられた日本庭園を眺めることができる縁側に、一人の青年が座っている。
彼の手元には一羽の鴉。
藤襲山で優緋たちの側につくことになった鴉とは違い、首元には布を巻いている。
「そうか。五人も生き残ったのかい。　優秀だね。また、私の剣士（子供たち）が増えた……。どんな剣士になるのかな。」

鴉を手に乗せ、穏やかな声で撫でる青年は、口元に柔らかい笑みを浮かべた。
新たな剣士の子供たちの誕生を祝うように。

ひとときの日常を兄（姉）弟子と共に
１７．優緋、帰宅。目覚めの鬼弟妹。

玉鋼を選び、そのまま解散となった最終選別最終日。
私は、帰路につきながら背中を伸ばす。
なんとか無傷のままでクリアできたはいいけど、少しばかり疲れてしまった。
「ふぅ……なんとか第一関門は突破したな……。次の関門は、沼鬼か。で、そのあとは鬼舞辻との邂逅と、珠世さんたちとの接触。そんで矢琶羽、朱紗丸コンビで……」
無限列車での戦いが始まるまでの流れを整理しながら道を歩み進めていると、いつの間にか狭霧山の麓にまで戻っていた。
考え込んでいたから気づかなかったけど、空もすでに夕暮れだ。
あ、と見慣れた場所を見るために顔を上げる。
と、同時に鱗滝さんのご自宅の戸が思い切り吹っ飛んだ。
そこから出てきたのは、慌てている様子の炭治郎と、炭治郎を落ち着かせようとしている様子の禰豆子の姿。
「ああ、こらこら。居候させてもらってる人の家の戸を壊すんじゃない。行儀がなって

ないぞ炭治郎。」

その姿を見て、炭治郎があの戸を破壊したことに気づいた私は、呆れたように声をかける。

すると、炭治郎と禰豆子の二人は私に気づくなり同時に走り寄ってきた。

「あ、嫌な予感……。」

勢いからして今から起こるであろう出来事に引きつった笑みを浮かべる。

その間も二人は走っており、真っ直ぐと私の方へと向かっていた。

「はは……まぁ、そうなるよな……。」

溜息を吐きながら苦笑いをする。

その瞬間、私の体はバランスを崩し、そのまま地面に倒れ込んでしまった。

「いっで!?!!」

「ムー!!!」

「んー!!」

倒れ込んだ私の上には炭治郎と禰豆子の姿。

目を覚ましたら私がいなくなっていたから、パニックを起こしてしまったのかもしれない。

その証拠に炭治郎が泣いている。

禰豆子は泣いてこそいないけど、私のことをギュウッと強く抱きしめてきていた。
「あー……しばらく家を離れていたのが仇になったか……。」
「ムー!!」
「いててて！　ちょ、ペムペム叩くな炭治郎!!　悪かったって二人を置いていって!!　でも最終選別に二人を連れて行くわけにはいかなかったんだよ!!」
「ムー……!!」
「あーはいはい、悪かったよ反省してますって！　せめて書き置きくらいは置いときゃよかったよ……。」
「うー……。」
「心配してくれたんだな。ありがとう。でも大丈夫。見ての通り私は無傷だ。ちゃんと、怪我をすることなく帰ってきたよ。これからはまた一緒に過ごせるから、ほら、泣くなって。お兄ちゃんがそんなんじゃ、妹が心配するよ。」
「ムン！」
「ほら、禰豆子も泣かないでって言ってる。」
「うー……。」
私に抱きついてはぐりぐりと頭を押し付けてくる炭治郎を禰豆子と二人がかりで落ち着かせていると、私たち三人をまとめて包み込む温もりを感じ取る。

顔を上げてみると、そこには鱗滝さんがいた。
よくみると天狗のお面の間から、涙が流れているのが確認できる。
「よく、生きて戻った!!」
「……はい。ちゃんと生きて帰りました。ただいま、鱗滝さん。炭治郎と禰豆子も、ただいま。」
私が生きて帰ってきたことを喜び、安堵の声を口にする鱗滝さんに、穏やかな声音で挨拶をすれば、さらに強く抱きしめられた。
まるで、ちゃんと生きている私のことを確認するかのようなハグ。
父親のようだと感じながらも、炭治郎と禰豆子にも声をかければ、二人も私の存在を確認するように抱きしめてきた。
こんなにいっぱいじゃ、私が抱きしめ返せないじゃないかと少しだけ心の中で文句を言う。
だけど、それとは裏腹に、私が感じているのは穏やかな気持ち。
ああ、ちゃんと帰ってこれたんだ……もし、イレギュラーな存在として私が加わったせいで、最悪な事態を招いたらどうしようって不安だったから、その温もりに安堵する。
なんとかひと段落終わったんだ……そう思うとドッと疲れが押し寄せてきた。
「ごめん、みんな……。ちょっと疲れちゃったみたいだ……。」

その言葉を最後に、私は意識をその場で手放す。

手鬼を倒すことや、自分がやろうとしていることに備えて準備しないといけないこと、私が関わったことで、物語の重要人物が……本来ならば死ぬ必要もない存在が死んでしまったらどうしようと言う不安……それらは意外と、私の体に重くのしかかっていたようだ。

「うー!?」

「んー!!!」

「落ち着け二人とも。お前たちの姉は、少し疲れて眠るだけだ。今はそっと休ませてやろう。」

意識が完全に薄れる前に、私の聴覚が捉えていたのは、急に意識を朦朧とさせて、倒れ込んだ私の姿に驚いて泣きそうになる炭治郎と禰豆子の声と、それを鎮めるために優しく声をかける鱗滝さんの声だった。

鱗滝さんには感謝の気持ちを。

炭治郎と禰豆子には、情けない姿を見せてしまったことへの謝罪を。

それぞれの感情を胸中に抱きながらも、私は一旦眠りにつく。

ああ……目を覚ましたら、錆兎と真菰にも……会いに行かないといけないなぁ……。

18．二人への報告

あの日、意識を失うように眠りに落ちた私は、どうやら半日も眠っていたらしい。
目を覚ましたら、炭治郎と禰豆子がものすごく泣きそうな表情をしていたものだからかなり焦った。
元気になったよって言っても心配そうに見つめてきてはその日の翌日までずっと私について回っていた。
膝枕を要求してきたり、抱きしめてくれとせがんできたり、夜なんか三人一緒に同じ布団で寝る始末だ。
湯あみも一緒だったな。
二人とは幼い頃からよく一緒にしていたから全員抵抗なんてなくてね。
ああ、でも、鱗滝さんは引いていたな。
禰豆子はともかく、炭治郎はまずいのでは?と聞いてきたもん。
確かに、十七歳の姉と十五歳の弟、そして十三歳の妹の三人でいくと、姉と妹はまだ同性だからそこまで気にする必要がないけど、姉と弟や、兄と妹の組み合わせはかなり違和感あるかもな。

でも、私たちはこれが普通だったので、大して気にすることなく入っていた。
鱗滝さんに呆れられたのはいうまでもない……。
結局、炭治郎と禰豆子が私の単独行動を許してくれたのは、最終戦別の翌日から、四日経った頃だった。
……今、私がいるのは狭霧山の中。
自分が刀で斬り裂いた岩がある場所。
最終選別に向かった時、告げておいた約束を果たすために、ここまできていた。
「錆兎。真菰。いるんだろ？」
今日も今日とて霧が深い狭霧山の岩のある場所で静かに言葉を紡いでみれば、霧の中から少年少女の二人組がやってくる。
花柄の着物を身に纏う真菰と、珍しく狐面を頭の横につけて、素顔を晒している錆兎だ。
「あれ。珍しく錆兎がお面を外してる。」
「たまにはこういうのもいいかと思ってな。」
「ふぅん？　なかなか似合ってるじゃん。顔が整ってるから余計にね。」
「そ……そういうことをサラッと口にするな。」
随分と珍しいスタイルの錆兎をお世辞抜きにして褒めると、少しだけ照れたような様

子を見せて、彼は顔を逸らしてしまう。
美少年の照れ顔はなかなかレアだ。
スマホがあったら激写していた。
「私たちのところに、こうしてやってきたってことは……」
「うん。ちょっとした報告をね。……君らの仇はしっかりと討っといたよ。みんなを喰い殺したあのでっかい異形に、ちゃんと引導を渡してきた。だから、これからは安心して、鱗滝さんの余生をしっかりと見守ってあげたらどうかって伝えにきた。」
アホなことを考えていると、真菰が静かに口を開いた。
私がこの場にやってきた意味、それを確認するために。
だから私はちゃんと伝えた。
手鬼にはちゃんと引導を渡しておいたから、もう安心しても大丈夫だと。
真菰が笑顔を見せる。
よかったと私に伝えるかのように。
対する錆兎はというと、照れから復活して私のことを静かに見据えていた。
なんだか物言いたげの様子だが……さて……。
「どうしたんだ錆兎？　さっきから見つめてきて。」
首を傾げながら錆兎に話しかけると、錆兎は視線を私から逸らし

「……お前は、俺たちに対して何も思わないのか？」

静かな声音で質問をしてきた。

一瞬その質問の意図を測りかねる。

しかし、少し頭を回せばすぐに理解できるものだった。

どうやら錆兎は、自分たちは魂だけの存在……つまり、形を持たぬ霊的存在だというのに、私が普通に話しかけている理由がわからないようだ。

まぁ、確かに、幽霊に話しかける人間なんてあまりいないよな。

オカルトマニアとか祈祷師とか、イタコとかならまだわかるけど、私はそんなんじゃないし。

「逆に何を思えと？　確かに錆兎たちは命を落としてしまった存在で、現世（うつしよ）には存在していない、いわゆる虚なる存在……俗に言う幽霊とかって奴かもしれないさ。けどな。私はそんな二人に水の呼吸を教えてもらった人間だ。錆兎と本気の手合わせもしたし、何度も互いの刀をぶつけ合った。真菰とはちょっとした休憩の時に、そこらにあるシロツメクサを摘み取って、互いに互いの頭の大きさにあった花冠を作って、交換する要領で頭に乗せていた。だから、私は幽霊だのなんだのとか考えてない。ちゃんと触れ合って、言葉を交わして、ぶつかり合ったんだ。錆兎と真菰は、もはや私の中じゃ幽霊なんてチンケなものじゃない。ちゃんとした友人と思ってるよ。錆兎のことも、最高の好敵

手だって思ってる。」

「……。」

やはり、錆兎が聞きたかったのはこれのようだ。

素直に返答を返してみれば、彼は一瞬目を丸くしたあと、すぐに穏やかな笑みを浮かべる。

が、その笑みは一瞬でどこかつまらなさそうなものへと変化していた。

「コロコロ表情変わるな。」

「……お前が俺を友人だの好敵手だのときっぱり言ったからだろう。」

「……違うのか？」

「いや、違わない。違わないが複雑だ。」

「???」

えっと……錆兎が私に言いたいことが急にわからなくなった。

違わないのに複雑……とは……？

「なんでわからないんだ。一応片鱗は見せていたはずなんだが？」

「全然気づかれてないねぇ。」

「おい、笑うな真菰。」

……錆兎と真菰がちょっとした言い争いをおっぱじめたけど、私は錆兎の言葉の真意

を見つけるために首を傾げる。
　錆兎が私に言いたいことってなんだ……？
「……最終選別に向かう前、俺が本気でお前を袈裟斬りしようとしていたのは覚えているよな？」
「ああ。覚えてるよ。あれ喰らったら確実に私は死んでたと思う。」
「俺がそれをしようとした理由は覚えてるか？」
「確か……私がいなくなるのが少し惜しいと思ったから……あ……。」
「ようやく気づいたか。」
　錆兎の言葉から一つの仮説を脳裏に描く。
　てっきり私は、好敵手がいなくなるからとか思っていたけど、どうやらそれ以上に厄介な感情だったらしい。
　いや、好かれた代償かって疑問はあながち間違っていなかったけど、その好意のベクトルが違ったようだ。
「つまり、錆兎は私が好きってことか。友人とか好敵手とかそんな甘ったるいもんじゃなくて、もっとこう、ちょっとドロドロとした……いわゆる恋愛感情……って、なんで私はあんたにそんな感情を抱かれたんだよ。なんか惹きつけるようなことしたっけ……？」

これは純粋な疑問だった。

だって私は、錆兎と過ごす間はずっと手合わせという、恋愛のれの字すら存在していないやりとりしかしていなかった。

恋愛感情を抱くようなきっかけ、あまりなかった気がするんだけど。

「最初は俺もそんな感情を生者であるお前に向けるとは思わなかった。本当に、ただの好敵手として、友人として、育てなきゃいけない妹弟子として好いていたんだ。だが、お前が常に鍛錬してる姿や、俺と向き合って手合わせをする際、不敵な笑みを浮かべながらまっすぐと見据えてくる瞳を見ていると、どうしてか惹かれていた。あとは、やっぱりお前は異性なんだと思わざるを得ないことが、共に過ごす年月の中に何度も訪れた。結果、気がついたら俺は、お前に対して、特別な好意を抱くようになっていたんだ。だから俺は、お前を本気で斬ろうとした。お前を斬ってしまえば、ずっと側にいられるんじゃないかって……幽霊的な考えを抱いてしまった。お前が死んだら、別の男にお前を取られるなんてこともなくなっただろうからな。」

「……サラッととんでもないこと言ってきたんだけど?」

「錆兎は八年くらいずっと幽霊みたいなものだったから、考えが過激になっちゃったのかも……?」

「……後半とかもしもを考えた末の嫉妬だったし、幽霊とか魂の嫉妬って怖いんだな。」

「正直俺自身も驚いている。まさか、こんな考えが脳裏をよぎるとは思わなかった。実行しようとするなんてことも予想外だった。」

妙な空気が流れる。

しかし、なぜか私たちの会話は途切れることなく、そのまま繋がっていた。

「優緋。刀が出来上がるまでしばらくは鱗滝さんのところにいるんだろう？　だったら、その間ここに足を運ぶといい。水の呼吸と、お前が持ってるもう一つの呼吸……それらを磨くのには手合わせが一番手っ取り早いはずだ。水の呼吸は、一応、お前よりは練度があると思ってる。だから、強化したほうがいい点を指摘する。もう一つの呼吸については、俺も真菰も詳しくないが、第三者から見たら、疑問に思う点がちらほらと見つかる可能性もある。修行するにはうってつけだと思うぞ。」

そんな中、錆兎が刀ができるまでの期間に鍛錬をするのはどうかと提案してきた。

匂いがないから感情はわからないけど、なんとなくこれは、私の兄弟子である錆兎だとわかった。

剣の特訓は、同じ剣士との手合わせが一番効果的……か。

確かに、それは一理あるかもしれない。

「そうだね。じゃあお言葉に甘えて。変なところや直したほうがいい点、軸のブレとか、そんなのを見つけたら、すぐに指摘してくれるか、錆兎？」

ありがたい提案だと思った私は、それならと錆兎に手合わせの相手を頼む。
彼は小さく頷いたあと、腰に携えていた真剣を取り出した。
「あ、やっぱり真剣でやるのか。」
「そうすれば、なんらかの拍子にお前を手に入れることができるかもしれないからな。」
「……真菰。不安になってきたんだけど?」
「うーん……錆兎って、意外と強引だったみたいだね……。危なくなったら私が止めるよ。でも、もし止めれなかったら……うん……。大丈夫。例え優緋がどんな存在になろうとも、私は友達でいるからね?」
「ちょっとぉ……!?」
せ……選択肢早まったかもしれない……これ……。

１９．目覚めの一日目

錆兎から衝撃的な宣言をされた数日後、私は、彼の提案通りに刀を使った稽古という名の手合わせをしていた。

今、私が全般的に使用しているのはヒノカミ神楽の方。

錆兎が使ってくる水の呼吸に合わせて、ヒノカミ神楽を使用し、彼の技を相殺する、または押し勝つという行動を繰り返す。

……のだが……。

「!!　錆兎、止まって!!」

「!!」

「ハァ……ハァ……チッ……やっぱりまだ……!!」

真菰が錆兎に制止の声をかけ、錆兎がそれに止まったのを確認した私はその場に座り込む。

……真菰が止めてくれなかったら、確実に体力の限界を超えてぶっ倒れていた。

「……前、もう一つの呼吸は体力をかなり消耗すると聞いていたが……。」

「うん……ここまで早いとは思わなかったね……。」

「ああ。確かに、攻撃の威力は水の呼吸と桁違いだった。だが、こうまで体力の減りが激しいとなると、確かに、あまり連発はできないな。」

「だから雑魚鬼相手には……水の呼吸で……強い鬼相手には……このヒノカミ神楽を使おうって考えたんだよ。まぁ、今の私の体力じゃ……短期決戦に持っていかないといけないけどな……。」

ヒノカミ神楽のデメリットを説明して舌打ちを溢す。

狭霧山の空気が多少薄いのも関係あるかもしれないが、そうであっても、ヒノカミ神楽はスタミナを持っていかれる。

水の呼吸なら、まだなんとかなるけど、私の予想では、水の呼吸では十二鬼月相手には敵わないと予想してる。

これは、原作を知っているのもあるが、手鬼を斬った時の感触からの判断も含まれている。

手鬼は、一応斬れないこともなかった、水の呼吸で。

でも、斬り裂いた時、硬いものを斬ったような感触しかしなかった。

岩ほど……ではなかったかもしれないけど、ぶっとい大木を斬ったような、そんな感触だった。

五十人喰った鬼でもこれくらいの硬さがある……それが確認できたことが、多少の気

負いに混ざっていた。
男だったら、こんな不安を感じることはなかったかもしれないけど、私は女としてここに生まれた。
女の筋力は、特異体質でない限り、必ず限界が来るだろう。
男よりずっと少ない数値しかつかないだろう。
だから、ヒノカミ神楽……日の呼吸を身につけなくてはいけない。
いずれ訪れる分岐点……そして、決戦で負けないためにも。
だのに……今の私は、限界が早く訪れてしまう。
こんなんじゃ、救済なんて夢のまた夢だ。
「……少し休憩するか。」
「え？」
頭を悩ませていると、錆兎が急に休憩を入れると言ってきた。
思わず驚いて声を漏らす。
「今の優緋、なんだかとっても苦しそうで、どことなく不安そうに見えるから、一旦は休もう？　悩みがあるなら、私と錆兎が聞くよ？」
「話したくないのなら話さなくてもいい。だが、俺としては……いや、俺たちとしては、少しくらい悩みを聞いてやることくらいはしたいと思っている。」

「解決はできなくても話を聞くことくらいできるから。言葉にするだけでも気分はすっきりすることあると思うよ。だから、話せそうだったら、話してほしいな？」

……どうやら、私の兄弟子と姉弟子には、悩んでいることがバレてしまったようだ。

だから気を使わせてしまった。

でも、それが少しだけありがたく思う。

けど……相談できるような内容じゃない……よな。

すでに命を落としてしまってる二人に、生きてる人を助けたいなんて。

そもそも、鬼狩りが生きてる人らを助けるのは当然のことなのに、それってどうなんだ？

原作キャラ、なんて言葉を使うわけにもいかないし。

「……ありがとう。お言葉に甘えて休ませてもらうよ。でも、何に悩んでるのかは、ちょっと話せないな。」

「そうか……。」

「優緋がそっちを選ぶなら、私も錆兎もしつこく聞かないよ。でも、辛いと思ったらいつでも頼ってね？　私と錆兎は、確かに死んじゃってるけど、優緋のお友達だから。」

「……。」

「錆兎。不満そうな顔しないでよ……。」

「ふはっ!!　わかりやすいくらいに表情をしかめてるな。」
不満そうな顔を見せる錆兎を見て、思わず笑い声をあげる。
それに釣られたのか、真菰も小さく笑い始めた。
「ってうわ!?　休憩じゃないのか!?　なんで斬りかかってきたんだよ!?」
「なんか腹が立った。」
が、それがムカついたらしい錆兎が斬りかかってこられて、笑い声は途切れてしまう。
不満最高潮の表情をしている錆兎はかなり怖かった。

20．目覚めの二日目

今日は水の呼吸を主に使った手合わせをする。
まぁ、午後からはヒノカミ神楽を含めた鍛錬に切り替わるけど、午前中のうちは、水の呼吸に専念してみようと昨日錆兎に言われたため、私はそれに従った。
「型は悪くない。が、少しだけ踏み込みが甘い。」
「うわ!?　とと、危な。転ぶとこだった。」
「踏み込みが甘いからこっちに押されるんだ。女だからこそ、男以上に踏み込みや体全体へと力を回さなければすぐに押し返されるぞ。」
「体全体を使えって?」
「ああ。そうすれば、鬼相手にも多少は有利に立ち回れるはずだ。」
「優緋は、私みたいに小柄じゃない……どっちかっていうと、かなり長身の女の子だから、素早く動いて相手を撹乱するより、体全体をうまく使って、足の踏み込みなんかも強くすれば、きっと、多少の強い鬼相手にも水の呼吸で立ち回れると思うな。」
「……なるほどな。」
この手合わせで多少なりともわかったこと。

それは、錆兎と真菰の教え方のうまさだ。
最初、水の呼吸を身につけるまでの錆兎の教え方は鱗滝さんスタイルの目で見て盗め、どうしたらいいかは自分で考えろって感じだったけど、強化に関しては結構的確な指摘を口にしてくる。
真菰も真菰で、最初はちょっと大雑把にヒントを口にする形だったけど、今では的確に指摘をしてくれる。
「こうかな。」
「少しだけ衝撃は強くなったが、まだまだだな。」
「でしょうね。全然よろめいてないもんな、錆兎。」
「錆兎の体勢を崩せるくらいになったら、もっともっと水の呼吸は強くなるね。」
「ああ。期間までできるかはわからないけど、とりあえずやれるだけやってみるか。」
「その意気だ。まぁ、俺も簡単によろめいたりはしないがな。」
「わかってるよ、それくらい。」
たまにちょっとだけ会話を織り交ぜながら、狭霧山に刃がぶつかり合う音を響かせる。
……そういえば、結局錆兎と錆兎の刀が実体持ってる理由ってなんなんだろ？
原作では岩が斬れるまで錆兎と炭治郎は打ち合っていたし、ボコスカ殴られていたけ

ど……。

岩が関係あんのかな？って思ったりしていたけど、なんか違うっぽい？

だって、錆兎の背後にある岩……私が真っ二つにした岩はそのまま真っ二つだし……。

「手合わせ中によそ見とはいい度胸だな。」

「あ……ってうわぁ!?」

なんて考え事をしていたら、錆兎の刃がギリギリを掠めた。

咄嗟に回避してなかったら明らかに死んでた!!

「もう……よそ見しちゃだめだよ……。錆兎、ちょくちょく狙ってるんだよ……？」

狙ってるって何を!?

あ、私の命か!!

「勘弁してくれよ……。」

「死人に好かれたのが悪い。」

「もはや祟り神じゃんか。」

「あはは……。」

真菰、苦笑いしないでくれ。

泣きたくなってくるから。

……夕方。

一旦昼食を鱗滝さんの自宅で食べて、鍛錬中は留守番してもらっている炭治郎と禰豆子と軽く遊んで、再び狭霧山の岩のある場所へと出向いた私は、再び錆兎と剣を交える。

今度は水の呼吸ではなくヒノカミ神楽の方での鍛錬。

水の呼吸を磨いている錆兎に対して、なんとかそれで応戦する。

「相変わらず、そっちの方は威力が高いな。」

「まぁね。結構体力を持っていかれてる分、威力は申し分ないと思う。」

「体力が持っていかれる理由……なんとなくだけどわかっていたりする？」

「ああ。多分、呼吸が上手く使えていないのと、無駄な動きがそこかしこに含まれてるんだろうさ。だって、父さんはこれを使ってもなんともなかったんだから。」

水の呼吸による鍛錬と同じように、錆兎と真菰の二人とわずかな会話を交えながら、私はヒノカミ神楽を使用する。

……無惨を倒す際、ヒノカミ神楽……日の呼吸を使っていた緑壱さんは、日の呼吸に含まれている全ての型を無駄な動き一つなく繋げたことで、彼を瀕死にまで追い込んだ。

漫画でしか記されていなかったから、実際、どれだけ綺麗な動きで繋げていたのかわ

からない。
だから、どこに無駄があるのか、手探りで探す必要がある。
それができなければ、この物語を終わらせることができない。
……よくよく考えると随分と厄介な立場だな、これ。
炭治郎が紡いだ物語を、どうやって私が終わらせたらいいのやら。
思わずため息が出る。
知識があっても所詮はこの程度、私は炭治郎にはなれない。
でも、炭治郎になれないとしても、なんとか物語を終結に導かなければならない。
「また考え事か？」
「あ……悪い。まぁ、それだけ私にもいろいろと悩んでんのさ。どうやったらこっちを好いてきてる幽霊を諦めさせることができるのかとかね？」
「おい。」
錆兎からジト目で睨まれる。
なんだろう、目は口ほどに物を言うってことか？
絶対諦める気はないからな、って言葉が聞こえてきた。
「そんなことより……」
「そんなことで済ませるな。」

「……やっぱり、もう一つの呼吸を使ってる私の無駄なところは、わからない感じか？」
「……そう……だな。」
「うん……。ごめんね。やっぱり初めて見る呼吸だから、どこが変なのか……。」
「気づいたことは？」
「……なんとなくではあるが、一部動きが滑らかじゃないところがあるような気はする。」
「あ、それは私も思ったかも。」
「……なるほどな。」
錆兎に対するからかいをさらっと切り上げつつも、錆兎と真菰に私の動きの無駄について問うてみる。
が、やっぱり二人ともわからないようで、溜め息を吐いてしまった。
まぁ、水の呼吸しか見たことないもんな、この二人は。
だから日の呼吸なんてものの無駄な動きとかはわからない。
けど、気になることは言われた。
発言からして、どうやらスムーズに動いてない部分があったようだ。
「一旦鍛錬じゃなくて、型だけをやってみるよ。実はこれ、家に伝わっていた奴で、〝ヒノカミ神楽〟って言われていたんだ。家は代々火の仕事をしてるから、怪我や災いが起

きないように、年の初めは〝ヒノカミ様〟って神様に舞を捧げてお祈りをする風習が根付いていてね。」

少しだけ目を閉じると、どうしてかこの体は、この体に刻まれている記憶を見せてくれる。

走馬灯として、炭治郎が見ていた記憶、そのカケラの全てを。

私が今見たのは、小さい私と炭治郎が二人して父さんである炭十郎の真似をして、木の枝を持ってヒノカミ神楽を舞っている姿。

近くでは小さな禰豆子がヒノカミ神楽に使われている太鼓の音を、でんでん太鼓を鳴らしながら真似ている。

私たちの視線の先には父親の姿。

病弱なために痩せこけた顔をしていたけれど、常に穏やかに笑う、私たちの大黒柱。

『優緋。炭治郎。呼吸だ。息を整えてヒノカミ様になりきるんだ。』

そこまで見て記憶は別のものへと移行する。

それは、まだ生まれたばかりの炭治郎が、母さんにおんぶされていた頃……寒い雪の降る夜の記憶。

『優緋。ほら、お父さんの神楽よ。うちは火の仕事をするから、怪我や災いが起きないよ

うに、年の始めは〝ヒノカミ様〟に舞を捧げてお祈りするのよ。』
母さんに説明をされながら、私はずっと父さんを見つめていた。
太鼓の音と鈴の音が響く中、七支刀と思われる小さな祭具を手に持って、舞い続けるその姿を。
『父さんは、体が弱いのにどうしてあんな雪の中で長い舞を舞えるの？　肺が凍っちゃいそうなくらい寒いのに。』
『息の仕方があるんだよ。どれだけ動いても疲れない息の仕方。正しい呼吸ができるようになれば、優緋も炭治郎もずっと舞えるようになるよ。寒さなんて平気になる。……優緋。この神楽と耳飾りだけは必ず途切れさせず継承して欲しい。約束なんだ。でも、優緋は女の子だからね。ひょっとしたら、いずれは誰か、素敵な人と結ばれて、この家を出ることになるかもしれない。だから、炭治郎にもこれは伝えておく。だけど、もし、優緋がこの家を継ぐことになった時は、必ず伝えてくれるか？』
最後に見たのは、神楽と耳飾りだけは子孫に継がせて欲しいという父さんのお願いと、重要キーワードとなる言葉。
そして、変わらない彼の穏やかな笑みだった。
「……だから神楽として舞う姿を二人に見てもらったら、変な点が見つかるかもしれな

い。無駄な動きがどこにあるかまではわからないかもしれないけど、どこに違和感があるかとか、滑らかになってない部分があるかとかはわかるかもしれない。」

自分と父さんのどこに差異があるのか、それを確かめるために意図的に炭治郎の走馬灯と同じ記憶を見たが、遠巻きに見ていただけの私では、その違いが少しわからなかった。

だから、錆兎と真菰にこの呼吸を神楽として舞う間、二人に見てもらって、どこがおかしいか、滑らかじゃないかを指摘して貰えばいいかもしれないと思い、二人に観客を頼む。

「それなら確かに、多少は何かわかるかもな。」

「わかったよ、優緋。優緋の神楽、楽しみだなぁ。」

二人は快くそれを承諾してくれた。

私は小さく笑みを浮かべる。

ありがとう、短い感謝の言葉も紡いで。

２１．三日目は神楽

錆兎と真菰と話した結果、今日この日はヒノカミ神楽に重点を置くことになった。
朝起きて朝食を食べて、炭治郎と禰豆子を鱗滝さんに預けた私は、錆兎たちの元へと向かう。
「おはよう、錆兎、真菰。」
「ああ。」
「うん。おはよう、優緋。」
いつもの場所に足を運べば、すでに錆兎と真菰の二人がその場にスタンバイしていた。
二人に挨拶をした私は、すぐに一定の距離を二人から取り、持ってきていた刀を鞘から引き抜く。
「じゃあ、今から始めるよ。ヒノカミ神楽……年初めに夜明けまでずっと舞い続ける神楽……。数時間ずっと舞い続けるから、しっかりと見て、違和感があるところや、気になった点、滑らかじゃなかった場所……それらを教えてほしい。」
「ん、わかった。」

「いつでも始めていいぞ。」

二人の声を合図に、私は深く深呼吸をする。

そして、ヒノカミ神楽……日の呼吸特有の強風のような音を発生させる呼吸を使いながら、刀を持って舞い始める。

円舞、碧羅の天、烈日紅鏡、灼骨炎陽、陽華突、日暈の龍・頭舞い、斜陽転身、輝輝恩光、火車、幻日虹、炎舞……十二の型を繋げることで円環を成し、繰り返し繰り出す始まりの呼吸。

前に比べたら体力の消費は抑えることができるようにはなっている……けど、緑壱さんには遠く及ばないそれにはきっと、多くの無駄が存在している。

錆兎と真菰が、どこをどうしたらいいかわかるかはわからない。

炭治郎も、完成された型を一度見たことにより、それに追いつけるようになったのだから、当然なのだろう。

でも、外側の意見があるのとないのとでは、練度の上がり方は変わってくると思う。

そう思いながら、何度も何度も私は繰り返す。

体力の限界……それが訪れるまで。

「っ……!!」

……しばらくして、私の手から刀が離れた。

ガシャンという音をあまりに響かせ、それは地面に落下し、私は累積された疲労に従うように地面に膝をついた。
「大丈夫？」
真菰が慌てて駆け寄ってくる。
私は小さく頷きながらも、なんとかその場で立ち上がる。
「何か……気づいたことや、気になった点はあったか？」
そして、すぐに先程の舞の中で気になったことはあったか二人に問いかけた。
「……錆兎。」
「ああ。」
私の質問を聞いた錆兎と真菰は、少しだけ思案したあと静かに口を開く。
曰く、一部の動きの中に大きく動きすぎている場所に気がついたとのことだ。
私の体格にしてはかなり大きすぎて、そこで体力を持っていかれたのではないかと二人は口にした。
それは参考にしなくては……体力を回復するついでに、私は具体的な内容を聞くのだった。

……少しの休息を終え、再びヒノカミ神楽を舞う。

二人に指摘された場所を気をつけてみると、驚くほどに体力の消費が少なくなっていた。
「……二人の指摘通りだったな。」
「よかった。」
「ヒノカミ神楽はよくわからないが、少しでも参考になったなら安心した。」
「また変な点があったり、おかしいと思ったり、私の体格に合ってないような場所を見つけたら教えてくれるか？」
「もちろん。」
「ああ。それくらいなら構わない。」
うん。
やっぱり第三者に見てもらうのが一番練度上げになる。
そう思いながら、私は繰り返し繰り返し、ヒノカミ神楽を舞い続けた。

……そうすること数時間。
いつの間にか夕暮れとなっていた。
錆兎と真菰の二人には何度も違和感や無駄な部分を指摘された。
日の呼吸をよく知らない第三者から見ても、無理しているように感じると言われた場

所を無理してると言われなくなるまで調節し、足運びにも気をつける。
　すると、驚くほどに体力の減りが少なくなった。
「見ているうちに、優緋がどの型を苦手としているのかわかってきたな。」
「うん。ずっと見ていると、いくつか無理をして出してるように見えた。」
「マジか……。」
　少なくなったとは言え、疲れるものは疲れる、と思いながら座り込んでいると、二人からハッキリと苦手な型が複数見つかったという指摘を受けてしまった。
　もちろん、苦手な型があるのは気づいていた。
　けど、ほんの二個程度かと思っていたんだが、二人の発言からすると、それ以上あるのかもしれない。
「お前が苦手にしてる型……それを教えるから、明日はそれを重点的に練習してみたらどうだ？」
「苦手な型を繰り返し繰り返しやっていけば、体力の減り加減も抑えることができると思うし、練度も上げることができるから、私もその方法を勧めるよ。」
「……ああ。ありがとう、錆兎。真菰。そうさせてもらうよ。」
　三人で穏やかに笑いあいながら、少しの会話を行い、今日のところは一旦解散する。
　……刀が届く日まで、あと八日。

22．時は過ぎて鍛錬六日目

狭霧山の鍛錬も佳境に入る。

錆兎と真菰のアドバイスにより、自分の苦手な型がわかった私は、四日目、五日目とその苦手な型の練習に比重を置き、何度も繰り返してつかっていた。

二人の指摘通り、どこでどのように体力を持っていかれていたのかを理解することができたため、何度も調節して体力の減りを少なくすると、どうしてあんなに疲れていたのかと言いたくなるくらい楽になった。

もちろん、無消費ではない。

少しの消費は発生する。

でも、結局は微々たるものだった。

だから、成果が出てきた五日目の午後は、克服した苦手な部分も併せて、三日目のようにヒノカミ神楽を舞い続けた。

結果は上々。

三日目に比べると明らかに疲れ知らずとなっていた。

「二人のおかげで改善できたよ、ありがとう。」

朝、錆兎と真菰の元に向かった私は、二人に感謝の言葉を述べる。
ここまでできるようになったのは二人のおかげだから。
「どういたしまして。」
「ああ。」
私が感謝を述べると、真菰は笑顔で、錆兎は何かを企んでるような顔で、こちらの感謝に対する言葉を紡ぐ。
「……何を企んでるんだ、錆兎？」
「バレたか。」
「それなりに付き合いは長くなったからな。」
錆兎に企みについて言及すると、彼は刀を取り出しては私と向き直る。
「刀はまだ届かないのだろう？　それなら、届くまで最後の手合わせに誘うつもりだったんだ。」
「最後の手合わせ……ねぇ……。」
「ここ最近はずっとヒノカミ神楽の練習ばかりだったからな。今日は水の呼吸だけを使っての手合わせをして、なまってないかを確かめる。明日はお前がヒノカミ神楽、俺が水の呼吸全てを使っての違う呼吸同士の手合わせだ。一部の型にかまけて、他の型の威力が落ていたら意味がないからな。だから、しっかりと威力を維持することができて

いるか……水の呼吸の精度が落ちていないか……残りの日をいっぱいに使って確認する。」

「……一理あるね。わかったよ、錆兎。その話を受ける。」

企みの答えがわかった私は、すぐにそれに応じるように刀を手に取る。

「じゃあ、始めますか。」

「ああ。どっちかが刀を手放したら負けだからな。」

「何戦する?」

「そうだな……日が暮れるまで何回でもするか。」

「おっと……なかなか骨が折れそうだな。」

「安心しろ。連続でしたりはしない。一戦終えるごとに休憩を挟んだりするさ。真菰。勝敗の数はお前が数えてくれ。」

「うん。わかった。」

そこら辺にある木の棒を取ってきた真菰が、自身の足元の地面に私の名前と錆兎の名前を記す。

そして、穏やかに笑いながら顔を上げ

「それじゃあいくよ。始め!」

手合わせ開始の号令をかけた。

私と錆兎はそれを聞くなり同時に地面を蹴り上げる。
そして手にしている真剣を煌めかせながら互いに互いへと振りかぶった。

……昼時になれば、もちろん私は一旦鱗滝さんの元へと帰宅した。
だって、腹が減っては戦はできぬって言うしな。
しっかりと食事をして、少しだけ休憩する間、鍛錬の間は構うことができない炭治郎と禰豆子の相手を行い、二人が眠り始めたら再び狭霧山に向かえば、錆兎との休憩を挟みながらの手合わせが再開する。
そうすること数時間。
空は茜色に染まり、すっかりと夕暮れ時となってしまった。
「そこまで！　もうすぐ日が暮れちゃうよ。」
「……早いな。」
「錆兎との手合わせ、意外と楽しかったから時間忘れてたよ。」
それを見計らったように、真菰が私と錆兎に終了の号令をかけてきた。
私と錆兎は、その言葉を聞くと同時に、手合わせをやめて刀を鞘に収める。
「結果はどうだった？」
「えーっと……行っていた手合わせの回数は十五回。勝敗は錆兎が九勝六敗。優緋が六

勝九敗で、水の呼吸だけの手合わせは、錆兎の勝ち。」
「……なるほどな……やっぱり水の呼吸じゃ、兄弟子にボロ負けってか。」
「それでも六勝してるから、十分な結果じゃないか？　優緋はあまり水の呼吸に適性してないみたいだしな。」
「まぁ……確かにまぁまぁではあるかもな。」
真菰にカウントしてもらった勝敗を聞くと、やはり錆兎の方が実力は上だった。
まぁ、水の呼吸に適性を持ち合わせている彼と、水の呼吸よりは日の呼吸……ヒノカミ神楽に適性を持ち合わせている私では、当然の結果だと思う。
「これくらいできるなら、ある程度の雑魚鬼であれば、水の呼吸だけで何とかなるかもな。強い鬼になったらわからないけど。」
「ある程度は粘れると思うけど……。」
「いや、優緋の水の呼吸は、場合によっては心許ない。優緋自身の評価である、ある程度強い鬼相手に振るったら、押し負けてしまう可能性は当たっているぞ。」
私が振るう水の呼吸を評価する錆兎に、やっぱりか、肩を竦める。
注意されたように、足の踏み込みや力の加え方を気をつけても、結局は錆兎に押し返されていたから、納得できるのだ。
「うーん……筋はいいと思ったんだけどな。」

「……それも否定はできない。だが、どちらかと言えば優緋の認識が正しい。小手調べ程度に使うことは問題ないかもしれないが、頸を斬るにまで至れるかと言えば、絶対と言う保証はできないな。」

「だよな。私もそう思う。二人を喰い殺した手鬼相手にも結構硬いと感じてしまったくらいだし、多分、手鬼以上の力を持ち合わせている相手を圧倒することはできない。それに、私は弟と妹を悲しませたくないから、なるべく無傷でいなきゃいけない。だから、水の呼吸に頼りっぱなしはできないな……。」

「そっかぁ……。」

今回の水の呼吸での手合わせを終えて、自分が使う水の呼吸に関しての評価を三人で話し合う。

結果、私と錆兎の意見が噛み合い、水の呼吸は適性がない分、少々心許ないということになった。

使えなくもないが、ある程度強力な鬼となると、小手調べと場つなぎ程度に使う方がいい。

うん。

これで決まりだな。

「じゃあ、私はそろそろ鱗滝さんの元に帰るよ。明日は、ヒノカミ神楽の方を使って錆兎

を負かすから、そのつもりで。」
「じゃあ、俺はそれを真正面から受けて優緋を負かす。覚悟してろよ。」
水の呼吸を使うべき場所はどこか決めた私は、錆兎に明日は負かすと宣言する。
錆兎はそれなら真正面から受けて返り討ちにすると宣言して笑った。
真菰からちょっと呆れたような目を向けられた気もするけど、私は気にすることなく二人に背を向ける。
「また明日。錆兎。真菰。」
「ああ。またな、優緋。」
「うん、またね、優緋。」
短い挨拶の言葉を交わして、私たちは解散する。
さて……帰ったら夕飯と……炭治郎と禰豆子の相手だな。

２３．最終日の手合わせ

翌日。
手合わせを行う最終日。
しっかりと休息も取り、朝食もしっかり食べた。
体調は良好。
万全な状態で錆兎と最後の手合わせができる。
「よ。」
「おはよう、優緋。」
「待ってたぞ。」
もうすっかりと行き慣れてしまった岩のある広場。
そこに足を運んでみれば、真菰と錆兎の二人はすでにそこにいた。
いや……まぁ、二人はずっとここに根付いてる魂みたいなもんだもんな。
私より早いのは当然か。
てことは、このしめ縄がついていた岩は、神岩とか、魂が宿る霊石みたいなもんだったのかも……？

まぁ、別に何でもいいか。
……いやよくないな。
下手したら怨霊化しないそれ？
……あ、でも錆兎と真菰は怨霊じゃないな。
……錆兎が若干こっちを自分と同じ存在にしようとしてくることがあるけど。
うーん……結局何だったんだろうな、この岩……。
「そんじゃま、始めますか。」
「ああ。」
自分が斬った岩の正体とは……？なんて考えながらも、私は静かに刀を構える。
すると錆兎も真剣を静かに構えた。
それを確認した私は、一度目を閉じて精神を統一する。
この数日で痣が出ないかと思ったりもしたけど、結局は出なかったな……。
でも、ヒノカミ神楽を使いこなす一歩手前にまでは足を踏み入れることができた。
今はそれだけでも十分だ。
痣の発現は、のちに全集中・常中の訓練をこっそり行いながら待つとしよう。
多少集中力を上げ、静かに目を開ける。
ヒノカミ神楽……どこまで使えるようになったのか、これできっとわかるはずだ。

「錆兎。優緋。始めてもいい？」
「「ああ。構わない。」」
「わかった。それじゃあ……始め!!」
静寂の睨み合いを行う中、真菰の号令がその場に響き渡る。
私と錆兎は昨日同様に、同時に地面を蹴り上げて、相手を負かすために、手にしていた真剣を振りかぶる。
一閃の軌跡を描きながら。

……あれからどれくらいの時間が経ったのだろう。
休憩を挟みながらではあるけれど、私と錆兎は無我夢中で手合わせに没頭していた。
この数日間の成果はしっかりと出ていた。
苦手な型を何度も練習して、足運びにも気をつけて、手首の向きなども調節して、無駄な動きを少しでも減らすように頑張った甲斐があった。
結構な時間帯、ヒノカミ神楽を連発しているけれど、私はちっとも疲れることがなかった。
もちろん、休憩を挟む必要はある。
微々たる疲労も、累積すれば大きなものとなり、一気に襲いかかってくるからな。

まぁ、そうであっても、努力は決して無駄になることはなかったらしい。
「そこまで!!　もう日暮れが近づいているよ!」
「え……?」
「……もうそんな時間だったのか?」
鍛錬の成果が出ていること……それを改めて認識して錆兎と打ち合っていると、真菰の声が辺りに響き渡った。
私と錆兎は互いに集中していたせいで、時間が経っていることに気づけなかったようだ。
鍔迫り合いの体勢のまま、錆兎と一緒になって真菰に目を向けてみると、彼女は小さく頷いて、空を静かに指差した。
鍔迫り合いをやめ、刀を鞘に収めて上を見る。
そこには確かに、茜色の空が広がっていた。
「……てっきり、まだお茶時かと思ってた。」
「俺もだ。」
どうやら錆兎と同じ意見だったらしい。
声音から互いに驚いていることがよくわかる。
「……手合わせの結果はどうだった?」

「えっとね。今日、二人が行っていた手合わせの回数は二十一戦。そのうち、錆兎は五勝十六敗で、優緋は十六勝五敗。ヒノカミ神楽を使っていた優緋の圧勝だね。」
「くそっ……。」
「あはは。まぁ、威力が威力だったから、結構短時間で錆兎の刀吹っ飛ばしたもんな、私。」
「……水の呼吸とヒノカミ神楽を使った時のこの差なんなんだ。」
「うーん……やっぱり適してるか適してないか？」
あっけらかんとして言っているが、正直自分自身もかなり驚いていたりする。
「そういえば、優緋が昨日の夜ヒノカミ神楽をこっそり舞ってるのを遠巻きに見ていたけど、初めて見せてもらった時に比べたらすごく滑らかに舞っていたし、すごく綺麗だったよ。」
「え……見てたのか真菰……。」
「うん。」
……うーん……綺麗に見えたってことは、それだけヒノカミ神楽が上達したってことか？
「……少しでもそう思ってくれたなら、練習した甲斐があったかもな。」
だとすると嬉しいことだと思う。

だって、それは煉獄さんを助けるための一歩を踏み出せたということなのだから。

まぁ、まだまだ足りない部分はあると思うけど。

「……この数日間、いろいろとありがとう、二人とも。二人のおかげで、人を助けるための力を強化することができた。多分、私一人じゃできなかったことだ。助かったよ。」

でも、一歩進むことができたことは何よりも嬉しいことだ。

なかなかヒノカミ神楽を伸ばせなくて、それで不安が重くのしかかっていたから。

……体力の減少を最小限に抑えることができた。

これで、また一歩進むことができる。

「……確か、日輪刀は十日から十五日で届くと言ってたな。で、明日で最終戦別終了日から十五日目で、明日には刀が届く話だったか。」

「……そうだね。明日から私は本格的に鬼狩りだ。だから、ここにはもう戻ってこないと思う。」

少しの安堵に息を吐いていると、錆兎がポツリと呟くように、明日届くであろう日輪刀について聞いてきた。

私はすぐに肯定する。

鬼狩りになったら、ここにはきっと戻ってこないということも。

「そっか……。寂しくなるな。」

私の返答を聞いた真菰が、落ち込んだような声音で呟く。
そんな真菰に対して、私は小さく微笑みかけ、自分より背が低く、だけど年齢は上であろう彼女の頭を優しく撫でた。
「落ち着いたらまた来るよ。いつになったら落ち着くかはわからないけどさ。」
そして、ある程度したらまた戻ってくることを彼女に告げる。
私が生きている限り、きっと二人には会えるから。
「優緋。」
そんな中、錆兎が私の名前を呼んできた。
顔を上げて首を傾げると、彼は静かにこちらに近寄り、頭につけている太陽の絵が印象的な狐面に触れてきた。
「錆兎？」
「……ちょっとしたまじないだ。」
「え？」
紡がれた言葉に疑問の声を上げると、錆兎は口元に笑みを浮かべては、私の狐面に軽く口つけた。
「……は!?」
「わー……錆兎が接吻してる。狐面にだけど。」

急なことに驚く私と、まさかの行動に苦笑いを溢す真菰。
対する錆兎は小さく笑ったまま、私の頭を優しく撫でてきた。
ちょ……長子だから小さい時にしか撫でてもらえてなくてちょっと照れてしまった……!!
「お前が無事に鬼狩りとして生活する中で、必ず生き残れるように。もし、鬼狩りとして戦い、力及ばず敗れてしまった時、ここに還ってこられるように。頑張れよ、優緋。」
少しばかり照れてしまった私のことなど気にすることなく、錆兎はまじないの意味を伝えてくる。
「最後のは少しだけ恐怖を感じたんだけど?」
「気のせいだ。」
「気のせいじゃないと思う。」
まじないに含まれた二つの意味のうち、一つに恐怖を感じたと抗議をするが、錆兎はどこ吹く風だった。
最後まで幽霊錆兎は、私を諦めてくれないらしい。
「……またな、錆兎。真菰。」
「ああ。また会おう。」
「いつか優緋が元気に戻ってくるまで、私たちは遠く離れたここから見守ってるよ。無

理はしないでね、絶対に。」

少しだけ苦笑いをしたくなりつつも、私は友人であり、好敵手である錆兎と、友人である真菰に挨拶をして狭霧山を下りる。

さぁ、ひとときの日常は終了した。

新たな物語に進もうか。

二体の鬼を連れた鬼狩り
24．漆黒の日輪刀

錆兎たちと別れた翌日。
「あ……ねぇ、鱗滝さん。笠に風鈴ぶら下げまくってる人が見えてきたんですけど、あの人ですかね？」
私は昼頃、そろそろきてもいいんじゃないかな、と思いながら鱗滝さんの自宅の戸から外を眺めていた。
すると、かなり特徴的な笠が見えてきたため、あの人かと鱗滝さんに問いかける。
「ああ。お前の刀は、あれが作ったのか……。」
「あれ……って……。」
すると、鱗滝さんは刀鍛冶……まぁ、風鈴がついた笠の時点でわかると思うけど、鋼鐵塚蛍のことをあれ扱いする。
予想外の反応に、思わず引きつった笑みを浮かべてしまったのは言うまでもない。
チリンチリンと風鈴を鳴らしながら、鋼鐵塚さんはこちらにやってくる。
……原作通りの人が刀を打ってくれたんだな、なんてちょっとだけ感動すると同時

に、折らないようにしなくてはと考える。
　折れたら怖いからな、この人。
「俺は鋼鐵塚という者だ。竈門（かまど）　優緋（ゆうひ）の刀を打った者だ。」
「ああ、竈門（かまど）　優緋（ゆうひ）は私ですよ。外で話すのもあれなんで、中へどうぞ。」
　見事なまでのなみかわボイス……。
　アニメと同じ声だとアホなことを考えながら、中の方へ入るようにと声をかける。
「これが〝日輪刀〟だ。」
「……。」
　が、やっぱりこの人話を聞いてくれなかった。
　思わず無言になる。
　本当に刀のことしか話さないな……。
「俺が打った刀だ。日輪刀の原料である砂鉄と鉱石は太陽に一番近い山でとれる〝猩々緋砂鉄〟、〝猩々緋鉱石〟。陽の光を吸収する鉄だ。陽光山は一年中陽が射してる山だ。曇らないし雨も降らない。」
「……あー……はい。そうなんですね。それはすごい刀だなー……ってことで、とりあえず中に入りません？」
　呆れたような声が出てしまったのは無理もないんじゃないかと思う。

だって別に聞いてもないのにベラベラと刀や刀の素材について話されるのもかなり困る。

ほら、たまにいるだろ？

聞いてもないのに自己語りするやつ。

それに出会った時のような、急に話し出したわこいつっていう呆れがな……溢れ出てきたんだわ。

原作では炭治郎がいくら声をかけても刀についてある程度語り終えるまで顔を上げなかったから黙っていたけど。

うん、とりあえず切り上げよう。

なんて考えながら声をかけると、鋼鐵塚さんは急に顔を上げた。

……ひょっとこのお面……もったいないな、下はイケメンなのに。

「んん？　んんん？」

なんで刀鍛冶の里の人はひょっとことのお面をかぶる風習があるんだろう……火男を意味する言葉だからそれ繋がり？

そんな疑問を抱いていると、鋼鐵塚さんは私の顔をまじまじと見つめてくる。

「あぁお前、〝赫灼の子〟じゃねぇか。こりゃあ縁起がいいなぁ。」

そして、私を赫灼の子と称して感心したような声を上げた。

「赫灼の子？　なんですかそれ？」
　とりあえず知らないふりをして、赫灼の子とはどういう意味か問いかける。
「頭の毛と目ん玉が赤みがかってるだろう。火仕事をする家は、そういう子が生まれると、縁起がいいって喜ぶんだぜ。」
「へぇ……それは知りませんでしたね。じゃあ、炭を作って売っていた私の実家は、相当縁起が良かったんですかね。私の弟と妹も、同じように赤みがかった髪の色や目の色をしていましたし。あと、鬼殺隊に入っているとはいえ一応女なんで、それ以上手を伸ばすのはやめていただきたい。指が頬に突き刺さりそうなんで。」
「こりゃあ刀も赤くなるかもしれん。なぁ、鱗滝。」
「話聞けよ、指差すなよ。」
　答えてくれたのは別にいいけど頬をぐりぐりすんのはやめてくれ。
　地味に痛いから。
　……そんなやりとりが少し前にあったが、なんとか鋼鐵塚さんは家に上がってくれた。
　ようやくかと溜息を吐きたくなる。
「さぁさぁ刀を抜いてみなぁ。」
「はぁ……わかりました。」

だが、こちらの心境など知らない鋼鐵塚さんは、謎のうねうねダンスをしながら私に刀を抜くように言ってきた。

呆れながらもそれに従い、静かに鞘から刀を引き抜く。

現れた鈍色の刀身……できたばかりで鋭く光るそれには、私の姿が映り込む。

できたばかりの刀って、滅多に触らない……っていうか、初めて触ったから少しだけ新鮮だ。

「日輪刀は別名色変わりの刀と言ってなぁ。持ち主によって、色が変わるのさぁ。」

鋼鐵塚さんが日輪刀の別名と、どうしてそう言われているのかを教えてくれる中、私はじっと刀身を見つめる。

すると、徐々に鍔の方から刀身が黒く染まっていき、最終的には漆黒の刃へと変化した。

「黒っ!!」

「黒いな……。」

鋼鐵塚さんがショックを受けたように、鱗滝さんが少しだけ驚いたように黒いと呟く。

私はというと、やっぱり日の呼吸なんだな……と自身の適性呼吸を改めて認識していた。

「驚いてるみたいですが……漆黒の日輪刀って珍しいものだったりするんですか？」
「ああ。少なくとも儂はあまり見たことがない。」
とりあえず鱗滝さんに珍しいのかと問いかける。
彼は静かに頷いたあと、少なくとも自分はあまり見たことがないと呟く。
「キーーーーーーッ!!　俺は鮮やかな赤い刀身が見れると思ったのにクソーーーーッ」
対する鋼鐵塚さんは、原作通り発狂して、私に襲いかかってくる。
ここでバタバタと攻撃されたら、炭治郎と禰豆子が鋼鐵塚さんを襲いかねないな……。
そう思い私は危ないので刀はすぐに鞘に収め、襲いかかってきた鋼鐵塚さんをヒョイっとその場で躱す。
同時に彼の手を取って引っ張りその場に転倒させたのち、その上に座り込んで押さえつけた。
「自分の思い通りにならないからって泣く子供ですかあんたは。いったい何歳なんです？」
「……三十七だ。」
「それならもうちょっと落ち着きましょうや、大人気ない。」

女にすっ転ばされた挙句、上からのしかかられ動きを封じられたからか、鋼鐵塚さんは意外にも大人しくなった。

うん。

仮に刀を折るような事態に陥って殺意増し増しで襲ってきた時は同じように動きを封じよう。

「カァァ!!　竈門　優緋ィ!!　北西ェノ町ヘ向カエェェ!!」

「うっわびっくりした!!　話すんかいあんた……。」

鋼鐵塚さんの上に座ったまま、これから先鋼鐵塚さんが暴走したらこうやって止めようと考えていると、鎹鴉が大声を上げる。

知っていた展開だったけど驚いてしまった。

意外と声でかいなこの鴉。

「鬼狩リトシテノォ、最初ノ仕事デアル!!　心シテカカレェェ!!」

「最初の仕事……ねぇ。了解。概要は？」

「カァァ!!　北西ェノ町デワァァ!!　少女ガ消エテイルゥ!!　毎夜毎夜少女ガ!!　少女ガ!!　消エテイル!!!」

「……わかった。」

いや、鴉のことは今はどうでもいい。

物語がまた一歩進んだんだ。
気を引き締めて行かなきゃならない。
なんせ、どこでどのように物語にイレギュラーが生じるかわからないんだ。
私という、本来の主人公ではない存在が物語を紡いでいるのだから。
もし、変なイレギュラーが生じたら……それに対応しなくてはならない。
ゆっくりと深呼吸を繰り返す。
頭を切り替えて、物語にまた身を投じるとしよう。

25．いざ、沼鬼討伐へ

「さてと……それじゃあ鬼退治に行きますかっと。炭治郎。禰豆子。箱の中は大丈夫か？」
「ん!!」
「む!!」
「どうやら問題ないみたいだな。じゃあ、鬼退治にしゃれ込みながら、二人が人間に戻れる方法を探しますかね。辛抱ばかりさせて悪いな、二人とも。」
「んーん！」
「むーむ！」
「はは。あまり気を負うなって？　はいはい。じゃあ、いつも通りの姉ちゃんで頑張るとするか。」
　鎹鴉……これから一緒に動くんだから名前くらい教えろよって話しかけたらちゃんと名前を教えてくれた天王寺松衛門からの指令を聞いて少しした頃。
　私は、支給された自身の隊服と日輪刀……そして、炭治郎と禰豆子の二人を入れるために原作よりちょっと幅が広くなってる背負い箱を装備し、鱗滝さんの自宅を出た。

……鬼退治に向かう前、鱗滝さんは隊服や日輪刀、背負い箱の説明をしてくれた。
まず、日輪刀。
持ち主により色が変わり、それぞれの色ごとに特性がある。
まぁ、その特性はいわゆる適した呼吸に合わせたものに変化するということだけど。
……黒い刃の日輪刀を持った剣士はあまりにも少ない。
そのせいで詳細がわからなさすぎて、出世できない剣士と言われていると彼は話していた。
だが、私は自身の適性した呼吸がなんなのかを知っている。
……始まりの呼吸と呼ばれる日の呼吸……それを生み出した剣士が手にしていたのがこれだった。
まぁ、かの始まりの呼吸の剣士は、戦闘じゃ超人的な握力と呼吸による痣の発現、それに伴う高体温を刀に伝達して、赫灼刀へと日輪刀を変化させ、鬼舞辻無惨をあと一歩に追い詰めたけど……今の私には不可能なことだし、下手したら一生できないかもなんで、今は思考から除外しよう。
次に鬼殺隊の隊服。
この隊服は特別な繊維でできており、通気性、濡れにくさ、燃えにくさ、雑魚鬼の爪や牙程度では裂くことができない、防御性に極振りしたもの。

ゲームだとどれくらいのストーリーで出てくるような防具なんだろうか……？

ちょっとだけ下らないことを考えた。

最後に、私が背負って当たる箱……原作よりはちょっとデカくなってるそれについて。

昼間、私が炭治郎と禰豆子を背負うためのもので、〝霧雲杉〟と呼ばれる非常に軽い素材で作られた特注品。

〝岩漆〟と呼ばれる特殊な漆で外側を固めてあるため、並大抵のことでは壊れたりしないもの。

改めて思うけど、炭治郎ってば結構特殊アイテム多数持っていたんだな。

……なんて、考えながら、鬼弟妹が入って眠っている箱を背負いながら、てくてくと天王寺のあとを追う。

そうそう……鱗滝さんは炭治郎と禰豆子の特異体質についても言及していたよ。

内容はもちろん知っていたから、説明は不要かもしれないけど……ちゃんと、二人とも、同じ特異体質の鬼となっていたようだ。

炭治郎も禰豆子も、人を喰うことなく、眠ることで体力を回復している。

そのことにちょっとホッとした。

だって、禰豆子はともかく、炭治郎も鬼になるというイレギュラーが発生していたん

だ。

もし、原作の禰豆子とは違うことになっていたらと、少しだけ不安だった。

……しかし、炭治郎と禰豆子……この二人が太陽を克服するかどうかはわからない。

まぁ……それは二人の様子を見ていくことで、おいおいと判断するとしようか……。

「あ……町についた。」

考えながら足を進めていると、そこには町が広がっていた。

今はまだ明るいからか、人はそれなりに歩き回っている。

さて……こん中から和己ってやつを探さなきゃいけないんだが……。

「ほら、和己さんよ。可哀想に。やつれて……」

「一緒にいた時に里子ちゃんが攫われたから。」

「毎晩毎晩気味が悪い。」

「ああ、嫌だ……。」

「夜が来るとまた若い娘が攫われる。」

「お？」

……どうやらそこまで歩き回る必要はなかったみたいだ。

店から出てきたらしい女性たちの会話が聞こえてきた。

あの会話が聞こえてきた……ってことは、直ぐ近くに……。

「みーつけた……。」

少しだけ辺りを見渡せば、ふらふらと覚束ない足取りで町を歩く青年が一人。

「すみません。ちょっとお話を聞いてもよろしいですか?」

私は直ぐに小さな笑みを浮かべて青年に話しかける。

青年は一瞬驚いたような表情を聞いて首を傾げた。

「……最近、こちらで発生している少女行方不明事件に関して、少し情報を集めているんです。その犯人をつきとめるためにも。」

静かにここを訪れた理由……それを青年、和己に伝えれば、彼はその両目に涙を溜めて、ボロボロと泣き始める。

私は静かに彼に近寄ったあと、落ち着くまでその背中をさすっていた。

……しばらくして。

「なるほど……この人気のないところで……。」

「うん。一緒に話して歩いていたら里子さんは、ここで気がついたら消えていたんだ。」

少しだけ落ち着いた和己さんは、自分の恋人だった少女、里子が消えた場所まで案内してくれた。

ここは夜になると人気がなくなり、かなり静かなんだとか。

だからこそ、二人で逢瀬するにはちょうど良くて、里子さんの両親に断りを入れて散歩をしていた。

しかし、ふと里子さんの声が聞こえなくなったことに気づいた和己さんは、里子さんがいるはずの方向に目を向けた。

里子さんは忽然と姿を消していたそうな。

「信じてもらえないかもしれないけど……」

「いや、信じますよ。実際に和己さんはそれを経験したんですから。それに、あなたからはウソを感じない。……失礼。ちょっとお見苦しいものを見せます。」

どことなく自信なさげに言葉を紡ぐ彼に、話を信じることを伝え、その場にしゃがみ込み地面に鼻を近づける。

「あ、ちょっ」

すると、和己さんから慌てたような声が聞こえてきた。

「下着見えそうなのは理解してますが、こうでもしなきゃ犯人を見つけることができなくてですね。だからお見苦しいものをお見せすると一言ばかり忠告を。目は閉じていてください。」

私は静かに和己さんに一言忠告した理由を告げ、目を閉じるようにと指示をする。

彼は必死に見まいとしているのか、いろんな感情が混ざったような匂いがする。

まぁ、それ以上に、鬼独特の匂いの方に意識は持っていかれるけど。

「うーん……間違いなく匂いはあるんだけどな……。」

なんて考えながら、私は一旦立ち上がる。

斑というか……変な感じ。

これはこれで気持ち悪いな。

「匂い？」

「ああ……はい。私、幼い頃からかなり鼻が利く体質でして、微かな匂いを辿ることができるんです。でも、匂いがちょっと独特で……。和己さん。他に少女が急に行方不明になったと言われる道とか知りませんか？　あまりにも不確かすぎて、見つけるまで時間がかかりそうなんです。」

「は、はい!!　確か、向こうの方でも……」

「案内をお願いしても？」

……これは、なかなか骨が折れそうな捜索になるかもしれないな。

２６．邂逅、沼鬼!

あれからしばらくして。
和己さんの案内を受けながらも、私は少女が消えていると言われている町中を歩き回っていた。
時には和己さんには申し訳ないが、スカート型の制服のまま地面にしゃがみ込み、鼻を近づけることを繰り返して。
うん。
本当に申し訳ない。
好きでもない女のパンちらがしょっちゅう起こりそうになる姿を見せてしまって。
炭治郎たちのようなズボンというか、袴型じゃなかったんだ、私の隊服。
蜜璃ちゃんみたいなやばすぎる露出隊服じゃなかっただけマシだけど。
「!!」
いろいろと考えながら鬼の捜索に当たっていると、不意に腐った油のような、気分が悪くなるような悪臭を強く感じ取れた。
「ああ。出てきたか。それならちょうどいい。」

「え？」

小さな呟きを漏らすと、和己さんが驚いたような声を上げる。

「あんたの恋人を攫った犯人……それを見つけることができたんですよ。間違いなく犯人は鬼だ。このご時世、国中に蔓延ってる……ね。私はそれを滅殺しにきたんですよ。……急がなければまた被害者が出てしまう。先に行かせてもらいますよ。」

そんな彼に向かって、私は小さく笑いながら、自分の目的を素直に話し、その場で跳躍して屋根の上に飛び上がった。

着地をしたらすぐに屋根を走り抜ける。

少しして隣路地から強い匂いを感じ取れたから、地面に着地する。

そこで嗅覚を鋭くさせるために目を閉じれば、地面から鬼と人間の女性の匂いが足下にあることを理解する。

「そこか!!」

「ギャッ!!!」

そこ目掛けて日輪刀の鋒を突き刺せば、ぶわりと広がる沼のような影。

同時に私より年齢が下である気を失った少女の姿が影から浮かび上がる。

すかさずその子を片腕に抱えて後方へと飛び上がれば、勢いよく腕が影から伸びてきていた。

掴ませるわけにはいかないので、日輪刀をその場で振りかぶり、その腕を斬って吹っ飛ばした。
「残念でしたっと……。」
小さな呟きを漏らしながら、笑みを浮かべていると、私に腕を吹っ飛ばされた鬼が地面から生え……いや、出てきた。
斬り飛ばした場所や、突き刺した場所はすぐに元通りになる。
とは言え、こいつらは十二鬼月でもなんでもないからな。
治りは若干遅……
「うっわうるさ!　歯軋りの音ってこんなにデカかったっけ?」
ついでにいうと、殺気もかなり向けられている。
まぁそうだよな。
せっかく飯にありつけたのに、邪魔されたんだもんな。
そりゃ怒るよな。
でもこっちも阻止しなきゃいけないんだよ。
被害者を少しでもなくすためにな。
「君!!」
「ああ和己さん。ちょうどいいところに。被害者になりかけてた子を見つけたんで、少

しこの子を抱えて側にいてもらえますか？　私の間合いの内側なら、きっと守れると思うんで。」

どぷんと影の沼の中へと戻っていった鬼の姿を確認しつつ、私は追いついてきた和己さんに声をかける。

和己さんは驚きつつも、私の指示に従って、こっちが抱えている女の子を優しく抱えてくれた。

「さぁて……次はどう来るかな……。」

原作では地面から三体一斉に襲ってくるはずだが……

そう思いながら、私は静かに日輪刀を構える。

すると、地面から強い悪臭を感じた。

どうやら原作通り三体一斉に襲いかかってきたらしい。

「やれやれ……」

〝水の呼吸　捌ノ型　滝壺〟

上から真下へと手にしていた日輪刀を勢いよく振り下ろし、自身の足元に衝撃と斬撃を引き起こす。

まぁ、この鬼たちから取り返さなきゃいけないものもあるから、少々浅く入るように、軽く調節をしたけど。

とどめをさせなかった三体は、当たり前のように地面に潜って逃げていく。
再び匂いに集中すれば、背後から一体鬼が出てくる。
型を使わず、通常の攻撃だけで腕を斬り裂けば、すぐに距離を取られた。
「なかなかすばしっこいな。」
ポツリと呟いた言葉に焦りはない。
まぁ、原作を知ってるからこそできる戦い方だもんな。
初見だったら炭治郎のように焦っていた。
「貴様ァアアア!!」
「あ?」
そういえば、簪をコレクションしてるやつ誰だっけ?なんて考えながら様子を見つめていると、私から距離を取った鬼が怒鳴り声を上げる。
それに反応をしてやれば、鬼は殺気増し増しで言葉を紡いできた。
「邪魔をするなァア!!　女の鮮度が落ちるだろうがァ!!　もう今その女は十六になっているんだよ!!　早く喰わないと刻一刻と味が落ちるんだ!!」
「いや人間に味なんかあるんかい。鬼の感性ってわかんないな……。しかも十六がちょうどいい鮮度だって?　今年で十七になった私には随分と耳が痛いことで。まぁ、年齢からして十六歳って子供と大人の狭間だもんな。ひょっとしてそれが関係あんのか

ね。」
「いや、あの、なんでそんな冷静に……？」
「はは。まぁ、私のネジが数本吹っ飛んでるとでも思ってください。生身で鬼相手に立ち回ろうとしてるような奴なんで。みんながみんなそうじゃないけど、私は結構ずれてるんですよ。」
怒鳴ってくる鬼に対していつもの調子で言葉を返していると、和己さんから耳の痛いツッコミがきた。
とりあえずはぐらかすように、自分はネジが数本吹っ飛んでるずれ者とでも思ってくれと返しておいた。
「冷静になれ俺よ。まぁいいさ、こんな夜があっても。」
「ん？　ふぅん。あんたはあっちに比べて随分と落ち着いた雰囲気があることで。二重人格？」
「さぁ、どうだろうな？　……この町では随分と十六の娘を喰ったからな。どれも肉付きが良く美味だった。俺は満足だよ。」
「俺は満足じゃないんだ俺よ!!　まだ喰いたいのだ!!」
「……。」
一人上手……いやなんでもない。

つーか寂しい奴だなこいつ。
自分と自分で会話するって何?
あれか?
鏡の前に立っては毎日自分に今日も美しい的なことを言うタイプのナルシストか?
なんであれ意味わからん鬼だな。
約一体変にスカしてるから余計に思うわ。
「化物…一昨晩攫った里子さんを返せ!!」
沼鬼に対してドン引きしていると、和己さんが震えながらの声で里子さんを返せと勇気ある言葉を口にする。
「里子?　誰のことかねぇ?　この蒐集品の中にその娘のかんざしがあれば喰ってるよ。」
それを聞いた沼鬼は、得意げな声音で言葉を紡いでは、自身が上に羽織っている上着を広げて見せる。
そこには大量のかんざしが収められており、やけに煌びやかになっていた。
うわ、変態かよ……と思っていると、和己さんの匂いに絶望と怒りと悲しみが混ざり合う。
「ふむ……どうやらあったみたいだな。よし、わかった。敵討ちと、あまり言いたくない

が、遺品の奪還はお任せを。」

確か……あの大きなリボンのかんざしだったか?と原作知識を引っ張り出しながら、刀を構える。

その瞬間、すぐ横から鬼の匂いがしたため、すかさず日輪刀を振り迎撃する。

的確に頸めがけて振ったそれは、攻撃してきた沼鬼の頸を斬り落とさんとする……が、寸前のところで地面に引っ込まれてしまった。

同時に入れ替わるように壁から鬼の匂い。

めんどくさいなと思いながらそれを躱す。

しかし躱した先から鋭い爪がある腕が伸びてきた。

さらにいうと背後からも鬼の匂い。

挟み撃ちかよ……と思いながらも、私は背負っている箱の側面を二回ほど叩く。

背後から鈍い音が聞こえてきた。

「ありがとう、炭治郎。禰豆子。ちょっとお姉ちゃんだけじゃ難しいから、少しばかり協力してくれるか?」

「ん!!」

「むん!!」

それが意味するものはただ一つ。

大切な弟と妹の二人が、同時に箱から飛び出して、背後にいた沼鬼を殴り飛ばした音である。

27．決着、沼鬼！

「……なぜ、人間の分際で鬼を連れている？」
「そりゃ、私の大切な宝物である弟と妹が甘えたからに決まってんじゃん。私がいなくなったら不安でギャン泣きしちゃうんだよ、この子ら。弟と妹の悲しむ姿を見て放っておける姉なんて、この世にはいないと思うけどね？」
落ち着いた方の性格をしている沼鬼の質問に笑みを浮かべながら答える。
二人は私に一旦目を向けて笑顔を見せたあと、私が守るために側に控えさせておいた和己さんと、気を失っている少女に近寄り、禰豆子は二人の頭と頬に優しく触れ、炭治郎はじっと二人を見つめたあと、静かにその頭を撫でた。
「この子ら、人間を傷つける鬼を許せないたちでね。本当はあまり戦わせたくないんだが、戦闘に参加することを望むんだ。姉である私の真似をしたいのかもな？　小さい頃から、この子らにはそんな癖がある。」
そう紡ぎながらも、私は鱗滝さんに言われた言葉を思い出す。
それは、炭治郎と禰豆子にかけられた暗示。
『気休めにしかならんかもしれんが、炭治郎と禰豆子が眠っている間に、儂は二人に暗示

をかけた。〝人間は皆お前の家族だ〟。〝人間を守れ。鬼は敵だ〟。〝人を傷つける鬼を許すな〟と。』

……やっぱり、二人にはこの暗示がかけられていた。

少しの気休め、いざという時の抑止力として。

もちろん、最初はその必要があるのかと言いたくなった。

二人は誰も傷つけていないから、必要ないんじゃないかと思った。

だけど鱗滝さんは、とても真剣な様子だったから、言い返すことはしなかった。

そんな暗示をかけざるを得ない状態なのは、一番私がよく知っている。

それに、私も怖かった。

もし、二人が本当に人を傷つけたら……私というイレギュラーのせいで、そんな変化が起こってしまったらと。

それがないと挫けそうなのは……怖いのは一番私だから……二人がそれで少しでも自身の本能を抑制できるのであればと、考えなければやっていられない。

「三対一じゃなくなったな。形勢不利かと思っていたが、ちゃんと対等だ。そんじゃあ、始めようか？　喰われた女の子たちの敵討ちを。」

静かに言葉を紡いだ瞬間、炭治郎と禰豆子の二人は、頭を出してるスカした性格の方の鬼を狙って行動に移す。

地面にいるから同時に足を振り上げて、そのままかかと落としを加えようとした。
が、沼鬼はすぐに地面に引っ込む。
二人の攻撃は空振りだ。
「炭治郎。禰豆子。深追いは危険だからこっちへ！」
「ん!!」
「むー!!」
それを確認した私は、すぐに二人に声をかけて、自分の方へと引き寄せる。
二人は私の指示を素直に聞いて、軽い足取りで走り寄ってきた。
その際、二人の進行方向を塞ぐように沼鬼二体が地面から襲い掛かったが、二人はすぐに跳躍で躱し、私の元まで走り寄る。
「よし、二人とも良い子だな。」
「んー!」
「むー!」
駆け寄ってきた二人の頭を笑顔で撫でてやれば、嬉しげな笑顔を向けてくる。
そんな二人を可愛いと思いながらも、私は炭治郎と禰豆子に指示を出す。
足元が沼へと変わるまで、少しの時間しかない。
「炭治郎。禰豆子。私は鬼の本元をまずは斬ってくる。その間、二人には和己さんと女

の子の二人の護衛を頼みたいんだが、やってくれるか?」
「ん!」
「むー……」
私の指示を聞いた禰豆子が笑顔で了承するように頷く。
が、炭治郎は逆に不服そうだった。
私が一人で大掛かりなことをやろうとしていることに気づいているのかもしれない。
「……大丈夫だよ。私はちゃんと怪我なく戻ってくるから。だから、炭治郎もここに残って、鬼からみんなを守ってほしい。」
「……むぅ……。」
穏やかな声音で説得を試みると、炭治郎は渋々といった雰囲気で私の頼みを引き受けてくれた。
「帰ってきたらしっかりと甘やかしてあげるから、頑張ってくれ、長男。」
「む……!」
炭治郎との会話を終える。
同時に私は足元にできた沼に落下する。
まぁ、正確には自ら飛び込んだんだけど。
……炭治郎と禰豆子は一瞬こっちを守ろうとしてきたが、笑うだけで静止させ、一人

暗い沼の中を漂う。
沼に入った瞬間視界に入ったのは、色鮮やかな着物や持ち物。
これだけが唯一の色取りだ。
同時に怒りが湧いてくる。
見ただけでかなりの量の女の子たちを喰っているのがわかる。
いくら鬼が人を食わねばならないとはいえ、怒りを覚えない方がおかしいくらい……
罪のない人たちは犠牲になったから。
「ククク!!　苦しいか小娘!!　この沼の中には殆ど空気もない!!　さらに、この沼の闇は体に纏わり付いて重いだろう!!　ハハハ!!」
暗がりの中聞こえてきたのは荒々しい性格の方の沼鬼の声と、耳障りな歯軋りの音。
ふむ、尽く食事の邪魔をした私にヘイトが向いたのか、二人してかかってきたらしい。
なんで三対三だからそれぞれを相手にするって考えに至らなかったのか……。
まぁ、質問したところで答えてはくれないんだろうけど。
「地上のようには動けんのだざまをみろ!!　浅はかにも自ら飛び込んできた愚か者め!!」
(うっせぇなぁ……。)
沼の中で勝利を確信して得意げに言葉を紡ぐ沼鬼に呆れにも似た感情を抱きながら

も、私は刀を握りしめる。
確かに、沼の中は空気が薄いけど、狭霧山の空気の薄さに比べたら何倍もマシだ。
さて……陸ノ型を使うとしようか。
原作でも炭治郎が言っていた通り、こういう不安定な場所だからこそ、この型は力を発揮する。
沼鬼たちがかなり素早く動く中、私は体にねじりを加え、そのまま刀を構える。
攻撃のチャンスは一度だけ。
相手が攻撃のために近づいてきた瞬間!!
意識を集中させていれば、隙の糸の匂いを感じ取れる。
そのタイミングを見計らって、私はねじった体の勢いを利用して刀を思い切り振りかぶる。
〝水の呼吸　陸ノ型!　ねじれ渦!!〟
渦巻く鋭く大きい刃は、周りを巻き込み切り裂いていく。
効果は覿面。
二体の分身は渦に巻き込まれ、そのままバラバラになり頸も斬れた。
(じゃあな、変態鬼の分身。)
それを見届けた私は、自身の呼吸が苦しくなる前に地上の方へと上昇する。

外に飛び出れば、連携を取りながら沼鬼と交戦する炭治郎たちの姿が見えてきた。
原作では禰豆子だけが戦っていたから、あの子は怪我を負ってしまうけど、この世界では鬼化したのは禰豆子だけじゃなく炭治郎も一緒だったためか、どちらも無傷のようだった。
少しだけ安心しながらも、私は地面を蹴り上げる。
そして炭治郎と禰豆子の動きに慣れ始めている様子の沼鬼が攻撃する動きに合わせて、その腕を斬り落とした。
「弟と妹に怪我させる姉もいないってね。残念だが、ここで決着をつけるとしようか?」
「!!?」
笑みを浮かべながら言葉を紡げば、目の前の沼鬼はゾッとしたような表情を漏らした。
命を奪おうとしてる人間が笑っているのが恐ろしいのかもしれない。
「お前たちからは腐った油のような匂いがする。かなりの悪臭になってるよ。まぁ、それだけ女を喰っていたんだろうが、理由までは問わないさ。どうせ救いようのないクズ的な考えなんだろうし? だからこの話はしまいだ。」
最後に見るのが笑みってどんな恐怖だ? まぁ、それくらい絶望感あったほうが……恐怖があった方が、報復にはなるだろう。

だって、女の子たちはそれ以上に恐怖し、痛い思いをしたんだから。
ああ、こいつも痛い目に遭わせた方がいいか？
回復しないように何度も切り刻んで、バカになるくらいに痛みを与えるべき？
……いや、それはしたらダメか。
炭治郎と禰豆子がいる。
二人にそんな姿見せるわけにはいかない。
だって、私は二人にとって、大好きな姉ちゃんなんだから。
意識には、少々異物が混ざってるけどね。
「本題はこっちだ。剣技を教えてくれた師匠から教えてもらったんだが、鬼を作れるのって、〝鬼舞辻無惨〟って鬼なんだろ？　そいつについて教えてくんないかなぁ？　どうしてもそいつに聞きたいことがあるんだわ。だから少しでも情報、話してくんね？」
穏やかさは消すことなく……しかし、どことなく自分自身でも冷たさを感じる声音で語りかける。
結果は知ってる。
でも、訊かざるを得なかった。
少しでも変わっていればと願いながら。

「言えない……言えない……!!　言えない言えない言えない!!」
「そうか……。じゃあお前にはもう用はないよ。地獄でせいぜい罪を償うんだな。」
……ああ、やっぱりこれも変わらないのか、とため息を吐きたくなる中、再び襲いかかってこられるのも面倒だからと、その場で日輪刀を一閃する。
沼鬼は悲鳴を上げることなく、その頸を刎ねられた。
「……情報集めも楽じゃない。」
簪のコレクションがあった羽織を刀で切り取り、炭治郎と禰豆子に目を向ける。
二人はどことなくうとうとしていた。
眠ってるところを起こしちゃったし、戦闘に加えたから体力を消耗してしまったんだろう。
「炭治郎。禰豆子。よく頑張ったな。偉いぞ。」
「んー。」
「むー。」
「はは。眠たげだな。いいよ。ゆっくり眠って。また何かあったら起こすかもしれないけど、な。」
「んー……。」
頭を撫でながら、ゆっくりと休むように伝えれば、二人はいそいそと体を小さくし始

める。

背中にある背負い箱の蓋を開けて地面に置けば、すぐにその中へと入っていった。

……狭いところを好む猫のようだと思ったのは言うまでもない。

「和己さん。怪我はありませんか？　女の子も無傷でしょうか？」

「……ああ。」

それを確認して箱を閉め、再び背負い上げた私は、力なく地面に座り込んでいる和己さんに声をかける。

……精神的にやられていて、苦しそうな様子だ。

「……大丈夫か……なんて聞くつもりはありません。大切な人を失って、苦しい思いをしているのは十分わかります。私も、同じですから。」

「!!」

掴みかかられないように、言葉を選んで静かに紡げば、彼は勢いよく顔を上げた。

表情には悲しみが浮かんでいる。

「私も、二年前に家族を鬼に殺されました。今一緒にいるこの子たちは、不思議な巡り合わせのおかげで、共に行動をとれていますが、その巡り合わせがなかったら、今ごろ私は一人だったと思います。……あまり、こんなことは言いたくありませんが、失われたものは二度と戻ってきません。ならばこそ、遺された私たちは前を向いていかなくては

ならない。嘆きたくなることや悪夢を見ることがあろうとも。きっと、先に逝ってしまった人たちは、大切な人が少しでも長生きして、自分の分まで幸せになってほしいと願っているはずですから。」

「……。」

私の言葉を聞いた和己さんがとうとう両眼から大粒の涙を流し始めた。

私は、そんな彼の頭を優しく撫でながら、手にしていた布切れ……簪がまとめてある沼鬼の羽織の切れ端を手渡す。

「私はそろそろ行きます。まだ解決していないことがたくさんありますからね。だからこれを。この中に、里子さんの持ち物があるといいのですが……。」

「!!　ああ……ありがとう……!!　里子さんの仇を、里子さんの持ち物を……多くの人たちの仇を討ってくれて!!」

私から手渡された布切れを手にした和己さんが叫ぶように言ってくる。

私は小さく笑いながら、和己さんに背中を向けて歩き出す。

(……生きるためとは言え、どんだけ多くの人を殺し、痛めつけて苦しめるのやら。もうちょっと別の方法はなかったのかね。)

呆れにも似た感情を抱きながら、いずれ邂逅することになる鬼の王を脳裏に浮かべる。

自分中心的な性格じゃなかったら、多少は変わったんじゃないのかとも思うが……まぁ、それだけ切羽詰まっていたんだろうな。

だからと言って仕方ないからと許せるものではないけれど。

「ほんと……寂しい奴だよね、鬼舞辻ってさ……。」

28．やってきたのは大都市浅草。邂逅、鬼の王。

「次ハ東京府浅草ァ!!　鬼ガ潜ンデイルトノ噂アリ!!カァアア!!」
「次々行くのか……。ところで東京府浅草ってどっち？　どれくらいかかる？」
「二日カラ三日ァ!!　方角コッチ!!　カァアア!!」
「……普通に話せないのか？」
「イヤ、様式美ッテヤツダ優緋。」
「喋れるんかい!!」
「カァアア!!」

はい、くだらないやりとりをしつつも歩き回り、沼鬼と邂逅した日の翌々日。
かなり明るく賑わっている浅草に到着した竈門　優緋ですっと。
「なんつーか、レトロ風ではあるけど随分と懐かしい景色だな。」
「んー？」
「むー？」
「こっちの話だよ。それより炭治郎。禰豆子。何度も行ったことある町に比べて、この

街はかなり人が多いし、高い建物も大量にある。気分が悪くなったりしてないか？　世の中には人酔いって言う症状があると聞くが……。」

「んー。」

「むー。」

「そうか、大丈夫ならよかった。」

右側にいる禰豆子と左側にいる炭治郎は、どうやら人酔いはしていないようだ。

それはよかった。

意識がこっちに転移するまで、人が多い都会に住んでいた分、炭治郎のようにこの大量の人に揉まれる感覚も慣れていたから、私は問題なかったんだけど、二人はずっと小さな町しか知らなかったから心配だったんだよな。

「じゃあ、鬼の情報を集めますかね……。まぁ、それより先に腹ごしらえしたいけど……。」

……あ、うどんのいい匂いがしてきた。

あっちか。

「ちょっとだけあっち行くか。」

「ん!!」

「むん!!」

二人に移動することを伝えれば、すぐに手を握り返してくる。
それを確認した私は、二人の手を引きながら、ゆっくりとうどんの匂いがする方へと足を運んだ。

……しばらくして。
原作通り、私たちが足を運んだ方角では、移動屋台のうどん屋がポツンとあった。
「すみません。山かけうどんを一つくれますか？」
「……一つでいいのか？　嬢ちゃん、二人ほど連れてるが。」
「ええ。二人はお腹空いていないみたいで……眠たそうではありますけどね……。でも、今は休める場所に向かうわけにもいかないですから。」
「なるほどなぁ……。まいどあり。すぐに作るから待ってな。水でも飲んでいてくれ。」
「ありがとうございます。」
炭治郎と禰豆子の二人を先にベンチに座らせて、水が入った湯飲みを三人分受け取り、私も二人の側に行く。
「あ……もう眠ってら……。」
そこを見てみると、すでに二人はすやすやと眠りに落ちていた。
互いに互いの肩や頭に自身の頭を預けて、穏やかな寝息を立てている。

「仲良しだねぇ。」
　まぁ、知ってたけど。
　なんてことを思いながら、湯呑みに入った水を口に運ぶ。
　が、遠く離れてはいるけれど、嗅覚がとらえた不快な匂いに気づき、すぐに湯飲みをその場に置く。
「悪い、炭治郎。禰豆子。少しだけ姉ちゃん、ここから離れるよ。二人はゆっくり休んでいてくれ。」
　自身が着ていた桜の絵柄が特徴である紅色の羽織を二人にそっとかけて立ち上がる。
「おじさん。申し訳ないのですが、少し席を外すので弟と妹を見ていてくれないでしょうか？　気持ち良さそうに眠ってるから、起こし辛くて。」
「構わねぇが、うどんはどうすんだ？」
「戻ってきたらちゃんと食べます。せっかく作ってもらうのに、食べないまま帰るのは失礼なので。」
「そうか。わかった。嬢ちゃんの弟と妹は任せてくれ。気をつけんだぞ。この街は人が多い分、変な輩とかも結構いるからな。」
「はい、ありがとうございます。」
　うどん屋のおっちゃんと少しだけ会話して、炭治郎と禰豆子の二人を彼に預ける。

……鍛錬してない分、炭治郎の鼻は原作ほどは利かないはずだから、私が着ていた羽織である程度はごまかせるだろう。
そう思いながら私は中央街の方へと走り出す。
さてさて……鬼の王とちょっくら会ってきますかね。

……少しだけ走れば街の開けた場所に出る。
かなりの人がいる中、辺りを見渡せば、あの匂いが強くするそれなりに長身の洋装の青年が視界に映った。
ゆっくり歩いているから、走らなくても問題なさそうだ。
走ることなく近寄った私は、目の前に現れたラスボスに近寄っては、その背中をとんと軽く叩く。
するとそいつは足を止めて、私の方を振り向いてきた。
猫のような紅梅色の瞳と、自分自身の赤みが混ざる瞳がかちあう。
その姿に小さく笑みを浮かべた。
探したぞ、孤独な鬼いさん……そんなことを思いながら、自身の腰にある日輪刀の柄に手を乗せる。
「おとうさん。だぁれ?」

「ん？」
が、不意にあどけない声が聞こえてきたため、すぐに手を日輪刀から離した。
「おっと、子連れだったのか。」
知ってたけど。
って言葉は内心だけにして、私は青年……あらためこの物語のラスボスである鬼の王・鬼舞辻無惨へと目を向けた。
「……私に何か用ですか？　まるで知り合いかのように肩を叩いてきたような気がしましたが。」
そりゃ私が一方的に知ってるからな。
……あと、せきとしボイスなんだな、やっぱ。
なんでラスボス系のキャラって、謎の色気を宿す雰囲気と声になるのか。
というか、よく人間と夫婦ごっこできるなこいつ。
私だったらちょっと無理……。
ドン引きしそうになる中、鬼と人間の混ざり合った匂いに少しだけ表情を歪める。
人間と鬼がこうまで近くにいるとかなり変な匂いになるんだな。
鬼の匂い強めだけど。
「あら、どうしたの？」

「おかあさん。」
「……」
匂いが増えた。
……はずなんだけど人間の匂いが増えたはずなのに鬼の匂いが強いってことはあれか？
周りの匂いに比べたら明らかに異質だからだろうか？
「お知り合い？」
「……いいや、困ったことに……少しも知らない子ですね。人違いではないでしょうか？」
上手い具合に知り合いかどうかを考えてるような間を開け、話しかけてきた女性に答える無惨。
知らないって言っていながらも、ちゃっかり日輪刀や隊服を見てこっちが鬼殺隊であることを確認していたのは流石と言える。
炭治郎の時もこうやって確認していたのか。
自分が追体験するだけで、ちょっとした動きだけでも新鮮さを感じる。
なんて考えてる暇がないんだった。
今一瞬だが無惨が手を動かしたのが見えた。

「うぐっ!!」
「……。」
私はすぐに動く。
無惨の手により血を体内へと注がれた青年が誰かわかったから。
「がぁあぁあ!!」
「よっと。はいはい、大人しくしようなっと。」
鋼鐵塚さんにしたように、鬼化した青年をその場にすっ転ばせた私は、頭につけていた布を外し、猿轡のようにして青年の口を塞いでは、彼の上に全体重を乗せて動きを封じる。
「あ、あなた!?」
「なんだなんだ!?」
「酔っ払いか!?　喧嘩か!?」
いや、酔っ払いのわけないだろ鬼だよ鬼。
まぁ、そんなこと言ってもわからないんだろうけどさ。
「ああ、奥さん。今のこの人、なんらかの原因で狂乱状態だから近寄らないでくれ。大丈夫。怪我はさせないから。」
こちらに駆け寄ろうとした女性……この青年と一緒に歩いていた彼女に制止の声を

かけながら、私は無惨に目を向ける。
この騒ぎに紛れて鬼の王は、隠蓑にしている夫婦ごっこの相手に危険だからと声をかけつつ、その場から立ち去ろうとしている。
「確かに、あんたとは初対面だが、最終的な目的はあんただよ、鬼舞辻無惨。」
「！」
騒がしい中言葉を紡げば、無惨はすぐにこちらを見てきた。
同時に顔を青くする。
ただでさえ青白い顔がますます青くなって真っ青だ。
まぁそうか。
耳飾りをつけるのが私なら、って、わざと縁壱さんスタイルの髪型をしてるもんな。
どうやら効果は覿面だったらしい。
確かな恐怖と、疑問の匂いが感じ取れた。
「まぁ、そんなのは今はどうでもいい。どうせこの人は抑え込まなきゃいけないからな。一旦はあんたに刃を向けるのはやめとくよ。心の拠り所を奪われた側だから、最後は刃をむけるけど。逃げるならばどうぞご勝手に。最終的には追い詰めるから。」
そんな無惨に対して、私は声を張り上げることなく静かに言葉を紡ぐ。
この喧騒の中であっても、一応耳には届いていたらしい。

「……行きましょう、麗さん。」
「え、ええ……。」
無言で無惨はこちらを見ていた。
が、すぐに彼は踵を返して、一緒にいた女性とその場を立ち去る。
「グァアウッ!!」
「はいはいお兄さんは大人しくしてね?」
未だに暴れる青年を取り押さえることに意識を戻し、なんとか動きを封じ込める。
「貴様ら何をしている!!」
「酔っ払いか?!　離れろ!!」
すると、複数人の男性の声が聞こえてきた。
この時代の警察の人たちだ。
誰かが呼びに行ったか、巡回中の警察がこの騒ぎを聞きつけたのだろう。
「ああ、警察の方々ですか。」
「君!!　離れなさい!!」
「そうしたいのは山々なんですが、結構この人暴れてましてね。私という重石がないと多分手当たり次第に攻撃してしまう。急に狂乱状態になったので原因は不明だし、今は一人より周りの大人数の避難をお願いできますか?　警察なら住民たちの安全確保を

優先してください。」

「し、しかし!!」

「いいから。周りの方をお願いします。まだこの人は誰も怪我をさせていない。この人に罪を犯させるわけにはいかない。だから、私のことは構わないので、周りをお願いします。」

それならと、私は冷静なまま、警察の人たちに声をかけた。

自分が重石になって動きを封じておくから、まずは周りの安全の確保をしてほしいと。

もちろん、側から見たらただの小娘である私も、この人らにとっては安全を確保しなければならない者側の存在だから、一人の警察が食い下がるが、それを遮るように自分は大丈夫だから、まずは大人数の方を頼むと告げる。

「……わかった!!」

退くつもりはないと判断したのか、その警察はすぐに周りにいる人たちをこの場から少しでも離すための行動に変えてくれた。

話がわかる人でよかったよ。

「……あなたは、鬼となった者にも人という言葉を使ってくださるのですね。そして、決して罪を犯さぬようにと必死に止めて助けようとしている。」

わずかな安堵を抱きながら、青年を抑え続けていると、独特な匂いとともに穏やかな女性の声が聞こえてきた。
声の方に目を向けてみると、そこにはキーパーソンの二人である珠世と愈史郎の姿が……。
よくみると周りの景色がかなり変わっている。
ああ、〝惑血・視覚夢幻の香〟が使われたのか。
「まぁ、対象にもよるけど、大抵は人として扱ってるよ。快楽的にいろいろやらかしている鬼に対しては、慈悲を向けるつもりはないけど、この人はそうじゃない。立派な被害者だ。そんな被害者をどうして鬼と扱えるんだ?」
そう思いながら、私は自身の意見を吐き出すように紡ぐ。
被害者と加害者の区別だけは、しっかりとしないとね。
「……それならば、私もあなたを手助けしましょう。身勝手な理由で被害者になってしまった方々を助けるためにも。」
「……一応は、鬼であっても?」
「はい。私は確かに鬼です。しかし、医者でもあります。あの男……鬼舞辻無惨を抹殺したいと思い続けている。」
新たな出会いと最大の敵との邂逅。

物語はまた一つ進んでいく。
激化する終結へと流れていくように。

２９．珠世と愈史郎と優緋

「すみません。用事に思った以上に時間がかかってしまいました。弟と妹は……」
「おう。嬢ちゃんの弟たちはぐっすりだったぞ。よくこんな場所で呑気に寝れるなと思ったくらいにはな。ほら、嬢ちゃんが頼んでた山かけうどん。ちょうどいい温度になるように、作る時間を考えておいたから美味いはずだぞ。」
「ありがとうございます。」
無惨との邂逅や珠世さんたちとの接触を終え、うどん屋に戻ってみると、屋台のおっちゃんが湯気が立つ温かい山かけうどんを出してくれた。
それに感謝を述べながら、うどんを啜る。
お腹が空いていたからとても美味しい。
「……むー？」
「ん？　ああ、炭治郎。起こしちゃったか。ごめんな。」
すると、寝ぼけ眼の炭治郎が私の方を向き、目を擦りながら寄ってきた。
こぼしたらいけないから自分が座る椅子の上に一旦うどんが入った器を置き、寄ってきた炭治郎の頭を優しく撫でれば、甘えるようにすり寄ってくる。

本当、この世界の炭治郎はかなり甘えんぼだ。

若干幼児退行してないか?と思うくらい。

「ちょっと待っててな。姉ちゃん、うどん食べてるから。ああ、いつか二人も一緒に食べような。ここのうどん、すっごく美味しいからさ。きっとダシとか、そこら辺のうどん屋とは違うんだろう。」

「お、嬢ちゃん、わかる口だな。作り方は教えられないが、この道何十年と頑張って自分なりのダシを作ったんだ。だから誰よりも美味いうどんを作ってる自信があるぞ。今度時間があったらそばも食いに来い。これまで食ったことがないくらい美味いのを食わせてやっからよ。」

「はは。ありがとうございます。その時はまたお邪魔しますね。今度は、腹を空かせたこの子たちも連れて。」

「ああ。待ってるぞ。」

和やかな会話をしながら、うどんをしっかり食べ終え、ダシまで全部飲み干す。

うん、向こうで食べてた市販のうどんなんか比べ物にならないくらい美味しかった。

炭治郎たちが人間に戻ったあと、もしここに来るようなことがあればみんなで食べよう。

「ご馳走様でした。とても美味しいうどんをありがとうございます。」

「いいってことよ。また来てくれ。大半はここらをうろついてるからな。」
「はい。」
笑顔でうどん屋のおっちゃんと別れ、未だに眠っている禰豆子を申し訳ないが起こす。
「……んー？」
「起こしてごめんな、禰豆子。そろそろ移動するよ。」
「んー……。」
「む!!」
「こらこら炭治郎……。」
すると寝ぼけ眼の禰豆子がゆっくりと起きては私に抱っこをせがむようなポーズをした。
それに若干拗ねたのか、炭治郎がしがみ付いてくる。
苦笑いをしながら炭治郎の頭を撫でるが離れない。
「参ったな……。」
どうするかなこの甘えんぼ弟妹……。
溜息を吐きながら考えてみても答えが出てこない。
甘やかすって炭治郎と約束したし、余計に甘えたくなっているのかもな……。

「とりあえず移動するから、荷物は持たせてくれ～……。」
……結局、少しだけ押し問答したあと、手を繋ぐことで収まった。
炭治郎にちょっと我慢してくれって説得するのにちょっと時間かかっちゃったな。
「おう？」
「「……。」」
なんで考えていると、炭治郎と禰豆子が私の手を強く引っ張った。
驚いて二人に目を向けてみると、一点を警戒するように見つめている。
その視線を辿ってみると、そこには愈史郎の姿が。
「遅いぞ。」
「ああ……悪い悪い。あそこのおっちゃんと戻ったらちゃんとうどん食べるって約束してたからさ。それを守るのは当然さ。だから待ってなくてもよかったんだが……匂い辿れるし。」
愈史郎に謝罪をしながら、うどん屋のおっちゃんとの先約を守っていたことを伝え、先に行ってても構わなかったことを口にする。
「目くらましの術をかけている場所にいるんだ。匂いも辿れるものか。」
が、愈史郎はすぐに術のせいで匂いは辿れないと吐き捨てて、それより……と小さく呟き、炭治郎と禰豆子を指差す。

「鬼じゃないかその二人は。女に至っては醜女だ。」
「うーーー!!」
「こらこらこらこら。落ち着け炭治郎。落ち着けって。」
紡がれた言葉は原作通りの発言。
醜女発言に至っては、ご丁寧に禰豆子を指差して言ってきた。
意味を理解した炭治郎が殴りかかりそうになったのでとりあえず止める。
「あんたの発言は一意見としてはあり得るだろう。個人個人によって、美醜の感じ方はそれぞれだからな。だが、それを口にするのはお門違いだ。……これは例え話だが、もし、あんたの大切な女性が、周りから醜女って言われたらどうする?」
そして、炭治郎を落ち着かせながら、例え話として一つの質問を口にすれば、愈史郎の額に血管が浮く。
「貴様!!　珠世様を侮辱するのか!?」
噛み付くように怒鳴りつけ、今にも殴りかかってきそうな愈史郎。
「それだよそれ。」
「!!」
私は冷静さを欠くことなく、今の愈史郎の状態を指摘する。
すると愈史郎は目を丸くして固まった。

「今の炭治郎はそういう状態。私たちにとっては禰豆子はとても可愛い女の子なんだ。大切にしているそんな子に向けて侮辱的発言をされた。だから炭治郎は怒ってる。私も、落ち着いて指摘してるように見えて、それなりに苛立ってる。まぁ、つまりは、自分だけの価値観で悪口を言うのは程々にしてほしい。自分から見たら醜くても、周りから見たら違う意見だってあるってことを認識してくれ。せめて、胸中で思うだけにして、口にするのは堪えてほしい。あんただって大切の人をバカにされたり侮辱されたりしたらイラつくし、傷つくだろう?」

「……。」

「……この一意見も、一応心に留めておいてくれるか?」

「……すまなかった。」

「わかってくれたらいいよ。こっちも例えとはいえ、悪かったな。」

「……ああ。」

うん。

やっぱり愈史郎は話せばちゃんと聞き分けてくれるな。

仲良しこよしとまではならなくても、蟠りだけは作らないようにしたいし、衝突もしたくないから、よかったよかった。

「ほら、炭治郎。彼はちゃんと謝罪してくれたぞ。お前も落ち着け。な?」

「……む！」
よし。
「長話をしちゃったな。ただでさえ遅れてるんだ。目的地に向かうとしよう。」
「ああ。」
短い会話を少しだけして、あとは無言になって足を運ぶ。
目的地はもちろん、珠世さんの元だ。

……歩くこと数十分。
愈史郎の案内により、大きめの建物に到着する。
「珠世様。戻りました。」
「おかえりなさい。」
彼の案内に従うように玄関を通り抜け、足を進めれば、気を失っている女性と、そんな彼女の側に寄り添う珠世さんの姿があった。
「お邪魔します。……その女性……街で鬼にされてしまった男性と共にいた方ですね。」
「はい。相当驚かれていたのか、疲弊し切って気を失っていたので連れて帰りました。」
「そうでしたか……。怪我人はいませんでしたか？」
「ええ。あなたがこの方のご主人をすぐに押さえてくださったので、誰一人として怪我

人はいませんでしたよ。」
「それはよかった。」
珠世さんに話しかければ、彼女は怪我人は一人もいなかったことや、あの男性の奥さんである女性は疲労やショックにより意識を失ってしまったが、無事であることを教えてくれた。
思わず安堵の息を吐く。
「ところで、あの方は？」
「彼女のご主人でしたら、気の毒ではありますが、拘束して地下牢の方に……。今はまだ理性がないため、人を襲う可能性がありますから。」
「そうですか……まぁ、仕方ないですね。この子たちも最初は私を襲ってきましたし……。必死に呼びかけたら、奇跡的に落ち着いた感じですから。」
続きは中で話しましょうと言うように、気を失っている女性から離れた珠世さん。
彼女についていく形で歩いていくと、居住していると思われる和室に通される。
「そういえば名乗っていませんでしたね。私は珠世と申します。その子は愈史郎。仲良くしてやってくださいね。」
彼女の言葉を聞くと同時に、愈史郎に目を向けてみると、彼はどことなく拗ねているような……不満そうな表情をしている。

「……そうですね。可能であればそうさせていただきます。まだ会ったばかりですからね、彼とは。仲良くなれるかどうかは、これから先によると思いますし。ああ、ですがご安心を。蟠りだけは作らないよう、彼とは関わらせてもらいます。」

だから私は、断るわけでもなく、了承するわけでもなく、どちらとも取ることができるようにと曖昧な言葉で返答を返した。

「ところで珠世さん。質問したいのですが……」

「なんでしょう？」

それに続けるように、私は珠世さんに質問したいことを告げる。

原作では珠世さんと愈史郎の情報を炭治郎は次々と聞いていくが、ある程度の話は知っているため一気に飛ばすことにした。

「鬼になってしまった人を人に戻すことは可能ですか？　可能であるならば、教えていただきたいです。もちろん、私にできることがあれば、いくらでもお手伝いしますから。」

30．襲撃、矢琶羽＆朱沙丸！

「……鬼を人に戻す方法はあります。」
私の静かな問いかけに、珠世さんはすぐに答えてくれた。
確か、炭治郎はこの場で乗り出した結果、愈史郎に投げ飛ばされたんだっけ？
「あるんですね。それはよかった。どのような方法でしょうか？」
だったら乗り出さなければいいだけだよな、なんて軽く考えながらも、その方法を問いかける。
原作通りなのか、パラレルワールドだから違うのか、それだけは絶対に確認しなくてはならないから。
「どんな傷にも病にも、必ず薬や治療法があるのです。ただ、今の時点では鬼を人に戻すことはできない。ですが、私たちは必ずその治療法を確立させたいと思います。治療薬を作るためには、たくさんの鬼になった方の血を調べる必要がありますが。」
「なるほど……。」
どうやら、原作通りの方法のようだ。
と、なると、イレギュラーが起こり得る可能性は、これに関しては少ないかもしれな

い。

　まぁ、場合によってはその確立するまでの時間が遅くなると言う恐れもなきにしもあらず。

　安堵して油断をしてはならない。

「優緋さん。あなたは、できることがあれば手伝うとおっしゃいましたね。」

「ええ、もちろん。大切な宝物を取り戻すためであれば、なんだってやる所存ですよ。」

「むー!!」

「……まぁ、無理はしない程度にですが。」

　安堵も少しにして、すぐに気持ちを切り替えて、私は珠世さんにできることがあるならばなんだってやると返す。

　……無理をしてでもやろうとしてると感じたらしい炭治郎から抗議の声が上がったから、ちゃんと訂正の言葉は口にして。

「でしたら、優緋さんには二つほど、手伝っていただきたいことがあります。それは、弟さんと妹さんの血を調べるための血液提供。出来る限り鬼舞辻の血が濃い鬼からも血液を採取して提供してほしいこと……この二つです。」

　私の肯定を聞いた珠世さんは、すぐに私に手伝ってほしいことを口にした。

「……弟と妹の血の提供…？」

「はい。私の見立てでは、現在の炭治郎さんと禰豆子さんは今、極めて稀な状態で落ち着いていると判断します。確か、あなたの弟さんと妹さんは二年間眠り続けて体力を回復したのでしたよね？」

「ええ、はい。愈史郎さんが最初に私の弟たちに鬼じゃないかと言ってきた際、聞いてなかったのかと指摘したくなりましたが、珠世さんはしっかりと聞いてくださっていたご様子で……安心しました。」

そう、実をいうと、街で出会った時、私は珠世さんたちに二年間人を喰うことなく眠ることで体力を回復していた鬼の弟と妹を連れていることを話していたのである。

だのに愈史郎はその話がなかったかのように炭治郎と禰豆子を指差して鬼じゃないかと言ってきたのだ。

まぁ、多分だけど、〝人間に優しくしている珠世様も美しい〟とか、かなり上の空なことを考えていたのだろうけど。

「……その話を聞いて、私はその二年間のうちにお二人の体が変化したのだと思いました。本来ならば、それ程長い間、人の血肉や獣の肉を口にしなければ、鬼はまず間違いなく凶暴化しますから。しかし、驚くべきことに炭治郎さんと禰豆子さんにはその症状がない。この奇跡は今後の鍵となるでしょう。」

私の指摘を聞いて、珠世さんは一瞬物言いたげに愈史郎に目を向けた。

まぁ、愈史郎にはそんな珠世さんも美しいものに見えているのか、全くの無反応だったけど。

少しだけ珠世さんから呆れの匂いがする。

だけどすぐに頭を切り替えたようで、炭治郎と禰豆子の血を調べたい理由を口にした。

「次に、もう一つの願いの方ですが……これはとても過酷なものとなります。鬼舞辻の血が濃い鬼とは即ち、鬼舞辻に……より近い強さを持つ鬼を示すものです。そのような鬼から血を奪るのは容易ではないでしょう。それでも、あなたはこの願いを聞いてくださいますか？」

覚悟と意思を問うように紡がれた言葉。

その言葉に私は少しだけ考える。

いくら炭治郎が物語上でクリアできたものだとしても、そのポジションにどういうわけか当てはまるようにして意思を持ってしまっただけの存在である私にもできることであるとは限らない。

最悪、それがクリアできず命を落としてしまう可能性だってあるのだ。

断りたいと思いたくなるのは仕方ないことだろう。

鬼舞辻のように、生き物は誰しも、自身の死が見えていると生存本能に従う節がある。

私だってそうだ。

できることなら死にたくない。

けど……

「ええ。それ以外に方法がないのであれば私はやります。不安はもちろんいっぱいあるけれど、珠世さんがたくさんの鬼の血を調べて薬を作ってくれるのであれば……私の大切な宝物……大切な家族である炭治郎や禰豆子だけでなく、もっとたくさんの人を助けることができるはず……だから、その話を受け持ちましょう。」

だからと言って逃げるわけにはいかない。

物語の主人公になったからじゃない。

この体に刻まれている、竈門優緋という一人の女の記憶の中にある幸せで温かい物を、少しでも多く取り戻すために。

「ありがとうございます、優緋さん。」

素直な気持ちを織り交ぜながら、珠世さんのお願いを引き受けることを伝えれば、珠世さんは穏やかな笑みを見せてきた。

それに釣られて小さく笑う。

うん。

炭治郎がちょっとドキッとしてしまうのも、愈史郎が女神の如く慕うのもわかるほど

綺麗な笑みだ。
男だったら炭治郎のように若干見惚れて顔を赤らめていたかもしれない。
これほど女性同士でよかったと思うことはそうそうないだろう。
「!?　まずい!!　ふせろ!!」
なんで考えていたら、愈史郎が怒鳴るようにふせろと告げてきた。
あ、やっぱりあいつら来んのね、なんて緊張感のカケラもないようなことを考えながらも、側にいる炭治郎と禰豆子を抱きしめてその場に伏せる。
それとほぼ同時だっただろうか?
不規則な動きで手鞠が壁を破壊し、襲ってきたのは。

31．邂逅、矢琶羽&朱沙丸！

「キャハハッ!!　矢琶羽の言う通りじゃ。何も無かった場所に建物が現れたぞ。」
「巧妙に物を隠す血鬼術が使われていたようだな。そして、鬼狩りは鬼と一緒にいるのか？　どういうことじゃ？」
「……チッ」
　麹が床にてんてんと転がる中聞こえてきた声に舌打ちをする。
　この二人は確か、結構厄介な鬼だったはずだ。
　矢琶羽と呼ばれた鬼は矢印を操って攻撃を仕掛けてくる。
　さらには麹を使って戦う朱沙丸の麹にその矢印を付与することでめんどくさい軌道をし、なおかつ必ず当たるという特性を付与してくるバッファーのような役割をしてくる。
　麹の威力はかなり高く、蹴り返そうとしていた禰豆子の足すら吹っ飛ばしたはず……。
「それにしても朱沙丸。お前はやることが幼いというか……短絡というか…。汚れたぞ。儂の着物が塵で汚れたぞ。」

「うるさいのう。私の麹のお蔭ですぐに見つかったのだから良いだろう。たくさん遊べるしのう。それに着物は汚れてなどおらぬ。神経質めが。」
「……炭治郎。相手は油断ならない相手だ。悪いが私の支援に回ってくれ。禰豆子は診断室で眠ってる奥さんを外の安全な場所まで運んだあと、戻れそうだったら戻ってきてくれるか？　この鬼たちは沼の鬼に比べて鬼としての匂いが強い。おそらく、それなりの実力を持ってるだろうから、三人で分散した方がいい。……二人を戦わせるのは、心苦しいけど……」
「むん！」
「うー！」
「……はは。ありがとう。それとごめんな、不甲斐ない姉ちゃんで。本当は、守らなきゃいけないのに。」
「うー！」
　矢琶羽と朱沙丸が会話する中、私は炭治郎と禰豆子に申し訳なく思いながら、一緒に戦ってほしいことを伝える。
　すると二人は気にするなと言わんばかりに返事を返しては、私の指示通りに動き始める。
「……。」

「ん？　日輪刀が気になるのか？」
「む！」
「……まさかとは思うが、自分も持っていたらとかそういう？」
「むん！」
「ははは……まぁ、考えてはおくよ……。」
その際炭治郎が自分も日輪刀を持っていたらみたいな目線を向けてきたため、思わず苦笑いをする。
何でもかんでも真似しようとすんだからこの子は……。
まぁ、一応考えてはみるけどさ……。
呼吸が使えない炭治郎が……いや……待てよ……？
ヒノカミ神楽が実は武器になることを教えりゃワンチャン……？
「キャハハ！　見つけた見つけた。」
っと……そんなこと考えている暇はないんだった。
まずはこの戦況を……。
なんて考えていると、朱沙丸が鋭を掲げ、それを思い切りぶん投げてきた。
禰豆子はこの場から離れているから怪我はしない……が、炭治郎はここにいる。
すかさず私は炭治郎を抱え込み、鋭の軌道の隙間を縫って躱す。

……背後の方で、肉や骨が砕けるような音が聞こえた。
視線をそちらに向けてみると、頭に鞠が直撃したらしい愈史郎の姿があった。
「愈史郎さん！」
慌てて声をかける。
問題はないとはいえ、やはり目の前でこの惨状を見てしまうと声をかけざるを得ない。
「キャハハッ！　一人殺した！　……ん？　ああ……耳に飾りの鬼狩りはお前じゃのう。」
「……ふぅん。狙いはこっちか。炭治郎、行くぞ。一旦外に出る。いくら鬼とは死なないとはいえ、回復にかなり力を使うのはお前が一番知ってるからな。だから、珠世さんたちをできるだけ巻き込まないようにするには、建物の外に出るのが先決だ。いいな？」
「む!!」
しかし、すぐに朱沙丸の笑い声により意識をそっちに戻しては、急いで建物の外へと出る。
炭治郎もそれに従うように、私のあとに続いて外に出た。
すかさず朱沙丸が鞠を構えて投げてこようとする。

が、少しの隙を見つけた私は、足に力を入れて地面を蹴り上げ、そのまま朱沙丸の頸目掛けて日輪刀を振るった。

「!?（早い!?）」

朱沙丸は目を見開いて間一髪でそれを躱す。

それを見計らったのか、すぐに炭治郎が動いて、朱沙丸のことを蹴り飛ばした。

「カハッ!?」

鳩尾に見事炭治郎の足が入ったのか、朱沙丸は表情を歪めながらその場から吹っ飛んだ。

一応、勢いを殺すためか多少後方へ飛んでいたようで、そこまで吹っ飛んだりはしていない。

「珠世様!!　俺は言いましたよね!!鬼狩りに関わるのはやめましょうと最初から!!　俺の〝目隠し〟の術も完璧ではないんだ!!　あなたにもそれはわかっていますよね!?建物や人の気配や匂いを隠せるが存在自体を消せるわけではない!!　人数が増える程痕跡が残り鬼舞辻に見つかる確率も上がる!!　あなたと二人で過ごす時を邪魔する者が俺は嫌いだ!!　大嫌いだ!!　許せない!!」

背後から愈史郎の怒鳴り声が聞こえてきた。

あまりにも無謀なことをしていた珠世さんに対しての怒りをぶつけている。

彼女の身を案じ、自身の安寧のための言葉。
本当、彼は彼女を深く愛しているな。
「キャ……ハハッ……何かいうておる……ッ!!　面白いのう!!　楽しいのう!!　十二鬼月である私に殺されることを光栄に思うがいい!!」
「十二鬼月?」
不意に、朱沙丸が十二鬼月という単語を口にする。
純粋な疑問をぶつけるように、静かにそれを繰り返せば、背後から珠世さんの声が聞こえてきた。
「鬼舞辻直属の配下です!!」
「遊び続けよう!!　朝になるまで!!　命尽きるまで!!」
朱沙丸が再び鞠を構える。
「だからそれ、意外と隙があるんだよアホ。」
すかさず一気に距離を詰めて刀を振るえば、朱沙丸は慌てたように距離を取り、また鞠を投げようとする。
「馬鹿の一つ覚え。鬼なら素手でかかってきたらどうだ?　人間程度、その腕力でも潰せるだろ。」
呆れたように言葉を紡ぎ、すぐに呼吸を使用する。

〝水の呼吸　拾ノ型　生生流転〟

水の呼吸に使用する特徴的な足運びをあえて封じ、うねる龍の如く斬撃を重ねて放つ連続技。

水の呼吸で一番強いとされているが、デメリットもかなりあるそれを放てば、朱沙丸はそれを全て躱すことに集中する。

「ぐうっ!!」

なかなか攻撃ができないからか、朱沙丸が表情に焦りを見せる。

そんな中私は朱沙丸を相手にしながらもう一つの匂いを嗅ぎ分けていた。

「炭治郎。木の上に鬼が一体いる。ちょいとばかし引き摺り落としてきてくれるか？それまでこの目の前の鬼の攻撃封じとくから。炭治郎も私と同じで鼻が利くし、一定距離に近づければ位置が分かるはずだ。」

「む!!」

それにより矢琶羽の匂いが理解できた私は炭治郎に木の方へと向かうように指示をする。

炭治郎はすぐに頷いたあと、その場から走り出した。

彼が向かったのは一本の木。

そこの枝に跳躍した炭治郎は、すかさず木の上にいた矢琶羽に蹴りをかましていた。

「なんとか匂いを嗅ぎ分けれたが、厄介なことには変わらないな……。まぁいい。珠世さん。一応聞きますが、本当にこいつらは鬼舞辻に近い連中なのでしょうか？　だとしたら、まだ癸である私がこうまで技を封じることはできないと思いますが……。」
「おそらく……ですが、私にもよくわかっていません。あまりにも弱すぎるような気もするので……。」
　それを見ながら、珠世さんに声をかければ、彼女はよくわからないと言葉を紡ぐ。
　まぁ、十二鬼月が癸程度の鬼狩りに技を封じられるはずもないし、混乱するのも無理はない。
「そうですか。まぁ、どちらにせよ血は入手した方がいいですね。安全確保のためにも、まずはおとなしくしてもらう必要がある……。鬼狩りの時間といたしましょうか。」

32．戦闘、決着、矢琶羽＆朱沙丸！

「土埃を立てるな!!　汚らしい!!」
「!!」
さて、どうやって倒してくれようか……〝透き通る世界〟に入っていたら血鬼術が見えるんだろうか？
朱沙丸の攻撃を封じながら考えていると、ふくじゅんボイスの怒鳴り声と共に、炭治郎の匂いが勢いよく近づいてくることに気がつく。
炭治郎にダメージを喰らわせるわけにはいかないと判断した私は、打ち潮を使用して朱沙丸の腕を斬り落としたあと、飛んできた炭治郎を片手で抱え、一旦後方に飛ぶ。
「すまん、愈史郎さん。あの無駄にいい声してる鬼の攻撃が見えないんだけど、見る方法ってない？」
「なんで俺を頼るんだ!!　ないこともないが!!」
「見えなかったら時間かかりそうだからだって。あんまり時間かけたくないし、私も怪我したくないからさ。」
「チッ……だったら俺の視覚を一時的に貸してやる!!　これを貼っとけ!!」

「いでっ!!　ったく……珠世さん以外には優しくないんだから。まぁ、ありがとさん。」
そして、一時的に愈史郎に近寄り、矢琶羽の矢印を見る方法はないかと問い掛ければ、でこに思い切り平手で何か……いや、あの血鬼術による札を貼りつけられた。
かなり強めに叩かれたからちょっと痛い。
けど、まぁ、力は貸してくれたからよしとしよう。
「むーー!!」
「炭治郎。大丈夫だから落ち着け。少し額が赤くなる程度だよ。これくらいはまだ怪我じゃない。ほら、続きいくぞ。」
「……む!!」
私を叩くような形で愈史郎が札を私に貼ったからか、炭治郎が少し愈史郎に怒った。
まぁ、すぐに私の声を聞いておとなしくなってくれたからよし。
「威力は凄まじいが、あの鏤の鬼は攻撃が単調だ。だから鏤が投げられる前に鏤の鬼を攻撃すれば、一方的な防戦を強いることができる。禰豆子が戻ってきたら、彼女にも参加させて連携を取れ。その間、厄介な男鬼の方は私が引き受けるから。互いに無茶しないように、頑張るぞ炭治郎。」
「むん!!　むーーー!!」
「う?」

「むー！」
「むん!!」
炭治郎のやる気は十分。
ちょうど禰豆子も戻ってきたから形勢はそれなりに有利なはず。
二人の怪我はこれで軽減できるだろう。
……つか、やっぱり兄妹だなこの二人組。
〝む〟と〝ん〟だけで会話成立しちゃってるよ。
私にも内容はわかるけど。
「じゃあ、サクッと終わらせて安全確保をするとしますか!!」
そう思いながら、私が矢琶羽の方へと走り出せば、炭治郎と禰豆子の二人は私の指示通り朱沙丸の方へと走って行き、まず炭治郎が攻撃をして、躱されたら禰豆子が続くような形で彼女に襲いかかる。
「なんじゃお前ら!!　ぐっ!!　絶妙に時間差で襲ってきて鬱が投げられん!!」
鬼兄妹同時に襲われている朱沙丸が焦りの声を上げる中、私は矢琶羽に走り寄る。
日輪刀をしっかりと手にして、頸を斬らんと行動する。
「何という薄汚い子供じゃ。儂の側に寄るな。」
そう言って矢琶羽がこちらに掌を向けてきた。

掌にある矢印が描かれた目がバチンと一つ瞬きをする。
そのタイミングで跳躍すれば、矢印の効果範囲外に抜け出すことができた。
あと一歩で届かないという状態にはならない。
〝水の呼吸　捌ノ型　滝壺〟
同時に私は日輪刀を振り上げ、滝壺を使用する。
「!!」
矢琶羽は慌てて攻撃を避けるために後方に飛び、再び矢印を使用しようとした。
「ぎゃっ!!?」
まぁ、そんなの食らうつもりはないので、その矢印の目を掌ごと縦に斬ったけど。
〝水の呼吸　壱ノ型　水面切り〟
痛みに声を漏らした矢琶羽の頸目掛けて一閃する。
一瞬の隙につけいられた矢琶羽の頸は胴体とすぐにサヨナラした。
「くっ……!!　おのれおのれおのれ!!　お前の頸さえ持ち帰れば、あの御方に認めていただけたのに!!　許さぬ!!　許さぬ許さぬ許さぬ!!　汚い土に俺の顔をつけお……」
「悪あがきしたって無駄だっての。とっとあの世に直行しなってな!!」
「ぎゃっ!?」
恨みごとのように言葉を紡いでいた矢琶羽の顔面を真っ二つに斬り裂き、すぐに置き

土産ができないようにと残っている掌の目も二つに斬り裂く。
それが止めとなったのか、矢琶羽は完全に事切れて、程なくして塵となり消えていく。
「よし。」
厄介な矢印は無くなった、そう思いながら朱沙丸と戦う炭治郎と禰豆子の元へと向かう。
二人は私の指示通り、上手く連携を繋げながら朱沙丸相手に立ち回っており、彼女の攻撃をしっかりと封じていた。
「よ、炭治郎、禰豆子。お疲れ。片方は片付けて来たから、あとは姉ちゃんに任せときな。」
「ん!!」
「むん!!」
「!?」
炭治郎たちに声をかけながら駆け寄れば、二人はすぐにその場から後退するように飛び退く。
それと入れ替わるように朱沙丸の前に姿を見せれば、急に離れた二人のせいで反応が遅れた朱沙丸と目が合う。
「命を狙われたらやり返す。それがこの世の理ってもんだよ。悪いけど、あんたはこの

場で倒す。」

そんな彼女に不敵な笑みを見せながら、私は両腕をクロスさせ、そのまま一閃する。

〝水の呼吸　壱ノ型　水面斬り〟

月光を反射しながら煌めいた刃は容赦なく朱沙丸の頸に牙を剥く。

彼女の胴体と頸は、この一撃だけで分かたれた。

「バカ……な……!!　鬼狩りの……子供如きに……!!」

ショックを受けたように呟く朱沙丸。

茫然と塵となる自身の体を見つめながら、彼女は静かに固まっている。

そんな朱沙丸に、珠世が静かに近寄り、彼女の瞳をじっと見つめる。

「……優緋さんが疑問に思っていた通り、この方は十二鬼月ではありません。本物の十二鬼月は眼球に数字が刻まれているはずです。しかし、この方には刻まれていない。もう一方もおそらく十二鬼月ではないでしょう。弱すぎる。」

そして、静かに朱沙丸と、矢琶羽は十二鬼月ではないと口にしては、どこからともなく注射器を取り出し、まだはっきりと形が残る朱沙丸の体から血液を採取する。

「……ふむ……となると、鬼舞辻から私の首を持って来たら十二鬼月にしてやるとでも言われて乗せられたのかもしれませんね。私のことを狙っていたし。」

「はい。おそらくはそうでしょう。」

珠世さんと静かに会話をする中、朱沙丸は完全な塵と化し、風によって飛ばされる。

……うん、結構呆気なかったな。

３３．珠世と愈史郎との別れ。新たな旅立ち。

矢琶羽と朱沙丸との戦闘を終え、再び珠世さんの家……といっても、外観はボロボロだから地下室の方だけど、私たちはそちらに移動した。
「少々お待ちください。炭治郎さんと禰豆子さんの体調検査と、最初の血液採取を行いますから。」
「わかりました。こちらで待っておきますね。」
すると珠世さんは、一旦炭治郎と禰豆子の二人を検査することを伝えて来た。
私はすぐにそれを承諾し、二人を珠世さんに預ける。
炭治郎と禰豆子は、少しだけしょんぼりした様子で私の方を見つめて来たが、小さく笑いかけてやれば、すぐに珠世さんについていった。
……少しだけ獣のような唸り声が聞こえる。
おそらく、奥の方に鬼に変えられた男性が閉じ込められているのだろう。
そんなことを考えながら少しだけ目を閉じる。
完全に眠ったりはしないけど、少しだけ視界に入る光を遮って、数分でもいいから休息を取りたかった。

いくら呼吸の連発により体力があまり削られることがないと言えど、わずかながらの疲労は発生する。

放置していると、いずれはそれが蓄積されて、どっと疲れてしまうだろう。

塵も積もれば山となる……まさにその通りだと思う。

最終選別を越えた時も、いつの間にか大きな疲労に襲われて、気を失うように眠っていたしな。

それなら、炭治郎と禰豆子を珠世さんに預けている間くらい、休む程度は許されるはずだ。

そう思いながら私は、そろそろ始めようと考えていた、全集中の呼吸・常中の訓練の一環として、全集中の呼吸を意識しながら少しだけ休む。

まぁ、そこそこきついけど、ヒノカミ神楽を七時間くらい舞い続けるくらいには進化してるから、特に気にするほどじゃない。

わずかな常中であれば、回復の方が優先されて、疲労は取り除かれる。

と、不意に軽い衝撃を感じ取ることができた。

「ん？」

「むん！」

「ん！」

目を開けてみるとそこには炭治郎と禰豆子の姿。
どうやら珠世さんの診察が終わっていたらしい。
「おかえり、炭治郎。禰豆子。その様子だと問題はなさそうだな。」
抱きついてきた炭治郎と禰豆子の頭を優しく撫でながら話しかければ、二人は無邪気な笑顔を見せたあと、くるりと踵を返して珠世さんと愈史郎のもとへと走っていく。
そして、禰豆子は珠世さんを優しく抱きしめて、炭治郎は愈史郎の頭を撫で始めた。
「愈史郎さん。すごい表情になってますよ?」
「こいつらが馴れ馴れしくしてくるからだ!!　お前の弟と妹だろ!?　なんとかしろ!!　特に珠世様にひっついている妹をなんとかしろ!!　もちろん弟の方もだからな!?」
「はいはい。」
少しだけ面白くて笑っていると、愈史郎が炭治郎と禰豆子をなんとかしろと怒鳴ってきた。
もう少しこのほっこりする景色を眺めていたかったが、すごい顔をしてるのが一名いるからな。
「炭治郎。禰豆子。こっちにおいで。姉ちゃんちょっと寂しいなぁ?」
「!!」
二人のことを呼び寄せ……いやいやいや速すぎるわ二人して!!

「おっふ……」

なんとなくおふざけで口にした言葉なんだが、二人は本気にしちゃったようで、竈門兄妹のサンドイッチになる私であった……。

嬉しいし美味しいシチュエーションだけどね、竈門兄妹サンド。

「はは。ありがとうな。」

まぁいいや。

二人がギュッとしてくれるなら受け入れよう。

役得だし。

ぬっくいなぁ……。

「あの……優緋さん……。そのお二人は……。」

「ん?」

竈門兄妹サンドにホクホクしていたら、珠世さんが不思議そうに声をかけてきた。

ふむ……これは……どうして二人は自分たちの頭を撫でたり、抱きしめたりしたのかという質問がしたいのかな?

「ああ……多分、炭治郎と禰豆子は珠世さんと愈史郎さんが、家族の誰かに見えてるんだと思いますよ。」

原作でも同じ質問をしてきたし、きっとこれが答えだろうと思いながら、抱きついて

きている炭治郎と禰豆子の頭を優しく撫でる。
　すると二人はシュルシュルと幼子サイズになり、私に両手を伸ばしてきた。
　禰豆子の前にしゃがめば、彼女は私の背中にすぐに乗る。
　落とさないようにしっかりと支えて中腰になり炭治郎を引き寄せれば、彼は私の首のうしろに手を回してきた。
「落ちるなよ、二人とも。……よっこいしょ……っと。」
　それを確認して炭治郎を持ち上げれば、おんぶと抱っこで二人の子供の面倒を見るお母さんスタイルの出来上がりだ。
「……しかし、炭治郎さんと禰豆子さんにかかってる暗示は、人間が家族に見えるものでは？　私たちは鬼ですが……。」
　私が竈門兄妹を抱き上げているのを見届けた珠世さんが静かに口を開き、もっともな質問を口にした。
「そうですね。それは否定しません。しかし、炭治郎と禰豆子は二人を人間と判断していました。私の指示ももちろんありますが、二人の意思もしっかりとあったと思います。暗示という言葉に、多少なりとも抵抗があって、少しばかりどうなのか……と思ったりもしましたが、今回のことで確信できました。二人にはちゃんと本人の意思も宿っている。安心しましたよ。」

穏やかな笑みと穏やかな声音で、珠世さんにそう伝えれば、彼女は綺麗な両眼からポロポロと涙をこぼし、その場に蹲ってしまった。

ふと、言葉を発しない愈史郎に目を向ける。

彼は、どことなく物思いにふけている。

自分の過去を……珠世さんから伝えられたであろう言葉を思い出しているのだろうか。

しばらくして……。

「私たちはこの土地を去ります。鬼舞辻に近づきすぎました。早く身を隠さなければ、危険な状態です。それに……うまく隠しているつもりでも、医者として人と関わりを持てば、鬼だと気づかれる時がある。特に子供や年配の方は鋭いです。」

だいぶ落ち着いた様子の珠世さんが、自分たちのこれからを話してくれた。

確かに、私を追ってきていた様子だったとはいえ、あの二体は間違いなく鬼舞辻から指示を受けて私を殺しにきていた。

自分たちが標的ではなかったにせよ、今回の騒ぎで無惨が珠世さんに気がついていないと言い切れると問われたら、わからないとしか答えれない。

かなり危険であるのは間違いないだろう。

「そうですね。それがよろしいかと思います。初対面であるはずなのに、私の特徴を知っていた時点で、軽く鬼舞辻と接触してしまった私のことを彼は記憶したということになりますから。」

珠世さんの判断は正しい。

そう思いながら同意の言葉を紡げば、彼女は私の名前を呼んできた。

「炭治郎さんと禰豆子さんは、私たちがお預かりしましょうか？」

首を傾げながら珠世さんに目を向けてみると、彼女は炭治郎と禰豆子を自分たちが預かろうかと口にしてきた。

……愈史郎がすごい形相をしているのが視界に入るけど、うん、無視しておこう。

「絶対に安全とは言いきれませんが、戦いの場に連れて行くよりは危険が少ないかと。」

「……。」

珠世さんの言葉に黙り込む。

彼女の判断は、きっと正しいものだと思う。

戦いの場に出る私と一緒にいれば、必然的にあらゆる危険に晒されてしまう。

場合によっては、一緒に行動を取る鬼殺隊の隊士に狙われる可能性もある。

けど……

「ありがとうございます、そう言ってくださって。ですが、私は二人と一緒に行きます。

大切な宝物……大切な家族を、もう二度と手放したくないし、離れ離れにもなりたくないので。」

私は二人を連れて行く。

原作の炭治郎もそうしたからじゃない。

大切な家族を手放したくないから。

それに……

「それに、この子たち、年齢とは裏腹にすっごく甘えん坊で、多少でも長い間私と離れ離れになっていると、かなり不安になってしまうようなんですよ。最終戦別の時も、眠ってる二人を師の元に預けて七日間離れていたのですが、戻ってみたら炭治郎がかなり泣いてしまっていて……。大切な家族の心労を少しでも減らすためにも、悲しませないためにも、私は二人を連れて行きます。」

苦笑いをしながら珠世さんにそう伝えると、彼女はクスクスと小さく笑った。

つられて私も笑っていると、炭治郎と禰豆子が二人して私に擦り寄ってきた。

どことなく上機嫌だけど、落ちないようにと私に回してる腕は、離れないでという感情が感じ取れるものだった。

「……わかりました。では、武運長久を祈ります。」

「……じゃあな、俺たちは痕跡を消してから行く。お前らももう行け。」

珠世さんが穏やかに、愈史郎がどことなく素っ気なく言葉を紡ぐ。
「ええ。もちろんそのつもりですよ。日が差しているので、二人を守るための箱を持ち次第すぐにでも。」
私も二人には穏やかな声音で言葉を返し、二人を入れるための箱を取りに行くため行動を取ろうとする。
「優緋。」
が、不意に聞こえてきた愈史郎の声に反応して彼をみてみると、愈史郎は背中を向けたまま
「昨夜の発言は撤回する。お前の妹は美人だよ。」
呟くように、昨夜の発言の撤回を口にした。
「……当然ですよ。まぁ、珠世さんには及ばないと思いますがね。」
だったらと彼に珠世さんには劣るだろうと返してやれば、愈史郎は小さく鼻を鳴らし
「当然だ。珠世様は誰よりもお美しい方なのだから。」
大胆にも、本人の前で美しいという言葉を口にした。
まぁ、すぐにハッとしては顔を真っ赤にして、あたふたと照れ始めたけどね。

34．登場、我妻善逸！　やっぱ私も求婚対象なのか…

「南南東！南南東！南南東!!　次ノォ場所ハァ南南東!!」
「はいはいわかってるから。ったく、ちょっとくらい静かにしてくれよ天王寺。つか普通に話してくれ……」
「ダカラ様式美ッテ言ッテルダロ。」
「だとしてもうるさい。炭治郎と禰豆子が起きたらどうしてくれんの。この子らにはしっかりとした休息が必要なんだから。」
あれから、珠世さんと愈史郎の二人と別れた私は、天王寺の案内に従って、浅草から南南東の方へと足を進めていた。
こいつ、意外と話がわかってくれるので、静かにしてくれって言ったらちゃんと普通に話してくれる。
なんで炭治郎にはあんなに当たり強かったのか……と少しだけ思った。
……男女の違いか？
「頼むよ!!」
「あ？」

なんて考えていると、かなりの大きな声が聞こえてきた。
見事なまでのしものボイス……明らかに善逸だ。
「頼む頼む頼む!!　結婚してくれ!!　いつ死ぬかわからないんだ俺は!!　だから結婚してほしいというわけで!!　頼むよォーーーーーーッ」
「……なーにやってんだあのキンキラキン。」
「気持チ悪イナ　道ノ真ン中デ女ニ　スガリツイテ……。男ダッタラ　女カラ　スガリツイテクルヨウニナレヨ　俺ミタイニ。ミットモネェゼ……。優緋。オ前モ　アンナ男ト籍入レスンノハ　止メテオケヨ。頼モシクテ　シッカリトシタ　スガリツケルヨウナ　男ヲ　オススメスルゼ。」
「めちゃくちゃ流暢に話し始めたな天王寺……。」
「流石ニ　アレヲ見タラナ。忠告クライ　シタクナルッテ　話ダ。人間ノ美醜ハ　鴉ニハ　ワナラナイガ　モットイイ男ニ　オ前ハ　出会エルト思ウゼ。勘ダガ。」
「勘かい……。」
天王寺とドン引きしながら会話をする。
結婚してと女の子にすがりつく善逸と善逸にすがりつかれている女の子を見ながら、鴉と会話する女って、側から見たらシュール以外の言葉がないな……。
まぁそれはそれとして、この会話でよくわかったのは、天王寺は私が女だからそれな

りに気を使ってくれているということだ。

……突かれないし、やかましいって言ったら大人しくしてくれるから女でよかったよ。

……じゃなくて。

善逸をまずは落ち着かせて……

「チュンチュン!!」

「ん?」

一旦善逸を止めようと一歩足を踏み出すと、一羽の雀が私の元に飛んできた。

手のひらを差し出してみると、雀はすぐにそこに乗り

「チュン!　チュン!」

訴えかけるように羽をパタパタさせながら鳴き始めた。

「なるほど。まぁ、確かに私は女だけど、やるだけやってみるよ。キンキラ少年が私に意識を向けてくれたら、彼女を離すこともできるだろうしな。」

不思議と、私は雀の言葉がわかった。

〝あの剣士、ずっと女の子にすぐちょっかい出す上、色々と煩くて困ってるんだ。おまけに仕事にも行きたがらないし。女の子であるあなたに頼むのは申し訳ないけど、落ち着かせるのを手伝って〟と言っていた。

いやぁ、鬼滅の世界で動物会話を身につけることになるとはね。
まぁ、面白いけどさ。
そんなことを思いながら、私は善逸に近寄る。
「助けてくれ!!　結婚してくれ!!」
「こらこら。そこのお嬢さんがかなり困ってるだろう？　女の子の感情の機微がわからないようじゃ、婚姻成立は夢のまた夢だと思うけど？」
「へ？」
そして、いつもの軽い調子で善逸に話しかければ、善逸はハッとしては顔を上げてきた。
そして目を見開いて固まる。
ああ、なんとか意識をこっちに向けることができたみたいだ。
「あんた、今のうちにこの場から立ち去りなよ。怖かったな。もう大丈夫だから。」
「は、はい！　ありがとうございます！」
それを確認した私は、すぐに善逸に絡まれていた女の子にこの場から立ち去るように声をかける。
女の子はすぐに善逸から離れて、パタパタとその場から立ち去っていった。
「やれやれ……。男ならもうちょっと女心理解しなよ。さっきの彼女、結構な迷惑に

なっていただろうよ。まぁ、それは今はいいか。ほら。さっさと立ちなよ。涙も拭いてさ。男がいつまでも地面に這いつくばるなんてみっともないと思うけど？」

女の子を見送った私は、軽く呆れながらも地べたに座り込む善逸に手を差し伸べ、さっさと立つように促す。

が、それはすぐに間違いだったかもしれないと判断した。

だって、善逸が両手で差し伸べた手を逃さんとばかりに掴んできたからね……。

「……。」

思わず無言になる。

嫌な予感しかしないのだが……？

「君、最終選別の時に女の子を守っていた子だよね!?　あの時は混乱していたしいろいろいっぱいいっぱいだったから気づかなかったけどすごく可愛い女の子だったんだ!!　こんな俺にも優しく手を差し伸べてくれてるってことはそういうことだよね!?　さっきの子を追い払ったのもつまりはそういうことだよね!?　だってすっごく優しく声をかけてくれてるもん!!　それ以外なんてありえないよね!?　なぁ、頼む!!　頼むよぉ!!　俺すっごい弱いからいつ死んでもおかしくないの!!　きっと明日には死んでるとしか思えないの!!　だから死ぬ前に少しでも幸せな生活を女の子と送ってみたいわけで!!　なぁ!!　結婚してくれよォーーーーッ!!」

「ええ……？」

うん、嫌な予感は的中したわ。

やっぱり善逸にとっては女である私も十分求婚対象なんだな。

見境ないところとかあるし、女の子に触ってもらえるってだけでしんどいはずの訓練も笑顔で受けてるもんな……。

……勘弁してくれよ。

「悪いが、私は頼りない男に娶られるつもりはないんだ。強くてたくましくて頼もしくて、それでいて側にいて楽しいと思える相手が理想でね。まぁ、君が多少なりとも強くなるために修行するなら、考えなくもないけど、今の君は、ちょっとお断りしたいかなぁ？」

「なんでェーーーーッ!!　俺に手を差し伸べてくれたじゃん!!　それって俺が好きだからでしょ!?　女の子追い払ったのも嫉妬からでしょ!?　断る理由なんてないじゃんかァーーーーッ!!　おゞねゞがゞいゞたゞかゞらゞおゞれゞとゞけゞっゞこゞんゞしゞてゞエゞーーーーッ!!」

……なんで手を差し伸べてくれたイコール自分のことが好きだからという思考になるのか永遠に謎になりそうだ。

あの女の子相手にも、蹲ってる自分を心配して話しかけてくれたんだからイコール俺

が好きってこと……みたいな考えからだったもんな。

ある意味で、この子も頭のネジが飛んでいるのかもしれない。

……それより、しっかりきっぱり断らないと、炭治郎と禰豆子が暴れそうだ。

どうやってこれ落ち着かせりゃいいのかね……？

３５．一旦落ち着かせて鬼の住処へ

「多少は落ち着いたか？」
「う、うん……ごめん……。」
とりあえず善逸を黙らせるために物理で軽く殴ったら、ようやく彼は落ち着きを取り戻した。
呆れたような目を向けるとごめんなさい……と謝罪するくらいにはなったのでひとまず安心か。
「全く。男ならもうちょっとシャキッとしなよ。なんであんな取り乱すかな……。」
「だって……俺すごく弱いから……。鬼となんて戦ってもすぐに死んじゃうに決まってるんだ。」
「最終選別越えてんのに？」
「むしろ最終選別で死ねると思ってたくらいだよ!!　なのに運良く生き残るから恐怖ばかりの生き地獄に逆戻りだよ!!　女に騙されて借金したあげく借金を肩代わりしてくれた〝育手〟から地獄の鍛錬でしごかれただけでもいっぱいいっぱいだったし恐怖しかなかったのにさらに追い討ちでこの始末だよ!!」

ギャーンッて効果音が聞こえてきそうなほどに発狂してる善逸に苦笑いをする。
原作やアニメからすげぇ奴だなとは思っていたけど、リアルで見るとさらに凄まじいな……。
「ほらほら落ち着けって、な？　あ、おにぎりあるけど食べる？　なんか腹に入れたら多少は気が楽になるだろうし、な？」
「……食べる……。」
あー……これからこいつのお守りもしないといけないのか……と少しだけ遠い目をしながらも、私は自身の荷物にある昼飯用のおにぎりを善逸に差し出した。
善逸は包まれていたおにぎりを二つほど手に取り、むぐむぐとハムスターの如く頬張り始める。
うん、多めに作っておいてよかった。
「そういや、名前言ってなかったね。私は竈門優緋。あんたは？」
「我妻善逸……。えっと……優緋ちゃんって呼んでいい？」
「もちろん。私もあんたのことを善逸って呼ぶから。」
おにぎりで発狂が治まった善逸を見た私は、すぐにその場から南南東へと足を運ぶ。
「あ、待って待って待って!!　俺を置いて行かないで!?」
すると善逸はすぐに私を追いかけてきて隣に並ぶ。

「そうは言われてもな。指令が入ってるから足を止めるわけにもいかないんだよ。少しでも鬼の被害を少なくするためにも大切なことだしな。もう、私みたいに鬼によって家族を失うなんて目に遭う人を出したくないし。」

横に並んできた善逸に対し、私は一秒一秒が惜しいことを告げ、そのまま軽く早足で移動する。

善逸は慌てて私のあとを追ってきていた。

……しばらくして。

「天王寺。ここであってるのか？」

「アア。指令ニヨルト　ココニ鬼ガ巣食ッテルッテ　話シダ。」

「ふぅん……随分とご立派なご自宅に住み着いてることで。まぁ、確かに血の匂いもあるし、複数の鬼の匂いと、あまり嗅いだことない不思議な匂いも……」

「なんで平然と優緋ちゃんカラスと話してるの？　っていうか匂い？　何か匂いする？　それより何か音しない？　ところで俺たち、やっぱり共同で仕事するの？」

「……質問多いな。仕方ないだろ。同じ場所にきたんだから。てか音って何？」

互いに質問合戦をその場で行う。

側から見たら緊張感のカケラもないような様子に見えなくもないかもしれない。

実際は結構警戒してるし、善逸は震えてるけどな。

「ん？」

「!!」

なんて考えていると、不意に二人分の人の匂いかしてきた。

匂いの方へと目を向けてみると、そこには小さな男の子と女の子の姿が。

確か……てる子と正一だったかな。

「……やぁ、こんにちは。」

「「こ……こんにちは……。」」

登場人物の名前を思い浮かべながら、私は極力穏やかな声と笑みで二人に話しかける。

二人はすぐにこちらの挨拶に言葉を返してくれた。

「フフ……ちゃんと挨拶できて偉いな。……私たちより先にここにいたみたいだね。少しだけ、何があったか話を聞いても？　ああ、もし辛いようであれば、無理に話す必要はない。君らの思うように。」

これは、手乗り雀をしなくても話をしてくれるかもな？と思いながら、極力緊張がほぐれるようにと穏やかな声音で言葉を紡いでいく。

すると、二人は顔を見合わせたあと私の方を向き、その瞳からボロボロと涙をこぼし

始めた。
　嗅ぎとれた匂いは安堵と恐怖と悲しみ。
　安堵はおそらく私に対して。
　恐怖は鬼、悲しみは兄に対してだろう。
「……この家は君らの家かい？」
　そんなことを思いながら、私は二人に質問する。
　二人はすぐに首を左右に振り、自分たちの家ではないと否定する。
「それじゃあ、誰の家かな？」
「……化け物の……家……です……!!　兄ちゃんが連れてかれた…!!　夜道を歩いてたら、俺たちには、目もくれないで、兄ちゃんだけ……!!」
　震えながら正一は、てる子を抱きしめつつも誰の家であるかを口にした。
　うん、勇気のある子だ。
「二人であとをつけてきたのか？　勇気ある子らだね。君らがいなかったら多分、私たちは気づけなかったよ。」
「……うう……兄ちゃんの……血の痕を辿ったんだ……。怪我してたから……っ」
　本格的に泣きそうになっている正一の頭を優しく撫でながら、私は大きな屋敷に目を向ける。

だが、すぐに二人に視線を戻して、小さく笑いかけながら、
「大丈夫。私が……私たちが悪い奴を倒して、二人の兄ちゃんを助けるよ。」
二人の兄貴を助けてくると言葉にした。
「ほんと？　ほんとに……？」
「ああ。私は嘘は苦手でね。本当のことしか言わないよ。」
てる子の問いかけに素直に頷いた私は、二人を同時に抱きしめて、ゆるゆるとその頭を撫でる。
「ねぇ、優緋ちゃん。」
そんな中、善逸から声をかけられる。
視線だけそっちに向けてみると、善逸は片耳を押さえて屋敷を見つめていた。
「この音、何なんだ？　気持ち悪い音……ずっと聞こえる。鼓か？　これ…」
混乱したように紡がれた言葉。
善逸の表情はどことなく青い。
不安が表に浮かんでる。
「音？　私には音なんて聞こえないけど……!!」
そこまで言って、私は不意に感じ取れた近づいてくる血の匂いに気づき、慌てて正一とてる子の視界と聴覚を遮るように頭を抱き寄せる。

同時に鼓の音が辺りに大きく一つだけ響き渡り、屋敷の中から一人の男性が血だらけで飛ばされてきた。

ドシャリと地面に落下する音。

あまり聞いていていい音じゃない。

「お、姉ちゃん？」

「どうかしたの？　何も聞こえないよ？」

「……君らが聞く必要も、見る必要もないものだよ。いいか？　私が大丈夫だと言うまで決して目を開けたら駄目だ。耳もしっかりと塞いでくれ。」

「う……うん……。」

正一とてる子が混乱したように声をかけてきたため、私はすぐに二人は見る必要も聞く必要もないものだとごまかして、一旦耳を塞ぎ、しっかりと目を閉じるようにと声をかける。

こちらの声音から何かを察したらしい正一とてる子は、小さく頷きながら、私の言う通りの行動をとった。

それに少しだけ安心しながら、私は二人から離れる。

念のために自分が上に羽織っていた羽織を、二人の頭からかぶせて。

「大丈夫……ではなさそうだな。何があったか話せるか？　話せないようなら口を開か

なくていい。すぐに手当てを……」
「出ら…せっ…かく…」
「！」
魂が抜けてしまったかのように固まる善逸のことは無視して、血だらけの青年に声をかければ、途切れ度切れに言葉を紡ぐ。
「あ…あ…出られ…たの…に…。外に…出ら…れた…のに……死…ぬ…のか…？　俺…死ぬ…の…か……？」
「っ……」
その言葉にすぐに手当てをしようと、荷物から道具を取り出す。
だが……取り出したところで、目の前の青年は目を閉じてしまう。
イレギュラーが起きていてくれと願いながら心臓と脈に手を当てるが、鼓動は一つも感じれなかった……。
「……。」
思わず拳に力が籠る。
私が入ったところで、物語上で命を落としていく人たちはやはり死んでいく……。
それが悔しくて、同時に不安に襲われて……。
……私は……本当に人を……助けることができるのか……？

「……善逸。この人を、埋葬してやってくれ。私は、あの子らに話を聞いてくる。あの子らの兄貴がどんな特徴をしているのか……それがわからなければ、助けることはできない。」

ぐるぐると不安がよぎる中、私は、善逸に目の前で命を落としてしまった青年の埋葬を頼む。

善逸は私に心配そうな目を向けてきたが、最優先事項があるから、彼に目を向けることができない。

「……もう大丈夫だよ。ごめんな、急に目を閉じろなんて言って。……君らのお兄さんの特徴を教えてもらえるかな？　助けるためにも必要だから。」

「うん。兄ちゃんは、柿色の着物を着てる……。」

「柿色……そうか。わかったよ。」

善逸が青年を正一たちの視界に入らないようにと移動させてくれたのを確認した私は、不安を押し殺しながらも、二人に兄貴の特徴を問う。

すると、正一がすぐに兄貴の特徴を教えてくれる。

私は小さく笑いかけて、二人のすぐ側に炭治郎と禰豆子が隠れている箱を置く。

「もしもの時のために、この箱を置いていく。何があっても二人を守ってくれるから。」

そして、二人に炭治郎たちの詳細は話すことなく、もしもの時は守ってくれるからと

伝えてから屋敷の方へと歩みを進める。
「ま、待ってよ優緋ちゃん!!　女の子を一人で行かせるわけには行かないから俺もいくよ!!」
すると、それを追うように善逸がついてきた。
彼に目を向けてみると、恐怖を感じている時に感じ取れる匂いがした。
だけど、私についてくる意思もしっかりと感じ取れる。
「……ありがとさん。」
小さく笑いながら感謝の言葉を述べると、善逸も小さく笑った。
先程まで感じていた私に対する心配の匂いはまだしているけど、多少なりとも薄れているようだった。

３６．潜入、鬼の屋敷!

正一とてる子と離れ、優緋は善逸と二人で屋敷の中へと入る。
かなり広い出入口だ。
なんでこんな屋敷が人気の少ないところにあったのやら……。
血鬼術が影響してるんだったか?
うーん……相変わらず鬼滅の世界はファンタジーがいっぱいありすぎて、謎が尽きないな。
まぁ、だからこその和風ファンタジーなんだけどさ。
「ゆ、ゆゆ、ゆ、優緋ちゃん!　優緋ちゃんのことは絶対に俺が守ってあげるから!!　怖いけど!!　逃げたいって思っちゃうけど!!　絶対、絶っっっ対に女の子である優緋ちゃんを置いて逃げたりしないから!!」
「はは。ありがとう、善逸。でも、私だってちゃんと鬼殺隊の一員だから、無理して守らなくても……」
「だだだ、だって!!　優緋ちゃんが死んじゃったら誰が俺と結婚してくれるの!?」
「いや、他にも可愛い子はいっぱい……」

「絶対に守るから!!　弱いけど頑張るから!!」
「は……はは……。どうも……。」
そういや善逸って、戦いの場に禰豆子を連れて行っちゃった炭治郎を追いかけてたな。
女の子を危険な場所に連れてくなって。
まぁ、多分、女の子は男が守るものって認識が強いんだろう。
別に私のことは守らなくてもいいのにね……。
「って、なんで着いて来ちゃってるんだ君らは!!」
「ヒィッ　え?!　何!?」
「後ろ後ろ。」
「え、あ、あの子たち!!」
なんて考えていたら、正一とてる子の二人の匂いが近づいて来ていることに気づき、慌てて声をかける。
善逸が一瞬混乱したけど、私が後ろだと声をかければ、正一とてる子の姿に気づき、目を丸くした。
「お、お姉ちゃん!!　あの箱、カリカリ音がして……!!」
「あ……ああ、それは驚かせちゃったな……。謝るよ。でも流石に置いてこられるのは

ちょっとお姉ちゃん傷つくかなぁ……？　あれは私の命より大切なものだから……」

恐怖とパニックに襲われている二人を見て素直に謝罪する。

心細い中、急に箱から物音がしたりしたら、怖いからね、うん。

ホラー映画とか、心霊番組の怖いところをたまたま見てしまって泣きたくなる中、急に不意打ちで音が聞こえて来たり、声をかけられたりして悲鳴を上げて泣きたくなった経験がある身としてはわからなくもない。

けど、やっぱり炭治郎と禰豆子の二人が怖がられた上、置いてけぼりにされたのは悲しいと言うか虚しいわけで……。

かなりのショックを受けていると、不意に大きなものが床を踏ん付けたような軋む音が聞こえてきた。

驚いて側にいたてる子を抱きしめ顔を上げていると男の悲鳴と同時に軽い衝撃に襲われる。

バランスを崩しながら衝撃が感じ取れた方に目を向けてみると、そこには顔を両手で覆いながら、お尻を突き出してる善逸の姿があった。

「うわ!?」

「あっ!!　ごめん…!!　尻が!!」

善逸の謝罪が途切れる。

同時に辺りに鼓の音が響き渡った。
音がなくなるのを見計らって顔を上げると、先程までいた玄関の景色ではなく、一室の部屋に移動する。
「マジかよ……。」
思わずポツリと呟く。
血鬼術で空間転移とか、本当になんでもありだ。
無限城も大概だがな、琵琶の音で城全体がめちゃくちゃに変化するし。
「ううう……」
「！」
元の世界ではありえない出来事……二次元の世界だからこそ許される不思議。
それを経験していくというのはなかなか慣れない……そんなことを考えていると、てる子の嗚咽が聞こえてきた。
視線を彼女に向けてみると、ポロポロと両目から涙が溢れている。
「お兄ちゃんと離れ離れにしてしまったな……ごめん。でも、大丈夫。私が君を守り抜くよ、必ず。お兄ちゃんの方も、善逸が守ってくれるから大丈夫さ。」
心細そうにしている小さな少女の耳が、自身の胸元に触れるように優しく抱きしめる。

人は、人の心臓の鼓動の音で落ち着くことがあると聞いたことがあったけど……少しくらいは効能があるかね……?

「そうだ。ずっと君呼びじゃ失礼だな。名前を教えてくれるか?」

「……てる子。」

「フフ……いい名前だな。明るい女の子に育ちますようにって願いが込められているのかも。」

優しく頭を撫でながら、少しでも気を紛らわせて落ち着けるようにと名前を訪ねれば、てる子はすぐに自分の名前を答えてくれた。

うん、ようやくこの子の名前を口にすることができる。

確かに私はこの子の名前を知っていたけど、それは一方的なもの。

だから口にするわけにはいかなかったから。

誰だって、初対面の知らない人に名前を呼ばれたらすごく怖くなるだろうしね。

「……と……あまりゆっくり話せないな。てる子ちゃん。そのまま顔を私の胸元に押し当てといて。耳…は流石に塞げないから、怖い声が聞こえてくるかもしれない。だが、私が側にいるから大丈夫。てる子ちゃんを悪い奴に傷つけさせたりしないから、絶対に。だから信じて。叫び声は決して上げてはいけないよ。」

不意に……鬼の匂いが近づいてきていることに気付いた私は、すぐにてる子に優しく

声をかける。

叫んでは駄目だという忠告と、必ず守るから安心してほしいという言葉を紡ぎながら。

てる子は小さく頷いたあと、私の背中に腕を回して、指示通りに胸元へと顔を押し当てた。

「なぜだ。どいつもこいつも余所様の家にづかづかと入り込み……。腹立たしい…。小生の獲物だぞ。小生の縄張りで見つけた小生の獲物だ……。あいつめ…あいつらめ……!!」

……うん、ベ様ボイス。

何というかその……鬼滅ってモブ鬼というか……一つの話に出てくる鬼が一人一人豪華な声優だよな。

すごいとしか言えない。

「てる子ちゃん。悪い奴を見つけたから少し離れるよ。この羽織を頭から被って、部屋の隅に。」

「う、うん。」

こんな状態であっても、私は読者や視聴者側としての関心が抜けないな……と少しだけ苦笑いをしながらも、てる子が退がったのを確認して、日輪刀を抜刀する。

炭治郎は不意打ちができない子だったけど、私は不意打ちに抵抗はないので、特に声をかけることなく斬りかかる。
「俺が見つけた〝稀血〟の子供なのに!!」
が、鬼……響凱と距離を詰める際に蹴り上げた床の音が思った以上にデカかったのか、普通に鼓を叩かれてしまった。
「あらら……。もうちょっと距離の詰め方考えないとな……と。」
部屋がぐるりと回転する。
すぐに私はバックステップでてる子の元へと移動して怪我をしないように、そして鬼を視界に入れないようにと抱き寄せて、そのまま着地する。
「大丈夫だったか?」
「うん……お姉ちゃん、ありがとう……。」
てる子に怪我の有無を問えば、彼女は無傷であることを教えてくれた。
それに安堵の息を吐いた私は、視線をてる子から響凱の方へと目を向ける。
が、そこに広がってるのは、側面側に来ている畳の壁だった。

37．邂逅、嘴平伊之助！

「ははは……こいつぁ、またとんでもない能力だことで……」

一部屋をぐるりと回す……そんなギミック、やってたＲＰＧにあったな、なんて考えながらも、私はてる子を抱きしめる。

この次の展開を知っているから、少しでも彼女に痛い思いをさせないためにも、しっかりと守ってやらなくては……。

そう思いながら一時的に目を閉じて、五感を嗅覚に少しでも集中させる。

かなりの勢いで近づいてくる第三者の匂いがある。

鬼のものでもなく、善逸のものでもない。

もちろん、正一のものでもない。

来る！

そう考えた瞬間、聞こえてきた。

「猪突猛進!!　猪突猛進!!」

猪の頭を身につける、彼の代名詞である言葉が。

「さァ化け物!!　屍を晒して俺が強くなるため!!　より高く行くための踏み台となれェ

!!」

勢いよく姿を見せた彼は、目の前にいる響凱に向かってつっこんでいく。

刃が欠けた二刀を構えて。

「腹立たしい。腹立たしい……」

しかしすぐに響凱が鼓を叩いて部屋を回転させたため、彼の攻撃は届かない。

「いって!?」

ついでにいうと私は蹴られた。

おかしいな、私てる子の側にいたからその蹴りは入らないはずなんだけど……赤くなってないよな?

かなりの強さで蹴り飛ばされたけど……。

青痣になったらヤバいんだけど。

いや、私は別に大丈夫だけどさ、青痣に気づいた炭治郎と禰豆子が彼に……嘴平伊之助に襲いかかりかねない……。

「腹立たしい……!!　小生の家で騒ぐ虫共……!!」

青痣になった際の炭治郎と禰豆子のお怒り様を脳裏に描いていると、連続で鼓が叩かれる。

その度に部屋はぐるぐると周り、少しばかり酔いそうになる。

が、てる子だけはしっかりと抱きしめながら、回転する部屋に合わせて移動しているから、この子が怪我を負うことはない。
「大丈夫か、てる子ちゃん?」
「うん……でもお姉ちゃん……腕……。」
「ああ……大丈夫だよ。確かにあの猪頭に蹴り飛ばされたけど、問題はないから。」
少しだけ泣きそうになってるてる子の頭を優しく撫でながら大丈夫であることを伝える。
安堵している様子ではあるが、燻る心配の匂いは消えない。
「アハハハハハハハハ!! 部屋がぐるぐる回ったぞ!! 面白いぜ!! 面白いぜェ!!」
「めちゃくちゃだなこいつ……。」
心配かけちゃったな、と少しだけ反省しながらも、私は伊之助と響凱の様子を見つめる。
彼はこっちに目もくれず、何度も何度も響凱に襲い掛かる。
「虫め。消えろ。死ね!!」
「ほっ。」
が、不意に血鬼術の独特な匂いが近づいてきていることに気づいたため、すぐにその

場で後退するように飛ぶ。
同時に私がいた場所には、三本の爪痕のような裂傷が発生した。
……血鬼術の匂いを感じ取ることができるこの体質、やっぱりすごいな。
「いいねいいね!!　アハハハ!!」
……相変わらず楽しそうだな。
呆れを抱きながら伊之助を見つめていれば、再び彼の足元に裂傷が走る。
まぁ、伊之助は躱したけど。
と、思いながら次の展開に備えてる子を抱きしめる。
再び発生する部屋を回転させる鼓の音。
注意深く響凱を見つめていれば、回転と鼓にある規則性がわかる。
「虫め……虫けら共め……!!」
その規則性に合わせてあたりを飛び回れば、背中を打つことなく着地することができる。
私もてる子もノーダメージで全てをやり過ごせる。
さて……そろそろまた移動すると思うんだけど……。
そう思った矢先に、複数回の鼓の音が辺りに響いた。
その音に合わせて部屋が次々に変わっていき、とある一室で変化が止まる。

部屋の中央には机と一人分の座布団が。

「……ようやく止まったな。」

「お姉ちゃん……」

「大丈夫。私がついてるから。」

不安そうに話しかけてくるてる子に、何度めかわからない大丈夫を伝え、部屋を移動……する前に、一応先程伊之助に蹴り飛ばされた腕を確かめるために隊服の袖を託し上げる。

「……よかった、赤くもなってないし痛みもない…。それがあったら間違いなく炭治郎と禰豆子に怒られていたし、伊之助が危なかったかもしれない……。」

そこには痛みもなく、赤くもなっていない無傷の腕があった。

少しだけ安堵する。

炭治郎と禰豆子は怒ったら怖いからな……。

「腕に問題はなしっと。それじゃあ、一旦移動しよう。てる子ちゃん。私の後ろにいてくれ。私が先行して、問題はないから確かめてから動くから。」

「うん！」

そう思いながらてる子に声をかければ、彼女は笑顔で頷いた。

何があろうとも、私がしっかりと守ってくれると判断しているのか、安心しているよ

うにも見える。
そう思ってくれているとわかると、結構気分が違うもんだ。
まぁ、同時にこの子をしっかりと守らなきゃいけないけどね。
「じゃあ行こうか。」
移動するために立ち上がり、近くにあった襖に手をかける。
が、血の匂いには気づいているので、まずは私だけが廊下に顔を出した。
そこにはまぁありましたよ。
喰い散らかされている人の遺体が。
「お姉ちゃん?」
「……悪い奴はいないみたいだから部屋を出よう。ああ、廊下に出たら振り返らずに、真っ直ぐに前を向いて移動するよ。」
溜息を吐きたくなる中、不思議そうに声をかけてきたてる子に対して、優しく声をかけながら廊下に出た私は、すぐに振り返っても私しか視界に入らないようにと背後で彼女を守りながら歩いた。
……少しして、廊下を歩いて回っていると、独特な匂いが感じ取れた。
匂いの強さからして、血の量は少ない。

そこまで理解した私は、てる子に目を向けて静かにするようにジェスチャーで伝える。

てる子はすぐに頷いてくれた。

うん、いい子だ。

そう思いながら頭を優しく撫でる。

そして、すぐに血の匂いがする襖に手をかけ、勢いよくそれを開くと、柿色の着物を着ている鼓を持った少年と目があった。

少年が慌てて鼓を叩こうとする。

「清兄ちゃん!!」

「!!」

が、てる子の声に反応しては、その手を慌てて止める。

「お兄ちゃん!!　お兄ちゃん!!」

「てる子……!!」

自分の兄であることに気づいた妹と、自分の妹であることに気づいた兄。

てる子が兄である清に抱きつく様子を見ながら、私は小さく笑みを浮かべるのだった。

３８．邂逅、元下弦の陸、響凱!

「これでよし。治るまでは少々時間がかかるだろうけど、歩く分には問題ないだろう。よく頑張ったな、この鬼の根城で。清くんはすごい子だ。」

「ありがとう、優緋さん。」

あれからしばらくして。

感動的な兄妹の再会を見届けた私は、怪我をしていた清に、鱗滝さんからいただいた傷薬と、いざという時のためにと持ち歩いていた包帯を使って、怪我の手当てをした。

この鬼の根城で一人頑張っていた彼の勇猛さを褒めながら。

私が褒めると、清はすごく嬉しそうにしてくれた。

「さて……清くん。かなり心労が絶えない状態だろうが質問する。ここで、何があったのか話してくれないか?」

だが、私のこの質問で、嬉しそうな表情は一気に青ざめ、恐怖に染まってしまう。

そうなることはわかっていたため、私は静かに清の頭を撫で、その手を優しく握りしめる。

「……化け物に攫われて……喰われそうになったんだ。そしたら、どこからか別の化け

物がきて……殺し合いを始めた……。誰が、俺を喰うかって……。それで……体から……鼓が生えてる奴……あいつが他の奴にやられた時、この鼓を落としたから……叩いたら、部屋が変わって……何とか……今まで……。」

すると、それが多少なりとも清を安心させたのか、先程よりかは顔色がマシになった彼が、ポツリポツリと状況を説明してくれた。

そうか……と小さく呟く。

そして、すぐに頑張ったなと告げれば、涙を堪えながら清は頷いた。

「そういえば、鼓の鬼は〝稀血〟って言葉を紡いでいたが……」

「!! そうだ、そう…!! 俺のことをマレチって呼ぶんだ!!」

そんな中、静かに稀血という単語を口にすると、清が食いつくように言葉を紡いできた。

ふむ……と軽く思いながら天王寺を見る。

「……稀血トハ　珍シキ血ノ持チ主ヲホス言葉ダ。」

「うわ!?」

「キャアー」

「オイコラガキ共。セッカク心労ノコトモ　考エテル優緋ノ気持チモ　汲ンデ　話シテヤッテルノニ　ソノ反応ハ何ダオイ。ツツキ回サレタイノカ?」

「……そりゃ、鴉が急に流暢に話し始めたら誰だって驚くっての。まぁ、それは置いといて……稀血の説明、続けてくれ。」

「フンッ」

何気に私の意思を汲んで言葉を紡いでくれている天王寺を落ち着かせるために話しかければ、天王寺は一度鼻を鳴らしたあと、再び口を開いた。

「生キ物ノ血ニハ　種類系統ガ　アルンダ。稀血ノ中デモ　サラニ数少ナイモノ、珍シキ血デアレバアル程　鬼ニハ　ソノ稀血一人デ　五十人、マタハ百人モノ人ヲ　喰ッタノト同ジクライノ　栄養ガアル。ツマリ、稀血ハ鬼ニトッテノ御馳走デアリ　大好物トナルワケダ。」

ドヤさ、と胸を張って威張る天王寺。

「なるほどな。説明ありがとう、天王寺。鬼がてる子ちゃんや、もう一人の男の子に目もくれず清くんを連れ去った理由がよくわかった。」

そんな天王寺に感謝の言葉を述べれば、当然だと彼は言葉を紡ぎ、もっと褒めろと言わんばかりのドヤ顔を見せた。

それを叶えてやろうと口を開く。

が、すぐに響凱の匂いが近づいてきていることに気づき、口を閉じた。

「……清くん。てる子ちゃん。今から私が言うことをよく聞いてくれ。」

しばしの無言を作ったあと、私は静かに口を開く。
真剣な様子であることは理解できているのか、清とてる子は了承をするように頷いてきた。
「……少しだけ酷なことを言うが、私はこの部屋を出る。」
「えっ!?」
それを確認してすぐに口を開くと、清とてる子が驚いたような表情を見せる。
同時に不安そうな様子を見せては、少しばかり混乱し始めた。
「落ち着いて。大丈夫。ただ、ちょっくら鬼退治をしてくるだけだからさ。だから、部屋を出なくちゃならないんだ。」
しかし、私の鬼退治発言により、二人はすぐに落ち着きを取り戻す。
自分たちの現状の元凶である存在を倒すと言う言葉が、少しくらいは効いたのかもしれない。
「てる子ちゃん。清くんはかなり疲れているから、何かあったら支えてやるんだよ。」
その様子に少しだけ笑みを浮かべた私は、すぐにてる子の頭を撫でながら、疲れている清をいざという時は支えてやるようにと伝える。
てる子はすぐに頷いた。
「よし。それじゃあ、今から二人がやることを伝える。いいかい？　私がこの部屋を出

たら、すかさず鼓を打って移動するんだ。今まで清くんがしてきたように、誰かが戸を開けようとしたり、近くで物音がしたら間髪入れずにまた鼓を打って逃げること。大丈夫。私は必ず二人を迎えに行くから。二人の匂いを辿って。戸を開ける時は名前を呼んで、私であることを伝えるよ。」

それを確認した私は、これから二人がやるべきことを静かに伝える。

二人が不安そうな顔をするから、何度目かわからない大丈夫も口にして。

「もう少しだけ、頑張るんだ。できるかな?」

それでも不安そうな二人に、私は穏やかな声音で話しかけながら、優しく頭を撫でる。

すると、清とてる子はすぐに頷く。

震えは収まっていないけど、頑張ることを約束してくれた。

「えらいね。とても強い子たちだ。それじゃあ、行ってくるよ。」

笑顔を見せながら、行ってくると伝え、すぐに部屋から外へと走る。

同時に響凱が姿を見せて、この部屋を覗き込むように視線を向けてきた。

軽くホラーだな、と思いながらも、急いで廊下に出る。

「叩け!!」

同時に短く清に指示を飛ばせば、辺りに一度鼓の音が響き渡り、彼らの匂いが遠ざかった。

「虫けらが……忌ま忌ましい……!!」

せっかく追いついたはずの稀血がいなくなったことは、響凱にとって、かなり腹立たしいものだったようだ。

食事を邪魔されたからか、すごく怒ってる。

それは鼓の音にも現れており、連打による部屋の向き変化や、爪痕のような裂傷を作る斬撃が、この一室に襲い掛かった。

３９．無名なる素晴らしき作家に、穏やかな死を

（右肩が右回転、左肩が左回転。右脚が前回転で、左脚が後ろ回転。そんで腹の鼓は裂傷攻撃っと……よかった。原作通りだな。）

連続的にあらゆる攻撃や回転が発生する中、冷静さを欠くことなく鼓と規則的に連動するものを分析して、その全てを躱していく。

かなりのスピードがあるため、すごく酔いそうになりながらも。

全ては清たちを助けるため。

炭治郎と禰豆子に心配をかけないようにするため。

さて、どのようにしてこの状況を打破すればいいのか……。

回転も斬撃も慣れてきたけど、技を打つタイミングがちょっと難しい。

ちょうどいいタイミングがあればいいんだけど……。

そう思っていると、回転と斬撃が速くなってきている気がした。

いや、気がするじゃない。

マジで速くなってるし、爪の攻撃も激しさを増している。

鼓の音には苛立ちが含まれているようだ。

自身のストレスをぶつけるように、自身の苛立ちを少しでも紛らわせたいというように……まるで八つ当たりのようだった。

（そういや、響凱は元々小説を書いていたんだっけ？　でも、つまらないとか塵とかボロクソに言われた挙句、文を書くのはやめた方がいいと言われた。さらには、この屋敷に閉じこもって趣味の鼓でも叩いとけば、とか言われて、その腕も人に教えることなんて到底できるほどのものじゃないと告げられた。努力して書いたものも踏みつけられて……それで……。）

ふと、原作の知識を思い起こす。

この時に響凱がどのような状況だったのか脳裏に描きながら、回避ばかりを続ける。

よくよく考えたら、現代で言うある種のパワハラだ。

「消えろ虫けら共!!」

〝尚速　鼓打ち〟

怒鳴り声と共に、かなりの速さで連続して鳴り響く鼓の音。

その音に合わせるように、何がなんだかわからなくなるほどの超スピード回転する部屋と、三本から五本へと増えたことにより、範囲が大きくなる裂傷攻撃。

少しだけ無理をしながらも、私はなんとかそれを耐え切る。

そんな中、ひらりと机から、数枚の原稿用紙が落下する。

「あ。」
回転がある程度落ち着き、畳の上に着地しようとする中、それが見えた私はすぐに原稿用紙を踏みつけないように、その場に静かに降り立った。
「!!」
一瞬の動揺が響凱に走る中、私はその原稿用紙を拾い上げる。
綺麗な文字で綴られている物語だ。
どんな内容なんだろうか？
そんなことを思いながら文字を見つめる。
鼓の音は響かない。
「……なるほど、これ恋愛物語か。こっちは……うーん……推理ものっぽいな。」
それをいいことに、私はその原稿用紙をただひたすらに見つめて目を通す。
恋愛はベタな展開だけど、だからこそ読みやすくもある。
推理ものの方は、なかなかトリックが考えられていて、結構のめり込みそうだ。
「……これ、全部あんたが書いたのか？」
「……ああ……。」
「ふうん。なるほどねぇ……。」
しばらくの間無言になる。

私は原稿用紙に記されている内容を読み続け、響凱は戦闘を放棄してまで小説を読み漁る私に呆気にとられたような状態で。

「……なかなか面白いじゃん。王道展開の物語も、ひねりにひねった物語も。私は結構好きだな。まぁ、仮に面白くなくても、小説なんか書くこともできない私がどうこう言えるものじゃないけど。」

「……！」

そんな中、小説を読んでみた感想を素直に口にしてみれば、響凱は目を丸くして驚いた。

だが、すぐに表情を戻しては、ゆっくりと私に近寄ってくる。

彼からは敵意の匂いが消えていた。

「小生の書いたものは……面白かったか……？」

「ああ。まぁ、小説とかに詳しい奴らから見たらどうかはわかんないけど、少なくとも物語を読むだけの側からしたら、おもしろいと思えるよ。まぁ、私だけかもしれないけど。にしてもすごいな、あんた。だって、一つの物語だけじゃなくて、いろんな種類の話を書いていたんだろ？　書けない側からしたら尊敬できるね。いろんな種類の話を考えるのって、かなり難しいはずだから。」

「そうか……。」

素直に面白かったことを告げれば、響凱は隣にどすんと座る。
「小生の鼓はどうだった？」
「鼓？　血鬼術のこと？」
「……ああ。それも含めて……。」
「そうだなぁ……。」
彼が口にしたのは、鼓や血鬼術の評価はどうだったかと言うものだった。
ふむ……正直な評価を言っていいんだよな？
「血鬼術も凄かったし、鼓をあそこまで速く叩けるのもすごいと思った。それぞれの鼓と連動する攻撃をしっかりと把握して、あらゆる特性を組み合わせながら高速で使うなんて、並大抵の奴じゃできないと思う。まぁ、人を殺していると言う事実だけは、鬼狩りとしても、人としても許せないと思ってるけど……それ以外はすごいとか、凄まじくて驚くと同時に感心したと言えるかな。」
それならと、素直な感想を口にしてみれば、再びそうか、という小さな呟きが聞こえてきた。
随分と穏やかだったなと思い、響凱の方へと目を向けると、彼は穏やかな笑みと、安堵したような雰囲気を纏ってこちらを見つめていた。
「それが聞けてよかった……。小生の書いた物は、少なくともお前にとっては踏み付け

にするような物ではなく、おもしろい物だった。小生の鼓も、血鬼術も……お前がすごいと認める物だった。ああ、それだけがわかれば、小生も悔いはない……。ありがとう……。」

「……そうか。ああ、その通りだよ。少なくとも私の心には響くものだった。でも、人を殺しているのだけは許せないものだ。」

「ああ。それはわかっている。」

響凱が静かに目を閉じる。

頸を斬られることに抵抗はしないと教えるように。

……原作知識があったからこそ、出てきた行動だったんだが、そうであっても、響凱の悔いや心を多少なりとも救うことはできたようだ。

「……あんたの来世はいつになるかわからない。でも、この先罪をしっかりと精算して、新たな命として生まれ落ちた時、もしも、この時代でのあんたのように物語を書くという趣味ができた時、少しでも多くの人に、あんたの物語は面白いものだと言ってもらえるように願ってるよ。」

それなら、彼にはこの型による最期で構わないだろう。

せいぜい来世では間違った方向にいかないようにと願って放つ。

〝水の呼吸　伍ノ型　干天の慈雨〟

水の呼吸のみに存在している慈悲の剣。
斬られた対象は殆ど痛みを感じることなく、優しい雨に打たれているような、そんな感覚を感じながら、穏やかに永遠の眠りにつく。
響凱からは感謝の匂いがした。

40．嘴平伊之助、撃沈!!

「ここだな。清くん。てる子ちゃん。私だけど、戸を開けてもいいかな?」
「!!　はい!!」
あのあと、響凱の体から血を採り、珠世さんの遣いの猫にそれを手渡した私は、てる子たちの匂いを追って、ある一室の前にまでやってきた。
確か、炭治郎はこの場で名前を呼びながら戸を開いたことであの子らに物を投げられたはず、と考えながら、声をかけて間をおけば、二人から戸を開けていいという許可がもらえたので、静かに戸を開く。
清もてる子も見た感じ怪我はしていないようだ。
「待たせたね。迎えにきたよ。鬼はしっかりと退治してきたから、安心して部屋を出よう。」
よかったよかったと安堵しながら、二人にこの屋敷を立ち去ろうと告げれば、すぐに二人は頷いて、私の横に並んでくる。
うん……小さい時の竈門家を思い出したぞぅ……。
この体が見せてくれた記憶の中に、弟や妹に一気に群がられては苦笑いを溢している

姿があった。
　まぁ、記憶の中の状況は、炭治郎、禰豆子、竹雄、茂、花子、六太の弟妹全員にもみくちゃにされていた気もするけど。
「女に背負われるのは嫌かもしれないけど、清くんは私におぶさって。こう見えて結構でかい甘えたがりな弟を背負っていたこともあるからな。安定感は保証するよ。」
「あ、ありがとう……ございます……。」
　そんなことを思いながら、清の前にしゃがみ込んで見せれば、彼は少しだけ恥ずかしそうにしながらも、私の背中に乗る。
　それを確認するなり立ち上がった私は、てる子に目を向けた。
「てる子は、私の服の裾を握っているといい。いくら鬼はいなくなったとしても、心細かったり、まだちょっと怖いと感じていたりすることもあるだろうからね。」
「うん。」
　こちらの提案を聞いたてる子は、すぐに私の服の裾を握りしめた。
　可愛らしいな。
　けど、和んでいる場合じゃない。
　早く行かないと……。
　そう思いながら私は、嗅覚を利用して善逸と正一、そして伊之助の匂いを嗅ぎ取る。

……ああ、少しだけ遅かったみたいだな。

血の匂いが混ざってる……。

「少し急ぐぞ。血の匂いが混ざってる。善逸か君らの兄弟の正一くんが怪我をしているのかもしれない。」

舌打ちしそうになりながらも、清とてる子に軽く急ぐ趣旨を伝える。

二人は目を丸くしたあと、何度か頷いた。

よし、と思いながら、少しだけ早足に外へと向かう。

清を落とさないように、てる子が離れないようにしながら。

「刀を抜いて戦え!!　この弱味噌が!!」

急いで玄関から外に出てみると、そこには善逸と伊之助の姿があった。

善逸の体勢は、炭治郎と禰豆子が入ってる箱を抱きかかえて、絶対に攻撃させないようにするための守る体勢。

対する伊之助は、刀を抜刀した臨戦体勢。

「善逸!!」

慌てて善逸の名前を呼べば、彼はゆっくりと顔を上げた。

何度も蹴られたり殴られたりしていたのか、顔はパンパンに腫れ上がっており、鼻からは血を流している。

「優緋ちゃん…俺…守ったよ。君が…これ…命より大事なものだって…言ってたから……。」

痛々しい姿で小さく言葉を紡ぐ善逸。

「威勢のいいこと言ったくせに刀も抜かねえこの愚図が!!　同じ鬼殺隊なら戦って見せろ!!」

伊之助は相変わらず善逸に怒鳴りながら、さらなる追い討ちをかけようとしている。

流石にそれ以上は怪我をさせるわけには行かない。

私は清をその場ですぐに下ろしては、善逸を蹴ろうとした伊之助に素早く距離を詰め、ガラ空きの股間目掛けて自身の足を振り上げる。

「おぶ!?　っ～～～～～～～～!?」

((股間蹴ったァーーーーーーーッ!!?))

その瞬間、伊之助は男の弱点を蹴り上げられたことにより走るとんでもない痛み……とは言っても、女の私じゃあまりわからないが、それにより悶絶したようにその場に転がりのたうちまわる。

両手で自身の股間を押さえてゴロゴロゴロゴロと暴れている。

周りの男性陣からは畏怖する視線を向けられる。

よくみると三人も蹴られてはいないはずなのに、防衛本能か共感からか、股間を押さ

えて顔を青くしていた。

唯一てる子だけは首を傾げている。

「てる子ちゃん。男はみんな股がかなりの弱点だ。もし、変な輩に絡まれるようなことがあったら、勢いよくそこを蹴り上げてやれば大抵の男はこうなる。ああ、だからといって鬼にはしたら駄目だよ。鬼は人間と違ってかなり強いからね。せいぜい、めんどくさい人間相手だけに最終手段として使うといい。世の中には、変態とかかなりいるからな。可愛らしい女の子は総じて狙われやすいから、覚えておくといいよ。上手く入れることができたらしばらくは動けなくなるし、最悪失神するからな。」

「うん!!」

「無垢なてる子ちゃんに対してなんてこと教えちゃってるの優緋ちゃぁあん!?」

「一つの防衛技術だけどなにか?」

「ヒィッ!!　可愛い顔でなんてこと言うの!?　ていうか猪の奴動かなくなっちゃったんだけど!?」

……失神したんだな。

まぁ、ちゃんと機能不全に陥らないように加減はしたが、かなりの力で蹴り上げたしな。

痛いと思うのは仕方がない。

「そんなことより。」
「そんなこと!?」
「善逸。手伝え。屋敷の中には、多くの犠牲者が残されてる。救えなかった分、ちゃんと埋葬だけはしないとな。」
「……あ、それは、確かに。」
「わかってるならさっさと行くよ。」
動かなくなった伊之助に一瞥だけ向けた私は、すぐに善逸に指示を出す。
股間を蹴り上げたばかりなのにそんなこと扱いした私に対して彼からのツッコミが入ったが、男を大人しくさせるのに一番楽な方法だからな。
反省も後悔も一つもない。

41．かまぼこ隊、全員集合！

伊之助に金的を喰らわしてしばらく経った頃。
なんとか善逸と二人で屋敷内で殺されてしまった人たちを埋葬し終えたら、同時に伊之助が勢いよく起き上がった。
「うわっ起きたァ!?」
「勝負しようぶ……ハッ!?」
いきなり起き上がった伊之助に追われ、逃げ回る善逸。
だが、不意に伊之助が私の方を見たかと思ったら顔を青くして、ふるふると震え始めた。
顔はかなり青く、恐怖心を彼から感じ取れる。
「なんだよ。」
「い……いや……その……」
とりあえず話しかけてみれば、伊之助はびくりと肩を震わせて、そろりそろりと近くにあった木の方へと移動する。
そして、勢いよくその後ろへと隠れては、ガタガタ震えながらこちらを見つめてきた。

……どうやら、相当私の金的が伊之助に効いたらしい。
「あんたが暴れないなら、もうあれはしないって。まぁ、また誰かを問答無用で傷つけようとしたり、この中にいる私の宝物を攻撃しようとしたら……。」
「もうしねぇ!!　もうしねぇから!!　あの痛いのだけはやめてくれ!!　流石の山の王でもあれは耐えられねぇ!!」
「ふぅん?　まぁ、それならいいや。宝物を傷つけられることは、ひとまず無くなったみたいだし。」
私の言葉に伊之助は縮こまる。
こいつには逆らわねぇ方が絶対いいとか、もう痛いのはやだとかぶつぶつ呟きながら。
「そういや、あんた名前は?」
「……嘴平伊之助。」
「そうか。私は竈門優緋。まぁ、優緋とでも呼んでくれ。」
「ユウヒ……。」
「ああ。」
「……ワカッタ」
なんで片言?

と一瞬なるが、すぐに頭を切り替える。
「そんじゃあ、そろそろ次に行きますかね。ほら、善逸。伊之助。行くぞ。」
「「は?」」
「ん?」
そして、そろそろ移動することを漏らしては、善逸と伊之助の二人に声をかける。
……と、二人は呆気にとられたような様子を見せた。
不思議に思い、二人に目を向けてみると、善逸は目を丸くしていて、伊之助は……猪の頭のせいでちょっとわかりにくいが、匂いからしてかなり驚いているようだ。
その様子に今度は私が目を丸くする。
え?
一緒に行かないのか?
「えっと……優緋ちゃん? 俺の名前呼んでたけど、一緒に行くの?」
「なんで俺の名前も呼ぶんだよ。」
「……。」
……あー……そういや炭治郎たちは、流れで一緒に行動を取るようになったんだったか?
この屋敷でたまたま出会って、たまたま全員怪我していたから、とりあえず全員で藤

の花の家紋の家で一緒に過ごして、そのまま那田蜘蛛山行って……。
　そんで最終的には常に一緒に行動を取ることになって……。
「あー……悪い、つい。じゃあ、先に私は山を降りるよ。」
「え、ちょっと待ってよ！　少しだけ驚いたけど、俺は優緋ちゃんと一緒に行くから!!　だって女の子を一人にさせるわけにはいかないから!!　猪はどうでもいいけど!!」
「ハァア!?　おいテメェ!!　どうでもいいってなんだよどうでもいいって!!別に行かねえとは言ってねえだろうが!!」
　変なことを言ってしまったなぁ……なんて考えながらも、まぁ、別に一緒に行動を取らなくてもひょっとしたら任務で一緒になるかもしれないか、なんて思いながら足を進めると、善逸と伊之助はついてきた。
「ッタク。賑ヤカナ奴ラダゼ。アア、稀血。オ前ハコレカラコレヲ持ッテ行動シロ。藤ノ花ノ香リ袋ダ。鬼除ケニナル。鬼ニ襲ワレル可能性モ、グット減ルハズダゼ。」
　それを聞いた天王寺が、呆れたような声音で呟きながら、背後でゲハッと何かを吐き出したような声が聞こえてきた。
　説明からいくと、どうやら稀血である清に藤の花の香り袋を渡したようだ。
　そして、翼を羽ばたかせて私の肩に降り立った。
「サァ、俺ニツイテ来イ。次ノ目的地ニ向カウゾ。」

私の肩に降り立った天王寺は、次の目的地のために移動すると告げては、空に移動して飛び立つ。
私は飛び立った天王寺を見上げながら、それについて行く。
善逸と伊之助は、私のあとを追うように足を進め始めた。

しばらくして、天王寺が私たちを案内したのは、藤の花の家紋が目印の大きな屋敷。
「シバラク休息ヲトレ。優緋ハトモカク、善逸ト伊之助ハ負傷者ダ。」
「え？　伊之助が負傷者？」
「ハァ!?　俺は怪我なんかしてな……っ!!」
「……え？」
……なんか、伊之助の匂いが一瞬違ったような。
「……本当に、怪我してないのか？」
「……。」
「……伊之助？」
「……チッ……あのポンポンうるせえ鬼と戦ってた時にヘマしただけだ。」
「おっふ……。」
……そういえば、てる子のことを守り続けていたから原作のように伊之助があの子を

踏みつけるようなことはしなかったから、私は伊之助の戦闘を静観していたんだった。
だから伊之助はずっと私たちには攻撃してなくて、鬼と戦いまくってたんだっけ。
となると、標的が全部頸を斬らんとしていた伊之助に向いていたことになるから、この結果もある意味で妥当か?
こっちに対してより、伊之助に対しての攻撃がよくよく考えると激しかったかもしれない。
「なるほどな……。じゃあ、ひとときの休憩としよう。私も、無傷で戦おうとしていたせいでそれなりに疲労はしてるし、しっかりと休めるならそれに越したことはない。」
そこまで考えて、僅かなズレによる負傷が発生してもおかしくないと判断した私は、自分もしっかりと休みたいと口にしては、目の前にある藤の花の家紋の家の門を叩いたのだった。

42. 藤の花の家紋の家

あれからしばらくして、藤の花の家紋の家に住んでいるひささんと対面を果たした私たちは、このお屋敷で少しばかりお世話になることになる。

屋敷に入るまでにひささんに善逸がお化けと言ったり、伊之助がひささんの頭をつついたりといろいろあって、二人に注意したりと忙しかったが、今はゆっくりと炭治郎と禰豆子の二人と一緒に風呂に入っていた。

そうそう。

ひささんが呼んだ医者の診断によると、善逸と伊之助の二人はどちらも骨を二本やっていたらしい。

で、私は疲労の蓄積がひどいと言われたよ。

まぁ、うん。

疲労が蓄積した理由はなんとなくわかる。

多分、気を張り詰めすぎていたり、なかなか鬼の犠牲者が減らないという事実からの焦りによって思いつめすぎたのだろう。

そんなに焦ったところで、すぐに物語が変化しないことなんてわかりきったことのは

ずなのに。
　ていうか、最終戦別の時に考えていたばかりじゃないか……。
　全てを助けようとしたら、必ず手からこぼれ落ちるものが発生するって。
　だから、今は柱を助けるってことに重点を当てろって。
　目に入るもの全てを助けるなんて、よほどの力を持ってるものしかできるはずがないんだから。
　それこそ、緑壱さんくらいの力がなければ。
　……いや、そんな力をつけたところで、起こることに間に合わなかったら意味がないか。
「はぁ……。」
「むー？」
「んー？」
「んあ？　ああ、炭治郎に禰豆子……。そんな顔すんなって。大丈夫。少し疲れてるだけだからさ。」
「むー……。」
「いててて。炭治郎。頭をペムペム叩かないでくれ……。大丈夫。少しだけ落ち着いたから。うん。無理はしないよ。」

「むー……。」
「んー……。」
「はは……。ごめんごめん。心配かけちゃったな。」
考え込んでいると、炭治郎と禰豆子が心配そうな様子を見せながら、私にギュッと抱きついてきた。
思わず苦笑い。
この子たちに心労をかけさせてどうするんだよ。
私が無理して悲しむのは、目の前にいる可愛らしい弟妹たちだろうに……。
「もう大丈夫。少しだけ戦いから離れるから、その間にしっかりと心の整理をつけるよ。二人に心配をかけさせてしまうのは、姉ちゃん自身も心許ないからな。」
「む!!」
「う!!」
少しだけ反省しつつも、私は二人の頭を優しく撫でて、小さく笑みを浮かべる。
それにより漸く二人も安心したのか、笑顔を私に見せてくれた。
「じゃあ、二十数えるからしっかりと体を温めて風呂を出ようか。夕飯に遅れたら伊之助が怒りそうだ。」
「「う!!」」

「二人は、風呂から出たらすぐに髪を乾かそうな。いくら鬼が病気にならないとはいえ、びしょ濡れのままじゃ二人も気持ち悪いだろうから。」
「ん!!」
「よし、じゃあ数えるぞ。い～ち、に～い……」
「う～う、むー!!」
炭治郎と禰豆子の頭を優しく撫でながら二十を数え始めれば、二人も私の声に合わせながら、声を出し始める。
炭治郎たちも数えるのか……と少しびっくりしながらも、二人の無邪気な笑顔を見せてくれる姿に癒されながらも、私は数を数え続けた。

……しばらくして風呂から出た私は、炭治郎と禰豆子の髪をしっかりと大きな布……いわゆるバスタオルのような布で拭いたあと、与えられた自室で二人には留守番してもらい、食事の用意がされていると伝えられた広間に向かった。
そこにはすでに善逸と伊之助が座って……ん？
「……伊之助。その顔……」
「あ〟あ〟!?　俺の顔に文句あんのか!?」
真ん中に座っている綺麗な顔立ちをした少年の姿があった。

間違いなく伊之助なんだけど……うん……本当に女の子みたいな顔をしてるな。

「いや、文句はないよ。一瞬呆気にとられただけさ。猪頭の被り物を被ってる姿しか見てなかったからな。」

噛みつくように突っかかってきた伊之助に対して、冷静に言葉を返せば、彼はぐっ……と言葉を詰まらせた。

喧嘩腰で言葉を紡いだハズなのに、軽く流されたからちょっと動揺したのだろうか？善逸から、なんでそれだけの反応で受け流せるの……という呟きが聞こえてきたが、気にすることなく空いてる膳の前に座る。

「そんじゃ、食べますか。」

「あ、うん！　いただきます！」

そして食べるかと言葉を紡げば、善逸はすぐに頷き、手を合わせていただきますと呟いては、箸を手にとり食事を口に運ぶ。

対する伊之助は、善逸が食べ始めたのを確認するなり、箸を使うことなく食事をガツガツと食べ始めた。

うん、ちょっと汚い。

その様子に小さく溜息を吐きつつも、自分の食事に手をつける。

と、横から手が伸びてきて、端にあった煮物の芋がとられた。

目を向けてみると、伊之助がニヤニヤと笑ってこちらを見ている。
……ふむ、さっきスルーされたのがムカついたのだろうか？
明らかに私のことを挑発しようとしているような……？
「なんだよ。腹減ってんの？　だったら食べていいよ、これも。」
しかし、残念ながら私は炭治郎ポジとして小さい時から生活しているため、竹雄や茂がこちらの漬物とか煮物を横から取っていたから特に痛手にはならなかったり。
まぁ、私は長子だし、元からそこまでの量を食べないから、問題ないんだよな。
「ムキーーーッ!!」
そう思いながら煮物が入ってる皿を差し出したら、伊之助が怒った。
気に食わなかったらしい。
あ、でも煮物は食べるんだな……。
別に構わないけど。

……少しして。
食事を終えた私は一人自室の方へと戻っていた。
戸を開けばすぐに炭治郎と禰豆子が私に気づき、てててっと軽い足取りで近寄ってくる。

「ただいま。二人だけで留守番させて悪かったな。」
しゃがみ込んで両腕を広げてみれば、二人はすぐにこちらの腕の中へと収まった。
同時に抱きしめてやれば、私にすりすりとすり寄る。
可愛いな、癒されるな。
この殺伐とした世界で、唯一和やかになれる瞬間だ。
「ごめん、優緋ちゃん。まだ眠ってないようだったらちょっといいか……な……」
そう思いながら、炭治郎たちの頭を撫でていると、善逸が部屋に入ってくる。
「ん？」
「「う？」」
入ってきた善逸に目を向けると、そこには固まっている様子の善逸の姿。
彼の視線の先には、禰豆子の姿があることを理解するまで、そんなに時間はかからなかった。

４３．善逸、鬼兄妹と邂逅する。

「……。」
「……。」
善逸が禰豆子を見て固まって数分。
私たちは無言で善逸のことを見つめながら首を傾げる。
「う〜……。」
あ、いや、炭治郎だけは違った。
かなり拗ねたような、ちょっと怒っているような、警戒しているような唸り声を上げながら、私と禰豆子のことを抱きしめている。
「ヒィッ!!　な、なんだよ……!!　なんでそんな警戒されてんの俺ェ!?」
流石に善逸も炭治郎の不機嫌な唸り声や、不満を感じ取ったようで、小さく悲鳴を上げていた。
「あ〜……それは多分あれだ。ずっと私が背負ってた箱の中で善逸の声……というか、私に対する求婚を聞いていたからちょっと怒ってるんだと思う。ついでにいうと、道端であったあの女の子が駄目だったからとすぐに私の方に求婚してきたことも原因かも

な。姉ちゃんと禰豆子に近寄るなって感じだと思う。」
「冷静に分析しないでよ!!　大丈夫!!　大丈夫だから!!　俺は別に優緋ちゃんに夜這いをかけようとか思ってないから!!　ただ、ちょっと話に来ただけなんだよ信じてくれよォーーーーッ!!」
　私の冷静な説明を聞いて、善逸がガタガタと震えながら弁明する。
「……む。」
　すると炭治郎はじーっと善逸を見つめたあと、納得したように頷いた。
「警戒が解かれたな。で、話ってなんだ……って聞かなくてもいいか。どうせ、この子らのことだろうしね。」
　炭治郎が警戒するのをやめたのを確認した私は、善逸に話は、炭治郎たちのことだろうと問いかける。
　善逸はすぐに小さく頷いては、私の部屋にそろりそろりと入っては、ある程度の距離を置いてちょこんと座る。
「どうして……優緋ちゃんは鬼を二人連れて歩いてるのかなって。えっと……」
「弟の方が炭治郎。妹の方が禰豆子だ。この中じゃ、禰豆子が一番年下で十三歳。炭治郎は私の二つ下の十五歳だよ。」
「そっか。じゃあ、改めて……なんで、優緋ちゃんは、鬼である炭治郎と禰豆子ちゃんを

連れて歩いてるの？　鬼は人を喰うって聞くし、危なくないの？」

なんと呼べばいいか戸惑っていた善逸に二人の名前を伝えれば、彼は小さく頷いたあと、改めて炭治郎と禰豆子についての質問をしてくる。

まぁ、別に聞かれても困るものでもないし、話を聞いてもらっている方が楽だから、私は素直に話すことにした。

「実は……」

二年前、自分が自宅を開けている間に鬼に襲撃されてしまい、母親と、四人の兄弟を失ったこと。

唯一炭治郎と禰豆子の二人だけがまだ息があったし、わずかな温もりもあったため、二人を助けるために町に向かったこと。

その際、目を覚ました炭治郎と禰豆子が私を襲ってきたこと。

それにより二人が町の知り合いから話に聞いていた人喰い鬼となっていたことに気づいたこと。

どうすればいいかわからず、炭治郎と禰豆子にひたすら呼びかけていたら、急に二人は涙を流し始め、動きを止めたこと。

ゆっくりと近づいて抱きしめてあげたら、一瞬襲いそうな素振りを見せたけど、それを堪えた上、すぐに縋るように泣きついてきたこと。

その一部始終を見ていたらしい鬼殺隊の隊士から、弟と妹を人に戻す方法は、鬼なら知っているかもしれないから、必然的に鬼と関わることが多くなる鬼殺隊に入るのはどうかという提案を受けたこと。

それならと、その提案にのり、その鬼殺隊隊士の知己である育手の元へ向かい、二年間修行を積んだこと。

そして、最終選別を乗り越えて今、この場所にいること……その全てを包み隠さず。

「と、まぁ、これが私の鬼狩りになるまでの過程だな。」

「そうだったんだ……。じゃあ、二人と一緒にいるのは……」

「そうだなぁ……この二人が私がいなかったらギャン泣きしてしまうってのもあるけど、主な理由として挙げるならば私は炭治郎と禰豆子が大好きで、自分の命よりも大切な宝物だと思ってるからだね。片時も手放したくないんだ。もう、大切な家族を失いたくない。」

小さく笑いながらそう告げれば、善逸が黙り込む。

私はそんな彼を気にすることなく、炭治郎と禰豆子の頭を撫でる。

二人はそれが嬉しかったのか、上機嫌に擦り寄ってきた。

……善逸は、思わず優緋に見惚れてしまう。
穏やかな笑みを浮かべながら、慈愛に満ちた視線を大切な弟と妹に向けて、二人分の頭を優しく撫でる彼女の姿が、あまりにも綺麗だったために。
彼の耳には心地よいほどの優しい音が聞こえている。
それは紛れもなく目の前で弟妹を慈しむ優緋から聞こえてくるものだった。
同時に彼の耳には、穏やかで明るい音が二つ聞こえていた。
鬼でありながらも人のような、心温まるような音。
これは、自分たちを大切にしてくれている大好きな姉に対して、炭治郎と禰豆子が鳴らしてるものだ。
三人の音はとても綺麗だった。
互いに互いを思いやっているからか、一つの音楽を奏でているようだった。
三人が揃わなければきっと聞くことなんてできない、聞き惚れてしまうような音。
聞いているだけで心温まるようなそれは、善逸の心も和ませる。
しかし、そんな中でも善逸はある邪なことを頭の片隅で考えていた。
それは、優緋と禰豆子のどちらを嫁に貰えばいいのかという、彼らしい下心満載の悩みだった。
大人しそうで愛らしく、女の子と言えばこの子!と言えるくらい清楚な少女禰豆子。

姉御肌と言えば良いのか、言葉遣いはどことなく荒々しくもあるが、その内には誰よりも優しい愛と心を持ち合わせている少女優緋。

全くの正反対でありながらも、それに相応しい魅力をその身に宿している二人の少女の登場は、まさに彼にとって喜ばしくも悩ましいできごとだった。

（アアアアア!!　禰豆子ちゃん可愛い!!　おしとやかで女の子らしくて守ってあげたくなるような女の子だ!!　この子みたいな女の子と結婚したら絶対に楽しいと思うんだよなぁ!!　でもでも、優緋ちゃんみたいな姉さん女房ってのもかなりありだと思うんだよね俺!!　たまにちょっと怖いし、怒らせたらきっとひとたまりもないんだろうけど優しいのは変わらないし！　こんな女の子がお嫁さんに来てくれたら時には思いきり甘やかされたりするかもなぁ!!　ああ、でも逆に甘えられるのも最高では!?　これから俺、どっちに告白したらいいんだろう!?　どっちも良すぎて悩んじゃうんだけど!!）

「……う～……。」

善逸がろくなことを考えていないと思ったのか、炭治郎が小さく唸り声を漏らす。

しかし、今まで経験したこともない状況に自分の世界へハイテンショントリップしている善逸は気付いていないのか、優緋と禰豆子を見ながら顔を真っ赤にして悶えていた。

４４．常中訓練と手伝う弟妹

善逸に炭治郎と禰豆子の二人を引き合わせたあと、すぐに休息を取った私は、日中である現在、炭治郎と禰豆子の二人と鬼ごっこを家内でしている。

なぜ？と思うだろう。

私もわからない。

急に二人が起きて、日が当たりにくい広い部屋に向かおうと誘ってきたので、その誘いに乗ったらこんなことになっていた。

まぁ、別に構わないけど。

だって、常中の訓練になるし。

……全集中〝常中〟。

鬼と戦う鬼殺隊の柱クラスならば普通に行っているもの。

走り回る身体能力爆上げな鬼兄妹を人間である私が鬼役として追いかけるこれはなかなかに骨がおれる。

なんせ二人は日に当たらないように工夫しながら移動するため、縦横無尽に駆け巡るから。

かなりきつい中、ヒノカミ神楽の方の呼吸を常中できるようにしている。
水の呼吸ももちろん必要だが、なによりも大事なのは十二鬼月戦……特に上弦の鬼戦に集中しなくてはならないから、鬼相手に鬼ごっこ……というのも変な話ではあるけれどやる。
二人はただ遊びたいだけかもしれないけど、朝はひたすらに走り回った。
昼間は刀を振る。
基礎鍛錬も技術に必要なこと。
いざという時に刀がすっぽ抜けては元も子もないため、どれだけ振っても手に力が入らないということだけはなるべく回避しなくてはならない。
素振りのあとはヒノカミ神楽を舞う。
狭霧山で何度も舞い続けたこともあって、いつの間にか体が勝手に父さんが舞っていた通りに舞い続けることができるようになった。
まだ透き通る世界には至らないけど、多少はマシになったかな。
この間炭治郎と禰豆子は、日が入らない部屋の中でじっとこれを見つめていた。
私が集中しているのがわかるんだろう。
昼間の鍛錬が終われば夜まで休憩を取り、夜になれば鬼を狩る。
善逸と伊之助の二人とは違い、疲労だけだったから、二人より早く指令が来るんだ。

私としてはありがたい。
全集中・常中の訓練もできるし、技の練度もあげることができるからな。
だから今は雑魚鬼程度相手にもヒノカミ神楽を使ってる。
今は次の戦いに備えてメインウェポンを鍛える時だから。
まぁ、水の呼吸も使う時は使うけど。
だって、水の呼吸がポンコツだったら意味ないしな。
ああ、そうそう……。
水の呼吸もある意味で剣舞のようだと思ってる。
意外と、水面斬り↓水車↓流流舞い↓打ち潮↓干天の慈雨↓ねじれ渦↓雫波紋突き↓滝壺↓水流飛沫・乱↓生生流転はヒノカミ神楽のように動きをつなげることができるとわかったから。
だから、時には型と呼吸の復習として剣舞として動くと効率が良くなった。
「ふぅ……今日の指令は終わりっと……。」
そんな生活を送る四日目の朝方。
私は、善逸と伊之助の二人が療養している藤の花の家紋の屋敷に戻り、休息を取る。
明日は非番だから、ゆっくりと眠ることができる。
ああ、寝ている間ももちろん常中を維持できるように努力している。

まぁ、なかなか難しくて、起床まで維持できたことは今のところないのだけど。

「炭治郎。禰豆子。おやすみ。」

「う!!」

「……むん。」

なんてことを思いながら、寝支度を済ませた私は、炭治郎と禰豆子の二人に寝る前の挨拶を伝える。

すると、禰豆子は元気いっぱいに頷いては、体をしゅるしゅると縮めて、私が寝る布団に潜り込み、ペシペシと隣を叩く。

それに従うように布団に入れば、禰豆子は私にすり寄ったあと目を瞑った。

対する炭治郎は、何か考え込んでいるような様子を見せながら、体を小さくして、禰豆子の反対側へと寝転び目を閉じる。

……一瞬、炭治郎から役に立ちたいという感情を感じ取れたような気がしたけど気のせいか……?

首を傾げながらも私も目を閉じる。

常中を行いながら。

……しかし、不意にペシペシと頭を叩かれる感触に気づき、思わず目を開ける。
よく見ると炭治郎が私の体の上に乗っかり頭を叩いてきていた。
「ん……どうした炭治郎？」
何かあったのかと思い声をかけると、炭治郎は私をじっと見つめたあと、口元と鼻付近を軽く触ってきては、手でバッテンを作って見せた。
「……？」
よくわからず首を傾げる。
しかし、炭治郎はその行動を一回も止めることなく続けている。
「……あ、ひょっとしなくてもあれか？　独特な呼吸が途切れていたとか？」
「む!!」
少しだけ思案したところ、脳裏に描いたものは私が常中を途切れさせてしまったという結論だった。
もしかしてと思い問うてみると、どうやら当たっていたようだ。
「うー……」
「……なるほど。」
様子からして、炭治郎は私が何かしらの訓練をしていることを理解しており、なんとかして手伝うことができないだろうかと考えたようだ。

その結果、独特な呼吸をしながら眠ろうとしているし、それが途切れたら起こしてあげようと判断したらしい。

ありがたいことだ。

「助かるよ、炭治郎。より強くなって、人を守るために必要な訓練だったんだが、どうしても一人じゃ限界があってね。炭治郎が手伝ってくれるならば安心だ。それじゃあ、独特な呼吸が途切れて普通に眠ってしまっていたら、さっきみたいに叩いて起こしてくれるか？」

「む！」

それならお言葉に甘えて手伝ってもらおう。

そう判断した私は、小さく笑いながら炭治郎の頭を撫で、手伝いをお願いする。

炭治郎は元気よく返事をしては、私の訓練を手伝い始めるのだった。

那田蜘蛛山の攻防
４５．突入、那田蜘蛛山編！

「カアア！　緊急指令！　緊急指令！」
「え？」
「あ？」
「「んー？」」
「……。」
藤の花の家紋の家にて療養し、善逸と伊之助が十分に回復した頃。
炭治郎と禰豆子を構い倒しながら、伊之助からの挑発を軽く受け流し、善逸にデレデレされる中、天王寺が大きな声で緊急指令を連呼し始めた。
急なことに善逸は驚き、伊之助と箱の中から出ていた炭治郎と禰豆子が首を傾げる。
私はというと、次の話に進んだことと、あと少しで無限列車の話が来ることを認識して小さく溜息を吐いていた。
結局……那田蜘蛛山の話までに痣を発現させることはできなかった。
多少平熱が上がったくらいだ。

あと一歩ではあるのだろうけど……。

「緊急指令の内容は？」

「少シ歩イタ先ニ、那田蜘蛛山ト呼バレル山ガアル。ソコデ複数ノ隊士ガ消息ヲ断ツ現象ガ多発中ダ。強イ鬼ガイルト思ワレル。準備ガ整イ次第、スグニ那田蜘蛛山ヘ向カエ。気ヲ引キ締メテイクゾ優緋。」

「……了解。」

正直言って、これで勝てるかどうかはわからない。

いや、デカブツのパパ鬼くらいは倒せるかもしれないが、そのあとに待ち構えている下弦の伍……累と邂逅した際、無傷で勝てるのだろうか……？

少しだけ不安だ……。

「……優緋ちゃん？　どうしたの？　なんだか、すごく不安そうな音が聞こえてくるけど……。」

「うー……。」

無言で考え込んでいると、善逸と炭治郎が近寄ってきては、心配げな目を向けてくる。

炭治郎に至っては、私の腕に手を乗せて、ギュッと握りしめてくる始末だ。

相当、匂いと音に不安が現れているんだな……。

少しだけ苦笑いをしながら、炭治郎の頭を撫でる。

「ごめんごめん。隊士が次々消息を断ってるって聞いて、少しだけ怖くなっただけさ。でも、怖いからと言って逃げるわけにはいかない。少しでも多くの人の命を守るためにも頑張るよ。」

そして、二人に謝罪の言葉を述べながら、自分が考えていたこととは違う……いや、ある意味では合っている嘘でもあり誠でもある答えを返す。

炭治郎と善逸は、心配してる表情を変えることなく小さく頷いた。

多分、嘘と本当が入り混じった匂いや音になってるから、私の正確な感情や考えがわからないのだろう。

（それでいい。それでいいんだ。何も知らずに物語をただひたすらに綴ってくれ。私も、一緒に紡いでいくから。私だけの物語を。）

「さて、じゃあ……行きますか。今回の指令はかなりの危険性が考えられる。気をつけていこう。」

そう思いながら、私は指令に向かおうと口にする。

それを合図に、善逸たちは準備に取り掛かった。

私も、次の物語のための準備を始めた。

……数十分後。

準備を済ませた私たちは、藤の花の家紋の家の門の前へと集まっていた。

「お世話になりました、ひささん。行ってきますね。」

全員がいることを確認した私は、見送りとして外に足を運んできたひささんに挨拶をして、その場で静かに頭を下げる。

善逸も同じく頭を下げているが、伊之助は下げていない。

まぁ、予想通りというか、物語通りである。

「では切り火を……」

するとひささんは切り火用の石と道具をその手に持って、二回ほど切り火を行う。

「ありがとうございます。」

お浄めの儀式である切り火。

無事を願ってくれるひささんに、私は静かに感謝の言葉を述べる。

「何すんだババア!!」

が、やはり伊之助はその行動が威嚇に見えてしまったようで、ひささんに殴りかかろうとする。

「馬鹿じゃないの!?　〝切り火〟だよ!!　お清めしてくれてんの!!　危険な仕事に行くから!!」

すかさず善逸が伊之助を羽交い締めで拘束し、ひささんに殴りかからんとする彼を必死に止める。

切り火とはなんなのか……その説明をしながら。

まぁ、伊之助がこの話を聞いているのかどうかと問われたら、わからないとしか口にできないけど。

「どのような時でも誇り高く生きて下さいませ。ご武運を……」

ひささんのその言葉を最後に、私たちは那田蜘蛛山の方へと向かう道へと足を進める。

「誇り高く？　ご武運？　どういう意味だ？」

（……何にも知らん奴だな……。）

ふと、伊之助が不思議そうに素直な疑問を口にする。

善逸から呆れているような匂いがするけど、伊之助は猪に育てられた期間が長いから、知らないのも当然だと思う。

「別に難しく考えなくていいよ。ただ、やるべきことをやりぬけばいい。私たち鬼狩りがやるべきことくらいはわかるだろう？」

「ああ。鬼共をぶっ殺すんだろ。そんくらいわかってらァ。」

「なら、それをやればいい。鬼狩りとして鬼を狩る。ただそれだけを考えてやれば自ず

とわかってくるよ。誇りやらなんやらはな。」
「なるほどな！　よっしゃァ!!　鬼は全員ぶっ殺して……」
「私の弟と妹には手を出すなよ。手を出したらまた金的かますからな。」
「そ、そそそそ、そ、それくらいわかってるっつの!!　てめぇの弟と妹は殺さねェ!!」
（……上下関係が出来上がってる。まぁ、そうだよな。いくら伊之助でも股間を蹴られたら悶絶するもんな。あまり優緋ちゃんには逆らわないほうがいいことくらいわかるよな。）
誇りだのなんだのの説明はめんどくさいからと、適当な言い分を口にすれば、伊之助は質問するのをやめた。
が、適当にはぐらかすための言葉で何やら燃え上がっていたので、念のために軽く脅し文句を口にする。
伊之助はすぐに吃りながら、炭治郎と禰豆子には手を出さないと言ってきたので、よしとした。
……善逸と伊之助、両方から恐怖の匂いを少し感じたのは……まぁ、気のせいではないんだろうな。

４６．到着、那田蜘蛛山

歩き続けること数時間。
空はすっかり夜の帳が降りてしまい、真っ暗闇となってしまった。
一応、月明かりはあるから完全な暗闇ではないけど、この状態で山の中での戦闘は、なかなか難しいかもしれない。
見えないことはないけれど。
「待ってくれ!!　ちょっと待ってくれないか!?　怖いんだ!!　目的地が近づいてきてとても怖い!!」
「……なに座ってんだこいつ。気持ち悪い奴だな。」
「お前に言われたくねーよ猪頭!!」
那田蜘蛛山に近づくにつれて、善逸の足が遅くなり、とうとう座り込んでしまう。
それにドン引きする伊之助に対して、ギャンギャン善逸は吠えている。
……この時、炭治郎は黙って二人の側で呆れたようにたたずんでいたが、私は二人を無視して行動に移していた。
一人くらいは助けてもいいだろう。

そう思いながら、那田蜘蛛山の入口へと一人走っていく。
背後から善逸が待ってとか言ってるけど気にしない。
早くしないと、一人また死んでしまう。
「いた。」
「!!　たす……」
少しだけ走れば、入口付近で倒れている鬼殺隊の隊員がいた。
彼は、私を視界に入れた瞬間、大きな声で助けてという言葉を紡ごうとする。
が、それでは操り鬼にバレてしまうため、すかさず静かに、のジェスチャーをした。
私のジェスチャーの意図に気づいた彼は、すぐに口をつぐみ、ゆっくりと頷く。
それを確認した私は、急いで彼に近寄っては、月光により軽く光っている糸を日輪刀で斬り裂き、急いで那田蜘蛛山近辺から離脱する。
「大丈夫だったか?」
「あ、ああ!!　ありがとう!!　助かったよ!!」
ある程度離れた場所にまで連れていき、話しかけてみれば、彼は目に涙を溜めながら助かったと感謝を述べてきた。
「ゆ、優緋ちゃん!!　どうしたのその人!?」
「あ?　随分とボロボロだなこいつ。」

「那田蜘蛛山の入口付近にぶっ倒れてた。情報を聞くために助けて連れてきたんだよ。……なにがあったか、話を聞いても？」

「ああ……!!」

少しして善逸と伊之助が合流したため、私は連れてきた隊員になにが合ったか説明してほしいことを告げれば、彼はポツリポツリと話し始めた。

「鴉からの指令を聞いて、何人かの隊員が那田蜘蛛山に足を運んだんだ。それで、鬼を倒そうと山の中に入ってしばらく歩いて……。そしたら、急に隊員同士が斬り合いになったんだ……!!　最初は混乱した……。だけど、よく見たら糸みたいなものが斬りかかってきた隊員には繋がっていた!!　間違いなくあれが原因だ……!!　君が糸を斬ってくれなかったら、きっと俺も……今頃……!!」

わずかに体を震わせながら、状況を説明してくれた隊員。

「教えてくれてありがとう。少しでも情報を知ることができたから、多少なりとも対策が取れる。……あんたは、すぐにこの場から撤退を。あとは任せて。」

「ああ……気をつけてくれ!!」

そんな彼に感謝の言葉を伝えれば、隊員は気をつけてと一言口にして、その場から立ち去っていく。

「……じゃあ、行こうか。確かに怖いし、不安はあるけど、今動けるのは私たちなんだか

ら。」
「うう……本当に行くの……？」
「ああ。」
「おっしゃあ!!　じゃあ、この伊之助様についてこい!!」
「はいはい。……善逸、行こう。」
「……ゆ、優緋ちゃんが行くなら、わかったよ。」
それを確認した私たちはすぐに那田蜘蛛山の入口から山道の方へと足を運ぶ。
鬼を狩る剣士として戦うために。

……しばらくして、山の中に入った私たちは辺りを見渡す。
出入口付近の戦禍は、今のところ落ち着いているらしい。
「……うっ……すごい匂いがする。かなりの刺激臭だ……。」
「だ、大丈夫？」
少しだけ嗅覚を使えば、つんとくるような匂いを感じ取れた。
善逸から心配げな目を向けられ、炭治郎はすぐにでも外に出ようとしているのか、箱をカリカリと引っ掻いてる。
（なんとも言えないこの匂い……あの毒蜘蛛鬼だよな……。）

「……善逸。君に今から酷なことを頼む。」
「え……!?」
「悪いけど、こっちの方角からとんでもない刺激臭がするんだ。多分私じゃ手に負えない。かなり離れてはいるけど、それであっても辛いとなると、こっちの鬼に挑んだところで、私は足手纏いにしかならない。」
善逸から絶望と恐怖の匂いがする。
そりゃそうだ。
鬼と戦うことが怖いと公に言っているはずなのに、一人で強い鬼と戦えなんて言われたら誰だってそうなる。
「……ま、まじで……?」
泣きそうな声。
だけどこればかりは彼に頼まなくてはならない。
それだけ、風に乗って流れてくる匂いはかなりきついのだから。
「頼む……善逸にしかお願いできないんだ。」
「う……わ、わかったよ……。女の子のお願いは断れないし……。」
善逸に毒蜘蛛鬼を倒してきて欲しいことを口にすれば、彼は渋々といった雰囲気で、毒蜘蛛鬼の討伐を引き受けてくれた。

うん、助かった。

「ありがとう、善逸。お礼としちゃなんだけど、今度の休みの時に一緒にどっかに出かけよう。適当に町とかぶらついたり、茶屋にいってお茶したりしないか？」

「え、ほんと!?　よっしゃやる気出てきた!!　絶対に倒してくるから待っててね!!　絶対!!　絶対だからね!?」

「あーはいはい、わかってるって……」

「本当に絶対の約束だからね!?　行ってくる!!」

それなら多少なりともご褒美になるものを、と思って口にした言葉は善逸に効果抜群だったらしい……。

私が指差した方向へと勢いよく走っていった。

まぁ……彼のことだから鬼と対峙した瞬間、一気に感情が変化するんだろうけど……。

というか、善逸、扱いやすいな。

逆に心配になってきたわ……。

「急に走り出してなんなんだあいつ。意味わかんねー……。」

「まぁまぁ……。とりあえず、私たちも行こう。刺激臭のせいで、どこに鬼がいるか特定しづらいんだ。複数の鬼の匂いが混ざってるから、複数体この山には潜んでるのは確定

してるんだけど……。」
「ふぅん？　まぁいいか。紋逸は放っといてさっさと行くぞ優緋。」
「善逸。善逸だから。彼の名前は善逸だから。」
「なんだっていいっつのそんなの。」
よくねーよ……。

47．村田と接触、累との邂逅。

再び歩いていると、人の匂いがした。
匂いの方を向いていれば、そこには村田がいた。
「すみません。」
「!?」
「!?」
私が静かに声をかければ、村田はびくりと体を震わせ、警戒するような姿勢を見せる。
が、鬼殺隊の剣士であることがわかったのか、多少なりとも落ち着いた様子だった。
「応援として呼ばれました。鬼殺隊階級癸、竈門優緋です。」
警戒が薄れた様子を見計らって、自身の階級と名前を口にする。
その瞬間、村田から絶望や、怒りと言ったマイナスの感情の匂いがした。
「言わんとしていることはわかります。一番下の階級がいくら集まってもこの状況は打破できない……でしょ?」
「な!?」
次に降ってくる言葉がなんなのかは原作で知っている。
匂いからもよくわかる。

だから私は彼が言葉を発する前に言葉を紡ぐことで彼からの罵倒を遮り、同時に冷静さを取り戻させるための言葉を口にする。

「確か、鬼殺隊には柱と呼ばれる者がいるんですよね？　呼吸を教えてくださった恩師から聞いています。甲以上の剣士であり、なおかつ強い鬼も弱い鬼も多く狩っているのだとか……。そんな強い剣士が来てくれたら、こんなことにはならないのに……とあなたは言いたいのでしょう？　気持ちは分からなくもありません。ですが、この状況が伝わるのに時間がかかるとしたら？」

「……。」

「私が言おうとしていること、わかりますか？」

「……ああ。すまない。お前らに当たるところだった。そうだよな……状況が伝わるまでに時間がかかる可能性を考えてなかった。ありがとう。多少冷静になれたよ。」

静かに嘘を織り交ぜながら言葉にすれば、ようやく村田が落ち着いた様子を見せた。

その姿に小さく笑う。

とりあえず村田が殴られることはなくなったな。

「話は、なんとか那田蜘蛛山から脱出した隊員の人から聞いています。山にやってきた十人ほどの隊員が、山の中に入ってしばらくしたら斬り合いになったそうですね。彼曰く、糸が斬りかかってきた剣士についていたとのことです。その糸はきっと鬼の血鬼術

です。どうやって取り付けているのかはまだ判断しかねますが。」

そう思いながら、私は状況はすでに把握していることや、何が原因でその状況に陥ってるのかを説明しては、ある方向へと目を向ける。

そこにはゆらりゆらりとこちらに近づいてきている人影があった。

「えっと、あなたの名前は?」

「え、あ、む、村田……。」

「そうですか。では、村田さん。剣を構えてください。操り人形にされてる人が近づいてきていますので。」

「は!? ど、どこから……」

「こっちからですね。」

「っ!!」

それを村田に伝えれば、すぐに彼は刀を構えて立ち上がる。

「伊之助。あんたは、鬼の位置を探れるような力は持ってる?」

「あん? まぁ、ないこともないがそれがなんだよ。」

「じゃあ、今から伊之助にしか頼めないことをお願いする。私じゃどうにもできないから、伊之助だけが頼りなんだ。お願いできる?」

「……フンッ、まぁ聞いてやらなくもねえよ。お前がどうしてもってんならな!!」

「ありがとう。……お願い、伊之助。鬼の位置を探って!!」
　それを確認した私は、すぐに伊之助にしかどうしても頼めないことがあると口にしては、彼に鬼の位置を探って欲しいことを告げる。
「よっしゃ。子分のためならしかたねぇ!!やってやるよ!!　邪魔だけはすんなよ!!」
「わかってる。ついでに邪魔をしそうなのがいたらそいつを倒しとくよ。」
「それでこそ子分だな！」
　〝獣の呼吸　漆ノ型　空間識覚!!!〟
　自身の二刀を地面に突き刺し、集中する伊之助に一度目を向けた私は、早めに見つけることができると軽く安堵しながらも、すぐに村田に目を向けた。
「村田さん!!　基本的に操られている人の背中には糸があります!!　それを斬ることができれば、しばらくは多分動きません!!　人一人を操るためにはそれなりに多めの糸が必要になるはずだから、糸をつけるのに数秒間の時間の間があると思います!!」
「わかった!!　背中だな!!」
　糸を使って操られているのであれば、糸をまずは斬り続けることが必須事項であることを村田に伝えれば、彼はすぐに襲ってきた隊員の背中に回り込み、背中の糸を斬る。
　すると、隊員はすぐにその場に崩れ落ち、動かなくなった。
　私はというと、集中している伊之助に攻撃をしようとしてくる隊員の糸を片っ端から

斬っていく。

「本当に君は癸の隊員なのか!?　明らかに俺より動きが速いんだが!?」

「癸ですよ。まだなったばかりの鬼狩りです。」

「こ、今年は随分と実力のある隊員が入ったんだな……。俺の時は冨岡がそうだったけど……。」

「義勇さんの妹弟子ですよ一応。」

「そりゃ強いわ!!　ああクソッ!!　なんで当たり散らそうとしたんだよ俺!!　時間戻せるなら当たり散らそうとした自分ぶん殴りてぇ!!」

「あ、そうそう。ここら辺うろついている小さい蜘蛛にご用心。糸の取り付け係みたいなので。」

「サラッと言うなよ!!　助かったけど!!」

くだらない会話をしながらも辺りにいる操り人形にされている人の糸のみを斬っていく。

しかし、不意に上空に気配を感じ取ることができたため、私は操られていた人の糸を斬り、その体を思いきり蹴り飛ばした。

死体蹴りになったのは申し訳ない。

そんなことを考えながら上空を見上げてみれば、そこには小学生後半から中学生くら

いの少年がおり、私たちを見下ろしている。
「僕たち家族の静かな暮らしを邪魔するな。……お前らなんてすぐに、母さんが殺すから。」
　私と目があった少年鬼、累が静かな声音でそう告げる。
「オラァ!!」
　そんな累を見つめていると、伊之助が急に累目掛けて跳躍し、日輪刀を手にして斬りかかった。
　しかし、その攻撃は届くことなく、伊之助はすぐに落下してくる。
「くっそォ!!　どこ行きやがるテメェ!!　勝負しろ勝負!!　何のために出てきてんだうっ!!」
「……あんな高いところに届くわけないっての。」
　地面に背中を思いきり打ち付けた伊之助に、呆れながら声をかけ、すぐに彼の元へと駆け寄ると、急にガバッと起き上がった。
「お前が言ってた別の鬼は見つけたぞ!!　あっちにい……って、なに固まってんだ?変な奴だな。」
「あんたが急に起き上がったからびっくりしたんだよ。」
　キョトンとした顔で私に声をかけてきた伊之助にツッコミを入れながらも、私は軽く

息を吐く。

「村田さん。」

「言わなくてもいい。ここは俺が引き受ける!!　糸を斬ればいいことがわかったし、ここで操られている者たちの動きは単純だ。蜘蛛にも気をつける。これなら、俺一人でも何とかなると思う!!　だから、君は猪と一緒に本元へ向かってくれ!!　鬼の近くにはもっと強力に操られている者がいるはずだ!」

「……ありがとうございます。ご武運を。伊之助。」

「ああ。行くぞ優緋!　親分についてこい!」

静かに村田の名前を呼べば、彼はすぐに私と伊之助だけで本元に行くようにと告げてきた。

それに感謝の言葉を述べた私は、伊之助の案内を基に、操り鬼の元へと急ぐのだった。

４８．操り鬼弱体化作戦

村田と分かれて数分後。
伊之助の案内に従い走り続けていると、一人の女性隊員が姿を見せた。
彼女の体には無数の糸がついている。
確か……この人は尾崎……って名前がついていたんだったか？
「!!　こっちに来ちゃ駄目!!　階級が上の人を連れて来て!!　そうじゃないとみんな殺してしまう!!」
そう思いながら近寄ろうとしたら、彼女は声を張り上げて、涙を流しながら近寄るなと怒鳴って来た。
思わず足を止める。
しかし、こちらが足を止めたところで、鬼が攻撃の手を止めるはずがない。
早めに動いていたとしても、きっと……
「逃げてェ!!」
「……やっぱりか。」
私の予想通り、尾崎さんは操り鬼の糸により操られ、こちらの方へと攻撃して来た。

かなりの斬撃スピードだ。
生半じゃ受け止め斬ることはできない。
でも、私は違う。
「……。」
呼吸を自らヒノカミ神楽へと変え、私は自身の刀を構える。
〝ヒノカミ神楽　円舞〟
刀を両手で握り、円を描くように振るう技。
これを尾崎さんの刀の側面に叩きつければ、刃は大きな音を立てて破壊され、そのまま近くにあった木の幹へと深々と突き刺さる。
「!!」
〝ヒノカミ神楽　火車〟
刀を叩き折られた彼女が目を見開く中、私はその頭上を飛び越えヒノカミ神楽の拾ノ型を使い、位置を調節しながら技を放てば、彼女に繋がっていた糸は全て斬れる。
いくら太くて強靭な糸とはいえ、ヒノカミ神楽の前では少しでも力を加えればプツリと斬れる蜘蛛の糸にしかならないようだ。
「……急いで退避してください。入口付近では村田さんが操られている人と戦ってます。糸を斬れば動きは止まりますから、命を落としてしまった人から少しだけ刀を拝借

し、彼の援護へ。蜘蛛には気をつけてください。操り糸をつけて来ますから。」
「っ……ありがとう……!!」
それがわかっただけで十分だ。
これなら、命を救うことはできなくても、苦しい思いをしている人たちを少しだけ助けることはできる。
そう思いながら、私は尾崎さんに逃げるように声をかける。
彼女は涙を流しながら、急いでその場から立ち去っていった。
「伊之助。第二陣が来る。」
「ああ、わかってらァ!!」
それなら程なくして、辺りにキリキリという耳障りな音が聞こえてた。
視線を音の方に向けてみると、腕があらぬ方向に曲がっていたり、血だらけだったりする隊員たちが現れた。
「伊之助!!　とにかくまずは刀を叩き折るか遠くに飛ばせ!!　多少なりともそれで攻撃は弱体化させることができる!!」
「刀を叩き折るってどうやってだよ!!?　」
「刀は縦の力には強いが横の力には滅法弱いんだ!!　刃の側面から一定の力与えれば折れる!!」

「横から叩きゃいいんだな!!」
「ああ!!　だが、自分の刃にも気をつけろ!!」
「いちいちうるせェなァ!!　わーったよ!!」
それを確認した私は、すぐに伊之助にまずは相手の弱体化を図ることを口にしては、第二陣である隊員と対峙する。
かなりめちゃくちゃな攻撃を相手はしてくるが、ヒノカミ神楽の全集中・常中を行えばかなり遅く見える。
体温はかなり高い。
が、痣の発現はまだまだ時間がかかりそうだ。
おそらくだが、今の体温は37．8～38．0辺り。
原作で読んだ痣の発現条件温度は39．0。
……やれやれ、なかなかこれ以上は上がらないものだ。
原作の体温には程遠すぎる。
だとしても、これだけ遅く見えるのはありがたいものだ。
おかげで襲ってくる隊員にどうやって刀を振れば苦しさから解放することができるか、判断するための時間ができた。
〝ヒノカミ神楽　円舞!!〟

尾崎さんにしたように、ヒノカミ神楽の円舞を使用することで、襲って来た隊員たちの刀を片っ端から叩き折り、時には柄に刃を当てて叩き落とす。
かなり動きが遅く見えたから、柄を持つ手の隙間に当てることができた。
「オラァ!!」
「……それなりに、弱体化はできたみたいだな。」
少しだけ伊之助の方へと目を向けてみれば、彼も襲って来た隊員の刀を叩き折っており、刃を遠くへと飛ばしていた。
おかげで操り人形となっている鬼殺隊隊員たちの武器がかなり短くなったり、無くなったりと、かなりの弱体化を図ることができた。
まぁ、折れていても、わずかに残っているのであれば、攻撃の手を止めることはないとわかっていたので、そこは私が柄を刀で殴り飛ばすなり何なりして、木の幹へと突き刺しているが。
「おっしゃあ!!　これでこいつらは丸腰!!　殴ることしかできねェな!!　見たか優緋!!　お前にできることは俺にもできるのさ!!」
「ああ。しっかり見てたよ。流石は伊之助だな。」
「フフンッ当然だ!!　もっと褒めてもいいぜ!!」
「あとでな!!　まだ襲ってくる奴はいるから!!」

伊之助と会話をしながらも、何とか操り人形にされている隊員たちの刀を折って、飛ばしてを繰り返す。

だが、そうしていると不意に、目の前の隊員の首がぐるりと百八十度回転し、バキリという音と共に絶命した。

「おい優緋!!　急にこいつら首がぐるっと回って……」

「……そうだね。」

「……優緋……？　大丈夫かよ、お前……。」

吐き気がした。

命を軽々しくも奪う鬼の行動に嫌悪感を抱く。

向こうでも殺人とかが起こるたびに胸中を渦巻いた感情だ。

なんで人は人を殺すのか。

なんらかの事情があったとしても許せない行為だ。

「……少しだけ、吐き気がしただけだ。もう大丈夫。行こう、伊之助。操り鬼を倒しに。」

「……ああ。」

少しだけ、伊之助から心配そうな目を向けられた。

でも、私が大丈夫だと告げれば、これ以上は聞かないと言わんばかりに、伊之助は小さく頷き、私の前を先行して走り出す。

彼の後を追うように、私も走り出した。

49．頸無し鬼と母鬼と

走って走って走り続けて、それなりに奥までやってきた頃。
風向きの変化により鼻が利くようになってきた私は、伊之助とともに目的の鬼を求めて走り続ける。
「！　伊之助！」
「ああ！　なんかいるな！」
すると、視界の先に何かが立っていることがわかった。
間違いなくあの頸無しだ。
そう思いながら伊之助を呼べば、伊之助もすぐに警戒を見せる。
……が、
「頸がねェェェ!!」
目の前に現れたものが頸無しであることに気づくなりパニックを起こした。
「アイツ急所がねェぞ!!　無いものは斬れねぇ!!　どっ……はァ!?　どうすんだ!?　どうすんだ優緋!?」
どうやって倒せばいいのかわからないらしい伊之助が、こちらに判断を仰ぐ。

「落ち着け伊之助。袈裟斬りだ袈裟斬り。右の頸の付け根から左脇下まで斬るんだよ。広範囲だし、かなり硬い可能性が高いが、多分いけるはず……」
「イヤッハーーーーーッ!!」
「って一人で突っ走んな!!」
冷静にどうしたらいいか伊之助に伝えれば、彼は真っ先に頸無しに突っ込んでいった。
一人で突っ走る伊之助に咎める声をかけるが、彼は聞いてはくれない。
突っ走った伊之助に頸無しが応戦すると、伊之助の体には瞬く間に裂傷ができ、鮮血が飛ぶ。
だが伊之助は怯むことなく攻撃をしようと体勢を整える。
でも、それは意味をなさないことを私はよく知っていた。
すぐに地面を蹴り上げる。
同時に伊之助が糸により体を固定され動けなくなる。
このままでは伊之助は頸無しに貫かれるか斬り刻まれてしまう。
「させるわけないだろ、そんなこと……」
〝ヒノカミ神楽　炎舞〟
刀を両腕で握り、振り下ろしと振り上げを素早く行う拾弐ノ型。

頸無しの鋭く硬い刃物のような爪を斬り飛ばすことができた。

〝ヒノカミ神楽　円舞〟

同時に私は、ヒノカミ神楽の壱ノ型を使用して伊之助に繋がれている糸を斬る。

「！」

伊之助が驚いた。

しかし、その驚きの中にはどことなく喜びにも取れる匂いを感じ取ることができる。

「一人で走るからそうなるんだ。確かに伊之助は強いしそれは否定しない。でも、強い奴一人で挑むよりは、二人で挑んで倒す方が効率いいし、怪我も少量で済ませることができる。これ以上怪我を作らないためにも、二人で倒すよ、この頸無しを!!」

「てめェ!!　これ以上俺をホワホワさすんじゃねぇ!!　邪魔だそこ!!」

二人で倒そうと提案すれば、伊之助は私に怒鳴りつけながら走ってきた。

どうやらホワホワしていたようだ。

いや、今はそんなことどうでもいい。

「私を踏め!!」

そう思いながら私はすぐに前に倒れ込み、炭治郎と禰豆子の二人が入ってる箱を土台にするように伊之助に声をかける。

「!!」

伊之助から驚きの匂いを感じる。
同時に背中に重さを感じることができた。
「跳べ!!」
感じ取れる衝撃で、頸無し鬼のもう片方の腕が斬れたことを確認した私は、すぐに伊之助に跳ぶようにと声をかける。
伊之助はその声に従うように跳び上った。
私はすぐに次の行動をする。
原作で炭治郎がしていたように、頭を地面につけ、頭だけで体を持ち上げながら、刀を振るう。
〝水の呼吸　肆ノ型　打ち潮〟
かなりきつい体勢のまま振るう水の呼吸の肆ノ型は、威力はそれなりに落ちてしまう。
しかし、足はそこまで硬くなかったようで、すぐに足を斬り裂くことができた。
おかげで頸無し鬼はその場に膝をつく。
それを見た私は、すぐに逆立ちをするのをやめて、その場に座り込む。
「袈裟斬りだ!!」
「!!」

伊之助に袈裟斬りをするように告げれば、彼はすぐに頸無し鬼を袈裟斬りにより沈黙させた。

が、伊之助が着地をすると同時に地面を蹴り上げこちらに突進するように走ってきた。

「お前にできることは俺にもできるわボケェェェ!!」

「あ……。」

そういやこうなるんだった……引きつった笑みを浮かべながらそう考えると、腹部に叩き込まれた衝撃と体が浮く感覚に襲われる。

「ふん、ぬ!! アア〃アア〃アアア!!」

ブオンッとでも表現できそうなほどの勢いで宙へと投げられる。

確かにこれは必要なことではあるけどこれだけは言わせてもらいたい!!

「普通女を思いっきり投げるかドアホォォォ!!」

顔面に絶叫マシンの如き突風を浴びながら伊之助に怒鳴りつける。

男ならまだしも女を投げんじゃねぇ!!

「!!?」

ふと、無数の木により隠れていたひらけた場所にある岩の上に座った女型の鬼と視線が搗ち合う。

間違いなく操り鬼である母親役の鬼だ。
私はすぐに空中で体勢を整えて日輪刀を構える。
すると、目を見開いて固まっていた彼女が両腕をこちらに伸ばしてきた。
まるで、助けを求めるように。
「……そうか。」
自ら頸を差し出す行為。
私はすぐに水の呼吸を使い、ある型を使用する。
〝水の呼吸　伍ノ型　干天の慈雨〟
水の呼吸にしか存在していない慈悲の剣。
使うのは二回目だ。
でも、助けを求めている子に、痛みで追い討ちはかけたくない。
すとん……と静かに刃が頸を斬り裂く感触を感じ取る。
行き先は地獄だろうけど、少しくらいは救われて欲しい。
「……おやすみ。お嬢さん。まぁ、私よりは長い時を生きているのかもしれないけれど。」
小さく穏やかな笑みを浮かべながら、操り鬼に声をかければ、彼女も穏やかな笑みを返してきた。

しかし、すぐに真剣な表情をして言葉を口にする。

「十二鬼月がいるわ、気をつけて……。……ありがとう、鬼狩りさん……おやすみなさい。」

でも、最期は再び穏やかな笑みを浮かべたあと、私に挨拶を返し、眠るように目を瞑って消えていった。

「優緋!!」

それを見届けていたら、伊之助がこちらに話しかけてきた。

彼に目を向けてみると、血を流しながらこちらへと駆け寄ってきていた。

「倒したかよ!!」

「見ての通り。」

「よし! ああお前!! 俺に対して細やかな気遣いすんじゃねえ!! いいか!? わかったか!? お前にできることは俺にもできるんだからな!! もう少ししたら俺はお前より強くなるし!! それから……」

「はいはい。すごいすごい。ほら、次々行くぞ。」

「話を聞け!!」

が、合流したところで伊之助にギャンギャン文句を言われるだけだったので、流すように適当な言葉を返しながら、次の鬼の元へと向かう。

……できることなら、デカブツのパパ鬼も潰したいところだな。

50．パパ鬼討滅、累の元へ

操り鬼を倒したあと、他の鬼を探して小川付近に足を運んだ。
すると、遠くの方から雷が落ちたかのような六つの大きな音が聞こえてきた。
「……善逸、ちゃんと倒せたんだな、毒鬼を。」
その音が意味するものは、ある一体の鬼の終わり。
血鬼術による毒を使い、人間すらも蜘蛛へと変えてしまうアシダカグモのような小物臭満載の男の最期だ。
「ところで伊之助……怪我は大丈夫……」
「俺は怪我してねぇ!!」
「いやいやいやいや、それのどこが怪我してないに結びつくわけ!?」
「こんなんかすり傷だっての!!」
「ええ……?」
それに軽く安堵しながらも、血をだらだら流しながら私の前を先行する伊之助に怪我の具合を聞いてみると、まさかの返答が返ってきた。
それのどこがかすり傷なのか。

明らかに彼の肌に刻まれているのは裂傷だし、そこからだらだら流血しまくっているんだが……？

何言ってんだこいつ、と思いながらドン引きしているとバシャンと水の音が辺りに響く。

音の方へと目を向けてみると、そこには一人の女鬼。

繭を使い、そこに入ってる溶解液で何もかも溶かして喰らうウツボカズラのような鬼。

彼女は私たちの姿を見るなり、走ってその場から逃げ始める。

「おおお!!　ぶった斬ってやるぜ!!　鬼コラ!!」

「だから一人で突っ走るな!!　どんな能力を持ってるのかわからないんだぞ!?」

すかさず伊之助が繭鬼を追うようにして走り始める。

制止の声をかけてはみるが、やはり彼は話を聞かない。

ああ、もう！と軽くイラつきを持ちながらも、私も伊之助のあとを追う。

「っ……お父さん!!」

私と伊之助が追ってくることを確認した繭鬼が大きな声を張り上げる。

すると、大きな音を立て地面に着地する存在が現れた。

完全に蜘蛛のように複数の目を持つ大柄の体躯を持ち合わせている鬼……蜘蛛鬼家

族の大黒柱……。

「オ〟レの家族に〟!!　近づくな〟!!」

そのデカブツが腕を振り下ろした瞬間、地面に小さなクレーターができる。

なんてパワーだよ、と思いながらも、私は試しに水車を使って攻撃をしてみる。

デカブツの腕の半あたりまでは刃を通すことができたが、やはり斬り落とすにはヒノカミ神楽の方がいいらしい。

冷静に分析していれば、デカブツは空いてる腕でこちらを殴り飛ばそうと拳を振ってくる。

が、それは伊之助の刃による攻撃により私に当たることはなかった。

「硬えええ!!」

「確かにな。厄介なことこの上ない。」

「何平然としてんだテメェ!!　舐めてんのか!?」

「なわけないだろ。」

デカブツ鬼の体に蹴りを入れて、伊之助と私は同時に距離を取る。

水の呼吸が通用しないなら、ヒノカミ神楽を使うのみってね。

「もういっちょ。」

〟ヒノカミ神楽　碧羅の天〟

ヒノカミ神楽の弐ノ型。
刀を両腕で握り、腰を回す要領で空に円を描くように振るう技。
垂直方向に強烈な斬撃を放つこれは、強化された上、機関車と一体化していたあの魘夢の巨大化した頸稚すらも両断していた。
あれだけの威力を出せるのであれば、デカブツの腕なんて問題なく斬り落とせるはず……そう考えて放ってみれば、予想通りデカブツの腕を斬ることができた。
「!?」
「!!?」
「はァ!?　なんでさっきは斬れなかったのに今は斬れてんだよ!?　しかも豆腐みてぇに斬りやがって!!　ずりぃぞ!!」
「私は複数の呼吸を使ってるだけだよ。一番体にあってるのはこれなのさ。」
まさか女の細腕で自身の腕が斬られるとは思わなかったのか、デカブツが後方へと飛ぶ。
伊之助からもなんか言われたが、今はそんなことよりデカブツ退治だ。
「道は開けたし、ここは二手に分かれるぞ。伊之助。あんたは逃げた女鬼を追ってくれ。」
「はァ!?　何でたよ!?　あのデカブツは!?」
「今の伊之助が敵わないって言ってんだよ。血が流れてるせいでふらついてるあんた

じゃ足手まといだ。あんまり言いたくはないが。」
「ぐっ……」
「わかったらさっさと女鬼を探せ。あれが回復に手を回してるうちに。強い相手と闘いたい気持ちもわからなくもないが、それで負けて死んでしまったらその場で終わり。生き返ることもできず、虚しく土に還るだけ。山で生きてたならわかるだろ。自然はいわば強いもんが弱いもんを食い物にする世界なんだからな。強さの差や自分の状態には気をつけなけりゃ、早死にするだけだぞ。」
「……ぐぬぬぬ……っ!!　ムカつくけど反論できねえ!!」
「わかったならさっさと行きな。無事に帰ってきたら、強くなるための技術を教えてやるから。あんたでもあれくらい簡単に潰せるようになる一歩にもなる。」
「チッ……わーったよ!!　絶対だかんな!!　テメェも死ぬんじゃねえぞ優緋!!」
「わかってる。」
とりあえず、伊之助にはこの場から去ってもらう必要があった。
多少なりとも被害を抑えるために。
まぁ、繭鬼を見つけることはできないだろうという確信もあったしな。
伊之助のことだから猪突猛進の突っ走りで、最終的には迷子になるか、善逸と合流するかのどちらかだ。

その間に私は繭鬼と累を見つけ出して倒す。
バシャバシャと水を蹴り飛ばしながら立ち去っていく伊之助に背中を向けたままそう考える。
デカブツは動かない。
私の出方を伺ってるのだろう。
「さぁて、じゃあ、さっさと終わらせますか。」
改めて刀を構えれば、デカブツはすぐに動き出した。
「ア〟ア〟ア〟!!」
臨戦態勢をとった瞬間、殴りかかってくるデカブツ。
攻撃が単調すぎてかなり遅い。
全集中の呼吸・常中は、本当に大事な技術だな。
できてなかったら、きっと私はすぐに殴り飛ばされて内臓も骨もやられて死んでいただろう。
やれやれ、と思いながらも、一撃で終わらせるためにヒノカミ神楽を使う。
〝ヒノカミ神楽　斜陽転身〟
デカブツの頭上を軽々と超えて、宙で体の天地を入れ替えながら水平に刃を振るう。
私が放ったこの斬撃は、すぐにデカブツの頸に入り、そのまま丸太のような太さと岩

の固さを併せ持ったかのようなそれを、胴から一瞬にして斬り離す。

「!!?」

一瞬による一撃を喰らったデカブツ鬼はその瞬間から塵と化す。

上手く行ったようだ。

「よっと。……ふぅ……流石はヒノカミ神楽。いや、日の呼吸か……。始まりの呼吸で最も強力な力を持ち合わせているだけの威力はある。まぁ、まだ無惨相手には通用しないんだろうけど、そこはそれだな。……最終決戦までに極めれるところまで極めていけばいい。今はただ、救える時は人を救って、救えない時は、救えなかった人の無念を晴らせばいい。」

完全にデカブツが消えたのを確認した私は、小さく呟くように言葉を紡いだあと、空気中にある鬼の残り香を嗅ぎ分ける。

それにより、繭鬼と累の居場所がわかった。

ついでに伊之助が向かった先も。

予想通り彼は、全く別の方向へと突っ走っていた。

そのことに少しだけ安堵しながらも、私は次の場所へ向かう。

さぁ、そろそろご対面といこうか。

十二鬼月の下弦の伍……家族の愛に焦がれていた、家族の愛を忘れてしまった男の

子、
累。

51．累との接触、ついでの救済

「ギャアアアアッ!!」

「!」

空気中にある匂いを嗅ぎ分けながら那田蜘蛛山を移動していると、悲鳴とも断末魔とも取れるような耳を劈く声が聞こえてきた。

足を止めて声の方へと目を向けてみると、そこには繭鬼と少年鬼……累の姿があった。

「……何見てるの？　見せ物じゃないんだけど。」

無言で二人を見つめていると、累が静かに言葉を紡ぐ。

彼の近くにいる繭鬼の指の隙間からは斬りつけられたことにより顔にできた裂傷が治る様子が窺える。

「……取り込み中悪かったな。だが、あえて邪魔は続けさせてもらおうか。何してんの、こんなとこで？　君ら、仲間じゃないのか？」

それを見た私は、いつもの調子で累に話しかけながら、何をしてるんだと問いかける。

まぁ、原作のこともあるから、お仕置きのようなものであることは理解しているが

……これだけ恐怖、憎悪、嫌悪の匂いが混ざり合っていると、流石に止めざるを得ない。
無視することもできたけど、な。
「仲間？　そんな薄っぺらなものと同じにするな。僕たちは家族だ。強い絆で結ばれているんだ。それに、これは僕と姉さんの問題だよ。余計な口出しするなら刻むから。」
軽い敵意を累から感じる。
だからと言ってこの場から去るつもりは毛頭もない。
炭治郎のポジションだからじゃない。
累には、早く、本当の家族の暖かさってのを思い出して欲しいから。
とはいえ、彼が話を聞いてくれるとは思えない。
炭治郎や禰豆子、珠世さんや愈史郎、そして響凱のように、言葉を交わせる鬼なんてものは、きっと例外だ。
特に、下弦とはいえ十二鬼月となると衝突は避けられない。
「それならあえて口を挟もうか。攻撃してくるのならご勝手に。それ相応の対応をするだけだ。……家族や仲間ってのは強い絆で結ばれてりゃそれだけで等しく尊いものさ。血の繋がりがなけりゃ薄っぺらいなんてことはない。それと、強い絆で結ばれてる相手同士ってのは信頼の匂いがハッキリとするし、見てるだけでも暖かくなるもんなんだよ。でも、君らからは恐怖と憎悪と嫌悪の匂いしかしない。どんな間違い方をすればそ

こまでひねくり曲がった関係を絆と言えるのか知りたいね。まぁ、つまり、ハッキリ言うとだな。君らのそれは絆とは言えない。暖かくもならない薄寒い偽物だよ。」

本当は、平和的解決をしたいけど……話が通じるとは思えないから、私は彼と敵対する選択を取る。

ああ、でも炭治郎か禰豆子が怪我をしたらどうするか……。

いや、そうなる前に守ればいいのか？

禰豆子が血鬼術使えるかどうかの確認……はしなくていいか。

大丈夫だとなんとなくだが感じている。

「お、丁度いい鬼がいるじゃねぇか。こんなガキの鬼なら俺でも殺れるぜ。」

「……あ。」

そんじゃま、臨戦態勢をとりますか……って考えていたら、茂みから一人の剣士が姿を現す。

それが誰かなんて考えるまでもない。

一話だけにしか出てこなかったやられ役なのに、あれほど印象的な存在はいないのだから。

「えっと……」

「お前はひっこんでろ。俺は安全に出世したいんだよ。出世すりゃ上から支給される金

も多くなるからな。隊は全滅状態だが、とりあえず俺はそこそこの鬼一匹倒して下山するぜ。」

「いや、別に聞いてない……じゃなくて、あんたじゃその鬼は倒せな……ったく、先輩なら考えて行動を取れ、よ!!」

現れた剣士が累に突っ込む。

が、私はすぐにその剣士と累が放った糸の間に挟むように斬撃を放つ。

〝ヒノカミ神楽　火車〟

水の呼吸の弐ノ型である水車に近い斬撃でありながらも陽炎を纏ったそれは水車とは比にならない威力を叩き出す。

おかげで累が放った糸は目の前の剣士、通称サイコロステーキ先輩と呼ばれるモブに当たる前に斬り裂くことができた。

まぁ、あえて一部の糸は残しておいたから、背後にあった木をバラバラに斬り刻んだが……。

「……は……？」

サイコロステーキ先輩が背後の木を見て顔を青くする。

「私が咄嗟に技の威力分散してなかったら、今頃あんた死んでたぞ。背後の木みたいにバラバラになってな。ほら、さっさと帰った帰った。この鬼はあんたにゃ荷が重すぎ

るっての。」

呆れながらサイコロステーキ先輩に声をかければ、彼は間抜けな悲鳴を上げてその場から逃げ去っていった。

……咄嗟に防いだけどよかったんだろうか？

まぁいいか。

どうせもう会わないだろうし。

これを機に欲望塗れで突っ込むことを反省して人助けをするようになってくれりゃそれでいいや。

それだけ多くの人間が助かるだろうし。

……十二鬼月に会わなければ、だけどな。

「……ねぇ、何て言ったの？」

蜘蛛の子を散らすように……いや、一人だから尻尾巻いてか？

なんであれ力の差を理解して真っ先に逃げ出したサイコロステーキ先輩を見送っていると、辺りの空気がビリビリとしたものへと変化する。

「ん？」

視線を累の方へと向けてみると、彼は明らかな殺気を身に纏いながらこちらを睨みつけていた。

……美少年顔による殺気増し増しの表情は結構凄みがあるな。

「お前、いま何て言ったの？」

累に視線を向けて見つめ返していると、先程の言葉と全く同じ言葉を彼は口にした。

こちらの否定意見にキレたご様子で。

空気がやたら重っ苦しくなったわ。

「……何度でも言ってあげるよ。君が絆と思ってるそれは、まごうことなき偽物さ。薄寒くなるほどの、ね。」

これが強い殺気って奴かと思いながらも、私は累が絆だと信じているものは偽物であることを再び指摘する。

戦いの火蓋は、いま切られた。

52．戦闘、下弦の伍・累！

「お前は一息では殺さないからね。うんとズタズタにした後で刻んでやる。でも、さっきの言葉を取り消せば一息で殺してあげるよ。」

殺気を放ちながらも冷静に言葉を紡ぐ累。

殺そうと思えばいつでも殺せる……だから選ばしてやるとでも言いたいのだろう。

一息で死ぬか、苦しんで逝くかを。

「取り消すつもりはないよ。だって事実だからな。あんたの言ってる絆は温かさなど感じることがない紛い物だ。温かさに満ちている家族の絆を、そんな薄寒い偽物と一緒にしないでもらえるか？　あと、私は生きて帰るよ。大切な家族が心配するからな。」

私はすぐに偽物の絆という言葉を取り消すつもりはないと言い返して地面を蹴り上げる。

間違った絆を信じている彼の認識を完全に否定するために、累との戦闘に臨む。

累の血鬼術により作り上げられた強靭な糸は頭上。

前に走れば当たることはない。

だが、攻撃をしようとすれば、もちろん相手も防衛のため、または邪魔なものを排除

するために攻撃を仕掛けてくる。
目の前に、私のことを斬り刻まんとする糸が現れた。
私はすぐに水の呼吸……ではなく、ヒノカミ神楽の呼吸を使用して刀を振るう。
〝ヒノカミ神楽　円舞〟
刀を両手で握り、円を描くように振るえば、目の前に現れた糸はどこにでもあるような蜘蛛の糸のように、あっさりと斬り裂くことができた。
「!!」
累から驚いた匂いがする。
でも、それは一瞬発生したもので、すぐに敵意へと変化した。
何十かに重なり、避けるのが困難と思わしき攻撃。
まるで生き物のように動く糸は隙を見つけ出すのが困難だ。
すり抜けて懐に入ろうものなら、その隙間を糸により覆われてしまうだろう。
〝ヒノカミ神楽　碧羅の天〟
避けていくのは得策ではない……そう判断した私は、すぐに目の前に出現した隙間なく放たれた糸を斬り裂く。
おかげでダメージを受けることはなかった。
「っ!!」

〝血鬼術・刻糸牢!!〟

通常の攻撃がことごとく意味をなさないことに気づいたらしい累がとうとう血鬼術を使ってきた。

複数の蜘蛛の巣が近づいてくる。

(確か、この技を炭治郎は円舞で攻略していたな。)

かなりの近づいてきた糸を目掛けて私は再び円舞を放つ……寸前のところで目の前に現れた人影を抱え込み、私は素早く攻撃範囲の隙へと退避し、そのまま地面を転がる。

腕の中には二つの温もり。

まさか、飛び出してくるとは思わなかった。

あれか?

少しだけ思案しすぎたか?

それとも、糸の量やらなんやらから、二人が危ないと思ってしまったのか……まぁ、そのどちらかであるのかは確定的だろう。

「……炭治郎。禰豆子。箱から出てくるとは思わなかったんだけど。姉ちゃんちょっとびっくり。」

「「うー……。」」

なんとかダメージを受けることなく済んだことに安堵しながらも、腕の中の温もりに

声をかけると、私のことを見上げている鬼弟妹が心配そうな声で唸る。
「ん？　血の匂い……って禰豆子。おま、糸を喰らっちゃったのか？　傷は浅いみたいだけど……痛くないか？」
「ん！」
「ならいいんだが……。」
少しだけ怪我をしている様子の禰豆子に慌てて声をかけるが、問題はないと言った返事が返ってきた。
それならいいと安心するが、私は小さくため息を吐く。
「お前らな……心配してくれるのは嬉しいけど、いきなり前に飛び出るなんて真似はしないでくれよ……。危うく斬っちゃうところだったろ？　まぁ、心配かけた私も悪いけど、大丈夫だったから、な？」
「うー……」
「うっわー……すっごい不満顔……。……やれやれ、下の子に危ないと思わせるような戦い方をしていたようで不甲斐ないよ……。」
訴えるような眼差しに申し訳なさを感じてしまい、思わず目を逸らしてしまう。
……まぁ、確かに、あの糸攻撃はなぁ……初見では危険を感じてしまうのも無理はない。

それに、二人が飛び出してきた時、咄嗟の判断で二人を守るために回避に専念していたから気づいてなかったが、冷静になって考えればあの刻糸牢とかいう技……意外とスピードあったもんな……。

二人が入ってきた時の距離は、人一人分の隙間しか空いてなかったくらい近かったし、あと数ミリでも判断が遅れていたら、私たち三人は綺麗に斬られていたかもしれない。

それこそサイコロステーキのように。

うん……そう考えるとかなり危ない戦い方になっていたかもしれない!!

反省しなくちゃいけないな。

「……姉弟か?」

そう考えていると、静かな声で累が言葉を紡いだ。

姉弟か……という短い質問だったが……。

累の方に目を向けてみると、彼は震える指で私たちを指差して、驚いたような表情を見せていた。

「姉弟であり、姉妹であり、兄妹だよ。私たちは、生まれた時……と言っても、最初は私は一人だったけど、のちに生まれた弟、そして妹とは幼い頃から一緒さ。それが何か?」

累に対して、冷静な声音で言葉を返しながら、私は血の匂いが強い禰豆子の腕を見る。

血は止まってるし、裂傷ももうなくなってる。
「……怪我は問題ないみたいだな。よかった。……今回は私にも非があったからね。ガミガミ言うつもりはない。けど、いきなり飛び出してくるのはよしてくれ頼むから……心臓が止まるかと思った。下手したら自らの手で、二人を傷つけていたかもしれなかったからな……。」
「「むー……。」」
「ああ、わかってくれたならいい。二人とも。しばらくは姉ちゃんに任せてくれないか？　もし、本当に危険だと判断した時は戦闘に加わっても構わないけど、しばらくは様子を見ていてほしい。大丈夫。私は、絶対に無理はしないから。」
「「……ん!!」」
私の言葉に頷く炭治郎たちの頭を優しく撫でる。
二人は一瞬気持ち良さげな表情を浮かべたが、すぐにキリッと表情を変えて、私のことを見つめてくる。
しばらくは手を出しませんの意味だろう。
その姿に小さく笑みを浮かべた私は、自身の日輪刀に目を向ける。
刃にはわずかな刃こぼれが生じているが、そこまで大きいものではない。
が、あまり戦闘を長引かせてしまったら、きっと危ないだろう。

折ったら鋼鐵塚さんにブチギレられる……脳裏に原作の鋼鐵塚さんが刀を折った炭治郎に対して自分で研ぎに研ぎまくった包丁で刺殺しようとしていたことを思い出しては引きつった笑みを浮かべる。

あれには追われたくない……決して追われたくない……。

そう思いながら視線を累に向けてみると、彼は思案しているようだ。

「姉弟……姉妹……兄妹……。弟と妹は鬼になってるな……それでも一緒にいる……」

「る……累……？」

小さな声で……しかし、静寂の中だからこそはっきりと聞こえてくる累の声に耳を傾ける。

「弟と妹は姉を庇おうとした……身を挺して……。そして姉は、そんな二人を怪我をさせまいと考えて、危険を承知の上で二人を守った……。」

「！」

「本物の〝絆〟だ!!　欲しい……!!」

明らかに原作とはどこか異なるセリフを口にした累に、私は驚いて目を見開く。

これは……何かしらのイレギュラーが発生してしまうかもしれない……。

そのイレギュラーが吉と出るか凶と出るのか……しっかりと見極めなくてはならない。

５３．怒り心頭、斬り裂く刃

「!!　ちょっ、ちょっと待って!!」

　互いに互いを庇い合い、怪我がないようにした私たちを見て、驚愕の表情をした上で欲しいと口にした累に、繭鬼が慌てて声をかける。

「待ってよお願い!!　私が姉さんよ!?　姉さんを捨てないで!!」

「うるさい黙れ!!」

　すると、懇願するように声をかけてきた彼女に対して、累は怒鳴りつけながら手を横に凪ぐ。

　同時に放たれた無数の糸は、繭鬼の頸を容易く斬り裂き、彼女の背後にあった木々もまとめて斬り刻む。

「うっわ……随分とすごい威力だなありゃ……。炭治郎。禰豆子。十分に警戒を。あの子の糸は凄まじい。鬼である以上、余程のことがない限り二人が命を落とすことがないことは理解しているが、あんな威力の攻撃を喰らったらただじゃ済まない。二人が私に怪我をして欲しくないと望んでいるように、私も二人には怪我をしてほしくないからな。行動は考えてくれよ。」

「「う!!」」

それを見た私はすぐに炭治郎たちに気をつけるようにと忠告をする。

この子たちは良い子らだから、すぐに頷いては、臨戦態勢を見せる。

うん、できることなら臨戦態勢じゃなく撤退態勢を見せてほしかったんだが、どうやら二人は戦うつもり満々のご様子である。

正直言ってやめてほしいが……どうしたものか……。

「結局お前たちは自分の役割もこなせなかった。いつも…どんな時も。」

累の殺意が私ではなく、繭鬼へと向けられる。

「ま、待って…。ちゃんと私は姉さんだったでしょ？　挽回させてよ……。」

繭鬼は顔を青くして、今にもぼろぼろに泣き出してしまいそうな様子で、挽回のチャンスを累に請う。

「……だったら今、山の中をチョロチョロする奴らを殺して来い。そうしたら、さっきのことも許してやる。」

他の鬼とは違い、ある程度はうまくやってきていた繭鬼相手だからか、累は無言の間を少しだけ作りながら、挽回するためのチャンスとして、山の中を走り回る人……応援として駆けつけた鬼殺隊の柱たちのことを始末するように命じる。

「……わ、わかった……殺してくるわ。」

累の指示を聞いた繭鬼は、彼の言葉に了承の言葉を口にしたあと、斬り落とされていた首を腕に抱えてその場から立ち去る。

一瞬、デュラハンかな……？と思ってしまったのだが、うん、呑気なことを言ってる場合じゃないから頭を切り替えるとしよう。

「……少し話をしよう。」

そんなことを考えながら、繭鬼が立ち去っていった方向を見つめていると、累から静かに話しかけられた。

彼に視線を向けてみると、敵意が僅かに和らいでいる。

が、佇まいに隙は一つもなく、斬りかかったところで厄介なことになることはいやでも理解できる。

ここは、一旦話に応じよう。

まぁ、どうせ彼のことだ……炭治郎と禰豆子をくれとでも言うのだろうが。

「話？」

「そう、話。」

静かに彼の言葉を繰り返し口にすれば、累は小さく頷いたあと口を開いた。

「僕はね、感動したんだよ。君たちの〝絆〟を見て、体が震えた。この感動を表す言葉は、きっとこの世にないと思う。」

無言で累を見つめていれば、彼は次々と言葉を紡いだ。
「でも、君たちは僕に殺されるしかない。悲しいよね。そんなことになったら。だけど、回避する方法が一つだけある。」
次の瞬間、私はどうしようもない怒りに駆られることになった。
物語を知っているとはいえ……例え、イレギュラーを引き起こして炭治郎と禰豆子の姉になったとはいえ、この体に刻まれている記憶、この体の私という存在が、どれだけ炭治郎たちを愛し、大切にしているのかをよく理解しているがために。
「君の弟と妹を僕に頂戴。大人しく渡せば命だけは助けてあげる。」
ブツン……と何かが切れる音がした。
私の聴覚は、あたりに響き渡る強風のような音を捉えている。
体が熱い。
ああ……長持ちはしないかもしれないけれど……。
「……君は、何を言ってるのかな？　言葉の意味を教えてもらえるかい？」
自分自身でも聞いたことがないほどの低い声が出た。
だが、それを上書きするように、私が聞き取っているのは……ゴォオという、強風のような音。
「君の弟と妹には、僕の家族になってもらう。今日から。」

「……は……ははは……。」
「!?」
自分の口から漏れたのは笑い声。
愉快というような笑い声ではない。
嘲笑うような笑い声だ。
刀を持つ手に力が加わる。
軽く軋むような音が聞こえてきたが、それは些末なことだ。
「……ふざけるのも大概にしろよ、クソガキ。どうせテメェのことだ。〝家族の絆〟だなんだと言って、恐怖で繋ぎ止めるつもりだろ?」
「……っ!?」
言葉を紡ぐと同時に殺気を向けると、累の表情に変化が現れる。匂いも変わった。困惑、恐怖、焦り……それらが混ざっているような匂いだ。
鬼の匂いに混ざりまくって、反吐が出るくらい気分が悪い。
「黙って聞いてりゃ人の家族をまるで道具のような扱いをして、本人たちの意思はガン無視か？　ははは!!　笑わせてくれる。この子らはちゃんとした命なんだよ!!　渇きを潤すためだけの道具なんかじゃねぇ!!　竈門炭治郎と竈門禰豆子という立派な人なんだよ!!　テメェのその言葉は侮辱ってやつだ!!　私(ヒト)の大切な家族(モン)に手ェ出そうとす

んじゃねぇ!!」

一度怒鳴ってしまえば自分の口は止まらない。

この子たちが侮辱されたこと、それは何よりも耐えがたい。

向こうの私にも家族はいた。

だが、今の家族は紛れもなく炭治郎と禰豆子であり、私は完全にあっちの私とは違う自分になっている。

ならば私はこの場で吠えよう。

間違いばかりを口にする目の前の子供に、ハッキリと自分の意見を言ってやる。

「恐怖で縛り付けテメェの思い通りにしようとするもんは家族の〝絆〟とは程遠い!! ただの主従支配だ!! 根本的に違うんだよ何もかも!! そんなもんと家族を一緒にされるなんざ反吐が出る!! そんなんじゃテメェのほしいもんは永遠に手に入ることはない!! この子たちは絶対に渡さない!!」

最後まで言い切った私は、自身の日輪刀を握りしめる。

「っ……いいよ、別に。殺して奪るから!!」

一瞬の怯みを見せたが、累はすぐに言い返してきた。

自身の戦意が削がれていることに気づいていないのかもしれない。

「殺せるって言うならやってみろよ。その前にテメェの頸を斬り飛ばしてやらぁ!!」

〝ヒノカミ神楽　日暈の龍　頭舞い!!〟

暈の名の通り、幾つもの円を繋いで龍を象るように戦場を駆け抜けて振るう、水の呼吸の流流舞いに近似した、災厄の影を瞬く間に祓う技。

気のせいか、いつも以上に日輪のような炎とも光とも取れる軌跡が見える。

「!!?」

こちらの技を咄嗟に躱す累。

だが、私は彼を逃すつもりはない。

〝ヒノカミ神楽　斜陽転身!!〟

頭舞いの最後に地面に着く足を軸にして飛び上がり、宙で身体の天地を入れ替えながら水平に刀を振るう。

が、咄嗟の判断力がそれなりに高いのか、再び累に攻撃を躱されてしまう。

〝ヒノカミ神楽　輝輝恩光!!〟

それなら型を繋げるまで。

そう判断して私が使用したのはヒノカミ神楽の玖ノ型。

刀を両腕で握り、体ごと渦巻くように回転しながら跳躍……あるいは前方に突進する〝ねじれ渦〟や〝渦桃〟に類似した技。

〝ヒノカミ神楽　火車!!〟

それがダメなら再び型を繋げて技を放つ。
あまりにも連続で攻撃されているからか、累は防戦一方だ。
張り巡らされた糸を火車で斬り裂く。
だが、すぐに新たな糸が張り巡らされる。
このままでは当たってしまう。
炭治郎と禰豆子に心配をかけてしまう。
〝ヒノカミ神楽　幻日光!!〟
それならば、と私は火車を放っていた体勢を宙での高速の捻りと回転による回避技を使用し、その場に残像だけを残してそれを躱す。
「!?」
累が攻撃したのは私の残像。
本体である私は、すでに彼の背後に回っている。
〝ヒノカミ神楽　炎舞!!〟
彼が動揺をしている隙に、拾弐ノ型である炎舞を使用する。
〝血鬼術　刻糸輪転!!〟
背後に回っていた私に気づいた累が、自身の大技である刻糸輪転を使用してきた。
隙間の一つもない糸の壁。

触れたものを全て斬り刻まんとするそれは、触れた瞬間肉も骨も断たれてしまうだろう。
それならば、体が断たれる前に斬り壊してしまえばいい。
累の糸より、私の炎舞の方がスピードは優っていた。
両腕で握りしめた刀を振り下ろし、素早く斬り上げることで、糸は脆く崩れ去る。
私の体を刻むことなく、その場でハラハラと消えていく。
「な!?」
まさかの事態に累が驚く。
だが、すぐに再び血鬼術を使おうと両腕を前に構えた。
「遅い。」
〝ヒノカミ神楽　円舞!!〟
ヒノカミ神楽の拾弐ノ型まで使用したのち、ヒノカミ神楽をループさせるために戻る壱ノ型。
累が血鬼術を放つ前に使用する。
素早く振るった私の日輪刀は、彼が自身の糸で頸を斬る前に、その細い頸に吸い込まれて斬り裂いた。
確かな手応えを片手に残して。

勢いよく刎ねられた累の頸。

驚愕という表情だけが浮かび上がっている彼の瞳には、彼をまっすぐと見据えている痣を発現した自分自身の姿が映り込んでいた。

５４．累との決着

累の頸が地面に転がる中、私は地面に膝をつく。
ダメージを受けたからじゃない。
一気に疲労が襲ってきたためだ。
「「むー!!?」」
炭治郎と禰豆子が、私の様子に驚いたのか、慌てたように駆け寄ってきた。
二人からは心配と喜びの匂いを感じる。
「……はは……ちょっと疲労が出てきたみたいだ。でも、大丈夫だよ。動けないほどじゃない……。そう心配そうな顔をすんなって。」
二人の慌てように苦笑いしながら大丈夫であることを伝え、刀を収めて頭を撫でる。
すると、二人は私の体にぎゅっと抱きつきながら、甘えるようにすりすりとすり寄ってくる。
……灰のような匂い。
ちゃんと、私は累の頸を斬ることができたようだ。
……なんか、義勇の出番を完全に奪ってしまったな。

「うー……。」
「……ああ、そうだな。」
そんなことを考えていると、炭治郎が何かを訴えるかのような目を向けてくる。
瞳の中にあるのは、累に対しての心配と、間違いを正すことはできないのかという疑問。
「……多分、残りわずかだろうが、消える前にお前に問いたい。」
「問い……？」
「そう。問い。」
軽くふらつきながらも立ち上がれば、炭治郎と禰豆子が私の体を支えてきた。
そのおかげか、多少動きやすい。
二人に支えてもらいながら累に歩み寄る。
「お前が口にしていた弟たちを寄越せという発言。それは許すことができない言葉だ。だから許すつもりはない。だが、気になることも言ってたな。本物の〝絆〟だ、欲しいと。まるで水を得た魚のように生き生きとした表情で。それが気になってね……。お前は……何を求めて家族の〝絆〟を渇望した？　家族に固執する理由はなんだ？　何か……思い出せたかな？」
静かな声音で問いかけてみれば、累が目を見開く。

だが、すぐにその表情は消えた。
敵意の色は感じない。

完全なる敗北を嫌でも理解し、しかし、それなら相打ちに持っていき、目の前の鬼狩りだけでも殺そうとした累。
だが、不意に彼女から問われた家族に固執した理由や、本物の〝絆〟を求めた理由、何か思い出せないのかという言葉に、無言になる。
鬼狩り、優緋の言葉に、累は少しだけ考え込む。
いつの時か、母親役にしていた女鬼が、何がしたいのかと聞いてきたことがあった。
しかし、その時の累にすでに人間の記憶はなく、答えを出すことができなかった。
だが、家族を欲しいと望んでいることは理解していた。
だから、本物の家族の絆に触れることができれば記憶は戻り、本当の自分の欲しいものがわかるのではないかと考えていた。
それは当たっていた。
現に累の脳裏には、かつての人間だったころの記憶が甦った。
累は生まれつき体が弱く、外ではしゃぐ子供たちのように、自由に走り回ることなどできなかった。

それどころか歩くことすらも苦しくままならなかった。
そんな中現れたのが鬼舞辻無惨だった。
無惨は幼い累に、体が弱いのであれば、自分が救ってやると告げたのだ。
累は藁にもすがる思いで、無惨の提案に乗った。
だが、両親は喜んではくれなかった。
強い体を手に入れることと引き換えるように、日の光に当たれず、人を喰わねばならない体へとなってしまったがために。
『なんてことをしたんだ、累…!!』
過去の記憶にいる父親の声。
泣きじゃくる母親の声。
人の命を奪い、一つの部屋で佇む自分自身の姿。
走馬灯のように駆け巡る記憶の中、過去の自分が考えていたことを思い出す。
累は、自身の家の中で過ごし続けていた時、素晴らしい話を聞いたことがあった。
それは、川で溺れた我が子を助けるために死んだ親がいたという話。
その話を聞いた累は、感動した。
〝何という親の愛。そして絆だ〟と。
その話の親に当たる存在は、例え自分が命を落とそうと、子を守る〝親の役目〟を果

たしたのだから。
それなのに……と、累は考える。
疑問を脳裏に浮かべる。
なぜ、自分の親は、子である自分を殺そうとしているのかと。
なぜ、母親は泣くばかりで、殺されそうになっている我が子を庇ってくれないのだと。
思わざるを得なかった。
自分たちの絆は偽物だったのだと。
きっと、本物ではなかったのだろうと。
記憶はまだ続いて流れる。
殺されそうになって、自分の身を守るために、防衛本能からによる攻撃により血溜まりに沈んだ母親の側で、累は一人月が浮かぶ夜空を見上げていた。
すると、彼の側にある血溜まりに倒れる母親が何かを呟いていることに気づいた。
――――……何か言ってる。まだ生きてるのか。
しかし、時期に命は潰えるだろうと特に気にすることなく過ごそうとした。
が、その際に聞いた言葉を、彼は思い出したのだ。
『丈夫な体に……産んであげられなくて……ごめんね……。』
それを最期に母親は事切れた。

完全に命を落とし、この世から立ち去った。

同時に思い出した言葉は、自分の父親の言葉だった。

『大丈夫だ累。一緒に死んでやるから……!!』

殺されそうになった怒りの影響で何を言っているのか理解できない言葉だった。

自分の父親は人を殺した自分の罪を共に背負って死のうとしてくれていたということを累はこの時理解した。

それはつまり、最期まで自分の両親は、親としての務めを果たそうとしていたということ。

だが、累はそれを理解する前に、自らの手で本物の絆を断ち切ってしまった。

項垂れる自分に、無惨は強くなった累を受け入れなかった親が悪いのだから累は悪くないことを告げ、強さを誇るべきであると伝えた。

そのため累はそう思うほかなくなってしまった。

自分が引き起こしてしまった悲劇、それに耐え切るために。

例え自分が悪かったのだとしても。

だが、家族に対する固執、渇望は消えることはなかった。

偽りの家族を作り、その渇望を少しでも満たそうとしても、渇き切ったまま、虚しいまま。

守ってもらいたかったとしても、累が一番強いせいもあり、一人も守ってくれはしない。

強くなればなるほど、人間だった頃の記憶はなくなり、自分がしたかったことも忘れていくばかり。

自身の過ちを思い出して、いろんな感情が溢れ出る。

どうやっても二度と手にすることができない絆を求めて必死に手を伸ばしても、彼の手は決してそれに届くことはない。

「……随分と悲しい匂いがする。小さい体で、いろいろな悲しさを抱えていたんだね。」

不意に、累の耳に静かな声が届いた。

声の方へと目を向けてみれば、呆れたような、しかし、労るような笑みを浮かべる鬼狩りの姿がある。

鬼狩りは累に手を伸ばし、未だに形が残る彼の頭に優しく手を乗せ、その頭を優しく撫でる。

「思い出せたかな。自分のやりたかったこと。」

穏やかな声音と陽の光のような温もりがある優しい手。

その温もりを感じた累は、はっきりと自分がしたかったことを思い出した。

謝りたかったのだ。

本当の家族に。
本当の母親と父親に。
自分が悪かったことを。
だが……
「……でも……山ほど人を殺した僕は…地獄に行くよね……。父さんと母さんと…同じところへは…行けないよね……」
鬼となり命を奪った者が、穏やかなあの世に行けるとは思えない。
地獄に堕ちて罪を償わなくてはならない。
「はは……馬鹿じゃないの？　親ってのは、例え我が子が地獄へ行こうが、ちゃんと迎えに来てくれるもんなんだよ。自分たちにも苦しみが訪れようが、ちゃんとやってくる。もし、仮に私の弟たちが人を殺してしまい、お前のように多くを奪う側となり、その果てに命を落として地獄に行きそうになっても、絶対に私は自分がいた場所を蹴ってまでも二人に寄り添うしな。だから、お前の両親もきっと迎えにきてくれるよ。」
そんな呟きに対して、鬼狩りの女は小さく笑いながらそう告げる。
穏やかな笑みを浮かべながら、まるで確信しているかのように。
そんなことはあり得ない、何を言ってるんだこの鬼狩りは。
そう考えながら目を閉じる。

だが、次の瞬間彼の目に映ったのは、真っ白な世界と、自分の両親の姿だった。
驚いて二人に目を向けると、変わらない穏やかな笑みを浮かべている顔と目があった。
『一緒に行くよ、地獄でも。』
『父さんと母さんは、累と同じところに行くよ。』
穏やかな声音でそう告げられ、累は両目から涙をこぼし、勢いよく二人に抱きついた。
鬼だった時の彼の姿は消え、かつての人間だった頃の自分の姿に変わっていく。
「全部僕が悪かったよう!!　ごめんなさい……ごめんなさい……!!　ごめんなさい!!」
累は何度も謝罪の言葉を紡ぐ。
彼の両親は、謝罪の言葉を紡ぐ大切な我が子を優しく抱きしめながら、穏やかな笑みを浮かべていた。
直に三人の姿は炎に包まれる。
しかし、三人のそこには絶望などなく、穏やかな温もりだけが存在していた。

柱合会議とひと時の休息
55．義勇との再会。蟲柱との邂逅。

「……もう少し早く会ってりゃ、多少は違う結末を迎えることができたのかね？」
「うー……。」
「む？」
涙を流しながら消えていった累。
彼がいた場所には彼が着ていた服と灰のような匂いのみが存在している。
そんな中小さく呟くと、炭治郎はわからないと言わんばかりの表情をしている。
禰豆子はよくわかっていないようで、首をコテンと傾げていた。
「お前は……」
「あ。」
気にしなくていいよ、と言うように、禰豆子の頭を撫でていると、櫻井ボイスが耳に届く。
声の方へと目を向けてみると、驚いた様子の義勇の姿が。
「確か……優緋、だったな。」

「ちゃんと名前覚えててくれたんだ。ありがとう。」
「俺は、名前を忘れるような奴じゃない。」
軽く拗ねたような声音でそう告げた義勇が、ゆっくりと歩いては、近くに落ちていた累の着物に近寄る。
「……お前がやったのか？」
「うん。」
「そうか。怪我は？」
「ない。」
「……そうか。」
義勇の質問に短く答えれば、一瞬驚いたような表情をされる。
まさか、私が無傷で鬼を滅殺しているとは思わなかったのだろう。
「……まさか、お前がそこまで成長してるとは思わなかった。」
「……いや、だって無傷で何とかしないと、炭治郎たちからお小言をもらいそうなんだよ。この子ら、私が怪我することに関して絶対に許してくれないし。だから、なんとか無傷で倒した。おかげで結構疲労困憊だよこっちは……。」
成長速度に対して、これほどまでとは思わなかったと告げてきた義勇に、私は怪我をしたら炭治郎たちが黙っちゃいないことを教えたのち、累の頭を撫でるためにしていた

しゃがんだ体勢から立ち上がろうと足に力を入れる。
「！」
「うわ!?」
「「うー!?」」
が、何かに気づいたらしい義勇に肩を押された挙句、そのまま倒されてしまったため思わず声を上げる。
炭治郎と禰豆子もまさかの事態に驚いたような声を出す。
しかし、すぐに義勇が私に危害を加えたと判断して体勢を変えた。
「待て!!　炭治郎!!　禰豆子!!　伏せろ!!」
「!?」
一瞬義勇に押し倒されたことに固まっていたが、すぐに彼がした行動の理由を理解できたため、慌てて二人に伏せるように声をかける。
義勇に対する臨戦体勢を取った炭治郎たちは、私の声に一度目を丸くしたが、すぐに指示に従いその場でしゃがみ込んだ。
同時に響く刃物同士がぶつかる音。
私の視界が捉えていたのは、蝶の羽のような羽織を靡かせながら、攻撃を受け流された女性の姿。

「あら？　どうして邪魔をするんです、冨岡さん。」
その女性は、羽織を翻しながら静かに着地して、手にしていた刀を構えながらこちらを……いや、義勇に目を向ける。
「鬼とは仲良くできないって言ってたくせに、なんなんでしょうか。そんなだからみんなに嫌われるんですよ。」
蝶の羽のような羽織の女性……胡蝶しのぶが静かな声で言葉を紡ぐ中、義勇は私たちのことを守る体勢をやめることはない。
それを確認した私は、炭治郎と禰豆子を手招きする。
二人は一瞬互いの顔を見合わせたが、すぐにこちらに近寄ってきた。
「さぁ冨岡さん。どいてくださいね。」
しのぶさんが義勇に刀を向け、退くように声をかける。
私は、その間にその場で起き上がり、炭治郎と禰豆子を後ろ手に庇う体勢を取る。
かなり疲労してはいるけど、二人のことは絶対に守らなければならない。
「……俺は嫌われてない。」
「……。」
そんな中紡がれた言葉に、思わずそっち？　と考えてしまったが、何とか堪える。
このシーンでそっち？とか言うのは正直お門違いだと思われる。

「あぁそれ…すみません。嫌われている自覚が無かったんですね。余計なことを言ってしまって申し訳ないです。」

「……。」

……なんでこの時の二人の会話はかなりズレているのだろうか。

軽くドン引きしながら考えていると、不意にしのぶさんから視線を向けられる。

「お嬢さん。お嬢さんが庇っているのは鬼ですよ？　危ないですから離れてください。」

彼女は私の目と自分の目が合わさった瞬間、ヒソヒソ声で炭治郎と禰豆子は鬼だから危ないので離れてと言ってくる。

「知ってますよ。でも、この子たちは私の大切な家族……大切な弟と妹なんです。大切な弟たちを、鬼だからと庇わない姉はいませんよね？」

私はすぐに冷静な声音でしのぶさんの指示を拒絶する。

後ろ手に抱きしめながら、まっすぐと彼女の目を見つめ返しながら。

「まぁ、そうなのですか？　可哀想に……。では……苦しまないよう、優しい毒で殺してあげましょうね。」

しのぶさんからわずかに漏れる殺気。

だが、私は怯まない。

大切な家族を易々殺させるわけにはいかない。

「うわ!?」
いざという時は攻撃も辞さない。
日輪刀に手をかけてそう考えていると、急に体が浮かび上がり、同時に背中と膝裏に温もりを感じ取る。
驚いて顔を上げると、炭治郎が私のことを横抱きにして走り出していた。
まさか、弟に姫抱きされるとは思わなかったんだけど。
「う！」
「ん!!」
「いつのまに……」
軽く困惑していると、禰豆子が普段は自分たちが隠れている箱を手にして走ってきては、炭治郎の横に並んで移動する。
炭治郎に抱き抱えられながらも義勇の方に目を向けると、彼は私たちを少しだけ見たあと、しのぶさんへと目を向けた。
どうやら、しのぶの動きを止めてくれるようだ。
「！　炭治郎!!」
「む!!」
しかし、そのことに安堵できるのはほんの一瞬。

すぐに視界に入った存在に気づいた私は、自分を抱えて走り続けている炭治郎に声をかけると、彼は一瞬だけ背後に目を向けたあと、軽く跳躍して、背後から放たれた斬撃を躱す。

「!!」

炭治郎に斬りかかった存在……栗花落カナヲが、驚いたような表情を見せる。

だが、すぐに自分のやることを全うするために、再び炭治郎たちへの攻撃態勢を取った。

「伝令!!　伝令!!」

しかし、不意に聞こえてきた鎹鴉の声に気づいては、ぴたりと攻撃の手を止めた。

「……まぁ、そうなるよな。」

「む?」

「何でもないよ。炭治郎。禰豆子。止まっていい。それと、軽く忠告しておく。多分、少しだけ痛い思いをすることになるだろう。だが、何があっても人だけは襲ったらダメだ。いいね?」

小さな呟きに反応を示した炭治郎に、何でもないと返した私は、止まっていいことを告げる。

少しの忠告も口にしながら。

二人はよくわからないと言ったような反応を見せるが、すぐに小さく頷いて、その場で足を止めた。

「優緋・炭治郎・禰豆子三名ヲ拘束!!　本部へ連レ帰ルベシ!!　優緋・鬼ノ炭治郎及ビ鬼ノ禰豆子!!　拘束シ本部へ連レ帰レ!!　優緋!!　耳飾リヲツケテイル!!　額ニ傷アリ鬼炭治郎!!　竹ヲ噛ンダ鬼禰豆子!!」

頭上を通過していく鎹鴉を見送って、炭治郎の手から降りる。

と、少しだけフラついてしまった。

……痣を出してからこの状態が続いてるな……まだ、あれを出しても疲労しない程の体はできていなかったようだ。

「う?!」

私のフラつきに気づいた炭治郎たちが慌てて私を支えてくる。

苦笑いをしながら大丈夫だと伝えるように二人の頭を撫でる。

……普段なら擦り寄るのに、今回ばかりは擦り寄ることなくかなりの不満顔を向けられてしまった。

誤魔化されないからなと言いたいのだろうか……。

「……あなたが優緋で、その子が炭治郎……それで……彼女が禰豆子?」

カナヲが近づいてきて、首を傾げながら聞いてくる。

その反応は可愛らしいが、炭治郎に斬りかかったのはちょっと許せない。

まぁ、私ら鬼殺隊はそれが仕事だから言い返すことはできないが。

「そうだよ。見ての通り、カラスたちが口にしている特徴と一致してるだろう？」

そう思いながら素直に答えれば、カナヲは何度か私たちを順番に見つめたあと、小さく頷いた。

「攻撃に関しては流石にこちらも抵抗せざるを得ないけど、連行に関しては文句を言う資格がない。鬼を連れてる鬼狩りなんて、本来ならばあってはならないだろうから。だから、連れて行かれることに抵抗はしない。」

それを見て攻撃の手はなくなったことを理解した私は、攻撃には抵抗するが、連行に関しては抵抗するつもりはないことを告げ、臨戦体勢をやめる。

カナヲは私の言葉に一瞬キョトンとするが、すぐに指令を執行するために縄をどこからか取り出した。

「あ、ちょいまち。」

「？」

「この二人、まずは箱に入れていい？　そろそろ朝日が昇るだろうから、避難させないと。」

「箱？」

「ああ。」
　拘束に関しては仕方ない。
　だが、その前に炭治郎たちを日の光から守らなくてはならないため、箱の中に避難させたいことを告げる。
　最初カナヲは首を傾げたが、私が炭治郎たちに目を向けた瞬間、二人が体を縮めて箱の中に入る様子を見て納得する。
「……ところで、子供くらいの大きさとは言え、それなりに二人が合わさった重さはあるわけだが……運べる人いる？」
「……多分。」
「ならいいや。えっと、手は後ろに回したらいい？」
「うん。」
「そう。わかったよ。」
　両腕を後ろに回して見せれば、カナヲがすぐに近寄ってきて、私の腕を縄で拘束する。
　……意外とキツい縛り方だな、まぁいいけど。
「……本当に、抵抗しないんだ。」
　攻撃に対しては全力で抵抗していたのに、こっちに関しては本当に抵抗しないためか、カナヲが若干驚き気味だ。

「大切な弟たちの命が危ぶまれたんだ。奪われたくない側が抵抗するのは当然の摂理さ。でも、捕まることに関してはこちらにも非はあるし、仕方ないと思ってる。二人が無事なら、こちらも行動を起こす理由がない。」

私は、すぐに命を危ぶまれるのとそうじゃないのとでは行動も変わってくることをカナヲに告げた。

カナヲは、よくわかっていないのか首を傾げる。

だが、すぐに隠の人間が現れたので頭を切り替え、隠の人に指示を出した。

５６．九人の柱とお館様と

抵抗することなく連行に応じ、しのぶさんと義勇に驚かれたりしたが、それはすでに過ぎたこと。

しのぶさんたちに着いていき、日が空を照らし始める中、私はでかい屋敷の庭……？に連れてかれた。

大人しくその場に座っていれば、ゾロゾロと人が増えてくる。

間違いなく柱合会議、及び裁判が始まる。

ああ、一応、炭治郎たちが入ってる箱は側に置かせてもらってる。

何とか粘って交渉したら、抵抗しない様子のこともあり、それだけは許してもらえた。

（……相変わらず顔がいいなこの人ら。）

柱たちがこちらを見る中、私はそんなくだらないことを考えていた。

炭治郎たちが無事ならば、取り乱す必要はない。

……なんか周りがごちゃごちゃと言っている。

まぁ、何を言ってるのかは大体覚えているのであえて聞き流しているんだけど。

そんなことより……と私は柱たちを盗み見る。

最初に見たのは煉獄さん。
この物語の中で、一番最初に命を落としてしまう炎柱。
下弦の壱との決着のあと、近場にいた上弦の参、猗窩座との戦闘の末に命を落としてしまう人。
……那田蜘蛛山の攻防の末、三人ほど剣士の命を救うことができたが、あれがあったからと油断はできない。
下弦に比べて、あの鬼たちに比べて、上弦の参である猗窩座の戦闘力は桁違いだ。
だから、それに対抗できる程の力を以って、煉獄さんとの共闘に持ち込まなくてはいけない。
そうしなくては確実に彼は命を落とすだろう。
これまで命を落としてきた人々のように。
一時的な痣の発現ではなく、完全なる痣の発現、そしてそれの維持が必要になる。
よほどのイレギュラーが発生しない限りは、炭治郎たちが死ぬことはない。
この裁判を越えたのち、休息を取ったあと、然るべき時のためにも力を向上させなくては……。
次に目を向けたのは宇髄さん。
彼は命を落とすことはない……けど、もしもという可能性もある。

もし、煉獄さんを助けることができたとして、その代償として別の人が死ぬ運命になる可能性は十分に存在している。
それはダメだ、絶対に。
だから、なるべく上弦の陸戦が発生する遊郭での話でもやらなければならないことが多々あるだろう。
せめて、その頃には〝透き通る世界〟に入れるようになる必要がある。
次に危険なのは、無一郎と蜜璃と、この場にはいない玄弥。
上弦の伍、上弦の肆との戦闘が発生する刀鍛冶の里での物語。
三人の被害の軽微化、同時に里の人々たちの運命をある程度覆せるようにならなくてはならない。
多分、必要になるのは赫刀の発現だ。
……はぁ、考えるだけ考えるほど、とんでもない結論に結びついてしまうな。
何もかも覆すのに必要なもの……それは、結局、縁壱さんができていたこと全てを身につけること。
もうあいつ一人でいいんじゃないかな?と言わせる程の実力を身につけなくてはダメとか、とんだ無理ゲーだ。
……あんな風になれたら、きっと何もかも守れるようになるんだろう。

でも、私にできることなんだろうか？
この世界で、この意識を持って生活したのは二年程。
元はただの学生だった私にできるのか？
鬼を狩ること、鬼を倒すこと……それは必要なことだからと何とか今までやってきたけど、原作以上の人を救うには、鬼の命を奪うことに躊躇わない以外にこれ以上の力を身につけろって？
全く……本当に難儀な世界だよ。
でも、救うと決めた以上、それはやらなくてはならない……いや、絶対にやり遂げる。
……修行のレベル……もうちょっとあげるべきかなぁ。
「優緋さん。」
「はい。」
ぐるぐると考えていると、しのぶさんが静かに話しかけてきた。
こちらの話を聞きたいのだろう。
それならと、素直に私は反応を返す。
……なんかどっかからさっきまで上の空だったのに的な言葉が聞こえてきたような気がしたが無視だ無視。
「何があったのか教えてくださいますか？」

「二年ほど前。私が少し家を離れているうちに、私の家族のほとんどは鬼により命を奪われ、唯一生きていた弟と妹は鬼となってました。でも、この子たちは人を喰べたことがありません。これからもそれは変わらないと思いますよ。下品なことを言いますが、私が月のものを患って常に流血していようが襲ってくることはありませんでしたから。私が側にいても、心配そうに見てくるだけだったし。」

しのぶさんの問いかけに対して過去のことやこれまでのことを告げれば、辺りに静寂が降りた。

「……あれ？」

原作では炭治郎が柱たちにいろいろと言われていたはずなのに、それが全くなかったので、不思議に思いながら辺りを見渡せば、男性陣が視線を逸らした。

伊黒さん、義勇、煉獄さんは顔を赤らめて固まっている。

宇髄さんは〝マジか……〟と呟いて引きつった笑みを浮かべてる。

悲鳴嶼さんと不死川さんは唖然としている。

「……女の子がサラッとそんなこと言ってはいけませんよ？」

「……すみません。襲わない理由を口にするなら一番手っ取り早いと思って。」

「そうかもしれないけど、男の子もいるからほどほどにしなきゃダメよ！」

「……はい。」

しのぶさんと蜜璃から注意された。
そりゃそうだって？
……まぁ、反省はしますけど。
「……お館様のお成りです。」
何て考えていたら、五つ子の一人である……えっと……誰だっけ……。
髪が白いのは、ひなき、にちか、くいな、かなたの四人だけど……。
と、とにかく、五つ子の一人が言葉を紡ぐ。
……彼女も若干引き気味だったんだけど、うん、気にしないことにした。
「よく来たね、私の可愛い剣士（こども）たち。お早う、皆。今日はとてもいい天気だね。空は青いのかな？」
屋敷の方へと目を向けてみると、そこには顔が病により変色してしまっている一人の青年の姿があった。
「優緋さん。頭を下げてください。私たちを束ねている方です。失礼だけはないように。」
「……わかりました。」
彼の姿を確認したしのぶさんが、小さな声でそう告げてくる。
私は素直にそれに従い、その場で頭を垂れた。

炭治郎たちが入っている箱の背負い紐のとこだけは、しっかりと握りしめた状態で。
私の反応を確認したしのぶさんは、小さく穏やかな笑みを浮かべたあと、その場で頭を垂れた。
すると、他の柱たちもしのぶさんのように頭を垂れる。
……しのぶさんと蜜璃の間にいるからか、かなりの安心感があるのは気のせいではないだろう。
約一名から妬みの視線を向けられているけど。
「顔ぶれが変わらずに半年に一度の〝柱合会議〟を迎えられたこと、嬉しく思うよ。」
「お館様におかれましても、御壮健で何よりです。益々の御多幸を切にお祈り申し上げます。」
お館様と不死川さんの挨拶が終わる。
私の左側にいる蜜璃から、ちょっとだけ落ち込む匂いがした。
それに少しだけ苦笑いをしそうになったが、顔に出さないように堪えて、私は静かに目を閉じる。
さぁ、会議と裁判が始まる。

57．柱合裁判。判決は物語通りに

「畏れながら、柱合会議の前に、この竈門優緋なる鬼を連れた隊士について、ご説明いただきたく存じますが、よろしいでしょうか。」

しのぶさんと蜜璃の間にいることに安堵しながら、無言で頭を下げていると、不死川さんが静かに、私についての説明をお館様に乞う。

「そうだね。驚かせてしまってすまなかった。優緋、炭治郎、禰豆子のことは私が容認していた。そして、皆にも認めてほしいと思ってる。」

すると、お館様は穏やかな声音で、私たちのことはあえて容認していたことや、この場にいる全員に認めてほしいことを口にする。

義勇以外から驚いた匂いがした。

当然だろう。

まさか、鬼狩りの統率者が鬼を連れている剣士を容認している上、それを全員に認めてほしいなどと口にするなんて、本来ならばあるはずないのだから。

「嗚呼…たとえお館様の願いであっても、私は承知しかねる……」

最初に口を開いたのは悲鳴嶼さん。

数珠がじゃらじゃらとやかましい。
癖なのかな……？
「俺も派手に反対する。鬼を連れた鬼殺隊員など認められない。」
次に口を開いたのは宇髄さん。
無駄にキラキラしてる。
めっちゃキラキラしてる。
というか、派手に反対ってなんだ。
何にでも派手をつけるんじゃない。
どこぞの赤っ鼻思い出すのでやめてほしい。
「私は全てお館様の望むまま従います。」
三番目に口を開いたのは蜜璃。
ちょっとだけハートが飛んでいるような錯覚を覚える。
誰に対してもキュンとしちゃうそれ、たまに変な人に捕まらないといいけどと思うのは私だけだろうか？
「僕はどちらでも…すぐに忘れるので…。」
四番目は無一郎。
いや、サラッとすぐに忘れるって言うなよ。

大事なことを忘れちゃダメでしょ。

「……。」

「……。」

しのぶさんと義勇の二人は無言だ。

義勇は鬼にされた弟妹を連れている人間に対して、鬼狩りを目指したらいいと口にしたため、言葉を紡ぐ資格はないし、信じているからこそ、否定をするつもりはないと言ったところだろう。

しのぶさんは……これは、複雑と言った感情かもしれない。

私の発言から、炭治郎たちが人を襲わないのはわかるが、自分の目で見てみなくてはわからないと言いたいのかもしれない。

「信用しない。信用しない。そもそも鬼は大嫌いだ。」

……大事なことなので二回言いました……ってか?

本当にネチネチしてるなこいつ、と言った感情を抱きたくなる。

まぁ、今言葉を紡いだ蛇柱こと伊黒小芭内の過去を考えれば、ね。

さっきは黙らせることができたけれど、疑り深い部分があるし、否定してもおかしくはない。

「心より尊敬するお館様であるが理解できないお考えだ!!　全力で反対する!!」

うわうるさ!!

……じゃなくてだな。

いや、うるさいと感じるくらいのクソデカボイスだったのは否定しないけど、ちょっと抑えてほしい、と感じるくらいの声音で否定する煉獄さん。

……うん、体調悪い時じゃなくてよかった。

絶対体調悪かったら頭痛くなっていただろう。

「鬼を滅殺してこその鬼殺隊。竈門・冨岡両名の処罰を願います。」

最後に言葉を紡いだのは不死川さん。

彼の言葉は正論と言えるだろう。

鬼を滅殺するはずの存在が、いくら人を襲わないとはいえ、ある意味で野生の獣と同様に手綱を握ることなど不可能と言っても過言ではない暴走爆弾持ちの鬼を置いておくことは容認できないだろう。

場合によっては、お館様も危険に晒すことになる可能性もあるのだから。

まぁ、それは周りにいる面子も考えてはいるか。

その上でお館様の意見に従う人もいる。

「では、手紙を。」

「はい。」

柱たちの意見を聞いたお館様は、傍に控えていた五つ子の一人に声をかける。
声をかけられた少女は短い返事を口にしたのち、一つの手紙を取り出した。
「こちらの手紙は、元柱である鱗滝左近次様から頂いたものです。一部抜粋して読み上げます。〝優緋が鬼の弟、妹の二人と共にあることをどうか御許しください。炭治郎と禰豆子は強靭な精神力で理性を保っています。飢餓状態であっても人を喰わず、そのまま二年以上の歳月が経過いたしました。俄には信じ難い状況ですが、紛れもない事実です。もしも、炭治郎、禰豆子が人に襲いかかった場合は、竈門優緋及び、鱗滝左近次、冨岡義勇が腹を切ってお詫び致します。〟」
静かに読み上げられた手紙に、私はそっと目を閉じる。
鱗滝さんには感謝以外何もない。
義勇に対してもだ。
……ちゃんと義勇、話聞かされていたよな……？
鱗滝さんに限って無断で弟子の命懸けたりしないよな……？
二次創作に聞かされてない義勇が困惑する漫画がちらほらとあったけど、流石にあんなことにはなってないよな？
「……切腹するから何だと言うのか。死にたいなら勝手に死に腐れよ。何の保証にもなりはしません。」

「不死川の言う通りです！　人を喰い殺せば取り返しがつかない!!　殺された人は戻らない！」

辺りに静寂が満ちる中、少しばかりの不安と疑問を脳裏に描いていると、不死川さんと煉獄さんの二人が、切腹しようが人を殺してしまっては意味がないと抗議する。

「確かにそうだね。人を襲わないという保証ができない。証明ができない。ただ、人を襲うということもまた、証明ができない。」

「!!」

お館様は、二人の抗議に対して一理あることを口にしたのち、同時に人を襲う証明も今の時点ではできないことを告げる。

不死川さんが、どことなく驚いたような……信じられないというような匂いを纏った気がした。

「炭治郎と禰豆子が二年以上もの間、人を喰わずにいるという事実があり、二人のために三人の者の命が懸けられている。これを否定するためには、否定する側もそれ以上のモノを差し出さなければならない。」

「……っ」

「……むぅ！」

お館様の言葉に黙り込む不死川さんと煉獄さん。

そんな二人を軽く盗み見た私は、小さく息を吐く。
ここでも妙なイレギュラーは発生していない。
信じないと言って斬りかかられるゼロとは言えない可能性をわずかながらにも考えていたが、そんなことはなかった。
「それに、優緋は鬼舞辻と遭遇している。」
「!?」
「!!」
再びの静寂が落ちる中、お館様が不意に紡いだ私に鬼舞辻との遭遇履歴があることを聞いた瞬間、周りが急に騒がしくなる。
「そんなまさか……!!」
「柱ですら誰も遭遇したことがないというのに…!!」
「こいつが!?」
一斉に視線を向けられて思わずびっくりする。
だってそうだろ。
顔が良い面子に一斉に目を向けられたら誰だって驚く。
一部顔がいかついし、勢いよくいかつい顔が振り向いてきたら誰だってビビるだろ。
「どんな姿だった!?　能力は!?　場所はどこだ!?」
「戦ったの?」

「鬼舞辻は何をしていた!?」
「根城は突き止めたのか!?」
「ぎゃ!?　私は聖徳太子じゃないんで一気に問われても答えられないですって!!」
「遭遇したのお前だけだからだろうが!!　あいつの能力は!!?」
急に動いた人の波により転びかけた蜜璃の体を自身の体で支えながら、ギャンギャンと一気に話しかけてきた柱たちに思わず言い返してしまう。
しかし、そんなのは関係ないと言わんばかりに質問攻めに遭い、頭が痛くなる。
「……。」
不意に、お館様が静かに、という言葉を伝えるように、人差し指を口元に添える。
すると、先程の質問の嵐はぴたりと止まり、静かになった。
「……大丈夫ですか?」
ようやく落ち着いた……と思いながら、咄嗟に自分の体で支えていた蜜璃に大丈夫だったかと静かに問いかける。
「う、うん、ありがとう……!」
「……。」
私の体の支えもあり、尻餅をつくことはなかった蜜璃が感謝の言葉を口にしながら、顔を赤らめる。

……はい、伊黒さんから妬みの視線が痛いです。

でも仕方ないだろ。

あのままじゃ下手したら擦り傷できていたし、怪我しないようにしたんだからその目はやめてくれ。

「鬼舞辻はね。優緋に向けて追っ手を放っているんだよ。その理由は単なる口封じかもしれないが、私は初めて鬼舞辻が見せた尻尾を掴んで離したくない。恐らくは炭治郎と禰豆子にも鬼舞辻にとって予想外の何かが起きているのだと思うんだ。」

わかってくれるかな?と穏やかな声音で問いかけるお館様。

その言葉に柱たちは無言になる。

「わかりませんお館様!! 人間ならば生かしておいてもいいが、鬼は駄目です!! 承知できない!!」

……ただ一人を除いて。

離れた位置にいる不死川さんが、自身の腕を自ら刀で傷つけ血を流す。

「……炭治郎。禰豆子。私が月一のあれになってる時も二人は平然としていたから心配はしてないが気をつけろ。」

それを見た私は、すぐに箱に軽く口を寄せ、炭治郎たちに気をつけろと短く伝える。

箱の中に入ってる二人は了承するように箱をカリカリと軽く引っ掻いたあと、大人し

くするように動きを止めた。
「お館様…!!　証明しますよ俺が!!　鬼という物の醜さを!!」
「実弥……」
血がダラダラと流れる腕を気にすることなく、不死川さんが炭治郎たちが入る箱に近づいてくる。
「オイ鬼!!　飯の時間だぞ、喰らいつけ!!」
箱の隙間から血を流し入れるようにして言葉を紡ぐ不死川さん。
その様子を確認した私は、背負い紐から手を離す。
「口を挟むようで申し訳ありませんが、鬼が陽の光に弱いのは、柱と呼ばれる方であれば理解できるかと。こちらで血を流したところで、この子たちは出てきませんよ。」
そして、冷静な声音で不死川さんにそう指摘すれば、彼は驚いた様子を見せる。
「チッ……お館様、失礼仕る。」
が、すぐに口を挟んできた私に舌打ちを漏らしながらも、不死川さんは一言お館様に断りを入れ、目の前の屋敷の部屋に上がり、その刀を構えた。
「優緋さん?」
「……信じてるので、あの子たちのことを。」
「……。」

明らかな自身の弟妹を差し出す行為に、しのぶさんが驚いたように声をかけてくる。
不死川さん以外の柱たちも、私の行動が意外だったのか、驚いて固まっている様子だ。
だが、私はその様子を気にすることなく、まっすぐと不死川さんのことを見つめる。
刀を構えた不死川さんは、何度か二人が入ってる箱をその刀で貫いたのち、
「出て来い鬼ィィ!!　お前の大好きな人間の血だァ!!」
箱の扉を勢いよく開ける。
いや、開けるって表現合わないなあれ。
破壊してるよ。
ちゃんと直してもらえるよな……？
「……だから二人は人を襲わないんだって。」
ボソリと言葉を呟きながら見つめていると、炭治郎と禰豆子は本来の大きさに体を戻して不死川さんの腕を見つめる。
「「……。」」
「……あ？」
不死川さんから疑問の声が上がる。
そりゃそうだ。
だって、本当に二人はただ見つめているだけだし。

食人衝動を抑え込んでいるような様子なんて一つも見せずに。
「……う？」
「むー……。」
むしろ知らんぷりというか……うん。
あれは心配って感情を抱いてる雰囲気だな。
「う！」
「むん！　うー!!」
「……すみません。行動の許可をいただいても？　二人が呼んでるので。」
「構わないよ。」
「ありがとうございます。」
炭治郎たちが何か相談するような様子を見せたのち、何らかの結論に至ったのか、私に来て欲しいと訴えてきているので、お館様に許可をもらい、屋敷の縁側に近く。
すると、炭治郎がてくてく近づいてきて、私を拘束する縄を爪で切る。
同時に禰豆子が不死川さんの手を引っ張り、私の元へと近寄らせる。
「???」
今の状況が飲み込めていない様子の不死川さん。
炭治郎たちは困惑している彼のことなど気にせずに、私の方に血がダラダラ流れてい

る腕を近づける。
「……まぁ、その爪だもんな。」
それが意味しているものがなんなのか理解しているので、私は小さく溜息を吐き、傷薬を一旦塗り、包帯を巻いて応急処置を済ませる。
「確かめるためとは言え、普通、自分の腕斬りますか?」
「?……!!」
!!!」
「ブフッ」
ようやく状況を理解できたらしい不死川さんが目を見開いて固まった。
鬼の本性を暴くつもりが、逆に心配された上に治療を施されてしまうという展開になったのが信じられなかったようだ。
蜜璃が吹き出し、他の柱たちは笑いを堪えるように肩を震わせている。
「どうしたのかな?」
周りの様子が一気に変わったからか、お館様が不思議そうに言葉を紡ぐ。
「鬼の男の子たちは不死川様に何度か刺されていましたが、彼のことを襲いませんでした。むしろ、突き出された不死川様の血塗れの腕を見ても平然とした様子で何かを相談するような素振りを見せ、優緋様を呼び、彼女に不死川様の手当てを任せ、その手元を見つめていました。」

「そ、そうなんだ。」
その問いに五つ子の一人が答えると、お館様もわずかに笑いを漏らす。
まぁ、そんな展開になるなんて、いくら先視の才を持ち合わせているお館様でも読めなかっただろうし、笑ってもおかしくない。
「では、これで炭治郎と禰豆子が人を襲わないことの証明ができたね……っ」
笑いを堪えながら、そう紡ぐお館様に、不死川さんが目を見開いて固まった。
「……優緋。それでもまだ、炭治郎たちを快く思わない者もいるだろう。」
笑いを落ち着かせたお館様が話しかけてくる。
私はすぐに、庭へと戻り、その場で頭を垂れる。
「証明しなければならない。これから、優緋と炭治郎と禰豆子が鬼殺隊として戦えること。役に立てること。」
彼の声は、確か特殊な声だったはず。
知らず知らずのうちに、人を心酔させる……ああ、確かにその通りだ。
不思議な高揚感に襲われる。
「これからも、十二鬼月を倒しておいで。那田蜘蛛山で接触した、下弦の伍を一人で倒した時のように。今度は三人で一緒に。」
が、その高揚感はすぐに霧散する。

周りの空気が一気に変わったのだ。
義勇以外の柱が、明らかに驚いている……。
「……えっと……？」
「優緋が倒した、少年鬼だね。」
「あ……あはは……なるほど……。」
……どうして累が下弦の伍だと彼は気付いたのだろうか。
私は原作で知っていたけど、あの子メカクレだったし、隠れた方の目に数字が刻まれていたから見えないはずなんだが。
「鎹鴉から聞いたよ。」
「……。」
天王寺が教えたようです、はい。
どっから見ていたんだあいつ。
「……これからも精進いたします。炭治郎と禰豆子のことを認めてもらうためにも。私のことも認めてもらえるように。いつか訪れるであろう、鬼の首魁との決着のためにも。二人を人間に戻すためにも。少しでも多くの人々が、安心して暮らせる世の中にするためにも。」
いろいろとツッコミどころ満載の展開だったが、なんとか乗り越えることができた柱

合裁判。
そのことに安堵しながら笑うが、不意に訪れた疲労感と頭の痛みにより体勢を崩してしまう。
「優緋さん!?」
意識が遠のく中、誰かがとっさに体を受け止めてくれた気がした。
だが、それを確認する前に、私の目蓋は重くなる。
「「うーーーーーー!?!!」」
炭治郎と禰豆子の悲痛な声が聞こえてきた。
大丈夫だと言いたいけれど、どうもそんなことを口にする余裕はないようだ。
そういえば……倒れる前に、しのぶさんの声が聞こえた気がしたけれど……ひょっとして彼女が支えてくれたのだろうか。
それにしては……腕は男の人のように、逞しく硬いものだった気がするけど……。
ぐるぐると考え込む中、ふわりと私の視界が大きな手に覆われた気がした。

58．目覚めた先は蝶屋敷

不意に意識が浮上する。
それに従うように目を開けてみると、見たことのない天井が視界いっぱいに広がった。
鼻につくのは消毒の匂い……？
と、なると……ここは蝶屋敷……だろうか……？
「ああ!!　優緋ちゃん、目が覚めたんだねぇえぇえぇえ!!」
「ぶっ倒れるとかなっさけねぇなァ!!」
「うー!!」
状況を整理していると、一気に周りが賑やかになる。
視線を巡らせてみれば、そこには炭治郎たちと善逸たち。
「……ああ……おはよう……。」
「むー!!」
「のわ!?」
目を覚ましたなら挨拶したほうがいいよな……と思いながら一言口にすれば、炭治郎

たちが抱き着いてきた。
　体を小さくしているからか、重さはそこまでなかったけれど、飛びつかれてびっくりしてしまった。
「うー……!!」
「むー……!!」
「……あはは……心配かけたな。悪かったよ。」
　しかし、すぐに二人が泣いていることに気づいては、苦笑いをしながら謝罪の言葉をかけ、二つの頭を優しく撫でる。
　うん、ちょっと首しまってるから腕の力を弱めてくれないかな?
　少し苦しいんだけど。
「目を覚ましたようですね。かなり疲労が溜まっていたのか、数時間ずっと眠りっぱなしでしたよ。」
　わずかな苦しさを感じ取りながらも、二人の頭を撫で続けていると、穏やかな声が辺りに響く。
　視線を声の方へ向けてみれば、そこにはしのぶさんの姿が。
「あ……えっと、確か……。」
「胡蝶しのぶです。体調はどうですか?」

名乗られていない名前を呼ぶのはいかがなものかと思い、曖昧な言葉を紡げば、しのぶさんは自分の名前を口にしたあと、私の側によって来て体調に関して質問をしてくる。

「……そう、ですね。正直言って、かなり気怠さを感じてます。すぐにでも眠りに落ちたいくらいに。頭も少々痛みますね……。」

少しだけ考えたあと、現在感じている自身の体の気怠さや不調を素直に明かせば、しのぶさんはなるほど、と小さく呟く。

「優緋さんは怪我をしてはいないですが、過労の傾向があるようですね。まぁ、鬼殺隊に入ってわずかな期間で十二鬼月を倒したのですから、無理もない状態かと思われます。しばらくの間は指令は受けず、休息に集中したほうがいいかもしれませんね。疲労が残っていては、すぐに鬼に足を掬われてしまい、命を落としてしまいますから。」

……どうやら私にもドクターストップがかかるようだ。

怪我以上に疲労を引きずる方が危険らしい。

まぁ、確かに戦えなくなったら意味ないよな……。

「……わかりました。」

「そう気を落とさなくてもいいですよ。ちゃんとした休息をとっていれば、すぐに動けるようになります。疲労以外の不調を患っていませんから。一週間もすれば大丈夫だ

と思います。」

　他の皆さんはそうもいかないですが、と呟くしのぶさん。

「善逸君は右腕と右足が蜘蛛化による縮みと痺れがひどく、一ヶ月以上動くことができません。伊之助君は一応軽症ですが、短時間とはいえ鬼の繭に捕まっていたので、少しだけ様子見が必要なため二週間程行動を制限することにしています。」

「え……。」

「なんだか知りたそうな様子だったので。」

　にこにこと笑いながら、善逸と伊之助の状態を説明するしのぶさんに、なるほど……と小さく呟く。

　……伊之助、繭鬼の繭に捕まってたのか。

　短時間……というのは、繭鬼の繭に捕まった瞬間しのぶさんに助けられた感じか……？

　冷静に分析しながらも、私は炭治郎たちに目を向ける。

　二人はどことなくうとうとしておりすごく眠たそうだ。

「……炭治郎。禰豆子。私はしばらく動けないみたいだから、二人も今のうちにしっかりと休んでくれ。禰豆子は特に、軽傷とはいえ累って鬼の攻撃を喰らって血を流していたんだ。それなりに気怠さはあるはずだろ？　だから、二人も今はゆっくり休んで、元

気になったあと、みんなに認めてもらうために頑張ろう。」

小さく笑いながら、自分はしばらく動けないから、二人も休息をと指示を出せば、二人は小さく頷いたあと、私の上からゆっくりと降りて、箱の方へと足を運び、いつの間にか直されていた箱の蓋を開けてその中へと入っていく。

パタン、と静かに蓋が閉まれば、程なくして寝息が聞こえてきた。

「……それでは、私は仕事があるので、そろそろ失礼しますね。」

「はい、ありがとうございます。」

その様子をどことなくもの言いたげな様子で見つめていたしのぶさん。

しかし、すぐに頭を切り替えるように一度目を閉じたあと、穏やかな笑みを浮かべて、この場から去ることを告げてきた。

彼女に感謝の言葉を述べながら頭を下げると、しのぶさんは踵を返してこの場から去っていった。

その背中を見つめながら、私は少しだけ考える。

煉獄さんの救済方法はある程度目処が立っているため、それを実行するための準備をあとはするだけなのだが、無限城での決戦の時、分断された鬼殺隊メンバーを救済する方法を見つけ出すために。

でも、この場ではやはりすぐには思いつかない。

一番手っ取り早いのは、上弦の弐である童磨や、上弦の壱である黒死牟と軽く戦うこと……だと思うのだが、あの二人と接触できる可能性は極めて低いし、それなりに準備を整えなくては情報を得た上で撃退するのは難しい。

これぱかりは、運に任せるしかないのだろうか……。

ある程度の力を得たのちに、イレギュラー発生による接触が起こればいいのだけど……。

……いや、今は先のことよりあと一歩にまで近づいてきている物語のことを考えるべきか。

多分、煉獄さんの救済が完了したら、イレギュラーは発生しやすくなるだろうし、本来の物語から違う物語へと分岐する。

だからまずは、最初に自ら引き起こす物語の路線変更に集中しよう。

まぁ、そのためには痣を常に出して置けるようにする必要があるのだけど……。

（……原作で善逸は完全に回復するまでに三ヶ月かかっていたはず。物語の通りであるならば、物語が進むのは三ヶ月経ってから……だと予測できる。）

それまでに、私は完全な痣者にならなくてはならない。

この三ヶ月で、クリアできるかは五分五分くらいだとは思う。

（……目標は三ヶ月間、全集中の呼吸・常中を使い続けること……だろうか。一応、今の

段階でも多少はできているから、さらに極めなくてはならない。）

長い道のりな気がしてならないけど、やらなくてはならない……いや、やり遂げてみせる。

タイムリミットがやってくるまで。

蝶屋敷での生活
５９．蝶屋敷での生活。生き残った三人との会話

蝶屋敷での生活が始まった翌日。
私は診療ベッドの上に寝転んだままぼーっとしていた。
特にやることがないし、炭治郎たちはぐっすりとお休み中のようで目覚める気配が一つもない。
二人が起きていたら、二人を甘やかしながら過ごせるし、何よりの癒しになっていたんだが、休むように言ったのは私だし、起こすわけにはいかない。
自分勝手すぎるしね、そんなの。
「飲んだっけ!?　俺昼の薬飲んだ!?　飲んでるトコ見た!?　誰かーーーーーっ!!」
「うるっせぇぞ紋逸!!」
「あんたもうるさいからな伊之助。あと彼の名前は紋逸じゃなくて善逸だ。ったく……大丈夫だよ善逸。ちゃんと飲んでたから。むしろ、私が飲めって言ったから飲んでた。」
「よ、よかったぁ!!　見ててくれてありがとうね優緋ちゃん!!　結婚して!!」
「断る。はぁ……なんで病室がこんなに賑やかなんだ……。」

あー……スマホが欲しい。
ウォークマンでもいいから欲しい……。
音をシャットダウンするのにちょうどいいもん、あれ。
でも、今は大正時代だからそんなもんないんだよなぁ……。
うん、どれだけスマホとかに依存していたのか嫌でも理解できるな。
小さく溜息を吐きたくなる。
が、そこはなんとか堪えて、私は再び天井を見つめる。
「よっ」
「こんにちは。」
「ん？　」
不意に聞こえてきた声と足音に、私は視線をそちらに向ける。
そこにはサラツヤキューティクルな頭が印象的な村田と、本来ならば命を落としていたはずの女隊員、尾崎さんの姿があった。
「あ、村田さん。それと……」
「尾崎よ。」
「尾崎さん……二人とも、ご無事だったんですね。」
しっかりと生存していた二人の様子に、思わず笑みが溢れる。

二人は、私の笑みを見るなり笑顔を返しては、病室に入ってきた。
背後にサイコロステーキ先輩……いや、生存してるから噛ませ犬先輩?を引きずりながら。
「あ……。」
噛ませ犬先輩に目を向ければ、彼はどことなく気まずそうな表情をしては、目を逸らした。
「……あんたも無事だったようで、何よりだよ。」
「あ、ああ……。」
うーん……なんだろうこの匂い……。
羞恥と悲痛と、後悔……?
「カラスから話は聞いたよ。」
「君、十二鬼月を倒したんだろ。こいつのことも助けてさ。」
「……。」
村田から目を向けられた噛ませ犬先輩が目を逸らす。
不甲斐ないという表現が似合いそうな顔だ。
「そう……なるみたいですね。まさか、十二鬼月を相手にしていたとは思いませんでしたが。」

……もちろんこれは嘘である。

でもさ。

話を合わせるためには仕方ないよなこれ。

十二鬼月と知って戦ってました、なんて言ったら変な反応されるに決まってる。

「鬼殺隊に入ってそこまで経ってない剣士が疲労困憊になるだけで、怪我をすることなく倒した……俺、一応鬼殺隊に入って何年か経つけどさ、見たことないよ。」

「まぁ、たまたま見てないだけで、柱になってる人たちは、そんなこともできちゃってるのかもしれないし、過去にそんなこともあったかもしれないから、鬼殺隊内では初めてのことじゃないのかもしれないけど、私たちからしたらすごいとしか言えないわ。」

「ひょっとしたら、陰では次の柱候補とか言われてるかもしれないな。」

「いや、流石にそれは持ち上げすぎでは……？」

なんだか盛り上がりを見せる村田と尾崎さんの二人組。

噛ませ犬先輩は、ずっと無言で口を開こうとしない。

……何のために来たんだこの人？

「……その……な……」

ジーッと噛ませ犬先輩を見つめていたら、こちらの視線に気づいたのか、静かに口を開いた。

「何？」

首を傾げながらどうしたのか問えば、彼は何度か言葉を口にするのを躊躇うように何度か開閉を繰り返した。

黙って紡がれる言葉を待つ。

「……あの時は、混乱してたせいで言い忘れたが……その……助かった……。十二鬼月と思わず……俺……舐めてかかってたからな。お前が助けてくれなかったら、今頃、俺は死んでた。」

反省の色が含まれた声音と、反省している人から感じ取ることができる匂い。

どうやら思い知ったらしい。

金のためだけに行動した結果の危うさを。

「……これからはちゃんと考えて行動を取った方がいいっスよ。見た目だけで強さを判断してちゃ、今回みたいな状況に陥ると思うんで。金も大切かもしれないっスけど、それ以前に私らは鬼による被害を少しでも減らして、戦えない人らを守る立場の人間でしょ。悲劇をこれ以上増やさないためにも、命を懸けてる。金だけのために自分勝手なことしてたらいずれ足を掬われる。だから、これからは多少は気を引き締めた方がいいっスよ。鬼狩りでい続けるためならね。他人のために命なんか懸けれるかって考えなら、まともな就職先見つけてコツコツ仕事をしていく方が安全だし、鬼殺隊を辞める

ことをすすめますね。」
「……ああ。」
若干冷たいかもしれないが、これくらい言った方がいいだろう。
そう考えながら言葉を口にすれば、噛ませ犬先輩は再び黙り込み、先に出て行くと言って、病室から出ていった。
「……言い過ぎましたかね。」
「いや、俺はあれくらい言っていいと思う。」
「私も村田君に同意ね。」
なんか落ち込んでいるような様子の噛ませ犬先輩を見送りながらぽつりと呟くと、村田と尾崎さんは問題ないと言ってきた。
まぁ、そう言ってくれるのであれば、あまり考え込まないことにしよう。
そう思いながら、私は診療ベッドに再び寝転ぶ。
「竈門……だったよな。」
「そうですよ。」
「うっし、じゃあ竈門。なんか退屈そうだからこっちの日常話でも聞いてくれよ。」
「ちょっと愚痴もあるかもしれないけど、退屈凌ぎにはなると思うから、私の話も聞いてくれるかしら、優緋ちゃん。」

すると、村田と尾崎さんが、退屈ならこっちの日常話や世間話につきあってくれと言われた。

「それはいいですね。ええ、構いませんよ。愚痴も世間話もどんと来いです。一週間は行動が取れないので、助かります。」

私は笑顔で二人の提案にノることにした。

確かに二人が口にするのは愚痴がちょっと多めだったけど、それ以外の話もしてくれたし、私としては大満足だった。

60．蝶屋敷での生活。機能回復訓練・序

あれから早くも一週間。

村田と尾崎さんは毎日のように私のお見舞いに来てくれた。

今日はどんなことがあったとか、柱からこう言われた、などの近況報告や愚痴のほか、今もなお健在な鬼殺隊隊員の話など、さまざまな話題を二人はいつも持ってくる。

その話の中で、少しだけ驚いたのは、サイコロステーキ先輩こと噛ませ犬先輩に関してだった。

どうやら彼は、お見舞いに来たあの日からずっと、自主的に鍛錬を行い、かなりの鬼を倒していたらしい。

村田曰く、新人である私に庇われたことや、あの日の私の言葉がかなり効いたのではないかとのことだ。

前までは噛ませ犬先輩に対して不満を抱いていた隊員が複数いたらしいのだが、今はむしろ彼の向上心や、少しずつ力をつけていっては、そこそこの力ある鬼を倒していることが評価されて、彼と一緒に鍛錬している隊員が増えたと笑いながら言っていた。

ああ、見舞いといえば、那田蜘蛛山の入口付近にいたあの隊員も見舞いに来てくれて

いる。

時にはキャラメルを持って来てくれたり、村田と尾崎さんのように、何気ない話題を持って来てくれたりして退屈しない日々だ。

尾崎さんとは同性ということもあり、非番が重なった時に、二人でちょっと町に行ってみないかと誘われる程に仲良くなった。

同性の友達が欲しかったので、かなり嬉しい。

いつか、蜜璃やしのぶ、カナヲやアオイ、すみ、きよ、なほたちとも友達になりたいところだ。

「優緋さん。体調はどうですか?」

そんなことを考えながら、病室の天井を見つめていたら、しのぶさんが体調はどうかと話しかけてきた。

いつもの問診の時間になったらしい。

「しのぶさん。はい。皆さんのおかげでとても良くなりました。まだ僅かな気怠さはありますが、一週間前に比べたらぜんぜん違います。」

一週間、退屈かと思ったけど、思ったより早く時間が経ってよかったな、楽しかったし……なんて思いながらしのぶさんに今日の体調を教えると、にこりと穏やかな笑みを向けられた。

相変わらず綺麗な笑顔だな……匂いは複雑な感情を訴えて来てるけど。

「では、今日から機能回復訓練に入りましょう。未だに残る気怠さは、一週間寝たきりだったこともあると思うので、それの改善も兼ねて。」

彼女から感じ取ることができる匂いから、複雑な感情を抱いていると、素晴らしい笑顔で機能回復訓練を始めることを告げられた。

「……機能回復訓練？」

「はい。」

首を傾げながら問いかければ、彼女は肯定するように頷いたあと、移動することを口にする。

私はそれに従って診療ベッドから降りる。

しのぶさんはそれを確認するなり、ゆっくりと病室を退室していった。

……しばらく彼女の後ろを歩いていると、訓練場と記された部屋に着く。

しのぶさんがそこに入って行くので、私も続いて部屋に入った。

そこにはアオイとすみ、きよ、なほの三人組と、カナヲの姿がある。

「機能回復訓練はここで行います。初めてですから、最初に軽い説明をしますね。」

「はい。」

訓練場に入るなり、口を開いたしのぶさんに短く返事を返した私は、その場に正座して座り込む。

話を聞くならば、それ相応の姿勢をしなくては……。

「まず、優緋さんには、寝たきりで硬くなった体を、彼女たちにほぐしてもらいます。その次に反射訓練を行います。あちらの机には、薬湯が入った湯呑みが複数置いてあります。それを互いに掛け合うのですが、湯呑みを持ち上げる前に相手から湯呑みを抑えられた場合は湯呑みを動かせません。最後に、全身訓練として訓練場全体を利用した鬼ごっこをします。相手はカナヲとアオイ……そして、時間がある時に私がお相手しますね。」

……ん!?

「え、しのぶさんも相手に……？」

な、なんかおかしな言葉が聞こえて来たような気がしたので、確認するように声をかける。

「はい。反射訓練と全身訓練……時間がある時にはどちらとも私が相手になります。」

「な、なぜに……!?」

間違いではありませんでした……。

いやいやいやいや!!

なんで現柱も訓練の相手になるんだよ!?

「なぜって……それはもちろん、優緋さんの力を伸ばすためですよ。新人でありながら十二鬼月を相手に無傷で倒すことなど、滅多にないことですからね。鬼のご兄弟を連れていることに関しては、賛否両論……いえ、どちらかと言うと否定意見が過半数でしょう。しかし、優緋さんの純粋な実力に関しては、私たち柱もある程度評価しています。なので、お館様の意向もあり、なるべく実力を伸ばす方向となりました。これは、柱合会議にて話し合った結果です。だから、少しだけ覚悟していてくださいね？　新人であろうとも、私は容赦するつもりはありませんから。」

「……ま……マジっすか……？」

「はい。」

笑顔で肯定されてしまった。

え……私、原作以上にきつい目にあうのではこれ……？

いや、ありがたくはあるけど病み上がりでいきなり……？

「さぁ、では始めましょうか。まずは体をほぐしましょうね～。」

「……は、はい……。」

正直言ってすごく泣きたい。

明らかにハードな修行になるじゃん……!!

常中維持や痣の発現にはもってこいかもしれないけど絶対きついじゃん!!
せめて一週間に一度だけにしてくれしのぶさん!!
……って、言えたらどれだけいいことか。
そんなの言えるわけがない……。
言ったら最後、厄介というかめんどくさいというか、最悪な事態になる未来しか見えない!!
はぁ……三ヶ月……私は持つのだろうか……?

61．蝶屋敷での生活。機能回復訓練　その壱

「では、体もしっかりとほぐれたようですし、反射訓練に移りましょう。最初はアオイが相手になります。次にカナヲ、そして、最後に私となります。まぁ、今日は一日目ですからね。訓練はほどほどに、流れを覚えることを最優先にしましょう。ですが、気は抜かないでくださいね？　ほどほどと手加減は違いますから。」

「あはは……はい……わかりました……。」

しのぶさんの笑顔がなんだか怖いです……。

絶対に手加減はしませんからという圧がひしひしと感じ取れます。

でも、柱相手にもある程度張り合えるようになれば、痣の発現と維持も多少はできるようになるんじゃないかとも思うのでやるしかない……。

「それでは、アオイ。こちらへ。」

「はい！」

「優緋さんは、アオイの向かい側に座ってくださいね。」

「……はい。」

しのぶさんの指示に従うように、薬湯が入った湯呑みだらけの机に座る。

対面するようにアオイも座り、よろしくお願いしますと言ってきた。
「ああ……よろしく。」
彼女の言葉に返事を返した私は、ヒノカミ神楽の呼吸を常中する。
「あら？　優緋さん、常中ができるんですね。」
「……これ、常中というんですね。師範がしていたので、必要なのかと真似をしていたのですが。」
「はい。全集中・常中は全集中の呼吸を四六時中やり続けることにより、基礎体力を飛躍的に上げる初歩的な技術です。鬼殺隊の柱の皆さんは当たり前のように使います。もちろん、私も使ってますし、カナヲたちにも教えてます。会得にまでそれなりに時間がかかるのですが……いつ頃から始めましたか？」
しのぶさんの言葉に少しだけ考え込む。
そういや常中の練習始めたのいつだっけ……？
ここ最近いろいろ立て込んでいて数えてなかった。
「そうですね……多分二週間以上は練習したような……すみません。正確な期間は数えてなくて……」
「あら、そうだったんですね。それなら、今の状態も納得できます。ですが、まだ練度は少し低いみたいですね。でも安心してください。ここには常中が使える者が複数人い

ます。私が指令や用事でいない時も、カナヲやアオイたちがみてくれますから、三ヶ月もすれば柱と同じくらいにはできるようになるでしょう。それまで頑張りましょうね。」

「……はい。」

うん……もちろん頑張りますけど、下手したらそれ、私ノックアウトになるのでは……？

かなりの不安を抱きながらも、彼女の頑張ろうという言葉に頷く。

「では、おしゃべりはここまでに。始めますよ。ああ、薬湯はちょっと匂いがありますが、濡れてもすぐにお風呂で洗い流せるので安心してくださいね。遠慮することなく、相手にかけても大丈夫ですから。」

……笑顔で言ってきたんだけど、これ私に向けて言ったの？

それともアオイに対して言ったの？

……いや……もう考えるのやめよう。

「では、始め。」

考え込むのをやめた私は、しのぶさんの声を合図に反射訓練を開始する。

とりあえずまずは様子見をしながら、アオイが持ち上げようとする湯呑みを片っ端から阻止していく。

彼女がいくらスピードを早めようと、それに合わせて阻止しては、自身も湯呑みを持ち上げようとする。
アオイはすぐに阻止しようとしてきた。
けど、私は止められる前に一つの湯呑みを持ち上げ、アオイに中の薬湯をかける。
「!!」
「そこまで。流石ですね。」
「……ありがとうございます。」
びっくりして固まるアオイを見たしのぶさんが穏やかな声で話しかけてくる。
流石だという言葉は褒め言葉だったので、素直に受け取った、
「では、次にカナヲを相手にしましょうか。アオイ、お風呂に入ってきていいですよ。」
「……はい。」
……自信があったのだろう。
アオイが若干落ち込んでしまっている。
「では、カナヲ。優緋さんの前に。」
「はい。」
なんか、ごめんなさい……とちょっとした罪悪感を感じながら、アオイの背中を見送っていると、今度はカナヲが座ってきた。

「……君は……那田蜘蛛山で私たちを追ってきてた……。確か最終選別にもいたよな？」
「うん。」
「一応自己紹介。私は竈門優緋。」
「栗花落カナヲ。」
「カナヲか。反射訓練、よろしく。」
「うん。」
一応自己紹介をしておこう……そう考えて自分の名前を口にすれば、カナヲも自分の名前を口にした。
よろしくと返せば頷き返される。
まぁ、今はこれでいいか……そんなことを思いながらも、常中を続ける。
「それでは始めますよ。反射訓練、始め。」
開始の合図がかかると同時に、カナヲが素早く湯呑みを手にした。
すぐにそれを持ち上げるのを手で抑え込むことで阻止すれば、次の湯呑みに彼女の手がいく。
うん……予想はしていたけどアオイの比にならないくらい早い。
常中をすでに会得してる分、少しだけ難易度が高い。

けど、別に追えない程じゃない。
十分に追いつける。
まぁ、隙を見て仕掛ける私の方も、カナヲに阻止されてしまっているけど。
でも、別に抜けないわけじゃない。
こう言ったら申し訳ないけど、私から見たらまだちょっと遅い。
「!!」
「そこまで。」
湯呑みを抑えようとしてきたカナヲの手の下から湯呑みを抜き取り、中身を彼女にかければ、カナヲが目を丸くして固まった。
それを確認したしのぶさんはすぐにストップの声をかける。
「ふむ……カナヲでも相手になりませんでしたか……。彼女には負けると思っていたのですが、そうでもなかったみたいですね。それに、優緋さんからはまだ余力を感じます。流石、十二鬼月を倒しただけありますね。」
感心感心と呟くしのぶ。
カナヲはキョトンとしたままだ。
「では、最後は私が相手します。カナヲは、お風呂に入ってきてもいいですよ。」
「はい。」

そんな中、しのぶさんが最後は自分が相手だと口にしたあと、カナヲへ風呂に入るように声をかける。

それによりようやく驚きからによる硬直から抜け出したカナヲは小さく頷いたあと、この場から立ち去っていった。

「それじゃあ、始めますよ。反射訓練、始め。」

カナヲが立ち去ったのを確認したしのぶさんが訓練開始の言葉と同時にすぐに湯呑みに手をかけた。

(早っ!?!!)

なんとかそれを阻止するが、彼女の手は止まらない。

次々と湯呑みに手をかけてくるため、追いついて抑え込むのがやっとの状態だ。

(柱だから早いと予想はできていたけど、その予想以上のスピードで湯呑みを持ち上げようとしてくる……!!)

辺りに湯呑みを取る音とそれを抑え込む音が響き渡る。

すみちゃんたちが驚いた様子でこちらを見ている気配がするけど気にしている場合じゃない。

気を抜けば一瞬で抜かれてしまう。

隙が一つも見つからない。

こちらの湯呑みも阻止される。
追いつけているだけで奇跡としか言えない。
阻止、攻撃、阻止、攻撃……繰り返しながら続けてどれくらいの時間が経っただろう。
わからない。
集中しているから時間の経過なんて。
「あ……!?」
そう思っていると、しのぶさんの手が抜けた。
ばしゃりと頭から薬湯がかかる。
「うえ……匂いが……。」
「私の勝ち、ですね。」
しのぶさんが笑顔で勝利宣言をする中、私は鼻につく薬湯の匂いに表情を歪める。
かなり臭いです……。
「はぁ……流石は柱の方です……。」
「ありがとうございます。ですが、優緋さんもすごいですよ。結構私、焦っちゃいました。いくら常中が使えているとは言え、やはり練度は低いですからね。早くて数分……長くて数十分と思っていたのですが、まさか二時間も粘られてしまうとは……。」
「え、二時間?」

「はい。」

……柱相手にそんなに粘ったのか私は。

自分でびっくりしたわ……。

「では、次は全身訓練をしましょう。私たち六人全員を相手にしてみてください。」

「ええ!?」

「大丈夫です。優緋さんならきっと追いつけますよ。もちろん、私たちも全力で逃げますけどね。」

休憩を挟むことなく鬼ごっこに移行するつもりらしいしのぶさんに対してマジかと引きつった笑みを浮かべる。

これ……全身筋肉痛になるかもしれないなぁ……。

６２．蝶屋敷での生活。機能回復訓練　その弐

「では、全身訓練を始めるとしましょうか。」
風呂に入る時間だけは作ってくれたしのぶさんが笑顔で言葉を紡ぐ、
私の前にいるのは、三人娘とアオイ、そしてカナヲとしのぶさんの六人。
「全身訓練は私たち全員を相手にする鬼ごっこです。そうですね……では、二時間ほど続けてみましょうか。先程の反射訓練の時は、これくらい粘れていましたし。」
「はぁ……わかりました。」
どうやらまずは二時間から始めるようだ。
……二時間……うーん……全員捕まえることできるのかこれ？
いや、無理だな。
カナヲまではいけるかもしれないけど、しのぶさんは捕まえることができるかわからない。
「まぁ、やれるだけやってみっか。」
とりあえずまずは常中の持続時間を伸ばすことに集中、のちに痣の発現を目指そう。
累との戦闘の時は、一時的に発現できたけど、あれは沸き上がってきた怒りの影響だ。

縁壱さんは怒りによる影響ではなく、元からの才と技術によって痣を発現させ、そして持ち前の握力で刀を赫く染めていた。

……そう言えば、痣って確か、脈拍二百以上と三十九度以上の体温で出る的な話あったな。

意図的に脈拍二百以上ってできるのか……？

一応全集中の呼吸は血の巡りと心臓の鼓動の速さを意図的に速める技術で、その影響下で体温を急激に上げる方法だけど。

（……この世界の理論的にはできるか。実際やり遂げたのが先代の鬼殺隊にいたわけだし。彼程の技術者はいなかったけど、戦国の世の鬼狩りは全員、痣の発現と維持を可能にしていた。）

ふむ……やっぱり鍛錬を重ねることしかできないなこりゃ。

物語が進むまでの残り、二ヶ月と三週間。

痣者に至るまで頑張ろう。

「いつでもいいですよ、しのぶさん。」

頭を切り替えて、しのぶさんに声をかければ、彼女は笑顔を見せたあと、一度目を閉じる。

「では、全身訓練を始めます。私たち全員を頑張って捕まえてみてください。……―始

め！」

しのぶさんが口にした合図と同時に、逃げる役のメンバーが、一気に動き始める。

私は、全集中・常中を行いながら、周りの様子を見つめたのち、すみ、きよ、なほ、アオイの四人をすぐに捕まえる。

一瞬で捕まったことにアオイたちは目を見開いて驚いていた。

匂いからも驚きという感情が感じ取れる。

そのことに少しだけ笑ったあと、今度はカナヲを追う。

彼女は鬼殺隊に入っている剣士なだけあり、すぐには捕まってくれない。

けど、しのぶさんに比べたら十分余力を残して捕まえることはできるため、少しだけ時間がかかったが、彼女のことは捕まえることができた。

多分、三人娘とアオイとカナヲを捕まえるのにかかった時間は三十分から三十五分。

残りの一時間二十五分から一時間三十分で、しのぶさんにどれだけ追いつけるか……。

まぁ、捕まえることは難しいだろう。

だから今はとりあえず、自身の限界だけでも確かめる!!

床を思い切り蹴り上げしのぶさんとの距離を一気に詰め、その腕を掴もうと手を伸ばす。

しかし、彼女が簡単に捕まってくれるわけない。
ひらりとその場で宙返り。
虫網から逃れるアゲハ蝶の如く躱されてしまう。
すぐに向きを切り替えてしのぶさんを再び追う。
表情は相変わらず余裕そうだ。
（まぁ、そりゃそうだよね。常中を極めてる人にとっては、常中を使いこなせる程度の人間なんて相手じゃない。）
やれやれ、と軽く溜息を吐きたくなりながらも、彼女を追い続ける。
捕まえようと手を伸ばすたびに蝶々のように躱されてしまうけれど、すぐに体勢を立て直しながら。
「そこまでです！」
「!!」
「あらあら。もう終わっちゃいましたか。少しだけ楽しくなっていたのですが。」
そんな中辺りに響いたアオイの声に、私は足を止める。
しのぶさんはにこにこと笑いながら、穏やかな声音で楽しかったのにと呟く。
「あー……やっぱり柱には敵わないか……。」
「そんなことはありませんよ？　結構捕まりかけちゃいましたし。」

「いや、しのぶさん。あなた何言ってるんですか。明らかにあれ遊んでましたよね？わざと捕まりかけるふりをして蝶々のようにひらりと躱していたじゃないですか。」
「バレちゃいましたか。」
「むしろあれでバレないと思っていたことにびっくりしましたよ。」
　くすくすと小さく笑ってるしのぶさんに呆れてしまい、我慢していた溜息を思わず漏らす。
「こっちは全力だったんですけどね……。余力を残した状態であなたは逃げてました。いくら常中が使えようが、やっぱり柱にはまだ遠く及びませんね、私。当たり前ではあるけど。」
　お手上げだと両手を上げて呟けば、彼女は私の頭を優しく撫でてくる。
「そうですね。確かに優緋さんはまだまだです。ですが、初日でここまでできる人はなかなかいません。確かに、余力を残して相手をしてはいましたが、想像以上の力を引き摺り出されてしまったことにちょっと驚いてるんですよ、私。」
「……そうなんですか？　そうは見えなかったけど。」
　なんか、頭を撫でられたのご無沙汰な気がする……と考えながらも、しのぶさんの言葉に首を傾げれば、彼女は小さく頷く。
「この調子なら、早い段階で、こちらが求めている実力にまで追いつけるようになると思

います。とりあえず、日中は動き回ることを中心にして、夜は瞑想と、あと瓢箪を吹いてみましょうか。」

「……瓢箪？」

瓢箪ってつまり……あれだよな……？

しのぶさんがカナヲにさせてる訓練の一つで、吹いて破裂させるってやつ……。

「はい。」

嫌な予感を抱きながら言葉を紡げば、どこからかしのぶさんが大きな瓢箪を持ってき……

「いや、でか!!?」

多分、カナヲが吹いていたサイズの瓢箪。

思った以上にでかいんだけど!?

「現在、カナヲはこの大きさの瓢箪を吹いて破裂させることができます。」

「吹いて破裂させる!?」

「優緋さんはすでに常中を身につけていますから、最初からこの大きさで大丈夫でしょう。慣れてきたらもうちょっと瓢箪を大きくしてみましょうね。」

「いやいやいや無理でしょ!?」

「私はいけますから、優緋さんもできますよ。」

漫画で知ってはいたよ？
知ってはいたけど、実際に聞かされたら驚く。
思った以上に瓢箪でかいし、それに硬いし……。
「……。」
「頑張りましょうね？」
「……はい……。」
本当……鬼滅の刃の世界って……。
とんでもない世界だなぁ……。

63．蝶屋敷での生活。機能回復訓練　伊之助合流

しのぶさんに言われた通り、日中は運動を中心に、夜は瞑想などの運動とは違う訓練方法を行うことで、自分の全集中の呼吸を鍛え続けて数日。

カナヲと一緒に瓢箪を吹いて破裂させる訓練を行っていたら、訓練場が賑やかになる。

「ん？」

バカンッという大きな音と共に、現在のカナヲの限界であるサイズの瓢箪よりちょっとデカく硬い瓢箪を破裂させた私は、訓練場の中に目を向ける。

そこには伊之助がいた。

「よ、伊之助。」

「おう、優緋じゃねぇか!!　お前こんなとこにいやがったのか!!」

「ああ。体調もだいぶ良くなったこともあり、しのぶさんから別の部屋を貸してもらって過ごしながら、ここで日々訓練してた。」

「訓練？」

「そ。体を元の調子に戻すのと、力をある程度伸ばすための訓練。伊之助は今日から機

能回復訓練か。」
「おう!!　今に見てろよ!!　絶対ェお前より強くなってやるからな!!」
「はは。まぁ、頑張れよ。ちょっと厳しいかもだけどね。」
「はぁん!?　俺にはできねぇって言いたいのかコラァ!!?」
「なんでそうなる。」
　訓練を開始したあの日から見ていなかった伊之助と会話をしていれば、訓練場にしのぶさんが入ってきた。
「あ、こんにちは、しのぶさん。」
「はい、こんにちは、優緋さん。調子はどうですか?」
「かなりいいですよ。先程、あれも終わらせました。」
「そうでしたか。どうでした?」
「そうですね……時間にして約五分位で終わりました。」
「あらあら。では、また難易度を上げないといけませんかね?」
「あ……はは……マジっすか……。」
　この会話は瓢箪についてである。
　カナヲが吹いていた瓢箪より大きな瓢箪……それを五分で破裂させたことを今伝えた。

するとしのぶさんは笑顔で難易度を上げると返してきた。

この人……でかい瓢箪を五分で破裂させるようになるたびにさらにでかいの持ってくるんだよな。

普通秒で割れるようになってから変えるのでは?と一回聞いたことがあるけど、笑顔で五分で割れるならば次の瓢箪をギリ割れますと返された。

「なんの話してんだ?」

苦笑いをしながらしのぶさんと会話していると、伊之助が不思議そうに声をかけてくる。

顔は猪頭のせいで見えないけど、匂いから私としのぶさんの会話内容がわからないことが判断できる。

「訓練関係のちょっとした話だよ。まぁ、伊之助もいずれやることになるだろうし、それまでのお楽しみだな。」

だから私は、訓練に関しての話であることや、いずれ伊之助もやることになるということを告げたのち、一旦訓練場の縁側へと移動する。

バラバラになった瓢箪の破片を片付けるために。

しのぶさんは、伊之助に機能回復訓練についての説明を行っているのか、初日に聞いた内容と全く同じ言葉が聞こえてくる。

まぁ、訓練相手の中にしのぶさんの名前が含まれていないことを除けば、だが。
（やっぱ、しのぶさんが相手に含まれるのは、私だけなんだな……）
まぁ、好都合ではあるけど……。
「いっっっでぇぇぇぇぇぇ!!」
「あ……始まったな……。」
なんで考えていたら、伊之助の悲鳴が辺りにこだました。
瓢箪の破片を全部集めてゴミ袋に入れたあと、訓練場に目を向けてみると、そこでは伊之助が三人娘に力づくで体をほぐされている姿が見えた。
猪頭越しでも顔が青くなっている様子が窺える。
……頑張れとしか言えないな。
「さぁ、優緋さん。今日の訓練を始めますよ。」
「わかりました。……今回もしのぶさん単体を相手に?」
「はい。今のあなたにはアオイもカナヲもすぐに負けてしまうでしょう。カナヲの成長も早くはありますが、優緋さんの成長はそれ以上であると、この数日でわかりましたから。今のカナヲたちでは逆に優緋さんに遊ばれて終わってしまう。それは良くないでしょう?」
「はぁ……まぁ、否定はできませんが……」

しのぶさんの質問に素直な返事を返せば、彼女はにこりと笑う。
「では、まずは全身訓練から始めましょう。制限時間は二時間です。」
「はい。」
返事をすると、しのぶさんが一時的に目を閉じる。
この数日でわかったことだけど、これは彼女が始める前に必ず行うと精神統一だ。
それにならうように、私も一時的に目を閉じて精神統一をする。
しばらくの間、伊之助の悲鳴だけがこだまする。
だが、私としのぶさんは同時に目を開けた瞬間、その場には悲鳴ではなく、私としのぶさんの足音がこだまするようになる。
彼女は逃げ回り、私は追いかけ回す。
もう何回も繰り返してきたこの訓練に、だいぶ慣れてきてしまった。
まぁ、慣れたからと言って彼女を捕まえられるようになるのとはイコールでもなんでもないのだけど。
相変わらずしのぶさんはひらひらと舞う蝶のように身軽な動きで躱してしまう。
数日間やってもなかなかこの人の羽織にすら指一本触れることができない。
ていうか、この人、少しずつ少しずつ本気を出してくるようになってきたんだけど。
多分、初日くらいの手加減であれば私も手を届かせることができたと思う。

余裕を少しずつ削り、本気を引き摺り出すことができているということなんだろうか。

そんなことを考えながらも、私は常中を続けてしのぶさんを追いかけ回す。

「す、すっげぇ!!　どうなってんだ優緋の奴!!　なんであんなに早く動け……いってぇえええええ!!」

「動いちゃ駄目です！」

「まだまだほぐせてないから駄目です！」

「もうちょっと大人しくしてないと駄目です！」

……なんか、伊之助が興奮気味に声を上げていたけど気にしない。

こっちに集中しないとな。

「おっとっと。」

「……チッ」

「女の子が舌打ちなんてしたら駄目ですよ？」

「すみませんね！　つい勢いで!!」

そう思って手を伸ばしたが、やはりひらりと躱された。

舌打ちが出るのも仕方ない。

この人は毎回ギリギリのところで躱してくるから。

うん、まだ余裕綽綽なんだな!!
遊ぶ暇あるんだから!!
彼女に遊ばれていることに少しだけイラっとしながらも、追い続ける。
視界の端に、体をしっかりとほぐされたらしい伊之助が今にも猪突猛進に突っ込んできそうな雰囲気を醸し出していたが、無視だ無視!!
「そこまでです!!」
「あ!?　くっそー……また時間切れかぁ!!」
「あらあら。今日も残念でしたね。」
集中してしのぶさんを追いかけ続けていたら、当たりにアオイの声が辺りに響き渡る。
それが終了の合図であることをすぐに理解できた私は、思わず肩を落としてしまった。
しのぶさんはくすくすと笑いながら、追いつけなかった私に残念でしたと声をかけてくる。
……余裕しか見せていない彼女をジト目で睨んでしまったのは仕方ないことだと思う。
だって明らかに私は遊ばれていたんだからな。

全力を出して追っかけても。
「はぁ……柱との差が大きすぎる……」
「そうですねぇ。でも、前よりかは喰らいつけるようになったのではないでしょうか？」
「……まぁ、はい。それは否定しませんが。」
でも、確かに前に比べたら身体能力、及び体力の向上はできている。
しのぶさんが徐々に本気を出してきているのが何よりの証拠だ。
「もう少し頑張ってみましょうね。訓練が終わった頃には、かなりの剣士になってる可能性大ですから。」
「……わかりました。」
しのぶさんの言葉に頷けば、彼女はにこりと笑ったあと、視線を私から外す。
彼女の目線の先には、反射訓練を始めている伊之助の姿がある。
その近くには薬湯入りの湯呑みが並べられた別の机があった。
「アオイたちがもう一つ反射訓練の場を用意してくれたみたいですね。では、優緋さんも反射訓練に入りましょう。」
「はい。」
まぁ、どうせまた私はぶっかけられる側なんだろうな……なんて考えながらも、私はしのぶさんと一緒に反射訓練の机に移動する。

さて、今日はどれくらい粘れるのだろうか……。

６４．蝶屋敷での生活。しのぶが抱えていたもの

再び時は流れ、蝶屋敷に担ぎ込まれた日から一ヶ月。
訓練を重ねたことにより、しのぶさんにかなり本気を出させることが可能になった頃のこと。
「善逸君も合流したみたいですね。」
「そうみたいですね。」
「優緋さんもかなり私に追いつけるようになってきましたし、訓練した甲斐がありました。このまま私の継子になりませんか？」
「継子……？　ああ……確か、柱が直接育てる隊士のことですよね。相当の才能と優秀さがかなり必要だから少なそうですけど。」
「はい。私、優緋さんなら十分継子になれると思ってるんですよ。だから考えてみませんか？」
「あ、はは……まぁ、検討だけはさせてもらいます。（なるとは言ってないけれど。）」
いつものようにしのぶさんと全集中・常中を使用した本気の鬼ごっこをしていたら、訓練場に善逸が入ってきた。

なんだかちょっぴりガタガタ震えているような気がする。
まぁ、毎回訓練のあと、伊之助がげっそりした様子で病室に帰っていくの見ていたし、仕方ないと言えば仕方ないかもしれない。
「少しだけ、善逸のとこに行っても？」
「構いませんよ。では、少しだけ休憩をしましょう。休憩したらまた全身訓練の再開、及び、反射訓練への移行を行います。」
「ありがとうございます。」
それはそれとして、病室から退院したのち、しのぶさんから与えられた部屋で過ごすことが多くなっていたこともあり、久々に善逸の顔を見たので、少しだけ彼と話そうと思い、しのぶさんに声をかければ、快く許可してくれた。
感謝の言葉を述べた私は、走るのをやめて善逸に歩み寄る。
「よ、善逸。」
「ああ！　優緋ちゃぁあぁあん!!　久しぶりだねェーーーーー!!」
声をかけながら彼に近寄れば、ものっそい笑顔で名前を呼ばれ、ブンブンと手を振られる。
「ああ。久しぶりだな。どう？　そっちの治療は。順調か？」
「うん、もう絶好調!!　優緋ちゃんに会えたから元気もいっぱいだよ!!」

「そいつは何より。ちゃんと薬は忘れずに飲んでるか？」
「もっちろんだよ!!　優緋ちゃんが教えてくれた、薬を飲んだ時にすぐ飲んだことを何かに記録する方法をやるようになってから忘れずに飲んでるよ!!　だから優緋ちゃん、俺が元気になったら山で言ってた二人で遊びに行く約束を実行しようねぇ!!」
「はいはい。まぁ、一緒に出かける前に、しっかりと体調を良くしてもらわなきゃ困るけどな。」
「わかってるよ！　優緋ちゃんとお出かけするのに体調不良なんて俺も嫌だし、しっかりと元気になるからねぇ!!」
……うん、相変わらずの饒舌っぷりというか、女に対しての賑やかっぷりだな。
まぁ、元気じゃないよりかはマシか。
「優緋さん。そろそろ休憩を終わりますよ。ふむ……三人に増えてしまってるとちょっと訓練場が狭くなっちゃいますね……。もう一つ広い部屋がありますので、私たちはそちらに移動しましょう。その方が優緋さんもしっかりと訓練に打ち込めるでしょうからね。」
「わかりました。」
なんて考えていたら、しのぶさんから部屋の移動を提案される。
すぐに頷き返せば、彼女は一度笑顔を見せたあと、今いる訓練場から立ち去る。

「優緋ちゃぁん!!　たまには病室に会いに来てねぇ!!」

それに続いて私も訓練場を出ようとしたら、善逸から大声でそう言われた。

やかましいな……と内心思いながらも、小さな営業スマイルを作って手を振りかえせば、彼は顔を真っ赤にして、こう言いたくはないけど、少々汚い高音の悲鳴をあげてはごろごろと床を転がり始めた。

……匂いで判断する必要はないな、うん。

あれは紛れもなく喜んでいる。

「優緋さん。行きますよ?」

「はい。」

軽くそれに引いていると、ひょこっと顔を出したしのぶさんに声をかけられる。

返事を返した私は、すぐにその場から立ち去り、しのぶさんの元まで歩み寄った。

「今から行く場所は、普段はあまり使わない第二訓練場です。あちらよりかは多少狭くはなりますが、十分範囲があるので問題なく訓練を行うことができますからね。」

「……蝶屋敷って、とても広いんですね。」

「そうですね。こちらは鬼殺隊のいわば診療所というか、病院のようなものなので、それなりの広さを有しています。相手取る鬼によっては、多くの隊士の皆さんが怪我をしてやってきますから、結構必要なんですよ。逆に怪我人が少なかったら、少々広すぎるか

もしれませんが、そこはそれ。それだけ被害が小さかったということなので、特に気になりません。」

穏やかな会話が続く中、私の嗅覚は、どことなく怒りの匂いを感じ取っていた。

匂いの発生元は、目の前のしのぶさんだ。

「……あの、いきなり変なことを聞きますが、しのぶさん、なんだか怒ってます？」

「え？」

「その……笑ってはいるのにどことなく怒ってるような匂いがいつもしていて、どうしてかなって。すみません、やっぱり変なことを言ってますよね。」

しん……と辺りに静寂が降りる。

うーん……聞くタイミング、間違ったかな？

やっぱり原作通りのタイミングで……いや、でもなぁ……原作を知ってるとは言え、やっぱり気になるもんは気になるし……。

「……そう……そうですね。私は、いつも怒っているのかもしれない。」

ちょっと気まずいなと思いながら考え込んでいると、しのぶさんがポツリと肯定の言葉を紡ぐ。

そのことに気づいた私は、すぐに無言で彼女の話を聞いた。

「過去に、私は鬼に最愛の姉を殺されてしまったんです。あの日からずっと、鬼に大切な

人を奪われた人々の涙を見る度に、絶望の叫びを聞く度に、私の中には怒りが蓄積され続け、膨らんでいく。体の一番深いところに、どうしようもない嫌悪感がある。他の柱たちもきっと似たようなものです。」

「……そうなんですね。それなら、炭治郎たちに対しての反応も当然のものだ。」

「はい。まぁ、ですが、彼らの前で、炭治郎さんたちが人を喰わないことを証明していますし、あの場で炭治郎さんたちを見た柱たちもお二人の気配を覚えた上、お館様の意向もあるので、誰も手出しをすることはないと思いますが。」

再び無言が訪れ、辺りには鳥の声が響き渡る。

「……私の姉は、とても優しい人だった。鬼に同情していた。自分が死ぬ間際ですら、鬼を哀れんでいました。私はそんなふうに思えなかった。人を殺しておいて可哀想？そんな馬鹿な話はないです。でも、鬼とも仲良くできたらいいのに……という、姉の優しい想い……それが姉の望みであり、大切な想いだったなら、私が継がなければ……哀れな鬼を斬らなくても済む方法があるなら考え続けなければ。姉が好きだと言ってくれた笑顔を絶やすことなく……私は、そう考えてます。」

でも……と静かに言葉が繋げられる。

「少し……疲れました。鬼は嘘ばかりを言う。自分の保身のため。理性も無くし、剥き出しの本能のまま人を殺す。」

怒りの匂いと悲しみの匂いが混ざっている。
いろいろと抱えすぎた結果だろう。
「……優緋さん。あなたは、鬼と人は仲良くなれると思いますか？」
冷静に分析していたら、静かな声音でしのぶさんに、鬼と人は仲良くなれると思うかどうかを聞いてきた。
「……そうですね。みんながみんな、仲良くできるか疑問は残るところではありますが……」
脳裏に一瞬、響凱のことを思い浮かべる。
私は、彼と少しだけ会話をした。
最初は確かに襲われたけど、殺されそうになったけど、彼と穏やかに話すことはできた。
人を殺していなければ、多分、私は彼と仲良くなろうとしていたと思う。
「中には、仲良くなれる鬼もいると思います。私の弟である炭治郎や妹である禰豆子のように。」
〝あの屋敷にいた、名無しでありながらも素晴らしい作家であり、同時に素晴らしい奏者であった響凱のように。〟
内心でそう思いながら、私は小さく笑みを浮かべる。

「今はまだ、無理に全員と仲良くなる必要はないと思います。そうですね……まずは近くにいるあの子たちから仲良くしてみましょうよ。ひょっとしたら、いずれあの子たち以外の鬼と仲良くなる手立ても見つかるかもしれませんし。」

「……！」

私の言葉にしのぶさんが驚いたような表情をする。

しかし、すぐに小さく笑ったあと、頷いた。

「まぁ、もし辛かったらいつでも言ってください。その時は私が、しのぶさんの代わりにその想いを背負っていきます。いつでも重荷を押しつけてきて構いませんから、心労だけには気をつけてください。心労って、思った以上に心体全てに負荷を与えてきますからね。それに潰される前に、抱えたものを誰かに持ってもらうことも大事ですよ。」

そんな彼女に、私は辛くなったらいつでもこちらに預けてくれて構わないことを伝えれば、しのぶさんはくすくすと笑い始める。

「あ、やっと笑いましたね。心の底から。」

その瞬間、私の嗅覚が感じ取ったのは、しのぶさんが心の底から笑っていることを知らせる匂いだった。

そのことに安堵しながら笑い返せば、しのぶさんははい、と返事を返す。

「久しぶりに、心の底から笑った気がします。ありがとうございます、優緋さん。もし、

私が抱えることに疲れたら、全てあなたに託しますね。」
「なんなら、今からでも構いませんよ？」
「では、半分抱えていてください。今はもう少しだけ、私も姉の想いを抱えてみたいと思っているので。」
　しのぶさんと笑い合いながら言葉を交わして歩いていると、彼女が言っていた訓練場にたどり着いた。
「ふぅ……話しただけで、少しすっきりしました。さぁ、始めましょうか、優緋さんの訓練を。」
「はい。よろしくお願いします。」
　先程より明らかに晴れやかな匂いをまとうしのぶさんに、頭を下げて告げれば、彼女からも明るい返事が聞こえてきた。
　しのぶさんと少し仲良くなることはできたかね？
　そんなことを考えながら、私はしのぶさんの稽古にのぞ……
「お前謝れよ!!　毎日毎日天国いたのに地獄にいたような顔で帰ってきやがってぇえええ!!」
「ハァ!?　いきなり何逆ギレしてんだテメェ!!」
「女の子と毎日キャッキャッキャッキャッしてたんだろ!!?　何をやつれた顔してみせた

んだよ!!　土下座して謝れよ!!　切腹しろ!!」
「んだとテメェ!!　意味わかんねぇこと言ってんじゃねぇ!!」
「お前の方が意味分かんねぇよ!!　女の子に触れるんだぞ!?　体揉んでもらえて!!　湯呑みで遊んでる時は手を!!　鬼ごっこの時は体触れるだろうがアア!!　女の子一人につきおっぱい二つ!!　お尻二つ!!　ふとももも二つついてんだよ!!　すれ違えばいい匂いするし、見てるだけでも楽しいじゃろがい!!　幸せ!!　うわあああ幸せ!!」
……うーん……これは……。
「……しのぶさん……。」
「……善逸君にはちょっときついお仕置きが必要ですかね？」
……修行に臨みたいところでそのシーン挟まるとかどういうことよ。
めっちゃ聞こえてんだけど……？
うっへぇ……と表情を歪めながら、しのぶさんに声をかければ、彼女は笑顔でごきごきと指を鳴らす。
うん、私も擁護しないので、どうぞ少しだけセクハラ君にはお灸を据えてやってください。

６５．蝶屋敷での生活。二人は訓練から逃走したらしい。

しのぶさんの心のうちを聞いたあの日から再び時が経った。
私の体調は良好。
前に比べたら明らかに身体能力も上がっており、体力もかなりついてきた。
最近は結構いいところまで行ってるような気がする。
だって、本気のしのぶさんに追いつけるようになってきたし。
まぁ、だからといってまだ捕まえることはできていないけど、だいぶ並んできてるんじゃないかなと思う。
彼女の羽織に手を掠めることくらいはできるようになったしね。
「優緋さん優緋さん。やっぱり私の継子になりませんか？　あなたの実力、もっと伸ばしてみたいのですが……。」
「いや……あはは……け、検討はしてみますね。」
その影響もあってか、やたらしのぶさんが私を継子にしたがるようになった。
いつも検討してみるとは口にしてるけど、その度に拗ねられてしまうのでどうしたも

のか……。

「しのぶ様。」

継子になれなれオーラを放ってくるしのぶさん……どうしようかと考えていたら、きよの声が聞こえてきた。

「あら？　どうしましたか、きよ？」

善逸君たちの訓練をしていたはずでは……と首を傾げながらしのぶさんが問いかける。

問われたきよはどことなく困惑した様子で言い淀んでいる。

その様子から、私はあることを察した。

多分だけど、これ、善逸と伊之助の二人が訓練から逃走したところだ。

「その……善逸さんと伊之助さんが……訓練から逃げ出してしまったみたいで……今日、全く顔を見せていないんです。」

「……。」

（わー……めちゃくちゃ怒ってるー……。）

きよの報告を聞いた瞬間、しのぶさんの周りの体感温度が若干低くなったような気がした。

彼女から感じ取れるのは純粋な怒り。

訓練をサボるとは何事だ?という感情だけである。
「優緋さん。」
「はい。」
「お二人が行きそうな場所に心当たりはありますか?」
「……。」
心当たりありまくるどころか、どこにいるかという答えを知っているけど、これは言うべきなのだろうか……?
なんか言ったら最後、二人がしのぶさんにボコられてしまいそうで怖いんだが……。
「……ちょっとわかりませんね。それなりに付き合いはありますが、詳しいわけではないので。すみません。」
とりあえず、当たり障りのない返答をしのぶさんに返す。
まぁ、知識としては知っているけど、実際の関係性からしたら、当然の答えだと思うし。
「そうですか……。仕方ないですね。訓練にやる気がないのであれば構うだけ無駄でしょうし、優緋さんの訓練に集中しましょう。きよ。すみ、なほ、カナヲ、アオイの四人を呼んできてください。最近は優緋さんを育て上げることも考えて、ちょっとした訓練の時間を設けさせてもらっているんです、私。だから一緒に訓練をしましょう。」

「はい、わかりました！」
「優緋さんも構いませんね？」
「はい。大丈夫ですよ。」
「ありがとうございます。では、優緋さんの訓練は私が。カナヲたちの訓練は私たち二人が行うということで。」
「え……私訓練する側なんです？　される側ではなくて？」
「する側でありされる側です。どちらもこなしてもらいますよ？」
「あ……はは……そ、そうですか……。」
……まさかの事態になった。
しのぶさんから訓練をつけられながら、私も誰かに訓練をつけることになるなんて……。
いったい誰が予測できるというのか……。
「呼んできました！」
しのぶさんの爆弾発言に引きつった笑みを浮かべながら、すでに発生しつつある軽微のイレギュラーに遠い目になっていると、きよがカナヲたちを呼んできた。
「ありがとうございます。それでは皆さん、私たちと一緒に訓練を始めましょうね。最初に行うのは全身訓練です。優緋さん。これからあなたには私のことを追いかけなが

ら、カナヲたちから逃げるという二種類のことをこなしてもらいますよ。」
「え!?　私だけ難易度おかしくないですか!?」
「そうですね。私は逃げるだけ……カナヲたちは追うだけですが、優緋さんは追うと逃げるの両方ですから。でも大丈夫ですよ。私にあれだけ喰いつけるのですから、両方をこなしても問題はないと思います。まぁ、それ相応の負担にはなると思いますが、倒れても安心してください。その時はちゃんと看病しますから。」
「ぶっ倒す気満々じゃないですか!!」
「柱はもっと厳しい訓練をこなしてますから、まだまだ難易度は低いと思います。頑張りましょうね?」
「鬼ーーーーーー!!」
「では、優緋さんは鬼狩りなので、その鬼を頑張って倒しましょう!」
全員が集まったことを確認するなりとんでも発言を大量に投下してくるしのぶさんに泣きたくなった。
難易度ハードやエクストラじゃないこれ。
難易度ナイトメアかルナティックだ……!!
うう……善逸……伊之助……お前ら絶対に恨むからなぁ!!

66．蝶屋敷での生活。新たな一歩

善逸と伊之助が逃走して訓練をサボる中、一人難易度ナイトメアレベルの訓練を行うこと十五日。

今日も複数人相手に取りながらしのぶさんを追わなきゃならないのかぁ……なんて考えながら、洗顔のために洗面所へと移動した時だった。

「……ん？」

洗顔した顔を手拭いで拭き、いつものように縁壱さんヘアーをしようと鏡を見たら違和感を感じた。

なんか……うん……なんか違うような……？

ジーッと鏡を見つめながら、違うところはなんだ？と首を傾げる。

自分の顔の隅から隅まで視線を巡らして。

そして気づいた。

自分の額付近の変化に。

「あ……!?」

そこにあったのは痣だった。

縁壱さんが発現していたものと全く同じの。
「……!!　せ……セーフ……!!」
思わず大きな声を出してしまいそうになったがなんとか抑える。
この場で叫んだりしたら、しのぶさんがすぐに駆けつけてきては、何があったのか確実に聞かれてしまうために。
「……とうとう行ったかぁ……。」
鏡に映る自分と睨めっこをしながら呟くように言葉を紡ぐ。
安堵するように息を吐きながら、自分の額にそっと触れた。
「なんとか第一段階は突破したか……。」
この日をどれだけ待ち侘びたことか。
これで、煉獄さんを助けるための一歩がようやく踏み出せた。
でも、だからと言って油断することだけはできない。
いくら痣を発現させることができたからと言って、猗窩座を退けることができるとは限らないのだから。
「次は、痣を発現したままどれだけ動き回れるか……だな。」
それと、ほんの短時間だけでもいいから、〝透き通る世界〟に足を踏み入ることを目指す必要がある。

なんせ猗窩座の攻撃の速さは凄まじいから。
漫画の方にも記されていたけど、あの義勇ですら完全に攻撃を防ぎ切ることができなかった。
煉獄さんも、あの速さと威力により敗戦を強いられ、そのままあそこで命を落とした。
（物語から分析すると、猗窩座の撃退に必要なのは〝透き通る世界〟に入ること。付け焼き刃程度の練度での滅殺は原作のような辛勝になるだろう。でも、決められた時間内を粘り、タイムリミットまで持ち堪えるくらいならば、快勝も十分に可能だと思う。）
ソシャゲでいう耐久戦ってやつだな。
あれも、防御力や攻撃力をある程度高くしていれば楽々クリアできる。
まぁ、ゲーム感覚でやるには、あまりにも命懸けすぎるし、失敗したら私がお陀仏だけど。
「……ちょっとだけやることが増えたな。でも、この残りの日付である程度は準備できる……と思う。開花できればいいんだけど……」
うーん……と考え込むように鏡の自分と睨めっこする。
……炭治郎と禰豆子の顔が整ってることもあり、血を分けた姉である私も随分と容姿いいな。
まぁ、柱面子や無惨、黒死牟や童磨や猗窩座たち程ではないけど。

ちょっとだけくだらないことを考えながら、洗面所から立ち去る。
さて、朝食を食べたらまた修行ですな……。
……そろそろ刀握りたいけど、まだかなぁ…？
「おはようございます、優緋さ……あら？」
「おはようございます。どうしました、しのぶさん？」
廊下を歩いていると、しのぶさんと鉢合わせした。
いつものように挨拶をしてきたけど、今回は不思議そうに首を傾げては、じっとこちらを見つめてきている。
……美人さんに見つめられると、流石に同性相手でもちょっとドキッとするな。
「まぁ……どうしたんですか、その痣……？」
なんて考えていると、しのぶさんがどことなく心配そうな表情をしながら、どうしたのかと聞いてきた。
そういや、過去の鬼殺隊に存在していた痣者と呼ばれる剣士たちのこと、現在の剣士たちは噂やお伽話程度に聞き齧った……または、知らないのが基本なんだっけ？
じゃあこの反応も当然のことか？
「それが、私にもわからないんですよね。洗顔していた時に気付いたもので……痛くはないんですけど。」

「そうなんですか？　うーん……なんなんでしょうね、これ。ただ打っただけじゃ、こんな痣はできないはずですし……。」

だったらヒラ隊員が戦国の時代の鬼狩りが出していたものらしいですよ、なんて言うわけにはいかないので、知らないふりをすることにした。

痣に関しては、お館様から伝えられる方がしっくりくるはずだし。

「まぁ、痛くないのであれば、今は診察をする必要もないでしょう。痛みを感じたらすぐに言ってくださいね？」

「わかりました。」

しのぶさんに短く返事を返せば、彼女は綺麗な笑顔を見せる。

……しのぶさん、心の内を打ち明けてくれたあの日からだいぶ変わったな。

笑顔なのに怒ってる……その矛盾を感じ取る頻度がグッと少なくなった。

まぁ、たまにその匂いがするけど、基本的には喜怒哀楽の匂いと表情がシンクロしている。

うん、相反する感情の板挟みからだいぶ抜け出せたようで安心した。

「それでは、本日も訓練、頑張りましょうね？　あ、今日から十回負けたら強制的に私の継子になってもらうのでそのつもりで。」

「……いや、なんつー条件出しちゃってるんですかしのぶさん!?」

「力づくです。検討すると口にするばかりで、全く検討している様子は確認できていませんからね。考えるつもりがないのであれば、私もちょっと強硬手段に出てみることにしました。」

……素晴らしい笑顔でなんてことを言うんだこのお姉さまは……勘弁してくれ……。

67．蝶屋敷での生活。痣状態での訓練開始

しのぶさんから、今日の訓練から十回負けたら強制的に継子発言をされて数時間後。
私、しのぶさん、カナヲ、アオイ、すみ、きよ、なほの七人は訓練場内で一斉に鬼ごっこをしていた。
相変わらず私はしのぶさんを追って、カナヲたちに追われての高難易度訓練を強いられているが、痣を発現してから体の調子が異常と感じてしまうくらいに良く、カナヲたちに捕まることもないまま、しのぶさんとかなり距離を縮めている。
手を伸ばせばすぐにでも掴めてしまいそうな距離……だが、おそらくこの場で手を伸ばしたところで、いつものように虫網をひらりと躱す蝶の如く、軽々と躱されてしまうだろう。
「おっと。」
「……予想はできた。」
まぁ、だからと言って手を伸ばさなくては捕まえれないのも事実のため、手を伸ばしたが。
「うーん……ひょっとしなくとも優緋さん。今日、調子がすごく良かったりします？」

「ですね。昨日に比べたら、明らかに変化してると思います。」
軽くしのぶさんと言葉を交わしたのち、再び彼女に向かって手を伸ばす。
……ギリギリで躱された。
「今のはちょっと危なかったかもしれませんねぇ……」
けど、しのぶさんが若干驚きと焦りに苛まれているような匂いはする。
さっきのは本当に危なかったようだ。
「よっと。」
「あ……!!」
そう思いながら、私は軽く跳んでバク宙を行う。
宙返りにより視界に一瞬入ったのはカナヲの姿だった。
「残念でした。」
「……次こそは…!」
カナヲから少しだけ闘争心の匂いがする。
同期でありながらも、差が出てきている私に対して、少しだけ感情が引き摺り出されたのかもしれない。
これはいい傾向なのだろうか……？
まぁ、今はいいや。

とりあえず今日分の訓練を終わらせよう。
そう思いながら、カナヲとアオイの手をひょいひょいと躱しながら、私はとにかくしのぶさんを捕まえるために手を伸ばし続ける。
相変わらず躱されまくるけど……。
でも、痣を発現していない状態での訓練に比べたら、かなり彼女の動きを目で捉えることができるようになっている。
自身の体も軽いため、躱されたら瞬時に体勢を立て直して追うこともできるようになっている。
これなら、ある程度様子を見れば隙を見つけ出すことも可能かもしれない。
柱だから簡単に隙を見せたりしないことは理解できるけど、きっと、粘り続ければわずかな穴を見つけ出すことも可能なはずだ。
……その予想は当たっていた。
何回目かの攻防で、彼女の動きに若干の隙を見つけることができた。
そこにつけ入れば、羽織くらいは掴めるはず!!
ひらひらと翻る蝶の羽のようなしのぶさんの羽織。
回避された瞬間に体を反転させて思い切り手を伸ばす。
すると、その羽織の布を掴むことができた。

「!?」

しのぶさんが一瞬驚いた様子を見せる。

だが、すぐに彼女は頭を切り替えたのか、素早く羽織から自身の腕を抜き、慌ててこちらから距離を取る。

私の手元には、その際に残されたその羽織だけが握り締められていた。

「……予想はしていたけど、やっぱり柱を捕まえるにはまだまだ修行が足りないか……。指を掠めるだけだったこれを奪ることができたことは嬉しいけど、ちょっと違うよな……。」

ほんのりと藤の香りがする羽織を見つめながら呟く。

うーん……彼女を捕まえるまで、ちょっと時間がかかるかもしれないな。

「……。」

しのぶが羽織っていた羽織をその手に掴み、納得いかないと言った表情をしながら考え込む優緋。

そんな彼女を見つめながら、訓練をつけていた蟲柱、胡蝶しのぶは驚愕しながらその場で固まる。

鼓動がかなり速い。

誤魔化しきれない焦燥に苛まれる。

（まさか……羽織を奪られてしまうなんて……）

目の前にいる優緋は、まだ鬼殺隊に入ってそこまで長い時間過ごしていない一般隊士のはず。

だのにその実力はすでに柱に近づきつつあると言う現状は、優緋より先に鬼殺隊として行動していたしのぶからすると、あまり見たことがない光景だった。

柱の中には二ヶ月という短い期間で柱にまでのし上がってきた少年が一人いる。

そんな彼と並ぶほどの成長速度を、今、目の前の剣士は見せている。

才能を持ち合わせている霞柱の少年と並ぶ程の成長速度でここまで成長してきた剣士の姿を側で見ていたしのぶは、動揺するしかなかった。

ぐるぐると脳裏に疑問を浮かべながら、しのぶは優緋に歩み寄る。

「あの、優緋さん？」

「ん？　ああ、すみません。羽織、持ったままでしたね。お返しします。」

「え、ええ……。」

確かに羽織も返して欲しかったが、それ以前に、どうしてそこまで成長が速いのか理由が聞きたかった。

しかし、その問いかけの言葉はしのぶの喉から出てくることはなく、返却された羽織

を受け取るだけしかできなかった。
（……この速さは、いったいなんなんでしょうか……？　いったい、この子は……？）
どことなく底冷えするような感覚を覚えながらも、しのぶは返却された羽織を再び身につける。
（そういえば……痣を出していなかった昨日までの優緋さんと、痣を出している今日の優緋さんで……動き方が一気に変化……しましたよね……？）
そんな中ふと、昨日までの優緋と、今日の優緋の違いを思い出すしのぶ。
未だに考え込んでいる様子の優緋に、そっと視線を向ける。
彼女の額には、打ち身にしては明らかに不思議な形をしている痣が浮かび上がっており、かなりの存在感を放っている。
（……まさか……ね……。）
一瞬、その痣が何かしら関係しているのかと考えたが、痣の有無程度で能力に変化など発生するのだろうか？という疑問と、そんな話聞いたことなどないし、確証もないという解答にいきつき、考えを捨てるように軽く首を左右に振る。
「どうしました、しのぶさん？」
急に首を左右に振ったしのぶに気づいた優緋が、疑問の声を上げる。
「いえ、なんでもないですよ。」

しのぶはすぐに笑顔でなんでもないことを彼女に伝えて、一度手を叩く。
「どうやら時間が来てしまったようですし、今日はここまでです。今回のこの結果は……そうですね……。私の羽織を奪れたことは評価できますが、完全に捕まえたわけではないですからね……引き分けということで。」
「……やっぱり、賭けはするんです？」
「はい、もちろんです。」
「は……はは……素晴らしい笑顔、ありがとうございます……。」
頭を切り替えるために紡いだ言葉に、優緋が苦笑いをする。
……いつもと変わらない表情や態度。
だが、それを見てもしのぶからは底冷えするような感覚は抜けきれておらず、少しだけ表情を歪める。
これは……一応、お館様に伝えた方がいいかもしれない……。
そんなことを考えながら、今日のところは解散することを告げるのだった。

６８．蝶屋敷での生活。自身の修行の終了と、サボり魔たちの合流

痣を出した日から二十五日後。
原作の炭治郎が全集中・常中を会得した頃。
痣を発現させ続けることができるようになった私の体は、完全に痣状態での行動が染み付いていた。
最初の方は調子の良さや体の軽さに戸惑っていたため、少しだけ飛ばしすぎることがいくらかあったけど、今は完全にコントロールできるようになった。
……訓練場の中。
複数人の走る音だけがこだましている。
今まではカナヲたちに捕まりそうになるたびに躱すこともしていたため、しのぶさんに喰いつくのもやっとで、羽織を獲るまでしかできなかったけど、今日は違う。
なぜ違うのかというと、私がカナヲたちを振り切ってしまっているからである。
今日も彼女たちは私を追っていた。
しかし、今の私にはどうやら彼女たちは追いつくことができないようで、完全に傍観

に徹する形になってしまっているのだ。
そのため、今は私としのぶさんによる完全な一騎打ち状態となっている。
これまでの訓練では、しのぶさんは余裕の笑みを浮かべて遊ぶように私の相手をしていた。
だが、今のしのぶさんの表情からは笑みが消えており、明らかな真剣モードとなっている。
現柱でさえ真剣な表情になる……そこまで私は成長していたのかと驚いた。
同時に安堵も抱いていた。
これなら、きっと煉獄さんのサポートも上手くこなせるし、猗窩座と戦闘しても即死することはないだろう。
まぁ、即死しないだけであり、死なないとは言っていない。
煉獄さんの救済も今の状態では絶対にできないだろう。
……彼を救済するための鍵になる〝透き通る世界〟に、私はまだ足を踏み入れてないのだから。
……〝透き通る世界〟を使用した状態でなくては、彼の必中攻撃の鍵となる闘気に反応する羅針盤を欺くことはできない。
あれを欺かなくては、軽傷のみの勝利・撃退は難しい。

少しだけそんなことを考えながら、私は一気にしのぶさんに距離を詰める。
「あ……!?」
しのぶさんから上がる驚きの声。
私の手がとらえたのは、彼女の腕だった。
「……私の勝ち、ですね。しのぶさん。」
小さく笑いながらしのぶさんに声をかければ、彼女は一度目を閉じたあと、口元に緩やかな笑みを浮かべて視線を向けてきた。
「はい、私の負けです。まさかこれ程までとは思いませんでした。下弦の伍とはいえ十二鬼月を倒しているので、能力や才能はかなりのものだと予測はしていましたが、それを凌駕していましたから。柱としてちょっと悔しいです。柱になるまで、かなりの時間がかかった私に、数ヶ月しか鬼狩りをしていない新人さんが並んだんですから。まぁ、他の柱の皆さんにはまだ並べないでしょうけど。」
「あはは……。」
ちょっと棘のある言葉を言ってきたしのぶさんに対して思わず苦笑いをしてしまう。
相当悔しかったらしい。
拗ねているような、怒っているような、羨望するような……イライラしているような匂いがする。

「ですが、優緋さんの力はかなりのものです。その実力ならば、自然と柱の皆さんもあなたを認めてくださるでしょう。もちろん、鬼に対しての懸念はなかなか消えないでしょうけど、強く当たられることだけは無いと断言できます。まぁ、もし何かあれば、遠慮なく相談してくださいね？　継子も歓迎しますよ。」

「最後まで継子になれ……なんですね……。」

「ええ。気が向いたらいつでも申し出てください。」

けど、その匂いもすぐに霧散して、普段の優しい匂いが鼻腔をくすぐる。

それが少し嬉しくて、くすくすと小さく笑い声を漏らした。

「どうかしましたか？」

「……なんでもないですよ。まぁ、強いていうなら、しのぶさんからとても楽しげな匂いと、穏やかで優しい匂いが最近はいっぱい感じ取れるなと思ったんです。気持ちが楽になった証拠でしょうかね。」

「……そうですね。はい。それは肯定しましょう。私が抱えていたものを、無理して一人で抱えなくてもいい……潰されてしまいそうならば、いつでもその重荷を代わりに抱えようと言ってくださった友人が、目の前にいるので。もう、偽る生活をする必要がなくなりましたから。」

「それはそれは……少しでもしのぶさんの笑顔に貢献できたようで何よりです。」

互いを見つめながら笑い合う。
とても心地よく感じれる程、穏やかな空気が辺りを漂う。
うん、まさしくホワホワする、だな。
でも、そのホワホワ空間はすぐに霧散することになった。
訓練場の出入口付近から、カタンという物音が聞こえてきたために。
「ん？」
「あら？」
「「あ……」」
物音の方に目を向けてみると、そこには善逸と伊之助の姿が。
しのぶさんから怒りの匂いがした。
「……あらあら、随分と長い長い休憩でしたね、善逸君に伊之助君？　私、てっきりもう二度と戻ってこないのかと思いましたよ？」
笑顔だけど怒りの匂いが半端ないです。
「「……。」」
「まぁ、十分休息を取ったようですし、前以上にきつめの訓練をしても問題はないですよね？　だっていっぱい休んだのですから。体調もきっと万全なのでしょう？」
「「……。」」

素晴らしいくらいのブラックスマイルを浮かべながら、穏やかな声音で話しかけてくるしのぶさんの姿に、善逸と伊之助の二人はダラダラと冷や汗を流し始める。

よく見るといつでも逃げることができるように、腰を引いた体勢だ。

このままではまた二人が逃げそうだな……。

そう判断した私は、素早く二人の背後に回っては、訓練場の中へと押し込む。

「うわ!?」

「ぬお!?」

こちらの行動により、訓練場に強制的に放り込まれた善逸と伊之助がドテンと転ぶ中、私は訓練場の戸を閉めて戸の前に腰を下ろすことで二人の退路を断つ。

「ちよ、優緋ちゃぁあぁあん!?」

「おいこら優緋!! 何しやがるんだ!? 邪魔だぞそこ!! 部屋から出られねぇじゃねぇか!?」

「まぁ……部屋から出ると……？ 伊之助君は部屋から出て何をしようとしていたんですか？」

「……。」

顔を青くして助けを求めるような視線をこちらに向けてくる二人に、口パクだけでばーか、と告げる。

結果的には自分の強化に繋がったからいいけど、サボられたあの日は二人に対して結構ムカっとしたからな。

だって、二人がサボらなかったら難易度が一気に上がった鬼ごっこをしなくてもよかったんだから。

まぁ、一人でも多くの人を救うための大きな一歩を踏み出せたことは感謝してる。

だから、二人にはお礼の品という名の常中訓練を贈るとしようか。

自分の身を守ることができるようになること程、鬼狩りにとって嬉しいことはないだろうからね。

ちょっとした憂さ晴らしもこれでできると小さく笑う。

無限列車まで、あと少し。

69．まさかの事態発生

善逸と伊之助の退路を断ってしばらくした頃。
「ええ!?　全集中の呼吸を四六時中!?」
「ああ。私に水の呼吸を教えてくれた元柱の恩師がやっていてね。こっそりと真似していたんだ。おかげでしのぶさんに追いつけるようになった。」
「うそ……柱の人と鬼ごっこして追いつけるなんて……!!　俺たちカナヲちゃんにすら追いつけないのに!?」
「ちなみに、優緋さんの手にかかればカナヲも数分で捕まっちゃいますよ?」
「マジかよ……!!」
逃げようとするたびに即行で私が阻止していたからか、逃げることを諦めたらしい善逸と伊之助の二人に、私はしのぶさんと何をしていたのかを教え、同時にどのような成長を果たすことができたのかを告げる。
二人は驚いて固まってしまった。
「しのぶさんから教えてもらったんだけど、私が会得したのは全集中・常中と呼ばれるものらしくてね。上位の鬼殺隊の隊士なら当たり前のように会得している基礎的なもの

なんだとさ。常中ができれば基礎体力が飛躍的に上がるみたいでね。体力が尽きない限りは身体能力も底上げすることもできるから、基本的に鬼殺の剣士はみんな使用するんだってさ。カナヲも使えるらしいな。」

「はい。常中はいわば基本の技というか、初歩的な技術なので出来て当然のものです。会得するには相当な努力が必要ですけどね。」

にっこにこと笑顔を浮かべながら言葉を紡ぐしのぶさんに少しだけ苦笑い。

物語の展開をよく知っているから仕方ない、多分。

「まぁ、できて当然ですけれども。仕方ないですできないなら。しょうがないしょうがない。」

「ははは……。」

伊之助の肩をぽんぽん叩きながら言葉を紡ぐしのぶさんの姿に乾いた笑い声が漏れる。

まぁ、伊之助を奮起させるには、煽るのは結構効果的だからなぁ。

つか、しのぶさん、この短期間で伊之助の特性を見抜いたのか。

すごいな……流石は柱。

「はあ〝ーーーーーん!?　できてやるっつーの当然に!!　舐めんじゃねぇよ乳もぎ取るぞコラ!!」

うん、大奮起。

でも最後の台詞はいかがなものか……いや、まぁ、しのぶさんもちょっと言い過ぎな気もするけどね。

「頑張ってください、善逸君。一番応援してますよ。」

「!?ハイッ」

なんて考えていたら、しのぶさんは次に善逸の手を握り、笑顔で一番応援していることを告げる。

至近距離で綺麗な彼女の笑顔を見た上、一番なんて言葉を告げられた善逸は大喜びでやる気を出す。

何というか……単純だなぁ……と思ってしまった。

苦笑いをこぼしながらも、奮起した二人の姿を見つめる。

「では、早速始めましょうか。そうですね……この訓練で優緋さんと同じくらいになれとまでは言いません。彼女程の能力にまで成長するためにはこの療養期間は短すぎます。ですが、会得することはまだ可能です。なので、お二人には常中会得を目指してもらいます。」

しのぶさんは、燃えている二人に目標を伝える。

「やってやらぁ!!」

「もちろんやり遂げてみせますともぉーーーー!!」
賑やかだなぁ……と思いながら、私は訓練場から立ち去る。
あれだけ奮起していれば、サボるなんて真似はきっとしないだろう。
「ん？」
しばらくして自分に割り当ててもらっている部屋に戻ると、炭治郎が動いている気配を感じ取る。
日中に箱から出てるなんて珍しい。
「炭治郎？　珍しいな、箱から出てるなんて。」
「う！」
声をかけながら部屋に入れば、元気よく彼は返事を返してきた。
日の光が入りにくい部屋だから活動しやすいのかもな……。
……禰豆子はまだ眠ってるみたいだな。
まぁ、あの子は私たち以上に怪我していたもんな……。
……いや、禰豆子がひどい怪我を負っていたのは、あの時二人を差し出した私のせいだな。
……だな。
二人の潔白を証明するためとは言え、自ら二人を差し出す行為は、本来ならばやるべきことじゃないのに、私はそれをしたんだ。

読者としての視点が抜けておらず、結局のところ、肉体や記憶だけを持ち合わせてるに過ぎない紛い物であり、異物であることは変わらない……。

きっと……本来のこの子ならば、差し出すなんて真似はしないだろう。

「……うー。」

「ん？　どうした？」

溜息を吐きそうになっていると、炭治郎が心配そうな目を向けてきた。

疲れているように見えたのか……それとも、若干の違和感を覚えているのか……。

わからないな。

心配という匂いしか感じ取れない。

「う！」

「おっと。」

炭治郎を見つめていると、彼は私の手を取り、そのまま自身の頭の上に乗せた。

どうやら撫でろと言いたいらしい。

「はいはい。」

少しだけ苦笑いをしながら炭治郎の頭を撫でてやれば、彼は上機嫌に笑う。

だが、少しすると、自身の口元にある竹を手で外して、私のことをじっと見る。

「ねえ、ちゃ。だいじょうぶ。だいじょうぶ。」

「……へ？」
「ねえ、ちゃん、なら、だいじょうぶ……!!」
まさかの事態に目を見開く。
ウソだろ……なんで今……。
炭治郎が……喋った？
「炭治郎……あんた……話せて……。」
混乱して声をかければ、炭治郎はにこりと笑顔を見せた。
その姿に思わず涙が流れた。
「ねえ、ちゃ。なかない、で。」
少年にしては多少ゴツゴツとした手で頬に触れられ、思わず彼を抱きしめた。
この行動は私の意思……？
それとも、私が宿る体の意思……？
いや、今は考えている場合じゃない……っ
「ごめん……ごめんな、炭治郎……!!　いっぱい痛い思いもしただろう？　禰豆子たちを守っていた時も……！　鬼にされてしまった時も……!!　数ヶ月前のあの時も!!」
溢れ出てくる感情のままに、私は炭治郎に謝罪する。
どちらの意思かなんてわからない。

何もかもごちゃ混ぜの状態だ。

でも、ごめんという言葉しか紡げなくて、嗚咽を漏らすことしかできなかった。

泣きながら謝罪する私を、炭治郎はずっと抱きしめて、優しく頭を撫でていた。

彼から感じ取れた匂いは、しょうがないなという呆れの匂いと、誰よりも優しい匂いだった。

７０．炭治郎の状態とこれから

「……つまり、今の炭治郎の状況をまとめると、話すことはできる。けど、鬼としての能力や、弱点に変化はなく、人間に戻ったわけじゃない、ってところか？」

「うん。たぶん……」

しばらくして取り乱していた自分を落ち着かせることができた私は、炭治郎に心配かけてしまったことを謝罪したのち、今の炭治郎の状態を分析するために、少しだけ話していた。

これによってわかったことは、炭治郎はかなりのスローペースで話すことが可能になったことや、鬼としての強靭な強さはそのままであること、日の下に出ることはできないことだった。

日の下に出れないというのは、調べる術がないため、実際のところどうかはわからないけど、炭治郎が「陽の光はやっ」ってイヤイヤ期の子供よろしく拒絶したので、判断した。

ああ、一応誤解を招かないように訂正しておくが、縁側に連れ出そうとするような真似はしてないぞ。

流石に二人に対して家族というより読者視点でしか見れていないことを自覚しても、そんな鬼畜な行動取れるはずがない。
「炭治郎も、よくわかってないんだな。」
「うん。」
「話せるのもついさっき自覚したんだな?」
「うん。」
「そうか。」
ふむ……まぁ、それならまだ無惨がでしゃばってくることはないな。
太陽を克服している鬼は、まだ生まれていないのだから。
よかった……完全にあれに太刀打ちできる程の戦力が整っていないというのに、ラスボス戦になるという最悪なバッドエンドにはなってないんだな。
安心したわ……。
「ねえちゃ。おれ、もっとつよく、なりたい」
そう安堵の息をこぼしていると、炭治郎から強くなりたいと告げられる。
「強く?」
「うん。ねえちゃ……みたいに、つよく、なれば。ねえちゃ、も、ねずこ、も、まもれる、から。ねえちゃ、が、たいへんな、とき、たすけること、できるから。」

「炭治郎……。」
強く、まっすぐな眼差しを向けてくる炭治郎。
その姿に思わず笑みが漏れる。
だって、鬼化してはいるけれど、その目は私がずっと紙越しに、または画面越しに見守っていた、大ファンだった男の子と変わらなかったから。
「やっぱり、炭治郎は炭治郎だな。」
「うん？」
「こっちの話さ。気にしないでくれ。」
不思議そうに首を傾げる炭治郎の頭に優しく手を置いてわしゃわしゃと少しだけ強く撫でれば、彼は幼児のようにキャッキャと笑う。
「でも、強くなるったって、どんな風に？　自分が思い描いてる強さはあるか？」
「うん。ねえちゃ、ひのかみかぐらで、たたかってる。おれにも、たぶんだけど、できるとおもう。おしえて、ねえちゃ。」
……日の呼吸が使える鬼……？
うわぁ……無惨が可哀想な目にあう世界線になりそう……。
いや、でも、あの鬼にはそれくらいきつい目に遭ってもらったほうが、被害者たちの無念を晴らせるか？

「なるほどね……。まぁいいよ。今の炭治郎に体力の限界は存在していないからな。血を流し過ぎない限りは、多分イケると思う。けど、無理だけはしないように。今からじゃ大事な場面でも付け焼き刃程度の技術になる可能性が高い。」

「うん、わかったぁ。」

……そうと決まれば、無限列車の話に進むまでの期間、炭治郎に日の呼吸を使用できる最低限のラインまで教えないとな。

それと並行するように、私も〝透き通る世界〟を開花させるための修行を行う。

うん、対人修行が終了してしまったからどうしようかと悩んでいたけど、新たにやることが見つかったな。

「じゃあ、日中は部屋の中で呼吸と型を教えよう。まぁ、炭治郎も父さんにヒノカミ神楽を教えてもらっていたんだ。型ならすぐに覚えるさ。だから、鬼との戦いに用いることができるくらいに昇華できるかが鍵になると思う。炭治郎も外に出ることができる時間帯になったら、時間が許す限り、剣術の基礎的なことや、ヒノカミ神楽同士の打ち込み稽古をしよう。恩師である鱗滝さんや、柱であるしのぶさん程教えるのは上手くないかもしれないけど、ついてきてくれるか？」

「うん!!」

笑顔を見せる炭治郎の頭を優しく撫でながら小さく笑えば、炭治郎がふんすっと若干

奮起したように鼻を鳴らす。
「ねえちゃ、よろしく、おねがいします。」
「ああ。」
頭を下げる炭治郎に了承の返事を返せば、再び太陽のような笑顔を見せてきた。
しかし、すぐに自身の首からぶら下げている竹を自ら口元に持っていき、再びそれをかぷっと咥えた。
「あら？　炭治郎君、起きたんですね。」
「う！」
「お姉さんに甘えていたんですか？」
「うー!!」
「むむむ……。何を言ってるかはちょっとわかりませんが、雰囲気的にそうだと肯定しているのでしょうか……？」
「むん!!」
「あら、当たっていたみたいですね。」
（……なるほど。）
一瞬、不思議に思ったが、どうやらしのぶさんの接近に気づいていたらしい。
（……まさかの事態に驚いていたからちょっと気づくの遅れたな。）

まだまだ私は精進が足りないらしい。

「そういえばしのぶさん。何か用事があったのでは？」

苦笑いをしそうになるのを堪えて、部屋にやってきたということは、私に用事があったのではないかと考えて、彼女に要件を問いかける。

「あ、そうでしたそうでした。もうすぐ夕飯ですから呼びにきたんです。」

……夕餉についてのお知らせだったらしい。

「なるほど。もうそんなに時間が経っていたんですね。炭治郎と久々に遊んでいたので気づきませんでした。」

うっかりしていた、とウソともホントとも取れる言葉を返して、私はその場から立ち上がる。

「夕飯食べてくるよ。」

「う!!」

手を振ってお見送りしてくれる炭治郎に手を振りかえした私は、割り当てられた部屋を退室する。

さて、明日からは炭治郎も修行だな。

ヒノカミ稽古
７１．始動、鬼化炭治郎のヒノカミ稽古！

炭治郎から強くなりたいと言われた日の翌日。
善逸と伊之助の悔しげな声を聞きながら過ごしながら、私は炭治郎にヒノカミ神楽の正しい呼吸と、型をゆっくりと教えていた。
現在は宵闇時。
日が暮れたことにより炭治郎も外に出ることができる時間帯。
私たちが今いるのは、割り当てられた部屋の前にある広い庭の中央だ。
「互いに木刀だから斬れることはない。打ち身はできるかもしれないが、安心しろ。これまで訓練と修行をしていた分、身体能力や基礎体力は十分にある。炭治郎の打ち込み稽古に付き合えない程弱くもない。だから、しっかりと技を打ち込んでみろ。教えたように、ヒノカミ神楽を壱から拾弐まで繋げながら攻撃してきな。」
「……う、ん……。」
そこで私は炭治郎にヒノカミ神楽こと日の呼吸の型を、壱から拾弐まで繋げるように木刀を振るようにと指示を出す。

だが、炭治郎は木刀を持ったまま、かなり躊躇っているような様子を見せている。
「……躊躇わなくていい。私は怪我しないから。」
「ほん、とう？」
「ああ。信じていい。」
やっぱり炭治郎は優しいな、と少しだけ考える。
害ある相手なら……攻撃してくる鬼であるなら、容赦なく武器を振るう私なんかとは大違いだ。
でも、躊躇っているようじゃ強くはなれない。
厳しいことをいうかもしれないが、戦わなければやられてしまう世界なんだ、ここは。
だからここは心を鬼にしなくてはならない。
「炭治郎。その優しさは否定しない。否定はしないけど、今は肯定もできない。もし、目の前にいるのがあんたの家族である優緋ではなく、全てを奪い尽くす鬼だったらどうする？　大切なものを傷つけて、大切なものを自分勝手に奪っていくような鬼だったら？
……鬼は、皆が皆優しさだけで救える者じゃない。話し合いに応じてくれる者も少ない。目の前にいる人間を、鬼を、自身の力の糧となる食糧としか見ていない者が多いんだ。だから、躊躇っていたら自分の命が危うくなる。それに……怪我を負い過ぎて血を大量に流し過ぎた時、炭治郎……あんたは、自身の本能に抗えるか？」

「!!」

静かな問いかけに炭治郎が目を見開く。

驚きの匂いと焦りの匂い、悲しみの匂い……優しい匂いももちろんするけど、負の感情や焦燥が強く感じ取れる。

「もちろん私は信じてるさ。炭治郎たちは人を襲わないって。でも、どこかで信じ切ることを躊躇う自分もいる。血を流し過ぎて治癒のために力を使い続けた鬼は、かなりの飢餓状態に陥ると風の噂で聞いたこともあるからだろうな。……もし、これまでにないくらいの怪我をして、それを全て治した代償に、本能に抗うことができないくらいの飢餓状態に炭治郎たちが陥ってしまったら……私は、それが少し怖いんだ。」

ああ、かなり困らせてしまった。

きっと深く傷つけてしまった。

頭の片隅でそう考える。

でも、どうしてもチラついてしまうんだよな。

原作内にあった遊郭の話……その話の中で、禰豆子が炭治郎を守るために、人々を守るために、堕姫と戦って大量の血を流して、鬼化が進んだ結果、人を襲いかける話が。

あの時は炭治郎がすぐに禰豆子の動きを止めて、なんとかことなきを得たが、もし、私がそのシーンに出くわしたら……炭治郎のように、止めることができるのだろうかと、

不安にならずにはいられなかった。

物語のイレギュラー……明らかな逸脱の果てに最悪な事態を招いてしまう世界線になっていたらどうしようと、考えてしまう日々が絶えないのだ。

今はいい方向に転んでいるけど、この先にその分の代償が降りかかってきたら……私は……。

「……ごめんな、炭治郎。今のは忘れてくれ。」

動きを止めてしまった炭治郎に対して、私は謝罪の言葉をかける。

この謝罪は炭治郎たちを信じきれていないことの謝罪なのか、それとも酷なことをさせようとしたことに対する謝罪なのか、自分自身でもわからない。

「……。」

炭治郎から一瞬、何かを決意したかのような匂いがした。

辺りには、日の呼吸特有の燃え盛る炎のような音が響き渡る。

「炭治郎?」

「……。」

音の発生源は炭治郎からだった。

驚いて顔を上げてみると、彼は木刀を構えている。

「……。」

その姿が何を意味するものなのか、決意の匂いから理解できた。
炭治郎は、日の呼吸を私に使おうとしてる。
強く……なるために……。
一度私は目を瞑る。
酷なことをさせてごめん……心の中で謝罪する。
「……来い!!」
「!!」
そして、閉じていた目を開けると同時に、その気持ちに一旦蓋をして、炭治郎に師として向き合った。
日の呼吸独特の呼吸を行いながら、彼は木刀を力強く振るう。
〝ヒノカミ神楽　円舞!!〟
「……その調子だ。」
放たれた日の呼吸の壱ノ型。
私は日の呼吸の常中を行いながら、その攻撃を受け流す。
〝ヒノカミ神楽　碧羅の天!!〟
〝ヒノカミ神楽　烈日紅鏡!!〟
次々と繋げて放たれる日の呼吸の型。

木刀で受け流していることもあってか、かなりの大きな打撃音が庭全体にこだまする。

炭治郎の修行は始まったばかり。

さぁ、どこまで君は成長するのかな……。

７２．炭治郎の成長日記

ヒノカミ稽古をつけることにした今日から、少しだけ日記を書くことにした。

ヒノカミ稽古一日目

昨晩の宣言通り、日中は炭治郎にヒノカミ神楽の正しい呼吸法と、ヒノカミ神楽の型のおさらい、および強化を行うことにした。

私の予想通り、型に関しては問題なかった。

父さんから教えられていたこともあり、すぐにおさらいを済ませることができたから。

でも、問題は強化の方だ。

いくら鬼であり体力に限度がないのだとしても、正しい呼吸を行わなければ、本来の力を発揮することができない。

それに、無鉄砲につっこんだらかなりの損傷を受けることになる。

だから強くしたいところだけど……さて……このわずかな時間でどこまで行けるのだろうか。

ヒノカミ稽古二日目。

型は問題ないと判断できた。

だから一時的に型の訓練ではなく、全集中の呼吸の訓練に移行する。

呼吸方法だけを鍛えるというのはなかなか骨が折れそうではあるが、今はそうも言ってられない。

とりあえず、ヒノカミ神楽を舞うのに滑らかさが現れれば呼吸はある程度鍛え上げられると思うので、室内でもできる剣舞の要領でヒノカミ神楽を舞い続けてもらった。

まだ始めたばかりだったからか、炭治郎は若干苦しげな表情を見せていた。

体力はあるけど、肉体が少し追いつかないようだ。

私も最初はそうだった。

少ししたら肺がかなり痛くなって、筋肉が強張ってしまうんだよな。

今はそのどちらの症状も出てこないため、おそらく私の体がヒノカミ神楽……いや、日の呼吸に完全に適応した証拠だろう。

ヒノカミ稽古三日目

日中は炭治郎を観客にして、私がヒノカミ神楽を舞い続けた。

この三日間で炭治郎は聞いて覚えるより、見て覚える方が得意であることを知ること

ができたから。
炭治郎はずっと私を見つめ続けていた。
こちらの動きを一つ一つしっかりと記憶するために。
しばらくして木刀を炭治郎に手渡してみたら、彼はしっかりとヒノカミ神楽を舞っていた。
呼吸はまだ若干弱いため心許ないが、問題はないと判断する。
これなら、無限列車に足を踏み入れる頃には十分戦えるようになる。

ヒノカミ稽古四日目
稽古初日の時のように、私は炭治郎にこちらを相手取る打ち込み稽古をさせていた。
結果は上々。
十二鬼月を相手取らせるまではもう少し時間がかかりそうだが、最低ラインの一歩手前までには成長している。
数時間ぶっ通しで鍛錬し続けたこともあり、それなりに早く成長してくれた。
正直のところ、かなりの時間がかかるのではないかと心配していたが、鬼になっていたことで身体能力が引き上がっていることもあって、逆に成長速度が速くなったらしい。

なんというか複雑な気持ちだ。
鬼になっていたから成長速度が速くなっているという事実は。

「……こんなもんか。」
今日分の日記を書き終わる。
少しだけ疲れたなと思いながら、首を回しているとゴキゴキという小さな音が聞こえてきた。
日記を書くためにずっと下を見ていたせいで、若干関節が固まっていたらしい。
「……本当にこんな音人間から出るんだな。」
苦笑いをこぼしながらポツリと呟く。
が、誰も返事はしてこない。
なぜなら炭治郎と禰豆子はぐっすりと眠っており、蝶屋敷内にも静寂のみが満ちている。
「……ん？　お？　やっぱりこの時代でも流星群ってあるんだな。いや、流星雨か？　まぁどっちでもいいか。」
そろそろ私も寝ないとな、なんて考えながら夜空を見上げていると、そこには一面の

星空と、煌めく軌跡を描きながら、大量の星が流れていく光景。
珍しいものが見れたものだと思いながら、私は縁側に少し出る。
夜風が結構冷たくはあるが、この世界に来てからのんびりと夜空を見ることもなかったし、ちょっとだけ天然のプラネタリウムを楽しむことにした。
「……透き通る世界に早く至れますように。炭治郎のヒノカミ神楽が早く上達しますように。炭治郎と禰豆子が人を襲うようなことにはなりませんように。」
流れ星に願い事をすれば、それは必ず叶う……。
別に信じていないのだけど、少しだけ試すような形で、今の願い事を口にする。
「……煉獄さんたちを救えますように。少しでも、多くの命をこの手で助けることができますように。」
まぁ、どれだけきつかろうが必ず果たしてやるから、星頼み、神頼みは意味ないかもしれないけど、改めて言葉にして、しっかりと読み上げることで、決意表明にするというのも意外と必要なことだったりするし、願い事をするという名目で、決意をするのもありだろう。
「へっくしっ!!　あ、ちょっと寒いわこれ……部屋に入って寝よう。」
なんて考えていたらくしゃみが出てしまった。
短い間でも体は急激に冷えたらしい……。

少しだけ苦笑いをしながらも、私は自室へと足を運ぶ。
さて、明日も無理はしない程度に、修行修行。

７３．ヒノカミ稽古の合間にて

ヒノカミ稽古五日目。
最近は炭治郎もだいぶ日の呼吸を使えるようになってきた。
初日の時に比べたらかなり鋭い一撃を加えてくるようになってきたからな。
少しずつこちらも本気を出さざるを得ない状況になり始めていた。
「すごいな炭治郎。五日間でここまで行けたか。私は結構時間かけてここまで来ていたから驚いてるよ。」
「おれ、つよくなれてる？」
「ああ。すごく強くなれてる。この調子なら、禰豆子を炭治郎に任せて単独で鬼を倒すことも可能かもしれないな。」
「むりはだめだからな、ねえちゃん。」
「わかってるよ。」
小さく笑いながら炭治郎の忠告に頷けば、彼は満足げに笑う。
だが、すぐに木刀を構えては、再び日の呼吸を使ってきた。
同じく日の呼吸を使いそれを受け流すと、すぐに別の日の呼吸を繋げてくる。

ふむ、なかなかやってくるなこの子。

流石は主人公なだけある。

「優緋さん……また、炭治郎君に訓練をつけてるんですね。」

そんなことを考えながら炭治郎との鍛錬に集中していたら、しのぶさんが声をかけてきた。

「あ、しのぶさん。」

彼女の声に反応を返し、視線をそちらに向けてみれば、しのぶさんは穏やかな笑みを浮かべたまま私たちを見つめていた。

怒りの匂いは感じない。

感じるのは懐かしいという感情だった。

ひょっとしなくてもあれか？

私と炭治郎に、過去の自分と、失ってしまった姉、カナエさんを重ねているのか？

「夕飯の準備ができたので呼びに来ました。」

「ああ、ありがとうございます。よっと。」

「あ……!?」

しのぶさんから感じ取れる懐かしいという感情から、今の彼女の状況を分析しながら、炭治郎の木刀を思い切り背後に飛ばす。

こちらの一撃が当たったことにより手元から木刀が消えてしまった炭治郎は、目を丸くして固まっている。
「今日はここまでだな。」
へらりと笑って炭治郎に声をかければ、彼は表情にも匂いにも拗ねという感情を滲み出しては、私のことをペムペム叩き始めた。
「イタタタタ！　ちょ、炭治郎ペムペム叩くなって!!」
「あらあら……。」
負けたのが悔しいのか、鍛錬が終了するのが嫌なのか……どちらかはわからない。けど、子供っぽいこの姿はちょっと可愛いと思ってしまった。
しのぶさんは穏やかに笑って私たちを見つめている。
しかし、不意にその匂いは少しだけ薄れ、彼女から真剣な目を向けられる。
「……優緋さん。炭治郎君に呼吸を教え、それを使った戦い方の訓練をつけているようですが……炭治郎君に、刀を持たせるんですか？」
「……。」
しのぶさんの問いかけに無言になる。
「ねえちゃん？」
すると、炭治郎はきょとんとした表情をしながら首を傾げて見つめてきた。

そんな彼の頭を優しく撫でてやれば、ふにゃりと可愛らしい笑顔を見せた。
「……本当は、持たせたくないです。でも、炭治郎が望みました。私の手助けや、禰豆子を守るために強くなりたいと。私が使ってる呼吸の一つであるヒノカミ神楽なら、きっと自分も使えるようになるはずだからと。……炭治郎の確かな意思……それを尊重したいと思い、彼に技術を教えています。」
その笑顔を見つめながら、小さく笑い、しのぶさんの問いに答えた。
「……お館様には伝えているんですか？」
「はい。手紙の方でお伝えしました。お館様からは許可を頂いてます。」
「……そうですか。それならば私は何も言いません。ですが、鬼に日輪刀を持たせるなど前代未聞ですし、何か言われてしまうこともあるでしょう。それだけは、しっかりと覚えておかなくてはなりませんよ？」
「……はい。」
しのぶさんの忠告に素直に頷けば、彼女は小さく笑う。
「さ、夕飯にしましょう、優緋さん。」
そして、夕飯を食べようと誘ってきた。
「そうですね。炭治郎。屋敷に戻るよ。修行はまた明日だ。いいね？」
「……わかった。」

その言葉に頷きながら炭治郎に声をかければ、彼は小さく頷いたあと、地面に転がっている木刀を拾い上げる。

「……前より話すの上手くなってますね、炭治郎君。」

拗ねてる匂いがする……と苦笑いをしていると、話す炭治郎を見たしのぶさんが驚いたように呟いた。

最初、彼が話せるようになったことに関しても驚いていたけど、だいぶ慣れてきたところで数日前以上に滑らかに話すからさらにびっくりしたようだ。

「私も驚いてます。いったい、この子の身に何が起きているのやら……。でも、前以上に私や禰豆子以外とも意思疎通ができているようですから、少しだけ安心してなくもないわけでして。この子となら、しのぶさんも仲良くなれるのではないかと思ったり。」

小さく笑いながら、自分も同じ気持ちであることを伝えた私は、鬼でありながらも人を襲うという本能を自制することができ、意思疎通もしっかりと行える炭治郎となら、しのぶさんも仲良くなれるのではと告げる。

「そう……ですね……。可能性はあるかもしれません。不思議と、そう思います。」

しのぶさんはすぐにそれは可能かもしれないと返してきた。

匂いからも本心であることが嗅ぎ取れるため、少しだけほっとする。

「そう言っていただけて安心しました。すぐに仲良くして欲しいとか、無理強いなどは

しません。ですが、時間がある時に、少しだけ歩み寄ってみてください。」
「はい。そうしてみますね。」
笑顔でゆっくりでいいので炭治郎と仲良くして欲しいと伝えれば、しのぶさんは穏やかな笑みを浮かべたまま頷いた。
そのことを嬉しく思いながら、側にいる炭治郎の頭を撫でる。
この子や、禰豆子が少しでも早く鬼殺隊の人に認められ、ゆっくりと歩み寄る未来を願って。

７４．極界への兆し

夕飯を食べ終わった私は、今日分の自分の鍛錬を行っていた。
とはいえ、やってることはヒノカミ神楽を剣舞の要領でそれなりに速いスピードで舞い続けているだけなんだけど。
なぜ、ヒノカミ神楽を舞い続けているのかというと、父さんの真似をしているといった感じである。
父さんもヒノカミ神楽を若い頃からずっと舞い続けていたことにより、型を全て覚え、尚且つスムーズに舞い続け、同時に〝透明な世界〟へと至っていた。
多分、本来ならば何年、何十年と続けることによりマスターできることなんだろうけど、今の私はそんなことを言ってる場合じゃない。
無限列車の物語に行くまで、すでに一週間を切っているんだ。
できることなら、〝透き通る世界〟に一瞬でも入りたい時期である。
まぁ、だからといって、焦っていたら駄目であることもわかってる。
むしろ、焦りのままに鍛錬していたら成果を得ることなく終わってしまうだろう。
それこそ、過去の鬼殺隊で起きた、痣の発現の話を聞いた隊士たちが思い詰め、焦っ

た結果、至ることができなかったように。
なんかの漫画でも言ってたしな。
焦りは最大のトラ……いや、これはちょっと違うか。
ともかく、焦らず時間をかけるしかないのだけは確かだ。
（今の私にある無駄な動き……それを少しずつ削ぎ落としていくか……）
確か、父さんこと炭十郎は、祖父に神楽を教えてもらった時、最初のうちは動きや感覚を拾わなくてはならなかったこともあり、無駄な動きがかなりあったと言っていた。
五感を開き、自分の体の形を血管の一つ一つまで認識するのに精一杯で、とても苦しくて蹲き続けて、それでも先が行き詰まっているとしか思えなかったとも。
その後、何千、何万とヒノカミ神楽を舞い続けることによって、たくさんのことを覚え、吸収した後は、必要でないものを削ぎ落としていき、動きに必要なものだけを残して全て閉じるのだと言った。
そして、やがて体中の血管や筋肉の開く閉じるを瞬きするように速く簡単にこなせるようになり、その時に光明が差すと。
そこまでできると頭の中が透明になり、〝透き通る世界〟と呼ばれる極界が見え始めるのだと。
しかし、それは力の限り蹲き、苦しんだからこそ至れる〝領域〟だと。

で、弛まぬ努力をし続け、諦めることなく、考え続けることで私や炭治郎も同じ世界が見えるようになるし、どんな壁もいつか打ち破ることもできるようになるとしめた。
この体の記憶にもその話をしていた父さん……炭十郎さんの姿があった。
冬の寒空の下、とても大きなクマを斧一本で倒して見せた、あの見取り稽古の時の記憶も。
そこまで思い出した私は、ゆっくりと閉じていた目を開ける。
ヒノカミ神楽を舞い続けて、余計な動きを削っていく。
これで至れるかどうかはわからない。
でも、わからなくてもやらなくてはならない。
少しでも多くを助けるために。
悲劇を少しでも無くすために。
……どれくらい舞い続けたのかわからない。
夜はすでに更けており、月だけが静かに世界を照らしている。
辺りに響くのは神楽を舞うことにより発生する物音のみ。
とはいえ、庭で舞い続けていることもあり、すでに眠っているであろう蝶屋敷の人々は目を覚ます様子はない。
鬼を狩りに行っているしのぶさんたちが戻るわけもなく、のびのびと舞い続けること

ができる。

……舞って、舞って、舞い続けて、数えるのも億劫な程になった頃。

それは唐突に発生した。

「!?」

思わず手元から木刀が落下する。

カランという乾いた音が辺りに響く。

だが、それは今は些末なことで、私はただ一人驚いていた。

私の視界は確かに捉えていた。

自身の体が透けて、ハッキリと筋肉や血管、血流の流れが見えていた。

しかし、それは木刀を地面に落とした際に消えてしまった。

「……はい……れた……？」

少しだけ混乱する。

漫画で見ていた以上に驚いてしまった。

「……。」

地面に転がり落ちる木刀を静かに拾い上げ、再度ヒノカミ神楽を舞う。

先程の自身の集中力や、動きと感覚を思い出しながら。

それにより再び何もかもが透けて見え始める。

「ねえちゃん？」

不意に聞こえてきた声は、炭治郎のものだ。

ヒノカミ神楽を舞いながら、彼の様子を見てみると、彼の筋肉や血管、脳や心臓や骨といった、本来ならば見えないはずのものがハッキリ視界に映り込む。

……この状態だとそれなりに体力が削られる。

まだ完全な状態ではないということだろう。

でも、短い間でも維持することは可能なようだ。

（はは……完全に私、人から離れていってるな……。）

思わず苦笑いをしてしまう。

まさか、本当にこの蝶屋敷生活の内に〝透き通る世界〟に入れるなんて思いもよらなかった。

だが、またこれで一歩……いや、一歩の半分だろうから半歩か。

わずかではあるけど、煉獄さんと一緒に猗窩座を追い返すために歩みを進めることができた。

となると、だ。

明日から私がやらなきゃいけないのは、〝透き通る世界〟を出来るだけ長く維持しながら、ヒノカミ神楽を舞うことか。

最終的には数時間は維持できるようにしたいところだ。
多分、猗窩座との戦闘はそれなりに長く〝透き通る世界〟に入っておかなくてはならないはずだから。
あとは、猗窩座が攻撃のしるべとして使用している羅針盤……あれを狂わせるために闘気を抑えること……いや、抑える……っていうよりは消失させた状態での戦闘ができるようにしなくてはならない。
やれやれ……少し進んだらすぐに新たな壁がやってくる。
かなりめんどくさいことで。
でも、ここまで行ったんだから、最後までやり遂げてやるさ。
「起こしちゃったか、炭治郎。」
「ううん……さいしょから、おれ、ねてなかったから。ねえちゃんが、なかなか、もどってこないのが、しんぱいになったんだ。なにして、いたの？」
「……見ての通り、自分自身の鍛錬さ。いくつか私には目的があるからね。とはいえ、今日はもう遅いし、目的に必要なものの手がかりに触れることができたからここまでにするがな。」
「そうなのか？　だったら、あんしん、だな。それじゃあ、ねえちゃん。へやにもどろう？」

「ああ。」

こちらに手を伸ばす炭治郎に返事を返して、木刀を片手に彼に近寄る。

すると炭治郎は近づいてきた私の手を掴み、ぐいぐいと軽く引っ張ってきた。

ちゃんと戻るからと苦笑いをしながら、蝶屋敷に上がる。

明日から、また修行レベルをアップしないとなんて、内心で思いながら。

75．新たな物語はすぐそこに

「やってやったぞゴラァ!!」
「俺は誰よりも応援された男!!」
「……ようやくか。」
〝透き通る世界〟が見えるようになり、新たなステップに足を踏み入れた日から四日後のこと。
〝透き通る世界〟が一度見えたあの日から、〝透き通る世界〟の維持の時間をだいぶ延ばせるようになった私の耳に、やかましい声が届いた。
「どうしたの……？」
「善逸と伊之助が強くなったことがわかっただけだよ。炭治郎。少し動きに無駄がある。そこはこうだよ。」
「ありがとう、ねえちゃん。」
私の呟きに不思議そうな反応をしてきた炭治郎に対して、小さく笑いながら気にする必要はないと返した私は、すぐに彼の頭を優しく撫でて、善逸たちが強くなっただけだと返しながら、動きに無駄があることを指摘して、彼の手足に自分の手を添えここはそ

うだと教えると、炭治郎は笑顔でお礼を言ってきた。
　軽く笑い返しながら再び炭治郎のヒノカミ訓練を行う。
「オイ、優緋。弟ノ訓練中ニ悪イガ、知ラセダ。」
「ん？」
　しかし、不意に聞こえてきた天王寺の声に、私は一旦訓練を中断して天王寺の方に目を向ける。
「刃コボレノ修繕完了シタ優緋ノ刀ト、オ前ノ弟、竈門炭治郎専用ノ刀ガ今日届クソウダ。シカシ、オ前モナカナカ無謀ナコトヲ企ムナ。タダデサエ鬼ヲ引キ連レタ鬼狩リナンテ例外過ギル鬼狩リダト言ウノニ、更ニ鬼ニ鬼殺ノ刀ヲ持タセルナンテサ。前代未聞過ギルニモ程ガアルダロ。」
「……うるさいな。お館様から許可は頂いてるんだから文句言うなよ。」
「俺ガ言ッテルノハ文句ジャネェ。ヨクヤルナッテ呆レノ言葉ダ。ドウ考エテモ目ヲツケラレル行動シカ取レナイノカッテイウナ。」
「む……」
　ぐぅ……カラスに正論言われて言い返せない……。
　でも、炭治郎が望んでいるし、彼の意思なんだから尊重してあげたいじゃんか……。
「マァ、別ニイイガ、コレカラマタ厄介ゴトニナルカモシレナイカラ気ヲツケロヨ、相

棒。」

「……ああ。」

……天王寺の相棒呼びにちょっとキュンとした。

なんで無駄にイケメンなこと言うんだよこいつ。

「炭治郎。今日、あんたの刀が届くみたいだから、鬼狩りの指令が入った時、試しに炭治郎も戦ってみよう。大丈夫。もし危なかったら姉ちゃんが守ってやるからな。」

「うん。わかった。でも、ねえちゃんもむりはだめだからな。」

「わかってるよ。炭治郎も心配性だな……。」

うん、この子本当にいい子すぎる。

こんな弟持っていた、体の持ち主が羨ましいよ。

まぁ、今は私が彼の姉になっちゃってるけど……。

そういやぁ……この体の元々の意識はどこにいったんだ？

私が宿るようになってから、記憶は得ることができたけど……。

ひょっとして、累に怒鳴ってたあれがもう一人の……？

無意識のうちに口にしていたが、冷静に考えるとなんなんだ？

うーん……よくわからないなこれ。

考えるのはやめよう。

なんて、少しだけ思考を巡らせながら、私は炭治郎の頭を撫でる。
彼は嬉しげに笑った。
……時間は経ち夕方。
蝶屋敷の正門前で待っていると、チリンチリンと風鈴の音が聞こえてきた。
「……お久しぶりです、鋼鐵塚さん。」
近づいてきた音に顔を上げ、小さく笑いながら話しかければ、ひょっとこ面の風鈴男……鋼鐵塚蛍の姿があった。
「刀は修繕した。新しい刀もな。何のために新しい刀を欲したのかはわからないが、産屋敷から玉鋼が送られて来たし、作ってはおいたが。」
別に刀を折ったわけではなく、刃こぼれの修繕を頼んだからか、鋼鐵塚さんは至極穏やかだ。
「まぁ、ちょっとした訳ありでして。詳しくは話せないけど、秘密の剣士に渡すんです。皆を守るために戦いたいと望む、あの子の意思を尊重してね。」
鋼鐵塚さんの問いかけに、濁す形で新しい刀の注文の理由を告げれば、彼は考え込むように腕を組む。
「まぁ、よくわからんが追求はしない。事情を追求するのは野暮だからな。俺はお前らの刀を打つ。お前らは俺が打った刀で戦う。それでいい。深く踏み込む必要もない。

……が、その新しい刀を持った奴にはこう言っとけ。もし俺の刀を折りやがったらその時は覚悟しとけってな。俺の刀を折る奴は許さない。末代まで呪ってやるから覚えてろ。」

「ははは……肝に銘じときますわ……。」

が、すぐに考えても無駄だと思ったのか、事情を持っている私に深く踏み込まない方がいいと判断したのか……まぁ、鋼鐵塚さんのことだから前者な気がするが、追求しないと言ってくれた。

しかし、刀は絶対に折るんじゃないと、新しい刀を手にする奴に伝えておけと念を押してきた。

脅し文句とも取れる言葉と一緒に。

思わず苦笑いが溢れてしまった。

でも、原作を知ってるからこそ、鋼鐵塚さんの不器用なところや、刀を折った時にあんだけブチ切れていた理由もわかってるからこそ、これが彼なりの気遣いであることが理解できる。

素直に頷いて見せれば、鋼鐵塚さんは私をじっと見たあと、急にぐしゃぐしゃと強く頭を撫でてきた。

「うわ!?　ちょ、何するんですか!?」

髪が!!　髪がボサボサになる!!
訴えるように怒鳴れば手が離れた。
「……絶対に折るんじゃないぞ。」
静かな声音で言葉を紡ぐなり、鋼鐵塚さんはこの場から立ち去っていく。
何なんだよ……とその背中を見送った私は、蝶屋敷の中へと戻った。
髪を手櫛で直しながら。
「ねえちゃん!」
部屋に戻ると炭治郎が声をかけてきた。
「ただいま、炭治郎。ほら。あんたの刀が届いたよ。」
近寄ってきた炭治郎に、真新しい日輪刀を手渡せば、彼は目を丸くして固まった。
しかし、すぐにパアッと明るい顔をしては、その刀を手に取る。
「鞘から刀を抜こう。こうやって抜くんだけど……」
「こう?」
「そう。で、完全に抜いたら、柄の部分をしっかりと握って……」
「うん!」
「素質がちゃんとあるなら刃の色は変化する。私の場合はこんな感じに真っ黒になる。
炭治郎は?」

「くろくなったよ。」
「はは。じゃあ私たちは同じだな。」
「うん！」
にこにこと笑う炭治郎の頭を優しく撫でれば、気持ち良さげな顔をして擦り寄ってくる。
癒される笑顔にホッとしながらも、私は考え込む。
刀が届いたということは、もう、目の前に無限列車の話が近づいてきている証拠だ。
流れから行くと、多分、手が空いている私たちに無限列車攻略のための話が入ってくるだろう。
いつ頃入ってくるかはわからないけど、話がかかるまでもう少し力をつけるとしよう。
ああ、あと……ちょっとした細工を厄除の面にしないとね。
その細工ができれば、格段に魘夢戦が楽になるはずだから。
これからやることを脳裏に描きながら、炭治郎に刀の納め方と、鋼鐵塚さんから言われた刀を折るなという忠告を伝えるのだった。

無限列車と分かれ道
７６．突入、無限列車

「体調は万全のようですね。しっかりと休息を取れています。これなら問題はありません。」
「そうですか。ありがとうございます。」
二日後。
カラスを通じてある指令が耳に入った。
それは、とある列車に乗った人間が次々と消えるため、鬼が潜んでいる可能性があるという内容だった。
行方不明者は実に四十人以上……送り込んだ鬼殺隊の数名の剣士も消息を絶っているため、手の空いている鬼狩りは、柱と合流し、討伐に向かえとのこと。
原作ではその内容は煉獄さんと合流した後に聞く内容だったが、どうやらこれは変わってたようだ。
とうとう無限列車編が始まった……とかなりの不安に苛まれる。
確かに、私は痣を発現させて痣者になり、〝透き通る世界〟にも入り込むことができ

た上、それを長く維持できるようにはなった。
でも、やはりどこかで最悪な未来を考えてしまう。
もし、煉獄さんを助けることができたとしても、自分が命を落としてしまったら？
もし、原作通り煉獄さんを失ってしまったら？
もし、猗窩座が本気を出して、私と煉獄さんの両方が命を落としてしまったら？
……私というイレギュラーが原因で、それに誘発されたかのようにこれらの未来が発生する可能性は存在している。
むしろ、逆に発生しやすくなっている可能性だって否めない。
そのイレギュラーがいい方に転べば、未来も多少明るいだろう。
でも、悪い方に転ぶ可能性がそれなりに存在しているとなると……暗いことしか考えられない。
本当に私は煉獄さんを助けることができるのか？
わからない……わからないよ……。
「……さん……ひ……さん……優緋さん？」
「！」
無言で考え込んでいたら、しのぶさんが声をかけてきた。
私はそれにハッとする。

彼女はこちらに心配そうな目を向けて、首を傾げながら見つめてきていた。
「どうしました？　急にボーッとされてましたが……。やっぱり、熱が原因なのでは？　今の優緋さんの温度は三十九もありますから。優緋さんは大丈夫だと言ってましたが、本来ならば動くのも辛い温度なんですよ？　やはり、今回の任務には向かわない方がいいのでは……。」
「……大丈夫です。体調には何の変化もありません。むしろ、今の方が調子がいいんですよ。体も羽が生えたかのような軽さがありますから、問題はないんです。」
「ですが……」
「大丈夫です。大丈夫、だから……行かせてください、今回の任務に。」
「……わかりました……。ですが、無理はしないで……必ず帰ってきてください。必ず生きて、戻ってきてください。もう、大切な人を失いたくありませんから。」
悲しそうに、寂しそうに、懇願するように言葉を紡ぐしのぶに小さく微笑みかける。
自分より体が小さな彼女の頭を撫でたくなったが、年上である彼女の、先輩である彼女の頭を撫でるのは失礼だと思い、その衝動をグッと抑える。
「お世話になりました。他の皆さんにも挨拶を済ませ次第、指令に向かいます。」
そして、小さく笑いながらしのぶさんに挨拶をして、診察のための部屋を出る。
彼女から不安の匂いは消えなかったけど。

「あ。」
「ん？　ゲッ……」
　廊下を歩いていたら目の前に玄弥が現れた。
　彼は私の顔を見るなり、ゲッという言葉と共に嫌悪の表情をした。
「ひどいな顔を見合わせた瞬間ゲッなんて。」
「何でいるんだよお前……」
「そりゃ治療を受けてましたから。那田蜘蛛山での任務終えた後過労でぶっ倒れてね……しばらく指令受けんの禁止ってされたんだよ。」
「……過労でぶっ倒れるって何やってんだ。」
「無傷で鬼狩ってたから仕方ない。」
「マジか……。」
　玄弥の質問に素直に答えれば、引きつった笑みを返された。
　無傷で鬼狩るのやっぱり変なのか？
　いや、つい最近なった奴が無傷討伐をしてるからこれは当たり前の反応か。
「あれから女の子殴ってないよな？」
「してねぇって……掘り返すな……。あの時は、その、本当に焦ってて、周りが見えてなかった……。まぁ、今でも焦りはあるんだけどな……。」

……おや。

随分と落ち着いて会話をしてくれた。

私が気づいて声を漏らしたのも関係あんのかね。

まぁいいや。

「ふぅん……。まぁ、何に焦ってんのかはわからないけど、焦り過ぎたら逆に空回りして、悪い方に悪い方に転がることがある。そこら辺よく考えないと、自分の目的って果たせないと思うよ？」

「！」

玄弥の焦りの理由……それはきっと、早く柱になって、兄である不死川さんに会って過去の謝罪をしたいという奴だろう。

でも、柱になるには鬼を五十体以上倒すことと、十二鬼月の下弦でもいいから一体でも己の力で倒さなくてはならない。

しかし、そのために必要である全集中の呼吸が使えないというデメリットを抱えてしまっており、焦りは加速している。

「私にもさ。ある一つの目的があるんだけど、そのために身に付けなくてはならないものがいくつもあったんだ。つい最近まで、その必要なものがなかなか身に付かなくて焦ってた。でも、その焦りのままに必要なものを身につけるための鍛錬を行っても、な

かなか出来なくて、ただひたすらに苦しかった。だから、まずは一旦冷静になって、一歩ずつやれることを時間がかかってもいいからやることにしてみた。すると、今まで苦しかった鍛錬が格段に楽になったんだ。まぁ、簡潔に言うなら〝塵も積もれば山となる〟ってところかね。塵程度の小さなものも重ねていけば山のように大きくなる。と、いうことで。今は高い目標ではなく、まずはこれを、次はこれを、って感じに、目標難易度を下げて、コツコツとやってみることも試してみたらどうかな？」

焦りこそ最大の敵であることを玄弥に伝えて、私が今までやってきた方法を試してみたらどうかとアドバイスする。

余計なお世話だったかもしれないが、別の方法を提示した方が、今の玄弥の焦りを少しくらい和らげることができると思って。

「……焦り過ぎも良くない……か。……ありがと。少しだけ気持ちが楽になった。」

「どういたしまして。」

予想は大当たりだった。

私の指摘を聞いた玄弥から、先程までしていた焦りの匂いが無くなった。

そのことに少しだけホッとして、口元に小さく笑みを浮かべる。

が、不意に私は、そういえば玄弥の名前を本人から教えてもらってないことを思い出す。

原作知識で知っていたけど、呼ぶためには自己紹介が必要だ。
「そういや、あんたの名前を聞いてなかったな。私は竈門　優緋。そっちは？」
「不死川　玄弥だ。……確かに、まともな自己紹介はしてなかったな。」
「そうか。玄弥って言うんだな。私のことは優緋って呼んでくれ。もしかしたら、任務で一緒になることがあるかもしれないし、これで多少は連携が取れるようになったな。」
「……ああ。」
互いに互いの自己紹介を行ったことで、少しだけ距離が近くなったんじゃないかなと思いながら、笑顔を見せれば、玄弥はポリポリと自身の頬を掻く。
ちょっとだけ照れているように見えたのは気のせいだろうか？
「と、私今から指令に行かなきゃならないんだった。呼び止めて悪かったな玄弥。そっちもしのぶさんに用事があったからここにいたんだろ？」
「そうだな。俺は、呼吸が使えない代わりに特殊な戦い方をするんだが、本来ならばあまりしない方がいいもので、何が起こるかわからないって呼び出されたんだ。……指令、頑張れよ。」
「ああ。生きてたらまた会おう。」
そんなことを考えながら、私は玄弥と挨拶を交わす。
玄弥はおー、と間延びした返事を返したのち、しのぶさんがいる部屋の方へと足を運

んでいった。
それを確認した私は、アオイたちに挨拶をするべく蝶屋敷の中を歩いていく。
さて……無限列車編……いい方に転ぶのか、悪い方に転ぶのか……。
どうか悪い方に行かないでくれと、願いながら移動する。
さぁ、新たな物語を始めよう。

７７．カナヲの人生はカナヲだけのものなんだ。

玄弥と別れてしばらく経った頃。
アオイに挨拶を済ませた私は、一人庭の方へと歩いていた。
「お。見つけた。」
向かった先はカナヲの元。
彼女は自室の縁側に座って、一人庭を眺めていた。
「こんにちは、カナヲ。」
「！」
話しかければカナヲは一瞬目を丸くして私を見てきた。
そんな彼女に微笑みながら、私はゆっくり歩み寄る。
「次の指令が入ったから、もうすぐ私たちは出発するんだ。だからその前に挨拶をと思ってね。いろいろと世話になったよ、ありがとう。」
「……。」
いつもの調子で話しかけると、カナヲはニコッと笑顔を見せる。
けど、それ以外はなんのアクションも見せず、ひたすらにニコニコと笑っていた。

「……カナヲってさ。あんまり自分から話さないよな。どうしてだ？」
「……。」
私の指摘にカナヲが目を丸くする。
しかし、すぐに考え込むような様子を見せた後、服から一枚のコインを取り出し、それを上空へと指で弾き飛ばした。
ピンッという音を立てながら空へと飛んでいったコインはくるくると何回か回転し、カナヲの元に落下する。
カナヲは落下したコインを手でキャッチして、そっと片手を退けた。
そこには裏という文字が記された面が上を向いているコインがあった。
「……指示されてないことは、これを投げて決めてるの。」
どうやら、裏になればこちらの質問に答えるという条件でコインを弾いたらしい。
しかし、それ以外は話すつもりないのか黙り込んでしまう。
その姿にうーん……と考え込む。
この子にも理由があるのは知識で知っているが、自分の行動をほとんどコインに決めてもらうというのはいかがなものか……。
「うーん……自分で決めたいとは思わない感じか？　自分自身はどうしたいかとかは無い感じ？」

どうしたものかと考えながら、自分のやりたいと思うことはないのかと問う。
「どうでもいいの。全部どうでもいいから自分で決められないの。」
カナヲはすぐにどうでもいいから自分では決められないのだと答えてきた。
何も知らなかったらそうなのかとなりそうなくらいざっくりと。
でも、私は彼女にもちゃんとした意志があることを知っている。
彼女が鬼殺隊に入った際に、しっかりとそれがあったことを。
「なるほど、よくわかった。カナヲは心の声が小さいんだな。」
紡いだ言葉は、炭治郎と同じ言葉。
しかし、これは私が彼の立場にいるからと口にした言葉じゃない。
彼女にもしっかりとした意志があることを知ってるからこそ、自分の意志で動いて欲しいからである。
「じゃあこうしよう。カナヲ。それちょっと貸してくれるか？」
「え、うん……あっ……」
かなりの戸惑いを見せるカナヲが頷いたことを確認した私は、カナヲの手からコインを取り、庭に出てそれを親指の上に乗せる。
「今から私がこれを投げる。そうだな……よし、表にしようか。表が出たら、これからカナヲは自分の心の声をよく聞いて、自分の心のままに生きるんだ。裏が出たなら今まで

通りに。」

そして、彼女に笑いかけながら、親指でコインを弾き飛ばす。

「おっと……ちょっと力いっぱいに弾きすぎた。高く飛んだな～……。」

思った以上に高く飛んでしまった。

陽の光のせいで小さいコインが見えにくい。

けど、まぁ、キャッチできないわけではない。

「ほっ」

目視することができたコインをキャッチする。

力強く手を叩き過ぎてちょっと痛い。

「うっし。取ることができた。さてさて結果はなんじゃろなっと。」

「……。」

痛みに軽く苦笑いをしながら、手の甲にあるコインがどちらを向いているのかを確かめるために、押さえていた手を退かす。

カナヲが息を呑んだ。

彼女もどちらが上を向いているのか気になるようだ。

「……結果は表だな。」

「……。」

カナヲが目を丸くして私を見つめてきた。

信じられないといった感じなのかもしれない。

「カナヲ。貸してくれてありがとさん。そして、今日から心のままに生きていこう。カナヲの人生はカナヲだけのものなんだ。何もかもこれに決めてもらう生なんて、いずれつまんなくなると思うよ。ああ、もちろん、指令に従って行動するのも有りだ。それは否定しない。でも、悔いなく最高な人生を生きるためには、自分の意志も必要さ。だから、少しずつ自分の意志で歩んでみようよ。わからなくなったら私も協力するからさ。」

ね？と笑顔を見せてみれば、カナヲから驚いた匂いがした。

「今までそれで物事を決めていたならすぐに大きなことを自分の意志で動いてこなすことは難しいだろうから、まずは小さなことから自分の意志で始めてみよう。そうすればいずれ大きなことも自分の意志でこなせるようになるくらい、心の声が大きくなるはずだからさ。もし、非番が重なったりしたら、一緒に街まで遊びに行ってみようよ。楽しいことを自分の意志でこなせるようになると、きっと最高の人生になる。じゃあな、カナヲ。生きていたらまた会おう。」

そんなカナヲにまずは自分の意志で小さいことから始めてみて、徐々に心の声を大きくしていき、最終的には大きなことをこなせるようになろうと伝える。

そして、カナヲに背中を向けた私は、蝶屋敷の正門の方へと足を進める。

「待って！」
「ん？」
するとカナヲから引き止める声がかけられた。
振り返ってみると、彼女はどことなく困惑と疑問が混ざった表情をしながら私を見つめていた。
「な、何で表を出せたの……？」
紡がれたのは、どうしてコインの表を出せたのかという疑問だった。
「……小細工してると思ったのなら否定するよ。あんな高さまで飛んじゃったら、そんなもんできやしないし、手を退ける時はカナヲを見ていたから奇術師じゃない私は何もできない。全てただの偶然さ。まぁ、どっちみち裏が出たら表になるまで投げ続けていたよ。だって、カナヲには自分の意志で動くという楽しさも少しくらい経験して欲しかったからね。」
私はすぐに笑いながら、小細工なんてしてないとカナヲに伝える。
カナヲは呆気に取られたような表情をしながら私のことを見つめていた。
「じゃあね、カナヲ。お元気で。」
そんな彼女に私は小さな笑みを向けて、挨拶をした後外に出る。
次のステージはもう目の前だ。

７８．合流、炎柱!

「オイ優緋!!　何だあの生き物は!?」

蝶屋敷から離れて街の方に出てきた私たち鬼殺隊。

無限列車に乗るための駅にたどり着いた頃、伊之助が大声で話しかけてきた。

彼の視線の先にあるのは乗客が次々と乗っていく大きな汽車。

おそらく猪頭の下では目をキラキラと輝かしているであろう伊之助を想像しながら口を開く。

「ああ。あれは汽車って言ってな。人を乗せて遠くまで運んでくれる運び屋だよ。別に話したり鳴いたりしないし、人を襲ったりしないから、伊之助、攻撃すんじゃないよ。攻撃したら汽車は乗せてくれないし、どこか知らないところに置いていかれるから。ああ、大声出すのも禁止だからな。もし騒いだりしたらまた金的喰らわせるからそのつもりで。」

汽車のことを伊之助に伝えて、騒いだりしたらわかってるな?と脅し文句を口ずさめば、彼はビシッと石のように固まる。

しかし、少ししたら自身の股間を両手で押さえて、首がもげるんじゃないかって勢い

で頷き返してきた。

いやぁ……女の身って楽だねぇ……。

平然と金的かますからって口にすることができるし、実行することも可能だから。

男を大人しくさせるのが楽だ。

「優緋ちゃんって容赦ないよな……。金的っつー一撃必殺を平然とかますんだから。」

「だって男の弱点じゃん。動き封じるのに楽なんだよこれ。まぁ、無差別に金的はしないけどな。ただ、ちょーっと大人しくしてもらいたい時とか？　きつーいお灸を据える時には遠慮なくかますよ。」

善逸から引いた様子でツッコミをいれられたが、金的程便利な男の抑制方法はないだろと笑顔で返す。

怖って言葉が聞こえてきた。

ついでにそんな刺々しいところもちょっと好きとも。

「そんな呑気なこと言ってないで、さっさと切符を買うぞ。まぁ、その前に刀が目立つから背中に隠さなきゃだが。」

「なんで刀隠すんだよ。」

善逸の告白を軽くスルーして、刀を隠そうと口にすると、伊之助が不思議そうに聞いてきた。

「当然だよ。俺たち鬼殺隊は政府公認の組織じゃないんだ。刀なんてもの、堂々と持ち歩けないんだから。鬼がどうのこうの言ってもなかなか信じてもらえないし、混乱するだけだからな。」

その質問に答えたのは善逸。

彼は冷静な声音で鬼殺隊という組織は政府に認められていないということを伊之助に伝える。

「むしろ刀なんて持ってたらすぐに警察にしょっ引かれるからな。背中に隠そう。伊之助はこれを羽織ってくれ。念のために持ってきていた布。本当は羽織くらい作ってやりたかったんだが、残念ながら材料と時間がなかったから作れなかった。だからとりあえずこれをこうして……」

それに次いで刀を持っていることがバレた場合のめんどくささを私が伝えて、荷物の中から一枚の布を取り出す。

そして、布の端と端を彼の首元で綺麗に結び、マントのように羽織らせる。

「おお?!　かっけぇ!!」

「はいはい。喜んでくれて何よりですっと。ほら、刀をこれで束ねて背負いな。」

「おう、わかった!!」

どうやらマントは気に入ってくれたようで、上機嫌な伊之助を適当に褒めながら紐で

刀を束ねさせ、その背中に背負わせる。
「伊之助の扱いに慣れてるね。」
「まぁ、それなりに一緒にいるからな。ほら、切符買いに行こう。」
一部始終を見ていた善逸から感心する声が上がる。
一緒に過ごしている期間がそれなりにあるからと説明を返した私は、小さく笑いながら切符を買おうと善逸に告げた。
善逸はすぐに提案に頷き、切符売り場の方へと足を運ぶ。
伊之助を一人にするわけにもいかないから、彼のことを引き連れて、私も切符売り場へと向かうのだった。

……少しして。
切符を買った私たちは、それを持って汽車に乗車する。
見たことない景色に伊之助がうずうずしていたけど、騒ぐことはなかった。
金的するぞ発言がちゃんと効いていたらしい。
「確か、柱の人も一緒なんだよね？」
「そ。炎柱の煉獄杏寿郎さんって人がこの汽車に乗ってるらしいんだ。だから、合流して一緒に鬼退治だってさ。」

「なるほど……。で、その煉獄杏寿郎さん……って柱は優緋ちゃんわかるの?」
「うん。派手な髪色が印象的だったし、匂いも覚えてるからわかる。多分、そろそろ合流すると思うよ。だいぶ匂いが近づいてるから。」
　車両の中を善逸とゆっくりと話しながら、次の車両へと移動するためのドアに手をかけて開く。
「うまい!」
「うわ?」
「うお!?」
「ぎゃっ!?　何!?何があったの!?敵襲!?」
　その瞬間ずがんといった感じで鼓膜を突き抜ける大きな声が辺りに響いた。
　思わず驚いた声を上げてしまう。
　原作の方を知っていたから驚かないだろうと鷹を括っていたが、そうでもなかったらしい……。
「うまい!　うまい!　うまい!」
「……。」
　……めちゃくちゃうまいうまい言ってる。
　同じ車両の人もおっかなびっくりで固まってる。

中にはドン引きしてる人もいる。
「うまい！　うまい！　うまい！」
なのに煉獄さんは気にしてないのか、それとも周りが見えていないのか……ひたすらに駅弁を食べ続けながら、大きな声でうまいの連呼。
柱なのかと疑いたくなる気持ちもわからなくもない。
「ねえ、優緋ちゃん。」
「何だ善逸。」
「本当にあの人が炎柱？　ただの食いしん坊じゃなくて？」
「……言いたいことはわからなくもないが、彼が炎柱の煉獄杏寿郎さんだよ。」
苦笑いをこぼしながら煉獄さんで間違いないことを伝えると、マジで？といった表情を返される。
これが現実なんだから、私を見るんじゃない。
「あの、すみません、煉獄さん……」
「うまい!!」
「いや、それはもうわかった……つか飯食いながら話すんじゃない!!」
口の中に入ってるもんが飛んできたらどうすんだこの野郎!!

７９．炎柱の一閃

「まさか今回の任務で君と一緒になるとはな！　しかし、君程の実力者が共に任務へ出るというのは心強い！　なにせ君は下弦とはいえ、十二鬼月を一人で！　さらには無傷で倒したのだからな！」

「あまり期待はされない方が……。確かに私は下弦を倒しましたが、まだまだひよっこには変わりません。ただ、足手まといにならないことだけは約束します。」

駅弁を何箱も完食したことにより腹が膨れたらしい煉獄さん。

空の弁当箱を片付けるスタッフの方々がわたわたとする中、彼は私を隣に座らせ、此度の任務に同行する私に心強いと行ってくる。

累を倒すことができたのは、この物語の知識を持っており、どうやれば勝てるかを理解していたから無傷で勝利ができたわけであり、ちょっとしたチートを使ってるに過ぎないため、足手まといにだけはならないように気をつけると私は彼に伝えた。

「謙虚だな！　それもよし！　だが、君は自信を持ってもいいぞ！　偶然だけで無傷の勝利というのは柱であっても難しい！　ゆえに、その勝利は確かな君の実力により手にしたものなんだ！　」

すると煉獄さんは私が勝てたのはちゃんとした実力があってこそだとキッパリと言い切ってきた。

いや、まぁ……確かに実力面もありましたけどね？

日の呼吸の習得とか、知識だけでどうにかなるもんじゃないし。

でもさ、無傷の勝利ができたのは本当に知識があったから攻撃範囲とか先回りで知っていたかなんだよ。

つまりは強くてニューゲームに近いわけ。

だから完全に実力とは言い難いと言いますか……うーん……。

「それでもなお実力に自信がないと言うのであれば、俺の継子になるといい！　面倒を見てやろう！」

「え？」

素直に喜べないんだよなぁ……なんて考え込んでいたら、実力に未だ不安があるなら炎の呼吸の継子になればいいと言ってきた。

やっぱりそこに行き着くの？

疑問を抱きながら煉獄さんに目を向けるが、彼の視線はどこへやら。

私のことなんかちっとも見ずに、前を見つめて話してる。

「炎の呼吸は歴史が古い！　炎と水の剣士はどの時代でも必ず柱に入っていた。炎・水・

風・岩・雷が基本の呼吸だ。他の呼吸はそれらから枝分かれしてできたもの。霞は風から派生している!!」

……なんか、聞いてもないことを口走り始めた。

呼吸の歴史は知ってるから。

つか、基本の呼吸が何から派生してるのかも知ってるから。

むしろその派生元である全ての呼吸の元祖である日の呼吸使ってるから……。

なんて言いたくなったけど、グッと堪えて黙り込む。

「溝口少女！　君の刀は何色だ！」

「いや溝口って誰だよ知らない人だよ。私の苗字じゃないんだけど。刀の色は黒ですよ。」

大声でこの場に存在していない苗字を口にしながら煉獄さんが刀の色を聞いてきた。

崩れた荒っぽい口調でツッコミを入れたのは仕方ない。

全く……本当最初のうちはちょっとしたギャグ要因だな……。

実際は超絶イケメンのお兄さんであることを知ってるけど、最初漫画を見ていた時は、なんなんだこの人って思ったよ。

「黒刀か！　それはきついな！」

ツッコミどころ満載だなと考えながら話に応じていると、黒刀はきついと言ってき

た。
「きつい？」
「うむ！　黒刀の剣士が柱になったのを見たことがない！　さらにはどの系統を極めればいいのかもわからないと聞く！」
……まぁ、黒刀はあれだからね。
日の呼吸適性を持ち合わせている人が手にする奴だからね。
日の呼吸　キケン　排除する……的な状態になった無惨と黒死牟に片っ端から片付けられて、根絶やしにされちゃった呼吸だからね。
知らないのも当然と言いますか……竈門家に伝わっていたこと自体が奇跡だったり。
「俺の所で鍛えてあげよう！　もう安心だ！」
「はは……まぁ、検討します……。」
面倒見いいけどやっぱうるせぇ……と苦笑いをしながら目を逸らす。
逸らした先の窓から見える景色は次々と流れ始めていた。
「うおおお!!　すげぇすげぇ速ぇえぇ!!」
「ん？」
動き出したんだと思いながら車窓を眺めていると、伊之助の声が聞こえてきた。
「危ない馬鹿この!!」

「俺外に出て走るから!!　どっちが速いか競争する!!」
「馬鹿にも程があるだろ!!」
　声の方に目を向けてみれば、伊之助が車窓を開けて、そこから乗り出していた。
　善逸が何とか抑えてるみたいだが……。
「伊之助……見たことないもんに興奮すんのもわからなくもないが時と場合を考えろ。小さい子供じゃないんだから。感動を表現したいんなら、降りた後にしろ。この場にいるのは私らだけじゃない。遠くに行く多くの人が乗ってんだ。多少の会話は仕方ないが、大騒ぎすんな。やかましいったらありゃしない。」
　こうまで騒がしいと同行してるこちら側が恥ずかしくなってくると考えながら、私は伊之助に注意の言葉をかける。
　足をぷらぷらと揺らして、処す？処す？処される？という若干の威嚇行動を見せながら。
「……ゴメンナサイ……。」
　私の足ブラブラが何を意味しているものか察したらしい伊之助は縮こまりながら謝罪を口にして、大人しく席に座り直す。
「む？　何か暗に伝えているように見えたが……」
「気のせいです。そんなことより、カラスから聞いたんですが、この汽車に乗った人……

凡そ四十人以上の乗客が行方不明となり、送り込んだ鬼殺隊の数人の剣士も消息を絶ったと聞いていますが……」

一瞬、煉獄さんから疑問の声があがったが、私は気のせいだと答えることを拒絶した後、この汽車で最近起こってる行方不明事件の話を口にする。

「うむ！　かなり短期間のうちに起こっていてな。十二鬼月が汽車内に潜伏しているのではとのことだ！　だから柱である俺が送り込まれた！」

煉獄さんはすぐに私の話題に乗っかっては、此度の行方不明事件は十二鬼月が引き起こしている可能性をがあるため自分が送り込まれたのだと理由を伝えてくる。

「え!?　鬼がいることは知ってたけど十二鬼月!?　十二鬼月ってあれじゃん!!　超ヤバい鬼って言われてる奴じゃん!!　嫌ァーーーーーーッ!!　俺降りるぅーーーーーッ!!」

「善逸うるさい。もう汽車はかなりの速さで走ってるんだから降りれるわけないだろ。」

「俺優緋ちゃんみたいに強くないんだよ!!　絶対死ぬよそれ!!　死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!!　女の子と結婚する前に死んじゃうよぉ!!」

煉獄さんの爆弾発言を聞いた善逸が一気に取り乱し始めた。

まぁ、十二鬼月なんかとぶち当たるとは思わなかったんだから当分だろう。

この世界の善逸は、女でありながら仕事をこなす私にカッコつけるためか、怖がりな

がらも鬼殺隊として頑張っているが、流石に十二鬼月クラスの大物に対しては逃げ腰になってしまうらしい。

でもな……降りると言っても汽車は次の駅に着くまでノンストップで走り続ける乗り物なんだから降りれるわけがない。

「切符……拝見……致します……」

騒ぐ善逸を眺めながら考え込んでいると、覇気も生気もあまり感じない声音でこの車両の客に声をかける車掌さんの声が聞こえてきた。

声の方を見れば、その車掌は次々と客から切符を受け取り、確認した際につける鋏痕を刻み、切符を客に返していた。

「……。」

この無限列車編の中ボスというか、メインボスである十二鬼月……下弦の壱たる魘夢は、切符のインクに自分の血を混ぜることにより、遠隔で眠らせる血鬼術をかけるという特徴がある。

インクの匂いを嗅いだら発動するのか、それとも切符を切るという条件が揃えば発動するのかまではついぞ明かされることはなかったが……さて……。

多分、防ごうと思えば防ぐことができるのかもしれない。

けど、ここで防いでいいものか……。

確かに、防げば魘夢討伐まで短時間で終わらせることができるだろう。
だが、そこまで大きく変えてもいいのか……。
それに、原作では炭治郎の無意識領域に入った少年か青年かわからないけど、一人の男性が救われていた。
……ふむ……これは一応、猗窩座との邂逅と戦闘手前までは流れに任せた方がいいかもしれない。
大きな破綻をギリギリまで起こさせないためにも。
どうせ煉獄さんを助ければ物語は一気に変わる。
でも、あの分岐点まで行くまでは、大きな行動は起こさない方がまだ安心できる。
いずれ来る決戦の時、猗窩座の能力を違和感なく周りに教えるためにも。
「切符を……」
「うむ！　溝口少女！　君のも貸しなさい。」
「だから私は竈門ですって。」
そこまで考えた私は、煉獄さんにツッコミを入れながらも自身の切符を手渡す。
彼は私の手元から切符を受け取った後車掌さんに手渡した。
彼にならって伊之助も切符を車掌に渡す。
善逸は未だにギャーギャー騒いで泣いているけど、ちゃんと切符を渡していた。

（泣きべそかいてても渡すものは渡すんだな……）

その姿に若干苦笑い。

泣いてもわずかな理性でやることはやるらしい……。

パチン、パチンという無機質な音が辺りに響く。

その際魘夢の匂いらしき嫌な匂いが鼻につくが、気付かないフリをして視線をそらした。

「……拝見しました……。」

元気のない声と悲しみの匂い。

そういえばこの人は大切な家族を失ったことが原因で、今の状態になったんだったか……原作知識を思い出しながら、黙って彼を見つめる。

「！」

が、不意に煉獄さんが行動に移す姿が視界に入ったため、私は視線を彼に向ける。

煉獄さんは隠していたらしい刀を片手に、車掌さんを後ろ手に庇う。

「車掌さん！　危険だから下がってくれ！　火急のことゆえ、帯刀は不問いただきたい！」

焦点の合わない目をしてボーッとする車掌さんに、煉獄さんは声をかけながら、隣の車両に向かうためのドアの方へと目を向ける。

そこには巨躯を持ち合わせ、口と目が複数ある鬼の姿があった。
鬼はグルルルと唸り声をあげ、煉獄さんを見据えていた。
「その巨躯を!!　隠していたのは血鬼術か!　気配も探りづらかった!　しかし!　罪なき人に牙を剥こうならば、この煉獄の赫き炎刀がお前を骨まで焼き尽くす!!」
側から聞いたらなんとも厨二くさいセリフだ。
しかし、煉獄さんだからこそ似合うセリフは、彼の強さを十分に感じ取れるし、彼が言ってるためか、厨二病だと言う言葉は出てこない。
流石炎柱……と言っていいのかはわからないが、かっこいいので気にしない。
「グオォオオ!!」
鬼が轟く咆哮をして、煉獄さんに襲いかかろうとする。
だが、鈍足である鬼に煉獄さんが負けるはずもなく、
〝炎の呼吸　壱ノ型　不知火!〟
赤い光を放つ炎刀を構え、一瞬にして鬼に距離を詰めた煉獄さんは、その勢いのままに鬼の頸を刎ね飛ばした。
鮮血を撒き散らしながら巨躯が倒れ込み、この車両に振動をもたらす。
「……流石は炎柱の煉獄さんですね。鮮やかな手口で見惚れました。」
「そうか!　継子になるか」

「いや、それは検討するって……」
「安心するといい！立派な剣士にしてやろう！」
「だからそれは決めてないって……」
「煉獄の兄貴ィ!!　おいらを弟子にしてくだせぇ!!」
「おいどんも!!」
「もちろんだ！　みんなまとめて面倒を見てやる!!」
「煉獄の兄貴ィ!!」
「私の話を聞けよ熱血漢共!!　勝手に話決めてんじゃねぇ!!　つかなんの茶番だよこれぇ!!」
……彼の能力に素直に感動するんじゃなかった。
めんどくさい奴ら増えてんじゃん!!

８０．泡沫の夢は家族の記憶と共に

……先程とは打って変わって静かな車両の席にて、私は一人物思いにふけていた。
周りにいる人らはすでに眠りに落ちている。
隣にいる煉獄さんも、近くの席にいる善逸と伊之助も。
常中を使えても、痣を発現していない人は容赦なく眠らせる程の術なんだな、と冷静に考える。
私も眠気に襲われてはいる。
でも、その眠気は平然とした状態である程度耐えれていた。
常中はもちろん使っている。
痣も発現してる状態だ。
痣者であるか否かで血鬼術に対する耐性が違うのだと理解する。
いやぁ……本当、痣者ってなんなのかわかんないな……。
「……気配が動いてる。魘夢に加担してる人らのだな、これ。」
誰も動かない車両の中で、わずかに動く数人の気配。
私は誰の気配かを冷静に分析してから目を閉じる。

これは夢へと人を誘導するため。
そして、そこで一人の人を救うため。
とはいえ、私自身が助けると言うわけではない。
あえて夢に誘導して、夢としてプログラミングされた物語を過ごしながら、私の無意識領域の方に、助けたい人を誘導する。
まぁ、これは一つの賭けでもあったりするが……。
私は、読者としての視点が抜けていないところがある。
だから、もしかするとこの世界を第三者として、観測者として客観視することができるのではと思った。
知識と、痣と、この体に宿る私と言う存在が合わさっているために。
まぁ、所詮は可能性の一つに過ぎないため、実際のところはわからない。
だが、ゼロというわけではないと思うんだよな……。
「……少しの間、微睡むとしますか。」
ポツリと小さく呟きながら、ゆっくりと呼吸を繰り返す。
いつでも目を覚ますことができるように、なるべく常中を維持するつもりで。
……少しして私の意識はどこかに引き摺り込まれたことに気づく。

それを確認するために、ゆっくりと閉じていた目を開けてみれば、記憶として焼き付いている景色が辺りいっぱいに広がっていた。

「……竈門家の近くの山の中だなこれ。」

よく見ると格好が変わってる。

隊服と刀は見当たらず、いつも着ている桜の花が咲き誇る羽織と着物の姿だ。

「……鬼殺隊に入る前の私の姿……だな。」

意識がわずかでも覚醒していれば、隊服を身に纏ったままで過ごせていた気がするんだけど……まぁいいか。

「……私の自我はしっかりとある。夢に流されている様子もないな。」

どうやら、良い方の可能性を引き当てることができたらしい。

上手い具合に世界を客観視することが可能みたいだ。

これならなんとかなりそうだ。

「あ、優姉ちゃんおかえり!」

「炭売れた?」

そんなことを考えながら森の中を歩いていると、幼い声が二つ聞こえてくる。

そこにいたのは花子と茂の二人組。

二人で力を合わせて、大量のさつまいもを運んでいたようだ。

……つか、優姉ちゃんって呼んでんのなこの子ら。
いつも炭十郎さんの記憶ばっか見てたから知らなかったわ。
……さつまいもって確か、煉獄さんが好きな食べ物だっけ？
確か、さつまいもの味噌汁だったよな好物。
……迷惑じゃなかったら、ちょっとしたお疲れ様会みたいなの開いて作ってみるか？
この子、すごく料理ができるみたいだし、レシピも一通り持ち合わせてる。
「ああ。ただいま、花子。茂。炭ならしっかりと売れたよ。……沢山のさつまいもがあるな。今日はさつまいもの味噌汁かご飯でも作るのか？」
「うん！」
「後焼き芋も作るんだよ！」
「焼き芋か。それはいいな。体が温まる。」
「優姉ちゃん火傷すんなよ？」
「誰がするか!!」
「とか言って、いつも熱い熱い言ってるの優お姉ちゃんだよ？」
大量のさつまいもを見て煉獄さんの好物がぽっと出た私はなんだかんだ彼のファンだったのかもしれない。
そんなことを思いながら、花子と茂の二人と戯れながら家の中に入る。

「あら、おかえりなさい優緋。」
「おかえり、優姉ちゃん。」
台所に足を運んでみると料理の手伝いをしているらしい竹雄の姿と、料理の下準備中の母さんの姿があった。
炭治郎と禰豆子とはいない。
あと、父さんこと炭十郎さんの姿も。
六太はチラッと見えた部屋の中でスヤスヤと眠っていた。
ふむ……これは炭十郎さんが故人になった後の夢か。
えらくリアルだことで。
まぁ、炭十郎さんがいたら、その時点で夢だって気付かれる可能性もあるから、そこら辺はある程度操作できるって感じか……？
記憶の中にある竈門家の姿や声なんかもしっかりと再現しているし、記憶を読むこともできるのかね？
「ただいま、母さん。竹雄もただいま。」
笑顔を作って荷物を下ろし、家の中へと上がる。
……記憶の影響か特に違和感なく過ごせてる。
客観視すればここってある意味他人の家なんだが、体に染み付いている竈門優緋のお

かげで助かるな。
　変に気を遣わなくて済む。
「炭治郎と禰豆子は？」
「兄ちゃんたちなら一緒に山菜採りに行ってるよ。」
「はは、なるほど。相変わらず仲がいいんだから。前までは私にべったりだったのに。」
「今でも兄ちゃんたちは優姉ちゃんにべったりだろ。俺たちだって優姉ちゃんと遊びたいのに……。」
「あー……まぁ確かにな。特に炭治郎……。あの子はいつも家事で忙しい母さんや、炭売りで忙しい私に気を遣って下の子を見てくれてるよな。だから、頑張りすぎて疲れることがあって、たまに幼児退行する様子がある。ひょっとしたら、少しでも疲れをなくしたいから、たまに甘えたちゃんになっちゃうのかもしれないね。」
「……前から思っていたけど、たまに優姉ちゃん難しいこと言ってくるよな……。」
「はは。褒め言葉として受け取っておくよ。」
　褒めてないっつの、と拗ねる竹雄に対してケラケラと笑い返しながら、私は内心でマジかと呟く。
　元々竈門優緋という存在は難しいことを言ったり、妙にに小難しい言動をしていたようだ。

変わった子だったんだな……と軽く遠い目をした。
しかし、すぐにそれをやめて、私は庭の方に目を向ける。
（……姿は見えないが、どうやら魔夢に加担してる一人がすでに入り込んでるみたいだな。）
「優お姉ちゃん？　どうしたの？」
「うん？　いや、なんか猫がいた気がしたから見ていたんだが、気のせいだったみたいだ。」
冷静に分析しながら外を見つめていたら、花子が不思議そうに声をかけてきた。
私はすぐに小さく笑って、ウソを紡ぐ。
野良猫がいたの？白かったの？なんて猫がいた前提で考えを膨らませ始める花子。
私はそんな彼女の頭を優しく撫でる。
質問してきた花子は気持ち良さげに笑いながら、すりっと手のひらに擦り寄ってきた。

８１．泡沫の夢は露と消ゆ。溢れる涙は誰のものか

「優緋。お風呂の準備をしてくれる？　こっちがまだかかりそうなの。」
「わかったよ、母さん。」
しばらくして母さんから話しかけられた。
炊事の方が忙しいから、風呂の準備をしてほしいと。
その言葉に小さく笑い返しながら頷けば、母さんは穏やかな笑みを浮かべた。
……この暖かい家庭を無惨は壊したんだよな。
しかも、襲った理由は太陽を克服する鬼を作るためだった。
なんでここを選んだのやら……と疑問を抱いてしまう。
もしかして風の噂みたいなので、こっちの方に日の呼吸が残ってるとでも聞いたのだろうか？
それともたまたまやってきた？
……どちらもあり得そうだな。
まぁ、どちらでもないとしても、この暖かい環境をぶっ壊した上、炭治郎たちを鬼に変えた事実は変わらないし、容赦なくぶっ飛ばしますけどね。

なんて考えながら水を汲むための道具を手に取る。
原作ではここで禰豆子が入ってる箱が出てくるんだが、私はあえて夢に従っているだけであり、ちゃんとこれが記憶から作られたものであることを理解しているからか、箱が見えることはなかった。
手にした道具を持って川の方へと移動する。
そこを流れてる水を汲めば、この話しは一旦終わるはずだが……
「ん？」
そんなことを思いながら川の水を覗き込むと、妙なものが見えた。
原作のような炭治郎の本能からの警告ではない。
何か景色のようなものだった。
「……。」
不思議に思いながら、私は川の水に手を浸ける。
こんだけ雪が降っているのであれば、水は凍てつく程の冷たさを感じるはずだが、夢と気づいているせいで冷たさを感じない。
だが、何かに触れたような感触があった。
何に触れたのか首を傾げながら手を水から出してみる。
すると、そこには一枚の桜の花びらがあった。

「……なんで桜の花びらが？」

春じゃないし、桜が咲いてるはずはないのに……。

よくわからないなと思いながら、私はゆっくりとその場から立ち去る。

ああ、水はちゃんと汲んでたりする。

「……ふむ、原作の方では炭治郎が本能の声により夢と気づくが、血鬼術の方が強くてなかなか夢から抜け出せなかったよな？　でも、私は最初から夢であることに気づいている。というと、だ。炭治郎が若干覚醒したところまで自分で進めなきゃ行けないのか。」

ちょっとだけめんどくさい。

パッと行く？とかスキップしますか？的なコマンドが欲しい。

けど、これが私の選んだ道なんだよなぁ……。

「やれやれ……」

溜息を吐きながら来た道を帰る。

いったいどれくらいのタイミングで次のシーンに行くのやら……。

……なんて考えたところから少しして。

風呂の準備を行ってるうちに物語は先に進んでいたらしい。

戻ってみたら、炭治郎と禰豆子以外の竈門家が揃って食卓を囲み座っていた。

母さんから座るように促され、とりあえず食卓につけば、準備ができた人から食べるように言われた。
「優姉ちゃん、たくあんくれよー」
「だめだってば！　やめなさいよ！　何でそんなに優お姉ちゃんから食べもの取るのよ！」
「何だよ！」
「さっきおかわりしたでしょ!?」
「あー……こらこら騒ぐな。たくあんなら食べていいから落ち着けって。」
ようやくここまで進んだのかと少しだけ疲れる。
何で夢の中で疲れてんだろうね、私。
まぁ、これ鬼の血鬼術だけど。
（いや、今はそれよりあの桜だよ桜。なんで桜の花びらが夢の中に現れたんだ？　何か私に関係してるのか？）
目の前で行われている喧嘩を仲裁しながらも、私は先程の桜の花びらについて考え込む。
あれはいったい何を意味するものだったのか……。
うーん……と考えながら首を傾げていると、チリチリと赤い火の粉が発生し、瞬く間

に巨大な炎となって私の体を包み込んだ。
「おっとぉ?」
「優お姉ちゃん!?」
「どうしよう、火が!!」
　呑気な声で驚きながら、自分の体を見つめる。
　すると、先程まで着物と羽織という格好だって私の服装がみるみるうちに隊服と羽織に変わっていった。
「はは……起こし方が雑というか容赦ないねぇ、あの子。」
　苦笑いをしながら炎がおさまるのを見つめる。
　冷静な私に反して、竹雄たちは大パニックを起こしているが、これ、鬼だけを燃やす炎だから、私には効かないんだよね。
「……さて、あまり長居するのは良くないね。」
　炎が消え、二本の刀の存在も確認できた。
　泡沫の夢はこれでおしまい。
　覡夢には少しだけ感謝しよう。
　記憶だけの温もりを、短い間とはいえ直接感じさせてくれたから。
　……この子にとっての大切な宝物。

私は必ず守り抜こう。
もうすでに、この体の本来の意識は完全に私と混ざって、二度と目を覚ますことがないみたいだから。
……少しだけ、考えていたんだけどね。
ひょっとしたら、本当の意識が現れるかもしれないって。
累の時に怒鳴ったあの子が家族に再会できるんじゃないかって。
でも、あの子は出てこなかった。
ずっと私の客観視のまま。
物語を見つめる読者としての私のままだった。
命を落としてしまったこの子の家族と再会しても、涙が出てこなかった。
作られた夢に閉じ込められたな……そんな感覚しかなかったのだ。
この子の意識はどこへいってしまったのだろう？
この子の意識は何時ごろまで存在していたのだろう？
いくつかの疑問が頭をよぎる。
でも、その疑問に答えるものは誰一人として存在しておらず、私自身も答えを出せない。
「……悪いな、竹雄。花子。茂。そろそろ私たちは行かなきゃならないみたいだ。」

それなら答えは出なくていい。

消えてしまったのか、それとも眠ってしまったのか……どちらかなんてわからないけど、立場を奪ってしまった私がやることはただ一つ。

多くの人を少しでも救い、彼女が大切にしている宝物である二人の家族を元に戻してあげて、平和な世界を暮らせるように、元凶と鬼を倒すまで。

大丈夫、私は一人じゃない。

この子たちを守りたいと願い続けている、今は知覚できない彼女と一緒に戦い続ける。

君の記憶には、きっとこれからも助けられると思う。

だから、これからも記憶で助けてね、優緋。

誰に向けるでもなく……いや、強いていうならば、優緋という本来の女の子に対しての笑みを浮かべた私は、夢として現れた竈門家の家を飛び出す。

どこか彼らの見えないところで、目を覚ますための条件を満たさなくてはならないから。

「お姉ちゃん？」

「そんなに急いでどうしたんだ、姉ちゃん？」

「！」

しかし、少しだけ走って向かった先で、新たな人物に呼び止められた。
足を止めて声の方を見れば、禰豆子と炭治郎の姿があった。
二人の手元には山菜が入ったザルが握られている。
「あ、そうだ！　見て、お姉ちゃん！　今日はいっぱい山菜が採れたんだよ。お兄ちゃんと一緒に採ってたから山盛りになっちゃった。」
「でも、これならみんな腹一杯に食べることができるから、いつもはみんなに譲りっぱなしの姉ちゃんもいっぱい食べることができると思うんだ！」
「……。」
笑顔を見せながら、山菜を見せてくる炭治郎と禰豆子の姿に無言になる。
鬼がやってこなかったら、今もきっと見れていた光景だ。
夜だけしか行動が取れないなんて制限などかからず、暖かい笑顔で家を満たして……
私は私で……いや、優緋は優緋で家事とか炭売りとかしながら生活できたはずだった。
……この生活を壊してしまったのはいったい誰なんだろうな？
襲撃した無惨か？
それとも、憑依してしまった私か？
もしかしたら両方かもしれないな。
「姉ちゃんが急に飛び出して……あ、姉ちゃん!!」

考え込むように前を向いていたら、背後から声が聞こえてきた。
複数の足音も聞こえてきて、私のすぐ近くに止まる。
「優緋。大丈夫だったの？　竹雄たちが、お姉ちゃんから火が出たって聞いたけど……。それに、その格好は……？」
「……。」
……もしも、私も奪った側だというのなら、それはかなりの罪となるだろう。
でも、起こってしまった過去は変えることなどできないし、奪ってしまった事実も変えられない。
それなら……
「……守ること、戦うことを贖罪として続けよう。私にも罪があるのだとしたら。」
「優緋？」
小さな呟きを聞いた母さん……葵枝さんが不思議そうに声をかけてくる。
私は、小さく笑みを浮かべて、彼女の方を振り向いた。
「進まなくてはならないから。戻りたくても戻れないみたいだ。だから、代わりに言わせて欲しい。ありがとう、優緋（わたし）を育ててくれて。ありがとう、優緋（わたし）を愛してくれて。そしてごめんなさい。私は優緋（彼女）と一緒に、この世界を出ていきます。見方によっては置いて行くから、この言葉は間違っているのかもしれないけど、行ってきます、と言わせて

ください。大丈夫。優緋はみんなを忘れない。優緋はずっと、母さんたちを想ってます。」

上手く笑顔が作れているかはわからないけれど、精一杯の笑みを浮かべて葵枝さんと、この子の大切な家族に言葉を紡ぐ。

この子本人じゃない私が、こんなこと言うのは烏滸がましいけど、なんとなくこの子から感じ取れた気がする感情を、言葉にしなくてはいけないと思ったから。

少しだけ視界が歪んでる。

これはこの子の感情のカケラなんだろうか？

わからない……わからないけど……無意識のうちに両目に溜まる涙を止めることができなかった。

「!!　優姉ちゃん置いて行かないで!!」

「……。」

何かを察した六太が、懇願するように叫んだ。

でも、私はその声を振り切るように、その場から走り出す。

彼らの目が届かないところで、夢の中の私を目覚めるための条件として殺さなくてはならないから。

８２．竈門優緋、意識覚醒。

かなり離れた位置まで走った私は、足を止めて辺りを見渡す。
魘夢の気配は充満してるが、先程までいた人の気配が感じ取れない。
多分、私の無意識領域に足を運んだのだろう。
異物が混ざった私の無意識領域……気にならないといえばウソになるが、本人には知覚することが不可能なため、知ることは永劫にないだろう。
そんなことを思いながら、私は日輪刀に手をかけて、鞘から引き抜こうとする。
しかし、刀を抜く前に、私の手からひらひらと何かが落下した。
よく見るとそれは、先程川で拾った桜の花びらだった。
「……そういや、なんで桜の花びらがあったんだ？　まだ禰豆子たちが入る背負い箱とかなら本能の警告だと結びつけることができるけど、桜の花びら……なんか私に関係してるっけ？」
桜といえば、私が着てる羽織だけど、この羽織は昔から着ている奴だしなんの関係もないはず……。
少し気がかりな部分があるが、今はそれどころじゃないと判断して、日輪刀を抜刀し

た私は、自身の頸に刃をあてがう。
後はこれで頸を掻き斬るだけだ。
そう思いながら私は刃を勢いよく滑らせる。
痛みは感じなかった。
夢の中だからなのかはわからないが、ありがたいことだ。

……赤い血飛沫が広がる世界、それを最後の景色として、私の意識は浮上する。
目をゆっくりと開けてみると、真っ先に視界に入ったのは煉獄さんと、煉獄さんの夢に入っていたらしい女性の姿。
……女性の首を片手で締める男性の図って、実際に見るとかなり衝撃的だな。
「ムー……」
「ねえちゃん……。」
「ん?」
かなりシュールだな、と異常事態にも関わらず考えていると、炭治郎と禰豆子の声が聞こえてきた。
そちらの方に目を向けてみると、二人が眉をハの字にして見つめてきている。
「炭治郎。禰豆子。心配かけたな。悪かった。禰豆子。目を覚ます前、禰豆子の血の匂

いがしたが、どこか怪我を?」
「うー……」
「ねずこ、ねえちゃんがうなされていたから、ねえちゃんのあたまにずつきしたんだ。そしたら、ぎゃくにちがでちゃって……いまはもう、なおってるからだいじょうぶだ。そういえば、ちがでていたとき、ねずこがねえちゃんにひをつけたんだ。ちがついたところからいきおいよく!」
「……なるほど。つまり、禰豆子は血鬼術を会得していたんだな。」
とりあえず二人から状況を聞くと、先程まで発生していた状況を炭治郎が説明してくれた。
その話を聞いて、禰豆子の頭を撫でながら、血鬼術のことを口にすれば、彼女は小さく頷いた。
自分でもびっくりしてると匂いから感じ取れる。
「……やっぱり、私に繋がってたのはこの人か。」
禰豆子も信じられないと思っていたのか、と考えながらも、私は自身の背後にある席に目を向ける。
そこには未だに意識を失ってる……というより、浅い眠りに入ってるのであろう青年の姿。

間違いなく結核を患っていた彼だ。
これも賭けだったけど、上手く勝つことができたらしい。
ホッと一息つきながら、私は自身の手首にある違和感に目を向ける。
そこには焼き切れた一本の縄が。
辺りを見渡せば、煉獄さんたちにも同じ縄が繋がっている。
私のように焼き切れていないため、入り込んでいる人にもそれは繋がっていた。
「……禰豆子。少しだけ血を流すことになるが、すぐに煉獄さんたちの縄も私の縄のように焼き切ってくれ。多分、これは日輪刀で斬ったらいけないだろうから。」
「う!!」
縄の存在を確認した私は、すぐに禰豆子に指示を出す。
彼女は力強く頷いた後、自身の手の平を爪で傷つけ、滲み出た血を縄に触れさせ、そこから勢いよく炎を発生させる。
「炭治郎。私は鬼を探す。だから、禰豆子と二人で煉獄さんたちを起こしつつ待機を。もし、鬼の攻撃があった場合は、ヒノカミ神楽で応戦を。大丈夫。炭治郎は十分強くなってる。だから耐え凌ぐこともできる。わかったな?」
「うん、わかった!」
それを見届けつつ、私は炭治郎にも指示を出した。

席の下に隠している刀の一本を炭治郎に渡しながら。
私から刀を受け取った炭治郎はこちらの指示に頷いて、善逸たちを起こそうとする。
「！　炭治郎!!」
炭治郎目掛けて錐を振り下ろす女性の姿が視界に入った。
慌てて彼の名前を呼べば、炭治郎は驚きながら後方に飛ぶ。
炭治郎に対して放たれた攻撃は空を切り、炭治郎は怪我をすることがなかった。
「邪魔しないでよ!!　あんたたちが来たせいで夢を見せてもらえないじゃない!!」
怒鳴るように言葉を紡いだのは煉獄さんと繋がっていた女性。
その声に釣られたように、善逸と伊之助に繋がっていた人もゆらりと立ち上がる。
周りから感じるのは確かな敵意。
同時に悲しみや苦しみの匂いがした。
「何してんのよ!!　あんたも起きたなら加勢しなさいよ!!結核だか何だか知らないけど、ちゃんと働かないならあの人に言って夢を見せてもらえないようにするからね!!?」
女性がある一点に怒鳴りながら目を向ける。
その視線の先にいたのは、結核の青年。
「……人の弱った心につけ入る……ねぇ……。鬼らしいっちゃ鬼らしいが、なんかちょっと腹立つな。わざと術にかかった私が言えることじゃないけど。」

ボソリと呟くように言葉を紡ぎ、小さく溜息を吐く。
だが、ここで足止めを食らってやるつもりはない。
一先ず魘夢の元に向かおう。
絶望した顔が好きなあいつに、ちょっとした仕返しをするために。
「……嫌なことがあったら、現実逃避したくなるよな。私もよく夢の中だけでもいい思いをしたいって、何度も考えたことがある。だから気持ちもわからなくもない。苦しさから逃れるたいと思うのは、一つの人間の本能だからな。でも、ごめん。君らの意見は尊重できない。私は、足を止めるわけには行かないんだ。」
再び攻撃される前に、敵意を見せてくる魘夢側の人らの首に、手刀を軽く叩き込む。
敵意を向けてきていた三人は、その一撃だけで意識を失った。
「……大丈夫？」
気を失った三人をそれぞれ席に座らせた私は、こちらに繋がっていた青年な声をかける。
「……うん。大丈夫だよ。ありがとう。あの人を……倒すんだよね？　気をつけて。」
彼は穏やかな声音で気をつけてと言ってきた青年に小さく頷き返した私は、踵を返して車両を移動する。
「ああ、そうだ。もし、鬼退治終わった後会うことができたら、君が私の中で何を見たの

か聞いてもいい？」
　が、その前に一旦足を止めた私は、青年に鬼退治後の話を口にする。
　彼は小さく頷いた後、私に笑顔を見せてきた。
　その姿に私も釣られて笑う。
「……炭治郎。禰豆子。煉獄さんたちを頼んだよ。」
「うん！」
「ムー!!」
　そして、炭治郎と禰豆子にみんなのことを一旦頼んで、車両の外へと飛び出した。
　さぁ、魘夢との邂逅と行こうか！

83．下弦の壱との邂逅は、厄除の面と共に

車両から外に出た瞬間、かなりのきつい匂いを感じる。
だが、すぐに慣れた私は、汽車の屋根の上へと乗って、懐からある物を取り出す。
それは、鱗滝さんからもらった厄除の面にチリンチリンという音を立てながら揺れる鈴を取り付けた物。
少しだけ面を見つめた私は、そっとそれで顔を覆う。
「やっぱり動いてる汽車の上は風が強いな。鈴がめちゃくちゃチリチリ鳴る……まぁ、今は一旦我慢だな。」
一番は耳栓だったんだけど、残念ながら作る時間がなかった。
何回か作ってみたけど失敗した。
だから声は音で相殺することにした結果、鈴付き厄除の面である。
「！　あれぇ、起きたの？　おはよう。」
しばらく走っていると、先頭車両の方へと出ることができた。
そこには魘夢の姿があり、彼は気が抜ける程穏やかな声音で挨拶をしてきた。
まぁ、だからと言って本当に気が抜けるわけじゃないけど。

だって敵意めちゃくちゃ刺さるし。
「まだ寝てて良かったのに。せっかく良い夢を見せてやっていたでしょう？　お前の家族みんな惨殺する夢を見せることもできたんだよ？」
……見せてやっていた……ね。
まるで自分は良いことしてあげたとか、優しくしてあげたとか言ってるようだ。
喰うための下ごしらえの間違いだろうが。
どこが良いことなんだよ。
「今度は父親が生き返った夢を見せてやろうか？」
人の心に土足で踏み入りズカズカと踏み躙っていくような言葉の羅列に吐き気がする。
「人の心の中に土足で踏み入り、あまつさえめちゃくちゃにしてやろうって魂胆が見え見えだな。ふざけんのも大概にしろ。人間はお前らのおもちゃじゃないんだよ。」
刀を鞘から抜きながら吐き捨てるように人間はおもちゃなんかじゃないと告げる。
魘夢は私の姿をじっと見つめたかと思えば、急にニヤリと笑みを浮かべて、左手の甲をこちらに見せる。
〝血鬼術　強制昏倒催眠の囁き〟
魘夢が放つ血鬼術。

あれば、囁きとついているだけあり声を聞いただけで眠りに落ちてしまう。
だからこそ私は厄除の面に鈴をつけた。
思惑は当たっていた。
耳元で鈴が鳴り響く中、日の呼吸の常中を使い、魘夢との距離を詰めていけば、眠りに落ちることがなかった。
日輪刀にも鈴をつけたらもっと効果的だったかもしれない。
そんなことを思いながら走り続ける。
こちらに向けてきている魘夢の左手が口を何度も動かしているが、残念ながらその声は聞こえない。
魘夢が驚いたような表情を見せる。
あまりにも私が眠らないからか、かなり戸惑っているようだ。
まぁ、おそらく今までこんなイレギュラーは無かったんだろうし、無理もないのかもしれないな。
まぁ、今はどうでもいいか。
〝日の呼吸　壱ノ型　円舞!!〟
私がやることはただ一つ。
目の前の鬼を狩るだけだ。

ヒノカミ神楽……日の呼吸の壱ノ型を使い、私は魘夢の頸に、手にしていた刃を叩き込む。

だが、斬ったはずの手応えは殆ど無い。

まぁ、わざと眠っていたもんな。

そりゃ、ちゃんと融合は済ませてますわ。

「……あの方が、〝柱〟に加えて〝耳飾りの君〟を殺せって言った気持ち、すごくわかったよ。存在が癪に触るというか……このまま君を野放しにしたら、確実に危険だからだったんだ。だから、弱いうちに始末しろってことだったんだね。」

「……。」

炭治郎の時とは全然違う言葉を言われた。

癪に触るよりは危険だから……弱いうちに殺せ……ね。

ひょっとして私かなり弱く見られてる？

いや、わからなくもないよ？

縁壱さん程の力は今はまだ持ち合わせていないから。

だから弱いと言われてもおかしくない。

でも、それはあえて力を抑えているだけであり、実際はすぐにでも目の前の魘夢の頸を刎ねることだってできる。

あえて力を出していない理由は、余裕ぶってるその綺麗な顔を逆に青ざめさせてやるつもりだからだ。

罠にハマった理由は、優緋という一人の少女が知ってる温もりを少しだけ知りたかったのと、夢の中に入ってきた人を、少しでも楽にするため……ではあったが、わざと実力を隠すためでもあった。

他人の心につけ入って、希望の後に絶望を突きつける奴に、逆に絶望を送るために。

「ねぇ、不思議でしょう？頚を斬っても死なないんだから。絶望するでしょう？どうして死なないのか、気になるでしょう？」

「……ハッ」

「……！」

気持ち悪い肉塊の先についてる頚をゆらゆらと揺らしながら、笑みを浮かべて話しかけてくる魘夢を鼻で笑い飛ばす。

同時に厄除の面の下で自身の痣を発現させて、顔につけていたこれを外す。

「それくらいわかってるが？　だって十二鬼月の頚は異常なほどに硬いのに、お前のそれは手応えがなかった。それはつまり、その人形はすでに本体じゃ無くて、ただの抜け殻という結論が出る。」

口元に笑みを浮かべながら、今の魘夢の状態を口にすれば、魘夢は目を見開いて固

まった。
「ついでにその気色悪い肉塊の上でゆらゆら揺れて言葉を話しているのも本体じゃない。そこから割り出せる答えはただ一つ。今乗ってるこの汽車そのものが本体だろ？」
「なん……で……!!」
次々と種明かしして行けば、魘夢が顔を青くする。
今まで絶望を与えてきた側が、絶望を逆に与えられた瞬間だ。
「なかなか厄介なことをしてくれたが、所詮は搦手しかできないだけの鬼……さて、お前が人を喰らうが先か、私が頸を刎ね飛ばすのが先か……試してみるとしようか。」
そんな魘夢に言葉をかけながら、私は一旦炭治郎たちを待たせてる車両へ移動する。
一瞬、こちらの行動に焦りを見せた魘夢が映った。
「禰豆子。煉獄さんたちの切符を燃やせ。私ら三人で対処するのは無理だ。私は前方に行くから、そこの寝坊助たちをさっさと叩き起こしてくれ。炭治郎は、ヒノカミ神楽を使いながら、この車両とこの車両の後方一車両の対処をしてくれ。大丈夫。私らならやり抜ける!!」
「うん!!」
「ムー!!」
車両に戻った私は、炭治郎と禰豆子に今して欲しいことを手短に説明して、前方にあ

る車両へ向かう。

切符を燃やせばすぐに覚醒することは知っていたから、安心して背後を頼めるだろう。

とりあえず三両、今は守り抜く。

周りが合流できるまで。

８４．鬼狩りたちの目覚め。断罪せよ、心につけ入る悪鬼を

日の呼吸を使いながら、前方三両を守っていると、後方の車両から落雷のような音とかなりの揺れが発生した。
「おわ!?」
その揺れの原因が何か理解できるけど、これ程までの衝撃とは思わなかった。
バランスが軽く崩れる。
だが、すぐに体勢を立て直した私は人を襲おうとしている肉塊を斬り裂いた。
かなりの速さで煉獄さんの匂いが近づいてくる。
そろそろ合流する頃か。
「竈門少女！」
「おはようございます、寝坊助柱さん。」
「ははは！　それは掘り起こしてくれるな!!　引きこもりたくなる!!」
寝坊助という言葉に軽く恥ずかしげに顔を赤らめながら指摘するなと言ってきた煉獄さん。

その姿に小さく笑いながら、肉塊をある程度斬りつける。
「作戦は？」
「うむ！　手短に話すとこの汽車は八両編成だ！　故に、俺は後方五両を守る！　残りの三両は黄色い少年と竈門弟妹が守る！　そして君と猪頭少年は、三両の状態に注意しつつ、鬼の頚を断ち切る!!　いいな！」
「了解しました。なんとなく見当はついているので、炭治郎たちの様子に気をつけながらやってきます。絶望を蜜に楽しむ鬼に、ちょっとした贈り物をしてきますね。」
「理解が早くて助かる！　では、作戦を開始するとしよう!!」
「はい。」
手短に作戦内容を聞いた私は、彼の指示を承諾する言葉を口にする。
それを聞いた煉獄さんは、満足気に頷いた後、足に力を加えて床を蹴り飛ばした。
「はっっや……」
一瞬にしていなくなった煉獄さんの姿に思わず速いと言葉を漏らす。
だが、すぐに頭を切り替えては、辺りの肉塊を斬り裂いていく。
「ねえちゃん!!」
〝ヒノカミ神楽　日暈の龍　頭舞い!!〟
そんな中背後から炭治郎の声が聞こえてきた。

振り返ってみれば、彼は陸ノ型を使用して、辺りの肉塊を斬り裂いていた。
「流石炭治郎。しっかり教えたことができてるな。」
「うん！」
その姿を見て優しく声をかければ、炭治郎は笑顔を見せた後、再び日の呼吸を使い肉塊を斬り裂く。
「ねえちゃん、ここ、おれがやるから！」
「わかった。任せるよ、炭治郎。ああちょっとした助言だ。ヒノカミ神楽は神楽として舞っていただけあり壱から拾弐ノ型まで全て繋げることができる。まだ動きにムラがないこともないが、長時間舞えるように訓練したから炭治郎も動き続けることができるはずだ。試してみな。」
「わかった!!」
合流した炭治郎に日の呼吸の秘密を軽く教えると、彼は小さく頷いた後、壱ノ型から繋げ始める。
「一車両全体を守るのは骨が折れるが、炭治郎ならできるよ。頼んだからな、みんなのこと。」
「うん!!」
彼の声を聞くなり、近くの車窓から屋根へと移動して石炭が積まれてる前方へと走

る。

つけていた鈴を外した厄除の面を装着して、日の呼吸を使いながら、同時に透き通る世界へと入る。

「鬼の頚!!　鬼の急所ォオオオ!!」

「おっと。」

伊之助の声が聞こえてきた。

このセリフはよく知っている。

次に起こる展開も。

視界に入った伊之助が、複数の手に襲われている。

〝日の呼吸　玖ノ型　輝輝恩光!!〟

その手を全てねじれ渦と同じ攻防一体技として使える玖ノ型を使い、その肉塊を斬り裂き、伊之助の安全を確保した。

「伊之助!　鬼の頚が真下にある!　頼めるか!?」

「ああ!!」

〝獣の呼吸　弐ノ牙　切り裂き!!!〟

伊之助が繰り出した斬撃がこの車両の床を破壊して、魘夢の頚の骨を露出させる。

すぐにこれを断とう。

そう思った矢先だった。
ずるりと言う嫌な音と嫌な匂いがした。
すかさず碧羅の天ではなく灼骨炎陽を使用する。
辺りに鮮血が飛び散った。
「うお!?　キモッ!!　なんだこれキモッ!!　目玉がぎょろぎょろ大量に出てきやがった!!」
「血鬼術だな。目を合わせたら眠る感じだろ?」
「目を合わせなきゃいいんだな!!」
「そういうこと。まぁ、あんたの場合どこに目があるのかわからないから相手も合わせづらいだろうがな。」
冷静に分析を伝えながら、私は透き通る世界を使いながら刀を振るう。
無数の裂傷をつけることで、魘夢の動きを鈍らせて行く。
伊之助は襲いくる手を全て斬り払い、魘夢の回復を鈍らせる。
……不意に、伊之助の背後で揺らめく人の姿が視界に入る。
彼は錐を片手に伊之助に襲い掛かろうとしていた。
「物騒なことやろうとすんじゃないよ。」
すかさず私は錐目掛けて刀を振った。

伊之助に襲い掛かろうとした運転手の手は傷つけない。
パキンッという音が発生し、錐の先が折れる。
それに驚く運転手の首に、私は手刀を叩き込んだ。
「!?」
運転手が意識を失う。
やれやれと溜息を吐きながら、とりあえずその人を抱えた私は伊之助に目を向ける。
「伊之助！　これだけ斬った今なら狙える!!　頚を断つ!!」
「!!」
〝獣の呼吸　肆ノ牙　切細裂き!!〟
伊之助に指示を飛ばせば、彼はすぐに反応しては、床に大きな一撃を叩き込む。
それにより再び露出した魘夢の頚の骨。
思った通り、目と手を斬りまくられた魘夢の回復速度はかなり落ちているようで、修復が追いついている様子がない。
運転手を安全地帯に一旦座らせた私は、すぐに刀を握り直す。
「どうやら、私の方が先だったみたいだな、下弦の壱。」
〝日の呼吸　弐ノ型　碧羅の天!!〟
刀を両腕で握りしめ、腰を回す要領で空に円を描くように振るう。

垂直方向に強力な一撃を叩き込むそれは、かなりの威力を誇り、固い骨すらも容赦なく断ち斬る。

「ギャッ…ギャアアア!!!」

辺りに断末魔が響き渡った。

85．猗窩座との邂逅

「……やれやれ。ひどい目にあった。酔うところだったわ……。」

断末魔と共に叫びながら激しく暴れ、横転した汽車に向かって吐き捨てる。

原作では汽車の下敷きになっていた運転手は私が抱えたからそこまでひどい怪我をしていない。

一緒にいた伊之助も膨れ上がっていた肉塊のおかげでそこまで怪我していないようだ。

「ねえちゃん！」

「むー!!」

「ん？　おー……炭治郎たちか。二人も怪我はないか？」

「うん！」

「む！」

これから発生する出来事を考えて、安全地帯になるであろう場所に運転手を座らせていたら、炭治郎と禰豆子が駆け寄ってきた。

怪我の有無を聞いてみれば、どちらもないとのこと。

よかったと少し安心する。
「……他のみんな……乗客の状況は？」
「おれたちがまもったばしょはだいじょうぶ！　ぜんいつも、ねずこも、おれも、のっていたひとたちもみんないきてるよ。けがをしたひとは、いっぱいいるけど。」
「そうか。教えてくれてありがとう。炭治郎も禰豆子もよく頑張ったな。ちゃんとみんなを守ることができた。えらいえらい。」
「へへ……」
「ん～！」
炭治郎から状況を聞いた私は、ありがとうと一言伝えた後、しっかりとみんなを守ってくれた二人を褒めながら頭を撫でる。
すると二人は笑顔を見せて、軽く手のひらにすり寄ってきた。
「……他の車両のことを煉獄さんに聞いてくる。炭治郎たちは善逸と合流して休んでいてくれ。」
「ねえちゃんは？」
「ちゃんと後で合流するよ。だから先に休んでな。」
「……わかった。」
少しだけもの言いたげな目を向けられた。

しかし、すぐに炭治郎は私の指示に従って、禰豆子と手を繋ぎ歩いて行く。
「伊之助。二人のことを少しの間お願いしていいか？」
「おう。子分のお願いを聞くのがいい親分って奴だからな！　頼まれてやるよ！」
それを見送った私は、伊之助にもこの場から安全な位置に向かってもらうため、炭治郎たちをお願いするという形で移動を促す。
彼は指示されることは嫌うけど、お願いだけは必ず聞いてくれるからな。
読み通り伊之助は炭治郎たちを追ってこの場から立ち去っていった。
それを確認した私は、煉獄さんと合流する……前に、石炭が積まれていた車両に目を向ける。
そこにはすでに人型など持たない、残骸となった魘夢の姿があった。
「……どうだ。絶望を与える側だった自分が、絶望を与えられる側になった気分は。」
「!!」
至極穏やかな声音で話しかければ、目を見開く。
二百人の人質を与えられていながらも、一人も喰らうことなどできず、死という崖に突き落とされる。
アドバンテージをないものとされてしまい、散り逝くこと程、絶望を感じることはない。

「本当は、お前の力なんざ知ってたんだよ。でも、あえて罠にかかったんだ。確認したいことを確かめるために。おかげでいろいろと割り切ることができた。私は私としてこれで動ける。」

「な……にを……!!」

「夢の中であれ、この子の家族に会わせてくれてありがとさん。おかげで彼女の最後の言葉や言いたい言葉を伝えることができた。作られたものに対して言うより、本当の家族にちゃんと伝えてあげたかったが、残念ながら、それは既にできなくなっている。でも、形だけでも行ってきますと、この子の大切な人らに対する感謝を告げることができた。」

顔に笑顔を浮かべながら、魘夢の残骸にそう告げて、鞘に収めていた刀を引き抜く。

「やめ……っ……その顔で最期を……っ」

肉塊でありながら真っ青になってる様子の魘夢の残骸。

向けるならば幸せそうな顔ではなく、笑顔ではなく、怒りや憎しみを望むように懇願してくる。

「さようなら、悪夢に囚われた哀れな鬼いさん。」

だが、私はそんな懇願など気にすることなく穏やかな笑みだけを向けて刀を振るう。

「や……め……ア〝　ア〝　ア〝　ア〝!!」

最後の断末魔をあげながら、残骸はこの場から消滅した。
「……ケジメをつけさせてくれてありがとよ。」
風に吹かれていく塵に対して、冷めた目を向けてぽつりと呟く。
これが、絶望に悦楽を感じていたお前の最期に相応しいよ。
「竈門少女！」
「あ……煉獄さん。」
最期を見届けて刀を納めていると、背後から煉獄さんの声が聞こえてきた。
振り返ってみれば、無傷の彼の姿がある。
「うむ。どうやら鬼を倒せたようだな！　しかも無傷のままときたか！　感心感心！」
私の状態を見つめながら、煉獄さんがワハハと笑う。
鬼を倒したあとだというのに、随分と元気なことで……と思いながら、私は狐面を外した。
「む？　君のその痣はどうした！　此度の戦闘でできたもののようには見えないが！」
「まぁ、それは後程お話しするとして、まずは状況確認を……。乗客の皆さんは？　死傷者の数はどうですか？」
その際、私の痣について煉獄さんが言及してきたが、後程と返してはぐらかし、乗客の状況を確認する。

「おおそうだった！　共に戦った者に情報を共有しないのはよくないな！　乗客は皆無事だ！　怪我人は大勢だが命に別条はない！　君もよくやった、竈門少女！　疲れただろう？　ゆっくりと休息を……」

煉獄さんはすぐに乗客の無事を教えてくれた。

死者は誰一人として出なかったらしい。

これでようやく一つ荷が降りた。

安堵の息を小さく吐く。

だが、すぐにドォンッという大きな音が辺りに響き渡ったことにより、一瞬の安堵は霧散する。

「……休息したいのは山々ですが、どうやらそうもいかないようですよ、煉獄さん。」

「うむ。そのようだな！」

静かに休息は取れないと告げれば、同意の言葉が返ってくる。

「……まだ行けるか、竈門少女！」

「ええ。大丈夫ですよ。」

自身の刀の柄に手をかけ、まだ戦えることを煉獄さんに返せば、彼は一瞬ニコリと笑う。

しかし、すぐに真剣な表情をしては、私と同じように刀の柄に手をかけて、警戒態勢

を取った。

大きな物音がした方角に、砂埃が立ち込めている。

だが、しばらくすればそれは風に流れていき、やってきた存在の姿を明かす。

そこにいたのは十二鬼月・上弦の参……猗窩座。

８６．猗窩座の勧誘

煉獄さんに並んで日輪刀に手をかけながら、現れた鬼、上弦の参である猗窩座を真っ直ぐと見据える。

「優緋ちゃん⁉」

「今すげぇ音がしたぞ!!　なんかあったのか⁉」

「⁉　馬鹿!!　来たら駄目だ!!」

しかし、大きな物音に気づいたらしい伊之助と善逸の声に、猗窩座から二人へと視線を移す。

が、すぐに猗窩座の匂いが勢いよく近寄ってくるのに気づいたため、手にしていた刀を振るう。

二人に猗窩座の攻撃が当たる前に、彼の腕を斬り飛ばすことができた。

「うお⁉」

「え、ちょ、待って、この音……嫌ぁーーーー⁉　十二鬼月ぃーーーーーー⁉　明らかに音が違うんですけどぉ⁉」

咄嗟に猗窩座の腕を斬り飛ばした私に、善逸たちは一瞬呆気にとられた様子だった

が、すぐに状況を理解したようで、焦りを見せる。
善逸の場合は恐怖も感じる。
……しかし、まさか善逸がこの段階で目を覚ますとは思わなかった。
猗窩座の前に、無傷の私がいたからだろうか。
全く……うまい具合にできてるもんだ。
「流石だ竈門少女！」
「ありがとうございます。」
私の代わりに善逸か、と溜息を吐きたくなる中、煉獄さんから褒め言葉をもらう。
上弦の参である彼の腕を素早く斬り飛ばすのは、困難極まりないことだからだろう。
褒め言葉を素直に受け取りながら、私は猗窩座に目を向けた。
「……女でありながら一撃を止め、さらにはこの威力か。」
メキメキという音と共に腕を再生しながら猗窩座がこちらに目を向けてくる。
一瞬おたくそんな声だったの？意外と声高いな……なんて間抜けな感想が出てきたが、口にする前に黙り込む。
「女。お前の名はなんという？」
「……竈門優緋。階級はまだ下っ端の方の鬼狩りですが何か？」
「そうか、優緋というのか。」

彼の問いかけに素直に返答を返せば、彼はどことなく楽しげな笑みを浮かべては、私と煉獄さんを見据えてきた。
「……なぜ手負の者から狙うのか理解できない。」
そんな中静かに言葉を紡いだ煉獄さん。
口元には笑みを浮かべているが、声はひどく静かだった。
いつもの彼の声はひどく大きく、賑やか通り越して騒音とも取れそうな声なのに。
怪我をしている善逸たちを狙ったこと、それに対して怒っているのか軽蔑をしているのか……はたまたどちらともか。
いや、今は考える必要はない。
私は、煉獄さんと力を合わせてこの場を乗り越えるだけだ。
「話の邪魔になるかと思った。俺とお前たちの。」
お前たち……？
……待て、なんかとんでもない認定をされた気がする。
「君と俺たちが何の話をする？　初対面だが俺はすでに君が嫌いだ。」
「……申し訳ないけど、私も彼と同意見。初対面だけどあんたのこと私も嫌いだ。」
明らかに知ってる展開じゃないと思いながら、煉獄さんの意見に同意することを告げる。

「そうか。俺も弱い人間が大嫌いだ。弱者を見ると虫唾が走る。」

その言葉に私は一瞬、猗窩座の最期を思い出す。

彼のこの台詞の根底にあるのは自己嫌悪だったはず。

しかし、人間の記憶を失ってしまってる今、弱い者が嫌いという認識しかできておらず、強さだけをひたすらに求めている。

「俺と君とでは物ごとの価値基準が違うようだ。」

「その強さの物差しって何に当ててる？　肉体の強さだけにか？　だとしたら、この話はおしまいだな。多分、私の強さの物差しや価値基準は、隣の彼に寄っているから。」

そんなことを考えながら、煉獄さんと同じように、彼の価値観と自分の価値基準はどちらかと言えば違うと吐き捨てる。

確かに肉体の強さも必要だ。

一意見としては十分頷ける。

だけど、私は今の状態に至るまで、肉体の強さだけを頼りにしたわけじゃない。

記憶があったことも関係していたこと……それは否定しない。

だが、記憶だけじゃここには行きつかなかった。

何度も何度も苦しんで、修行中上手くいかない時はやっぱり無理なのかと挫折しそうにだってなった。

だけど私は諦めなかった。
全てはこのため、この時のために。
被害を最小に抑えながら、一旦この物語に区切りをつけるために。
区切りをつけた後はもっと私は迷うし苦しむだろう。
だって、最終的に目指してるものは、頂点に立つあの人だから。
そのためには精進しなくてはならない。
苦しみもがいて折れそうになって、それでも諦めず前に進むために。
この子の宝物を支えながらも歩いていくために。
それを成し遂げるためには肉体の強さだけに頼ることはできない。
精神の強さ……それも必要不可欠だ。
「そうか。では、素晴らしい提案をしよう。お前たちも鬼にならないか？」
「ならない。」
そこまで考えていたら、猗窩座が静かに言葉を紡ぐ。
私たち二人に、鬼にならないかと言ってきた。
私まで勧誘対象か……と一瞬思ったりしたが、女という存在としてではなく、剣士として見られたことに少しだけ安心する。
猗窩座の過去や最期を引っ張り出していた際に、あることを思い出したから。

それは、猗窩座という鬼は、鬼として長く生き続ける中、決して女を殺すことも喰らうこともしなかったと、童磨が言っていたことだ。

まぁ、女という認識のままだったとしても、その時はその時で対処するつもりだったし、むしろこちら側の可能性が高かったが、真っ向から挑めることがわかったから助かった。

とはいえ、鬼への勧誘は即答でお断りしたが。

「見れば解る。お前たちの強さ。お前、柱だな？　その闘気、練り上げられている。至高の領域に近い。女であり底辺だと口にした優緋がそこまで至っていることには正直驚いたが。」

……女がそこに至ってちゃおかしいのかよこの野郎。

まぁ、どっかのにんじんさんに死に際に美しいとか言われて侮辱されたと捉えたアマゾネス姐さんのようにならなくて済んだからいいか。

今ならなんとなく解る気がするから、彼女の気持ち。

確かに私は女ですけど、は？　女だからって戦っちゃいけないんですか、は？

ちょっとツラ貸してくれません？ってなりそうだったから。

何のために戦ってきたのかわからなくなるし、女だからって見逃されるとかちょっと癪に触るって感じだったし。

「……俺は炎柱、煉獄杏寿郎。」

脳内の怨敵に対して叫びながら殴った後、首に食らいつく狂戦士姐さんを浮かべていると、煉獄さんが自分の名前を猗窩座に告げる。

なんで告げたんだろって思ったけど、自分はお前なんて名前じゃないってのがあったのかね？

「俺は猗窩座。杏寿郎。優絆。なぜお前たちが至高の領域に踏み入れないのか教えてやろう。……人間だからだ。老いるからだ。死ぬからだ。鬼になろう、二人共。そうすれば百年でも二百年でも鍛錬し続けられる。強くなれる。」

自分の名前を明かした猗窩座が、至高の領域に至れない理由を口にする。

何百年も鍛錬すれば、その分強くなれるのだと。

「「……。」」

その言葉を聞いた私と煉獄さんは一瞬だけ互いの目を合わせる。

だが、すぐに小さく頷きあい、猗窩座に再び目を向けた。

「老いることも死ぬことも、人間という儚い生き物の美しさだ。」

「悠久の時じゃ輝けないものがある。終わりがあるからこそ、美しく、そして眩く輝くものがある。人間は後者の輝きを持ち合わせている生き物の一つさ。だから堪らなく愛おしくて尊いんだよ。」

「強さという物は、肉体に対してのみ使う言葉じゃない。」
「強さにもいろいろある。それが合わさることにより、成し遂げられる未来があり、結末がある。」
「彼らは弱くない。」
「ちゃんとした強さを持ち合わせてるんだよ。内側に秘めていて見えないけれど、ちゃんとした未来を歩む力を宿してる。侮辱すんのはやめてくんない？」
「何度でも言おう。君と俺たちとでは価値基準が違う。」
「俺は／私は、如何なる理由があろうとも鬼にはならない。」
煉獄さんの言葉に繋げるように言葉を紡いだ私は、彼と同時に刀を構える。
「そうか。」
交渉決裂……そう判断した猗窩座は、血鬼術を発動させる。
〝術式展開　破壊殺・羅針〟
「鬼にならないなら殺す。此度は少しばかり信条も曲げるとしよう！」
強者と認定されたことにより、彼の標的は私にも向けられた。
ならばそれを討ち果たそう。
救いたいと私が願う、熱き炎の剣士と共に。

８７．戦闘、猗窩座!死の運命を覆せ!

辺りに大きな音が轟く。
煉獄さんと猗窩座の力がぶつかりあったことにより発生した音だ。
煉獄さんが猗窩座の攻撃をいなしている。
それに合わせて私は動き、猗窩座の頚目掛けて刀を振るう。
〝日の呼吸　玖ノ型　輝輝恩光!!〟
花の呼吸の一つである〝渦桃〟と近似している回転斬り。
しかし、それはすぐに猗窩座に止められる。
だが、一人で戦っているわけではないため、すぐに煉獄さんが猗窩座に追撃を繰り出す。
猗窩座の標的が煉獄さんに向かったのを確認した私は、すぐに煉獄さんがいつでも回避できるように猗窩座に張り付き、猗窩座の攻撃を回避した煉獄さんと入れ替わるように斬りかかった。
よかった、私はちゃんと猗窩座の動きについていけている。
彼が繰り出す連撃にしっかりと対応できている。

流石にしっかりと強く刀を握りしめていなくては、一撃が重過ぎて刀が吹き飛ばされそうになるけど。

たまに一瞬の休息を挟み、多少なりとも回復した瞬間、切り返すように攻撃をする。

「今まで殺してきた柱たちに炎も優緋のような呼吸を使うものもいなかったな!!　そして俺の誘いに頷く者もいなかった!!　なぜだろうな!?　同じく武の道を極める者として理解しかねる!!　選ばれた者しか鬼にはなれないというのに!!」

煉獄さんと代わる代わる呼吸による連撃を行っていると、煉獄さんの一閃を躱した猗窩座が空中へと飛び上がる。

「素晴らしい才能を持つ者が醜く衰えてゆく!!　俺はつらい!!　耐えられない!!　死んでくれ杏寿郎!!　死んでくれ優緋!!　若く強いまま!!」

彼が放つ技は知っている。

あれは空式だ。

〝破壊殺・空式!!〟

〝肆ノ型　盛炎のうねり!!〟

〝肆ノ型　灼骨炎陽!!〟

猗窩座が放つ空式に合わせて、防御のために肆ノ型である〝灼骨炎陽〟を放つ。

煉獄さんも同じように炎の呼吸の肆ノ型である〝盛炎のうねり〟を放ったため、ガー

ド範囲も広がり負傷することはなかった。
「竈門少女!!」
「……わかりました!!」
名を呼ばれ、地面を強く蹴り上げれば、煉獄さんも同じように地面を蹴り上げ、猗窩座との距離を一気に詰める。
「この素晴らしい反応速度!!」
再び猗窩座からの連撃。
連続でぶつかるのは危険だと判断した私たちは、回避といなしを代わる代わるに行い負傷を避ける。
「この素晴らしい剣技も失われていくのだ杏寿郎!!優緋!!悲しくはないのか!!」
「だからなんだ!!」
「誰もがそうだ!!」
「人間なら!!　当然のことだ!!」
猗窩座の言葉に言い返しながら、体力の温存のために使用していなかった〝透き通る世界〟を使用する。
さっきまでは使わなくても煉獄さんと二人で連撃を組み合わせるおかげでダメージを負うことはなかったけど、乱式と、この後放たれるであろう滅式は、これを使わなく

ては防ぎきれないから。

〝破壊殺・乱式!!〟

見えた。

乱式の方がいち早く煉獄さんに届く。

どうりで原作のあのダメージなわけだ。

それなら私は、猗窩座の連撃が届く前に、それを上回る速さで猗窩座の両腕を斬り飛ばす!!

〝日の呼吸　拾ノ型　火車!!〟

〝炎の呼吸　伍ノ型　炎虎!!〟

乱式を真正面から炎虎を放って相殺する煉獄さんのダメージを最小限に抑えるために、高めに飛んで放つ火車で猗窩座の両腕を横側から斬り裂く。

猗窩座の攻撃は凄まじいので、手の中にある刀が持って行かれないように持ちうる握力全てを使って握りしめて。

……大きな爆音と共に砂煙が上がる。

確かな手応えはあった。

「……優緋。お前は今何をした?」

不意に聞こえてきた猗窩座の声。

砂煙が立ち込める中、猗窩座の方に目を向けてみると、そこには両腕を失い、炎虎によりできたのであろう裂傷をつけた状態で立っている彼の姿があった。
「一瞬だけお前から闘気が消えた。同時に与えられた一撃により、斬り飛ばされた腕の修復に時間がかかる。」
「!」
猗窩座の言葉に目を見開く。
まさかと思い刀に目を向ければ、そこには赤くなっている日輪刀。
(赫刀になってる!?)
無意識だった。
猗窩座の力に飛ばされないようにしていただけだから。
(……長時間はまだ難しいかもしれない……。でも……)
この赫刀は多分、一時的に使えるようになったもの。
握力に限界が来たら、手に力が入らなくなり、刀を一時的に持てなくなるだろう。
同時に脱力感に襲われて、また長めの休息が必要になるだろう。
だとしても、猗窩座の回復力を阻害することができるなら……。
「特に特別なことはしてないさ。なんとなく理由はわかってるが、教えるつもりもない。」

これ程いい条件なんてない!!

「煉獄さん。私は大丈夫でしたが、そちらの方は?」

「問題ない！　それより竈門少女！　その刀は!?」

「ちょっとした仕掛けがあるのですが、今はそれを説明する時間は無さそうですね。ひとまず、この上弦の頚を斬るか、日の出まで抑えて撃退しましょう。」

「……ああ。いくぞ!!」

〝透き通る世界〟に入れるようになっていてよかった。

ある程度使いこなせるようになっていてよかった。

さぁ、運命を変える戦いを始めよう。

誰一人として死なせてなるもんか!!

８８．猗窩座、撤退

二人もの強者と出会い、戦闘することに歓喜していた猗窩座。
しかし、今の彼には喜びより焦りの方が強かった。
（何なんだ、この女は……っ!!）
つい先刻までは確かに把握することができた闘気。
そのこともあり、煉獄と優緋の両方を相手することができていた。
だが、今猗窩座が感じ取れている闘気は煉獄のもののみであり、優緋のものを感じ取ることができなくなっていた。
そのためかいつの間にか背後や側面からの攻撃により傷をつけられていることがある。
（赤子であっても、わずかながらに闘気はあった……!!　なのに、なぜこの女の闘気を感じ取ることができない……!?）
自身の血鬼術により作られた羅針は正確に闘気を捉え、予測不能なできごとであっても、すぐに対応できるものだ。
強力な攻撃をしてこようが、予想外の攻撃をしてこようが取り逃すことはない。

確かに、闘気を感じ取れなくては対応することなど不可能ではあるが、その心配は一つとしてなかった。
弱くても生き物は必ず闘気を纏うために。
（傷の治りも遅い……!?）
猗窩座が焦燥する理由は他にもあった。
それは、回復阻害。
優緋に斬りつけられた場所の回復速度が異常なまでに遅いのだ。
治らないというわけではないが、時間がかかる。
先程斬り飛ばされた腕はなんとか今は生やすことができたが、ずっとチリチリと焼けるような痛みが続いていた。
猗窩座の焦りとは裏腹に、優緋と煉獄の二人は今もなお攻撃をしてくる。
狙えるならば頚を狙ってきており、いつ斬られてしまうかもわからない。
唯一の救いは、優緋が未だに頚を狙ってこないということだった。
なぜ頚を狙ってこないのか……これ程の力があれば狙ってきてもおかしくはないのに。
一瞬よぎった疑問。
それはすぐに理解できた。

煉獄の攻撃の合間を縫い攻撃してくる優緋の表情には多少の疲労が見えていた。
つまり、優緋には疲労が溜まっており、頚を斬るまでの力が残っていないということだ。
上弦の頚は、下弦の比にならない程の硬さがある。
これまでみてきた柱たちの中にはもちろん頚を狙い、的確に刃を叩き込んでくる者はいた。
だが、誰一人として刃を頚の最後まで通すことができなかった。
それ程までに鬼の頚は硬いのだ。
優緋が頚を狙わない理由も頷ける。
なぜ、頚が硬いということを知ってるのかまでは、理解できないが。
しかし、それがわかったからといって猗窩座から焦りが消えることもなかった。
理由は簡単。
煉獄だ。
優緋という剣士の献身的な支援により、目の前の煉獄という剣士は頚を斬る余力がある。
女と男の差もあるのだろうが、煉獄に攻撃をしようとしたら、いつの間にか優緋の斬撃により防がれてしまうのである。

まるで、煉獄の影のように行動する優緋が、煉獄の力を後押ししているのだ。
（分が悪すぎる……!!）
武闘家として背を見せることはできない。
だが、上手い具合に行動が噛み合っている影のような優緋と影を確かな糧として斬り込んでくる煉獄との戦闘は、あまりにも不利だった。
しかも、この二人は猗窩座の攻撃の中に遠距離から放つものがあることをすでに知ってしまっており、確実に張り付いてきては、攻撃の範囲の大きさで有利に戦ってくる。
（ここまで梃子摺るとは……!!）
苦虫を潰したような表情をする猗窩座。
この場をどうやって乗り切るべきか、なんとか彼は頭を働かせるのだった。

一方その頃。
とある屋敷の一室に、バサバサと大きな物音が響き渡る。
その部屋にいたのはひとりの少年。
彼は顔を青くして、口元を押さえていた。
湧き上がるのは底知れぬ恐怖。

凍える程の寒気。
生命線である心臓の鼓動は速くなり、煩い音を奏で続ける。
脳内に響くのは警告の声。
逃げなくてはならないという叫び声。
「ア……アア……ア〃　ア〃　……!!」
ぶわりと嫌な汗が体中から滝のように溢れ出る。
異常なまでに体は震え、少年……いや、少年の姿を持つことにより身を隠していた鬼の首魁、鬼舞辻無惨は、頭を抱え、呻き声のような声をあげる。
猗窩座の目を通して彼が見たものは、あまりにも恐ろしいものだった。
赫刀を手に持ち、独特な痣を発現させ、忌々しい焔のような音を立てながら刀を振るう髪を結ったひとりの女剣士……その姿にある人物が重なる。
それは、かつて己を追い詰めたひとりの剣士……日の呼吸を使う、忌々しく、悍ましく、化け物という言葉が相応しいと思える力を持った青年の姿。
「なぜ……だ……なぜ……お前が……お前が生きている!!」
あまりにも衝撃的で強いフラッシュバック。
それにより無惨が吐き出した言葉は、死んだはずの剣士に対してのもの。
「なぜ……!!」

逃げなくては……無惨の脳裏にはその言葉だけがよぎる。
焼きついた記憶に惑わされ、無意識の内に言葉を紡ぐ。
「鳴女……!!　私を早く戻せ鳴女……っ!!」
底冷えする恐怖のまま、配下の鬼の一人の名を呼ぶ。
その瞬間、あたりに響くのは琵琶の音。
「俊國？　すごい物音が聞こえた気がするけど……あら……？」
そんな中、ひとりの女性がやってくる。
だが、彼女が部屋に入った時にはすでに少年の姿はなく、床に散らばった本のみが残されていた。

再び場所は戻り、無限列車横転現場。
そこでは優緋と煉獄による猛攻がまだ続いていた。
猗窩座はすでに防戦のみに徹しており、二人に対する攻撃は一つもできていない。
そんな中、遠い東の空が、わずかながらに白くなり始める。
「!?」
（夜が明ける!!　ここは陽光が差す……!!　逃げなければ……逃げなければ!!）
それに気づいた猗窩座は、なんとかしてこの場から離れるため、二人の剣士が前に来

るのを見計らい、ある技を繰り出す。
〝破壊殺　脚式　冠先割!!〟
「!!」
「うわ!?」
脚が振り上げられる動作に気づいた煉獄は咄嗟に優緋の体を抱え上げ、攻撃範囲から勢いよく離脱する。
猗窩座の脚を斬ろうとしていたが空ぶってしまった優緋は驚いて声を上げた。
「っ……!!」
せめて一矢は報いたかった……一瞬そう思った猗窩座だが、優緋と煉獄を見据えながら後退し、森に入ったのち踵を返してその場から離脱した。

89．終局、無限列車。運命は覆り、未来は変わる。

「逃げられてしまったか……！　だが、深追いはしない方がいいな……！　かなり限界が近づいていた……！」

わずかな息切れを起こしながら言葉を紡ぐ煉獄さん。

あれ、斬ろうと思えば斬れたんだけどな……と思いながらも、私は彼の腕から離れる。

「む？　竈門少女！　どこに行くんだ！」

「ちょっと個人的な用があるので……」

「では俺も……」

「いや、あまり人に知られたくないので一人で済ませてきます。」

「しかし……」

「女には女の理由があるんですよっと……」

かなりフラフラになりながらも、私はある場所に近寄る。

そこには、猗窩座と戦っていた際に何回か斬り飛ばした腕のうちの一本の元。

陽光には当たっていないため、まだ塵になっていない。

「……これ程ちょうどいい機会はないからね……。原作より早く、薬が作られる

といいんだけど。」
　愈史郎が作った採血用の短刀を懐から出して、その切っ先を腕の皮膚に突き刺す。
　その瞬間、短刀は血液を吸引し、短刀に備わっている血液の保管場所へと溜まった。
「にゃー」
「……やぁ、茶々丸。珠世さんに、これ頼むよ。」
　同時にすぐ側に一匹の三毛猫が現れる。
　珠世さんの猫である茶々丸だ。
　現れた茶々丸に採血の短刀を預ければ、再び鳴いて姿を消す。
　珠世さんの元に向かうのだろう。
「優緋ちゃん!!」
「優緋!!」
　茶々丸を見送っていると、善逸と伊之助が私の名前を呼び走り寄ってきた。
「テメェどうやってあんなに強くなったんだ!?　テメェだけずるいぞ!!」
「よ〝か〝っ〝た〝ぁーーーー!!　優緋ちゃん!!　俺を守ってくれてありがとう〜〜〜〜!!」
「女に守られて恥ずかしくないのか善逸……。」
　伊之助からはどうやったんだと詰め寄られ、善逸にはギャン泣きされる。

二人の様子に苦笑いをしながらも、一旦二人には黙ってもらい、私は煉獄さんの元へと向かう。

「……煉獄さん。なんとか……生きて朝日を見ることができましたね……。」

「うむ。よもや上弦の参が出てくるとはな。今回ばかりはかなり骨が折れたものだ！……竈門少女。君がいてくれて助かったぞ！　君が一緒に戦ってくれたおかげで、俺はこうしてこの場に立っていられる！　悔しくはあるが、きっと、俺一人では猗窩座の攻撃を全て耐えきることはできなかっただろう。ありがとう！　猗窩座を取り逃してしまったことだけは残念だったが、多少なりとも疲弊していたゆえ仕方ない！　だが、上弦と遭遇して命を落とすどころか、怪我もすることなく撃退することができたのは鬼殺隊の長い歴史の中、初めてといってもおかしくはないだろう！　ならば、此度のこの争いは、我らの勝利といっても過言ではない！　いや、勝利としか言えないだろう!!」

確かに……それは言えているかも知れない。

戦国時代に呼吸を使う人間を鬼にしてみたいという無惨の知的好奇心を満たす際、たまたま縁壱さんの兄である巌勝さんに白羽の矢が当たり、手のつけられない鬼が生まれたことはあったけど、江戸の世を生きていた狛治さんこと猗窩座を鬼にした際に十二体程強い鬼を作りたいと言った無惨の言葉から考えて、少なくとも江戸辺りまでは十二鬼月は存在していなかったはずだから。

うん……それなら、初めてのことというのも強ち間違いではないな。
「そうですね……。うん……誰一人欠けなくて……よか……った……」
「竈門少女?」
視界が霞む。
ああ、思った以上に限界が来ていたみたいだ。
また意識を失ったのか……って……しのぶさんに怒られそうだな……。
右手から刀が滑り落ちる感覚。
あたりにカランと無機質な音が響き渡る。
同時に私の膝からは力が抜け、視界がハレーションを起こしたようにチカチカする。
意識は朦朧としてきて、これ以上話すのも立っているのも無理だと悟る。
フラリと体が傾き、地面が近づいてくる。
透き通る世界は使っていないのに、何もかもスローモーションに見えた。
「竈門少女!!」
だが、私の体が地面に叩きつけられる前に、私の体は逞しく温かい腕により抱き止められる。
鼓膜を揺らしたのは、私が死の運命を変えたいと願った彼の、名前を呼ぶ声。
鼻腔を擽るのは彼の匂い。

（……ああ……柱合会議で私の体を抱き止めてくれたのは…）

あの時は多くの人の匂いがあった上、すでに意識がほとんどなかったから、ちゃんと匂いを嗅ぎ取ることができなかったけど……この腕の温もりは覚えてる……。

（……煉獄さん……だったんだな。）

意識が朦朧とする中、柱合会議の時に体を抱き止めてくれた人が誰だったのか、同じように抱き止められてようやく理解する。

「竈門少女!!　竈門少女!!　しっかりしろ!!」

「すみ……ませ……予想、以上に……無理が、祟った……みたいです……。」

必死に私の名前を呼ぶ煉獄さんの顔を小さく笑いながら見上げる。

「ちょ……と……眠れば、治ると……思うので……」

そんな顔しなくても大丈夫ですよ、という言葉が喉から出る前に、私は意識を完全に手放す。

フィルターがかかったかのように、くぐもった声が最後まで聞こえていたが、次第にそれも聞こえなくなるだろう。

ただ、体が触れている温もりだけは、どれくらい経ってもなくならない。

ああ……なんとか、一区切りをつけることができたんだな……。

煉獄さんの運命は、ちゃんと覆ってくれたんだ。

これからどんなイレギュラーがやってくるかはわからない。
でも、今は一つの目的を果たすことができたことを喜ぼう。
安堵のままに笑みを浮かべ、私は最後の思考を閉じる。
次に目を開けた時、これが夢の露と消えないように願いながら。

新たな幕開けは、日常と共にやってくる
９０．これからは思い切って

不意に意識が浮上する。
それに従い目を開けてみると、お館様とあまねさんの姿が視界に入る。
「……お館……様……？」
「こんにちは、優緋。目を覚ましたみたいだね。」
静かにお館様の名前を呼ぶと彼は穏やかな笑みを浮かべながら、私に声をかけてくる。
こんにちは……？と一瞬首を傾げて、窓の外へ目を向けてみると、太陽が高々と上がっていた。
ああ、昼時だったんだ、と思いながらお館様に視線を戻す。
「……こんにちは。おはようございます。」
お館様の挨拶に返すように言葉を紡げば、お館様は小さく笑う。
「杏寿郎から聞いたよ、優緋。上弦の参と接触して戦闘になった際、頚を狙う杏寿郎のことを支えるように戦っていたそうだね。上弦の参の攻撃を何度も阻害してくれたと嬉

しそうに言っていたよ。新人隊士に守られてしまったことに、少しだけ不甲斐ないとも言っていたけど。」

「……あはは……」

新人隊士に守られて不甲斐ないという言葉に苦笑いを溢す。

それもそうだろうと思いながら。

煉獄さんは強さに固執しているわけではないけど、自身の責任に人一倍……いや、数倍は厳しい人だ。

本来ならば、柱である自身が新人や若い後輩を守らなくてはならないはずなのに、逆に守られてしまうことに悔しさや不甲斐なさを覚える可能性は高い。

やっぱりかぁ、と納得してしまう。

「杏寿郎の話から、優緋の力はとても強く高いものだと感じたよ。だからこそ、一つ疑問も出てくる。」

「疑問？」

「うん。それだけの力を持っていながら、なぜ下弦の鬼との戦いの際、すぐに下弦の鬼を斬りに行かなかったのか。……これは、ひょっとして、優緋が周りに隠そうとしている秘密に関係してるのかな？」

「！」

お館様からされた質問に、思わず私は目を見開く。
すでに盲目のはずであるその目に、まるで全てを見透かされているかのような錯覚に陥る。
「……何のことですか……？」
「驚かせてしまったね。でも、ずっと気になっていたんだ。」
お館様は言った。
ずっと、こうなることを分かっているような……そんな違和感を覚えていたと。
「……もしかして、優緋は未来を知っているのではないかな？　これからどんなことが起こるのかも、全て理解している……。私はそう思っているのだけど、どうかな？」
「……。」
お館様の指摘に思わず無言になる。
どことなく落ち着けるような……しかし、どことなく高揚するような声は変わらない。
けど、今は少しだけ薄寒く感じた。
「……私たちにも、話辛いことなのかな？」
「……。」
少しだけ思案する。

自分の境遇を明かすべきなのか、隠すべきなのか……それを判断するために。

「……信じて、もらえるかはわからないのですが…」

しかし、すぐにその思案は打ち消した。

この人の前で隠し事なんてできるはずがない。

だって、無惨がずっと渇望しているものを見抜く程の目を持つ人だ。

誤魔化したところで、すぐにウソだと見抜かれる。

だから私は一から話した。

自分は確かに竈門優緋だが、所詮は竈門優緋という人物の中に、何らかの形で入り込んでしまった存在であることを。

竈門優緋という存在になる前は、争いはあれど鬼などただの御伽噺の中の存在でしかない世界を生きる学生だったことを。

元の世界では、この世界は鬼滅の刃という題名の物語として描かれており、この世界の話は全て知っていることを。

物語では私が辿っている道のりを炭治郎が歩んでいることを。

本来ならば炭治郎は、鬼になっていないことを。

物語の中で多くの人が死んでいくことを。

重要人物であるお館様やあまねさん、煉獄さんやしのぶさん、無一郎や玄弥、蜜璃や

伊黒さん、悲鳴嶼さんなどが次々と命を落としていくことを。
今回の無限列車の話では、煉獄さんが死んでしまう結末となっており、それを覆したいと願い、日の呼吸や、痣、〝透き通る世界〟と言った必要な技術を身につけたことを。
「……そうだったんだね。」
「……信じてくださるんですか？」
「もちろん。優緋は嘘をついていないからね。でも、だからこそ疑問は深くなる。どうして、はなから動かなかったのかな？」
「……。」
再び無言になる。
言葉を返せなかったからではない。
彼の指摘は正しいものだったから。
確かに可能だった。
二百人の人を人質に取られる前に決着をつけることは。
では何故、私はその道を選んだ？
下弦の壱に絶望を返すため？
――――……違う。
確かにその感情はあった。

でも、それだったら先に叩けばいい。
それとも、炭治郎たちの力を証明するため？
――――……違う。
炭治郎たちを認めてもらいたいという気持ちは確かにあった。
でも、それは後からでも証明できるはずだ。
遊郭の争いで、二人もきっと戦うから。
無意識領域の方に、夢に入り込んでくるであろう人を誘導するため？
――――……違う。
もちろん、その気持ちは存在していた。
でも、もし、別の人が入り込んでいたら成立しない。
あまりにも無謀すぎる。
後、考えられる可能性があるとしたら……？
「……怖かったのかもしれません。」
「怖かった？」
「はい……。」
少しだけ考えた結果、最終的に行き着いたのは怖かったという答えだった。
原作では近場にいたという理由から横転場所に猗窩座が寄越されていたから、決めら

れた場所で汽車を横転させなければと考えていたのだ。
もし、早い段階で魘夢を倒した場合、多分汽車は、安全確認をするために、倒した場所での静止を余儀なくされたはず。
もし、安全確認の途中で、同じように近場の鬼を無惨が寄越してきたら？
それが猗窩座以上の鬼である童磨や黒死牟だったら？
……その場合、みんなを守るどころか、私まで死んでいたかもしれない。
炭治郎、禰豆子、善逸、伊之助、そして煉獄さんがいれば、二百人の乗客は必ず守れると考えていた。
それ程までにみんなは強いから、信じられる強さを持っていたから。
猗窩座になら対応できると思った。
炭治郎が無限城での戦いの時、痣を発現し、付け焼き刃の〝透き通る世界〟で猗窩座を抑えることができるのを知っていたから。
だから、痣、〝透き通る世界〟、闘気の隠蔽を身につけることができたならば、猗窩座の撃退はできると思った。
その読みは当たっていた。
でも、猗窩座以上の鬼である童磨や黒死牟が相手に来た場合、現段階では確実に負けていた。

だって、あまりにも戦力が少なすぎる。
童磨はしのぶさんが自らを犠牲にして毒を盛り、カナヲと伊之助が力を合わせたことにより勝利することができた。
黒死牟は、悲鳴嶼さん、不死川さん、玄弥、無一郎の四人が力を合わせることにより勝利することができた。
二人の命を引き換えにする形で。
そう考えると、痣を発現していない煉獄さんと、必要な技術はまだ完全に完成しきっていない私ではどちらも死んでいた可能性がある。
伊之助と善逸も巻き込んで戦った時を考えてみる。
けど無理だ。
今の状態では、勝利するというビジョンは見えない。
「そうだったんだね。」
改めて整理してみて、無謀でありながらも自分がこの選択をした理由を明かせば、お館様は小さく呟く。
彼からはどことなく厳しい匂いがした。
「優緋が考えていたことはわかった。でも、無謀すぎる行動をとったことは評価できない。私たち鬼殺隊は、人を守ることと鬼を倒すことが本質だからね。理由があったとは

言え、守る対象の命を危険に晒したことは感心できない。私が言いたいことはわかるかな？」

「……はい……申し訳ありません。」

彼のお咎めは最もだった。

あまりにも私の行動は浅はかで、鬼殺隊にあるまじき行動だった。

今になって、自身がやったことの大きさ、一歩間違えれば莫大な被害が出る判断に猛省する。

「……優緋が知る物語では杏寿郎は命を落としていた。しかし、杏寿郎が助かった今、この物語は一気に変わっていくのかな？」

「はい。おそらくは……」

「ということは、これからこの物語は君の物語となっていくね。綴られた物語を歩むのは終わったのだから。それなら、これからは思い切って行動を起こしてごらん。君も知らない物語が始まったのだから、もう悩む必要はない。自分のやりたいように動いても、きっとバチは当たらないはずだから。」

厳しい匂いは霧散して、穏やかな匂いと声が辺りを包む。

いつの間にか俯いていた顔をゆっくりと上げてみれば、お館様は穏やかな笑みを浮かべていた。

「……はい、わかりました。」
お館様から告げられたこれからのこと。
私は素直に頷き返し、彼と同じように口元に笑みを浮かべた。

91．決戦までに必要なこと。

「これからのことも考えて、優緋にいくつか質問がしたいのだけど、構わないかな？」
不意に、お館様からいくつか質問がしたいと告げられる。
「質問……ですか？」
首を傾げながら問い返せば、お館様は小さく頷く。
彼曰く、無惨との決戦に向けて、無惨についての情報を僅かながらに得るためと、何が必要なのかを整理するのと、痣について知っておきたいとのことだった。
「わかりました。話せることは話しましょう。」
確かにそれは必要なことだ。
そう判断した私は、小さく頷いて承諾する。
「まず、無惨が持っている能力について聞きたい。教えてくれるかい？」
「……普段は人間と変わらない姿をして、人の中に紛れ込んで隠れてます。それくらい、高度な擬態、変化能力を持ってます。次に、私が物語上で見た戦闘方法ですが、素手による強力な攻撃や、大量の口がついてる管状の肉塊を目で追うことすら難しい速さで繰り出す攻撃など、鬼として極限までに高めた身体能力によるものでした。しかも、攻撃

の中には適応することができなければ確実に命を落とす即死級の猛毒とも言える自身の血を混ぜてきます。一撃食らえば、死ぬか鬼になるかのどちらかでしょう。あとは、凄まじい吸引力がある風の渦を生じさせ、動きに制限をかけ、大振りな回避行動を誘発させることで管状の肉塊を当ててきたり、建物や地面を軽々と抉る空気弾を使ってきます。他にも、衝撃波により、損傷を与えると同時に神経の動きを狂わせ、剣士の生命線でもある呼吸を阻害する技を使ってきます。この衝撃波は恐らく血鬼術の一種で、食らった際、体に日輪刀を刺すことにより解除することができます。」

私が物語で知る限りの無惨の攻撃方法を口にする。

お館様とあまねさんは、そんな能力があったのかと目を丸くする。

だが、すぐに表情を真剣なものへと戻し、私の話を聞いていた。

「他には？」

「体の場所など関係なしに口を生成することが可能ですね。物語上では、この能力を利用することで鬼殺隊の剣士を攻撃し、同時に捕食する行動を取っていました。あとは、驚異的な回復能力……ですね。無惨は自身の肉体に心臓を七つ、そして、脳を五つ保有することによりこれを可能としています。そのため、頚を斬っても死ぬことはなく、瞬時に回復して反撃してきます。それと、追い詰められた無惨は自身の細胞を分裂させて逃走を図ったり、巨大な肉の鎧を身に纏うことで防御に徹することがあります。」

……多分、これで無惨の戦闘方法については明かすことができた……と、思う。
他にもあったかもしれないけど、重要と取れるのは今あげたものくらいのはずだ。
「無惨の能力はそれなんだね。では、次の質問だ。優緋が知る物語で、無惨との決着はついていたかい？」
「はい。最後は無惨を陽光に晒すことで終わらせることができました。」
「では、その状況に至るまで、必要なものがあれば教えてほしい。」
「必要なもの……」
自身の記憶から、無惨を追い詰めるまでに至った際、必要だったものを探し出す。
「……鬼を人間に戻す薬、老化の薬、分裂阻害、細胞破壊……この四種の薬が合わさった特殊な薬は必要でしたね。あとは、無惨の血の侵食を止めるための特殊な薬も。それと、痣を発現させることができる者も複数必要になりますし、その先の領域に行ける者も必要になると思います。」
「？　痣の発現のその先の領域……？」
「はい。〝透き通る世界〟と呼ばれる、全集中の呼吸を極めることができた者が行き着く世界です。」
不思議そうな表情をしているお館様に、〝透き通る世界〟について説明する。
この〝透き通る世界〟は、自分の父親も到達していた世界であり、〝型〟の動きを何

度も何度も繰り返し修練する中で、形を覚えた後に無駄な動きを削ぎ落とし、『正しい呼吸』と『正しい動き』で身体の中の血管一つ一つまで認識していくことにより、通常ならば困難な動作も一瞬で行なうことができるようになるということ。

最小限の動作で最大限の力を引き出すことで、頭の中も不要な思考が削がれ、だんだん透明になっていき、そうすると『透き通る世界』が見えるということ。

この修練の先で覚醒した者は他者の身体の中が透けて見える（或いは存在を感じ取れる）ようになり、それによって相手の骨格・筋肉・内臓の働きさえも手に取るように分かるようになることなどを全て。

お館様はかなり戸惑っている様子だった。

そのようなことが可能なのかと、混乱しているようだ。

「……まぁ、今は〝透き通る世界〟は後回しにしたほうがいいでしょう。流石にそこまで入れるとなると、かなり厳しいと思います。まだ、上弦の鬼は六体全ていますし、上弦以外の鬼も活発なのでちゃんとした休息も必要になると思うので。そうですね……鬼殺隊の強化を図るのであれば、今の私が言えることはただ一つ。痣の発現させるための基盤だけは早めに用意しておいた方がいいということだけです。私が痣を出すまでやっていたのは全集中の呼吸を行いながら、全身訓練、精神統一、それと、自分が使う呼吸の型の修練などを行っていただけなので鬼殺の合間を縫い、一定時間それを行え

ば、可能性は出てくると思います。時間はかなりかかると思いますが、今から始めておけば、痣を発現させることができる柱や隊士を、私が知る物語以上の人数に増やせるかと。」

それならと、今現在言えることは痣を発現させるための下準備を少しでも進めることだと伝える。

……お館様なら、痣者の代償のことも知っているだろうから、タイミングを見計らってみんなに教えてくれるはず。

「優緋。教えてくれてありがとう。その話のおかげで、長年の戦いに終止符をつけるための一歩が踏み出せた。」

「お役に立てたなら良かったです。……あの、お館様。」

「なんだい？」

一応、私がこの世界が綴られている物語の記憶の保持者であることは黙ってもらうように頼んでおこう。

「私の……記憶のことや、状態のことなのですが……」

「安心して良いよ、優緋。そのことはちゃんと黙っておくよ。明かしたらきっと、皆混乱してしまう。焦ってしまう可能性もある。だから、このことは誰にも話さない。」

「……ありがとうございます。」

どうやら、お館様とあまねさんの胸の内に秘めてくれるらしい。
そのことに安堵の息を吐く。
「長々と話してしまったね。病み上がりだったから疲れただろう？　ゆっくり休むと良い。」
「……はい。わかりました。」
お館様が穏やかな笑みを浮かべて、ベッド横の椅子からあまねさんの手を借りて立ち上がり、ゆっくりと診療室から立ち去っていく。
「そうだ。元気になった後は気をつけて。きっと、賑やかになるだろうから。」
「へ？」
去り際にお館様が紡いだ言葉に首を傾げながら、私は二人の背中を見送った。
彼が残した言葉の意味を理解したのは、翌日になってのことだった。

92. 継子への勧誘

お館様と話した翌日。

自身の痣のこともあり、一日休んだだけで体調が全快になった私は、蝶屋敷の訓練場にて、善逸と伊之助を眺めていた。

なぜかって？

善逸と伊之助が、しのぶさんたちに修練を頼んだからだよ。

どうやら、煉獄さんと一緒になって上弦の参である猗窩座と渡り合っていた私の姿を見て何かしらの火がついたのだとか。

急に時間がある時に修行をつけて欲しいと言ってきたとカナヲから聞いた。

理由に関して何だが、どうやら善逸は、ぶっ倒れるまで戦った私の姿を見て、守られた上、無理をさせてしまったと思ったらしく、私を守るにまで至らなくても、支えるように戦えるくらいには強くなって、少しでも負担を減らしたいと言っていたそうだ。

しのぶさんから聞いた。

伊之助に関しては、私に対する闘争心だった。

修行の様子を見ようと訓練所に足を運んだ瞬間、直接宣戦布告してきたよ。

〝絶対ェすぐに追いついたあと、テメェをけちょんけちょんに負かして追い抜いてやるからな！〟って。

挨拶代わりの猪突猛進な突進と一緒に。

もちろん、突進は軽々躱しておいた。

遅かったし。

「竈門少女はいるか！」

「ん？　煉獄さん？」

なんて、善逸と伊之助が修行を始めた理由をひとり物思いにふけながら回想していたら、煉獄さんの声が聞こえて来た。

「ここにいたか！　探したぞ！」

「声でかっ……じゃなくて、どうかしましたか？」

訓練所の出入口から顔をひょっこりと覗かせてみると、そこにはやはり煉獄さんの姿があった。

蝶屋敷の仕事をこなしていたなほちゃんたちが、慌てて煉獄さんの後を追ってる様子から、おそらくアポなしなんだろう。

「賑やかだと思えば、煉獄さんじゃないですか。どうしたんです？」

「ああ、竈門少女に少し用があってな！」

「声の大きさは抑えてください、煉獄さん。治療中の隊士たちも数人いるので。というか、治療所、または病院では大きな声で話すのは原則禁止ですよ。」
「すまん！　以後気をつけよう！」
「だから声が大きいです。」
……なんか、目の前で妙なコントが発生した。
気をつけようと言いながらでかい声で話してどうする。
「用とはなんでしょうか？」
まぁ、煉獄さんの声の大きさに関しては今は一旦置いといて……。
私に用事とはいったいなんなのやら……。
妙な既視感を覚えながらも、とりあえず煉獄さんに用件を聞く。
「うむ。俺の継子にならないかと誘いにきた！」
「……え……。」
「……あー……やっぱりそうなりますか。なりますよね。」
どーんと胸を張り、どこを見てるのかわからない表情で継子にならないかと誘いにきたことを告げる煉獄さん。
ひくっと引き攣った笑みを浮かべながら固まってしまう。
しのぶさんは呆れたような声音で予想してましたよと言いたげに呟く。

「此度の猗窩座との戦いの際、君が見せてくれた実力は凄まじかった！　君と共に修練を重ねれば、猗窩座にも刃が届くだろう！　そこで、君を俺の継子とし、一緒に鍛えていきたいと思うのだがどうだろうか!?　悪い話ではないと思うのだが！」
「煉獄さん、うるさいです。」
「あはは……。」
　煉獄さんの声圧に苦笑いする。
「うーん……継子……ですか……。どなたかの継子になると言うのは、まだ考えていないのですが……」
「ならば今考えてくれ！」
「あ、でしたら私も便乗してもいいですかね？　私もまだ、完全に諦めていたわけではないので。」
「いや諦めてなかったんかい……!!」
　……まだ私を継子にすることを諦めていなかったとは。
　まさかの事実にびっくりである……。
　しっかしどうしたものか……。
　しのぶさんも煉獄さんも簡単には諦めてくれなさそうな二人だが……。
　きっぱり言うべきなんだろうか……。

「……け、検討させてもらいます。」
「またそう言ってはぐらかすんですか。」
ワー……シノブサンノ刺々シイ視線ガ刺サルヨー……。
「……えっと……。」
どうしたらいいんだこれ……。
え？
選ばなきゃ駄目なわけ……？
「竈門少女！　どちらの継子になるんだ!?」
「もちろん、私の継子ですよね？」
「竈門少女の呼吸の型には、こちらに類似してるものがある！　俺は炎の方が合ってると思うのだが！」
「……。」
二人の柱にどちらの継子になるんだと問われ、思わず無言になる。
助けを求めるように善逸たちに目を向ければ、善逸は全力で首を左右に振った。
伊之助はよくわかってないのか首を傾げている。
コノヤロー……助けてくれる人は居ないのか……!!
うーん……うーん……。

どちらの継子を選べばいいんだ……？
元々誰かの継子になるつもりなかったから断りたいんだけど。
でも、ことあるごとに継子になれと言われるのもなぁ……。
むむむ……。
「……じっくり考えたいので後日じゃ駄目ですか？」
考えるだけ考えたけど、うん。
答えが全然出てこなかった。
だって継子なんて考えてなかったし！
日の呼吸極めて、柱を助けて無惨フルボッコにすることしか考えてなかったし!!
「むぅ……！　なるべく早く決めて欲しいのだが……」
「でしたらこうしましょう。優緋さんにはしばらく私と煉獄さん両方の訓練を受けてもらい、優緋さんが合ってると判断した方を選んでもらうんです。そうですね……期間は四週間。互いに二週間ずつ交代で優緋さんに訓練をつけましょう。そして、最後は優緋さんにどちらの継子になるか決めてもらう……これならどちらを選ばれても文句は出てきませんよね？」
「え？」
「うむ！　それは名案だ！」

「ちょっと？」
「では決まりですね。優緋さん。返答は後日という言質はとりました。今更やっぱり無し、などいいませんよね？」
「……ハイ……。」
後日じゃ駄目かなんて言うんじゃなかった……。
自身の発言に後悔しながら、泣きたくなるのを我慢して頷く。
もうどうにでもなれ……。

９３．私が選ぶ柱は

煉獄さんとしのぶさんに言い寄られた翌日から、二人の柱による継子お試し期間が始まった。

くじ引きの結果、前半二週は煉獄さんの元でお試しの炎の継子をすることに。

しのぶさんの悔しがる表情は、今でも記憶に焼き付いてる。

で、まぁ、今日から炎のお試し継子である。

煉獄さん曰く、体力の方は問題ないから呼吸と型を中心的にやるとのことだ。

壱ノ型　不知火。

弐ノ型　昇り炎天。

参ノ型　気炎万象。

肆ノ型　盛炎のうねり。

伍ノ型　炎虎。

女の身である私には、この五つを一旦教えるとのことだ。

陸以降は、少しだけ難しいかもしれないと彼は言っていた。

玖ノ型に至っては、今回私がぶっ倒れたこともあり、危険と判断したらしい。

元々煉獄さん自身が自分用に独自に生み出して使えるようにしたものなため、筋肉の付き方が違う私がやったら、体に負担がかかりすぎて倒れてしまうだろうと言われた。

うん、それには全くの同意である。

多分、私があれ使ったら確実にぶっ倒れると思う。

体に負担かかりすぎて。

だけど、教えないつもりではないようで、負担がかからないように調節した煉獄を場合によっては教えるとのこと。

使えるかどうかは知らないけど、まぁ、使えそうなら学ぶべきか……？

……と、それは置いといて。

この二週間で煉獄まで行き着くのは難しいだろうとのことだ。

だからとりあえず伍ノ型までは教えてくれるらしい。

……さて、ここからはちょっとしたダイジェスト。

二週間で何をしたか教えるよ。

……と言っても、ずっと炎の呼吸と型を教えてもらって打ち込み稽古して、指令が入った時は、煉獄さんと一緒に指令に赴いて炎の呼吸を使っていただけなんだけど。

そうだなぁ……言えるとしたらまぁ煉獄さんはとにかく強かったしパワーが桁違いだった。

木刀による基本稽古や、日輪刀を使った真剣による炎の呼吸の訓練をしていたんだけど、女相手にも容赦なくフルパワーで鍛錬つけてくるもんだから最初の一週間は毎回木刀も刀も吹っ飛ばされてたよ。

なんとか飛ばされないようにしても手は痺れるし、訓練にすらならなかった。

少しくらい手加減してくれてもと口にしたら鬼は手加減などしてくれない！の一点張りで、本気でやってこその鍛錬だという熱血思考。

勘弁してくれと思ったし、炎の継子、断った方がよくね？的な考えなんて何回したことか。

でもお試し期間中とはいえ、逃げ出すわけにもいかないし、ちゃんと二週間訓練したよ。

そしたらさ……煉獄さんに普通に押し返すことや、煉獄さんを少しくらい吹っ飛ばせるくらいにはなったよね。

マジかと思ったよ。

最終的には押し負けるけど。

対鬼に炎の呼吸を使用する実戦訓練も普通に熟せてた。

多分、それなりに鬼を狩っていたと思う。

日の呼吸に比べたら少しだけ体力の消費が激しかったが、極めることはおそらくだが

可能だと思う。
水の呼吸に比べたら、かなり楽だったし、申し分ない威力も出ていたから、二番目くらいに合ってるんじゃないかな。
そのせいで煉獄さんにやはり君は俺の継子になるべきだ！って騒がれたけど。
そりゃね？
炎の呼吸はどことなく日の呼吸に類似してる部分があるせいか、水の呼吸程威力を落とすことなんてなかったし、むしろ炎は意外に体にも合ってる感じだけど。
でも、師範のパワーが強すぎるというか……うーん……。
まぁ、そんな二週間だったな。
意外と炎は合ってるけど煉獄さんの訓練についていけんのかな……って考えた。
次に後半の二週間。
今度は花と蟲の呼吸だ。
過去に花の呼吸を学んだ最初の一週間のうち、四日程使って、しのぶさんは私にまずは花の呼吸を教えてくれた。
型の方はカナヲが使えるからと言う理由で、カナヲの真似をして型を体に馴染ませる感じだった。
花の呼吸の派生元である水の呼吸を（最近は使ってないが）知っていたためか、それ

とも花の呼吸の知識があるからか、型は四日で身についた。
けど、実戦に使ってみたらかなり威力落ちてんだよね。
雑魚鬼は狩れるけど、これから先ぶつかるであろう相手を考えるとな……ちょっと難しい気がしてならない。
で、その後の蟲の呼吸に関してなんだけど、毒の知識を身につけるところから入って型も覚えなくてはならないというなかなかハードな訓練になった。
そしてやはりというか体に合わない。
ここまで差が出る？ってくらい炎や水、日の呼吸に比べて使いにくさが半端なかった。
毒は便利なんだよ？
しのぶさんが自分が使用する毒について懇切丁寧に教えてくれるから、知識としてしっかり得ることができたし、どのように混ぜればこの毒になるとかも覚えることができたし。
……型は一応身につけたけどさ、やっぱ実戦には向いていない感じがした。
どうも私に水や蟲、花は合わないみたいだ。

「これで四週間経ったな！」

「そうですね。では、優緋さん。どちらの継子になるか決めてくれますか？」
「うーん……」
正直、決まったようなもんだ。
不安がないわけではないけど、どちらの呼吸が体に合ってるのかと聞かれたら間違いなく炎の方だ。
知識の関係上、一番極めているの日の呼吸だけど、サブとして使用するならば炎の方が圧倒的に強力だ。
水の呼吸は……鱗滝さんや義勇には申し訳ないけど、極められる限界が近すぎる。
だから、水の派生である花や、水の派生の派生である蟲も、極めるには少々難しいところがあるだろう。
それに比べて炎はまだ伸び代がある感じだ。
だとしたら……
「……正直、継子ってめんどくさそうだな、って思ってたんで、断りたいと考えて、はぐらかし続けていました。でも、試しに継子をやってみて、そうでもないなと思ったんで、継子を引き受けます。……私が選ぶ柱は……」
私は煉獄さんに目を向けて、彼に向かって頭を下げる。
「よろしくお願いします、煉獄さん。炎の継子、引き受けさせていただきます。」

彼の継子を引き受けることを、はっきりと伝えるために。
「……うむ！　君なら俺を選んでくれると思っていた！　これからは俺の継子としてよろしく頼む!!」
私が継子を引き受けると口にすれば、煉獄さんはどこをみてるかわからない顔で、継子になる私によろしくと告げてくる。
「はい。」
その言葉に小さく頷けば、満面の笑顔が向けられた。
煉獄さんからはすごく嬉しそうな匂いがした。
「本当に、煉獄さんでいいんですか？　彼、女にも容赦なく訓練つけてくると思うんですけど。」
しのぶさんからは少しだけ不満そうな匂いがする。
煉獄さんの性格上、女相手にも容赦なく訓練をつけることを察しているようだ。
「まぁ……不安がないといえば嘘になりますね。炎の継子お試し期間の最初の一週間はしょっちゅう刀や木刀吹っ飛ばされるわ容赦なく私自身も吹っ飛ばされるわ手にしてる刀や木刀を吹っ飛ばされないようにしたら手が痺れてしばらく動かせないわで大変でしたから。でも、二週目に入るとある程度対応できるようになって、煉獄さんを軽く吹っ飛ばす程度には力がついてましたから、行けるところまで行ってみるかと思ったの

で、炎の継子を選択します。」

「……。」

「……ってしのぶさん!!　何で引いてるんですか!?」

「いえ、すみません……まさか、煉獄さんが一回りも小さな体をした優緋さんに吹っ飛ばされるとは思わなかったので……。ですが、それだけの力があるなら、確かに私が使う蟲の呼吸や姉さんとカナヲが使う花の呼吸よりかは合ってるかもしれませんね。」

ようやく諦めがつきましたと呟くしのぶさん。

私は苦笑いを溢しながらも、彼女にすみません、と謝罪する。

しのぶさんは、気にしなくてもいいと笑っていた。

９４．炎の継子と炎柱 （一部編集）

炎柱の継子になって一ヶ月経った。

容赦なく炎の呼吸の鍛錬をつけてくる煉獄さんに、時にはかなりの難易度の指令に連れ回されたりしていたせいで、炎の呼吸もだいぶ体に馴染んできた。

筋肉のつき方や体格、骨格などの違いもあって、煉獄さんに並ぶ程の力は出せないけど、一定時間は押し切ることもできるし、煉獄さんに煉獄を使わせる域にまで達している。

流石に使われそうになった時はストップかけたけどね。

絶対無事では済まないから。

鍛錬の時にそれ使うな！って言ったら止まってくれたよ。

後、この一ヶ月で炎の呼吸を使っていても痣が発現する様になってしまった。

煉獄さんに痣が出てると言われて気が付いたんだけど、マジかって思ったよね。

痣の形は日の呼吸の時に発現する痣に似てるらしいんだけど、発現してる場所が違うらしく、左の首からあごにかけて、炎の様な痣が出てると言われた。

二つ目の呼吸でも痣を出すって、私人外の域に行ってないこれ？

大丈夫？
私の寿命、さらに縮んだりしてない？
ああ、痣に関してなんだけど、流石にここまで行くと煉獄さんに隠し通すことはできないからさ……もう痣のことだけは明かしたよね。
心拍数二百以上、体温三十九度以上。
全集中の呼吸を使うことにより意図的にその状態にすることで痣が出てくるって。
後、寿命に関しても。
それを聞いた煉獄さんは固まっていたよ。
そりゃそうか。
自分は二十五まで生きれるかわからないなんて言われたら、誰だって驚くし、ショックを受ける。
自分の継子ならなおさらね。
だからすぐに返したよ。
過去にはそれを覆した剣士がいた。
その剣士のカラクリさえわかれば、十分長生きできる可能性はあるって。
話を聞いた煉獄さんは安堵してた。
そんで、長生きできるカラクリを俺も一緒に探そうって言ってきたよ。

それはそれとして、痣の発現により強さにブーストがかかって上弦とも渡り合える様になると知った彼は、自分もそうなる様に頑張らなくてはって燃えていた。
寿命の話聞いてた？って聞いたら、今はそれどころじゃないってさ。
まずは鬼を全て滅殺すること、それを最優先にしなくては長生きできる方法を探すことに集中できないって。
〝鬼を倒せばゆっくり方法を探すこともできる！君と同じ強さを得ることができれば、鬼舞辻を早く滅殺することも可能になるはずだ！　ならば俺は迷いなく痣を発現することを選ぶだろう！　二十五までしか生きれないと言っていたが、それが本当ならば俺には五年の、優緋には八年の猶予がある！　心配する必要がどこにある！〟
自信満々にそう言った煉獄さんには笑うしかなかった。
同時に煉獄さんらしいなとも思った。
そうだよね。
煉獄さんは、原作でも責務を全うするためであれば、自身の身を盾にしてでもそれを果たす人だ。
自分の死より後輩の無事を優先する人が、自身の寿命が縮むことを深く気にするはずがない。
まぁ、周りの命はかなり気にするけど。

「そうと決まれば、鍛錬の量を増やすとするか！　優緋！　君はどのような鍛錬を積み、痣を発現したんだ？」

「特に特別なことはしてませんね。正しい呼吸をしながら全身訓練や呼吸の修練、常中維持と瞑想を繰り返していたら、気がついたら出る様になってました。」

「そうか！　となると、やはり鍛錬あるのみだな！」

「そうですね。……まぁ、煉獄さんなら痣を出すこともできると思います。結構早い段階で。焦りは禁物ですけど。私も、鍛錬する時は常に、塵も積もれば山となる、の心境でやってましたから。その方が心労も少ないですし。」

「なるほどな！　確かにそれは言えてるかもしれん！　ああ、だが俺は焦ってはいないぞ！　君が出せると言ったのだから、時間がかかろうとも可能であるということだからな！　俺はその言葉を信じよう！」

笑いながらそう言ってくる煉獄さんに小さく笑う。

うん。

煉獄さんなら、きっといけるはずだ。

〝透き通る世界〟にも行き着くことができるだろう。

だって、猗窩座も言ってたじゃん。

その闘気、練り上げられている、至高の領域に近いって。

猗窩座のいう至高の領域はまさに〝透き通る世界〟……無我の境地とも言える、あの世界のこと。

多分……だけど、煉獄さんは、鬼殺隊の柱の中で強い人間ベストスリーとかに入る可能性が高い。

だから、やり方次第では、彼も〝透き通る世界〟に入れると私は思ってる。

――……煉獄さんの継子となった今、彼の訓練相手の一人として、何度も私は彼と刀を交えることになるだろうし、こっちに触発された様に、煉獄さんがそこに行くことができる可能性は十分ある。

そのための踏み台になれるのなら、私は喜んでそれを引き受けよう。

――……そうすれば、きっと、柱の皆の生存率も上がる。私が、自分の物語の一番の目標に到達することも可能になるはずだから。

ある意味でこれは一つの利用だろう。

酷なことをさせてしまうな。

でも、皆に生き残って欲しいという望みは変わらないし、叶えたい。

――……少しでも被害を抑えたハッピーエンド……それが、叶うといいんだけど……。

「優緋！　鍛錬の続きを始めるぞ！　次は君が主に使うもう一つの呼吸を中心に鍛える

！　近々、俺が使う煉獄も教えるとしよう！　今の君ならば十分使えるはずだからな！」

「わかりました。よろしくお願いします、煉獄さん。」

自身が目指す結末のために、できれば煉獄さんにも〝透き通る世界〟に到達して欲しいな、なんて願いながら、私は片手に木刀を握り、日の呼吸特有の強風の様な、炎の様な音がする呼吸を行う。

私も強くならないと、ハッピーエンドは迎えることができないし、炭治郎たちに心配されてしまうだろうから。

９５．ほんの少しの休息を

炎の継子になって二ヶ月。
これはある日の非番のこと。
「君の弟たちは任せておくといい！　楽しんでこい！」
「ありがとうございます。行ってきます。」
炎柱邸の正門前。
私は、師範である煉獄さんに炭治郎たちを預けてある場所へと向かう。
「あ、優緋ちゃん！　こっちこっち！」
その場所とは蝶屋敷の前。
炎柱の継子になってから、煉獄さんが持つ屋敷で過ごすことが多くなったから、少しだけ久々だ。
……なぜ、ここに来たのかというと、今日、鬼殺隊女性メンバーのみのお茶会が行われることになったためだ。
向かう先は恋柱邸。
甘露寺蜜璃の屋敷である。

「おはようございます。」
「おはよう、優緋ちゃん。胡蝶さんから聞いたよ。炎柱様の継子になったんだって？」
「はい。一緒に任務をこなした際、腕を見込まれて継子にならないかとお誘いを受けまして……。引き受けることにしました。」
「私も優緋さんの腕を見込んで継子に誘ったんですけどね……。どうも優緋さんに、花や蟲は合わなかったみたいなんです。」
「優緋ちゃん……すごい……。」
しのぶさんの説明を聞いて引きつった笑みを浮かべる尾崎さん。
そんな表情しなくても……と言いたくなったが、よくよく考えてみると、鬼殺隊に入って一年も経たず下弦の頚を二回も斬っていて、尚且つ柱と一緒とは言え上弦の参を迎え撃ち、継子にまでなってるってかなりの状態だな……。
尾崎さんの反応も頷ける……のか？
「あはは……驚きますよね……。私自身も驚いてます……。」
自身の状態を冷静に考えるとかなりのものであることを理解した私は、尾崎さんに苦笑いを返す。
尾崎さんはやっぱり優緋ちゃんも驚いてるのね、なんて言いながら苦笑いをしていた。

「柱の方でも、優緋さんの評価はかなり高いんですよ。殆どの柱の皆さんが優緋さんの活躍っぷりは耳にしていて、お手並み拝見したいと思ってるそうです。」
「殆ど？」
「はい。音柱の宇髄さんと、岩柱の悲鳴嶼さん、それと今から会うことになる恋柱の甘露寺さん、蛇柱の伊黒さんと、風柱の不死川さんの五人です。柱合会議の時はあのようになってしまいましたが、それはそれとして、皆さんしっかりと実力に関しては評価しますからね。その点に関しては文句なしと言ったところです。実際、伊黒さんや不死川さんもあれさえなければ素直に認められるんだがと言ってますし。」
……あれとは間違いなく炭治郎と禰豆子のことだろう。
やっぱり鬼に対しては不信感が抜けないらしい。
伊黒さんと不死川さんの二人以外は、素直に認めてくれてるのか……。
「なるほど……。ん？　柱って確か九人ですよね？　名前が挙げられたのは五人ですが……」
「あ、残りは私と冨岡さんと煉獄さんと時透君だけですので、名前は挙げませんでした。私と煉獄さんは優緋さんを継子に誘うくらいですし、炭治郎君と禰豆子さんのことも信じているので挙げる必要はありませんから。冨岡さんに至っては最初から除外してます。だって優緋さんと炭治郎君たちを見つけて、自身の師を紹介したくらいですし、挙

げなくても大丈夫でしょう。時透君は何事にも関心が薄いので、よくわからないため挙げませんでした。」

「なるほど。」

不死川さんと伊黒さん、炭治郎たちのことを抜きにしたら、力を認めるくらいはしてくれるんだ、と思いながら、一部挙げられなかったメンバーのことを聞けば納得する理由が返ってきた。

うん、わからなくもない。

「あ、ですが冨岡さんはちょっと拗ね気味な気がしますね。一緒の任務につくことが何回かありましたが、無愛想さにさらに拍車がかかってました。」

「え?」

「ひょっとしたら、妹弟子が煉獄さんの継子になってしまったのが気に入らなかったのかも知れませんね。」

嫌なら最初から水柱の継子にしておけば良かったのにと思いません?と笑って聞いてくるしのぶさん。

私は苦笑いをするしかできなかった。

なんかすみません……と思ってしまったのは仕方ない。

だって、義勇は自分は水柱に相応しくないって思ってるからな。

原作と同じ考えなら、炭治郎ポジにいた妹弟子である私に、水の呼吸を極めたのち、水柱になって欲しいと考えていただろう。
だけど、私が日の呼吸と炎の呼吸を極め始めちゃったから……うん。
怒っていてもおかしくない気がする。
「……なんか、彼に悪いことした気がする……。」
「はい？」
「……こっちの話です。」
……これ……いずれ謝罪した方が良さげ？
なんか、今になってちょっと罪悪感が……。
でも、私の体に合ってないんだよな、水……。
うーん……と頭を悩ます。
義勇に……なんで説明したらいいんだろう……。
「あ、着きましたよ。」
「ん？」
「ここが……恋柱のお屋敷……。」
「……。」
考え込みながら歩いていると、しのぶさんから声がかかる。

顔を上げれば大きな屋敷。
蜂蜜の甘い香りがする。
「あ、しのぶちゃん！　尾崎ちゃん！　カナヲちゃんに優緋ちゃんも！　ようこそ我が家へ!!」
しのぶさんについて行く形で足を進めていると、甘露寺さんが手を振りながら私たちの名前を呼ぶ。
「こんにちは、お久しぶりです。」
「うん、久しぶりね！　あ、でもまともな自己紹介はしてないわね！　私は甘露寺蜜璃。蜜璃って呼んで欲しいな。」
「竈門優緋です。よろしくお願いします、蜜璃さん。」
「さん付けも敬語もいらないわよ？　だって優緋ちゃん、煉獄さんの継子になったんでしょ？　だったら私たち姉妹弟子だもの！　だから普通に話してくれて大丈夫よ！」
「そ、そう？　じゃあ……蜜璃……ちゃん……」
「うん！（ちょっとだけ照れちゃってる優緋ちゃん、可愛いわ！）」
ち、近づいたのはいいけど、視線がちょっとあらぬところに行ってしまう!!と思いながら、必死に彼女の胸元から目を逸らして名前を呼べば、満面の笑顔を向けられた。
……あのゲス眼鏡……なんつー服を蜜璃ちゃんに渡してんだよほんと。

同性の身であっても照れるんですが!!と少しだけこの制服隊服を渡した隠にツッコミを入れる。

「私も最初はこの隊服を支給されましたよ。すぐ目の前で燃やしてやりましたが。カナヲのところにももちろん届きました。燃やしてやりましたけど。優緋さんのところには行かなかったんですか?」

ゲス眼鏡に対しての文句を内心で言っていると、しのぶさんから質問される。

……燃やしてやりましたって二回言ったよなしのぶさん。

「はい。私のところには届きませんでしたね。育手が鱗滝さんだったからでしょうか……。」

「あ、それはあり得そうですね。冨岡さん曰く、鱗滝さんはとても厳しい方みたいですし。」

「そうですね。確かに鱗滝さんは厳しい方です。」

変な隊服が届かなかった理由をしのぶさんと考え、出てきた答えに納得する。

うん。

鱗滝さんみたいな育手の元にいる隊員に、ドスケベ隊服持っていけないよな。

「ねぇ、しのぶちゃん。優緋ちゃん。立ち話もいいけど、せっかくだからお茶を飲みながらゆっくり話しましょう?　せっかく女の子同士で集まってるし!」

冷静にしのぶさんと話していると、蜜璃ちゃんが笑顔で声をかけて来た。
私たちは顔を見合わせた後小さく頷く。
それもそうかと思いながら。
「今日のお茶菓子はパンケーキなの！　焼きたてのパンケーキにバターと屋敷で作った蜂蜜を乗せて食べるんだけどこれがとても美味しくてね？　是非ともみんなにも食べて欲しいの！　あったかい紅茶も淹れるから、ゆっくりと話しましょう！」
……大正時代にパンケーキ？とちょっと思ったけど、そういえばこの時代は洋食文化もそれなりに入って来てるから、なんら違和感はないんだった。
パンケーキは私も好きだったから、少しだけ楽しみだ。

９６．継子の帰還。鬼兄妹は鍛錬中

蜜璃ちゃんたちとのパンケーキパーティーはかなりの時間行われていた。
パンケーキを食べて紅茶を飲んで、他愛もない話をして……鬼との戦いの中にあるというのに、すごく穏やかな時間を過ごせた。
話の内容は大体近況報告とちょっとした世間話。
途中、蜜璃ちゃんが恋バナを始めた時はどうしたものかと考えたけど、まぁなんとか乗り切った。
〝優緋ちゃんの好みの男性はどんな人？〟
〝頼もしくて信頼できて、側にいるだけでも楽しいと思わせてくれるような人。〟
〝当たり障りない回答ですね。〟
〝だって一緒に過ごすなら楽しくないと辛いだけじゃないですか。楽しませてくれる人第一です。頼もしい人がいいなぁって意見に関しては、甘えさせてくれそうだからって感じです。〟
〝こう言ったらなんですが、善逸君たちには全然被らない特徴ですね。〟
〝まぁ、あの二人は友人にいたら楽しいって感じの二人ですからね。私の恋愛対象に

は向いてないかなぁって。〃

〃じゃあじゃあ、柱の中の男性だったら誰だろう!?〃

〃え？　柱の中……？〃

〃悲鳴嶼さん、宇髄さん、不死川さん、伊黒さん、冨岡さん、煉獄さん、無一郎君ですね。〃

〃ええ……？　うーん……難しいですね……。まぁ、消去法なら煉獄さんかなって感じです。賑やかなのは嫌いじゃないですから。強いて気になる場所は熱血漢すぎるところですかね。〃

〃宇髄さんとかも意外と賑やかな気もしますが……〃

〃確かに賑やかでしょうね。柱合会議の時に会った瞬間、賑やかそうな人だなって感じるくらい賑やかさが滲み出てましたし、それは否定しません。でも、なんか合わないんですよね……見た目のせいかな？　かっこいいとは思いますが。〃

〃冨岡さんや無一郎君は？〃

〃あの二人は賑やかというよりは静かって感じなのでどうなんでしょう……？まぁ、義勇は嫌いじゃないですよ。結構お世話になってますから。でも恋愛云々とはなんか違うような……あ、お兄ちゃん。〃

〃……冨岡さんがお兄ちゃん？〃

〝なんでしょう……お兄さんって想像がつきません……〟
〝はは。まぁ、わからなくもないですね。〟
〝優緋ちゃんは、煉獄さんみたいな人と付き合ってみたいのね！〟
〝いや、付き合ってみたいとかはないよ。仮に付き合うんだとしたら、彼みたいな人がいいですって話しなだけで。別に恋愛したい願望は今のところないかな。〟
……なんて感じにね。
決して煉獄さんが恋愛的に好きとかそんなものはないけど乗り切るために名前を上げさせてもらった。
実際、煉獄さんに対しての印象って、頼れる兄貴分。
熱血漢だけど頼もしい先輩って感じだし。
特に恋愛したいとかはないってね。
「ただいま戻りました……と……？」
「うむ！　その調子だ竈門少年！　しかし、君も姉君と同じ呼吸を使うんだな！　ヒノカミ神楽と言っていたか！」
「はい。うちに、むかしからつたわっていたものです！」
「そうか！　どうりで優緋もよく使うわけだ！　にしても君たちの家に呼吸が伝わっていたとはな！　だが、家系は特に鬼狩りとは関係無いのだったな！」

「そうです。だから、どうしてつたわっていたのかはわかりません。」
炭治郎たちのこともあり、急遽私たちが過ごしやすいようにと煉獄さんが場を整えてくれた彼だけの炎柱邸に足を踏み入れてみたら、庭の方から炭治郎と煉獄さんの声が聞こえてきた。
「煉獄さ……」
「おっと！　竈門少女も流石だな！　竈門少年と見事に連携を取ってくる！　だが、まだまだ炎柱である俺に膝をつかせることはできないぞ！」
「……わーお……。」
なんだなんだと庭に顔を覗かせてみれば、そこには鬼化竈門兄妹に訓練をつけている様子の煉獄さんの姿があった。
煉獄さんと炭治郎は木刀を使い、呼吸によるぶつかり合いをしているらしい。
で、禰豆子は炭治郎と連携を取るようにして煉獄さんにラッシュをかけているようだが、軽くいなされている。
鬼の中ではそこそこ力ある方だと思うんだけど、やっぱ柱には及ばないのか……。
「煉獄さん。ただいま戻りました。」
「ねえちゃん！」
「むー！」

「帰ったか優緋！　甘露寺との茶会は楽しめたか？」
「はい。良い息抜きになりました。」
なんて考えながら庭の方に足を運べば、炭治郎と禰豆子が駆け寄ってきた。
駆け寄ってきた二人を抱き止めながら、煉獄さんに戻ったことを伝えれば、眩いばかりの笑顔が返される。
「炭治郎たちと鍛錬していたんですか？」
「ああ。これから先、どのような鬼が出てくるかわからない！　場合によっては柱ですら苦戦を強いられてしまう鬼と戦うこともあるだろう！　今回の上弦の参のように！　となると、少しでも被害を少なくするために、竈門兄妹を投入しなくてはならない時も必ずやってくるはずだ！　だが、竈門兄妹はまだ完全に戦い方を身につけていない！　力や身体能力はなんら問題はないが、戦略的な面では心許ない部分が多すぎる！　ならば！同じ鬼狩りとして鍛えるのは当然のことだ！」
「！」
なんとなく口にした問いかけに対して返された言葉に目を丸くする。
今、煉獄さんは炭治郎たちのことを、同じ鬼狩りって言った……？
「どうかしたか！」
「……いえ、大丈夫ですよ。」

「そうか！　急に固まって呆けていたから疲れたのかと思ったが、大丈夫なんだな！」
「はい。」
「ならば良し！」
煉獄さんの言葉に小さく笑う。
よかった、炭治郎たち、ちゃんと煉獄さんに認めてもらえたんだ。
「……炭治郎たちの鍛錬もよろしくお願いします。」
「任せておけ！　俺に膝をつかせることができるくらいになれば、きっとどんな鬼相手であろうが勝利を収めることができるようになる！」
「ははは。自信満々ですね。」
炎柱邸に笑い声がこだまする。
まさか、炭治郎と禰豆子の二人にも強化イベントが発生するとは思わなかったけど、煉獄さんになら二人の鍛錬を任せることができる。
炭治郎たちが少しでも怪我を負わなくなるのであれば、きっと、これから先、ぶち当たるであろう上弦たちにもある程度は有利に出れるだろう。
良い巡り合わせをしたと小さく笑う。
……この炎柱邸で、炭治郎たちはどれだけ強くなれるのだろう。

解ける確執。穏やかな日々。
９７．炎柱の悩み事

それはある日の炎柱邸でのこと。
今日は訓練はお休みとのことなので、炎柱邸にて家事などをしていた時だった。
「……むぅ……！」
「ん？」
そういや今日は煉獄さん、あまり部屋から出てこないな……と思いながら歩いていると、机を向きながら頭を悩ませる姿が目に入った。
なんだなんだと思いながら、部屋の中を覗き込んでみると、煉獄さんの視線の先に一枚の手紙があった。
「どうしたんですか、煉獄さん？」
「ん？　ああ、優緋か！　いや、実はな。俺の生家にいる父上と弟の千寿郎に週に一回は文を送っているのだが、返ってくるのは毎回弟からの物のみなんだ！　どうやら父上は読まずに捨てたり、放置したりしているようでな……。」
「はぁ……。なるほど……。」

……どうやら、煉獄家へ送った手紙の返事が弟からしか返ってこないことに頭を悩ませていたようだ。

まぁ、煉獄家の確執やらなんやら考えるとな……なんとなく予想できなくもない。

「お父様とうまくいってないんですか？」

とりあえず、話を聞いてみることにした。

知識はあるけど、この体は煉獄家について聞くのは初めてだし、妥当の問いかけだと思う。

あわよくば、内容を聞いて彼の背中を押し、煉獄家の和解につなげることができればいいな、なんて下心を隠しながら。

「うまくいっていない……そうだな……前に比べたらうまくいってないと言えるだろう！　話をしたくても、なかなか話せなくてな！　いざ話そうと向かえば追い返されるばかりだ！」

「……そうですか。……もし、大丈夫なら話を聞いても？　悩んでるようですし。まぁ、解決できるかはわかりませんが、悩みを口にすることで、多少気持ちが楽になることもありますから。」

首を傾げながら、煉獄家についての話を聞いていいか質問してみれば、煉獄さんはすぐに頷いた。

〝俺だけでは解決できんからな！　第三者からの助言はありがたく受け取りたい！〟

なんて言いながら。

解決できるかわからないって言ったのにこの男、助言を聞く気満々である。

まぁ、別にいいけどな。

……煉獄さんは丁寧に話してくれた。

自分の前の炎柱は自分の父親である煉獄槇寿郎だったこと。

かつては誰よりも心を燃やし、刀を振るう情熱を持った人であったこと。

しかし、ある日突然、その情熱は完全に消え失せてしまい、刀も握らなくなってしまったこと。

鬼殺隊としての仕事もいい加減に済ませたり、当時の柱合会議にすら向かわないこともあったこと。

その度に自分が父の代わりに会合に出ていたこと。

最終的には、父が気分で嬲ったのち、取り逃してしまった鬼が下弦になり暴れていることを知り、その鬼を倒したことで柱となる条件を満たし、炎柱となったことを。

「何かきっかけがあったに違いない！　そう俺は思っているのだが、なかなか話が聞けなくてな。」

何か良い方法はないだろうか!?なんて言ってくる煉獄さん。

真っ直ぐと見てくるその瞳は、私の助言、または提案を待っているようだった。
「……煉獄さんは、親子喧嘩ってしたことあります？」
「親子喧嘩……？」
「はい。本気の親子喧嘩。」
どうしたものかと考えた私は、ふと、煉獄さんは父親と本気の親子喧嘩をしたことあるのだろうか、と思い、親子喧嘩はしたことあるかと彼に聞いた。
煉獄さんはキョトンとした表情で首を傾げては、考え込むような様子を見せる。
……これ、ひょっとしなくともやったことないパターン？
「言われてみればあまりしたことないな！」
「ならやってきたらどうです？」
「……は？」
予想通り本気の親子喧嘩はやったことがないみたいだ。
ならば、方法は決まったかもしれない。
上手くいくかはわからないけど。
「かなり野蛮な方法ですが、喧嘩することで引きずり出せる本音もあるし、自分の想いや本音をぶつけることもできるかと。親子なんだし、一回くらい本気で喧嘩してもバチは当たらないと思いますよ。」

喧嘩をしながら拳と拳で語り合う。
たまーに熱血漫画やゲームなんかで発生することがあるイベントだ。
互いに本音をぶつけ合い、相手を理解する……うん、暑苦しい。
「……親子喧嘩か。それは考えたことがなかったな！」
「でしょうね。まぁ、でも、まずは粘り強く話すための機会を設けたのち、自身の思いの丈、本音などを伝えるのがいいでしょうね。腹を割って話すことが、一番の正攻法ですから。親子喧嘩は最終手段にするとして。」
「なるほどな！」
納得したように頷く煉獄さん。
……腹を割って話すこと……煉獄さんなら何度もトライしていそうだけど……何を納得したのだろうか……？
「親子喧嘩に関しては考えてなかったな！　そのような手があったとは！」
……まさかの親子喧嘩という手段に対する納得だった。
話ができないと判断したら身を引いていたということだろうか。
「……いきなり喧嘩をふっかけたら駄目ですよ？」
「それはわかってる！　いきなり殴りかかるような真似はしない！」
「ええ、それが一番です。大怪我にだけは気をつけてくださいね。本音を言うというこ

とは、遅かれ早かれ喧嘩に発展します。相手によっては本当に殴りかかってきますから。」

「ああ！　まぁ、父上が殴りかかってきたらその時はその時だ！　俺もそれなりの対応をする！　にしても、やはり相談して正解だったな！　時には喧嘩しても良いと言われて気が楽になった！　ちょうど良い機会故、俺が今まで考えていたことをぶつけてくるとしよう！　父上に恨み言はないが、どのような思いを抱いていたかくらいは告げてくる！」

　煉獄さんが納得した理由に首を傾げていると、ちょうど良い機会だからと思いを伝えてくると口にして、善は急げだ！と言ってその場で部屋着として着ていた服を脱ぎ始める。

　……ってぇ!?

「ちょ、煉獄さん!?　何で急に服脱ぎ始めたんです!?」

「父上に本音をぶつけてくる故着替える！部屋着では外に出れんからな！」

「だからって女の前で脱ぐな!!　ちょっと待ってください！　すぐに部屋から出ますんで!!」

　怒鳴りながら慌てて部屋から出て、勢いよく襖を閉める。

　どうしたんだ優緋！とか聞こえてくるが、応えることなくその場から立ち去った。

（き、鍛えられた体が目に焼き付いている……っ!!）

彼氏いない歴イコール年齢な私にとって、何とも衝撃が強すぎるイベントだった。

「あー……顔が熱い……」

きっと赤くなっているだろう顔を冷ますべく、私はこの炎柱邸にて割り当てられている自身の部屋に戻り、パタパタと手で顔を仰ぐ。

全く……変に意識させないでよね。

「優緋！」

「あ、はい。」

……顔の熱も落ち着いた頃、煉獄さんが私の部屋にやってきた。

名前を呼ばれたので素直に返事を返しつつ振り返るが、服の下に隠れている先程の鍛えられた肉体の映像が頭をよぎり熱が振り返しそうになる。

そんな私のことなど気にも止めていないであろう煉獄さんは、満面の笑みを見せてきた。

……少しだけドキッとしたのは気のせいだと思いたい。

「晩までには戻る！」

「わかりました。夕餉を作ってお待ちしております。あ、一応、何が食べたいか伺っても？」

いつ頃には戻るかを口にする煉獄さん。
振り返しそうになる変な意識を私は何とか抑え込み、平常心を取り繕いながら小さく頷き、夕餉を作って待っていると煉獄さんに伝える。
「む！　優緋が作る飯はどれもうまいからな……。いざ問われたら難しいところだが……ああ、そうだ！　ならばさつまいもの味噌汁を作ってはくれないだろうか！　一度優緋が作ったものを食べてみたくてな！　希望があるとするとそれだけだ！」
念のために食べたいものはあるか聞いてみれば、煉獄さんは笑顔でさつまいもの味噌汁を作ってほしいと私に言ってきた。
……そういえば一度も作ってなかったな、と思い出す。
「さつまいもの味噌汁ですね。了解しました。」
大好物を頼んできた煉獄さんのリクエストを承諾すれば、再び無邪気な笑顔が向けられた。
しかし、すぐにその表情は普段の目力の強い物へと変化する。
「では行ってくる！」
「行ってらっしゃいませ。良い結果になることを願っています。」
「ああ！」
挨拶を交わして頭を下げれば、煉獄さんは颯爽とその場から立ち去って行った。

その背中を見送った私は、よし、と小さく呟く。
どんな結果になろうとも、元気づけることや、祝うことができるくらい美味しいさつまいもの味噌汁を作るとしよう。
（……原作では、煉獄さんが最期に自身の生家である煉獄家に行けば、ヒノカミ神楽が何か少しわかるかもしれないことを炭治郎に告げ、もし、煉獄家に向かうことがあれば伝えてほしいと、弟の千寿郎くんと父親の槇寿郎さんへの最後の伝言を託していた。でも、この世界では煉獄さんは生きており、私はヒノカミ神楽が何かを理解している。だから、自分の口で思いの丈をぶつけてこいと背中を押したわけだけど……さて……うまくいくといいんだけど……。）
煉獄さんが立ち去ったあと、何とか意識するのを耐え切ることができた自身に安堵の息を吐きながら、原作とは違う展開に持っていった物語の成功を望む。
少しでも、蟠りが溶けてくれると嬉しいんだけどね……。

98．帰りの遅い家主を迎えに行こう

と、まぁ、煉獄さんを送り出した私なんだけど……

「……遅いな。」

煉獄さんが夕餉の時間前になっても帰ってこない件。これまで彼が時間とか約束を破ることはなかったはずなんだけど、親子喧嘩に送り出してから早くも数時間。

そろそろ賑やかな日〇さんボイスが聞こえて来てもおかしくないのに、全くと言ってその声が聞こえてこない。

「れんごくさん……おそいね……」

「うー……」

「うん。帰ってくる気配が全く感じ取れない。」

ひょっとして、厄介なことにでもなったんだろうか？鬼と遭遇したとか……。それとも、親子喧嘩が長引いているのか、話し合っているのか……。

なんであれ、何かあったのは確かだと思う。嫌な予感みたいなのはないから、彼の命に関わるようなことが起こっているわけではないんだろうけど……。

「……迎えに行ったほうがいいかな？」

「うん……。おれは、むかえにいったほうがいいとおもう。だって、なにかあったんだとしたら、しんぱいだから。」
「ムン！」
「うーん……禰豆子も同じ意見か……」
「う！」
「……そうだね。迎えに行ってみようか。あ、でも炭治郎と禰豆子はお留守番した方がい」
「え!?」
「うー!?」
「……。」
「……いったら……だめなのか……？」
「う～～～……」
「……え～～～っと……」
今にも泣きそうな表情を見せる竈門兄妹の姿を見て言葉を詰まらせる。いや、だってさ……一応、煉獄さんが向かったのは、炎柱邸煉獄家本家でしょ？
原作の初対面槇寿郎さんは、炭治郎が連れていた禰豆子に対してなんの言及もしてなかったけど、私が今辿ってるこの話はいろいろ変わってるわけで、同じようにスルーさ

れるとは限らないわけじゃん？

しかも、鬼兄妹、二人に増えちゃってるしさ……。だから連れて行っていいのか……。

「う～～～……」

「ねえちゃん……」

「……わかった。わかったから泣きそうな顔しないでくれないかな？二人がそんな顔してると私も悲しくなってくるから！」

どうするべきかと考えていたが、二人があまりにも悲しげな表情と上目遣いでずっと見てくるものだから折れてしまう。

この美男美女兄妹……可愛らしすぎるというか、とにかく、顔がいい。しょんぼり顔でも顔がいい。

あんな風に見られると、誰だってオチると思う。

「おれたちもいけるな、ねずこ！」

「う！」

了承の言葉を返せば、それはもう素晴らしいほどの笑顔を見せて顔を見合わせる竈門兄妹。狙ったのか？とばかりの清々しい姿に溜息をついてしまった。

まぁ、それはそれとしてだ……。どうやって二人を連れて行こうか……。確か、原作

では無限列車の話が終わってすぐに炭治郎が煉獄家を訪ねた話になっていたはず……。
だから、禰豆子は背負い箱の中で眠っていたよね……。でも、この二人……現在進行形で起きてんだよなぁ……。
「……どうやって二人も連れて行こうか。」
「「？」」
「あー……うん、こっちの話だから気にしないでいいよ。」
私の呟きに疑問符を浮かべる二人の様子に、苦笑いを返す。じっと見つめてくる二人の頭を撫でてやれば、気持ちよさそうに目を細めた。
可愛いな……とほっこりしながらも、二人を連れた煉獄家訪問方法を考える。
しかし、ふと、私はあることを思い出した。それは、もう、この物語は彼の物語と完全に逸脱しているため、これから先はどうなるかわからないということを。
――――――……そうか、考えなくてもいいんだった。どうせもうこの物語（人生）は私が知る、優しい一人の少年の物語（人生）じゃなくなったんだし。
それなら、もう、どうにでもなれって感じで投げ出せばいいか。だって、もう私の知ってる話じゃないんだから。
「そんじゃ、煉獄さんのご実家に向かうとしますか。箱に入んのと、一緒に歩くの……二人はどっちが……」

「ねえちゃんといっしょにあるく!!」
「ムー!!」
「……即決だな。食いつく勢いってこういうことか。じゃあ、久々に三人で歩くとしますかね。あ、でも、一応背負い箱は持っていかないとな。どれくらいの距離かわかんないし。」
そうと決まれば……と、私はいつも部屋に置いてる背負い箱を背負い、ゆっくりと立ち上がる。
煉獄さんの実家……場所知らないけどなんとかなるとは思う。いざという時は天王寺に聞けばいいだろうし。
「……ん?」
なんて考えていると、一羽の鎹鴉が庭の塀に止まっているのが見えた。私に何か訴えるような……どうにかしてくれって言いたげな様子を見せている。
「……もしかして、煉獄さんの鎹鴉?」
確認するように言葉を紡げば、塀の上の鎹鴉は小さく頷き、私の方に飛んできて、肩に止まる。
「……ひょっとして、派手にやり合ってんのか、煉獄さん。」
「アア。アンタガケシカケタンダカラ　ナントカシテクレ。」

「……なんかごめん。ちゃんと責任取るわ。」

どうやら、私がいろいろけしかけたせいでちょっと……いや、この子の反応からしてかなりトラブったらしい。

となると、それをやらかす原因を作り出した張本人が責任を以って火消し作業をするのは道理だろう。

煉獄家のことに、赤の他人で、なおかつ、原作の炭治郎とは違って、痣を常に発現している上、耳飾りをつけちゃってる私が口を出すのはあれだし、むしろ火に油な気がしてならないため、行くのもどうかと思うが……うん。

「しょうがない！やらかした以上どうにかするしかないもんな！腹を括って行くか！」

もうどうにでもなれ!!と考えながら、屋敷の外へと足を踏み出す。

「あ、すみません！屋敷の留守番お願いします！」

「はい。わかりました。」

短時間とはいえ、屋敷を空けるわけだから、念のために屋敷にて雑務などをしてくれる隠の人には声をかけ、屋敷の門をくぐり抜ければ、肩に乗っていた煉獄さんの鎹鴉が空へと飛び上がった。

……カラスって、意外と強く地面を蹴って飛び上がるよな。かなりの力が肩にかかったわ。

まぁ、そんなことはどうでもいいか。とりあえず煉獄さんの鎹鴉の案内に従って、煉獄家へと足を運ぶとしますかね。

？・。・　：＊：・。・　？・。・　：＊：・。・　？・。・　：＊：・。・　？

……あれからしばらくして、煉獄さんの鎹鴉の後を追うように道を歩いていると、大きな屋敷が視界端に映り込んだ。

その屋敷の方へと鎹鴉が向かっている様子から、あれが煉獄家のご実家なんだろう。

「おおきいな……」

「うー……。」

「流石は、炎柱のご実家って感じだな。炭治郎と禰豆子を預かるために用意してくれたあの炎柱邸別邸以上にでっかい屋敷だ。蝶屋敷と同じくらいありそうだな。」

両手に弟妹を連れながら、炎柱邸のご実家の印象を話す。あの屋敷の塀、こっちの方にまで続いてんだけど。どんだけ敷地でかいんだこれ。

そんなことを思いながら、歩みを進めていると、屋敷内がやけに賑やかであることに気がつく。

言い争い……というより、完全な争い物理のような……いや待て待て待て待て。

「先に話し合いしろって忠告したはずなんだが!?」

え？話し合いの末のこれなわけ!?本気の殴り合いをしてるような雰囲気があるんだけど!?

確かに本気で親子喧嘩してみたらって言ったけど、ここまで激しいものは……いや、似たようなこと言ったわ!!

急いで煉獄家の正門の方へと走って行ってみれば、そこでは一人、小さな男の子が箒を持ったままオロオロしていた。間違いなく千寿郎君だろう。

「あ、兄上も父上も落ち着いて……」

走って近寄って正門から中を伺ってみれば、そこには本気の殴り合いをしていると思わしき煉獄親子の姿が。

あちゃー……と思わず頭を抱える。話そうとしたら殴られる煉獄さん（兄）がなんとも痛々しい。

いや、仕返しもしてる雰囲気ありますけどね!?

「なぁ、君……」

「え!?あ、わ、私ですか……？」

「そう。君。私、一応杏寿郎さんの継子やってる鬼狩りなんだけど、状況教えてもらっていい……？」

「あ、兄上の継子……？そ、そういえば、確かに兄上の手紙に……！確か、竈門……優緋さん……でしたよね？」

「そ。あまりにも師範が遅いから迎えにきたんだけど、目の前でこれなもんだからよくわかんなくってな……。いや、まぁ、多分、私が原因の一つというか、元凶なんだろうけど、あまりにも予想の斜め上すぎてね……。どうしてこうなったのか話を聞いても？最初は話し合いして来たらどうかって言ったはずなんだけど、話し合いの末のこれ……？」

「じ、実は……」

と、とりあえず現状分析を……と、箒を持っていた千寿郎君に話を聞いてみると、どうやら、最初は確かに話し合いを煉獄さんはしに来たらしい。

でも、槇寿郎さんが、お前と話すことはないと追い返そうとしたのだとか。

確か、原作の夢の中……記憶を辿っていた煉獄さん、柱になったことを槇寿郎さんに伝えに来た時、くだらないとか、柱になったところで、自分も煉獄さんも大したものになれないのだからと突っぱねていたんだっけ？

確か、かつての炎柱の手記に記されていた、あのチート剣士、縁壱さんの話を知り、自身の無力さ、才能のなさに打ちのめされた上、程なくして妻である瑠火さんを失ったことによって、酒に溺れ、何もかも嫌になって、八つ当たりをするかのように。

で、今回のもそれの延長戦みたいなものだと思われる。話すことはない……には、多分、僅かながらの罪悪感もありそうだけど、大まかな理由は、八つ当たり……じゃないかな。

まぁ、今はその憶測は置いといて……だ。

千寿郎君曰く、普段の煉獄さんなら、槇寿郎さんがそう言ったら、また日を改めるとか言って踵を返したらしい。

でも、今回は何度も槇寿郎さんに声をかけたのだとか。しかし、槇寿郎さんは応じることはせず、あまりにもしつこい煉獄さんに帰れと酒が入った容器を投げつけた。

だけど、それでも煉獄さんはそれでも諦めなかったらしい。結果、殴り合いに発展したとのこと。

酒が入ってるせいもあるのか、若干理性が飛んでいるようだったとは千寿郎談である。

「……どうしてそうなった……!!」

酒は飲んでも飲まれるな!!と叫びたくなる。どうすりゃいいんだこれ!!

「……あー……えっと君は……」

「あ……えっと……煉獄　千寿郎です……」

「そうか。じゃあ、千寿郎君。この屋敷にも井戸はあるよね？井戸から水をたくさん汲

みたいから、ちょっと案内してくれるかな？」
「か、構いませんが……水を何に使うんですか……？」
「ちょっとね。」
大量の水を何に使うのか、その質問に対して少しだけ言葉を濁す。千寿郎君は不思議そうな表情を私に見せてきたけど、親子喧嘩物理が少しでも治るなら、と思ったのか、すぐに井戸に案内してくれた。
さて……ヒートアップしてる二人の頭を冷やすとしましょうかね。

９９．燃え尽きた心に炎（ほむら）をともせ

千寿郎君の案内により、煉獄家の庭にある井戸にまで足を運んだ私は、そこで大量の水を手桶にたくさん汲み、殴り合い真っ盛りの煉獄親子の元へと戻る。

相変わらず鈍い音を立てながら殴られてるし、殴ってるな……。けしかけたのは私自身だからあれこれ言えないけど、ちょっとは話ししなよ……。

会話が全くない殴り合いって怖っ。いや、煉獄さんは話そうとしてるのか……？

まぁ、そんなことは今はどうでもいい。

「ぬお!?」

「うお!?」

「え……ええ……？」

喧嘩の飛び火が来ないが、そこそこ近い位置まで足を運び、手桶の持ち方を変える。

そのあとは勢いよく桶の中身をぶっかける。文字通り頭を冷やしてもらうために。

バッシャーンッという音を立てながら、空から煉獄親子の頭上に滝のように降り注ぐ井戸水。

それにより濡れ鼠になった煉獄親子は、混乱したかのように動きを止め、目を白黒と

させていた。

対する千寿郎君は、まさか、私が師範である煉獄さんと、煉獄家の大黒柱である槇寿郎さんに容赦なく井戸水をぶっかけたことに驚いたのか、ドン引きしたような声音で呟いた。

まぁ、確かに引きたくなるよな。まさか、男共が本気の殴り合いをしている最中、井戸水をかける女がいるなんて思わないだろうし。

「よもや!!誰かと思えば優緋だったか!!」

「な!?誰だお前は!?なぜ勝手に敷居を跨いで……!?」

槇寿郎さんが私の姿を視界に入れ、不法侵入に対しての文句を言ってきたが、最後までそれが紡がれることはなかった。

表情を伺うと、目を見開いて固まっている。匂いから感じ取れるのは、驚き、および、嫌悪、それと怒り……だろうか?プラスの匂いは感じ取ることができず、マイナスの匂いだけが鼻をつく。

わずかながらに、悲しみに分類する匂いも混ざっているが……。

おそらく……いや、確実に嫌悪と怒りは私の耳飾りと、額の痣のせいだろう。

過去の炎柱が書き残した手記……それに記されていた始まりの呼吸、〝日の呼吸〟を使用する剣士の特徴と、私の特徴は一致しているのだから。

悲しみの方は、瑠火さんを失った時のもの……それの延長線のものだろう。
「あまりにも遅かったので、迎えにきました。確かに粘れと言いましたし、喧嘩も試しにしてみたら……とも言いましたが、少し、長くはありませんか？」
「すまん！だが、父上がせっかく顔を見せてくれたからな！粘れるところまで粘ろうと思ったんだ！今までは会うことも難しかったからな！まぁ、そしたら殴られてしまったのだが！」
現状を冷静に分析しながらも、煉獄さんに声をかければ明るい声と、豪快な笑い声が返された。
少しばかり呆れてしまう。だけど、まぁ、うん。今回は私の言い方にも非はあったし、あまり強くは言うまいと、溜め息も我慢して肩をすくめた。
そして、すぐに思考を切り替えて、未だにマイナスな感情の匂いを纏う槇寿郎さんに目を向ける。一応、初対面だから自己紹介を……と思っているんだが、どうも話を聞いてくれそうな雰囲気じゃないな。
「……お前……そうか、お前……!!」
どうしたものかと見つめていると、槇寿郎さんの方から口を開いた。先程までの驚愕と言った感情の匂いは感じ取れない。
わかるのは怒りと、強い嫌悪感、それと、消えることがない悲しみの匂い。

「〝日の呼吸〟の使い手だな!?そうだろう!?」
「〝日の呼吸〟……ね……。多分、ヒノカミ神楽のことですかね。だとしたら、そうだと肯定しましょう。」
槇寿郎さんの問いに対して、誤魔化すことなく肯定する。すると、槇寿郎さんが目を見開いて、こちらの方に殴りかかる素振りを見せた。
「父上!!」
いち早く動いたのは、槇寿郎さんの側にいた煉獄さんだった。こちらに突っかかるどころか、明らかに暴力を振るおうとしていたため、止めるために動いたのだろう。
「俺ならともかく、彼女を殴るのは人として見逃すわけには……!!」
「離せ!!あいつは俺たちを馬鹿にしにきたんだ!!」
完全に頭に血が上っているのか、かなり支離滅裂なことを口走っている。
馬鹿にしにきたわけじゃない。ただ、私は師範を迎えにきただけ。だというのに、やはり手記のせいだろうか……。
自身の無能さを痛感し、心を叩き折られてしまってる彼にとって、私という存在は忌々しいにも程があるのだろう。
「どうしてそうなるんですか。あまりにも支離滅裂すぎてよくわかりません。言いがかりです。」

本当は炭治郎のように怒鳴りたい。でも、この彼は師範の父親で言わずもがな年上だ。

あまり失礼のないようにしなくてはならない。正直、こちらからも殴ってやりたいけどね。

「お前が〝日の呼吸〟の使い手だからだ!!その耳飾りを!!痣を!!俺は知ってる!!書いてあった!!」

「なぜ〝日の呼吸〟の使い手というだけでそのように言われてしまう必要があるんですか。何か理由を話していただけないとこちらも納得できないのですが……。」

少しの苛立ちを飲み込みながら、日の呼吸の使い手に対して当たりが強い理由を問う。

原作を読んでいるから、私には必要ないことだけど、今、ヒノカミ神楽が日の呼吸であることを知った炭治郎は、槇寿郎さんが日の呼吸に対しての当たりが強い理由を知らない。

実際、自分たちが使うヒノカミ神楽……家に代々伝わるこれに対して当たりが強い槇寿郎さんに対して、少しだけ怒っているしね。

理由もわからず当たり散らされているのが少し嫌なようだ。

「お前が使う〝日の呼吸〟は……!!あれは!!始まりの呼吸!!一番始めに生まれた最強の

御技!!そして!!全ての呼吸は〝日の呼吸〟の派生!!全ての呼吸が〝日の呼吸〟の後追いに過ぎない!!〝日の呼吸〟を猿真似した劣化した呼吸だ!!炎も!!水も!!風も!!全てが!!」

「「!?」」

「……。」

怒鳴るように紡がれた言葉に、煉獄さんと、炭治郎と、千寿郎君が目を見開く。

対する私は無言。槇寿郎さんの言葉をただひたすらに聞いている。

まぁ、内容は、私がよく知っているものだけど。

「人間の能力は生まれた時から決まってる!!才能のある者は極一部……あとは有象無象!!なんの価値もない塵芥に過ぎない!!才覚に恵まれ!!〝日の呼吸〟を継承しているお前に!!大した才能も、力も持ち合わせていない俺たちの何がわかる!!始まりの呼吸が使えるからと言って調子に乗るなよこ……」

そこまで言われた瞬間、私の体は無意識のうちに動いていた。辺りに響くのは乾いた音。自身の手のひらは痛く、煉獄さんと千寿郎君、炭治郎や禰豆子も、こちらに言葉を紡いでいた槇寿郎さんも目を見開いて固まっている。

「……ゆ、優緋?」

乾いた音の後に訪れたのは静寂。しかし、それを破るように、煉獄さんが私の名前を

呼んだため、その静寂は、ほんのわずかな者だった。
「……失礼。理由を話せと言ったのは私ですので、平手打ちで黙らせるなど、自分勝手にも程があると自覚してます。ですが、あまりにも目に余るというか、少しカチンときたので、つい、手が出てしまいました。すみません。ですが、いくつか言い返したくもあるので、こればかりはご容赦を。ちなみに、煉獄さ……いえ、ここには煉獄の名前が三人いましたね。なので、区別をつけるために少しだけ呼び方を変えます。……杏寿郎さん。この方は貴方の父君でしたね。先程、父上とお呼びしていましたし。」
「あ、ああ。」
　こちらの静かな問いに答えた煉獄さん。そうですか、と相槌を打った私は、真っ直ぐと槇寿郎さんを見つめながら、再び静かに口を開く。
「では、屋敷内で話してくださった、元炎柱の煉獄槇寿郎さんで合ってるんですね。ありがとうございます。確認ができましたし、ここからは少し言い返させてもらいます。」
　……私がこんな風に口を出したらいけないのかもしれない。余計なお世話なのかもしれない。これが正しい選択なのかはわからない。
　うまくいかない可能性だってある。余計に拗らせてしまう可能性だってある。でも、だからと言って黙っておくのは私の性に合わなかった。
　物語を見ていた時に思っていたこと。それを今、ここで吐き出させてもらおう。

「なんとなくですが、急に貴方がこのようになった理由がわかりました。〝日の呼吸〟を、なんらかのもので知ることになり、それを調べていくにつれて、心が打ち拉がれてしまったんですね。その上で、とても悲しく、辛いことが追い討ちの如く降りかかった。貴方から感じ取れる匂いからして、そう判断できます。まぁ、だからと言って同情をするつもりはありませんがね。だって、私は、貴方でありませんので、その感情を理解などできませんから。辛いという感情や、苦しいという感情。他にもいろいろありますが、自分の感情の重さというものは、当の本人にしかわかりません。だから、同情が逆に相手の重荷になったり、情けないという感情の誘発になったり、怒りの元になることもある。」

淡々と言葉を紡ぐ。槇寿郎さんは無反応だ。いや……一応、私の方は見ているな。何が起こったとばかりに固まって、混乱から動けなくなっているけど。

「なので、慰めだのなんだのと言った言葉は口にしません。しかし、貴方にいくつかの指摘をさせていただきます。」

そう思いながらも、私は静かに言葉を紡ぐ。私のようなひよっこに、小娘如きに、このようなことを言われるのも迷惑だろうし、生意気を言うなと怒鳴られ、殴られる可能性だってあるけど、言いたいことを言わずに後悔するよりは、言いたいことをハッキリと言って、殴られて後悔する方が、私自身スッキリすると思うから。

所詮はただの自己満足。だけど、それでも別に構わない。自己満足であろうとも、多少なりとも何かのきっかけになりうる可能性があるのであれば。

「いつだったか、私と杏寿郎さんは同じ任務につき、そこで、下弦の壱と、上弦の参と対峙することがありました。最初は、その任務って、十二鬼月一体の大規模討伐のはずだったんですけどね。どういう巡り合わせか、下弦の壱を倒し、なんとかその場も落ち着きを取り戻そうとしていたはずだったのに、上弦の参に襲撃されてしまったんですよ。」

「……!!」

こちらが静かに呟いた言葉に、槇寿郎さんが目を見開く。まさか、私と煉獄さんが、上弦の参と接触しているとは思わなかったのだろう。

原作の無惨の発言から、上弦の鬼はこれまで長らく面子が変わらなく保たれているというのはわかっているから、柱であっても命を奪われた、または、接触することができず、空振りに終わっていた可能性の方が高かった。

そんな上弦と、私と煉獄さんは接触し、交戦した。まぁ、その場には善逸たちもいたから、私と煉獄さんだけが接触したわけじゃないけど、今はそれは置いとくとして……だ。

「その上弦の鬼は、なんとか撃退することはできました。でも、私と、杏寿郎さんの力で

は頚を斬るにまでは至らなかった。下弦の壱との交戦後の疲労も、一つの要因でしょうが、それ以上に、どちらの力も、あの上弦に届くほどのものではなかった。あと一歩、何かが足りなかったんだと思います。何が足りなかったのかは、これから杏寿郎さんと話しながら見つけていくしかないと思っていますが。」

目を見開いたまま、動きを止めている槇寿郎さんに、その時の現状を説明すると、煉獄さんが少しだけ悔しげな表情を見せた。

やっぱり、彼自身も、あの時、猗窩座に最後まで剣を届かせることができなかったことを、それなりに気にしていたようだ。

「……ここから本題とします。もし、貴方が言った通り、私が使っている始まりの呼吸というものが、本当に最強の御技であると言うのなら、私は、私たちは、上弦の参を取り逃がすことなく、滅殺することができたはずです。だというのに、私たちの刀はその頚に届かせることができなかった……。本当に、それだけ強い力であるならば、起こり得るはずないことですよね?まぁ、その、つまりですね。何が言いたいのかというと……私は、決して調子に乗ることなどできない剣士に過ぎないんです。撃退したあと、私、ぶっ倒れてしまいましたしね。それに比べ、杏寿郎さんはちゃんと立っていました。結局、私は、杏寿郎さんに助けられて、なんとか今もこうしていられるんですよ。だから、決して杏寿郎さんは、貴方が言うような才覚も力もない存在ではありません。」

もちろん、これは、煉獄さんだけじゃない。柱だった槇寿郎さんにも、今はまだ、眠っている才能を持ち合わせ、どのような未来へも歩みを進めることができるであろう少年である千寿郎君にも言えることだ。

「それは、きっと貴方にも言えることだと思います。小娘如きが生意気なと思われるでしょうが、これぱかりは言わせてください。決して、貴方は価値のない塵芥でもなく、力を持ち合わせていない無能でもありません。だって、貴方はかつて、柱に至るまでの力をその身に宿し、多くの人々の命を救ったはずですから。貴方がいたからこそ、今を生きることができる人々だっているし、貴方がいたからこそ、鬼に立ち向かえるようになった鬼殺隊の隊士だっているとは思いませんか?」

そう思いながら、私は自身の中にあった言葉をぶつける。この言葉がどのような結果に転ぶかはわからない。目を覚ますきっかけになるかもしれないし、余計に拗れてしまうきっかけになるかもしれない。

少しでも彼の心に響いてくれたらと、わずかな願いを抱きながら、私は、槇寿郎さんの姿を真っ直ぐと見据えるのだった。

１００．継子の炎と鬼兄妹ｉｎ煉獄家本家

あれから数十分だろうか？槇寿郎さんにいろいろ言った私は、気まずくなって、煉獄さんとともに過ごしている炎柱邸別邸へと戻ろうとしたのに、煉獄家実家に上がっていた。

理由は簡単。煉獄さんに上がって待っているように言われたのである。

先に帰宅しておくと伝えたんだが、だいぶ暗くなっているから心配だと言って許してくれなかった。

私も鬼殺隊なんだけど、って言ったのに、なんでダメなんだ……。

ああ、煉獄さんだけど、彼は今、千寿郎君と槇寿郎さんの三人で、別室にてお話中だ。多少なりとも落ち着いている今なら、少しくらいは話を聞いてくれるだろうと、明るい声音で言葉を紡ぎ、数刻前くらいに部屋から去っていった。

どことなく嬉しげな匂いがしたのは、多分気のせいではないだろう。今まで相手にすらしてくれなかった人と、ようやく向き合うための大チャンスがやってきたのだから。

まぁ、だからと言って、絶対に上手くいくとは言い切れないけどな。なんせ人の感情はコロコロ変わる。

今は落ち着いているとしても、少ししたら変化することなんて、当たり前のようにある。

相手の気持ちが変化したら、また、ギスギスした関係に戻ってしまう可能性だって否めない。

まぁ、なんとなく大丈夫そうではあるけどな。言いたいことを伝えた後から、嫌悪とか怒りの匂いがかなり薄まっていたし、煉獄さんが話してくると言ってきた時は、ほとんどないと言っても過言じゃないくらい、こちらに対するマイナスの感情の匂いがなくなっていたから。

「ムー」

「ねえちゃん、だいじょうぶ。れんごくさんなら、きっとおとうさんとうまくいくよ。きっとだいじょうぶ。だから、ふあんそうにしないでいいよ。」

そんなことを考えていると、炭治郎と禰豆子が、私の側に寄ってきて、煉獄さんなら大丈夫だと笑ってきた。

どうやら、少なからず不安にしているのがわかってしまったらしい。まぁ、でも、この二人ならわからない方がおかしいか。

炭治郎は私と同じで鼻が利く。だから、私のわずかな匂いの変化で、すぐにこちらの感情を読み取ってしまう。

対する禰豆子は、私と炭治郎のように鼻が利くわけじゃないけれど、姉妹、および兄妹ゆえか、こちらの感情の変化に敏感だ。だから、少しでも様子が違うと、なんとなくわかるんだろう。

「……そうだな。心配しなくとも、煉獄さんなら上手くやれるよな。」

「うん！」

「ム！」

二人の笑顔により、その不安は一瞬にして取り除かれる。それを示すように笑顔を返せば、二人も花が咲いたように笑った。

可愛らしいなと思いながら、私は、千寿郎君が家族会議に行く前に淹れてくれたお茶を飲む。お茶請けとして煉獄さんが引っ張り出してきた羊羹も口にしてみれば、上品な甘さが口いっぱいに広がった。

うん。どちらもとても美味しい。

どこで買った羊羹なんだろう?もし、自分でも買えるものだったら、いつか炭治郎たちに食べさせてあげたいものだ。

「ムー。」

「ん?」

「ねずこ、ずるいぞ……」

「ム!!」

そう考えていると、急に禰豆子が私の体にひっついてきた。匂いからして、急に甘えたいスイッチが入ったらしい。

まぁ、思い返してみれば、最近の私は炎柱の継子として、煉獄さんに鍛錬をつけてもらうばかりで、この子の相手してあげられなかったもんな……。それなら、甘えたスイッチが入るのも無理はないか？

んで、炭治郎は、禰豆子が先に私に甘え始めたから少しだけ拗ねている。長男だから我慢できる……と言い聞かせているのか、葛藤も感じ取れた。

「ムー。」

「はいはい。」

冷静に分析していれば、急にひっつき虫になった禰豆子がすりすりとすり寄ってくる。苦笑いをしながら頭を撫でてあげれば、ほわほわと柔らかく無邪気な笑顔を見せてきた。

反して炭治郎からは拗ねている匂いが強くなる。それでも我慢しようとしているのもよくわかる。

「……ほら、炭治郎もおいで。」

「え……」

「最近、一緒に遊ぶ時間とか、まったりする時間がなかったからな。まだ、煉獄さんが戻ってくるまで時間もありそうだし、甘えたいならきていいよ。今日は可愛い弟と妹が、姉ちゃんをたっぷり独占できる日ってわけだ。明日になったら、また鬼殺隊として、継子としてやるべきことをたくさんしなくちゃならないし、今のうちに好きなだけ甘えなよ。」

「……うん！」

それなら私は何をすべきか……答えは簡単だ。我慢がちな弟も、甘えたがりの妹も、どちらも甘えさせるのみ。

禰豆子を構い倒している右手の反対である左手を炭治郎に差し出しながら呼べば、彼は笑顔で私に近寄ってきた。

禰豆子がくっついている方とは反対側に、炭治郎が腰を下ろしたのを確認した私は、すぐに彼のことも抱きしめた。

すると、先程までの拗ねた匂いは霧散し、喜びの匂いが鼻腔をくすぐった。

随分と甘えたがっていたようだ……と少しだけ苦笑い。これに気づいてやれないとは、姉として失格だな。

なんとかして挽回しないと。

両手に花ではなく甘えん坊。ぐりぐりと額を押し付ける勢いで撫で撫でを要求して

くる二人の小鬼の頭や背中を撫でて、時にはぎゅっと抱きしめて、二人の好きなようにさせておけば、時間は少しずつ過ぎていく。
　穏やかな時間が流れる中、すでに暗くなっている外を見つめながら、甘えん坊たちの充電が終わるのを、お茶を飲みながら待つのだった。

?･:･:　:*:･:･:　?･:･:　:*:･:･:　?･:･:　:*:･:･:　?

「優緋。待たせてしまってすまなかったな！」
「あ、煉獄さん。おかえりなさい。」
　あれからしばらくして、炭治郎と禰豆子がおやすみモードになったため、木箱の中にのそのそと潜り込んでいるのを眺めていると、煉獄さんが部屋に入ってきた。
　表情はどことなくスッキリしており、匂いからも、今まで感じていた疑問とか、不安とか、そういったものが消えている。
「どうやら、上手くいったみたいですね。」
「うむ！ようやく父上と腹を割って話すことができた！伝えたかったことも、しっかりと伝えることができた！優緋がいてくれて助かったぞ！」
「お役に立てたようで安心しました。ですが声音は少々抑えてください。炭治郎たちが

起きるので。」
「む!?言われてみれば竈門兄妹が見当たらないな!眠ったのか!」
「だから、声を抑えてください。」
ジト目を向けながら、静かにするように告げれば、彼は口を閉じたのち、何度か頷き返してくる。
それならと小さく笑い返した私は、煉獄さんと向き直る。
「ようやく、煉獄さんの悩みが多少なりとも解消できそうで安心しました。しばらくは、いろいろな感情から、気不味いかもしれませんが、きっといい方向に転んでくれるかと。」
「ああ。俺もそう思っている。時間はかかるかもしれないが、きっと、また昔のように戻れると信じてる。」
穏やかな笑みを浮かべながら、きっと前のようになれるだろうと紡ぐ煉獄さんの姿にホッとする。
私の選択は、どうやら間違っていなかったようだ。
「優緋。君には助けてもらってばかりだな。猗窩座との戦いの時も、今回のことも。」
「私自身も、煉獄さんに助けてもらっていることがたくさんありますから、気にしないでください。」

「……。」
「……煉獄さん？」
声の大きさを抑えながら、煉獄さんと会話をしていると、急に彼は無言になって、私のことを見つめてきた。
どうしたのだろう？と思い首を傾げていると、彼は一瞬目を丸くしたあと、なんでもないと首を振る。
よくわからないけど、まぁ、深く追求する必要性はなさそうだし、ここはとりあえず流しておこう。
「さて、では帰るか！」
「そうですね。せっかく夕餉も作りましたし、温め直してから食べましょう。」
「うむ！じゃあ、千寿郎たちに帰ることを伝えてこなくては！」
「わかりました。では、先に玄関先に向かってますね。」
「ああ。すぐに合流する！」
少しだけ煉獄さんの無言が気にならなくもなかったけど、とりあえずは夕餉を用意していたもう一つの炎柱邸へと帰るため、一言二言交わしたのち、玄関で落ち合うことを決めて、炭治郎たちが眠っている木箱を背負って部屋を出る。
本当は、湯呑みとか片付けて行きたかったんだけど、私は客人だからと言って、千寿

郎君と槇寿郎さんに帰宅することを報告しに行ったついでに持って行ってしまったため、玄関に直行するしかなかった。

「待たせた。」

「全然待ってないのですが……まぁいっか……。」

程なくして合流した煉獄さんと一緒に、もう一つの炎柱邸へと向かうための帰路につく。

星が瞬く夜空に見下ろされながら。

１０１．炎の継子は見送りたい

煉獄さんと共に過ごしている屋敷に戻り、「うまい！」と「わっしょい！」が響く賑やかな夕餉を終え、数刻。

炭治郎と禰豆子の寝かしつけをすませた私は、一人、屋敷の縁側から月夜を眺めていた。

眠れないから眺めているわけじゃない。ちゃんとした用事があるから、私は今ここにいる。

「む？優緋。まだ眠らないのか？」

「ええ。まぁ、少ししたらちゃんと眠りますよ。明日もありますからね。」

その用事とは、ここの家主である煉獄さんに関係するものだ。まぁ、ただ単に、彼が今から夜の警備に行くから、それを見送ろうというものなんだけど。

「そうか！ならば安心だな！」

「煉獄さん。一応もう炭治郎たちが寝てるので声は抑えてください。」

「む⁉それはすまなかった……！」

こちらの指摘を聞いて、極力大きい声を出さないように、言葉を紡いだ煉獄さんに苦

笑いを返す。

相変わらず元気な人だ。でも、本来ならば、この姿を見ることはもうなかったのだと思うと、なんだか安心すると同時に、泣きたくなってくる。

その泣きたいという感情は、嬉しさからのものなのかそれとも……いや、考えるのはよそう。

もう、この世界は私の知る世界じゃなくなったのだから、元となる物語に関する知識は、一時的に蓋をしなくては……。

「今から警備でしたよね？お見送りします。」

「それは嬉しい申し出だが、先程優緋が言った通り、明日のこともある。見送りはここまでいいから、もう寝なさい。」

「いいえ、見送ります。」

「寝なさい。」

「絶対見送ります。」

……なんか、似たようなやりとりを籠のおじさんとしたな……なんて少しだけ思いながらも、見回りに向かう煉獄さんを見送ると口にする。

煉獄さんは私に早く寝て欲しいみたいだけど、なんか見送らないと落ち着かないので、とりあえず粘れば、煉獄さんは苦笑いを返してきた。

「君はたまに絶対譲らない時があるな。」と、頭を撫でてくる。その大きく優しい手に安心して、思わずウトウトしかけたが、なんとかそれを堪えて、ゆっくりと立ち上がる。

すると、煉獄さんは、微笑みを浮かべながら廊下を歩き始めた。

それについていけば、煉獄さんから一瞬だけ視線を向けられる。

しかし、すぐに彼は前を向いて、玄関のほうへと向かう廊下を、ゆっくりとした足取りで歩み進めていくのだった。

背後から自分よりも小さな足音が聞こえてくるのを耳にしながら、炎柱、煉獄杏寿郎は、夜の警備に向かうために、今いる屋敷の玄関の方へと向かう廊下をゆっくり歩いていく。

たまに背後を確認するように目を向ければ、赤い瞳と視線が搗ち合った。

その瞬間、どこか拗ねたような表情を向けられる。

寝るように言われたように感じたのだろうか？どことなく子供っぽいその姿に、小さく彼は笑い声を漏らした。

――――……父上に対して物申した時は、あのように凛とした……どこか母上と似たような雰囲気を纏っていたというのに、今の優緋は、年相応の……いや、どこか少しだけ幼い雰囲気があるな。

例えるとしたら、彼女について回り、時には甘えている竈門少年と竈門少女のような、そんな雰囲気があるような気がする。

やはり、この子たちは姉弟姉妹なんだな、と思わされるような一面。普段はしっかりものであろうとする少女の、年相応とも取れる場面に、僅かながらに愛らしさを感じた。

どこか常に張り詰め、何かを抱えているような様子があり、そこそこ共に過ごすことが長くなった自分に対しても、どことなく距離を置いて、あまり頼る様子を見せない……大人びた雰囲気とはどこか違い、少しだけなんらかの危うさを感じるようなことが多い少女だったが、僅かながらでもわがままを言ってもらえるくらいには、距離も近くなっていたようだ。

少しだけ嬉しく思う。だが、その反面として、やはりまだ距離があると感じてしまうのも否めない。

まるで、今の自分たちのような、三歩か四歩ほど離れている距離。

その距離が無くならない限り、彼女はいろいろと抱え込み続けるのかもしれない。

ほんの少し、そんなことを感じた煉獄は、どうすれば距離をもう少し近づけることができるだろうかと考える。

なんとなくだが、誰か一人にでも頼れるようにならなくては、この少女は重荷を背負いすぎて、いつか壊れてしまうのではないかと感じていた。

そうなる前に、少しでも抱えてるものを、自分だけでも支えてやらなくては……どこか、使命感にも似たようなものを抱く。

「む！玄関に着いたな！」

どうしたものかと頭を悩ませているうちに、煉獄と優緋の二人は、玄関先にたどり着いた。

これは、少しだけ考え事はお預けか、と少しだけがっかりしながらも、履き物を変えて外に出る。

それに続くようにして、優緋も草履を履き、玄関先まで足を運んだ。

「では、行ってくる！」

「はい。お気をつけて。煉獄さんの無事の帰りをお待ちしております。」

「ああ！ちゃんと帰ってくるから、優緋はもう寝るんだぞ！」

「わかってますよ。」

「それならばいい！」

一言二言交わしたのち、煉獄は優緋に背中を向けて、屋敷の門を潜り抜ける。

対する優緋は、そんな煉獄の姿が見えなくなるまで、静かに頭を下げていた。

しかし、彼がいなくなったことがわかれば、すぐに頭を上げて、屋敷の中へと戻っていく。

煉獄が戻ってくるまでは、一部の隠と自分たちのみだからと、夜番の隠に彼が戻ってきたら、鍵を開けるようにお願いをした彼女は、明日に備えて眠るのだった。

１０２．訓練の成果

無限列車の出来事から早くも三ヶ月。

煉獄さんの継子として、日々鍛錬と実戦を重ねたことにより、透き通る世界もだいぶ維持できるようになってきた。

まぁ、だからと言って疲れないわけではないが、無限列車の時に比べたら、そこそこ体力を維持することができるようになった。

ついでに、炎の呼吸も申し分ない火力を叩き出せるようにもなったし、なんか、炎の呼吸を使っていても、短時間だけ透き通る世界へ入ることも可能になった。

あと、着々と煉獄さんの技の練度も上がってきているし、最近、動きもかなり早く、火力もやばいことになりつつあるため、彼もそろそろ一歩踏み出してしまうかもしれないと思ってる。

だって、「最近はなんだか調子が良いな！ワハハ！」とか笑ってたし昨日。

いやぁ……痣を出した者が一人いれば、それに共鳴するように痣を出す人が増えていくって本当だったんだな……。

まだ、彼の痣は確認できてないけれど、なんか、うん、もう少しで出しそうだよ……。

煉獄さんが痣を出したら、鬼側ボッコボコにできそうだな……。カウントダウン始まるけど。

十二鬼月……というよりもはや六鬼月だけど、彼らにも善戦できそうだな……。カウントダウン始まるけど。

これ、いいのかな……？いいのか……。だって、早めの攻略に繋がるわけだし……。

なんて考えながらも、今日も今日とて炎の呼吸訓練、および日の呼吸の訓練を行っている。

本気で炎の呼吸をぶっ放したり、日の呼吸をぶっ放したりするから、広い庭に出て、呼吸使用の打ち込み稽古。

まぁ、流石に真剣は使ってないけど。だって、互いに本気で呼吸を使ってるもん。真剣なんて使ったらどうなることか……。

そうそう……最近は〝炎の呼吸・奥義　玖ノ型　煉獄〟……これも教えてもらえるくらいになった。

もちろん、煉獄さんのような馬鹿力が出せるわけじゃない。抉り斬れる範囲は彼ほど広くないし、火力もそれなりに落ちてしまう。

もし、これが炭治郎だったのなら、彼と同じくらいの力を出せたのかもしれないけど、女の身である私では、やはり筋肉のつき方の差があるからか、そこまで使いこなせない

のである。

ああ、だからと言って、しょぼいってわけじゃない。上弦相手にはどれくらいの力が発揮できるかはわからないけど、指令として舞い込んでくる鬼相手であれば即死させるくらいには火力が出る。

まぁ、こう言ったら申し訳ないけど、数字をもらっていない鬼は、なんというか、即行で終わらせてしまうようになってしまったわけだ。

人をそれなりに食い散らかして、力をつけた鬼に対しても、引けを取るどころか圧倒する能力値になってしまっている。

あと、これ本当に申し訳ないんだけど……水の呼吸がだんだん使い難くなってきてる自分がいる。

いや、本当に鱗滝さんや義勇、錆兎や真菰には申し訳ないと思ってる。あんなに型とか呼吸方法を教えてくれていたのに、使いにくくなってきてるんだから。

錆兎と真菰なんて、水の呼吸でどこをどうすれば火力を出せるかとか教えてくれたし、無駄な動きがあるところは何度もアドバイスしてくれて矯正してくれたのに……。

一応ね？使えないことはないんだよ。呼吸方法も完全に忘れたわけじゃないから。

でもね……いざ使おうとしたら肺がすっごく痛くなる……。多分、自分の肺が炎と日に適応するように変化しちゃったんだと思われる。

……これ、無惨倒したあとどうしよう……？落ち着いたらまた会いに行くって約束したのに、ものすっごく会い難い。気まずくて。

会いに行くの、やめたほうがいいか……あ、だめだ。寒気した。約束破ったらダメな気がする。

なんていうか、夜中に枕元に立たれそうな気がした。うん。

……終わったらちゃんと会いに行って謝ろう……。

ま、まぁ、ほら、まだ遊郭での攻防も、あるかもしれないし!?いや、あってくれないと困るんだけど!!時間は多分まだあると思うから!!

鬼と完全な決着をつけるまで、心の準備をする時間はあるだろうから……

「訓練中に考え事とは感心しないな！剣が乱れているぞ！」

「おわぁあぁあ!?」

「ねえちゃ――――ん!!?」

「う――――!!?」

なんて考えていたら煉獄さんに木刀ごと吹っ飛ばされてしまった。

炭治郎と禰豆子の驚いた声が聞こえる中、私は庭をゴロゴロ転がってしまう。

すぐに地面に手をついて起き上がり、煉獄さんの方を向く。

その表情はどこか厳しく、咎めるような匂いがした。

当然だろう。考え事をしてしまったのは私自身だ。しかも、考えていたことは、今は関係なく、むしろ必要ない内容だった。

煉獄さんはそれに気づいたのだろう。だから厳しい目を向けてきている。

「訓練だからと言って、気を抜くな！もし、これが鬼との戦いだったら、今頃足元を掬われて命を落としていたぞ！」

「……すみません。今のは完全に私に非がありました。」

「うむ！素直に非を認めることができるのは君の美徳だな！では、もう一度最初からだ！次は考え事をせず、本気でかかってこい！」

謝罪の言葉を口にして、頭を静かに下げれば、煉獄さんから咎める匂いが消えた。

それを確認した私は、深呼吸を一度したのち、手にしていた木刀を再び構える。

使う呼吸は炎の呼吸。煉獄さん曰く、これまで水とヒノカミ神楽こと日の呼吸にしか触れていなかったため、まだ、完全に炎の呼吸をものにできていないということから、鬼の襲撃がほとんどない朝方から正午までは、こちらの訓練を重点的に強化するとのことだった。

そして、正午、少しの食事と休憩を挟んだのち、今度は日の呼吸の練度を上げるという話になっている。

ちなみに、日の呼吸の時は、炭治郎と禰豆子の二人の強化も行うからと、室内で私、炭

治郎、禰豆子、煉獄さんの四人が入り乱れる複数人の訓練になる。
残念ながら、禰豆子の血鬼術である爆血とかを使った戦い方は室内だと後始末のこともありできないが、日が落ちた頃、たまに煉獄さんから個人指導を受けているあの子の姿を何度か見ているため、大丈夫だろう。
「よし、ここまで！」
「……ふぅ……ありがとうございます。」
「ああ、よく頑張ったな！だが、これからは訓練であろうとも、考え事はあまりしないように！」
「わかりました。」
「それならばいい！ではしばし休息を取るとしよう！」
朗らかに笑いながら、休憩を言い渡してくる煉獄さんに頷き返し、屋敷に入る。
「少し汗を流してきます。」
「うむ！俺も少し水浴びをしてくる！」
そして、私は一時的に風呂場へ。煉獄さんは屋敷の裏手の方にある井戸がある場所へと足を運ぶ。
脱衣所で服を脱いだ後、風呂場に足を運べば、浴槽にはお湯が張っていた。
いつも訓練が終わるたびに、私が汗を流すからか、隠の人が用意してくれていたらし

い。ありがたいことだ。
「よし、さっぱりした。」
　隠の人に感謝しながら、汗をさっと流せばスッキリ。炭治郎と禰豆子も、汗臭くないよと花丸をくれたので、水浴びから屋敷に戻っているであろう煉獄さんと合流する。
「腹が減ったな！何か外に食べに行くとするか！」
「たまにはいいかもしれませんね。」
「そうだろう！では、決まりだな！」
　煉獄さんの元に顔を出せば、外食しに行こうと誘われた。賛成することを伝えれば、煉獄さんが玄関の方へと足を運ぶ。
　それについていくように廊下を歩き、玄関までたどり着くと、炭治郎と禰豆子がえっさほいさと箱を持ってきた。
　箱の扉を開けて待てば、二人は体を小さくして、するすると中へと入っていく。
「竈門少年と竈門少女は、本当に姉である君が大好きなんだな！」
「ええ、嬉しいことに。」
　ワハハと笑い声を上げる煉獄さんと言葉を交わしながら、玄関の外へと足を運べば、煉獄さんもすぐに私の横に並んで歩き始める。
　炭治郎と禰豆子の二人が箱の中に入っているため、あまり振動を与えないように歩い

ている私に合わせてか、煉獄さんも同じペースで歩いてくれている。

こういうことサラッとできちゃうんだな、イケメンって……なんて考えながら、少しだけ煉獄さんの姿を盗み見る。

……彼の気遣いと見えた横顔に、少しだけドキッとしたような気がするけど、気のせいだと思いたい。

１０３．その笑顔は向日葵のようで、どこか惹かれるものだった

「今のところ異常はありませんね。」
「うむ！このまま何事もなく一夜が過ぎると良いのだが！」
「そうですね。このまま穏やかな夜であってほしいです。」
時は夕刻。
日々の鍛錬を終え、私は煉獄さんと一緒に、炎柱の警備担当地区を巡回していた。
今はまだ夜も更けておらず、警備担当地区にある町は、多くの人が行き交っている。
「いつか余裕ができたら、町を歩いて回りたいです。私はこちらの方の町にあまり詳しくないので、どのような店があるのか知っておけば、いつか炭治郎や禰豆子に、新しい着物とかも買ってあげられるし、お腹いっぱいにご飯も食べさせてあげられるので。」
「そうか！竈門少年と竈門少女のためにか！ならば、その時は俺が案内してあげよう！警備担当地区ゆえ、町のことはある程度把握している！」
「本当ですか？ありがとうございます。じゃあ、その時はお言葉に甘えさせていただきますね。」

「うむ！いくらでも頼ってくれて大丈夫だ！」

そんな人々を眺めながら、ポツリと呟いた少しの願望。忙しい中で、平和ではないこの世界で、そんな暇があるわけないことは知っているけど、やっぱりこれだけ賑わっている町にいると、どうしてもちょっと考えてしまう。

すると、煉獄さんから、いつか余裕ができたら共に町を案内すると告げられた。

年甲斐もなく……いや、本当はこれが正しいのだろうか？その言葉に、胸が弾む。

いつになるかはわからないけど、その時は案内してもらおう。そう思って笑顔を返せば、頭を優しく撫でられた。

「そうだ！ちょうどいい機会だ！少しだけ優緋に言いたいことがある！」

「言いたいこと？」

優しくて大きな落ち着く手……心地良いそれを受け止めていると、言いたいことがあると告げられる。

「上手く言葉にするのは難しいが、あまり俺を頼ろうとしない印象を抱いてしまう。一人で何かを抱え込み、悩んで、思い詰め……周りにいる俺や、他の者たちをその目に移さず、ただ、ひたすら一人で前を走り続けていると感じてしまうことがある。何を抱えているのかまではわからない。だが、それは触れてほしくない一線だということもなんとなくだがわかる。ゆえに無理に話せとも言わない。だが、一人で抱え込み過ぎるのは

良くない！そのままでは、いつかその重荷に押し潰されてしまうぞ！君はまだ若い。二十歳にもなっていない少女なんだ。周りの大人を、せめて、俺だけでもいいから頼ってはくれないだろうか？せめて、俺の前だけでも構わないから、肩の力を抜いてくれ。」

「！」

何かやらかしてしまったのだろうか……と少しだけ不安になった。しかし、実際に告げられた言葉は、何かをやらかしてしまったがゆえの注意ではなく、私を心配する声だった。

思わず目を見開く。まさか、そんな指摘をされるとは思わなかった。ちゃんと隠していたはずなのに……。

「……どうして、私が何かを抱えてると思ったんですか？」

素朴な疑問。ある意味で肯定していることになるであろう問いかけを、目の前の剣士に返す。

いつものように、笑えてないかもしれないけど、真っ直ぐと彼を見据えながら。

「なんとなくだ！」

「……は？」

しかし、その疑問はまさかの形で霧散することとなった。

え？何？この人、なんとなくで私が何か抱えてるって思ったわけ？

「な、なんとなく……？」

ウソだろ……と引きつった笑みが出てしまう。

つまり、ただの勘からの発言……？

「俺は優緋や竈門少年のように、匂いで感情を読み取ることも、黄色い少年のように、音で感情を読み取ることもできない！だが！人という生き物は、わずかな感情の変化で表情や体運びに違いが出てくることがある！この三ヶ月間君と過ごしてきたからな！それくらいはなんとなく程度で感じ取ることはできるぞ！君は時に年に不相応と感じてしまうほど違う雰囲気を纏い、どこか上の空になっていることがあるからな！なんとなく察してしまったんだ！」

堂々と胸を張り、わずかな雰囲気の違いと勘で、私が何かを抱えており、それを一人で背負おうとしていることに気がついたことを肯定する煉獄さんに対し、ポカンと間抜けな表情をしてしまう。

しかし、じわじわと何かが内側から湧き上がってきて、それが出ないように口を押さえて抑制する。

でも、湧き上がってくるそれは止まってくれる様子はなく、程なくして口から溢れ出した。

「あっははは!!なんですかそれ!!」

何かもっと決定的なものがあったのかと思ったけど、なんとなくの勘で言い当てられるとは思わなかった。

いや、なんとなくの勘だけじゃないか。感情のわずかな変化とも言っていたし。

顔に出さない自信はあったんだけど、どうやら、煉獄さんには……柱にはわかってしまうくらいには、変化があったのか。

まだまだだなぁ、私も。もうちょっと上手く隠さないと、いつか大きなボロを出してしまいそうだ。

そんなことを考えながらも、私は未だにおさまらない笑い声を、おさめようとする。

しばらくは落ち着かないかもしれないけど。

明るい声音と明るい表情、無邪気という言葉が当てはまるような、眩い笑顔を見せる優緋。

その表情を見た煉獄は、目を丸くして固まった。

それは初めて見る表情だった。

いつもの優緋が見せるものは、穏やかに、緩やかに、微笑むような、そんな笑いばかりだった。

自身の弟と妹に対しても、慈愛に満ちた優しい笑みを向け、甘やかしている姿ばかり

を見せていただけだったため、思わず見惚れてしまったのである。
「はぁ……久々にこんなに笑った。」
煉獄が目をパチクリとしてる中、笑いがおさまったらしい優緋がぽつりと呟く。そして、煉獄の方へと目を向けて、キョトンとした表情を見せた。
「煉獄さん?どうかれました?」
どうやら、煉獄が無言になっていたことが気になったようだ。コテンと首を傾げる優緋の姿に、彼はすぐにハッとする。
「いや、なんでもない!ただ、優緋が珍しく花が咲いたように笑ったからな!少しだけ見惚れてしまっただけだ!」
「……え?」
「ん?……!」
互いに顔が赤くなる。何かしらの意図があったわけではないことを口にしたいが、恥ずかしさからか、黙り込んでしまう。
「……えーっと……」
「……。」
どことなく気まずい空気になり、どうするべきか考える二人。だが、気の利いた言葉が口から出ることはなく、無言の時間だけが流れていく。

周りからなにやらほっこりと見守られているような気もしたため、無言になった二人は、そそくさとその場から足早に立ち去る。
「その……だな……。」
「……。」
――――……一体どうしたら……？
内心で同じような呟きをして、再び無言になる。まるで、言葉を全て忘れてしまったかのように、口にしたい言葉が出てこない。
「……あの、煉獄さん。」
「なんだ。」
長めの静寂。しかし、それはようやく破られることになった。
煉獄から指摘されたこと、それに対しての答えを口にしないと、一時的に停止していた思考をなんとか動かし、優緋は静かに言葉を紡ぐ。
「……心配してくれてありがとうございます。確かに、私はいろいろと抱えているし、煉獄さんや、多くの人に対して隠し事もしてます。」
「そうか。話してくれるだろうか？」
「……すみません。心の準備ができてません。そもそも、明かしていいことなのかどうかもわからない。」

先程熱も落ち着き、ようやく言葉を紡いだ優緋は、懸念するように眉を顰め、自身が抱えているものは、やすやす明かしてもいいものかわからないことを告げる。

それ程までに深刻なものであるならば、なおさら話してほしいところだが、彼女の様子から、今はまだ明かすつもりがないことだけは理解できる。

それなら自分はどうするべきか……煉獄は、思案するように腕を組んだ。

「でも……」

「？」

だが、彼の思案はすぐに霧散する。再び小さく、しかし、しっかりとした声音で、自身の気持ちを口にしたのだ。

「いつか、押し潰されそうになった時……その時は、きっと煉獄さんに声をかけます。しばらくは自分で背負っていくつもりですが……。だから、その時は……どうか、甘えさせてくださいね。」

穏やかな笑みを浮かべながら、しかし、どこか苦笑いしているような、そんな笑みを浮かべながら言葉を紡いだ優緋。

煉獄はその笑みを見つめたあと、力強く頷く。

「君がそう言うのであれば、頑張れるところまで頑張ってみるといい！だが、先程も言ったように、君は一人じゃないんだ。周りには俺も、君の兄妹も、柱だっている！確かに、

まだ、君に思うところがある柱はいるだろう。だが、君の実力はすでに周りに認められている！他の柱もきっと助けてくれるはずだ！だから、安心してその時は頼るといい。」

自信満々に胸を張り、ハッキリとそう告げる煉獄。

優緋は、その言葉に再び明るい笑顔を見せた。どことなくスッキリしたような、眩いばかりのその笑顔は、まるで、向日葵の花のようだった。

甘き闇が充満する宵闇の花に暁を
１０４．日常は終わり、新たな物語が幕を開ける

時は流れて一ヶ月。炎柱邸にて、炎の呼吸と、日の呼吸の訓練、および、炭治郎と禰豆子の戦闘訓練を続け、時には煉獄さんの任務に一緒に出向いて鬼を狩る生活の日々を過ごしていると、突然の来訪者に見舞われた。
「よぉ、煉獄。ちょっと今いいか？」
「ん？宇髄ではないか！久しいな！」
「おう。」
それは、宇髄天元。雷の呼吸から派生した呼吸……音の呼吸を使う音柱。
無限列車があったあの日から四ヶ月経った今日、彼が姿を現すということは、物語が進むという啓示だろう。
「どうかしたのか？」
「ああ。ちと頼み事をな。ところで、アイツ……竈門優緋はどうしてんだ？」
「優緋か？それなら先程訓練を終わらせたところゆえ、呼べばくるぞ！」
「そうか。なら呼んでくれ。」

「む？つまり、主な用事は優緋にあると言うことか！」
「いやお前にもあるっつの。」
「優緋！こっちに来てくれ！宇髄は君に用事があるようだ！」
なんて考えていると、煉獄さんに名前を呼ばれる。
――――……原作では、アオイちゃんたちを攫う人攫いのような状態のところに出会した炭治郎が、なにをしているんだって宇髄さんに声をかけて、そこから物語が展開していく形だったけど、こっちの世界じゃ、宇髄さんがここに足を運ぶ形になるのか。まぁ、柱の継子になってる女隊士が、この世界じゃカナヲだけじゃないからだろうけど。
しかも、名指しで呼ばれたし。力を認められてるってことなんだろうな。
「お、来たな。」
「まぁ、呼ばれましたから。えっと……」
「ああ、そういや柱合会議の時はあんなことになってたからな。自己紹介しとくか。俺は宇髄天元。音柱をやってる。」
「ご丁寧にありがとうございます。私は竈門優緋。見ての通り、炎柱、煉獄杏寿郎さんの継子をさせていただいてます。柱合会議の時は、なんというか、お騒がせしてすみませんでした。」
「気にすんな。まぁ、最初は俺もお前みたいな隊員は派手に反対だったが、下弦の伍、下

弦の壱の討滅の話、さらには、上弦の参の撃退と、一般隊士の救援……いろんな話を聞いて、考えを改めさせてもらった。派手に歓迎するぜ。鬼の兄妹は……まぁ、そこはちゃんと見極めさせてもらうが。」

「炭治郎たちのことは、重々承知しています。ですが、検討していただけるだけでも喜ばしく思います。」

軽い自己紹介。音柱の宇髄天元という言葉に、一瞬だけ存じ上げておりますと言いかけてしまったけど、なんとか我慢して、炭治郎たちのことは見極めさせてもらうという言葉に対しての感謝を述べる。

宇髄さんは、そんな私を見てキョトンとした表情を見せたが、すぐにそれ笑みへと変わり、大きな手を頭に乗せられたかと思えば、わしゃわしゃと思いきり頭を撫でられた。

「おわ!?」

「地味に緊張してんじゃねぇよ硬っ苦しい。気を楽にしろよ。」

「だからって頭を勢いよく撫でる必要ないですよね!?」

「お前が緊張してるからだろ。」

訴えるように睨みつけるが、宇髄さんは気にしていないのか、笑ってる。

あ、でも、手櫛を入れてちゃんと髪を整えてくれた。やっぱりお嫁さんが三人いる男は違う……。

「……ところで宇髄！用事とはなんだろうか？」
「ああ。実は今、俺が追ってる鬼がいるんだが、そいつをもう少し詳しく調べるために女隊員の手が必要でな。で、十二鬼月二体も派手にぶっ潰してるコイツを借りに来たってわけだ。雑魚鬼ならこいつでも十分対処できるだろうし、仮に十二鬼月だったとしても、コイツの力と俺の力がありゃ派手にやり合えるだろ？」
「ふむ、確かにな！」
「だからお前に許可をもらいに来たんだ。継子は柱の許可がないと連れて行けないしな。」
「なるほど！」
「……まぁ、確かに私は十二鬼月殺ってますけど、役に立つかどうか……」
「いや地味に謙遜してんじゃねぇよ。十二鬼月二体もぶっ潰してる奴が役にたたねぇわけないだろ。」
「いてっ」
　軽くデコピンされました。地味に痛い。でも宇髄さんも痛そうにしてる。すみません。私、石頭なんです……。
「まぁ、そう言うわけだから、こいつ借りていいか？煉獄。」
「……。」

デコピンされたところをさすりながら、宇髄さんにもダメージが入ってしまったことに内心で謝罪をしていると、痛みがもう引いたらしい宇髄さんが、煉獄さんに私を自分の任務に同行させて構わないか問いかける。

煉獄さんは、その質問に対して無言だ。やっぱり、継子が別の柱の手伝いに行くというのは、よく検討しないといけないのだろうか？

「なんか別の任務が入ってるなら他を当たるが……」

「いや、優緋に今のところ急ぎの任務はない！なので、連れて行くことは構わないのだが……」

「なんだよ……」

「……どこに行くのかだけ聞いてもいいだろうか？」

無言で首を傾げていると、ようやく煉獄さんが無言を破る。どうやら、行き先が気になるようだ。

まぁ、そうだよな……。継子がどこに向かうのか、預かっている身としては、知る必要があるよな……。

「あー……花街だ。」

「花街に向かうのか？それは……何というか、少々送り出しにくい場所だな！妙なことをさせるわけではないよな？」

花街と聞いて、煉獄さんの目つきが変わる。それは、鬼を追い詰める時に見せる、鋭く、どこか殺意にも似た感情が混ざっている目だ。

匂いもどこか敵意というか……警戒……かな？ピリピリした匂いがする。

その表情を向けられた宇髄さんが目を見開いて固まる。だが、溜息と一緒にその表情はいつもの……と、いうにはどこか焦りがあるかな？

忍にこんな表情させるって……煉獄さん、宇髄さんになにしたんだ……。

「……させねぇよ。戦力に加えるだけだ。」

少しだけ表情が引き攣るのを感じていると、宇髄さんが煉獄さんに妙なことはさせない。戦力に加えるだけと告げる。

すると、先程まで煉獄さんから感じていたピリピリとした匂いは霧散し、いつもの匂いを纏う、笑顔の彼の姿に戻る。

「ならばいい！優緋。宇髄の戦い方も、いい勉強になるかもしれない。だから、存分に暴れてくるといい！炎の呼吸も、もう一つの呼吸も扱える今の君ならば、いつも通りにやれば問題なく勝てるだろう！だが、上弦にぶつかった場合は、まだ力及ばない可能性がある。もし、宇髄が探している鬼が上弦であったなら、その時は必ず宇髄の力を頼るんだ！君一人で背負うことだけはするな！」

その様子に少しだけホッとしながら、私は煉獄さんの指示に静かに頷く。

煉獄さんは、満足そうに頷き返してくれたあと、私の頭を優しく撫でてきた。
「じゃあ、竈門優緋を借りるぞ。」
「ああ。そうだ宇髄！優緋は少々一人で無茶をしようとする様子があるため、時には気にかけてやってはくれないだろうか？」
「そんくらいするさ。柱の継子を一時的とはいえ預かるんだ。ちゃんと無事に返す。」
「うむ！そうしてくれ！もし、何かあれば報告もしてほしい！あと、こちらも手が空き次第合流するつもりでいるから、そこも覚えておいてくれ！」
「わかったわかった。ったく……相変わらず派手に元気な奴だぜ煉獄は……。」
頭を撫でながら宇髄さんと話す煉獄さん。二人の間に挟まれてる私は、頭上で行われている会話を黙って聞くしかできなかった。
まぁ、口を挟める立場じゃないもんね。
……にしても、なんか、こうして見ると新鮮だな。だって、あの物語にはなかったやり取りだし。
改めて煉獄さんが生きているという事実を認識し、反芻する出来事に、少しだけ胸がぽかぽかする。
だって、漫画を読んでいた時、こんなもしもを想像していたから。
「そんじゃ行くぞ。」

「はい。あ、炭治郎たちも連れて行きたいのですが……」
「ん？ああ……。ちゃんと面倒見ろよ。」
「わかってますよ。宇髄さんの手は煩わせません。」
そんなことを考えながら、宇髄さんの許可をもらい、私は炭治郎たちを迎えに行く。
……とうとう始まった遊郭編。私は、被害を最小限に抑えることができるだろうか？

１０５．再集結のかまぼこ隊

炎柱邸出発からしばらくした頃。
私は今、宇髄さんと一緒に蝶屋敷への道を歩いている。
「宇髄さん。」
「なんだ？」
「これ、蝶屋敷への道のりですよね？何かしに行くんですか？」
もしや、原作の通り、蝶屋敷の女の子たちを巻き込むつもりなんだろうか……と考える。
そりゃあまぁ、私だけ連れて行って調査がうまく行くとは限らないし、手札は多いに越したことはないけど、原作と違って、止める役がいないんだよな……。
私が止めればいいんだろうけど、なんて言って止めたらいい？
隊士じゃない子は巻き込まない方がいいってシンプルに言えばいいのか？
「竈門……じゃあ竈門妹と竈門兄も反応するかもしれねぇな……。優緋って呼んで構わないか？」
「え？ああ、はい。構いませんよ。」

「うっし。じゃあこれからは優緋って呼ぶとして……。さっきの質問だが、優緋が強いのは知ってる。派手に噂話が回ってるからな。それに、お前に助けられた一般隊士も、どれだけ派手にすごいやつかってのをよく話してることがあるんだ。だから、お前の実力は認めてるし、仮に柱の誰かが死んだら、次はお前が柱になるだろうとも思ってる。それだけ実力があるからな。鬼を連れてなかったら、派手に取り合いが起こっていただろうよ。」

「は……はは……それは喜んでいいのか悪いのか……」

「まぁ、今はそんなのどうでもいいな……。優緋の実力は確かなもんだ。だから、潜入捜査をしてもらいたかったんだよ。遊郭に潜入してる俺の嫁たちを探しながら、鬼も探ってもらいたかった。だが、煉獄から派手に警告されちまったからな。もし、お前を遊郭に遊女見習いとして潜入させたなんてバレたら、どうなるかわかったもんじゃない。地味に殺気飛ばしてきやがったし……」

「おっふ……」

「だから、お前の代わりになる潜入捜査役を蝶屋敷から連れて行く。そのために向かってんだ。」

「なるほど……よくわかりました……。」

まさかの事実に苦笑いをしたくなる。煉獄さんからしたピリピリした匂いは、宇髄さ

んに向けられた殺気の匂いだったんだな……。
それなら確かに、潜入役が必要だわ……。
まぁ、だからと言って、アオイちゃんたちを巻き込むつもりはないんだけど……。
「よし、ついたな。ちょっと待ってろ。」
なんて考えていると、宇髄さんが一人で蝶屋敷の中へと行ってしまった。言葉かける前に行っちゃったな……なんて考えてながら、蝶屋敷の塀に背中を預けて待つ。
物語通りならば、カナヲとかに邪魔されると思うんだけど……。
「離してください!!私っ……この子はっ……!!」
「ひぃいいい……!」
「うるせぇな黙っとけ。」
「やめてくださぁい!!」
「はなしてください～～!!」
「カッカナヲ!!」
……やっぱりそうなりますよねー……。
ここは原作通りなんだな……と思いながら、蝶屋敷の敷地内へと目を向ける。
そこには、アオイとなほを抱えている人攫いにしか見えない宇髄さんの姿があった。
背後にはきよ、すみ、カナヲの三人がおり、きよとすみの二人は、宇髄さんに抗議す

るように叫んでる。
　しかし、宇髄さんは、そんな二人の抗議など気にしていないようで、そのまま歩いている。
「カナヲ！」
「カナヲさま――――っ」
　さながらドラマのワンシーンのようだ……なんて呑気なことを考えながら、その様子を見つめていると、カナヲが宇髄さんの方へと走り寄り、なほの衣服とアオイの手を握りしめる。
「カナヲ……」
「カナヲさま……」
　軽く泣いているのか、女の子たちの声が震えている。それに比例するかのように、カナヲはなほとアオイを引っ張るように、後ろの方へと体重をかけている。
「地味に引っ張るんじゃねぇよ。お前はさっき指令がきてるだろうが。」
「……。」
「……何とか言えっての!!地味な奴だな!!」
「キャ――――ッ」
「とっ突撃――――!!」

「突撃――――!!」
「ちょっ…てめーら!!いい加減にしやがれ!!」
「んっふ……!!」
思わず吹き出してしまう。原作でもこのシーンは面白かったけど、それが動くと余計に笑えてしまう。
だって向こうじゃ無限列車の話まではアニメ化……まぁ、正確には無限列車編は映画だったけど。とにかく、映像作品になったのはここまでだ。
まぁ、私は観に行けなかったんだけど。観に行こうとしてたら、竈門優緋になっていたわけだし。
二期のアニメがあったらここも映像になっていたんだろうな……。それも結局観れなかったが。でも、当事者の一人として、ここに立ち会えたわけだからちょっと嬉しかった。
喜んでる暇もないんだけどな。だって、これから遊郭編に進むんだし。気を引き締めないとダメだ。
「宇髄さん。何か女の子たちに絡まれてますね。」
「優緋……てめー笑ってないで何とかしろ……」
おっと。どうやら笑っていたことがバレちゃったみたいだ。ジト目で睨まれた。

「すみません。あまりにもおもしろ……じゃなくて、微笑ましかったのでつい。」
「おい、地味に面白いって言いかけただろ。」
「優緋さん――――っ笑ってないで助けてください!!」
「人攫いです!!人攫いが出たんです!!」
宇髄さんからはツッコまれ、きよとすみの二人からは、人攫いが出たから助けてくれと懇願される。
再び漏れそうになった笑い声。でも、何とかそれは堪えて、宇髄さんに近寄る。
「アオイたちを離してあげてください。これからつく任務に、女手が必要なのはわかりますが、無理矢理は良くないですよ。」
「仕方ねーだろ。継子は柱の許可いるから連れて行けねぇんだよ。胡蝶に行き先言ってみろ。俺がボコられるだろ。お前の場合は条件付きで煉獄に許可もらえたけどな。」
さっさと行くぞと踵を返す宇髄さん。アオイとなほから助けてくれと懇願するような目を向けられた。
やれやれ、と軽く肩を竦める。私の交渉で何とかなるといいけど。
「まぁ待ってください。小脇に抱えてるなほは鬼殺隊の隊員じゃないですよ。隊服、着てないでしょう?」
「あん?」

とりあえず、まずは簡単に交渉できそうななほの名前を出す。隊服を着ていない……その指摘を聞いた宇髄さんは、一度なほに視線を落とし、しばらく彼女を見つめる。

そして、そっと地面に下ろし始めた。隊服を着てないことがわかったから、力にならないと判断したんだろう。

さて……最後にアオイだが……。

「優緋。行くぞ。対して役に立ちそうもねぇが、こっちの方はこんなんでも一応隊員だしな。」

なほを解放した宇髄さんから、再び出発の声をかけられる。このままじゃ、アオイが連れて行かれそうだな。どう対処するべきだ?

確か、アオイは怖いっていう単純な理由から、前線に出れない子だったはず……。まぁ、とんでもない力を持った化け物と戦うわけだから、当然の理由だよな。

うーん……どうやって説得するか……あ……。

「……待ってください、宇髄さん。」

「今度は何だよ。こっちは時間押してんだぞ。」

「いや……しのぶさんにアオイがあそこに行ったとバレたらまずいのでは……と思いまして。ほら、鬼殺隊の隊員はみんな鎹鴉を連れてますし、彼女の鎹鴉が、しのぶさんに告げ口をしたとしたら? 口封じとして彼女の鎹鴉を買収できたとしても、共に動く主が

怪我をしたり、危篤状態に陥った場合とかは報告義務がありますし、あとあとバレて、ボコられたら……宇髄さんでも無事では済まなさそうなんですけど。だってしのぶさんの家族ですよ？彼女。」

「……。」

思案して出てきた言葉を口にすれば、宇髄さんが無言になり、肩に担いでるアオイに目を向ける。

宇髄さんから何かに葛藤してる匂いがした。多分、女手が必要な任務だから連れて行きたいって感情と、黙って連れて行ったことが鎹鴉を通じてバレ、その後に訪れるであろう展開を避けたい感情の狭間にあるんだろう。

これなら、何とか説得できそうだな。ちょうど、善逸と伊之助の匂いも近づいてきてるし。

「そこで提案なんですが……ちょうど帰還した鬼狩りが二名いますし、彼らを連れて行くというのはどうでしょう？私と、彼らの二人なら、怒られることもないと思いますけど。」

首を傾げながら言葉を口にすると同時に、二人の鬼殺隊が姿を現す。善逸と伊之助の二人組だ。

「何かよくわかんねーが、俺は力が有り余ってるぜ！任務ならついて行ってやってもい

いぞ！」
「俺は伊之助みたいに体力有り余ってるかと言われたら微妙なところだけど!!ゆ、ゆゆゆ、優緋ちゃんが行くならつ、ついて行くから!!」
「……。」
現れた善逸と伊之助の二人に、宇髄さんが軽く殺気にも似た思い気配をぶつける。
それを食らった善逸は涙目になりながら、伊之助は威嚇するように身構える。
「……仕方ねぇ。その提案に乗るとするか。胡蝶と一悶着すんのは、避けたいんでね。」
しばしの沈黙。しかし、すぐにそれは破られ、宇髄さんはアオイを地面に下ろす。
「じゃあ行くぞ、優緋。そこの二人も、俺に逆らうんじゃねぇぞ。」
「わかりました。」
「俺……選択間違えてないよね……？」
「やってやろうじゃねーか!!」
何とか、アオイたちを巻き込む展開だけは避けることができたな……と軽く安堵しながら、蝶屋敷から離れて行く宇髄さんの背中を追う。
そういや……原作では炭治郎たち女装させられてたけど、これ……どんな展開になるんだ……？

１０６．突入準備　其ノ壱

「……で？どこ行くんだオッさん。」
「伊之助。流石に宇髄さんはまだオッさんって年齢じゃないと思うんだけど？」
蝶屋敷から出発してしばらくした頃。歩進める道の途中で、伊之助が宇髄さんに声をかける。
私は、伊之助のオッさん発言に対して少しだけ指摘を入れたのち、宇髄さんに目を向けた。
煉獄さんと離れる時にも聞いたし、原作を知っているからわかるけど、話はちゃんと聞かないといけないからね。
「日本一、色と欲に塗れたド派手な場所。鬼の棲む遊郭だよ。」
……振り向きながらイケメン顔でこう言われると、何かシュールだと思ったのは私だけだろうか？
いや、内容は知ってますよ？言われる言葉もわかってたし、その時の体勢もわかってたけどさ。うん。やっぱりシュールだ。
「いいか？俺は神だ！お前ら……いや、優緋はないな。実力もあるし、階級も高い。って

わけでお前ら二人は塵だ！まず最初はそれをしっかりと頭に叩き込め!!ねじ込め!!俺が犬になれと言ったら犬になり、猿になれと言ったら猿になれ!!猫背で揉み手をしながら俺の機嫌を常に伺い、全身全霊でへつらうのだ!!そして、もう一度言う。俺は神だ!!」

……これ、何て返答したらいいわけ？

言葉を失って無言になる。善逸が言ってた通り、確かにこれはやべぇ奴扱いしたくなるわ。

見た目はいいんだよ？それなりにこっちも気遣ってくれるし、頼り甲斐はあるんだよ？でも、言動が小学生……いや、何でもない。

「神なんですか……。」

何て言ったらいいのかわからなくて、黙っておこうと思ったんだけど、神発言に対してつい呟いてしまう。

ツッコミはしっかりと口にしないとね……。

「その通り！俺は、派手を司る神……祭りの神だ!!」

「……。」

何言ってんだこいつって感想が出そうになったが、何とか飲み込む。上官であり年上のこの人に、そんな口叩いたら失礼だろうから。

ものすっごくツッコミたくなったけどな……。

「俺は山の王だ。よろしくな祭りの神。」
「……伊之助、張り合うな。」
「あで!!」
思わずチョップを伊之助の頭にしてしまった。だってややこしくなるっつーか、うん、頭痛くなる。原作読んでた時は笑えたんだけどね。
いざ、こんな風に張り合われると流石にドン引きするし、ツッコミたくなる。
「何言ってんだお前…。気持ち悪い奴だな。」
――――……いや、アンタも同類だよ!!
内心で声を大にしてツッコむ。遊郭編に入る前の箸休めのギャグパート。物語としては笑えるけど、当事者になると笑いよりドン引きしたくなる感情の方が上回る。
善逸からも現状に対してドン引きしてる匂いがする。
伊之助は気持ち悪いと言われたからか、怒りの匂いがしてる。
「花街までの道のりの途中に、藤の家があるから、そこで　準備を整える。ついて来い。」
何か少しだけ頭が痛くなってきたわ……なんて考えていると、宇髄さんがくるりと踵を返した。
シャラ…という飾りの音が一瞬だけ聞こえ、辺りに僅かな風だけを残して彼は姿を消す。

いや、正確には姿を消していない。足音を立てることなく、その場から走り去ったんだ。

彼の動きは目で追えていた。かなりの速さだったけど、確かに捉えることはできた。

これは、痣を発現させた副作用の一つなんだろうか？透き通る世界は使っていないはずなんだけど。

そんなことを思いながら、私は自分の足に力を加え、背に背負っている箱を軽く叩く。今から移動するから……その意味を込めて。

箱の中にいる二人は、合図の意味をすぐに理解したのか、互いを守るようにくっついたらしい。動かない様子が確認できた。

ありがとう、と小さく呟き、私は炎の呼吸特有の呼吸をその場で使う。

多分、これなら宇髄さんに追いつけるはず……。炎の呼吸なら、移動速度もかなり上がるし。

どうしても足腰の強化が必要だったからね、これ。

炎の呼吸の壱ノ型。不知火を使う要領で地面を強く蹴り上げる。すると、大きな爆音のような音が辺りに響き、かなり離れていた宇髄さんとの距離を一気に縮めることができた。

「えええええ!?優緋ちゃん速すぎない!?」

「すげぇ!!どうやったんだあれ!?俺もやりてぇ!!」
　かなり離れた位置から、善逸と伊之助の声が聞こえてくる。軽く背後を振り向いてみると、胡麻粒くらいにしか見えないくらい離れていた。
「よく追いついたな。派手に驚いたぜ。」
「炎の呼吸、意外と足の力がいるんで、使いこなすためには強化が必要だったんです。だから、鍛えたんですけど……何か、副作用なのか、足も速くなっちゃいました……。」
「あー……まぁ、炎の呼吸はな……。確かに、ありゃ足と腰が大事だよな……。煉獄とは何回か一緒に任務に行ったことがあるが、あの時も派手に速かったしな、あいつ。」
「でしょうね。無限列車の時も、かなり後方の車両から一瞬にして私がいた前方車両に来ましたし、そのあとも一瞬にしてまた後方車両の方へと向かわれましたから。」
「なるほどね。それを身につけちまうたぁ、やるじゃねぇか。」
「お褒めに与り光栄です。……が、私なんてまだまだですよ。」
「地味に謙遜すんじゃねぇってさっきも言っただろ。ったく……四ヶ月そこらでよくそこまで身につけることができたもんだ。煉獄が継子にしてなかったら俺が引き取りたかったぜ。」
「……残念ながら、私は煉獄さんの継子なのです。でも、ちょっと気にはなりますね。音柱である宇髄さんの戦い方がどんなものか。」

「今度教えてやろうか？」

「気が向いたら引き受けさせていただきますね。まぁ、炎柱の継子を辞めるつもりはありませんが。」

後方で慌てて私と宇髄さんを追いかけ始める善逸と伊之助を確認しながらも、近くなったことにより言葉を交わせる位置にいる宇髄さんと話しながら足を動かすのだった。

１０７．突入準備　其ノ弐

……再び時は経ち、宇髄さんが口にしていた藤の家にたどり着く。
「ハァ……ハァ……ッ……優緋ちゃ……はやすぎ……っ」
「ゼェ……ゼェ……ッ……優緋……っ……てめ……どうやってそんな強くなって……っ」
「……流石に飛ばしすぎた？」
「いや、こいつらの体力が無さすぎるだけだろ。」
「そうなんでしょうか……？」
「普通は、あれくらい走っただけじゃ疲れねーもんさ。基礎体力無さすぎだろ。」
「おれ……らを……っ……アンタらと……一緒にすんな……っ」
「ゼェ……ハァ……ゼェ……ハァ……ッ」
特に体力の消費をしていない私と宇髄さんの前で、善逸と伊之助の二人は息を切らして項垂れる。
なんとか呼吸を整えようとしてるみたいだけど……なんか時間かかりそうだな……。
やっぱ、私、体力が桁違いに上がり過ぎたっぽい。

炎の呼吸と日の呼吸……両方を問題なく使えるように、煉獄さんに鍛え上げられたからな……。

「さて……じゃあ、準備をするとしますか。」

なんて考えていると、宇髄さんが藤の家の扉を叩く。すると、そこかやこの藤の家の家主と、その家族が姿を現し、私たちの姿を見るなり、

家の中へと案内してくれた。

お邪魔します、と一言声をかけて家の中に入る。宇髄さんはすでに家主へといろいろ指示を出していた。

「すぐに用意いたします。待つ間、お茶でも飲んでゆっくりしてください。」

宇髄さんがあれこれ指示を出し終えた頃、家主さんが待つ間、お茶でも飲んでくださいと一言告げて、その場から去って行く。

入れ替わるようにやってきた家主さんの奥さんは、人数分のお茶と、そのお茶請けであるお煎餅を用意して、頭を下げて立ち去っていった。

そのお茶請けであるお煎餅を用意して、頭を下げて立ち去っていった。

「準備をするまでもうちょい時間がかかるみたいだからな。今のうちに簡潔にどうするべきか指示を出す。いいか？遊郭に潜入したら、まず俺の嫁を探せ。俺も鬼の情報を探るから。」

それを確認した宇髄さんが、これからのことに対する指示を口にする。
その瞬間、辺りに落ちる静寂。私のお茶を飲む音と、お煎餅を食べまくる伊之助の咀嚼音だけがこだまする。
「とんでもねぇ話だ!!」
「あ〟あ?」
「ふざけないで下さい!!自分の個人的な嫁探しに部下を使うとは!!」
「はあ!?何勘違いしてやがる!!」
その静寂を破ったのは善逸だった。思わず笑いそうになる。確かに、宇髄さんの今の言葉だと勘違いが生まれるのも無理はない。
原作を知ってるから、彼が口にした嫁というのが、すでに娶っている三人の女性であることだとわかるけど、知らなかったら彼の嫁＝結婚したいから女性を探して来いに聞こえなくもないからな。
私も、次のページを見るまではそんな認識だった。
「いいや、言わせてもらおう!!アンタみたいな奇妙奇天烈な奴はモテないでしょうとも!!たがしかし!!鬼殺隊員である俺たちをアンタ、嫁が欲しいからって!!」
「馬ァ鹿かテメェ!!俺の嫁が遊郭に潜入して鬼の情報収集に励んでたんだよ!!定期連絡が途絶えたから俺も行くんだっての!!」

「……そういう妄想をしてらっしゃるんでしょ？」
「クソガキが!!」
「ングフッ!!ゲホッゲホッ!!やば……変なところにお茶入った……!!」
「おいおい、大丈夫か優緋……。」
何とか吹き出さないように堪えたら、飲んでいたお茶が変なところに入り、咽せてしまう。
宇髄さんから呆れの匂いがした。でも、背中はさすってくれるらしい。
「何やってんだよ。」
「すみません。」
「ったく。気をつけろよ。」
頭を撫でられ、気をつけろと注意される。謝罪をしながらわかりましたと一言告げれば、微笑み返された。
うん。やっぱり宇髄さんはイケメンだ。これは女性隊員にモテる。まぁ、たまにちょっと残念なイケメン感があるけど。
「ほら。これが鴉経由で届いた手紙だ。嘘でも妄想でも何でもねぇよ。」
「ぎゃっ!?」
なんて、呑気なことを考えていると、どこから取り出したのか、大量の手紙の束を善

逸に投げつけた。
　投げつけられた善逸は、顔面でその束を受け止め、ひっくり返る。
「いっぱいありますね。」
　一枚一枚丁寧だけど、どこか違う書き癖がある手紙に目を通しながらポツリ。
　漫画を見るだけじゃよくわからなかったけど、こんなにいっぱいあったんだ。
「ああ。三人いるからな。嫁。」
「なるほど。俗に言う一夫多妻制って奴ですか。」
「そうだな。俺が生まれた里の風習でな。」
「へぇ……。宇髄さんのような素敵な方を旦那様にもらったお嫁さんたちは、きっと幸せなんでしょうね。」
「当然よ。女を幸せにしてやれないほど、俺は落ちぶれてねぇさ。お前も来るか？」
「冗談もほどほどになさってください。」
「バレたか。」
　宇髄さんと軽口を叩きながら、床に散らばる手紙をまとめる。にしても、鬼についてあまり書かれてないな……。
　いや、それと思わしき存在に目星をつけることはできた、という内容がちらほらあるから、完全に情報が掴めていないわけではない……か。

「三人!?嫁…さ…三!?テメッ…テメェ!!風習だとしても何で三人もいんだよざっけんなよ!!優緋ちゃんに近づくn…おごぇっ」
「……何か文句あるか?」
「……痛そう。」
騒いだ善逸が宇髄さんの腹パンで撃沈した。痛そうだなって感想を素直に口にしながら、手紙を束ね直して、宇髄さんに返却する。
「おう。丁寧にまとめてくれてありがとな。」
「これくらいは当然です。にしても、手紙に一通り目を通しましたが、どれにも来る時は極力目立たないように、と念を押す言葉が綴られてますね。具体的にどうするか教えてもらっても?」
「そりゃまあ変装よ。不本意だが地味にな。お前らにはあることをして潜入してもらう。俺の嫁は三人共優秀な女忍者、くの一だ。花街は鬼が潜む絶好の場所だと俺は思ってたが、以前に俺が客として潜入した時、鬼の尻尾は掴めなかった。だから、客よりももっと内側に入ってもらったわけだ。すでに怪しい店は三つに絞っているから、お前らにはそこで俺の嫁を探して情報を得る。」
「ん?私もですか?」
「ああ。本命の潜入方法は、煉獄からの注意もあるし、させるつもりはないが、多少なり

とも情報を得る方法は他にもある。それなら、変な奴に絡まれる頻度も少ないだろうし、使えるだろうと思ってるから、優緋にはこっちの方法を使ってもらう。」

「はぁ……わかりました……。」

なんか、明らかに私の知らない展開に入りそうな気がする。いや、それは覚悟してたけどさ。

本命……って言うのは、間違いなく遊女の見習いとして入る方法だと思うけど、もう一つの方法……ってなんだ……？

「潜入先の遊郭は『ときと屋』、『荻本屋』、『京極屋』の三つ。集めて欲しい情報は、ときと屋の『須磨』。荻本屋の『まきを』。京極屋の『雛鶴』だ。」

本命じゃない潜入方法というものがなかなか思い付かず、首を傾げていると、宇髄さんからどこで誰の情報を集めて欲しいのかを告げられる。

となると、だ。多分、そろそろ伊之助の地雷発言が入るはず……。

「嫁もう死んでんじゃねえの？ごふ!?」

「あ……」

……はい、見事なまでの腹パンが入りました。伊之助はノックダウンです。

「……何かすみません。うちの同期が。」

「いや、お前が謝ることじゃねぇから気にすんな。」

いろいろと失礼なことをしたような気もしなくもない、と思いながら、宇髄さんに謝罪の言葉をかける。

彼は気にするなって言ってくれてるけど、匂いですごく怒ってるのがわかった。

その怒りの矛先は私に対してじゃないのもわかってるけど。

「ご入用の物をお持ち致しました。」

「どうも。」

伸びてる善逸と伊之助を見つめながら、あとで二人にも謝罪させとこうか……と考えていると、藤の家の家主さんたちが、何かを持って、部屋に戻ってきた。

多分、あの中には化粧道具とかが入ってるんだろうな。

「とりあえずまずは優緋から始めるか。」

「ん?ああ、変装ですね。わかりました。」

「おう。」

そんなことを思いながら、私は宇髄さんの指示に従って行く。

遊郭突入まで、あと数時間。

１０８．いざ、吉原遊廓へ

吉原遊廓。男と女な見栄と欲、愛憎渦巻く夜の街。

遊郭・花街は、その名の通り、一つの区画で街を形成している。

ここに暮らす遊女たちは、貧しさや借金などで売られてきた者が殆どで、たくさんの苦労を背負っている。

その代わり、衣食住は確保され、遊女として出世できれば裕福な家に身請けされることもあった。

中でも、遊女の最高位である〝花魁〟は別格であり、美貌・教養・芸事全てを身につけている特別な女性。

位の高い花魁には、簡単に会うことすらできないので、逢瀬を果たすため、男たちは競うように足繁く花街に通うのである。

……と、漫画に書いてあったナレーションを内心でしてみるものの、私の置かれているこの状況はなんなんだ。

「どうしてこうなった……？」

「派手に似合ってんじゃねぇか。」

「それは、ありがとうございますと言っていい奴なんですかね……。男装が似合うって言われるの、なんか複雑なんですが？」

「ゆ、優緋ちゃん……かっこよすぎるでしょ……。」

「この服窮屈だ。脱ぎてぇ。」

私の目の前には、原作通り、頓珍漢な化粧を施された善逸と伊之助の姿。私の隣には、化粧を落とし、髪も下ろした色男モードの宇髄さん。

そして、なぜか男装させられている私という謎の構図がこの場にできている。

ことの発端は、数時間前の藤の家。

善逸と伊之助がノックアウトしてる間に、私の変装を済ませるといった宇髄さんの発言からだった。

――――……優緋には男装をして、客として遊郭に足を運んでもらう。

――――……え？男装？

――――……安心しろ。化粧は得意だから、立派な色男の姿にしてやるよ。

――――……いや、安心できないというか、男装って聞いてないんですけど？

――――……ほら、さっさと済ませんぞ。あとで善逸と伊之助のもしないといけないしな。

……と、まぁ、こんな会話があったあとに、パパパッと化粧をされてしまったとい

う。

鏡見せられた時はかなりびっくりした。だって、結構な男前が映ってたからね。化粧ってこんなに見た目を変えるもんなのかと思ったよ。で、そのあとは限界までサラシで胸を潰された。

嫁入り前の女ってこともあったからか、藤の家の女将さんが手伝ってくれましたってね……。

まぁ、それはそれとして……だ。

「私、遊郭とか行ったことないから何したらいいのかわからないのですが……？」

「とりあえず、人探ししてるってだけ言っとけ。姉でも妹でもいいから、生き別れた家族がこっちに売られたって話を聞いて調べにきたって感じにな。客としてうろついていれば、常連と顔を合わせる可能性もあるだろうし、店に入れば、芸妓や遊女と話す機会が自ずとできる。その伝を上手く使って俺の嫁を探しをしてくれ。まぁ、中に入るよりかは情報を得にくいかもしれないが……」

「わかりました。」

どうやって客として情報を集めたらいいんだよ、と思いながら、方法を問うてみると、どうしたらいいか教えてもらえた。

とりあえず花街を歩きながら遊びにきた人から話を聞いたり、芸妓さんの接待を受け

ながら、情報を集めたらいいみたいだ。

まぁ、やり方がわかったところで、上手く行くかはわからないわけだけど……やれるだけやってみるとしよう……。

「じゃあ、まずはこいつらを遊郭に潜入させるか。優緋もついてこい。」

「はい。」

多少なりとも不安を抱きながらも、善逸たちを連れて行く宇髄さんについていく。

そういや、私は男装させられて、客として潜入しないといけないことになったわけだけど……どんな話の流れになるんだろう……。

原作では、ときと屋に宇髄さんが三人を売り込む形で足を運び、その美貌にノックアウトしたときと屋の女将さんが女装炭治郎こと炭子を引き取ってもらう話になっていたけど……。

「ん?オイ!なんかあの辺、人間がウジャコラ集まってんぞ!」

……あ、そういう流れ?本来なら炭治郎をときと屋に潜入させるシーンが、カットされる感じ?

なるほど……。

「あー……ありゃ〝花魁道中〟だな。『ときと屋』の〝鯉夏花魁〟だ。一番位の高い遊女が客を迎えに行ってんだよ。それにしても派手だぜ。いくらかかってんだ。」

「嫁!?もしや嫁ですか!?あの美女が嫁なの!?」
「近い!!」
「あんまりだよ!!三人もいるの皆あんな美女なんすか!!」
「嫁じゃねぇよ!!こういう番付に名前が載るからわかるんだよ!!」
……賑やかだなぁ、この二人組。ある意味でいいコンビなんだろうか。っていうか宇髄さん。
そんなに本気で殴ったらまた善逸が気絶しますよ……。
「ちょいと、そこのお兄さん。」
「……ん?」
「あんただよあんた。」
「……ああ、僕ですか。どうかなさいましたか?」
宇髄さんと善逸のやり取りを他人事のように眺めていると、背後から声をかけられた。
振り向いてみれば、そこには一人の女性。背格好からして……いや、漫画で見たわこの人。
『荻本屋』の女将さんじゃん……。原作通り、伊之助を引き取りに来たわこの人。
「この子、うちで引き取らせてもらいたいんだ。構わないかい?」

「引き取りたい？」
「ああ。『荻本屋』の遺手……アタシの目に狂いはないさ。」
「なるほど。……兄様。先程の話、聞いていましたよね？」
「ああ。荻本屋の女将さんが引き取ってくださるとはありがたい！ぜひ、仕込んでやってください！」
「よろしくお願いしますね。」
ここは原作通りなんだな……と少しだけ苦笑いをしそうになりつつも、宇髄さんに声をかければ、彼は、してやったりといった雰囲気を一瞬見せたあと、是非とも仕込んでやって欲しいと、猪子こと伊之助を荻本屋の女将さんに託す。
立ち去っていく女将さんに対して頭を下げて、見送ったあとは、宇髄さんへと視線を戻す。
すると、彼は小さく笑って、私の頭を撫でてきた。
「派手に演技できてんじゃねぇか。これなら、客として潜入してもうまくいきそうだ。」
「ありがとうございます。にしてもすみません。急に宇髄さんのことを兄様なんて呼んでしまって。」
「いや、むしろいい機転だったぜ。怪しまれないよう、自然体でできることは、潜入捜査をするにあたり、必要な技術だからな。この調子で、派手に情報収集頼むわ。」

「わかりました。」
宇髄さんと少しだけ会話をした後、私は善逸に視線を向ける。
すると、宇髄さんも善逸に目を向けては、どうするかなこいつ的な目を彼に向けていた。
私と宇髄さんの視線を浴びた善逸は、ショックを受けたように固まっていた。自分より先に、伊之助が就職しちゃったからだろうか……。
「優緋。とりあえず俺はこいつを何とかしてくるから、ときと屋の方に先に行って調べてみてくれ。」
「わかりました。善逸……じゃなくて善子ちゃん。頑張ってくださいね。」
「え〟!?」
「行くぞ。」
「い〟いやぁああ――――!!ちょっと待って、置いてかないでぇ――――!!」
首根っこを引っ掴まれて引き摺られていく善逸に手を振りながら、ときと屋の方へと足を運ぶ。
まぁ、場所がどこかまではわかってないから、花街を歩いている男性たちにお店がどの場所にあるか聞きながらだけど。
……にしても、何か、一部女性たちの視線が痛いような気もする……。男装ってバレ

たのかな……。バレてないといいんだけどな……。

１０９．吉原の人探し

あれからしばらくして、とりあえず『ときと屋』に客として足を運んだ私は、少しだけ情報収集を行なっていた。

と、言っても、客である以上、お店の中で働いている人たちと話すタイミングがなかなか掴めなくて、収穫するのは難しいのだけど。

「ああ、すみません。少しいいですか？」

「はい？」

「お忙しい中申し訳ないのですが、少しだけお話ができたらと思いまして。」

まぁ、何とかたまに隙をついて廊下を行ったり来たりしている人たちに声をかけることができるから、全くタイミングがないというわけでもないから、マシな方か……。

「実は、この『ときと屋』に生き別れの姉が買われたと言う噂を聞きまして……。そのことを調べにきたんですが。」

「生き別れのお姉さん……ですか？」

「はい。須磨という名前の姉なのですが、何か知ってることはありませんか？」

「……すみません、少しわからなくて。」

「そうですか……。ありがとうございます。」
「いいえ。こちらこそ、お力になれず申し訳ありません。」
だからと言って、簡単に情報が聞けるものでもないけど。うーん……もうどこに行ったらいるかわかってるし、直接そっちに行くべきか？いや、無理だな。
もし、原作通り、狂いがまだないのであれば、須磨さんはすでに吉原の地下にある空間に囚われている状態だ。あそこは、伊之助や宇髄さんだからこそ入り込むことができる場所。宇髄さんのように、特殊な火薬を作ることができればすぐにでも向かえるわけなんだけど、残念ながら、私は扱えない。
時間が遅れていたら……と探してみてはいるけど、空振りばかり。
どっちにしろ、行動は慎重に取らなくてはならない。だって、ヘマをして堕姫ちゃんたちにバレるわけにもいかないし……。
「……どうしたものか……。」
うーん……と首を傾げながら、どのように行動を取ろうかと頭を動かす。
「優緋。ちょっとこっち来い。」
「……ん？」
不意に、私の名前が呼ばれる。驚いて辺りを見渡せば、屋根の上から宇髄さんが手招きをしていた。

それに従い、お店を出て人通りの少ない場所へと足を運べば、私の意図を汲み取っていたらしい宇髄さんが、屋根の上から手を差し伸べてくれた。
すぐにその手に自身の手を伸ばして飛べば、伸ばしていた方の手を宇髄さんに掴まれ、そのまま屋根の上に引き上げられた。
「……力持ちですね。」
「当然よ。柱を舐めんなってな。」
いや、まぁ、そうだけど。私の体重に木箱と竈門兄妹の体重が合わさってるから相当な重さなはずなんだけど?
何で軽々と引っ張り上げた上、そのまま抱えて屋根をぴょんぴょん飛び移れんのさ……。
「何の用でしょうか?」
「ああ。ちょいとお前の意見を聞きたくてな。」
「意見?」
「……ここにいる鬼。お前は、どう捉えてる?」
「え?」
なんて考えていると、宇髄さんが私を呼び出した理由を口にした。どうやら、鬼についての意見を聞きたかったようだ。

「実は、ずっと見張ってるんだが、どうも煙に巻かれているように気配がはっきりしなくてな……。嫌ぁな気配はあるんだが……。しかも尻尾もなかなか出さねぇし、もしかしたら……って、厄介な考えが頭を過って仕方ない。そこで、これまで下弦二体、および、上弦一体と接触したことがある優緋に意見が聞きたい。お前から見てどう思う?」

そう言われて少しだけ考える。軽く嗅覚を利用して、この場にある空気の匂いを確かめた。

……炭治郎が言っていた濁った匂い……確かに、この街にはその匂いが充満している。

いろんな匂いが混ざってるからかとも思ったけど、何か違う気もするんだよね。

あと、うん。多分これ、堕姫ちゃんの匂いだ。ここから離れてる位置にある京極屋の方から、甘くて、だけど、どこか尖ってる匂いがある。

原作の知識もあるからか、かなり強く感じるんだよなぁ……。

「私の私見ですが、多分、上弦が隠れているんじゃないかなとは思います。怪しいのは、やっぱり『京極屋』かな……。やけに甘ったるくて、だけど、妙な刺激臭を感じます。」

「『京極屋』……か……。」

「はい。」

一瞬、誤魔化そうかと思ったけどやめた。だって、もう私は原作に囚われないように

しようって思ってるから。
　早めに対処できるなら、さっさと対処した方がいい。
「ありがとよ。じゃあ、『京極屋』の方を中心に探ってみるか。」
「そうですね。」
「ああ、優緋。お前はもう少し俺の嫁たちの捜索も続けてくれ。もし、優緋の判断通り、上弦がいるのだとしたら、見つかってしまった可能性もある。だから、まずはそっちの方の安全を優先に動き、可能であれば鬼の探りを行なってくれ。それと、これをいくつか預けておく。余裕があったら切見世の方も探ってもらえるか？」
「切見世？」
「ああ。客がつかなくなったり、病にかかった遊女が送られる最下級の女郎屋だ。離脱するために、そっちに行くって判断をとってる嫁もいるかもしれないから、余裕が有れば向かってくれ。余裕がなけりゃ、そのまま、遊郭内を探すんだ。」
「わかりました。」
「よし。何かあったら、俺のところの鎹鴉……虹丸をお前の方に飛ばす。確認次第、虹丸の案内に従って加勢してくれ。」
　宇髄さんの指示に従い、小さく頷けば、彼は笑みを浮かべたのち、私の頭を撫でてきた。

「無茶だけはすんじゃねぇぞ。絶対にな。」
「それくらいわかってますってば。……もし、何かわかればまた伝えにきます。」
「ああ。次は、定期連絡の時にな。」
そこまで話した私と宇髄さんは、すぐにそれぞれやるべきことをこなすために離れる。
……堕姫ちゃんが潜伏してる場所、教えちゃったけど、いい方に転がってくれたらいいな……。

１１０．定期連絡。行方知れずの善逸。

「だーかーらー!!俺んとこに鬼がいたんだよ!!こういう奴がいるんだって、こういうのが!!」

客として宇髄さんのお嫁さんたちの聞き込みを始めて、約二日目。夜の時間も終わり、日中に設けられた定期連絡の時間。

私の目の前では伊之助が体全体を使って、自分のところに鬼がいたんだと訴えて来ている。

「あー……え～っと……。」

「こうか!?これならわかるか!?」

「うん、とりあえず一旦落ち着け?あと、非常に申し訳ないけど、ちょっとよくわからない。」

「はぁ!?わかれよ!!こうなんだよこう!!俺にはわかってんだよ!!」

「わかった、わかったから一旦落ち着け!!鬼がいたんだとしたら宇髄さんや善逸が来た時に説明しろ!!私だけに言ってんじゃない!!」

原作通りで安心したわ……と少しだけ考えながら、伊之助の訴えに対して怒鳴り返

す。

わかってるよ？伊之助が言いたいことは。でも、常識的に考えて、私たちだけで動くわけにはいかないわけで……。

どうしたもんかと頭を抱えたくなる。でも、不意に鼻腔に届いた匂いに気づき、私は伊之助から視線を逸らし、匂いの発生源へと向けた。

「善逸は来ない。」

「!?」

「……やっぱりこうなるか。」

匂いの方にはやっぱり宇髄さんがいて、彼は屋根の上にしゃがんだ体勢で言葉を紡ぐ。

気配もなく、いつのまにかやって来ていた宇髄さんに対して、伊之助が目を見開く中、私が知る流れとなっていることに対して、小さく溜息を吐く。

やっぱり善逸、堕姫ちゃんに捕まっちゃったか……。

「善逸からの連絡が途絶えたんですか？」

「ああ。昨夜から連絡が途絶えてる。」

私の質問に対して、宇髄さんが肯定の言葉を口にする。それにより、辺りに訪れたのは静寂。

「お前たちには悪いことをしたと思ってる。俺は嫁を助けたいが為に、いくつもの判断を間違えた。」

これは……物語通り、私も帰るように言われてしまうのだろうか？少しの不安が頭を過ぎる。だけど、それはすぐに霧散することになった。

明らかに、彼が口にした言葉は、私が知らないものだった。

「……優緋。お前にはちょいとばかり酷なことを頼むことになるが、聞いてくれるか？」

「……何でしょうか？」

「お前は、このまま花街に俺と残れ。ここにいる鬼が『上弦』だった場合、少しでも支援してもらう方が俺としては助かる。だが、無理強いはしない。難しいようだったら、伊之助を連れて花街を出ろ。だが、まだ粘れるというのなら、一緒に来てくれ。だが、伊之助。お前だけはどちらにせよ花街から出てもらうことになる。階級が低すぎるからな。もし、本当に『上弦』の鬼が潜んでいた場合、お前じゃ対処できない。」

「な!?」

「……わかりました。宇髄さんに付いて行きます。」

「……ありがとな。」

宇髄さん本人から告げられた言葉……それは、私は宇髄さんに同行し、伊之助は花街を出ろというものだった。

まぁ……これくらいのイレギュラーは確かに可能性としてあったから、特に驚くものじゃなかった。

なんせ私は、煉獄さんと行動を取り続けていたからね。彼の任務に同行し、炎の呼吸を使いこなすための実地訓練をさせられた分、階級がかなり上がってしまっていた。

多分、累を自分の刀で斬ったことも関係があるんだろう。

おかげで、今じゃ私は甲の一つ手前、乙にまで上がってしまっている。

だからだろうか？宇髄さんが、酷なことを頼むと、前置きの言葉を紡いだのは。

そんなことを考えながら、宇髄さんの申し出を引き受ければ、彼は少しだけ申し訳なさそうな笑みを浮かべながらも、感謝の言葉を述べて来た。

「だが優緋。もし、厳しいようだったらすぐに離脱しろ。消息を絶った場合、お前であっても死んだと見做す。」

「それくらい、覚悟の上ですよ。」

「おいテメェら!!俺を置き去りにして話を進めてんじゃねぇ!!」

伊之助が怒鳴りつける中、宇髄さんと行動を共にすると聞いた当本人は、私の方に近寄ったのち、さらりと頭を優しく撫でてきた。

彼から感じ取れた匂いは、心配と、無茶はしないでほしいという感情と、罪悪感に近い、仄暗い感情の匂いだった。

そんな感情を抱かなくてもいいと口にしたいけど、きっと告げたら彼は、もっと自分を責めるだろう。

だから、あえてそれは告げることなく、心に留めておくだけにした。

「行くぞ、優緋。」

私が大人しく撫でられるのを確認した宇髄さんは、真剣な表情をしながら、行動に移すと伝えてくる。

私は、その言葉に頷こうとした。でも、納得行かないとばかりの状態にある伊之助のことが気がかりだったため、少しだけ耐えたのち、伊之助に目を向けた。

「すみません。先に向かっていてもらえますか？伊之助が納得しないとばかりに睨んできているので、少しだけ、説得します。」

「……わかった。なるべく早く来てくれ。あとでな。」

私の言葉を聞いた宇髄さんは、すぐに頷いたのち、その場から立ち去って行った。

まぁ、多分、伊之助を説得するってのがウソだってことはバレてるだろうけど、見て見ぬ振りをしてくれるようだ。

いや、それとも、こっちにカマかけてる暇がないと考えているのかな？どちらにせよ、追求せずに立ち去ってくれたことはありがたい。

「おい優緋!!てめ！俺を説得するって何だよ!?お前も俺をのけもんにすんのか!?」

「違うよ、伊之助。私は、伊之助にやってもらいたいことがあるからここに残ったんだ。」
「やってもらいたいこと……？」
私の言葉を聞いた伊之助がキョトンとした表情を見せる。まさか、帰れって言う説得ではなく、やって欲しいこと伝える為に残ったとは思わなかったようだ。
「ああ。伊之助は、自分が潜入した店に鬼がいるのを感じたんだろう？」
「ああ。ぬめっとした気持ち悪イ感じがあった。間違いなく鬼だ!!」
「その鬼は、『荻本屋』のどこにいたか覚えてる？」
「まきをの部屋だ！」
「じゃあ次の質問。伊之助が鬼がいるそこに入った時、鬼はどうやって逃げた？」
「天井裏を伝ってどっかに行ったんだ！下の方に行ったのは覚えてる！」
「なるほどね。じゃあ、一つの可能性が見えてきた。」
「可能性……？」
伊之助が不思議そうな表情をしながら首を傾げるのを見て、私は、仮説……という名の鬼の食糧庫への行き道を口にする。
「宇髄さんが外を見張っているにも関わらず、善逸は姿を消したし、伊之助が見つけた鬼は姿を隠してる。つまり、その鬼は建物の中にある何かしらの通路を通り、身を隠せる場所へと移動しているわけだ。それに、宇髄さんが見つけてないということは、鬼は店

を出入りしていない。となると、鬼は店の中で働いている誰かということになるよな？」
「ああ。」
「そうなると、鬼は慎重にならないといけないと思わないか？だって、人を殺すわけだし。」
「そうか……！殺人の後始末には手間が掛かる。血痕は簡単に消せねぇしな。」
「御明察。流石は伊之助。」
「ふん！俺は親分なんだからこれくらい当然だ！」
綺麗な顔でドヤ顔を見せる伊之助の頭を一瞬撫でたくなる。でも、それは一旦堪えたのち、私は伊之助にしてもらいたい本題を告げる。
「ここは夜の街。だから、鬼にとって都合がいいことがたくさんある。けど、同時に都合の悪いこともある。だって、夜は仕事しないといけないからな。いないと怪しまれる。となると……だ。この街のどこかに、鬼が身を隠す為に利用している空間があるはずなんだ。そこで、空間を把握するのが得意な伊之助には、その空間を探し出して、調べて欲しいんだ。もしかしたら、そこに行方知れずになった人たちがいるかもしれないから。お願いできるかな？」
真っ直ぐと伊之助を見据えながら、彼に頼みたいことを伝えれば、伊之助は真っ直ぐ

と私を見つめ返したのち、口元に笑みを浮かべる。
「任せとけ！子分の頼みを聞いてやるのが親分だ！どうしてもって言うなら、この伊之助様が鬼の隠れ場を潰してきてやるよ！」
頼もしい限りの言葉を口にして、伊之助は自信満々に胸を張る。その様子に思わず笑みを浮かべる。
うん、これならみんなを助けることができる。
「残念ながら、私は宇髄さんと一緒に行動を取るって言ってるから、伊之助に付いて行くことはできないけど……」
「ハン!!俺を誰だと思ってんだ！山の王の嘴平伊之助様だ！お前がいなくてもやってやるっつーの!!」
「それは頼もしいな。流石だよ。じゃあ、お願いしていいね？」
「何度もうるせぇわ!!いいっつってんだろ!!」
「そうだったな。……絶対死なないでよ、親分。」
「ああ。お前も死ぬんじゃねぇぞ優緋!!」
伊之助と意見のすり合わせを終わらせた私は、適当に店の影に隠れて今着ていた着物を脱ぎ、鬼殺隊の隊服に着替える。
着物じゃ、上手い具合に動けないからね。人が来ない場所とは言え、外で着替えるな

んてはしたないけど、今はそんなことを言ってる場合じゃない。
サラシとか外したいところだけど、その時間も惜しいかな……。髪もこのままで、男装状態のままだけどこれで行こう。
「さて、本当は宇髄さんと合流したいところだけど、待ち伏せすることにしましょうか。」
ようやく動きやすい格好になれたと思いながら、私はその場にあった足場を利用して一気に屋根の上へと駆け上がる。
そこから向かうはただ一つ。鯉夏さんが過ごしている『ときと屋』だ。

１１１．日輪の炎は堕ちた妖艶なる姫君を待つ

屋根を飛び移りながらの移動を済ませ、『ときと屋』の屋根の上に座り込む。
鯉夏さんの居場所は既に把握済み。だって、彼女が客を迎えに行く時、花魁道中を近くで眺めることができる場所に陣取って、匂いをしっかりと覚えておいたからね。
彼女はとても優しい匂いがした。この花街で生活している誰よりも優しい、落ち着くような匂いだった。
いろんな人が行き交う場所だから、嗅ぎ分けるのに苦労したよ。まぁ、見つけることができたわけだし、そこはもうどうでもいいか。
「日が暮れ始めたな。となると、そろそろ堕姫ちゃんがやって来る頃かな？」
まぁ、だからと言って、すぐに鯉夏さんの部屋に入るつもりはないけどね。だって、鯉夏さんの前に堕姫ちゃんが現れる前に部屋に入ったら、堕姫ちゃんに気づかれちゃいそうだし、何より、炭治郎とは違って、私は鯉夏さんに会ってないから、何て声をかけたらいいのやら。
あなたを助けにやって来ましたとか言うの？うわ、想像しただけで寒気がした。
それはイケメンでイケボな王子様系男子の特権だっての。私が口にすべき言葉じゃ

ない。

そんなことを考えながら、私は『ときと屋』の屋根の上で静かに目を閉じて耳を塞ぐ。

視覚と聴覚をシャットダウンして、嗅覚だけに集中する為に。

すると、『京極屋』の方からこちらに近づいて来ている匂いが一つあった。甘いけど、どこか刺激の強い匂いが混ざってるこの匂いは、間違いなく堕姫ちゃんのものだ。

鯉夏さんの部屋に来るまで、あと3分……2分……1分……今！

鯉夏さんの部屋に現れた気配。同時に鯉夏さんに襲いかかる血鬼術。それが鯉夏さんに触れる前に、私は鯉夏さんの部屋に、窓から侵入し、同時に彼女に伸びていた帯を、日輪刀で斬り裂いた。

「な!?」

「え……!?」

斬り裂かれた帯がひらひらと舞い落ちる中、刀を手にしたまま私は、堕姫ちゃんと鯉夏さんの間に立ち、鬼の中ではかなり綺麗で、可愛らしい姿をしているお姫様へと目を向ける。

うん、鬼の匂いのせいであまりいい印象は抱けないけど、それを抜きにしたら、本当に羨ましいほどの美人だな。妓夫太郎さんが誇りに思う気持ちもよくわかる。

まぁ、対する妓夫太郎さんも、とても妹思いで優しくて、堕姫ちゃん……いや、梅ちゃ

んにとって誇らしいお兄さんなんだけどね。

もし、あんな悲劇に見舞われることなく、もっとマシな人と出会えていたのなら……きっと、別の幸せも掴めただろうに。

鬼滅の刃の中では、被害者側と言っても過言じゃない人生を歩んできた堕姫ちゃんと、堕姫ちゃんの側にいる優しいお兄さんである妓夫太郎さんに対して、少しだけ複雑な思いを胸に抱く。

別の出会い方があったなら、仲良くなれたかも知れないのに。

「鬼殺隊隊士、ただいま参上ってね。食事の邪魔をして悪いとは思うが、こっちも仕事でね。悪いが、諦めてもらおうか?」

そんなことを思いながら、私は鯉夏さんを襲撃した堕姫ちゃんの前に立ち塞がる。背後からは驚きと安堵の匂いがする。前方からは驚きと殺意、それと歓喜に近い匂いがする。

「鬼狩りの子……他にも来てたのね。そう。何人いるの?一人は黄色い頭の醜いガキでしょう。柱は来てる?もうすぐ来る?アンタは柱じゃないみたいだけど、随分強いみたいね。柱にはわずかに及ばないか、柱と同等といったところね。それに、綺麗じゃない。いいわねぇ。美しくて強い……私の糧にぴったりよ。私ね?汚い年寄りと不細工は食べない主義なの。だってまずいから。」

「貴女のような綺麗な姿をした鬼のお眼鏡にかなったようで何よりですってね。まぁ、食べられる気もないんだけど。……って言うか、見た目でも結構味の違いってあるんだ……。」

「ふぅん?それなりに礼儀を弁えてるじゃない。ますます好感が持てるわ。気分がいいから教えてあげる。不細工を喰わないのは私の主義よ。だって、不細工なんか喰ったら、私まで不細工になりそうだし。年寄りは確かにまずいわね。肉も骨も干からびているから醜悪で汚い。だから喰わないの。わかったかしら?」

「……まぁ、私は鬼じゃないから、共感が持てるかどうかと言われたら難しいところだけど、感覚的にはなんとなく。」

ちゃっかり堕姫ちゃんと話しちゃったよやったね……じゃないって。何か平然と話してるけど、彼女からの殺気はかなり感じ取れる。念のために天王寺には指で宇髄さんたちを探し出し次第連れてくるように指示を出しておいたけど……。

……さて……彼らが来るまで、どれくらい持久戦で耐えることができるかな……。

多分、今の私なら、彼女の頚を斬ることくらいはできると思うんだけど、彼女、それだけじゃ死なないからなぁ……。だって妓夫太郎さんいるし。

頚を早めに斬り落としたところで、妓夫太郎さんが出てきて、二対一という不利な状況に陥るだけ。

特に、妓夫太郎さんが使う血鬼術……あれは死に至る猛毒の鎌だったはずだし、自在に動かせる代物だ。

一対一なら何とかなるだろうけど、二対一となると、流石の私でも分が悪い。

〝透き通る世界〟を使えば何とかなるか？と一瞬考えるけど、すぐにＮＯと言う答えが頭を過ぎる。

なんせ、まだ私のあれは不完全だ。前よりかは維持できるけど、体力は相変わらずごっそり持っていかれてしまう。

持久戦となれば、なるべく温存しないといけない。宇髄さんが合流した時にフルで使う方が、被害も最小限に抑えることができるはずだしね。

――――――……となると、やっぱり堕姫ちゃんの頚はまだ狙わない方が良さそうだな。

炭治郎と禰豆子も一緒に戦闘に導入することも考えたけど、これは切り札にしといた方がいい。

いくら半分私のせいで血の匂いに耐性を持っていようとも、無惨の血を多く得ている彼女らと対峙させて暴走しないとは限らないしな。

それに、禰豆子の血鬼術は、もしもの時の保険として取っておきたい。

いくら私と宇髄さんが二人で妓夫太郎さんたちと対峙し、私がサポートに回るとして

も、自在に動く血鎌を全て防ぐことができるとは思えない。
もう少し私が力をつけることができたなら、全部防ぐことができたかもしれないけど、残念ながら、炎の呼吸を使っても、日の呼吸を使っても、今のレベルじゃ難しいんだよなぁ……。
だから、いざと言う時の回復として、禰豆子の力は取っておきたい。
次に炭治郎だけど……この子の場合は、まだ上弦相手に立ち回れる状態じゃない。いや、だいぶ立ち回れるようにはなってると思うけど、それでもまだ不安定だ。
もし、堕姫ちゃんの頚を斬って、妓夫太郎さんが姿を見せて、二対二に縺れ込むことができたとしても、拮抗ののち、こっちが不利になる可能性の方が高い。
善逸と伊之助の二人と一緒に、堕姫ちゃんと戦うなら、戦況はかなり変わると思うけど。
――――……結局出てくる答えは一緒か。
今私がやるべきことは、少しでも被害を最小限に抑えながら、宇髄さんたちの到着を持つことのみ。
……煉獄さんにも言われちゃったしね。一人で何もかもやろうとするなって。
だから……その指示に従うとしようか。

112．堕姫との戦闘。持久戦を乗り越えろ！

考えをある程度まとめた私は、こちらを見据えてくる堕姫ちゃんに対して警戒を怠ることなく、次の行動に移す。

「ちょっと失礼しますよっと。」

「え？きゃ!?」

「な!?」

それは、背後にいる鯉夏さんを、ひとまず安全な場所へと連れて行くと言うもの。

本当は、他の吉原の人々も避難させなくてはならないのだけど、狭い室内にいる中で、一番危ないのは鯉夏さんだ。

ある程度力をつけてるとは言え、上弦の陸であり、遠距離攻撃にも近距離攻撃にも長けている堕姫ちゃん相手に、誰かを守り抜きながら戦うのは難しい。

猗窩座の時は大丈夫だったじゃないかと思われるかもしれないけど、あれは煉獄さんという強力な主力アタッカーがいたからできたことであって、私一人でぶつかった場合は、確実に広範囲に被害が及んでいた。

周りからは柱に匹敵するって言われてるけど、正直なところ、筋力も体力も全部劣る

わけだから、厳しいと言うものである。
あーあ……自分が男だったらよかったのに……。これまで何度も考えてきたものが脳裏を過ぎる。
女から男になったら、しばらくは違和感とか絶対あると思うけど、この身軽な体にも大分慣れてきたし、きっと、男という体にも慣れていたんだろさ。
内心で愚痴りながら、鯉夏さんを片腕で抱き抱えて部屋から窓の外へと離脱する。
すぐに堕姫が追って来ようとしていたけど、地面に着地すると同時に、炎の呼吸を利用して、壱ノ型である不知火を使う要領と全く同じ要領で地面を蹴り上げる。
鯉夏さんに負担がかからないように、軽く加減したけど、堕姫を撒くことくらいはできたようだ。
「えーっと確か……ああ、鯉夏さんでしたね。番付に載ってました。」
「え、ええ……」
「驚かせてしまって申し訳ありません。貴女の命を守るためには、あれが最適なものでして。まぁ、それはそれとして……悠長にしてる場合ではないので、手短に伝えます。この花街から出来るだけ離れるか、安全な場所に身を隠してください。先程貴女を襲った彼女は鬼と呼ばれる存在で、人間を喰らうことで生き続けている者たちです。特に彼女は、美しい人を中心に狙う者らしいので、きっと、吉原内にいたら、また襲われてし

まうでしょう。」

「!!」

とりあえず離れた位置にたどり着いた私は、鯉夏さんにこの場からすぐに離れて、安全を確保するように指示を出す。

彼女を襲った存在が、どういった存在であるかを伝えながら。

鯉夏さんは、一瞬目を見開いて驚いていた。でも、私が真剣に伝えているから、全て真実であることが理解できたのか、小さく頷くだけで返事を返してきた。

そのことに少しだけ安心する。これで、彼女はなんとか無事に返してあげることができそうだ。

「貴女に懐いていた子供達や、貴女と共に過ごしていた客人たちは、必ず私たちが守り抜きます。だから、安心して安全の確保をしてください。」

そこまで伝えた私は、あらかじめ一日目に集めておいた隠の人に声をかける。

すると、どこからともなく隠は姿を現し、鯉夏さんを連れて移動を始めた。

「あ、あの!!」

「?」

それじゃあ私は戻るとしますか……踵を返して花街に目を向けたら、鯉夏さんから声をかけられる。

足を止めて振り向いてみれば、彼女はどことなく心配そうな表情をしていた。
「……大丈夫ですよ。死なないように、いくつか手は打ちますから。」
――――……だから、安心してこの場から離れてください。
なるべく不安にさせないように、穏やかな声音でそう伝えれば、鯉夏さんは目を丸くしたあと、穏やかな笑みを浮かべたのち、隠の人の護衛を受けながらここから離脱した。
それを確認した私は、すぐに地面を蹴り飛ばす。確実に堕姫ちゃんが近づいているから、鯉夏さんに追い付かないように止めないとね。
そう思いながら花街に戻れば、こちらにかなりのスピードで飛ばされてくる血鬼術の匂いに気づいた。
〝炎の呼吸　肆ノ型　盛炎のうねり〟
匂いの近づく速さからして、十分間に合いそうだったので、炎の呼吸の肆ノ型を使って迎撃する。
自身を中心にして渦巻く炎のように前方広範囲を薙ぎ払うこれは、前の方を守るための強力な障壁にもなるからね。
足を止めて放ったそれは、堕姫ちゃんから放たれた無数の帯を一瞬にして斬り裂いた。
ハラハラと帯がその場を舞う中、堕姫ちゃんは、花街の屋根の上から私の姿を見下ろ

している。

「ふぅん。逃げたわけじゃないんだ。鯉夏はどこ?逃したの?」

「そりゃ人の安全を守るのが鬼殺隊ですから。」

「そう。まぁいいわ。鯉夏のことが喰えなかったのは残念だけど、柱にも届きそうなほどの力を持っていて、なおかつ綺麗な顔立ちをしてるアンタだけでも私の糧にしてあげる。光栄でしょう?私の糧になれるって。だから大人しくしてくれないかしら?アンタほどの人間、殺そうと思えばいつだって殺せるのよ。痛い思いはしたくないでしょう?だから、苦しまないように、痛くないようにアンタのことは吸収してあげるから。」

「……断る……って言ったら?」

「痛めつけたあと、じっくり味わおうかしらね。」

「あっそ。まぁ、何にせよ、私は鬼に喰われるわけにはいかないから、全力で抵抗するよ。」

「ふぅん?だったら抵抗してみなさいよ。どうせ無意味だろうけど!!」

再び帯がこちらに飛ばされる。先程よりかは明らかに早い。となると、こっちの方が効率はいいかな。

〝炎の呼吸　弐ノ型　昇り炎天〟

炎の呼吸は、大威力と広範囲に長けた技が多く、その分硬直時間があったり、下手を

したら隙を与えてしまうことになる。でも、そんな炎の呼吸の中で、〝昇り炎天〟だけは、素早い斬りあげ攻撃となるため、咄嗟の迎撃に向いている。

まぁ、広範囲の攻撃だけはどうにもならないわけだけど、今堕姫ちゃんが使ってきたのはこれでも迎撃できる範囲のものだった。

にしても、やっぱり上弦一人を相手にするのは厳しいな……。早すぎるでしょ……攻撃も鋭いし。

「ちょっと攻めてみるか……」

〝炎の呼吸　壱ノ型　不知火〟

ずっと防衛に徹していては、いずれ隙を突かれて手痛い一撃を受けそうだと判断した私は、炎の壱を使い、一気に攻めこむ。

「!?」

一気に距離を詰められたからか、堕姫ちゃんが咄嗟にその場から回避行動を取った。

同時に帯も飛ばして来たな……流石。

でも、残念ながらこっちも、それなりに対処方法はあるんだよね。

一瞬だけ〝透き通る世界〟に入り帯の軌道を確認した私は、炎の呼吸から日の呼吸に自身の呼吸を切り替える。

炎と日の両方を使うにあたり、攻撃を入れ替えることができないかと練習した甲斐が

あった。いやぁ……二つの呼吸が使えるのって便利だよね。〝透き通る世界〟も使えば、咄嗟に呼吸を変えることもできるから。

〝日の呼吸　玖ノ型　輝輝恩光〟

刀を両腕で握り、体ごと渦巻くように回転しながら跳躍、または前方への突進を行う型。水の呼吸のねじれ渦や、花の呼吸の渦桃に類似する技。

多分、ねじれ渦はこれが元になったんだろうな……なんて思いながら、帯を斬り裂く。

「……アンタ……いったい何なわけ？刀の軌道が、明らかに変わってるんだけど？」

ひらひらと帯が舞い落ちる中、堕姫ちゃんから強い警戒心を感じ取れた。真っ直ぐと彼女を見据えれば、堕姫ちゃんはすぐに身構える。

「別に。ただ、ちょっとした知識と二種類の呼吸を使って戦えるだけの一般隊士だよ。階級は……まぁ、そこそこ高いけどね。」

そんな堕姫ちゃんに向かって、私は笑みを浮かべながら、自分は知識が周りより少しだけ多く、二つの呼吸を切り替えながら戦うことができるだけだと返して、日の呼吸よりスタミナが減りにくい、炎の呼吸に再び戻すのだった。

１１３．原作にはない行動を

堕姫ちゃんと対峙して、あれからどれくらいの時間が経ったのかわからない。
怪しまれないように頚を狙いつつも、放たれる血鬼術による帯の斬撃をいなし、刀の刃こぼれにも気をつけながら戦う中、不意に、遠くの方から何かが爆発する音が聞こえてきた。
「喧しいわね塵虫が。何の音よ。何してるの？どこ？荻本屋の方ね。それに雛鶴……。アンタたち、何人で来たの？四人？」
その音に気づいたらしい堕姫ちゃんが、不機嫌な声音で質問をしてくる。
大人しく教えてくれたら、痛みを感じないよう楽にしてやると言いたいのだろうか？
少しばかり息が詰まる殺気と、鋭い視線を向けながら、こちらの返答を待っている。
「言わないって言ったらどうするの？」
「正直に言った方が楽になれる、とだけ言っておくわ。弱い奴や不細工なら、命だけは助けてやったけど、強くて綺麗なアンタを、私は逃すつもりないから。でも、そうね。教えてくれたら痛い思いをするような喰い方はしないであげる。痛みを感じながら死にたくはないでしょう？」

「ふぅん？それは魅力的なお誘いではあるけど、遠慮しておこうかな。ほら、仲間を売っても売らなくても、私は殺される運命しか存在していないみたいだし。だったら、痛みを感じようとも、仲間を裏切ることはしない方法を選ぶよ。」

「そう。物分かりがいいと思っていたけど、結局は馬鹿の仲間ってことね。あっちでもこっちでもガタガタし始めたし、癪に障るからお前を殺す。ああ、でもそのあと全部喰ってあげるから、何の心配もする必要ないわよ。にしても、せっかく、痛がらないようにしてあげようとしたのに、その機会を逃すなんて、残念なことをするわね、アンタ。」

「残念かどうかは私が決める。」

それならと、私は堕姫ちゃんが望んでいない言葉を返す。こちらの言葉を聞いて、彼女の殺気が膨れ上がったのは気のせいではないだろう。

だけどそんなの関係ない。鬼殺隊と鬼が巡り合ったのなら、やることはただ一つ。

互いに殺すか殺されるかの生存競争をするのみだ。

……放たれる鋭い帯の斬撃。かなりのスピードがあるそれは、私を切り刻まんと襲い来る。

とはいえ、私の目にはその動きがハッキリ見えているからね。喰らうことはまずない。

それはそれとして、だ。

この戦闘……どれだけ持久戦を続けたらいいのだろうか。本来ならば、堕姫ちゃんの頚を真っ先に斬り飛ばすのが先決だ。しかし、彼女……というよりは、上弦の陸か。

この鬼は、そこら辺を彷徨いている鬼とは違い、二人で一つの鬼となっている。

その為、目の前にいる堕姫ちゃんの頚を斬ったところで、その命を奪うことができない。

むしろ、二人で一つの上弦の陸が、本来の形に戻ってしまい、上弦二体ＶＳ．まだ体力も力も理想に沿っていない未熟な鬼狩りの図となり、私が命を落としてしまう可能性が大いに出てきてしまう。

炭治郎が本来いるべき場所にいる以上、原作の物語を引っ掻き回すことはしても、命を落としてしまうという展開だけは、何としても避けなくてはならない。

日の呼吸と、透き通る世界を使えば、対処することができるかもしれないけど、長続きはしないだろう。

――――……どうやってここを切り抜ける？

帯の攻撃をいなし、ダメージを負わないようにして戦いながら考える。

もう少し力をつけておけば、ここまで悩むことはないのだが、今更後悔したところで、時が止まってくれるはずもなく、徐々に体力は削られていく。

――――……　それなら、これからは思い切って行動を起こしてごらん。君も知ら

ない物語が始まったのだから、もう悩む必要はない。自分のやりたいように動いても、きっとバチは当たらないはずだから。

――――……　もし、宇髄が探している鬼が上弦であったなら、その時は必ず宇髄の力を頼るんだ！君一人で背負うことだけはするな！

不意に、脳裏に過ぎったお館様と煉獄さんの言葉。刹那的ではあるけど、どこか長く感じる断片に、私は目を丸くする。

〝日の呼吸　拾壱ノ型　幻日虹〟

同時に、すぐそこまで近づいていた帯の斬撃を躱したのち、本気と手加減の狭間に当たる実力で堕姫ちゃんの頚へと斬撃を放つ。

「疲れてきたの？かなり遅くなってるわよ。欠伸が出るわ。」

それに気づいた堕姫ちゃんから放たれる攻撃。すぐにそれを刀で防いだ私は、空中で受け身を取り、地面へと着地する。

「……。」

お館様の、これからは思い切って、自分の判断に従ってみたらどうかという言葉と、煉獄さんから言われた一人では抱えず、同行している宇髄さんの力を頼れという言葉が脳裏を占める中、私は、少しだけ思案する。

一応、どうやって切り抜けるべきかの答えは出た。頼れる二人の大人の言葉が教えて

くれた。
　でも、本当にこれであっているのかわからない。もし、間違っていたら?この行動が、新たな被害を出す引き金となってしまったら?それにより、死ななくていい人が死んでしまったら?
　あらゆる不安要素がぐるぐる回り、次の行動に移れない。
　この間も堕姫ちゃんが攻撃の手を緩めてくれるはずもなく、すぐに距離を詰められて、一撃一撃が重い攻撃を仕掛けてくる。
　それをなんとか防ぎ切るが、このままではきっと押し負けるだろう。
「カァァア!!」
「!?」
　あと一歩が踏み出せず、防戦一方になる中で、辺りに響くはカラスの鳴き声。
　それにより一瞬、堕姫ちゃんの攻撃が緩み、抜け出す隙がその場にできる。
　急いで日輪刀を振りかざし、堕姫ちゃんの帯を斬り裂けば、彼女はこちらから距離を取るように後方へと飛び退いた。
「天王寺!?」
「優緋!!オ前ハ何ヲ考エテイル!!」
「いだ!?」

それを見計らい、頭上で鳴き声を発したカラス……私の鎹鴉である天王寺に声をかけると、思い切り頭を嘴で突かれた。

あまりの痛みに声を漏らすと、木箱の中から威嚇するような声が聞こえてくる。

「ココニイルノハオ前ダケジャナイ!!『力』ガアル人間ガ他ニモイル!!クダラナイコトナンザ考エテイナイデ、ソイツノ『力』ヲ頼レバイイダロ!!ドウスルベキカ、スデニワカッテルンダッタラサッサト行動ヲ取レ!!頼レル奴ノ『力』ヲ借リロ!!」

「……わかった……!!」

私の頭をつついた天王寺に怒ってる炭治郎たちの声。それを木箱を軽く叩くことで制した私は、天王寺の言葉に頷く。

……全くもって彼の言う通りだ。答えが出ているのであれば、自分の思う方向へと足を運こんで、私の物語を紡げばいい。

もし、それにより軌道がまずい方向へと傾いたのであれば、軌道を修正すればいい。

悩むことなんてなかった。思うようにしてしまっていいんだ。

これはもう炭治郎の物語じゃない。私と言うイレギュラーの物語。

それなら……もう、好きにしてしまえばいいじゃないか。

「天王寺!!虹丸の位置と、彼の位置はわかるか!?わかるならそこに案内してくれ!!どうせ他に鬼殺隊がいることはもうバレてるんだ!!だったら、総動員して鬼を叩く!!」

「カァァア!!任セロ!!

天王寺の激昂を聞き、先程までの不安を振り払う。もちろん、この選択が正しいかどうかなんてわからない。

だけど、鬼滅の刃という漫画の主人公として描かれていた炭治郎だって、どんな未来が訪れるのかなんてわからないままに走り続けた。

私は読者だったから、彼の物語の行く末を知っていた。彼が辿る出会いと別れを知っていた。

でも、本来ならばどんな未来が訪れるかなんて、人生を辿る中でわかるはずがない。

どうして根本的なところを忘れていたのだろうかと、思わず嘲笑してしまう。

本来ならこれが当たり前なんだ。どんな未来が待ち受けているのかなんてわからないまま、未来を辿るしかない。

時には目の前に現れた選択肢に悩み、どれか一つの道を選んで行くのが人間だ。

もちろん、その選択により、犠牲になるものだって出てくるし、後悔することだってたくさんある。

それでも先に進むというのが、人生を歩み生きるというものだ。

――――……この選択をして、被害が増大する可能性は確かにある。でも、いい方向へと転ぶ可能性だってある。

もし、失敗してしまいそうだったら……

――――……その時は、みんなと一緒に覆そう。

だって私には、頼れる人がいっぱいいるのだから!!

１１４．合流、音柱!

堕姫ちゃんの追撃に対応しながら、私は先程いた場所から離れていく。こちらを殺すと言ってきた分、彼女が私を追うことをやめないことは間違いないだろうから、なんとかなるとは思う。

ただ、しばらくの間持久戦に持ち込んでいた分、多少なりともこちらの体力は削られてしまっている。

なんとか、宇髄さんの元まで移動しなくては……そう思いながら、遊郭の道を走り抜ける。

「ああもう!!ちょこまかちょこまかと!!どこまで逃げても無駄だって言ってんでしょ!?さっさと諦めたらどうなの!?」

「残念ながら、私は諦めが悪くてね。悪足掻きはいくらでもできる質なんだ。こっちが諦めるのを諦めてくれ。」

「この!!ムカつくわねぇ!!」

「はは、ムカつくとは結構なことで。そのまま苛立ちで動きにキレがなくなってくれると助かるからどんどんイラついてくれ。その方が楽だから。」

軽口を叩きながら攻撃をいなしながらの移動を続ける。正直、結構疲れてきているんだが、苛立ちのまま注意散漫になってくれた方が、宇髄さんたちに近づいてることがバレなくて済むんだよな。

それなら、いくらでも軽口を叩きながら、多少煽りながら、さっさと合流させてもらうとしよう。

――――……宇髄さんとの距離は、かなり近づいている。遊郭特有の香や、夜遊びを楽しんでいる人々、他にも、血の匂いだったり、酒の匂いとかが混ざっていたせいで、少なからず鼻が利き難かったんだが、中心部から離れたからか、かなり薄れてきた。同時に宇髄さんと善逸、それと伊之助の匂いが近くなってきているし、わかりやすくなっている。

これなら、もう少ししたら合流できるかもしれない……天王寺の位置を確認しつつ考える。それにより足元が掬われるなんてことにはならないように、堕姫ちゃんの攻撃には注意して。

?･･･　･･*････　?･･･　･･*････　?･･･　･･*････　?

――――……なんなのこいつ?さっきから防戦一方じゃない。でも、何、この感じ。

アタシ相手に、本気を出していない？

たまに空にいる鴉を気にしながら、自身の帯による攻撃をいなしつつ、遊郭の中央の方から離れていく鬼狩りの姿を見て、堕姫は懸念の表情をする。

最初は、防戦ばかりになっていたため、疲労が溜まっているのかと思っていた。

だが、あれからどれくらい時間が経っても、目の前にいる赤みがかった髪と瞳を持つ見目のいい鬼狩りは、膝をつくこともなければ、息切れを起こすこともない。

どちらかと言うと……いや、どちらかと言えば……などという表現は、当てはまらない。

なぜならその鬼狩りは、明らかにまだまだ体力に余裕を持たせている。飛ぶのに疲れてよろめく羽虫と言う表現はできず、むしろ、余所見をしている時があるというのに、全く隙を感じさせないのだ。

――――――……一般隊士じゃないことは接触した時点で気づいていた。明らかに目の前の鬼狩りは、そんじょそこらの鬼狩りとは違うもの。それこそ、アタシが狙っている柱にも匹敵するほどの力を持っている。

〝だからこそ早く始末して、自身の糧としたいのに……!!〟長引く状況に、堕姫は苛立ちを見せる。

だが、目の前で余裕釈然としている鬼狩りは、何かを企むような笑みを浮かべたまま、

向き合って戦うことをせず、繰り出される鬼の攻撃をいなしては、そのままどこかへ走り続けている。

――――……何がしたいのよこの鬼狩りは!!

「いい加減大人しくしろッッッ!!」

自身の胸にふつふつと湧き上がる怒りに任せて、これまで放ってきたものとは比べ物にならない力で帯を振るう。

「おっと。」

鬼狩りはすぐにそれをいなすために刀を振るったが、わずかながらに堕姫の力の方が上回ったのか、鋭利な帯が、その体を傷つけた。先程まで全くなかった損傷。だが、今の鬼狩りには複数の裂傷があり、そこから赤が飛び散り、背負っている木箱の肩紐も、片方が綺麗に切断されている。

ようやく感じることができた手応え。堕姫は口元に笑みを浮かべる。

「あら、どうしたの?さっきまで怪我なんてなかったのに、複数の切り傷ができてるじゃない。痛いでしょう?わずかな切り傷でも、人間ってすぐに痛みを感じるって聞いたわよ。」

パタリパタリと地面に赤いシミが生まれる。出血量からして、かなり深めに切り傷ができたようだ。

「こっちはまだまだ余力があるわ。だから、すぐにでも切り刻んであげることだってできるのよ。でも、柱でもない鬼狩りがここまで粘れたご褒美として、最後にもう一度だけ選ばせてあげる。痛みを感じることなく死ぬか、細かく切断される痛みを感じながら死ぬか。どっちみち死ぬんだから、楽な方がいいでしょ？ねぇ？」

先程とは打って変わり、不敵な笑みを浮かべながら、鬼狩りに話しかける堕姫。彼女に話しかけられた鬼狩りは、自身の足元に生まれる赤いシミや、ピリピリとした裂傷の痛みを無言で見つめる。

ついさっきまで、無傷で戦えていたのに。余裕そうな姿で言葉を紡いでいたのに。今の鬼狩りは、ひたすらに無言だった。

「ほら、言いなさい。楽に死にたいですって。痛みを感じないようにしてくださいって。私が知ってる情報は全て話すので、苦しませないでくださいって。最期だもの。それくらいのお願いは聞いてあげてもいいわよ。」

それを恐怖や絶望からのものだと考えた堕姫は、哀れな人間を救い出す存在のように、優しく、しかし、高慢さを隠すことなく、鬼狩りへと話しかける。

これでようやく、邪魔なものはいなくなり、自身はさらなる力を身につけることができると笑いながら。

「……やれやれ。やっぱり、上弦相手に一人で挑んだら、無傷の勝利なんて取れない

か。まぁ、予想できたから、別に驚くほどじゃないけど、ね。できることなら、上弦の下の方の鬼を一人で滅殺することができるくらいの力が欲しかったんだけど……高望みし過ぎるなって戒めだったりすんのかね。」

だが、次の瞬間、堕姫は体を突き抜けるような寒気に襲われた。恐怖や絶望から顔を歪めるかと思っていたのに。命乞いをすると思っていたのに。目の前の鬼狩りは、表情を歪めるどころか、口元に笑みを浮かべながら、赤い瞳を堕姫に真っ直ぐと向けてきたのだ。

――――――……何で笑ってるの? 何で平然としてるの? 確かにアタシの攻撃は当たっていたのよ? 痛みだってあるはずでしょ!?

この状況下でありながらも、笑みを絶やすことなく浮かべる鬼狩りの姿に、堕姫は思わず固まってしまう。

なぜ平然と過ごすことができるのか……なぜ、この状況下で怯える様子を見せないのか……薄寒いものを感じ、すかさず堕姫は背後へと飛び退いた。

同時に彼女がいた場所には、一閃の軌跡がギラリと光る。

「……合流できたから斬ろうと思ったんだけど、ちょっと遅かったか。逃げられちゃった。」

それを見た鬼狩りがポツリと呟くように言葉を紡ぎ、残念と口にする。

同時に、鬼狩りのすぐ側には、音もなく誰かが着地した。

?･:･　:＊:･:･　?･:･　:＊:･:･　?･:･　:＊:･:･　?

「よう、優緋。よく粘ったな。」

離れてしまった堕姫ちゃんを見て、残念残念と思っていると聞き慣れた声が鼓膜を揺らす。静かに声がする方へと目を向ければ、結われている銀色の髪がサラサラと揺らす、大きな背中が視界に入った。

「まぁ、見ての通り、無傷とまでは行かなかったし、頚も斬れなかったんですけどね。」

「馬鹿か、お前は。そもそもがこれまでがおかしかったんだよ。何で鬼殺隊に入って一年も経ってないひよっこが無傷で下弦とか潰してんだ。本来なら今の状態が普通だっつーの。まぁ、だが、軽口聞けるくらいにゃ、まだ元気があるみたいだな。頚が斬れなかったのなら、また狙えばいい。っつーことで、援護しろよ。煉獄と一緒にいた時もそうしてたんだろ?」

「ええ、まぁ、そうですね。煉獄さんと一緒に上弦の参相手に立ち回っていた時も援護に回ってました。煉獄さんみたいな威力が出せるような剣士ではないので。」

「あれと同じような立ち回りや威力を女が出せるわけないだろ。男の俺だってキツいん

だからよ。」
「それもそうですね。比べたら駄目な対象でした。」
「まぁ、だからと言って、俺だって派手に負けちゃいねーがな。」
「張り合うんかい。」
その背中は紛れもなく宇髄さんのものだった。私を背にして立ち上がる姿に、奥さんが三人もいる人はやっぱり違うな、カッコいいなんてくだらないことを考えながらも、現れた彼と言葉を交わす。
「……そう。アンタの狙いはこれだったわけ?柱と合流するつもりだったのね。逆に案内してくれて助かったわ。これでまた、あの方に褒めて戴けるもの!!」
ガタガタと揺れたりカリカリと言った音が聞こえたり、唸るような声が聞こえたりする鬼弟妹を隠した木箱をその場に下ろしながら、宇髄さんと軽口を叩いていると、どことなく喜びやら苛立ちやらが含まれている声が聞こえてきた。
嗅覚で感じ取ることができたのは、喉の奥が痺れてしまいそうなほどの禍々しい匂い。なるほど。どうやら、向こうの形態変化が起こったようだ。
「まぁ、鬼狩りと鬼が接触したら当たり前のことではあるけど、あちらはこっちを殺す気のようで。」
「そりゃそうだろ。まぁ、俺らも、派手に滅殺するわけだが。立てるな、優緋?」

「もちろん。足手纏いにだけはならないようにしますよ。」
「はは。こんだけ相手に粘ったんだ。見た感じ、そこそこ深い切り傷になってるみたいだが、重症って程のもんでもないな。軽口も叩けるくらいにゃ、体力にも余裕があるみたいだし、その様子なら十分いける。だが、女が顔にそう易々と傷を作るもんじゃねーぞ?」
「あはは。気をつけます。」
「そうしろ。女にとって、顔は大事なものの一つなんだからよ。まぁ、そうだな、顔についたその傷が残ったりしたんなら、いつでも来ていいぜ。一人増えるくらい、問題はないしな。」
「それ、傷跡が残っちゃったらお嫁さんにしてくれるってことですか?」
「ああ。ここに連れてきた俺の責任だからな。それくらいの責任取りくらいするってもんよ。」
「なるほど。まぁ、頭の片隅くらいには入れておきますね。傷跡が残らないように、ちゃんと治療もしますけど。」
「なんか地味に俺がフラれた感じに聞こえるんだが気のせいか?」
　ちょっとだけ不満そうな宇髄さんの声と、その感情を示すわずかな匂いに小さく笑う。

だって、少しだけ面白かったからね。

「……炭治郎。禰豆子。確かに姉ちゃん、ちょっと怪我しちゃってるけど、大丈夫。大怪我ってわけじゃないからさ。だから、今はまだ動くな。きっと、動かなきゃならない時が、来るだろうからな。お叱りなら、あとでちゃんと受けるよ。」

しかし、すぐに頭を切り替えて、私は宇髄さんの隣に並び、堕姫ちゃんのことを見据える。

「あの鬼は……どうやら、そこまで強くはない……か。外れだな。」

「でも、なんか匂い的に禍々しい何かがありますけど。」

「なら、攻撃してみればわかんだろ。行くぞ。さっさと済ませる。」

「……わかりました。まぁ、何かあっても、宇髄さんがいるなら頼もしいですよね。」

「あったりめーよ。俺を誰だと思ってんだ。」

「お祭り大好きな祭の神様。そして、頼もしい力を持ち合わせている音柱様でしたね。」

「よくわかってんじゃねーか。」

頼もしい笑みを浮かべる宇髄さんの隣に並び、堕姫ちゃんから目を話すことなく日輪刀を構える。

さて、宇髄さんと合流したわけだし、サクッと次のラウンドへと行きますかね。

１１５．上弦の陸の正体を暴け

「宇髄さん。相手は帯による攻撃を得意としており、遠距離戦や中距離戦が主力のようです。帯は、まぁ見ての通りかなり切れ味が鋭いので当たったらアレですけど、動き自体はそこまで速くないかと。なんか、姿が変わってますが、宇髄さんならば簡単に終わらせることができると思います。」
「なるほどな。そんじゃま、さっさと終わらせて、優緋が抱いてる疑問……禍々しい何かがあるってやつの答えを暴くとするか。行くぜ。」
「わかりました。とりあえず、まず相手を引きつけます?」
「だな。行けるか?」
「ええ。問題なく。」
「派手に頼もしいじゃねぇか。じゃあ、始めるぜ!!」
　堕姫の攻撃方法を伝えれば、宇髄さんは笑みを浮かべたまま地面を蹴り上げる。彼の巨体をブラインド代わりに使いながら、同時に走り出してみれば、堕姫ちゃんはすぐに帯による攻撃を展開した。
　放たれた帯は、どう見ても二十は超えている。炭治郎が劇中で見た数の最大は十三本

だったと思うんだが、やっぱり、柱と合流されたからだろうか。

とはいえ、堕姫ちゃんは合流した宇髄さんを捌き切れるとは思えない。私だけならともかく、戦闘経験が豊富な彼に、その攻撃を届かせることは難しいだろう。

「優緋!!」

「はい!」

そんなことを考えていると、宇髄さんが私の名前を呼んだ。何かやるつもりなのだろう……そう判断した私は、名前を呼んできた宇髄さんに返事を返す。

すると彼は堕姫ちゃんが放った帯を一瞬にして全て斬る。その際見えたのは、鎖に繋がれた二本の日輪刀を巧みに操り、複雑な斬撃を放った彼の姿と、日輪刀による斬撃と同時に放たれた複数の火薬弾。

宇髄さんは、複数の火薬弾に堕姫ちゃんの攻撃と自身の斬撃による衝撃を当てることで、それを爆発させる。

私の方にまで爆風を届かせない様子は流石だ。爆発により発生した爆煙を目隠し代わりに使い、高く飛び上がった宇髄さんの姿を視界に映しながらも、私はその場に発生した爆煙へと勢いよく突っ込む。

「この!!火薬の匂いと爆煙で視覚と嗅覚が……!!」

火薬の匂いが広がる中、ハッキリと感じ取ることができる堕姫ちゃんの匂い。その匂

いが強く感じる方角から、戸惑いの声が聞こえてくる。
まぁ、十中八九宇髄さん特製のこれのせいなんだろうけど……なんて、ちょっとだけ視界の端で考えながらも、爆煙に滑り込ませた体を、彼女の前に出現させる。
「!?」
〝炎の呼吸　弐ノ型　昇り炎天!!〟
私が放ったのは、大威力であり、広範囲の型で構成されている炎の呼吸の中でも、単調な型である昇り炎天。下から弧を描くようにして刀を振るい、盛炎の如き一撃を放つ技。
単調な分、多少威力は落ちるけど、咄嗟の迎撃に特化してるこれは、いざという時に使用するとそれなりの効力を発揮する。
特に、今回のような見え難い位置から放たれたら、相手側の咄嗟の判断を攻撃ではなく、後退へと誘導することができる。
まぁ、多分堕姫ちゃんだけに通用する手だろう。妓夫太郎や、他の上弦だと、すぐに攻撃に転じられてしまう。
あとは、まぁ、今だからこそ使える技だ。現在の彼女は、私だけではなく、宇髄さんにも気を配らなくてはならない。特に、宇髄さんはついさっき彼女が接触した鬼殺隊であり、柱の立場に腰を置く存在だ。

複数の呼吸をいくつか使い、手の内を明かしている私以上に、警戒しなくてはならない相手になる。

まぁ、だからこそ、宇髄さんはこの攻撃方法に転じたんだろうけど。彼のことだから、堕姫ちゃんの未熟さに多少なりとも気づいていそうだし。

実際、彼の判断は正しいと言える。まだ、それなりに隙を持ち合わせている鬼殺隊の隊員複数を相手にするだけであれば、堕姫ちゃんの力でもこと足りる。柱一人との戦闘も、上弦の陸の本来の姿になれば、問題なく攻略ができるから。

なんせ、突然一人が二人となり、厄介な連携と血の効果が追加されるようになるんだから。そりゃ、初見で勝ってみろと言われる方が難しいというものだ。

でも、今の堕姫ちゃんが相手にしているのは現役の柱と、柱にも匹敵する（堕姫ちゃん曰くだからよくわからないが）隊員という二人組。

いくら一人でも強力な力を持つ上弦の鬼である彼女であっても、限界がすぐにやってくる。

〝日の呼吸　円舞〟
〝碧羅の天〟
〝烈日紅鏡〟
〝灼骨炎陽〟

〝陽華突〟

彼女の捌き切れる限界を誘発させるために、私はヒノカミ神楽こと日の呼吸を繋げていく。

本来ならば、炭治郎が最後にたどり着く答えだけど、私は最初から知っていた。

知識を持ち合わせている状態だからこそ発生した副作用だけど、利用するに越したことはない。

ついでに、無惨に精神的ダメージ行かねーかなぁー。髪型普段のポニテに戻したし、痣も出してるからゴリゴリメンタル削れてくれないかなー……なんてことを考えているのは仕方ない。

ただ生きたいだけだったことは知ってるし、彼の境遇を考えれば、まぁ、致し方ないと感じなくもないけど、それにしてはちょっと被害を出しすぎでは？

自分は災害、天災のようなもの？だから恨むのはおかしい？自然災害に見舞われた人間が自然に恨みを向けたりはしない。つまり、自然災害と同等であるこちらを恨むのはおかしい？

何言ってんだかね。アンタは自然災害なんかじゃあない。自己中心的な考えしか抱くことができない殺人鬼だろ。

炭治郎がブチギレたのもよくわかる。本当、傲慢で傍若無人な鬼だよね。

正直、あの時の無惨はマジで腹たったからね。精神的ダメージ食らって発狂しとけ。

まぁ、このせいで引きこもり鬼爆誕な可能性も少なからずあるが、太陽を克服する鬼が現れたら、流石に嬉々として出てきそうだよな。

生存本能とクズっぷりだけは一流どころか世界一レベルだし。

「ほい、昇り炎天でも食らっとく？」

「!?」

無惨に対する苛立ちを内心で思い出しながら、呼吸を日の呼吸から炎の呼吸へと切り替えて、弐ノ型を使用する。

下から急に振り上げられた刀にびっくりしたらしい堕姫ちゃんは、咄嗟にその場から後退し、私から距離を取る。

〝炎の呼吸　壱ノ型　不知火!!〟

そのタイミングに合わせて距離を詰めて切り付ける壱ノ型を使用し、すかさず彼女との距離を詰めた。

「な!?」

それにより堕姫ちゃんは頚を斬られると思ったのか、咄嗟に自身の帯を使って、防御行動を見せた。

でもそれ、意味ないんだよね。だって、私の一撃は本命じゃ無いから。

「なんちゃって。」

「!?」

私が使った不知火は、いわゆる一つのフェイク。日の呼吸と、本気斬りの昇り炎天に乗じて、わざと口にした型の名前。

だけど実際は呼吸法を利用して、移動速度だけを使い、今にも斬りつけられそうに見せただけのものだった。

ある程度近寄り、ブレーキをかけた私は、すかさず堕姫ちゃんから離れるようにして、バク転をする。

前方の防御に意識を向けていた堕姫ちゃんの頚が、地面の方へと落下するのは、それとほぼ同時だった。

116．上弦の陸、真なる姿

彼女から離れた位置にいる私の元へと静かに宇髄さんがやって来る。
鎖付きの双刀の柄……明らかに私が持ってる日輪刀と比べてかなりのデカさがあり、重さもありそうなそれを、片手だけで持ちながら。
頚を斬られた堕姫ちゃんはと言うと、防御をしたはずなのに頚を斬られてしまったせいか、どこか唖然としているようだった。
「優緋。二種類の呼吸を合わせることで囮にするとは、派手にやるじゃねーか。」
「ありがとうございます。まぁ、切り替えまくるんで、疲労が蓄積されやすいし、まだ精進しなくてはならなさそうですけどね。」
「それ以上強くなんのかよ。柱越える気か?」
「並ぶ程度にはしたいですかね。」
「もう並んでそうだけどな。」
唖然としている様子の堕姫ちゃんを横目に見ながらも、やってきた宇髄さんと言葉を交わす。
なんとか囮作戦がカタチになってくれてよかったと、少しだけ安堵の息を吐きなが

ら。

「っ!!よくもアタシの頚を斬ったわね!?絶対にタダじゃおかないわよ!?」

もう少し切り替え早くできないかな……と少しだけ考えていると、堕姫ちゃんが怒鳴り声をあげる。

すぐに視線をそちらに向けてみれば、両手で自身の頭を持っている頚無しの体と、両手に抱えられている逆さまの堕姫ちゃんの頭があった。

「頚斬られたのにまだギャアギャア言ってんのか。弱い方の鬼にもう用はねぇよ。」

「アタシ弱くないもん!!上弦ノ陸だもん!!あの方にちゃんと数字もらったもん!!アタシは凄いんだから!!」

「弱いだろうが。強いってんなら、囮攻撃くらい見抜けっての。」

なんなんだこのやりとり……と苦笑いを溢す。宇髄さんに、先に普通の鬼じゃないと告げておいたから、これだけじゃ終わらないって警戒心を持つだろうと思っていたけど、かなり会話が変わっている。

まぁ、原作以上にカオスなやりとりになっているとだけは言えるな。

さて、いつ頃妓夫太郎さんが出てくるか……苦笑いを警戒へと移行して、自身の嗅覚に集中する。

その瞬間、先程以上の刺激臭が嗅覚を突き抜けた。

「わぁあああああ!!ほんとにアタシは上弦の陸よ!!数字だってちゃんとあるでしょう!?弱くないことくらいわかるでしょ!?なんで弱いって言ってくるのよバカァアアアア!!」

同時に辺りに響くのは大声でなく堕姫ちゃんの声。原作の時とは違い、まだ禰豆子たちが参戦していなかった分、火だるまになることがなかった綺麗な顔にはまる両目からは大粒の涙が零れ落ち、地面にシミを作っている。

「頚斬られたぁ!!頚斬られちゃったああ!!お兄ちゃああん!!」

「!!宇髄さん!!」

「ああ!!」

嗅覚に突き刺さるかのような、強力な鬼特有の匂いに気づき、宇髄さんに声をかける。すぐに彼は私の声に反応を示し、未だに泣き叫ぶ堕姫ちゃんと距離を詰め、日輪刀を振被る。

しかし、向こうの方が一足先に行動を取っていたようで、彼の攻撃は空を切り、堕姫ちゃんと、彼女の側に現れた存在にその刃が届くことはなかった。

「泣いてたってしょうがねぇからなああ。頚くらい自分でくっつけろよなぁ。おめぇは本当に頭がたりねぇなあ。」

離れた距離に移動した彼女の傍らには、別の鬼が姿を現していた。

上弦の陸……その片割れであるもう一人……堕姫の兄である妓夫太郎は、未だに嗚咽を漏らす彼女の頚を治しながら、呆れた声音で言葉を紡ぐ。

「優緋!!」

そんな中、宇髄さんが私の名前を呼んだ。すかさずその声を合図にして走り出した私は、原作通りであるならば、放たれるであろう毒の血鎌の斬撃を打ち消すために、透き通る世界へと一瞬だけ入り込む。

それにより妓夫太郎さんの動きを見た私は、宇髄さんの動きに合わせて、自身の刀を思い切り振るった。

握っていた刀から、確かな手応えを教える衝撃が伝わる。私の体にも、宇髄さんの体にも、血鎌による裂傷は発生しなかった。

「へぇ……やるなぁあ。攻撃を止めたなぁあ。殺す気で斬ったけどなあ。どっちも無傷かよ。」

透き通る世界を未完成ながらにも使えるようになっていてよかったと思いながら、妓夫太郎さんを見据える。

彼は、先程の攻撃を無傷で防ぎ切った私と宇髄さんを交互に見た後、視線を宇髄さんの方に固定する。

「お前、いいなぁあ。その顔、いいなぁあ。肌もいいなぁ。シミも痣も傷もねぇんだな

あ。肉付きもいいなぁあ。俺は太れねぇんだよなぁ。上背もあるなぁあ。縦寸が六尺は優に超えてるなぁあ。女にも嘸かし持て囃されるんだろうなぁあ。」

女にも持て囃されると言う言葉を紡いだ後、私の方に視線を向ける妓夫太郎さん。あれ?これってもしかしなくても、本当の性別バレてたりする?

いや、まぁ、流石にバレるか。堕姫ちゃんもなんか気づいてるっぽかったし。

「妬ましいなぁあ。妬ましいなぁあ。死んでくれねぇかなぁあ。そりやあもう苦しい死に方でなぁあ、生きたまま生皮剥がれたり、腹を掻っ捌かれたり、それからなぁ……」

言ってることえぐいなと軽く引く。それって拷問では?腹を掻っ捌かれたら丈夫な人でもすぐに死にそうだけど。

「お兄ちゃん!!コイツらのこと早く殺してよ!!アタシの邪魔をしてる鬱陶しいネズミも絶対に!!アタシ一生懸命やってるのに!!凄く頑張ってたのよ一人で……!!それなのにねぇ!!皆で邪魔してアタシをいじめたの!!よってたかっていじめたのよォ!!」

そんな中堕姫ちゃんが泣きながら妓夫太郎さんに私たちを殺してと怒鳴りつける。

すると、妓夫太郎さんの殺気が膨れ上がり、私たちはそれを向けられる。

「そうだなぁ。そうだなぁ。そりゃあ許せねぇなぁ。俺の可愛い妹が、足りねぇ頭で一生懸命やってるのをいじめるような奴らは皆殺しだ。」

「……優緋。わかってると思うが、全般的に俺の支援に回れ。上弦の参とやり合った時、

煉獄にしていたようにな。わかったか？」
「わかりました。」
「うっし。構えろ。」
　宇髄さんの言葉に従うように、日輪刀を握り直す。鬼滅の世界に来て、二回目の上弦の鬼戦……宇髄さんの腕がダメにならないように、そして、一人でも多くの人を守るために、最善の動きをしてみせる。
「取り立てるぜ、俺はなぁ。やられた分は必ず取り立てる。死ぬ時グルグル巡らせろ。俺の名は妓夫太郎だからなああ。」

117．日焔（にちえん）の爆音

素早い動きで放たれた二本の鎌。私と宇髄さんはその両方の軌道を手にしていた日輪刀で弾き飛ばす。

「宇髄さん!!」

「ああ!!」

でも、それはすぐにこちら側へと飛んでくる。ブーメランみたく、私たちを襲うように。

原作では屋内戦闘になっていたため、人間を容赦なく巻き込む形になっていたけど、なんとかそれを屋外戦闘に持ち込むことができたため、関係ない人を巻き込むことはない。

だからと言って鎌を放っておけば、取り返しのつかないことになる。

「優緋!!」

「はい!!」

宇髄さんの呼び声に返事を返し、刀の刃を鎌にぶち当てる。守る必要があるのは自身のみ。ある程度であれば普通に対処できる隊士／柱のと言う現状は、戦闘状況に軽く余

裕を持たしてくれるため、加減することなく力を発揮することができる。
バキィンッと言った音を立て、戻ってきた鎌が折れたのを確認した私は、宇髄さんの動きに合わせて、目の前にいる妓夫太郎さんと堕姫ちゃんの頚を狙う。
だが、向こうも簡単に食らってくれるはずもなく、驚異的な反射神経により、こちらの攻撃を躱していく。
「合わせろ!!」
「了解!!」
すると、宇髄さんから合わせろと言う一言がかかった。すぐに彼に合わせるように行動を取れば、堕姫ちゃんと妓夫太郎さんの二人を防戦へと押し込むカタチになっていく。
〝血鬼術　飛び血鎌!!〟
しかし、やはり上弦の陸。簡単に防戦を強いられてはくれず、反撃のカタチで血鬼術を放ってくる。
薄い刃のような血の斬撃は、複数に折り重なっており、原作で宇髄さんが言っていた通り、人を庇いながら全てを捌くことは難易度が高すぎるものだった。
でも、今の私たちは原作とは違う状況だ。人気の少ない場所まで誘導したおかげで、庇う必要性のある一般人は見当たらない。

この場にある匂いは、私と宇髄さんと上弦の陸。少し離れた位置に、炭治郎と禰豆子二人の匂い。そして、確実に近づいてきている善逸と伊之助の匂いのみ。

遊郭のメイン広場の方にいる人たちは、次々と街を離れている。宇髄さんが使う火薬の爆発……それを説得する糧に使い、彼の奥さんたちが避難行動を取らせているのだろう。

〝炎の呼吸　肆ノ型　盛炎のうねり〟

嗅覚を利用し、屋内ではまず使いづらいと思われる広範囲の薙ぎ払い技である炎の呼吸の肆ノ型を使い、大半の斬撃を消し飛ばす。

残りの斬撃は、私の技の出だしを見極めていたらしい宇髄さんの手により全て消滅させられたため、血鎌の攻撃も、猛毒ももらうことはなかった。

「やるじゃねぇか優緋。」

「まぁ、支援は得意ですからね。だから、背中は任せてください。宇髄さんが上弦の陸と戦うことに集中できるように、邪魔な障害は焼き払います。」

「焼き払うなんて派手なこと言ってくれるな。じゃあ、背中は預けるぜ、優緋！」

宇髄さんの言葉に返事を返し、彼が向き合う上弦の陸兄妹に視線を向ける。

二人は忌々しいと言わんばかりの表情を見せて、私たちを見据えていた。

「ちぃっ……!!二人もいるのは面倒くせぇなァ!!」

「本当に鬱陶しいわねコイツら!!死んでよ!!ねぇ!!アタシたちの邪魔すんな!!」
「そう言われても無理なものは無理。これ以上被害を拡大化されたくないからね。」
「そう言うこった。ようやく巡ってきた機会を、俺たちが逃すわけねぇよ。」
おそらく、これまで二人は一対二の状況下で戦うことが多かったはずだ。最初は堕姫ちゃん一人だけで行動を取り、やってきた鬼殺隊と交戦し、頃合いを見て妓夫太郎さんが合流する。
二人で一人の上弦の陸と言うカラクリは、初見で見抜くことが難しい。
さらに言うと、妓夫太郎さんの猛毒の血鎌は回避するのがかなり困難で、わずかに擦りでもしたらアウトと言った高性能っぷり……柱が一人で挑んでも、不利になるのは目に見えている。
二人の頚を同時に斬らなくてはならないと言うのも、かなり厄介な性質と言えるしね。
「優緋。コイツを持っとけ。」
「ん?」
そんなことを思っていると、宇髄さんが私の腰にあるベルトに何かを引っ掛けた。
よく見るとそれは小さな巾着袋で、中身を見えやすくするため、わずかに開かれた袋の口から、丸い何かが見えていた。

いや、これ、何かじゃないな。どう見ても爆薬丸だ。宇髄さんが使ってるあれだ。

「優緋なら十分活用できるはずだ。使い方は今から見せる。ちゃんと盗めよ、こっちのやり方を。」

「……了解。」

私、あなたの継子になった覚えはないんですけどと一瞬思ったが、利用できるものは利用しようと、宇髄さんの指示に素直に従う。

それを確認した宇髄さんは、すかさず妓夫太郎さんたちに向かって攻撃するために地面を蹴り上げた。

やり方を盗むため、なるべく近くで見ようと思い彼に合わせて地面を蹴り、鎖で繋がってる日輪刀を巧みに操り、猛攻を仕掛ける音柱の戦い方をしかと目に焼き付ける。

少しでも彼が戦いやすいように、露払いを行いながら。

宇髄さんは斬撃を繰り出しながら、時に爆薬丸を織り交ぜている。斬撃を放つ合間に、手にしていた爆薬丸を宙に投げ、相手への攻撃の合間に摩擦を利用し、爆発させて、攻撃と目眩しを両立している。

時には自身の斬撃ではなく、相手の攻撃に合わせることで、爆発を誘発してダメージを稼ぎ、息つく暇を与えないように、自身が放つ攻撃の軌道上へ誘導したりと、様々な扱い方をしているようだ。

宇髄さんの戦い方を見て、ある程度やり方を認識する。彼のようなリーチある武器じゃないから、目測を誤って自分がダメージを受けるリスクは高いけど、まぁ、なんとかなりそうかな。

そんなことを考えながら、宇髄さんの攻撃に合わせるように、自身も斬撃を放ちながら、たまに爆薬丸を織り交ぜる。

刀の先の方であれば、なんとか自身がダメージを受けることはなさそうだ。

使う頻度は少なめに。時に意表を突くようにして放つと効率もよさそうかな。

「その調子だ優緋!!上手く使いこなしてくれるじゃねぇか!!」

「そちらの技術を盗んでるだけですよ!!」

「そりゃそうだが、そうすぐ盗まれると、地味に複雑だわ!!」

「褒め言葉として受け取っておきます!!」

宇髄さんと軽口を叩きながら、上弦の陸兄妹との戦闘を続行する。基本的には宇髄さんの攻撃に合わせて、時折自身が前に出て、一瞬の休息時間を互いに作る。

そんな中、妓夫太郎さんの攻撃に合わせて、堕姫ちゃんが帯の刃を展開した様子が見えた。

すかさず宇髄さんと同時に攻撃を放てば、頭上から鈍い音が聞こえてきた。

よく見ると宇髄さんが堕姫ちゃんの腹部に容赦なく蹴りを叩き込んでおり、妓夫太郎

さんの鎌を双刀で受け止めている姿を見ることができた。
一瞬だけ脳裏に浮かんだ原作の景色……それと全く同じ構図がその場にある。
「俺の妹を蹴んじゃねえよなあ。」
「この糞野郎!!」
妓夫太郎さんが武器を振るい、堕姫ちゃんが罵倒を宇髄さんに浴びせる。しかし、宇髄さんはそんな二人の様子に動じることなく、爆薬丸を複数放つ構えを見せた。
一瞬だけ私の方へと視線を向けて。
その視線に含まれた意味をすぐに理解できた私は、宇髄さんが爆薬丸を投げるタイミングに合わせて、腰巾着に入っていた爆薬丸を投げる。
宇髄さんが投げた爆薬丸……それをブラインド代わりに使い、多めの爆薬丸を投げられていることを悟られないように。
その瞬間、辺りに複数の爆発音が響き渡る。わずかに堕姫ちゃんの悲鳴が聞こえたため、彼女の頚は原作通りに斬れたのだろう。
それならばと私は、妓夫太郎さんの頚目掛けて刃を振るう。辺りに広がる爆発による煙を煙幕として利用し、距離を詰めて斬撃を放つ。
しかし、その攻撃はあと一歩のところで届かず、妓夫太郎さんの頚を掠めるだけに終わった。

「……すみません、あと一歩のところで躱されて、彼の頚を斬ることができませんでした。せっかく宇髄さんが彼女の方を斬ってくれたのに、不甲斐ないです。」

「問題ねぇよ。優緋のおかげで俺にも余力ができてる。今のところ攻撃も食らってねぇし、次を狙うぞ次。反省会はそのあとだ。」

宇髄さんと背中合わせになって立ちながら、頚が斬れなかったことを謝罪すれば、余力があるから次を狙えると告げられる。

反省会はあとと言う言葉に、宇髄さんが完勝する気満々であることを理解した私は、少しだけ苦笑いをこぼす。

でも、すぐに頭を切り替えては、完勝を実現させるため、宇髄さんとの連携を上げてやろうと刀を構えた。

「ううう!!また頚斬られたぁ!!糞野郎!!糞野郎!!絶対許さない!!悔しい!!悔しい!!なんでアタシばっかり斬られるの!!」

そんな中、堕姫ちゃんが宇髄さんに対する恨みつらみを吐き出しながら、慟哭するように叫び散らす。

対する妓夫太郎さんは、私と宇髄さんの会話と、堕姫ちゃんの様子を無言で見据えたのち、訝しげな表情を見せていた。